
名探偵コナン 『黒の組織壊滅! + 新志の恋愛物語』

駆け出しの小説家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン『黒の組織壊滅！+新志の恋愛物語』

【Nコード】

N9433L

【作者名】

駆け出しの小説家

【あらすじ】

とある廃ビルで起こった殺人事件。

最初は小さな事件だったが、やがて大きな事件へ……。

そして、次第に“あの組織”との繋がりが……。

皆さん初めまして。初めてなので上手く書けてはいませんが、読んでくれると嬉しいです。無事に完結いたしました。これから、この小説に対する感想をお待ちしますので、ドンドンお送り下さい。応援有り難うございました(^o^)。

序章（前書き）

最初は殺人事件からです。

序章

タツタツタツ。夜中、一人の男が廃ビルの中を走り続けている。ハアハアハア。男は息を切らせながら、ひたすら走る。ある存在から逃げるために。そして、自分の命を守るために。時には階段を駆け上がり、時には四方八方を警戒しながら廊下を走り続け、そして時には、部屋に隠れる。そんな行動を取り続けていた。

しかし、どれだけ走り続けようとも、自分を追ってくる人物の気配は消えることが無い。むしろ逃げれば逃げるほど、その気配は近くなってくる。そんな気配、いやむしろ殺気と言ったほうが正解かもしれない気配に、とうとう男は先ほどから湧き上がってくる恐怖心を抑えられずに、目の前にある扉を勢いよくあけ、すぐに扉を閉めて息を殺すことにした。

「くそっ！！何で俺を・・・」
湧き上がってくる恐怖心のが苛立ちという形で、男はそう口にする。

しかし、気配の主は、男のそんな気持ちなど知ってか知らずか、男が身を潜めている扉の近くまで来た。

「扉か・・・フッ。」

気配の主はまるで、“殺しを楽しむ”かのような目をしてその扉を見つめる。そして、

「お前はあつちを探せ」

「了解」

と、その男と行動を共にする者に、小声で指示する。そして指示された人物は言われたように、示されたほうに向かって走り出す。

(足音？ここから離れていくのか？)

身を潜める男は、頭の中でそう思った。

(チャンスは今しかない・・・)

男はそう思うと、目の前の扉を開けた。しかし、これが間違いで

あつたことに時間はかからなかった。

目の前には、離れていったと思っていた人物が、異様な殺気を剥き出しにして男を睨みつけていた！

「なに！！」

男は驚愕と同時に戦慄を覚え声をあげる。

「残念だったな。お前がここに隠れていることぐらい想像するに足らん。さっきのは足音は囷だよ。」

そう言うと、その殺人者と表現してもおかしくない目をした男は、目の前の標的に“ある物”を向ける。

「終わりだ・・・」

「！！」

パツシュ！ その音と同時に男は倒れ、後方から足音が響く。

「フツ・・・殺りましたね」

「安心するのはまだ早いぞ・・・。まだ終わりではない」

男を殺めた者は、男を殺した凶器を懐にしまい、もう一人の人物に「ズラかるぞ」と言いその場を去っていた・・・。

【標的の始末成功。次の標的に向かいます】

先ほど殺人を行った男は、馴れた手つきで携帯のボタンを操作する。男は文章を打ったあと、携帯の画面にある【送信】を押し、ある人物にメールでこのことを報告する。

そして数分後、携帯が震え、メールが送られてきたことを知らせるのを確認した男は、携帯を開き内容を確認する。そこには、

【御苦労。引き続き仕事を続行せよ】、と書かれていた。

内容を確認すると、男は再び馴れた手つきで携帯のボタンを操作し、

【了解】

と言う“二文字”の言葉を返信した。返信が終わると同時に、その男と行動を共にする者が、「兄貴、さっきの男一体なんで殺したんですかい？」、とメールを終え携帯を閉じた人物に、疑問をぶつ

ける。

しかし、質問を投げかけられた男が返した返答は、期待した答えではなく、「お前はまだ知らなくてもいいことだ……」、「と、と言う言葉であった。

その言葉に質問を問った男は素直に、「分かりやした」、と言う言葉を返す以外になかった。とは言われたものの、男の心の中の疑問は消えたわけではない。

そして、二人は車は乗り込みここを去る。車の型は、【ポルシェ 356A】。

そして、これが始まり……。

序章（後書き）

いきなり暗い話になってしまいました。が、
ずっと暗い話になるわけではありませんのでご安心を。

因みに私は、ほぼ“思いつき”で書くので次回に誰を書くかは分かりません。

誠に勝手ですがご了承ください。

捜査と迷探偵と名探偵（前書き）

今回は前回の殺人事件の捜査と、毛利小五郎、コナンが登場です。
警察のほうは、目暮、佐藤、高木が登場！

捜査と迷探偵と名探偵

「殺人か」

「はい。死因は頭部を銃撃されたことによるもの。即死ですね・・・」

「ここは昨夜、殺人事件があつた場所。そして今は警察が捜査を行う場所。」

少ない手掛かりを見つけ、様々な情報を元に推理し、そして犯人を捕らえるという捜査の基礎になる場所でもある。

そして今、床に横たわる男性の遺体を見て、二人の刑事が会話をしているところ。一人は【高木渉】。背が高く、ヒョロつとした外見が特徴な刑事であり、同じ一課の【佐藤美和子】に惚れている男。もう一人は【目暮十三】。上記の【高木渉】と【佐藤美和子】の上司である。刑事にしてはやたら太っているその体型と、いつも被っている帽子、同じくいつも着用しているコートがトレードマークである。

因みに、【高木渉】と【佐藤美和子】の恋の関係は、まだゴールしておらずお互いちゃんとした、告白もできていない、しかし、互いに心の中では愛し合っており、どちらかが危機に陥ると、もう一方が必死に（時には我を忘れて）助けに行くといき、そして、非番になるとデートを行うため、誰が見ても「二人の恋は実ってもいいころだ」と思うほどである。

しかし、このデートは一課の刑事に妨害され続けており、一度もこのデートが“無事”に終わったことはない。

さて、話は戻り、目暮と高木が遺体を見ながら頭を回転させているところに、目暮の命令により聞き込みを行っていた、【佐藤美和子】が戻ってきた。

「警部、聞き込み終わりました」

「うむ。どうだったね」

戻ってきた佐藤が報告すると、目暮がその報告を聞くために佐藤に問う。

しかし、この時目暮は佐藤の顔を見て、報告の内容はだいたいの予想できていた。明らかに、「収穫はありませんでした」という顔している。

そう目暮が思っていると、佐藤が報告のために口を開く。

「それが・・・事件が夜中だったため、目撃者はいませんでした」「そうか・・・」

鑑識の報告で、被害者の死亡推定時刻が、【二十三時三十分】～【零時】ぐらいということが分かっていたせいか、目暮は【目撃者はいないもの】と予想していたため、あまりショックは受けなかった。

「目撃者いませんでしたか・・・。困ったなあ」

目暮と違い高木はショックを受けているようだ。

「うーん、せめて“あの”防犯カメラが動いていればな・・・。」
実はこの廃ビルには、何箇所か防犯カメラが設置してある。と言うのも、このビルがまだ使われているときに設置されているものだったので、廃ビルとなった今は当然動くはずもなく、ただそこに“あるだけ”である。しかも今回の殺人は、その防犯カメラの範囲内で起きていた。もし、動いていれば犯人の顔、せめて姿ぐらいは確認できたかもしれない。まあ、今さらそう思っても、電気が通っていない以上動くはずもない。が、その場にいた刑事は全員そう思った。

「さて、どうするか・・・。」

一向に進む気配がない捜査を見て、目暮がそう呟いた。

「昨日、杯土町にある廃ビルで殺人事件が起きました。警察が捜査を進めているものの、犯人の手掛かりは見つからず、

捜査は難航している模様です。なお、この事件で殺害された男性は、【五十嵐拓也】さん三十五歳だと分かりました。

では次のニュースです。」

「ハア、また殺しか。つたく、事件、事件、事件とどうなっ
てやがんだ」

ニュースキャスターが報道するニュースを見て、苛立っている男の名は【毛利小五郎】。以前はとんでもない推理を披露し、捜査をさらに難解に導く、【迷探偵】として活躍していた。しかし、最近【眠りの小五郎】という異名を持つ【名探偵】となり、様々な事件を解決する探偵となっていた。今では、“かの有名だった名探偵” 工藤新一にも引けを取らない腕の持ち主で、警察にも一目置かれている。

「こんな事件、俺様の手にかかれば朝飯前よ！ ナ、ハッハッハッ」

「（何が朝飯前だよ・・・何も知らないってのは幸せなもんだな）」

小五郎の自慢と高笑いを心のなかでつつこんだのは、この探偵事務所に居候する少年【江戸川コナン】である。彼は【帝丹小学校】に通う一年生である。しかし、その割には頭が“異常”なほど切れ、様々な知識を身につけ、運動神経抜群で、子供とは思えない雰囲気、時たま放出する不思議な少年である。しかしこれと言うのも、その正体は現在行方不明である工藤新一その人であり、アポトキシン4869で、体が幼児化してしまったことで誕生した少年である。（しかし、おっちゃんの言う通りやけに事件が絶えねえなあ。さてと、そろそろ時間だな・・・）

コナンは読んでいた漫画をソファアの上に置き、出かける準備を進める。

「ん？コナンどこか行くのか？」

そんなコナンの様子を見て、小五郎が質問する。

「うん。博士の家に遊びに行くんだ。帰りは遅くなるから、蘭姉ちゃんには『夕食いらないよ』って伝えておいてね。

じゃあ、行つてきまゝす。」

「ああ、気をつけてな」

理由を聞いた小五郎は、また博士の家かよ、と心の中で思いつつ

も了承し、コナンを見送った。

捜査と迷探偵と名探偵（後書き）

どうでしたか？

次話もどうか読んでくださいね。

誤字情報

ニュースキヤスターのセリフに、『捜査が難攻』と書いてありますが、

正しく『難航』でした。

すみませんでした・・・。

平和（前書き）

今回は阿筈、コナン、哀、の物語です。

平和

「邪魔するぜ」

「ん？おお新一来たか！」

コナンの訪問を迎えたのは、“自称天才発明家”の阿笠博士である。しかし、“自称”とは言ってもその腕はかなり高く、コナンが愛用している【キック力増強シューズ】、【ボール射出型ベルト】など、現代科学では到底発明不可能と思われるアイテムを、次から次へと発明する謎の多い博士である。そして、江戸川コナンが工藤新一だと知っている数少ない人物の一人でもある。因みに、下の名前の【博士】は【ひろし】と読む。

「あれ、直ってるか？」

「ああ。この通りにな。」

そう言い博士は、コナンに頼まれていた【ターボエンジン付きスケートボード】を渡した。

「新一、できればもう少し丁寧に扱ってほしいんじゃが……。」

「分かってるよ博士。これでも大事にしてるんだぜ。」

「なら今以上に大切にしてくれんかのお。」

「分かってる気をつけるから。」

博士に修理を頼むと、決まりごとのようにこの会話が発生する。

しかし、今回はいつも以上にしつこい、と言うよりは念を押される。そのしつこさのせいか、最後のほうは少々苛立ってコナンは返答してしまった。

「本当に分かっているのかしら？」

「灰原!？」

二人の会話に突然入ってきたのは、灰原哀。彼女は今は小学生の体をしているが、元はコナンと同年代である。つまり彼女もアポトキシン4869の被害者なのだ。しかし、コナンと同じ【被害者】であっても彼女場合、この薬を飲んだ経緯が違う。一言で言えば、

彼女は“元”黒ずくめの組織の一員である。組織では『シエリー』
と言うコードネームを与えられ、主に薬の開発を担当していた。
アポトキシン4869は彼女の手によって開発されたものである。
そんな組織での生活が続く中ある日、彼女の悠一の肉親である姉【
宮野明美】が、組織によって殺害されてしまう。姉の死を知らされ
た彼女は、【姉の死に対する納得できる回答が得られるまで、薬の
開発を中止する】という手段をとるが、それが仇となり、組織のガ
ス室に手錠をかけられたまま拘束されてしまう。このまま殺される
のなら・・・と思った彼女は、隠し持っていたアポトキシン486
9を飲み、この世と別れを告げようとするが、何と彼女体は死ぬど
ころか幼児化し、小学生の体になってしまう。体が縮んだことで手
錠の拘束から解放された彼女は、ダストシユートから逃げ出しその
まま、自分と“同じ目”にあった工藤新一の家に向かい、力尽きて
倒れたところを阿笠博士に保護されたという訳である。そして、そ
のまま彼女は小学生【灰原哀】として、コナンや博士とともに組織
を潰す毎日を過ごし現代に至る。

「まったく、突然現れるなよな。びっくりするぜ。」

さて話は戻り、突然の登場により驚くコナンを置いて

「博士かなり苦労してたわよ。今度からは本当に気をつけるのね。」

と言う灰原。まあ、博士と同じく修理したものを受け取りにくる
たびに、この二人から文句が飛んでくるのはいつものことである。

「分かってるよ。本当の“本当”に気をつけるから。そんな鬼みた
いな顔するなつて。」

二度目の本当という言葉を、やたら強調して言うコナンに阿笠は
安心するが、後の言葉の“ムッ”として、

「『鬼みたい』はないじゃろう新一。」

と灰原を庇う阿笠だったが、

「いいわよ博士。どうせ可愛くないから。」

といい地下室へと戻ってしまった。

「まったくホント可愛くねえ。」

「まあ新一、哀君も心配しとるんじゃないから。」

「そうかぁ・・・?」

そんな会話が繰り返される毎日。平和な毎日。このまま続くかと思えた。

あの事件が起きるまでは・・・。

地下室へ戻る前、灰原がコナンのことを一瞬見つめたことに気づくものはいなかった・・・。

平和（後書き）

なんか灰原の紹介文が、やたら長いものになってしまいました。

えっとしばらくは、こづいつキャラ紹介で終わると思います。

日常と運命と犯罪（前書き）

今回は蘭が登場です！

私なりに蘭も好きなんですよね。しかし、哀のほづが上ですね。

そして、例の二人組も登場です！

因みにこの二人の正体、皆さんもうお分かりですよね？

では、本編をどうぞ。

日常と運命と犯罪

「ただいま」

「おう、帰ったか。お帰り」

ここは毛利探偵事務所。今、この事務所の経営者である【毛利小五郎】の一人娘【毛利蘭】の帰宅である。

彼女は“三つの顔を持つ女性”である。一つ目は【毛利小五郎】の一人娘としての顔。二つ目は【空手の都大会優勝者】としての顔。そして三つめが【工藤新一】のガールフレンドとしての顔である。特に“二つ目の顔”は恐ろしいものがある。なぜなら、彼女の空手の腕はそこらへんの空手選手を上回る腕であり、時にはドアをぶち破り、時には車のガラスを割り、時にはロツカーを凹ませ、そして時には犯人を一撃の名の下にKOさせる。

そして彼女は中々の美人である。ホツソリとした体型にスラリと伸びた足、そして見たものを魅了するその優しき笑顔を持つ。そんな彼女が、空手の都大会優勝者とは誰も想像もしないだろう。綺麗な花には棘がある”という言葉は彼女にピッタリである。

因みに今彼女は“その”空手の部活動の帰りである。後輩に指導しながら、自分も気持ちいい汗をかいてきた帰りだ。しかも季節が春ということもあり、快適な運動をすることができた。

「ふう〜疲れた。あつ！お父さんまたビール飲んでいるのね！」

「いいだろう、酒は俺の人生の楽しみの一つなのだからな」

「なにいつてるの！新出先生に『酒はできるだけ控えるように』って言われたの忘れたの!？」

「『できるだけ控えるように』とは言われてないぞ。『週に一回休肝日を取るように』と言われたんだ！」

「へえ、じゃあ聞くけどその休肝日を守ったことあるのかしら？」

「そ、それはだな・・・」

終わりそうもない会話に、段々蘭の顔が引きつっていくのが、小

五郎には嫌でも分かった。そして、こうなつた場合蘭の取る行動はただ一つである。指を鳴らし始め、不気味な笑みを見せ始める蘭に、小五郎は対処できず机に置いてある酒を全て渡した。

当然、それで蘭のご機嫌は直つたわけだが、
「まったく！こうだからお母さんに逃げられちゃつたんじゃないの？」

そう酒の話が終わると次は“ほほ”決まってこれだ。

(またその話か・・・)

そう心の中で小五郎は思いつつも、口にはださないのは、今蘭にそんな言葉を言えば、どうなるかぐらい分かっているからである。

「さうて、話はここまでだ。仕事仕事つと」

「ちよつと！話逸らさないでくれる!？」

適当に思いつた方法で、話を逸らしたものの蘭には通じず、と言つよりも、今現在小五郎に対する依頼はないため、仕事がないことぐらい分かつていた。“見え透いた嘘”である。

「あ！そうそう。コナンがな、阿笠博士の家に遊びに行くから夕食はいらないって言つてたぞ。」

「え？コナン君が？」

「ああ」

「また博士の家か……。何しに言つてるんだろつね」

「さあな」

「無責任な言い方ね」

「仕方ないだろう。言わねえんだから」

こんな話をしているうちに、酒や母の話など忘れてしまつ。

しかし、こんな日常は長くは続かない。

そんなこと誰一人として想像できなかった……。

今晚、とある裏路地。

「や、止めるおおおお!!」

パツシユ!

「死にやしたぜ」

「結構手こずったな・・・」

「兄貴残りは一人ですかい？」

「ああ」

「行くぞ」

この間、廃ビルで殺人をやらかした二人組も動いていた。運命は動いている、今この時も。

日常と運命と犯罪（後書き）

とうとう二人目。しかし、この二人が言っている「三人の殺害」とは、

何を意味しているのでしょうか？

では評価お願いします。

突然の訪問者と信頼（前書き）

感想ありがとうございます！嬉しいです。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

では、本編をどうぞ！

突然の訪問者と信頼

ピンポーン

「はい」

「おっ！依頼人か？」

そう言い立ち上がり、蘭が来客を迎える。一方小五郎は久しぶりの依頼人ということもあり、ハイテンションである。

来客対応のため蘭が扉を開けると、そこには……。

「！！目暮警部！」

「なに！」

そう、そこには【警視庁刑事部捜査第一課強行犯捜査三係】の、目暮十三が立っていた。驚きのあまり、“開いた口が塞がらない”二人をよそに、目暮が挨拶をする。

「お邪魔してもいいかね？蘭君。」

その言葉で我に返った蘭は、

「あ、はい。どうぞ。」

と事務所の中にあるソファアを手で示す。

「すまんね」

そう言い目暮は、ソファアに腰をおろす。

蘭はお茶を入れに台所へ、一方小五郎は……。

「お〜い毛利君！いつまでそうしているつもりだね？君もこっちに座りなさい」

その言葉で我に返った小五郎は、警部に促されるままに、警部の正面にあるソファアに座る。

そもそも小五郎や蘭がなぜ、ここまで驚いているのかと云うと、普段現場では顔を合わせることもあるが、警部が事務所に顔をだすことは、“ほぼ”ないことであるからだ。二人がここまで驚くのも無理はないだろう。

「お待たせしました」

そう言い蘭は、注いできたお茶を二人の前に出し、二人の話の邪魔にならないように、小五郎が座っているソファの後ろへ移動する。

そして、小五郎と目暮の二人は、お茶を一口飲み目暮が口を開く。「さて、毛利君。今日ここに来たのは、君に事件の依頼をしたいからだ」

ゲツホゲツホ！

「ちょっとお父さん！」

いきなり目暮が本題に入ったことと、『事件の依頼』という言葉に驚き、小五郎は飲んでいたお茶を吹き出してしまうところだった。その様子を目暮はジト目で見ている。

「警部があたしに事件の依頼っスか？」

気を取り直した小五郎は、確認のため警部に問う。

「そうだ」

その言葉を聞いた目暮は、間をおかずに答える。

「でもどうして、目暮警部が事件の依頼を？」

思わず、思っていた疑問を目暮に蘭はぶつける。

そして、小五郎も同じ疑問を問いたいような顔して、警部を見つめる。

「うむ。まずはそのことからだな。」

目暮は今までの出来事を小五郎たちに話すことにしたが、そう言い終わった目暮の顔つきが、一瞬変わったことに誰も気付かなかつた。そして、目暮は語りだす。

「毛利君。君は知っているかね？一昨日杯土町で起こった殺人事件を。」

「ええ。ニュースで見ましたよ。確か被害者の名前は『五十嵐拓也』さんでしたな。」

記憶を辿るように思い出しながら、小五郎は答える。

「そう、その事件だ。実はこの事件を毛利君に調べてもらいたいのだ。」

「は？なぜあたしに!？」

思いもよらない答えが返ってきたことに、小五郎は思わず聞き返してしまう。

そう、物語は一旦二時間前に遡る。

二時間前 警視庁

「中止ですか!?!？」

「そうだ。この事件はここで捜査を打ち切る!」

「なぜですか!管理官!」

先ほどから部屋の外まで聞こえるかのような大声で、話しているのは目暮警部である。そしてその気迫たつぷりの目暮に、御塵も引くことなく、と言うより、逆に気迫で押し返しているこの『管理官』と呼ばれたこの男。彼の名は松本清長。目暮と同じく捜査一課に属する男である。その大きな体格と厳しい面持ち、そして顔の傷が、彼の存在を大きく見せまた、“修羅場”を味わってきたことを想像させる。因みに階級は『警視』。要するに目暮の上司である。

そしてここは、その管理官の部屋。

「私です!納得のいく説明をお願いします!」

「僕も納得できません。管理官。」

そう、この部屋に居るのは目暮と松本だけではない。松本が椅子に座り、腕を組みながら正面に立っている目暮を見つめ、そして目暮も負けずとその目を見つめ返す。

そして、目暮の横には彼の部下である、佐藤美和子と高木渉が立っていた。この二人も松本管理官を真剣な眼差しで見ている。いや正確には『睨みつける』と言ったほうがいいかもしれない。しかし、この三人がどれだけ、「納得のいく説明を」、「理由は?」、などと質問を投げて、返ってくる『答え』という球は同じで、「質問及び理由の説明は認められない」、であった。

このまま言い合っても何にもならないと思った目暮は、「分かりました。管理官」、と仕方がないような言い方をしながら部屋を後

にする。

しかし、その目暮の行動を佐藤は、「ちよつと警部!」、と引き留めようとしたが、目暮はそのまま部屋に一礼をし去ってしまった。そして、目暮が去ったことを確認した管理官は、「君たちも行きたまえ。これ以上語ることはない」、と言い、椅子を百八十度回転させて後ろを向いてしまう。

その行動を見て、佐藤も高木も諦め「失礼しました」と言い部屋を後にする。もちろん部屋に一礼した後で……。

部屋をでた佐藤は早歩きで目暮の後を追う。

そしてその後を追うように、高木も佐藤に続く。

「ちよつと、良かったんですか?佐藤さん」

当然納得できない疑問に、明確な返答も貰えずに部屋を後にした高木は、思わず佐藤にその疑問をぶつける。

しかし、佐藤は黙ったまま歩を進める。

「あ、あの佐藤さん?」

そんな佐藤の行動に不信感を抱いた高木は、佐藤にもう一度問う。

「いいから黙ってついてきて!」

「は、はあ……」

やっと返ってきた佐藤の返事に、曖昧な返事を高木は返す。

そして前方に、先ほど部屋を後にした目暮警部が見えてきた。

「警部!」

「ん?佐藤君、高木君か……」

目暮に追いついた佐藤は、警部を呼び止め、後ろ向いた目暮は佐藤と高木の両名の姿を確認しその場に止まる。

「警部!これからどうしますか?」

佐藤はそう口にする。伊達に彼女は、今まで目暮の部下として働いてきたわけではない、あれしきのこと目暮が、事件のことから引く刑事だとは御塵も思っていなかった。

そしてその佐藤の質問に目暮は答える。

「当然、捜査を続行する」

「えっ！いいんですか？警部！さつき管理官に・・・」

「ああ分かってている！だがこれで君は納得できるのかね？」

高木が全ての言葉を言う前に目暮は高木に問う。

「そ、それは・・・」

「高木君。我々刑事の仕事はなんだね？」

突然話が変わったことに、高木は心の中で、は？ と疑問を抱くが、そのことを悟られないように、表情を変えずに返答する。

「それは・・・、一言で言えば市民を守ることです。」

高木の返答したのと同時に佐藤は高木に視線を送る。

「そうだ。いくら上司の命令でも、誰がなんと言おうと、それは変わらない。管理官の言う通りにこのまま捜査が打ち切られれば、誰かの命がまた失われることになる！それだけは絶対に避けねばならん！」

「警部・・・」

その言葉に刑事としての仕事を思い出されたのか、佐藤、高木両名は同じ言葉を口にする。

「無理には言わん。ワシはこのまま独自の方法で捜査を続ける。

もし、君たちも管理官の判断に納得できないと言つのであれば・・・

┌

「協力します、警部」

警部が最後の言葉を言う前に佐藤が自分の思いを口にする。

「僕もです！協力させてください！」

続いて高木は自分の考えを伝える。

「ありがとう・・・。しかし分かっているかね？二人とも。この行動がなにを意味するのか・・・」

警部は礼の言葉と確認の言葉を口にする。

しかし、目の前の二人はその事を理解しているような目をしながら、佐藤が語る。

「はい。上司の命令に背くということ。これは立派な業務命令違反

です。バレレバ我々はタダでは済まなくなるでしょう。そんなことは、百も承知です！」

そして高木も、佐藤の意見に同意するかのように首を縦に振る。

「ありがたい。では付き合ってくれ・・・」

「はい!!」「」

改めてお礼の言葉を口にした警部に、佐藤、高木の両名は口を揃えて返事を返す。

そしてこのとき目暮は、部下に恵まれ信頼されるということが、どれほど幸せなものかということを中心に心の中で確認した。

突然の訪問者と信頼（後書き）

今回は松本管理官を登場させました。

そして、目暮を依頼人という形で登場させたのは、原作ではなかったからです。

しかし、信頼というものは良いものですよね。
評価、感想待ってまゝです。

警察と謎（前書き）

六話更新です！

さて、話は変わりますが、この小説を読んでいて、

「一体組織との対決はいつなんだ？」とか、

「新志なのに二人の関係が全く書かれてないじゃないか！！」とか、
思う方がいると思います。

念には念を入れ言っておきますが、忘れてるわけではありません。
ただ、この小説は“長期”の小説なので、序所に明かしていく予定
です。

では、本編をどうぞ。

警察と謎

「と言う訳だ」

これまでの事を話し終えた目暮は、一息つくためにお茶を口にす
る。

そして、目暮の話に口を挟むことなく、今まで黙って聞いていた
小五郎が口を開く。

「事情は分かりました。しかし、管理官が捜査を打ち切りとは……
解^げせん」

「ホントッ、どうしちゃったのかしら管理官」

今まで一言も口を開かず、黙って聞いていた蘭も、小五郎と同じ
く思った疑問を口にする。

「これはワシ個人の考えなのだが……」

二人の疑問に答えるために、目暮が自分の考えを言おうとする。

「管理官が捜査を打ち切りにするなど、余程のことだ。そこにはそ
れ相応の理由があるに違いない」

「ですな。それで警部殿の『個人の考え』と言うのは？」

「うむ。その前に約束してくれんかね？」

突然の約束の持ちかけに、小五郎は一瞬困惑するがすぐに、「約
束というのは？」と聞き返す。

間を置かずして目暮が、

「なあに、簡単なことだよ。これから話すこと、そして今まで話た
ことは、ここにいる三人と佐藤君、高木君以外には決して口外
しないことと約束してもらいたいのだ」

「フッ」

目暮が言い終わり、三秒ほどの間が空いたときに小五郎が口で少
し笑う。

「？」

その笑みの正体が分からず目暮、蘭は疑問を浮かべる。

そして蘭が、「なに笑ってるの？お父さん」、笑いの正体を知るために蘭が小五郎へ問いかける。

「警部殿。話を聞いてしまった以上、我々は言わば『運命共同体』。ならば、秘密を守ることは当然ですよ。それに、

『口外しない』と言う約束を持ちかけるのなら、話が始まる前に言うものでしょ？しかし、警部殿は今になって約束を持ちかけた。

つまり分かっていたんじゃないんですか？話を聞いたあたしが首を横に振らないってことを。」

「・・・」

蘭は父のその話を聞いて、改めて思い知らされた。父と目暮警部が絶大な信頼で結ばれていることを。

そして警部も

「さすがだな毛利君。そう言ってくれろと信じていたよ」

そう言い終わった目暮は、お茶を飲みながら心の中でこう思った。やはり持つべきものは友だな、と。

そして目暮と同じく、お茶を口にした小五郎は改めて目暮に問う。

「では警部、お話ください。警部の考えを」

「うむ」

そう言い目暮は、自分の考えを話し始めると同時に、真剣な顔つまり刑事の顔をした。

そして蘭は直感で感じた。ここからは本当に重大な話が始まる、と。

「では話そうワシの考えをな。」

そう言いお茶を口にした目暮は、一呼吸おき話始める。

「ワシは四つの考えを持っている。まず一つ目の考えから話そう」

そして小五郎と蘭は黙って聞くことにする。

「この事件には圧力がかかっているということだ」

“圧力”という言葉に小五郎の眉が少し反応するが、目暮は敢えて触れずに話を進める。

「まあ考えたくはなかったが、この事件の裏にはとてつもなく巨大

な“何か”が関わっていて、その“何か”が、自分たちがこの事件に関わっていることを知られないために、警察の上層部に圧力を掛けてきたということだ」

「そして二つ目の考えは、警察組織が関わっていることだ。これも考えたくはなかったのだがな」

そう言い終わると目暮は顔を少し歪ませる。しかし、すぐに元の顔に戻し話を進める。

「もし、捜査が進められ警察関係者、それも上層部の人間が関わっていると世間に知られれば、

警察という組織全体の問題がでてくる。そしてそうなった場合に起こるか、それは言うまでもない」

「続いて三つ目の考えは、これは二つ目の考えとほぼ同じだ。

この事件には警察が隠している何らかの“問題”が関わっているということだ」

そして、目暮は一旦呼吸を整え、再び話始める。

一方、蘭や小五郎は一言も話さずに、目暮の目を真剣な眼差し見つめながら話を聞いていた。

「そして四つ目は・・・」

「ただいま」

目暮が話始めたのと同時に、何とコナンが帰宅した。

皆一瞬驚きはしたが、何事もなかったかのように振る舞う。

「コナン君、お帰り。早かったわね」

蘭は普段通りにコナンに話しかける。

「うん、灰原が『もう帰りなさい』って言われちゃったから帰ってきたんだ。本当はちょっと心配だったけど、

博士も『大丈夫じゃよ』って言ったから、早めに帰ってきたんだ」

コナンはいつも通りに子供らしく返答する。

「あっ！目暮警部くんには」

「えっ！？あ、ああ、こんにちは」

コナンに突然挨拶をされた目暮は驚き、礼儀として挨拶を返す。

しかし次の瞬間、コナンが言った言葉に皆驚愕する。

「で？四つ目の考えはな〜に？警部」

その言葉に皆啞然とした。

「ま、まさかお前聞いてたのか・・・？」

驚きを隠せない小五郎は、確認のためにコナンに聞く。

「ごめんねおじさん。本当はもつと早く帰ってきたんだけど、真剣なお話をしてたようだから

入れる気分になれなくて・・・。ドアの前で待ってたら、目暮警部さんが『口外』とか『約束』とかって言う言葉が

聞こえたから、『これは真面目なお話なんだな』って思って、思わず聞いちゃった」

「『聞いちゃった』じゃねえだろう！！馬鹿モンが！

ん？それにしてもお前『口外』なんて言葉よくしってるな・・・」

コナンは小五郎が何を言いたいのか分からず、頭に？マークを浮かばせながらも普通に対処した。

因みにこの時のコナンの頭に『タンコブ』ができたことは言うまでもない。

「知ってるも何も聞こえたから・・・」

コナンが最後まで言い終わる前に小五郎が口を挟む。

「そういう意味じゃねえよ。『口外』って言葉の意味が分かってお前はこの話が『真面目な話』だと思っただらろう？

つまりそれは『口外』って言葉の意味を知ってるってことだろう？そんな難しい言葉、良く知ってるな」

コナンは、小五郎が『口外』って言葉の意味を知ってるってことだらう？』の、『意味』を聞いた瞬間に『ヤベエ』と思っていた。そして、同様してないことを悟られないように、敢えて平静を装って返答する。

「うん。この間の国語の授業で、小林先生が言ってたんだ。ハハハ・・・」

「なるほど・・・」

その言葉を聞きコナンは心の中で安心した。

(危ねえ、危ねえ)

「んんっ!」

今まで黙って話を聞いていた目暮が、皆の視線を集めるため喉を鳴らす。

「まあとにかく、コナン君。君は今までの話を聞いてしまったんだね?」

その目暮の問いに、コナンは子供を装い答える。

「うん。ごめんなさい警部さん。でも絶対に誰にも言わないから安心して」

「うーん、仕方ない。じゃあ話を戻そう」

コナンの返答を聞いた警部は、聞いてしまったのなら仕方がないやむを得ないか・・・と心の中で思い、話は続けることにした。

しかしこの時コナンが、敢えてドアの前で聞く耳をたてていたことを、知る者はいなかった。

警察と謎（後書き）

えっとコナンが今まで何をしていたのかは、
次話で書きます。

評価お願いします。

阿笠邸にて（前書き）

今回は、コナンが阿笠邸で何をしていたのかを書いてみました。

阿笠邸にて

時は遡り阿笠邸。

哀が地下室に去った後、博士は新一に“ある”相談を持ちかけた。

「新一、頼みがあるんじゃないが・・・」

「ん？何だ博士？」

コナンが博士に頼みごとをすることは珍しいことではないが、“その逆”は珍しいことだ。

コナンは、博士には色々な意味で恩があるので、こういう機会にでも“恩”を返そうと、頼みを聞くことにした。

「ありがとう新一。実は哀君のことだな・・・」

コナンは、哀君という言葉に反応する。

「灰原がどうかしたのか？」

「うむ。実は哀君、この頃寝ていないようでのう・・・。食事もあんまり取っておらんようだし、

二人で食卓を囲んだのはいつの事やら・・・」

「まさか、また研究に夢中になってメシ食ってねえのか・・・」

そう哀は研究に夢中になると、『時間も忘れて研究に没頭』してしまうという悪癖がある。

まあ、それはコナンにも言えることだが・・・。因みに、彼の場合は推理小説である。

「そうなんじゃ。そこで君に頼みごとじゃ。今日ここに泊ってくれんかのう・・・」

「は？」

泊まるという言葉聞いた瞬間に、コナンの表情が激変した。

「まあ、そんな顔をするな新一」

その顔は『理解不能』というような顔である。

そんな顔を見て阿笠は、笑いながら話を進める。

「おい博士！ここに泊って何させようって言うんだ？」

「コナンは、博士が言った『頼みごと』とは、『灰原を元気づけてやってくれ』というものだ」とイメージしていたため、この発言には訳がわからなかった。

「まあ簡単に話をすると、君に哀君を見てやってほしいじゃよ」

「俺が、灰原を？」

「そうじゃ、この頃哀君は、さつきも言ったように睡眠も、食事も、ほとんど取らないようになってるんじゃ。ワシが聞いても返ってくるのは、『大丈夫よ』、『心配しないで』といった言葉ばかりじゃ」

「コナンは顎に手を当て何かを考え始める。

「そこで、もし君になら何かを話してくれるかもと思ってなあ」

「そう言い終わった博士の顔は歪んでいた。自分の非力さを痛感しているのだろうか……。その顔は悲しみに満ちていた。

「彼女の力になれないというのは悲しいことじゃ……。じゃが話し相手が君ならば彼女は自分の心を、少しは見せるのではないか？ と思つてのお……。何しろ君たちは、アポトキシン4869で体が縮んだ者通し、同じ経験をしたもの通しなら、互いの気持ちも分かるのではないか？ と思つてのお……。あるいは、君しか話せないことがあるのかもしれん」

「博士……」

話し終えた彼の目には、うつすらと涙が浮かんでいた。普段は“いろんな意味”でおかしな発明家で、親バカな一面を持つこの変わりものの博士だが、彼女のことになると、“自分の娘”のように心配する、優しさも持っている。いや、彼にとつて灰原は『娘同然』なのだ。だからここまで心配することができる。そうでなければ、この男から発せられる多大なる悲しみのオーラは、説明がつかない（まったく……）

博士の気持ちに心打たれたのか、それとも娘思いの“自称天才発明家”の、あまりの心配性に呆れたのかは分からないが、コナンは頼みを聞くことにした。

「分かったよ。博士。灰原のことは俺に任せてくれ！」

「本当か!？」

「ああ。まあ灰原が研究に没頭して、食事も睡眠もとらないのは心配だし、博士のそんな顔見て『断る』なんて言えねーからなあ」

その言葉を聞いた博士は泣いて喜んだ。

「新・ヒツ・ありが・ツク・と・ヒツ」

「ああ、分かったから、泣きながら喋らないでくれ。何言ってるんだか分からねえよ」

そう言い終わると、コナンは地下室へと降りて行った。

因みに博士は、上で『チーン!』だの、『クツシュン!』と明らかに鼻をかんでいる様子が想像できる。

地下室の扉の前まで来ると、『カチャカチャ』、『シャツシャツ』というパソコンのキーボードの音や紙をめくる音が響いていた。その音を聞いただけでも、中での忙しさが分かるほどに。

コンコン

「灰原、入るぞ」

礼儀としてノックをし、中に彼女がいることを確認する。しかし、返事はなくコナンは扉の鍵が開いていることもあり、勝手に中に入った。

扉が開く音で気が付いたのか、部屋の中で忙しそうに作業をしている彼女は、こちらを向かずに

「工藤君、入って良いとは言っていないわよ?」

「仕方ねえじゃん。返事がなかったんだから」

「あら、名探偵さんは『返事がないのを肯定として受け取る』癖でもあるのかしら?」

「そんな癖ねーよ。それに返事が無くても、あの音聞けば中に誰か居るのは想像できるって!」

「そう、なら、今すぐ出て行ってくれる?作業の邪魔だから」

「そういう訳にいかねーよ。今日はオメエに話があんだよ」

「?」

いきなり『話があんだよ』と言われ、灰原は少しコナンに疑問を

持つ。

そもそもいつもの彼なら、地下室に来たりしないし、『話があんだよ』のような改まった言い方もしない。その疑問をまず、彼にぶつけてみることにした。

「なによ、改まって・・・」

そう言うところコナンは、先ほど博士に言われたことを、灰原に言ってみた。まず、相手の気持ちを理解しなければならない。そんなことは探偵という職業をして、事件の犯人を何度も見てきた彼なら百も承知である。犯人のなかには、追い詰められまたは真相を打ち明けた後、そのショックや悲しみ、時には捕まるのが嫌で、自殺をする犯人も珍しくはない。そういう場合は、説得という方法が一番いい方法である。まあ事と次第によっては、荒っぽい方法もとらなければならぬこともあるが、まずは説得である。説得するにはまず、『相手の気持ちを理解』しなければ話にならない。そして理解をし、その人物と同じ気持ちになることが重要である。そこで、的確な言葉を掛けてやることにより説得が成立するのだ。そして、それは事件の犯人だけではなく、どんな人の話を聞く場合も変わらない。

「博士に聞いたぜ。オメエここんところ食事も睡眠もとってねえみてえじゃねーか」

灰原はその言葉を、作業しながら聞き答える。

「取る必要がないからよ。実際眠くもないし、食事だって必要最低限の栄養はとってるわ」

「『食事はとってる』って、博士はオメエがメシ食ってるどころ見てねえって言うてるぜ?」

「博士が寝てから、とってるのよ。彼は気が付いていないだけ」

(ハア)

コナンは全く進まない話に思わず、心の中で溜息をつく。それに、彼女の意見に納得してしまう自分がいる。確かに彼女言うことも一理ある。実際に博士が気が付いていないだけなのかもしれない。しかし、口では何ともでも言える。

(このままじゃ埒があかねえな・・・)

灰原は黙々と作業を続けている。

このままじゃ駄目だと、判断したコナンは

「じゃあよ。今夜夕食一緒に食べようぜ」

「!?!」

コナンの申し出に思わず、作業している腕が止まり、灰原はコナンのほうへ振り向く。

コナンは笑顔で彼女に語りかける。

「実はな、博士に今夜夕食を一緒に食べないか？って誘われててな。それに良い機会じゃねえか？オメエ最近博士と食卓囲んでねえみてえだからな。どうだ？」

「・・・」

「おい、聞いてんのか？」

コナンは敢えて博士が言いだしたように装った。

もちろんこれは博士の思いを少しは和らげるためである。彼女が食べているところを見れば、『博士も少しは安心するんじゃないか』と思ったのである。

「ハア、仕方ないわね。博士の思いを無駄にする訳にもいかないし、分かったわ今夜は三人で食べましょう」

「ああ」

コナンは笑顔で部屋をでていった。

この時彼女は、内心『喜び』に満ちていた。しかし、彼女がその気持ちに気付くことはなかった。

「今日の夕食は忙しくなるわね・・・」

そう呟いた彼女は再び、手を動かし始めた。

阿笠邸にて（後書き）

うーん、灰原とコナンの会話って難しい……。
なんか上手く表現できませんね。

違和感があると思いますが、評価お願いします。

開かれる心（前書き）

今回は前回の続きです。

開かれる心

阿笠邸では包丁の良い音が響いていた。

材料を切る音、炒める音、水洗いの音、皿を取りだす音。この音をだしている主は、この家の主、阿笠博士が娘同然に可愛がっている灰原哀である。

そして台所にはもう一人、その様子を見ていた少年がいた。江戸川コナンである。彼は彼女の手際の良さに驚いていた。馴れた手つきで調理器具を扱い、馴れた手つきで材料を選び扱い、そして的確に動く。

「オメエスゲエな！さすが博士の栄養管理してるだけはあるな」

「ちよつと工藤君。お世辞言つたて何もでないし、そこにいると気が散るから向こうに行つててくれない？」

「いいじゃねえか。それに調理してるところはあんまり見れねえしな」

その言葉に灰原は疑問を抱く。そして腕を動かしながら、その疑問を聞いてみる。

「え？彼女の料理見てないの？」

灰原が言う『彼女』とは、毛利蘭のことである。

因みに、蘭の料理に腕前は中々である。料理がロクにできない父と、人間離れたした味を生み出す母がいる家庭で、どうやって料理を覚えたのか不思議なくらいだ。

「彼女？ああ蘭のことか。俺はいつも居間で本を読んでるから、蘭が料理を作っているところは見たことねえんだ」

「へえ。意外ね。でも、食事をする前に血生臭い推理小説を読むなんて、よく料理がおいしく頂けるものだわ」

「ん？誰も推理小説なんて言つてねえじゃねえか。それに『血生臭

い』は余計だつっの」

「あら、ホントのことでしょう？それに、推理小説意外であなたが読むものなんてあるのかしら？」

灰原は喋り終わった後、調理中のハンバーグをひっくり返す。

それと同時にコナンが、「おお！」、と驚きの声を上げる。

そんなコナンを彼女は軽く睨みつけて、再び目をフライパンへと向ける。

「漫画だよ」

「漫画？」

灰原の頭には、『コナンが読む本』推理小説』という方程式ができてくるようなものなので、『漫画』という発言には驚かされる。

「俺だって好きで読むでるわけじゃねーよ。ほら、蘭に正体がバレるとマズイことになるだろう？だから、小学生らしく見せるために漫画を読んでるんだ。まあ、退屈で仕方ねーけどな」

「ふふつ。名探偵さんも大変ね」

「まっただけだぜ・・・」

そんな会話をしている間に調理が終わったらしく、灰原は調理器具を片づけ始めていた。

「できたわ。私は調理器具を洗うから、工藤君運んで」

「ああ」

コナンは出来たての調理を机に運び出す。

「おお、いい匂いじゃ」

その料理と、漂っている香りを楽しみながら、博士は席に着く。

そしてコナンは席に着く。

数分後、調理器具を洗い終わった灰原が席に着いた。

席は、コナンと博士が向かい合うように座り、博士の隣に灰原が座っている。

全員が席に着いたのを確認した博士は、「それじゃ、頂こうか」と言いい、「頂きます」と言う。そして博士に続き、コナン、灰原も「頂きます」と言って、手をつけ始める。

今日の料理はハンバーグ、レタス、人参、ベビーコーンをおかずとして、主食がご飯と味噌汁という組み合わせ。味のほうは、いつも料理していることだけあって、上出来の一言であった。

(ウメエ……。蘭と同じ、いや蘭以上か?)

はつきりいって、コナンは灰原がここまで美味しい料理を作れることに驚いていた。脱帽とはこのことである。

博士も先ほどから、笑顔満々で休むことなく食べ続けている。

「しかし、モグモグ……。哀君・モグ……」

「博士、口の中のものを呑み込んでから喋って。行儀が悪いわよ」
そう灰原に注意された博士は、一旦食べ物呑み込み改めて話し始める。

「しかし哀君、わしはこんなカロリーの高いものを食べていいののお?」

確かにその疑問はもつともである。彼は現在、灰原の厳しい栄養管理によつて、高カロリーのものを摂取することを禁じられていた。「もちろん、ダメに決まってるわ。でも今日は久しぶりの、博士との食事だもの。今回は特別よ。それに、博士のせつかくの頼みを無駄にするわけにはいかなしね」

「?」『せつかくの頼み』つてじゃあオメエ」

今まで黙っていたコナンが話しかけてきた。

「馬鹿ね。気付いてないとも思ったの?今日工藤君がここに泊るのも、夕食を一緒に食べようって言いだしたのも、全部博士が頼んだんでしょ?違う?」

「フツ。まったくオメエには敵わねえなあ。その通りだよ」

「さすがはワシの娘じゃなあ。しかしいつから気付いておったんじや?」

灰原はレタスを口にし呑み込んでから話す。

「工藤君が地下室に降りてきた時よ。彼は滅多に地下室には降りてこないし、まして『夕食を一緒に食べよう』だなんて言わないもの。まあ、この頃博士が私をかなり心配してくいていたのは知っていたか

ら。もしかして、博士が工藤君と協力して、何らかの手を打ったんじゃないかってね」

コナンは灰原の推理を評価するとともに、「ハハハッ。オメエ探偵になれんじゃねーか?」、と語る。

「冗談でしょ? 探偵なんてなりたくもないわ」

(可愛くねーな、ホント)

「なんか言った?」

「別に・・・」

そんな二人の様子を阿笠は楽しそうに見ていた。

そして、夕食も済んだ頃、阿笠邸に一本の電話が入る。

今灰原は入浴中、阿笠はトイレと、コナンしかでられないため、

コナンは面倒くさそうに立ち上がり、電話にでる。

「はい。阿笠ですけど」

「その声コナン君ね?」

(蘭!?! しまった! 連絡してねえ)

何と電話は蘭からだった。

そう、コナンは灰原や博士との生活に夢中になり蘭に連絡をつけるのを忘れていたのである。

「あ、うん。ごめんなさい蘭ねちゃん」

とりあえず、いつも通り子供の口調で話す。そして、どうして連絡できなかったのかを話しことにした。

「ねえコナン君。いつまで博士の家にいるの?」

「うん。心配しないで、・・・!」

コナンが蘭と話している最中コナンの視界に、手招きしている博士が移った。口パクで、「こっちに来てくれ」、と言ってるようである。

「コナン君? どうかした?」

「あ、ちょっと待ってて蘭ねーちゃん」

「え? ちょっとコナン君?」

蘭がそう言ってるにも関わらずに、コナンは【保留ボタン】を押

し博士のもとに向かう。

「なんだよ、博士?」

「電話、蘭君からか?」

「ああ、そうだけど。分かってるよ。今日は泊まって、明日早く帰るって言うから・・・」

そう言い、受話器を取りに行こうとするコナンを博士が呼び止める。

「違うんじゃない、新一」

「何が違うんだよ」

「新一帰るのは明日の午後三時ぐらいにしてくれんか?」

「はあ?なんでだよ!」

思いもよらない言葉に思わず、苛立ちをみせるコナンであったが、博士は話を続ける。

「まあ、そう怒るな・・・。哀君のこじやよ」

「えっ?」

哀君という言葉を聞き、コナンは再び冷静になる。

「灰原がどうかしたのかよ」

「実は、物は相談なんじゃが明日の午後三時頃までいてやってくれんかのう?」

「はあ?どうして?」

その言葉を聞き、再びコナンの冷静さは失われる。

「そう言うでない。それに哀君のためなんじゃ」

「灰原のため?」

ここでまたコナンは冷静になる。そして博士の話に耳を傾けた。

「いいか?今日哀君は、君が言ったことを守った。それは彼女が君には心を開くという証拠。残念じゃがワシ以上にな。そして、このまま君がここに残れば、哀君はもっと心を開いてくれると思わんかね?」

「灰原が俺に?」

「そうじゃ。でなければ今日、哀君がワシらと夕食を共にした理由

が思いつかん」

「・・・」

コナンは考え始める。

「大げさな話かもしれないが、哀君は君に特別な感情を持つとるんじゃないかね？」

「特別な感情って？」

コナンは考えるのを止め、博士に疑問をぶつける。

「それは、分からん。だがそうとしか考えられん。でなければ、今まで食事をとらなかつた哀君が、君が説得したことで食事をとるようになった理由をどう説明するんじゃ？」

「つまり博士は、『俺がここに留まれば、灰原が今よりも心を開いてくれるかもしれない』、と言いたいんだな？」

「ああ、そういうことじゃ」

「うーん」

コナンは考え始める。確かに彼女の心に変化が訪れているのは事実だ。初めてあったときに比べ、笑顔を見せるようになったし、冗談やお世辞も言うようになった。博士の言うとおり、その原因が自分にあるのならば、このままここにいや、博士の言うせめて明日の正午ぐらいまで留まれば、灰原は朝食も昼食も食べる可能性がある。つまり、研究ばかりではなく、普通の生活ができる小学生になれるかもしれない。まあその分、解毒剤の研究はあまり進まなくなるが、元の体に戻ることよりも、彼女の健康が第一である。それこそ、無理して倒れでもすれば、横にいる“発明家”はとても心配するだろう。親戚のものとしても、そんな彼の姿は見たくない。となると、結論は一つである。コナンは考えるのを止め、博士の目を見ながら言う。

「分かったよ。博士明日の午後三時ぐらいまでいるよ」

「おお、そうか！ありがとう新一！！」

そう博士が言い終わると、受話器を耳に当て保留ボタンを押す。

「ちょっとコナン君、いつまで待たせるのよ！！！！？」

保留ボタンを押した直後、蘭から怒りのこもった怒鳴り声が聞こえた。

コナンは目を丸くして、思わず受話器から耳を離す。

「ごめんなさ〜い。蘭ね〜ちゃん。博士と話してたら遅くなっちゃた」

「まあいいわ……。それでなにを話してたの？」

コナンの謝罪を受け止めた蘭は、「（しょうがないわねー）」と心の中で呟きながら許すことにした。

「それでね蘭ね〜ちゃん。実は明日の三時頃まで、博士の家に泊まることになったんだ〜」

「はあ？なによそれ？」

「うん。博士の作った新しいゲームにハマっちゃて。明日の午後三時頃までやりたいんだ〜」

「またゲーム？もう、しょうがないわね〜。迷惑を掛けないようにするのよ」

「は〜い」

蘭から了承の返事を貰ったコナンは、子供らしく可愛らしい？口調で返事をして、電話をきった。

「見事な演技ね。工藤君」

丁度風呂上がりの灰原が、『侮辱』とも、『褒め言葉』とも言えるような言葉を口にしながら、歩いてくる。向かう先は地下室のようだ。

「うっせー」

その灰原の言葉を『侮辱』と解釈したコナンは、そう口にする。そしてそのまま、灰原は地下室へと向かった。

「じゃあ次はワシが入ってくるから」

そう言い阿笠は、寝巻を持ち脱衣所に向かった。

「ああ」

コナンは肯定としての返事をし、椅子に座って推理小説を読み始めた。

二十分頃経とうとしたとき、脱衣所から阿笠が出てきた。

それを確認したコナンは、読んでいたページに琴を挟み、脱衣所に向かう。阿笠と同じく二十分ほど入浴したコナンは、予め用意しておいた寝巻を着て、椅子に腰かけ、先ほどの小説の続きを読み始める。

コナンが小説を読み始めて、三時間近く経とうとしたころ、パソコンをいじっていた阿笠が、コナンの横に立ち、

「じゃあ新一、ワシはもう寝るから哀君のことよろしくな」

「ああ。おやすみ」

「おやすみ」

そう言葉を交わした阿笠はベットに横になり、眠りについた。

阿笠が去って行ったころ、コナンも時間が『二十三時』を過ぎていることに気が付き、読んでいたページに琴を挟み、その本を机の上に置き、灰原の居る地下室へと向かった。

地下室へと続く階段の途中からでも、キーボードを叩く音が聞こえてくる。そして、その音源の部屋のドアを、先ほどと同じく『ノック』する。二回目のノックが終わるとほぼ同時に中から、「工藤君?」、という声が聞こえた。

「ああ」という返事をした後、「入って良いか?」、と聞く。先ほどとは違い、今度はすんなりと、「いいわよ」という肯定の言葉が聞こえた。コナンが扉を開けると、灰原が、「なにかしら?」、と聞いてきた。

どこから話せばいいか分からなかったが、遠まわしな言い方は好きではないと言うより、面倒くさいため、いきなり本題に入ることにした。

「あのよお灰原」

「ん?」

「まだ寝ないのか?」

「ええ。眠たくないから」

本当は眠い、しかし眠れなかった。ある理由で……。

しかし、探偵の目は誤魔化せないようだ。

「なにが『眠くない』だよ。オメエ“クマ”ができてるぞ」
「！」

灰原は一瞬驚いたが、表情には出さずポーカーフェイスを保つ。

「本当は眠いんじゃないのか？」

「いえ。ホントに眠くないのよ。そもそもこんなことで嘘言っただけになるのよ」

「じゃあその“クマ”をどう説明すんだよ？」

コナンは霧がない会話に嫌気がさし、どうしても言い逃れできない【動かない証拠】を指摘した。

しかし、彼女から帰ってきた答えは、「あなたの気のせいよ」、「、であった。

(ハア)。強情なやつ……)

コナンは心の中で溜息をつくも、ここで引く訳にも行かず、灰原に攻撃をしかける。しかし、どんな『言葉の攻撃』も、彼女の『言葉の守り』を破ることはできず、そろそろ十分が過ぎようとしていた。

と、ここで灰原が、しつこいコナンに苛立ってきたのか、「分かったわ。寝ればいいんでしょ？」と諦めの言葉を吐いた。そう言い終わった彼女は白衣を脱ぎ、その白衣を自分が座っていた椅子の背もたれにかけて、博士が用意してくれた地下室のベットに横になり、目を瞑った。

しかし、これは彼女の作戦であり、『寝るふりをしていれば、コナンも諦めて寝るだろう。』という作戦である。そして彼が寝付き次第、研究を続行するはずだったのだが、いつの間にか彼女は寝てしまった。

椅子に座り、その寝顔を見つめるコナンにも気付かずに……。

開かれる心（後書き）

どうでしたか？

やたら長い文章になってしまいました、

こんな長い文章は今後書く予定はありません。

しかし、『灰原の心をどうやって開くか』の表現が難しい。
頑張ります！！

悪夢と解放（前書き）

今回は『コナン視点』で書くことに挑戦してみました。

上手くはありませんが評価頂けると幸いです。

なお、今回の話しには“グロテスク”な表現が含まれています。
お読みになる前に、ご了承ください。

では、どうぞ！

悪夢と解放

やっと寝てくれたな・・・

ここは阿笠邸、そして今俺は地下室にいる。

十分ほどの『言葉の攻防』で苛立つてきたのか、灰原がようやく寝付いてくれた。

俺は今彼女の寝顔を見ている。正直、可愛い・・・。

静かに寝息をたてて、右二の腕を枕代わりにし、口を少し開きながら寝ている様子は、とても可愛らしい。

俺は灰原が寝ない理由を、俺なりに推理してみた。おそらく彼女は『寝る』ということをおそれている。原因は“あの夢”だろう。俺は以前、その夢の内容を聞いたことがある。

死体、死体、死体、死体、死体、死体、死体、死体、

そうここはまさに『地獄絵図』という言葉が一番相応しい場所。

灰原は十字架に張り付けにされている。当然、手足の自由は効かない。

そして口にはガムテープが張られており、言葉を発することもできない。

下には血の池。

自由の聞く目で、周りを見渡す。映るものは・・・死体。右を見ても、左を見ても、映るのは死体だけ。そして自分の足元にも・・・。

そして目の前でまた人が、銃声と同時にスローモーションのように倒れていく。

その様子を見て灰原は、「博士ーーーー！！」、と叫ぼうとする。しかし、ガムテープにより自由を封じられているその口は開くことではなく、博士は床に倒れる。それと同時に床に溜まっていた血池が、水飛沫をいや、血飛沫を上げて周辺に飛び散る。

そして銃声のほうを見るとそこには、自分にとって最悪の相手が立っていた。その男は銀色の長髪を靡かせ、上から下まで黒一色で統一された服を着ている。その色は、『闇の住人』もしくは、『カラス』をイメージさせる。そして、その男は左手に持っている“もので灰原に向ける。そして呟く、「哀れな女だな……。あそこで死んでいればこんな思いをせずに済んだものを……。そしてこいつらもだ。お前に会っていないければこんな運命に合わずに済んだ」

そう言う男は、右手の人差し指で死体を指していく。
灰原は男の人差し指を追うように目を動かす。

そしてそこには、（目暮警部！？……。！！……。高木刑事！）

それだけではない。周りには彼女に親しくしてくれた人たちの死体が……。そして彼の死体も……

「！！！！」

シヨックのあまり言葉も出ず、啞然とする彼女を置いておき、目の前の男は話を続ける。

「後悔するなよ。“あの時”楽に死んでれば良かったってなあ」

そう言う終わると男は、自分になぜか背を向けて遠ざかっていく。そして灰原は、先ほどの言葉をカセットテープの巻き戻しのように、何度も頭の中で繰り返す。いや、正確にはその言葉が何度も聞こえてくる。頭の中に響き続ける。

（嫌……）

言葉で出ない悲しみと後悔の気持ちは、代わりに彼女目から出てくる。自分の両頬に生温かいものが、伝わり床に落ちていった。しかし、今の彼女にはその感覚も分からない。

ナニモカンジナイ。

ナニモミエナイ。

（ワタシナンカ……）

「……。ここで目が覚めるんだっけな……」

俺は灰原の夢を思い出し、頭の中でイメージしてみた。

・・・分からねえどんな夢なんだろうな・・・俺には分からねえが、悪夢をいつも見てるんだよな・・・

俺は改めて彼女の寝顔を見る。そこには、悪夢に魘うなされて苦しむ彼女ではなく、幸せな夢を見ているかのような、『幸福』という言葉で表現できる表情があつた。

幸せな顔しちまいやがつて、こんな表情つくるんだな・・・俺は見たことねえや。

そして、俺は彼女のその寝顔を崩さないように、静かに部屋を後にして眠りについた。

翌日

「博士おはよう」

俺は起きて、まだダルイ体を持ち上げ時計を見た。

七時半か・・・

今日は日曜日。いつもならこの時間は、学校へ行くために準備を行っているが休日ということもあり、俺はまだ寝ることにした。しかし、寝ることはできなかった。寝付こうとした瞬間、この家の主である老人に、「新一まだ寝るのか？良くないぞ。休みだからと言って、ダラダラしては！」と言われ仕方なく、ベットから起き上がる。

確かに彼の言うことも一理あるし、親戚とは言え、人の家でダラダラしているのは“礼儀知らず”である。俺は起き上がった後、ダルイ体を持ち上げて、目の前の主に、「おはよう、博士」と挨拶した。彼も、「おはよう、新一」と挨拶を返した。挨拶を交わした後、俺は洗面台に向かい歯磨きを始めた。歯磨きをしながら、俺は考えごとをしている。

・・・アイツよく眠れたかなあ・・・

アイツとは、俺がこの家に泊まる原因を作った人物。今は地下室にいるはずだ。

歯磨きを終えた俺は、居間に移動した。そして正面の階段を見つ

める。

そうすると、頭の中に一気に、彼女に対する悩みが押し寄せてきた。

・悪夢は見てないだろうか？・・・

・よく眠れただろうか？・・・

・・・それとも夜中に目覚めて、また研究をしているんじゃないか？・・・

そんな俺の様子に博士は気が付いたのか、「どうした新一。朝からそんな不安そうな表情をして・・・」、「と話しかけてきた。

不安そうな表情。俺はそんな表情をしていたのか？

確かに灰原のことは心配だ。しかし、顔にもでるほどだったのか？・・・

俺は思わず博士に気持ちを伝える。

「心配なんだよ。灰原のことが・・・眠れているか？とか、夜中に目覚めて研究に没頭しているんじゃないか？とか、そう言う気持ちが溢れてくるんだよ」

俺は博士に自分の気持ちを伝えた。

そして博士は、「哀君のことか・・・」、「と呟き、それ以上は俺を気遣ってか、それとも掛ける言葉が見つからなかったのかは分からないが、言葉を発することはなかった。

そして数分後、階段のほうから足音が聞こえた。

パサッパサッ

足音から推測するに、階段を昇ってくる人物はスリッパを履いていることが予想できる。そして、この家に今いるのは、自分と博士ともう一人。そう、俺の不安な気持ちを作っている原因。灰原哀。

「おはよう、博士、工藤君」

階段を昇りきった彼女は、博士と俺に挨拶をする。そして博士は、「おはよう哀君」、と当たり前のように挨拶を返す。

俺も、「おはよう、灰原」、と挨拶を返す。

挨拶を交わした灰原は台所に向かい、朝食の準備を進める。

そしてこの時俺は不安から解放されていた。

「哀君。表情が生き生きとしとる。いい顔つきじゃ」

博士はそう呟いた。そう、挨拶を交わしたときの彼女の表情は生き生きとしていた。まるで天使のように、そして、そんな彼女がとても美しく見えた。

そんなことを考えていると台所ほうから、「二人ともご飯できたからさっさと食べちゃって!」、と言う声が聞こえてきた。俺はそのまま博士と共に席につき、朝食の置かれたテーブルを三人で囲んだ。博士の朝食だけ変わっていたのが気になったが……。

朝食を済ませた俺は、そのまま推理小説を読み始めた。

博士はパソコンと睨めっこしている。

灰原は相変わらず地下で作業を行っている。しかし、昼食には姿を見せたため、俺は安心した。

昼食を済ませた俺は、もうしばらく居ようと思ったが、「もう帰りなさい」と灰原に言われる。

当然俺は、「いや、でも……」、と聞き返した訳のだが、「私ならもう大丈夫よ。それに探偵事務所の“あの子”が待ってるはずよ」、灰原がいう“あの子”とは誰を示しているのか、想像するに足らない。

しかし、なぜか今は彼女のことよりも、目の前の少女のことが心配でたまらない。

そんな俺を気遣ってなのか、今まで俺達の会話を黙って聞いていた博士が、「大丈夫じゃよ」と言ってくる。安心という笑顔を浮かべながら。

その笑顔を見て俺は妙に納得させられ、自分自身に、「大丈夫だ。安心しろ、俺!」、と言い聞かせながら、帰り支度をし、玄関に向かった。

玄関では博士と灰原が見送りに来てくれた。しかし、博士はともかく、灰原が来てくれるとは思ってもみなかった。

「色々とすまなかったな、新一。ありがとう」

改めて博士は俺に礼を言った。

「いいって。俺も色々世話になたったからな」

俺はそう博士に言い返した。

「またな灰原。また学校でな」

俺は灰原にも声を掛けると彼女からは、「ええ」、と言う二文字の素っ気ない言葉が返ってきた。俺は改めて心の中で、可愛くねえー！、と思い、阿笠邸を後にした。

俺はそのまま寄り道せずに帰路についた。

そして、毛利探偵事務所という看板が見えたたん、その事務所に入っていく一人の男を見かけた。茶色のコートに同色の帽子、太り気味の体型をして、事件現場で良く合うその男はいつも事件現場で見せる刑事の眼差しをして、事務所に続く階段を昇って行った。

俺はその刑事が事務所の中に入るのを確認すると、何の話をしているかが気になり、盗聴を開始した。

悪夢と解放（後書き）

これedyouやく次話から、『警察と謎』の続きが始まります。

さてと、どんな展開にしていこうかな・・・。

評価、感想待ってます。

浮かぶ疑惑（前書き）

さて、今回からは時間軸を戻して、
目暮警部たちが捜査を開始します。

では、どうぞ！

浮かぶ疑惑

コナンの帰宅という思いもよらない事態が起こり、やむを得ないと思いつながら目暮は話しを進めた。本来なら、ここでコナンには別の部屋に移ってもらうか、コナンが居ない時に、改めて話しをするかという方法を取りたいのだが、この“好奇心旺盛”な小学生がここで引くとも思えないし、今日話しを一旦中止にし、別の日に話しをしようとしても、この少年は話しを聞きに来るだろう。伊達に目暮も、小五郎も、そして蘭もこの少年のことを見ている訳ではない。“盗み聞き”をするような少年だ。きっとこの事件に、『何らかの形』で関わりを持つてくるに違いない。そうなれば、自分達が何と言おうとも最後の最後まで付き合ってくるだろう。今までもそうであったように……。そして、その感情はこれからも無くなることはないだろう。

コナンを除く三人は、頭の中で同じ意見を持ったのか、追い出すことはしなかった。

因みにこの時目暮だけは、今まで彼が事件に関わると、『スムーズ』に解決できることを思い出し、彼に少し“期待”を持っていた。目暮は落ち着き始めた部屋の空気を察して、続きを話し始める。

「では、話を続けよう……」

その言葉を合図に、三人の視線が目暮の目に向けられる。

「四つ目の考え……。それは“弱み”だ」

「“弱み”っすか？」

またしても、目暮の思いもよらない発言に小五郎が聞き返す。

コナンは自分でも気付かないうちに、顔の表情が真剣なものへと変わっていった。

「そう、一つ目の考えで圧力の話しをしたね？それと似たようなものだ。この事件に関わっているあるいは、捜査が進められると立場が危つくなる人物が、警察の“弱み”を握っており、それをダシに

して捜査を打ち切りに仕向けたということだ」

「なるほど・・・」

小五郎が納得したことを匂わせる言葉を発する。

「これがワシの考えだ。因みにこの考えは、佐藤君と高木君にも話し、二人ともワシ考えに同意してくれている」

「ねえ・・・警部さん」

今まで話しを聞いていたコナンが、目暮に質問しようとして話しかけてくる。

「なにかな？コナン君？」

それに対し目暮は、子供に話すときに使う高い声色と、優しい言葉使いで返事をする。

「今佐藤刑事達は、どこでなにをしているの？」

その疑問は小五郎も蘭も感じていたことであり、小五郎が蘭の言葉も代弁するかのようになり、「そう言えば・・・そうだなあ」と口にする。

その言葉を聞き終えた目暮は、三人の疑問に答える。

「うむ。今佐藤君と高木君には、彼ら独自の方法で捜査を進めてもらっているよ。何かあればワシの携帯に連絡がくるはずだが・・・」

目暮が、『くるはずだが』の『が』の言葉を言い終えた直後、彼の携帯が、『ピリリリッピリリリッ』と、着信を知らせる音は発する。それに反応した目暮は、コートのポケットから携帯を取りだし、電話の相手を確認して、「失礼」と小五郎達に言い通話ボタンを押す。

「はい、目暮・・・」

「はい・・・はい・・・」

目暮は電話の話し相手の言葉に、納得のしているような返事を続けている。

その様子を三人は黙って見ている。

「・・・なんですと！・・・」

突然声を上げた目暮に、三人は驚きの表情を見せ目暮を見つめる。

「分かりました！すぐに向かいます！」

そう言い終えた目暮は、携帯をすばやくコートのポケットにしま
い立ち上がり、その様子を先ほどから驚きの表情で見ている三人に
言う。

「管理官からだ。毛利君！君も来たまえ！殺しだ！」

「！！分かりました！」

その言葉に再び一瞬驚いた小五郎は、事務所の扉を早歩きで出て
いく目暮に続く。

「おじさん、僕も行つていい？」

コナンのその言葉に反応した目暮と小五郎が、振り返りコナンを
見ながら小五郎が言う。

「バアアカ！！ここからは先は大人の仕事だ！ガキはスツ込んでろ
！！」

小五郎はこうは言っているものの、実際のところ『子供を危険な
事件に巻き込みたくない』という、考えがこのような『乱暴な言葉』
として表れている。なんとも“不器用な優しさ”である。

しかしこう言われるのも、ここでコナンが、「分かつてるよ」
でも僕が行つたら、また意外なことに気付くかもよ」「と言うのは
いつもの事である。

そしてそんな様子を見ていた蘭が、「いいじゃない。コナン君い
るんなことに気付くし、連れてい居てみれば？」とコナンの『行
きたい』という気持ちを煽るのも、いつもの事である。

「ったくしゃ〜ねな〜。邪魔だけはすんじゃねーぞ！」

「うん」

小五郎が仕方なく了承すると、コナンもこれまた“いつも通り”
に、子供らしく可愛く返事をする。もちろん顔に好奇心という笑顔
を浮かべながら・・・。

そして一行は小五郎が借りたレンタカーに、運転席に小五郎、助
手席に目暮、後部座席の小五郎の後ろ側に蘭、反対にコナンを乗せ、
目暮が言った現場に向かって走り出した。

「また銃殺か・・・」

道に横たわる遺体を見て、目暮が呟く。

「ここは昨日、二人の男が“殺し”を行った場所。杯土町の『とある裏路地』である。」

「被害者は木村武さんきむらたけし四十歳、職業はこの杯土町にある酒場、BAR HIDOでバーテンダーをしていて、自宅は杯土町の〇町目だそうです。鑑識さんの報告によると、死亡推定時刻は昨日の午後十時〜十時半の間、死因は頭部を銃弾が貫通したことによるもの。即死ですね・・・。」

高木が上司の目暮に、今まで集まった情報を報告する。

「貫通した銃弾は？」

「はい、この壁に減り込んでいたものを取りだし、千葉が調べてくれています」

事件現場に目暮と共に来た、小五郎が高木刑事銃弾のことを問い、高木が右手人差し指で、銃弾が減り込んだと思われる場所を示しながら、それに答える。

一方、コナンは刑事達の目を上手くやり過ごし、独自に捜査をしている。

蘭は現場の『立ち入り禁止テープ』の向こう側から現場を見ているが、その目には遺体は入っていない。

被害者は目を見開き、口を『これ以上開いたら裂けてしまうのではないか』と、想わせるほど開いて、その顔には戦慄を覚えたかのような状態で、横たわっている。それこそ今にも、「助けてくれ・・・」、と喋りだしても不思議じゃないほどに・・・。そんな被害者の“あまりの表情”に蘭は思わず目を背ける。因みに、『目を背けたい』と思っているのは彼女だけでない。目暮も、高木も、小五郎もである。しかし、刑事や探偵という職に就いている彼らは、そんなことは許されない。嫌でも遺体を見て、手掛かりを見つけ、事件を一秒でも早く解決しなければならぬからだ。

「目暮警部！」

そんなことを考えていると、銃弾の調査を終わった千葉が、報告のために目暮に近づく。

「おお！千葉君。どうだったね？」

呼ばれた目暮は、声のしたほうに振り向き、報告を聞こうとする。「はい。銃弾が7.62mmであることから、使用された銃は“トカレフ”であると思われます」

千葉は、『トカレフ』という言葉強調しながら目暮に報告する。
(トカレフ!?)

その千葉の報告の中に、『トカレフ』という単語があったことに、コナンは驚愕する。

(まさか・・・)

実はコナンの頭の中には、トカレフ「あの男という方程式が、出来上がっているよなものなのである。」

コナンは考えるポーズをして、頭の中で考え始める。

(トカレフ・・・、目撃者なし・・・、そして証拠なしか・・・。奴らの犯行に似ているな・・・)

コナンは頭の中で、この犯行が自分が追っている“者たち”の犯行に似ていることから、まさかという考えに至っていた。

(それとも単なる偶然か・・・?)

まさかという考えに至ったコナンは、“偶然”の犯行という考えに変更しようとした。確かに“偶然”が重なって、この状況を生み出したのかもしれない。しかし、念には念を入れ『前者』の考えを捨てずに捜査を続行した。

コナンがそんな考えに頭を悩ませて、夕日の光が裏路地を照らしたころ、目暮の携帯が着信を知らせる音を発した。

浮かぶ疑惑（後書き）

さてさて、どうでしたか？

今回出てきた『バー』の存在と、『木村』という名前はアニメの『標的は毛利小五郎！』をモデルにしました。理由は、個人的にあの話が好きだからです！

それと、『ネタばれ』になってしまうかもしれませんが、その内『服部』、『キッド』と言ったキャラクターも出していく予定です。

あと、死亡推定時刻は『勘』で書いたので、違和感を持つかもしれません。

私、そういうことはよく分からないので……。

では、評価お願いします！

管理官と四人（前書き）

ふう〜。ようやく十一話です。

今回は刑事達を中心に書いてみました。

では、ごっぞー！

管理官と四人

携帯電話が音と振動を発したことに気が付いた目暮は、「失礼」、
と言い小五郎達から少し離れた場所に移動しながら、コートの手
ツトに入れていた携帯を取りだし、移動し終わったところで、相手
の名前を確認して電話にでる。確認した名前は『松本管理官』であ
った。

「もしもし」

すでに電話の相手が上司だと言うことを知っているため目暮は、

「はい、目暮」、とは言わずに電話にでた。

「目暮か？」

予想通り、相手は管理官であった。

「はい。管理官なんでしょうか？」

自分が目暮十三であることが、相手に分かるように返事をしてか
ら、目暮は用件を聞く。

目暮は事件のことを聞かれるのかと思ったら、その用件は意外な
ものだった。

「目暮、今すぐ捜査員を連れて戻ってこい！」

「！！？」

松本が発した言葉を聞き終えた瞬間、目暮は声にならない驚きを見
せた。しかし、当然目暮の姿が見えない松本には、その“驚き”
を知るはずもない。

「どういうことですか！？管理官？」

言われたことが全く信じられないと言うより、この時の目暮の頭
には、今朝のことに関係しているのか？この事件は、という考えが
浮かんできていた。彼が思っている『今朝のこと』とは、松本に、
「捜査を打ち切る！」、と言われた“あの事”である。

しかし、目暮の質問に直接松本は答えずに、「まず帰ってこい！
全ては部屋で話す」、と言い一方的に電話は切られてしまった。

電話を切られた目暮は、どういことが訳が分からずに、『ツーツー』という音が聞こえる携帯を眺めていた。しかし、いつまでも“こうしている”訳にも行かず、目暮は、『捜査を進めたい』という気持ちを押し殺し、高木達のもとに歩を進めた。

一方目暮が電話をしている最中に、捜査現場では進展はなく、いつも、「あれれ〜?」、とか、「おじさん、ここ見てくれる?なんかおかしいよ〜?」、とか言っているコナンも、全く手掛かりが無いこの事件ではおとなしくしていた。しかし、本人の頭の中では、何の手掛かりもない事件、一人の目撃者もない殺し、そして凶器はトカレフ……。似すぎている奴らの犯行に! と言う考えが膨れ上がっていた。もはや、偶然という可能性は彼の頭の中には無く、ここで、「黒い服を着ていた人物が、この路地から出てくるところを見たという目撃者がいます!」、とか言う報告がくれば、コナンの予想は100%になるほどに、考えは膨張していた。

そんな中、『奴ら』のことを考えているコナンや、全然捜査が進まないことに、『苛立ち』を見せ始めている捜査官のところに、電話を終えた目暮が戻ってきた。それに気が付いた、高木は目暮に声を掛ける。

「目暮警部! 電話誰でしたか?」

何となく気になる電話の内容に、思わず高木は目暮に電話の話し相手を聞く。

「管理官からだ」

「管理官? どうして管理官が・・・」

管理官から電話が掛かってきたことに疑問抱き、内容を聞くこととする高木の言葉を目暮の言葉が遮った。

「皆、今日の捜査はここまでだ! 引き揚げるぞ!」

その言葉に、その場にいた全員の視線が目暮集中する。もちろん、考え込んでいたコナンも、捜査を遠くから見ている蘭も、事件のことを話し合っていた千葉と小五郎も、である。

因みに日が暮れていることもあり、野次馬達はほとんど帰路に
いていた。

(捜査が中止? さっきの電話と関係あるのか?)

目暮の言葉を聞いたコナンは、頭の中でそう思っていた。

「なぜですか? 警部?」

「理由は後で話す。あゝあ、毛利君、今日はすまなかつたな。」

冷静に理由を聞こうと、目暮に近づいてきた千葉を、軽くあしら
い、小五郎にお礼の言葉を言った目暮は、そのまま裏路地を抜けた
ところに止めてある、パトカーに向かった。

それに続き、捜査器具を片づけて目暮の後を追う捜査官達を見送
り、小五郎は、コナン蘭に、「帰るぞ」、と言い三人をレンタカー
に乗せてアクセルを踏んだ。

目暮や高木を乗せたパトカーが警視庁に着いたときには、日も落
ち辺りは暗くなっていった。昼を『光の世界』と例えるならば、今か
らは『闇の世界』の始まりである。

地下駐車場に高木は車を止め、乗っていた目暮と千葉が降りたこ
とを確認してから自分も降車し、車に鍵をかける。その鍵を上着の
ポケットにしまい、高木は前を歩いていた二人に、小走りで追いつ
いた。

そしてそのまま三人は“あの部屋”へ……。

コンコンッ

「はい」

「管理官、目暮です」

「入れ」

ノックをし、この部屋の主の許可を得た目暮は、扉を開けて中に
入る。

それに続き、高木、千葉が中に入り、最後に入った千葉が、音を
たてないように扉を静かに閉める。そして、中に入った三人はまず、

部屋に人物が二人いたことを認識する。一人は言うまでもなく、この部屋の主であり且つ、ここに呼ばれる原因を作りまた、捜査の打ち切りを自分達に指示した男。松本清長管理官。そしてもう一人は、ある男に恋心を抱かれ、自分もその男に恋心を抱いている女性。また、捜査一課の男どもの注目の的である美人女刑事。佐藤美和子警部補である。この二人は互いに目を合わせながら、周りに緊迫した空気を漂わせている。そんな空気が扉がノックの音で一時的に解かれる。

佐藤は扉のほうを向き、入ってきた人物を見ると、「警部、高木君に千葉君」、と言う声を上げる。

一方松本は“横目”で目暮達を確認し、椅子に座り腕を組むという姿勢を崩さずに、「来たか、三人とも」、と言う。

それを聞いた佐藤は、再び松本の目を見て姿勢を正す。そしてその佐藤の左に目暮、高木、千葉という順番で並び、彼らも佐藤と同じく、姿勢を正して松本の目を見る。

因みに高木は、なぜ佐藤さんがここに？、ということを知ろうと思っただが、『場の空気』を感じて、喉まで出掛かったその言葉を飲み込む。

話をするという空気を感じたのか、目暮が口を開く。

「管理官、なぜ我々をここに？」

「うむ、目暮。単刀直入に言おう。今回起こった杯土町の殺しだが……」

松本が、『杯土町の殺し』と言った瞬間、目暮、佐藤、高木の頭に嫌な予感が稲妻のように走る。

(まさか……)

三人はそう思っている間、千葉は真剣に松本の目を見て、これから言われることに集中している。

「……手を引け」

先ほどの言葉の続きを聞いた、目暮、佐藤、高木は目を丸くして、その言葉を受け止め、千葉に至っては、一瞬何を言われたのか分か

らないようで、頭に？マークを浮かべ松本の話の話を聞いている。

「またですか！管理官！！」

手を引け、つまり、打ち切ると言う意味の言葉を聞いた目暮は、声をあげる。一方松本は、眉一つたりとも動かさずに目暮を見ている。

「管理官！今度こそ納得できる理由を・・・」

目暮が言い終わる前に、松本が言葉を遮る。

「前にも言ったはずだ。『質問及び理由の説明は認められない』とな」

その言葉に、溢れてくる苛立ちを抑えられなくなったのか、高木が、「管理官」、と少々怒りの感情が含まれている言い方で、松本の視線を自分に移す。視線がこちらを向き且つ、無言なのは、『話を続ける』という意味に解釈し、高木は話し出す。

「管理官。もし、仮にですよ？『このまま捜査を続行します』と言ったら、我々はどうなるのでしょうか？」

高木がその言葉を言い終わると、目暮、佐藤、千葉が一瞬高木を横目で見る。

「それは、当然『業務命令違反』だ。それが“何を意味するか”分かるだろう？」

松本は高木の質問に、何を意味するか、と言う部分を強調しながら答える。

それと同時に松本の目つきが異様なほど鋭くなり、高木は思わず息を飲む。

高木のその様子を、『納得』と解釈した松本は、前回と同様に、椅子を百八十度回転させて、後ろの四人に、「ともあれ、御苦労だった。これで解散だ」と捜査に対する『お疲れ』の言葉と、『退出』の言葉を言って、前回同様、納得できない答えを与えられた三人と一人は、部屋に一礼をし去っていった。

四人が去った後、「すまん・・・」、と言う松本の声を聞くもはいなかった。

「一体どう言うことですか？打ち切りって・・・」

松本の部屋を出て、なぜ彼が『捜査の打ち切り』を指示したのか分からない千葉は、前を歩く目暮に理由を聞こうとしていた。しかし、彼に聞いても分かるはずもなく、目暮は、「分からんよ」、の一点張りであった。そして諦めたのか、千葉はそれ以上聞かなかった。

千葉が質問を諦めてから数秒後、目暮は突然止まり、後ろを付いてくる千葉のほうを向く。

目暮が突然止まったことに驚いた三人も、その場に止まり、自分を見ている目暮に、千葉はその理由を聞こうと目暮に問う。

「な、なんですか？警部？」

その言葉を聞いた目暮は、彼からの言葉を静かになに受け止める。

因みに、千葉の両脇に立っている佐藤と高木は、その様子をじっと見ている。

「千葉君。君はこの件から一切手を引け・・・」

「え！？」

千葉は再び理解するのに、数秒の沈黙を作った。「開いた口が塞がらない」とは、今の千葉のことだろう。

佐藤と高木は、そんな千葉を真剣な目な目で見ていた。

そして、我に返った千葉は目暮に、「どうということですか？」、と冷静な口調で聞く。

佐藤と高木は、目暮がなぜそんな言葉を言ったのかが分かっているように、表情一つ変えずに冷静にその二人の様子を見守る。

「千葉君。どうということも何もない。そのままの意味だよ。もう一度言う、「君はこの件から一切手を引け」」

千葉にしっかりと伝えるためか、目暮は先ほど言った部分を、やたらに強調しながら千葉に語る。

「警部！なぜですか！？管理官も警部も隠し事をして・・・！。一体なにが起こってるんですか！？」

納得できない事ばかり起こる現実には、とうとう怒りを露わにした千葉は、思わず取り乱す。そこにはいつもの冷静な彼はいなかった。そんな千葉を、先ほどから黙っていた佐藤と高木が押さえる。

「落ち着け！千葉」

「これはあなたの為なの！」

『あなたの為』、と言う言葉聞き、千葉は冷静さを取り戻す。

もっともその目には、まだ『怒り』の感情が見え隠れしていたが、

「すまんね、千葉君。理由を教えてやりたいが、今はまだ話すことができないんだ……。ただ、一つ言えることは、今佐藤君が言ったようにこれは君の為なのだ。まあ、今の君には、『自分の為を思ってる言い方』には聞こえんかもしれん。だがいつか、我々がなぜ隠しごとをするのかと言う理由が分かる時がくる！それまでは何も聞かないでくれ……。自分勝手なのは百も承知だ。部下の君に隠し事するのはワシも苦しい。だが、全てが終わったとき、必ず君に真実を伝えると約束する！それまで待っていてくれんかね？」

「……………分かりました。……待ってます警部」

千葉は、目暮が自分を見つめる瞳が、悲しさと優しさに満ちているのが分かった。もちろん納得できた訳ではない。しかし、彼が自分を信じていること、そして、心の底から自分を想ってくれていること、それが、目や耳を通し、心まで伝わり彼を納得させた。そして、自分を見ている高木も佐藤も、目の前にいる目暮と同じ目をしていて。この二人が自分に対してどう思っているかは分からない。しかし、その目が、自分を心配し、そして、自分を想いやってくれていることをものごたてていた。そして、千葉は三人から離れていく、ありがとうございます、と言う気持ちを背中で語りながら……。

管理官と四人（後書き）

えっと、なんか千葉のキャラが変わってるような気がするかもしれないですが、

その辺は『スルー』してくださいw。

話は変わりますが、「この『始まり』というタイトルの話は、いつまで続くのか」という疑問を持つ方もいると思いますが、これで最後にしようと思います。

次話からは、新しいタイトルでスタートしようと思ってます。

では、評価、感想待ってます。

新たな協力者（前書き）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。

今作からタイトルを変更します。

つまり、『第二部』の始まりです！

では、『新たなスタート』をどうぞ！

新たな協力者

翌日

「じゃあお父さん行ってくるね」

「行つてきまゝす」

「ああ、気を付けてな！」

今、探偵事務所から、二人の人物が階段を下りてきた。一人は帝丹高校の制服を着て、美しい黒色の長髪を風に靡かせながら、左にいる小さな少年と話している女性、毛利蘭。風に靡いた長髪を、右手で押さえて微笑むその姿は美という言葉が似合う。

その美女の横にいる小さな少年は、伊達メガネをかけ、赤い蝶ネクタイを身につけ、青いジャケット、白いシャツ、灰色の半ズボンという至つてシンプルな服装で、右にいる女性と楽しそうに話している。彼の名は江戸川コナン、ホントの名は工藤新一。

そんな二人の会話を、後ろからの、「らん！おはよう！」という一声が、会話を中断させて、二人は後方へ顔を振り向かせる。

「あ、おはよう！園子」

「おはよう！園子ね〜ちゃん」

「おお、眼鏡のガキンチョ。おはよう」

(その呼び方がいい加減やめろよな)

その女性は帝丹高校の制服を着用し、茶髪のショートヘアに、カチューシャがトレードマーク、そして、毛利蘭の親友であり、工藤新一の悪友である。挨拶を終えると、その女性は蘭の右側に肩を並べて歩き出す。彼女の名は鈴木園子。鈴木財閥の次女であるが、普段はそれを感じさせないお調子者である。しかし、親友の危機を知ると、どんなことでもやり遂げ危機を救うために行動する、非常に友達思いな女性である。

そんな三人が歩いていると、今度は、「おはようコナン君」、「おはようございます」、「おはよーコナン！」、と元気一杯の声

が前から聞こえてくる。

その声にコナン達は気付き、

「おう！おはよー、オメーら」、と挨拶を交わす。

コナンに続き蘭も、「歩美ちゃん、光彦君、元太君おはよう」、と挨拶をする。

彼らは少年探偵団のメンバーである。

吉田歩美。おかつば頭にカチューシャがトレードマークで、同じ探偵団のメンバーである江戸川コナンに恋心を抱く少女である。

円谷光彦。両親が教師なせいか、誰に対しても敬語を使い、顔にそばかすがある少年である。これも両親の影響なのか、コナン、灰原を除けば、探偵団では博識である。

小嶋元太。“自称”探偵団リーダーを名乗る。小学生とは思えないほど、太っており正直、これ以上太ると、転がった方が早く移動できると思わせるほど。

因みに、元太、光彦は、歩美に好意を抱いているが、歩美はコナン一筋なので相手にされない。

「えっと、あれ？灰原は？」

挨拶を一通り交わした後、コナンはもう一人いないことに気付く。

「ここにいるわよ・・・」

「！！！」

後ろから突然聞こえた声に、コナンは驚き振り向くとそこには探していた彼女が立っていた。

(相変わらず気配が感じらねえ女)

そう心の中で思いつつも、そのまま、それぞれの場所に向かう一行であった。

同時刻 毛利探偵事務所

ピンポーン。

「はい・・・」

事務所で“珍しく”仕事をしている小五郎は、来客のため席を立

ち、扉に歩いて向かう。

因みに、彼がしている仕事の内容は、昨日起こった射殺事件のことである。しかし、警察ですらほとんど手掛かりが、見つからなかったこの事件は難題中の難題で、色々と考えてみたものの、スツキリとした答えはでなかった。そんな事を考えているところに、チャイムが鳴ったのである。

小五郎は、一旦考えるのを中止して扉を開ける。

「!・・・警部殿!」

「またお邪魔するよ、毛利君」

事務所を訪ねてきたのは目暮警部であった。

そして、目暮の後ろに佐藤刑事と高木刑事もいた。警部の後ろにいる二人に目を向けた小五郎に、佐藤と高木は、「おはようございます」「と挨拶をする。その挨拶に対し小五郎も、礼儀として、「おはよう」と挨拶を返す。挨拶を交わした小五郎は、二人を事務所内に通す。

そして、三人が入ったことを確認して、扉を閉めようとしたそのときに、扉が何か押され閉められなくなってしまった。その事に違和を感じた小五郎が、扉のほうへ目を向けると・・・人の手が扉を掴んでいるのが見え、小五郎はほんの一瞬驚いたが、その手の正体を確認するために、扉を再び手前に引いて、そこに立っている人物を視認した。

「初めまして、毛利探偵」

そこに立っていた男性は、小五郎の姿を視認すると、初対面の人間が必ず交わす挨拶をして、口元を緩めて微かに微笑む。

その男性の声に反応したのか、すでにソファに座り、小五郎が座るのを待っていた刑事三名も、その男性のほうへ振り向く。

「・・・えつと・・・どちら様ですか?」

いきなり挨拶をされ、多少困惑していた小五郎は、目の前に居る、履いている長ズボンの両ポケットに、親指だけをだした状態で手をつこつみ、先ほど見せた微笑みの表情を、少しも崩さない青年に、

何者なのかを知るための言葉をかける。

「あゝ！君は確か高校生探偵の・・・白馬探君！！」

今までソファアールから立ち上がり、静かに小五郎達二人の様子を見ていた目暮が声を出す。

「え！？白馬探つて、白馬警視總監の御息の！？」

意外な人物の登場に、その場に居た白馬を除く四人が驚きの表情を見せ、他の三人の『言いたい事』を代弁するかのようになり、高木が声を上げる。

「しかし、君は今海外で活躍していると聞いていたが・・・」

ふと頭を過つた疑問を、目暮は白馬に聞いてみる。

「ええ。まあ、その話は皆さんが落ち着いてからにしましょう・・・毛利探偵、恐縮ですがお茶をだして頂けませんか？飲みながらゆっくりお話しましょう」

「あ？ああ・・・」

行き成り声をかけられた小五郎は、白馬の言うことに納得し、お茶を入れに台所に向かう。

小五郎が台所に向かった後、白馬はソファアールに腰かける。

それを見た刑事三名も、再び腰をかけ直す。

数分後・・・

お茶をお盆にのせて持ってきた小五郎は、四人の前に茶碗を置くと、いつも自分が使っている机の上にお盆を置き、その上に乗っていた自分のお茶を持ち席に着く。

席は、真上から小五郎の仕事用の机を上にながら表すと、ソファアール左側に、小五郎の仕事用の机側から高木、目暮、佐藤の順に、高木の正面に白馬が、佐藤の正面に小五郎が座る形である。

小五郎が座り、お茶を一口くちにした姿を確認した他四名は、自分達も一息つくために、小五郎と同じくお茶を一口飲む。

「うむ・・・。まあまあですね」

お茶を一口くちにした白馬が、口の中にしみ渡った味の感想を述

べる。

正面に座る刑事三人は、「コッコ（確かに・・・）」「」「と、心の中で呟いたような目と表情で小五郎を見ているが、その本人は横に座る、いきなり悪印象を自分に植え付けた高校生探偵を、正面の三人の視線にも気付かないほどに、睨みつけていた。

さて、四人が一口くちにしたお茶を、机に置いたことを見た白馬は、まず、自分がなぜここに居るのかを語り始めた。

「さて、皆さん。まず私のことから話をさせてください」

自分より目上の人間がいるので、白馬は普段一人称として使っている僕ではなく、私という言葉で一人称に使う。

「うむ」

黙っている白馬と、自分を除く三人の言葉を代弁するかのようになり、白馬が返事をする。

そして、その言葉を聞いた白馬は、再び口を開く。

新たな協力者（後書き）

いきなり、人物紹介や『その場の状況説明』で終わってしまいました。

その事をお詫びします・・・。

さてさて、今回から『白馬探』を登場させようと思います。

彼の人物設定は原作と同じです。

因みにですが、白馬が小五郎に、「初めまして」と、言ったことですが、

白馬が小五郎と初対面したのは、『黄昏の館』の事件ですが、この時お小五郎は、『キッドの変装』であったため、初対面今回が初めてです。

* 『黄昏の館』の事件のことをご存じない方は、原作コミック『三十巻』を参照。

では、評価、感想お願いしまーす！！

御子息の理由と美人刑事の報告（前書き）

第二部二話目更新です！

今回語られるのは・・・、それは読んでのお楽しみといじょうです。

それでは、どうぞー！！

御子息の理由と美人刑事の報告

「僕がここに来たのは、最近様子がおかしい父のことを知るためです」

白馬はなぜ自分が、毛利探偵事務所の扉を叩いたのか？ という理由を語りだす。

「お父さんの様子のことって？」

白馬の言葉を耳にした高木が、詳細を尋ねるために白馬に問う。

「ええ。私は日本に帰国してから、暇を見つけてほしい母国の事件を解決してきました。そんな日々を過ごす私の耳に、“ある事件”が飛び込んできたのです」

「ある事件って？」

高木が、白馬が強調するように言った、ある事件のことを聞き出すとする。

「その“ある事件”の詳細は、私よりもあなた方のほうがご存じなはず……」

「え？」

彼の言うある事件は、白馬よりも自分達が知っているとということに、今一つそんな事件が頭に思い浮かばない高木は、声を上げた後顎に手を当てて考え始める。

そんな高木の様子を見て、今まで真剣な眼差し、かつ真剣な表情で白馬の話聞いていた佐藤が、思い当たる事件を口にする。

「もしかして、あなたが言うあの事件って、今私達が追っている……」

「そう、その事件ですよ」

佐藤の頭の中に過った事件を予想した白馬は、彼女の予想が間違っていないことを言い当てる。

「じゃあオメエがここに来た理由ってのは……」

小五郎が、隣に座る白馬に目を見開きながら言い放つ。

「ええ。実は私も、あなた方と同様にこの事件を独自に捜査してましてね……。まあ、独自にと言っても、最初は私も警察の協力の下で、捜査をしていたのですが、なぜか突然、協力要請に応じなくなりましてね……。そんな警察に不信感を抱き、探偵の勘というやつで、これは何かあると思った私は、父にこの事を言ったのですが……。」「

「納得できない返答が返ってきたってか？」

お茶を飲みながら、白馬の話を聞いていた小五郎は、白馬の顔が険しくなっていくのを見て、父親から返ってきた答えが、彼にとつて芳しくない答えというのを察した。

「はい。父は、私がこの事件のことを話始めた瞬間、『探、その事件に関わりを持ってはならん』、という言葉をつき、それ以上、口を聞いてはくれませんでした……。」「

それを言い終わると、白馬はお茶を二口飲み、続きを話し始める。「無論、私は父の回答に納得いかず、父の目を盗みながら、この事件を追うことにしました……。しかし、やはり一人で、しかも、警視總監の父の目を誤魔化しながら捜査するには限界がありました。そこで私は、この事件を疑問に感じ、私と同じく、捜査をしている方達を探すことにしたのです」

ここまで言い終わると、白馬は再びお茶を一口飲み、一息ついてから続きを話し始める。

一方、彼を除く四名は、白馬の話を、お茶を時たま口にしながら、真剣そのものの表情で聞いている。

「そこで私はまず、事件が起きた杯土町の廃ビルに向かいました。しかし、発生間もないため、警察の方がいることに気付いた私は、足を踏み込まずにその場を去りました……。その後、事件の調査に進展が無かった私は、杯土町のホテルに宿泊し、夜を明かしました。翌日、ホテルで午前中の時間を使い、これからのことを考え、昼食を取った私は、このままホテルに居ても仕方ないと思い、外出することにしました」

ここで白馬は、休まず口を動かしたせいか、口に疲れが溜まるのを感じて、目の前に置いてあるお茶をくちにして、口の中を潤す。

「外に足を運んだ私は、まず目撃者がいないかどうかを、廃ビルの近くに住んでいる方達を一人一人まわりました。しかし、事件が夜中だったため、これと言った収穫はまったく……。すでに日が落ち始め、夕日の橙色が町を照らすころ、私はホテルへ帰路についていました。そこで“あるもの”を目撃したんですよ……」

「ん？ “あるもの”とは？」

あるものという言葉を使った瞬間、白馬の顔が明らかに、喜びに変わったことに気付いた目暮は、白馬にそのことを問う。

「捜査をしているあなた方の姿ですよ」

「我々の姿？」

「ええ。昨日裏路地で起こったあの殺人事件。実は、その野次馬の中に私も居ましてね……。電話を終え皆さんの元に戻った。警部の顔が気になり、『これはなにかあるな』と思った私は、今日ホテルを出て、ここに向かったという訳ですよ。この事件には、毛利探偵が関わっていて、そして毛利探偵と目暮警部は、なにか“繋がり”があるんじゃないか、と思ひましてね。まあ、ほとんど“勘”でしたが……。先ほど私が言った、“あの事件”という言葉に反応したあなた方を見て、確信しましたよ、『あなた方はなにかを知っているよね』」

「そういうことだったか……」

白馬の話聞き終えた目暮は、納得の言葉を呟く。

同じく高木、佐藤、小五郎も、納得したと白馬に分かるように、首を縦に振る。

「では、教えて頂けませんか？ 目暮警部。あなた方が掴んだ情報を……」

全てを話終えた白馬は、納得している目暮に、「情報を教えてくれ」と頼む。

「うむ、事情は分かった。いいだろう、君も貴重な協力者の一人だ

「からな・・・」

「ありがとうございます」

情報を教えてくれる目暮に、白馬は心から感謝の言葉を述べた。

「なるほど、そう言うことですか・・・」

全てを聞き終わった白馬は、顎に右手を当てながら、深刻な顔をし呟く。

「まあ。そう言うことだ。一言で言えば疑惑と謎のオンパレードだな・・・」

白馬が呟いた後、小五郎は足を組みながらそう言い放つ。

「では、今度はワシらがここにきた理由を話そう」

白馬の話が終わったことで、今度は目暮が話始める。

「君達に言いききたことは二つだ。まず、昨日捜査に関わっていた千葉君だが・・・、捜査から手を引いてもらった」

「!!!」

その言葉を聞き、小五郎は驚きの表情こそしてないものの、目を見開いた。

白馬は、千葉？聞き覚えが無いな・・・、警部の部下かな？、と言ったことを思い、その千葉なる人物が、どういう人物なのかを確かめるために、目暮達に問おうと思っていたが、今は、場の空気を読み、踏みとどまった。

五秒ほどの沈黙の後、頭を冷静にした小五郎が、「妥当な判断でしような・・・」、と言い放つ。

「千葉君には悪かったけれど、巻き込む訳にはいきませんでしたから・・・」

佐藤が、当時の状況を思いだしたのか、その瞳に悲しみを載せて語る。

同じく高木も、佐藤と同じ目をして俯いていた。

そんな場の空気から、誰も口を開かない状況の中、話を進めようと小五郎が口を開く。

「で？警部殿。二つ目は？」

その言葉に反応した目暮は、二つ目のことを目の前にいる二人に伝えるため、話し出す。

「二つ目のことは……、佐藤君、頼む」

「はい」

佐藤刑事が返事をすると同時に、小五郎、白馬の両者の目が、佐藤の瞳を捉える。

「二つ目の事は、私が昨日掴んだ、五十嵐拓也さんの詳細を伝えるためです」

そう、実は杯土町の廃ビルで発見された五十嵐の身元は、免許証から大抵のことは分かっていたが、氏名、誕生日、住所以外なことが分からず、しかも、捜査が打ち切られてしまったため、調べたくても、調べるチャンスがほとんどなく、ようやく昨日、佐藤が調べて詳細が判明した。

因みに、昨日彼女が管理官の部屋に、目暮達よりも先に居たのは、その極秘捜査のことを不審に思った松本が、彼女が今まで、どこでなにをしたのかを吐かせる為である。幸い、佐藤の必死な演技によつてバレることはなかった。

「では、報告します」

そう言った彼女は、懐から警察手帳を開き、そこに書かれていることを読み上げ始めた。

「昨日、杯土町にある五十嵐さんの自宅にお伺いしたところ、彼の母である、五十嵐広美さんが教えてくれました。拓也さんは、杯土銀行で十年前から働いていたようです。なお、仕事面や家庭面で不安はなくまた、誰にでも優しく丁寧接することから、同僚からの評価も高かったようです。そのせいか、銀行の従業員達は、彼のことを悪く言う人は一人もいませんでした。因みに彼は、不眠症にかかっていたようです。そのため、夜眠れずに、外出することが多々あったそうです。彼が犯行当時外出したのはそのためと思われるます。以上です」

手帳に書かれていることを全て読み上げた佐藤は、手帳を閉じて懐にしまった。

「つまり、恨みの線はないということですね？」

顎に右手を当てながら、佐藤の話を聞いていた白馬が、思ったことを口にした。

「ええ。そうなるわね」

手帳をしまい終わった佐藤が、白馬の質問に答える。

「じゃあ残るは木村さんだけっスな」

「ああ、我々もこれから彼の自宅に向かおうと思っていたところだ。君達も来るかね？」

小五郎の発言に目暮は答え、その目暮の言葉に白馬が、「もちろん」と小五郎が、「付いていきますよ警部殿!」、と言い五人は事務所を発った。

御子息の理由と美人刑事の報告（後書き）

今回のポイントは、忘れ去られていた？『五十嵐氏』の、
身元が判明したことですな。

なお、小五郎と白馬を組ませたのは、
原作には今のところないからです。

評価、感想お願いします！

帝丹小の二人と木村邸の六人（前書き）

今回は始めて、帝丹小学校のことを書きました。

後半は、木村邸での出来事を書きました。

では、そうぞ！

帝丹小の二人と木村邸の六人

キーンコーンカーンコーン。

「はぁーい。じゃあ今日はここまで、次は算数だから教科書、ノートをだして待っていてくださあい」

「はーいー!!」

小五郎達が事務所を発った頃、とある学校のとある教室では、女性教師の授業終了の言葉とチャイムを聞き、生徒達が元気よく返事をしていた。それこそ、外まで聞こえるほどに。

しかし、この教室には二名、他の子供たちとは全く違った雰囲気、全身からだしている生徒が存在する。一人は窓側から数え三列目、その列の前から四番目の席に座る、茶髪でウェーブという特徴的な髪形をしている少女、灰原哀。彼女は今の国語授業を、このクラスの担任である小林澄子の授業を、彼女のほうを見て、机の上に教科書やノートという勉強道具をだして真面目に聞いていた。もう一人は、その少女の右の席に座る、伊達メガネをかけた少年、江戸川コナン。彼も灰原と同じく、勉強道具をだしてはいるものの、時々たま生あくびをしたり、周りを目だけでキョロキョロ見るなど、勉強道具はだしてるだけというのが、一目瞭然であった。そして、そんな姿を小林に見つかり、

「江戸川君！ちゃんと授業に集中しなさい。・・・もう少しは隣にいる灰原さんを見習ったら？」

その言葉に生徒全員の視線が彼へ飛び、笑いがとんだことは言うまでもないが、その見習いの対象となっている灰原さんが、真面目なのは外見だけということ、小林は知る余地もなかった・・・。

そうここは帝丹小学校、一年B組。

そして現在、授業と授業の間の休み時間である。生徒達は友達と話したり、次の授業のために、予習をしようとする生徒がいたり、

やることは様々である。

因みにコナンは、この二つのどちらにも当てはまらず、自分の席に座りながら考え事をしている。その内容はもちろん昨日の殺人事件である。そして、その事件に関わりを持っていることが予想される、組織のことである。まあ、今の彼の場合、前者の考えよりも、後者の考えのほうが強い。

そんなコナンの様子を、隣の席から横目でチラチラ見ていた灰原は、気になるという気持ちを抑えきれずに、席に座ったままコナンに話しかける。

「どうしたの？江戸川君。さつきから黙ったままだけど・・・」

その灰原の言葉に一旦考えるの止め、コナンは席に座ったまま、顔だけを灰原のほうへ向けて、笑顔で返答する。

「ん？いや・・・何でもねえーよ」

「何でもない訳ないでしょ？明らかに考え込んでたわよ？」

「フツ・・・。ホントに何でもねえーから、気にすんな」

これ以上聞いても答えてくれそうにない、そう思った灰原は聞くことを諦め、読んでいた医学の本に、再び視線をおとす。

そして、キーンコーンカーンコーン、と次の授業の始まりを合図するチャイムと同時に、小林が教室の前の扉を開けて中に入り、「皆！席についてー」、という言葉で全員が着席して、授業が始まった。

灰原の、気になるという気持ち、そしてコナンの、昨日から頭の中から離れない考え事を載せて・・・。

場所は変わり、ここ、杯土町の〇丁目の木村邸前。

「ここですね、彼の自宅は・・・」

「ああ。行くぞ」

小五郎が運転するレンタカーに、助手席に目暮、後部座席の運転席後ろに佐藤、佐藤の左隣に白馬、そして白馬の左隣に高木が座る状態でここに来た。

因みに、今木村邸に向かっているのは、白馬と小五郎である。なぜなら、警察がここに来たことがもし上層部にバレれば、今現在、車の中で待機している三人の未来は、最悪の方向に向かうからである。

なお、佐藤の場合は女探偵を装うことで、五十嵐のことを調べた。ピンポーン。

「はい」

小五郎がチャイムを押すと、間をおかずして中から女性の返事が聞こえ、玄関に駆け寄ると思われる、ドタドタという足音が聞こえた。そして、その人物が玄関の扉を開け、小五郎と白馬に視線が合うと、二人はその女性に向かって、軽く会釈をした。

「突然お邪魔してすみません。私は、私立探偵をしている毛利小五郎と申します」

「え！？毛利ってあの『眠りの小五郎』の？」

「はい。その毛利です」

「まあ、お会いできて光栄です」

女性は、有名人と会えたという喜びを顔に満々に浮かべながら、小五郎と握手を交わす。

「私は木村奈津美。他界した夫、木村武の妻です」

奈津美は先ほど小五郎に向けた笑顔とは違い、悲しい表情を浮かべながら、自己紹介をした。そんな彼女を見た小五郎と白馬は、まだ彼女の心の中には、夫の死を完全に受け入れられてない、ということを感じた……。

自己紹介が終わり、元の表情に戻った彼女は、小五郎の後ろにいる青年に気が付くと、「こちらは？」、と小五郎に尋ねる。

「ええ。紹介します。彼の名は木場司。あたしの助手をしています」
そう小五郎から紹介された白馬は、奈津美に近づき、「木場司です。以後お見知りおきを」と言い手を差し伸べる。

そして、その手を奈津美は取り、お互い握手を交わした後、「こちらこそ」、と奈津美が言い終わり、奈津美は二人を中へ通した。

因みに、白馬が偽名を名乗ったのは、目暮達とほぼ同じ理由で、自分がここに来たことが警察、特に上層部の耳に入れば、当然父親の耳にも入り、最悪の場合、行動を制限される恐れがあるからである。もつとも白馬は、軽い変装をして行こうかと思っただが、そんな事をすれば余計に怪しまれるのではないか？ という疑問が頭を過り、敢えて素の状態で会うことにした。

家の中へ案内された二人は、居間に通され、ソファアに座るよう促された。ソファアに腰掛けた二人は、奈津美が飲み物を入れた台所に向かった後、この部屋に視線をまわす。特に怪しいものはない。言わば至って普通の家である。外も内も良しもなく悪くもなくといった感じだ。

「お待たせしました」

飲み物を入れ終わった奈津美が居間に戻り、二人の前にあるテーブルに麦茶を置く。そして、自分も二人の真正面にあるソファアに腰掛け、自分の麦茶を目の前のテーブル置き、その三人分の麦茶を載せていたお盆を、膝の上に置いた。

小五郎、白馬は麦茶に口を付け、喉を潤す。

そして、彼らが麦茶をテーブルに置くところを、確認した奈津美は口を開く。

「毛利さん、今日ここに来られたのは、主人のことですよね？」

「はい。あたしはその事件を追っています。そこで木村さん、ご主人の様子が最近おかしくなったことはありませんか？」

小五郎はまず、武の様子が変でなかったかどうかということをおう。

白馬は、両手を軽く握り拳にして、両膝の上に載せて背筋を伸ばしながら、奈津美の顔を、彼女の心まで見透かすかのような、鋭い眼差しで見ている。これは、彼女が偽証してないかどうかを見分けるためである。嘘をつくとき、人は大抵顔にでるものだ。瞬きが多くなったり、目が泳いだりと、しかし、今のところ彼女に、そう言

う様子は見られない。

小五郎の質問に、「いえ。主人はいつも通りでした」、と奈津美は答え、麦茶を口にする。

「そうですか……。では、不審人物を見たりとかは……。？」

「いえ、主人がそのようなことを口にした記憶はありません」

奈津美は顔を横に振りながら、なかつた、という言葉強調するように小五郎に伝える。

「ただ……」

その奈津美の言葉に小五郎と白馬が反応し、小五郎は彼女が何を言いたいのかを知るために、先を促す。

「ただ……なんつスカ？」

「二週間前くらいだったかしら……。この家の前に、黒い車が止まっていたことがあつたんです」

「黒い車ですか？」

今まで彼女を鋭い眼光で見っていた白馬は、その目を維持したまま、彼女に確認のための言葉を言う。

「はい。それもその日だけじゃなかつたんです……。次の日も、その次の日も、それが一週間ぐらい続いたかしら？」

奈津美は突然言葉を発した白馬に、一瞬驚きはしたものの、すぐに白馬の目を見ながら回答した。

「その黒い車は、どのくらい止まっていたか分かりますか？」

小五郎がその車の詳細を聞くため彼女に問う。

「はい。よく覚えてます。朝の八時〜夕方の四時くらいまで、日によつて誤差はありましたが、だいたい四時くらいになると走り出します」

(間違いない、その車だ)

小五郎と白馬は、思ったことが同じことを確認するように、互いに目を合わせ、再び奈津美に目を向ける。

「奈津美さん。その車の特徴を教えてくださいませんか？」

「え？特徴ってことはもしかしたら、その車が主人が亡くなったこ

とに関係してるんですか!？」

奈津美は少々取り乱しながら、小五郎に言い放った。

小五郎はあくまで冷静を保ち、

「いえ、まだ分かりません。ただその車が、この事件に何らかの関わりを持っている可能性は『零』じゃないということですよ」

小五郎の話聞き、奈津美は冷静さを取り戻し、車の特徴を話し始めた。しかし、その特徴は大した情報ではなかった。

「ナンバーは分かりませんでした。窓はスモークガラスだったようで、中に居る人の顔は見えませんでした。ただ、うつすら人影が二つほど見えました。運転席と助手席に」

「車種は分かりませんか？」

奈津美が言い終わり、一秒ほどの間を開けて小五郎が問う。

「いえ。私、車の知識はほとんどありませんから・・・」

奈津美は、自分の非力さを痛感したのか、申し訳ないとも語ってるかのような瞳をして、小五郎の目を見ながら言った。

「そうすっか・・・」

小五郎は残念そうに肩を落とす。

小五郎のそんな様子を、一瞬横目で見た白馬は奈津美に、「その車はよく見かける型でしたか?」、と問う。

すると、奈津美は先ほどの目と変わらない目をしながら、白馬を見て、「いえ。あんな型の車は見たことありませんでした」、と質問に答える。

それを聞いた白馬は、彼女の目を知ってか知らずか、微かに微笑んで、「ありがとうございます」とお礼の言葉を述べた。

「では、今日はありがとうございます。またお話を伺うかと思いますが、その時はよろしくお願いします」

白馬はお礼の言葉を再度述べた後席を立ち、彼女に一礼してから、「行きましょう。毛利さん」、と言い、小五郎も笑顔で、彼女にお礼の言葉を言って、木村邸を後にした。

帝丹小の二人と木村邸の六人（後書き）

白馬の偽名や、木村氏の妻の名前は『その場の思いつき』です。
なので、変かもしれませんが、まあお気になさらずにw。

私自身、ネーミングセンスがまるでないものですから・・・。

では、評価、感想待ってます！

不審車と不審者と事務局（前書き）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。

さてさて、今朝このサイトを開いたところ、

“とあるユーザー”さんから感想を頂きました。

ありがとうございます！

えっと、この感想に、「何話くらいで完結？」「、という質問がありましたので、この場を借りてご返答させて頂きます。ぶっちゃけ、何話で完結という予定はありません。

五十話かもしれないし、百話かもしれないし、それ以上かもしれない。

タイトルには、『黒の組織壊滅！』と書いてありますが、壊滅後のストーリーも書くことと思っています。

まあ、かなり『適当な答え』かもしれませんが、この質問の答えは『分からない』です。

では、本編をどうぞ！

不審車と不審者と事務局

木村邸を後にした小五郎と白馬は、木村邸の前に止めてあるレンタカーに、小五郎が運転席に、白馬が助手席の後ろの、後部座席に乗車する。

「どうだったね？毛利君」

車の中で待機していた、目暮、佐藤、高木は、目暮の言葉と同時に小五郎を見る。

「ええ。彼女の証言によると、二週間ぐらい前に、この家の前の道に黒い車が止まっていたようです」

「黒い車？」

「ん？ああ……。その車何かあるなあ……。必ず、朝の八時にここに止まり、夕方の四時ぐらいになると、この場を去って行くそうだ。それが、一週間ぐらい続いたそうだ……。」

高木が黒い車という言葉に反応した言葉を言った後、小五郎は奈津美から聞いたことを伝える。

「付け加えると、スモークガラスで自分達の姿を隠していたようですよ。ナンバーは奈津美さんは見ておらず、車種も彼女が車の知識に乏しいことから、どんな車かは分かりませんが、見たことのないような型だったようですよ」

小五郎が言い終わった直後に、白馬が付け加えとして、さらなる詳細を、横にいる高木、佐藤両名の目見ながら語る。

「白馬君今、『自分達』って言ったけど……。」

高木は白馬がなぜ、『自分達』という言葉を使ったのかを不審に思い、高木が疑問をぶつける。

「ああ……。スモークガラス越しに薄っすらと見えたようですよ。運転席と助手席にすわる人影がね」

白馬は高木の目を見ながら腕組みをして、微笑みながら語る。

「なるほどね……。」

高木の右隣に座る佐藤が、右手を顎に当てながら呟く。

「つまり、その車が何らかの形で、事件に関わってる可能性があるな……。いや、もしかしたらその二人が五十嵐さんと木村さんを殺した犯人かもしれんな」

助手席に座る目暮が、正面に映る景色を見ながら自分の考えを口にする。

「しかし、奈津美さんが見たのはどんな車だったんだ」

小五郎が、ハンドルの上に両手を組むように載せて、苛立った声で呟く。

「おそらく、『見たことない車種』ということから、外車か、もしくは製造中止になった車か……。でしょうね」

小五郎が、独り言のように呟いた言葉を聞いた白馬は、自分の考えを述べる。

「うーん、しかし、そんな車数えきれないほどあるしなあ……」

目暮は腕を組みながら、考え始める。

「まあ今は、どこか食事ができるところに向かいましょう。お恥ずかしいことに小腹が空いてしまっただ」

「そう言われてみれば俺も」

白馬の意見に同意するように、小五郎が納得する。

「もうこんな時間か……。そうだな、どこかで昼食にしよう」

目暮が腕時計を見ると、短針が上を、長針が下を指していた。

そして、小五郎が最寄りのファミレスに向かうため、エンジンを入れて、アクセルを踏んだ。

同時刻、ここは米花町のとある道路。その道路を一台の銀色のベントツが走行していた。

車内には運転席に、眼鏡をかけ髭を生やした、四十代〜五十代の男性が、助手席には、同じく眼鏡をかけ、金髪の二十代後半の女性が座っている。その女性は今携帯を左耳に当て、姿無き話し相手と会話をしている。そして、会話が終わったのかそれとも、一方的に

切れたのかは分からないが、その女性は携帯を耳から外し、切のボタンを押してから、携帯を二つ折にして上着のポケットにしまう。「ジェイムズ、彼女から連絡です。彼らの次の標的が決まったようです」

ジェイムズと呼ばれた男は、運転中のため前を見ながら、助手席に座る女性の報告を聞く。

彼女が彼に敬語を使ったことから、ジェイムズという男は女性の上司ということが予想できる。

「そうか。今度こそ阻止しなければな……。ジョーディ君」

「ええ。今度こそ必ず！」

そう言い二人を載せた車は、米花町を走る多数の車と共に消えていった。

「ごちそうさまでした」

場所は戻り、ここは杯土町のとあるファミレス。

昼食を食べ終わった白馬が、使っていたナイフとフォークをテーブルに置き、食べ終わったという意味と、食に対する感謝の気持ちを込めて言った。

因みに、すでに他の四名はすでに食べ終わっており、会話等を楽しんでいた。

一方白馬は、この『ごちそうさまでした』という言葉以外、食事の中に一言も喋らなかつた。これは、本人曰く、「食事中に話をするのは行儀が悪いですから。食事は静かに、味わって、ゆっくりと食べるのが礼儀とっていますから」、とのこと。

そして今、白馬の、「ごちそうさまでした」、という言葉聞いた小五郎達は、席を立ち会計をしに行く。会計のため列に並ぼうとする小五郎を、突如目暮が止めた。

「え？警部殿」

小五郎を止めるように、右手を彼の胸元においた目暮は、「今回はワシがおごるよ。君は先に車に戻っていなさい」、と言い小五郎

に微笑みかけた表情をしながら言った。

「え！？しかし警部殿」

「いいんだ。それに、今回事件が進められたのは間違ひなく君のおかげだ。感謝の気持ちとしてこれくらいのことにはさせてくれ」

「そつ・・そうすか？なら、お言葉に甘えさせてもらいます」

「ああ」

小五郎と会話を終えた目暮は、彼らと一旦別れて会計のため、小五郎が並ぼうとしていた場所に並んだ。

因みにこの時、目暮の財布にあるお金の中には、佐藤、高木両名が、密かに出し合ったお金も入っていることを、車に向かう小五郎、白馬は気が付かなかった。

小五郎、白馬、佐藤、高木が車の中で待っていること十分。会計を終えた目暮が、車のほうに走ってくるのを、運転席に座っていた小五郎が気付いた。

目暮は、車の左側の扉を開けると、「遅くなってすまなかったな」と言いながら、助手席に座り、扉を閉めた。

それを確認した、後部座席に座っていた佐藤が、「遅かったかたですね・・・。何かありましたか？」と目暮に問った。

その問いを耳にした目暮は、シートベルトをし終えた状態で、顔だけを佐藤のほうへ向かせて問いに答える。

「ああ、ワシの二つの前に並んでいたお客さんが、会計中にレジのトラブルに巻き込まれてな・・・それで少々時間をくってしまったんだよ」

「ああ、それで・・・」

目暮の答えに、納得した返事をした佐藤は、視線を右に映る景色に向けた。

「さて、これからどうしますか？」

目暮の後ろの後部座席に座っていた白馬が、今後のことを聞くため、正面を向きながら言った。

「そうだな……。取りあえずワシらは、このまま警察庁に戻るとしよう。これ以上ブラブラしていると、管理官にどう思われるか分からんからな……」

「そうですね。今日はここが限度ですね」

目暮の意見を聞いた後、後部座席の佐藤と白馬の真ん中に座る高木が、やや残念そうな表情をしながら、目暮の意見に納得する。

「そっか、じゃあ俺達はこのまま事務所に戻るとスっかな」

「そうですね。後のことはそこから考えましょう」

小五郎の意見に同意した白馬は、腕を組みながら、背もたれ寄りかかった。

「じゃあ毛利君。探偵事務所に向かってくれ」

「分かりましたあ」

目暮が行き先を伝えた後、小五郎はキーを回して、目的地に向かって加速した。

この時、小五郎達を見ていたいかにも怪しい人物達が、小五郎達の後を離れず離れすぎずの距離を保ちながら追跡していることに、誰一人気付かなかった。

不審車と不審者と事務局（後書き）

今回は、白馬が食事に対する礼儀を、『坊ちやま』らしくしてみました。

因みに私は、食事中は『喋らず喋らなすぎず』と言った感じですが、皆さんはどうですか？

では、評価、感想等お待ちしてまーす！

さてさて、今朝見たところ、『評価とお気に入り登録数』が上がっていました！

皆さん、ありがとうございます！！

今後とも『常に全力を尽くしますので』、よろしく願います！

謎の三人組の襲撃と笑顔（前書き）

今回は、前話の最後に出てきた『不審者』を書きました。

では、ごっごー！

謎の三人組の襲撃と笑顔

ハア・・ハア・・ハア・・

「どうですか？佐藤さん」

「今のところ大丈夫なようね・・・。こちらを見失っているわ」

「本部にメールは打った。とにかく、一刻も早くこの場を脱出しなければな・・・」

ここは、毛利探偵事務所から数百メートル離れた裏路地。

今現在、この場所にいる人物は刑事三人と、その刑事達の額に、ある物質を叩き込もうとしている三人組が、周辺をうろついている。その者たちは右手に黒色のものを持ち、それを自らの視線の方向に構えながら、慎重に辺りを歩きながら調べている。幸いその三人は、自分達の存在に御塵も気付いてはいない。

そんな三人の様子を、物陰からじつと見つめている佐藤は、視線を維持しながら自分の右側に身を潜めている、一つ上の階級を持つ目暮に、「警部どうしますか？これから」、「とこれからの状況を聞くため、目暮の考えを聞くこととする。しかし、喜ばしい答えが返ってくることはなく、「うゝむ」と唸るだけだった。そんな事をしている間にも時は進み、自分達の死、もしくは生還と言う希望までの時間も進んでいた。

そして、その三人の命を頂こうとしている、謎の三人組みは正面の十字路まで来ていた。距離で表すと八十メートルぐらいか・・・。十字路の中心に来た三人組は一旦停止して、その三人の先頭を歩くリーダーと思われる人物は、後ろを付いてくる二人のほうへ向き、左側の人物を左人差し指で指してから、左側の路地を指す。その指された人物は、リーダーのその指示を理解したのか、リーダーに向かって左手でサムズアップを見せた後、左の路地を警戒しながら歩いて行った。もちろん、右手に握る黒き凶器を構えて。指示された人物が、左側の路地に歩き出した後、リーダーと思われる人物は

今度は右側の人物を、同じく左人差し指で指して、リーダーから見て右側の路地を指す。その人物も、先ほどの人物と同じように、サムズアップを左手でリーダーに見せた後、右の路地に向かって行った。当然“あれ”を構えながら。そして、二人に指示した人物は、物陰に隠れている目暮達のほうへ、慎重に歩き出した。言うまでもなく、彼ら三人の額を撃ち抜くための武器を構えながら。

「警部こつちに来ます」

「数は？」

「一人です」

佐藤が向かってくる人物のことを、小声で目暮に報告した後、目暮は向かってくる人物の数を、佐藤に聞いた。

「どうしますか？」

今まで、事の行方を見ていた高木が目暮に声をかける。

実は、この三人の後ろにはまだ逃げ道があった。三メートルほどの。なぜ、そんな距離なのかと言うと、その三メートル先の道には巨大な壁が立ち塞がっていたのである。そう、彼らは追跡者から逃げるのに必死でここにきてしまったため、この先が行き止まりということを、知らずにここにきてしまったのである。

因みに、彼らが隠れている物陰とは、L字路の九十度曲がっている部分にある、壁に身を潜めている。

そして追跡者は、Lの字を上から見た場合、縦棒のほうから来ている。

一方目暮達は、Lの字の横棒の角に隠れているのだ。

そもそも、なぜこの三人がこんな状況に合っているのかと言うと、それは一時間前に一旦、時間を戻す必要がある。

一時間前、毛利探偵事務所

昼食を食べ終えて、事務所まで来た小五郎達一行は、事務所前に車を止め、小五郎を除く四名をだし、そのまま小五郎は、レンタカーを返すために再び走り出した。

事務所前で、「白馬君、今日はありがとう。また宜しくな」と白馬に目を合わせながら笑顔で言った目暮に対し白馬も、「いえ。私でよければいつでも力をお貸ししますよ。警部」と彼も笑顔で返事をする。そして、目暮、佐藤、高木の三名は、白馬に向かって軽く一礼をして、背を向けた後、ここまで来た車を走らせるため、事務所から数百メートル離れたところにある駐車場に向かい、やや早歩きで歩いて行った。

それを見送った白馬は、車を降りる際に小五郎から手渡された、事務所の鍵を使い、事務所の鍵を開けて中に入り、扉を閉めて内側から鍵をかけた白馬は、これからどうするかということについて悩み始めた。一応小五郎には、「適当に寛いでいてくれ」と言われているものの、その『適当』とはどういう意味なのか、今一理解できていなかった白馬は、人の家のものを住人の許可なく使うのは気が引けると思い、事務所の中のものには一切手を触れずに、ソファに座って今までの疲れを癒すことにした。

そのころ、毛利探偵事務所から、駐車場に向かっていた刑事三人は、駐車場が目と鼻の先というところで、突然自分達の前に止まった、三台の漆黒に染められたオフロードバイクに、驚いていた。

そのオフロードバイクに乗った者たちは、バイクに跨った状態で目暮達を見ていた。とは言っても、スモークガラス付きのヘルメットをしていて、顔は分からなかったが、彼らからの視線を明らかに刑事達は感じていた。と言うより、その視線は殺気に近いものだった。彼らの身に付けているヘルメット、レザーシャツ、レザーパンツが黒一色で染められていたことが、目の前にいる三人が、一般人でないことを物語っている。そんな視線に身を引かずに、目暮はその三人に向かって、「何だね？君たちは？」、と彼らの正体を探ろうと質問するが、目暮が言い終わった瞬間、目の前の三人が右手で懐から取り出したものの先を目暮に向けた。

その様子を目暮の左斜め後ろで見ていた佐藤は、上司の危機を刑

事の勘で感じ取り、目暮に向かって全力で走ると、その勢いで目暮に飛びかかった。佐藤が目暮の体に飛びかかった瞬間、微かな音と共に佐藤の左二の腕をかすった。そのままの勢いで佐藤と目暮は道に倒れると、素早く起き上がった佐藤は、目暮の体を両手で掴むと女の力とは思えないほどの力で起き上がらせた。人は自分の身に危機が迫ると、思いもよらない力を発揮するというが、今の佐藤がこれに当たるだろう。そして、起き上がらされた目暮は、自分達に殺気を浴びせる者達の姿を再度見ると、引き金にかける人差し指の力が強まっていくのを目視して、頭の中で0.1秒かかるか、かからないかというほどの速さで、この者達から逃げねば、ということ判断して、佐藤と高木に、「こつちだ!!」、と言い放ち、近くにあった裏路地へ続く通路へと素早く走り込んだ。

突然走りだした三人に、少々動揺があったのか、それとも狙いがずれて撃てなかったのは分からないが、三人はバイクから降りて、三人が逃げ込んだ裏路地に走った。

因みに、バイクで追わなかったのは、その路地がとてもバイクで走れる幅がなかったからである。

そして、路地に駆けこんで来た三人を予測していた高木は、路地に入っただけで目に付いた消火器を持って、待ち伏せていた。予測は見事の中し、駆け込んできた三人に向かって、消火器を噴射した。

三人は突然の事態に動揺し、消火器から発せられる煙に怯み、その場に留まった。

一方、消火器の中の消火剤が、無くなったことを確認した高木は、その場に消火器を捨てて、目暮達が向かったL字路の角に隠れた。

そして現在。

全く名案が浮かばず、その場い隠れている目暮、佐藤、高木の三人は、一応彼らが持っている凶器と型は違うが、ほぼ同じものを手にしていた。

「これを使わないことを祈りたいがな……。この状況ではそうも

言ってられんか」

目暮が、自分の右手に握っているものを見ながらそう呟く。追跡者の一人はすぐそこまで来ていた。もうこれしか手段がないと思つた三人は、壁のほうに身を寄せて、握つていたものを追跡者が表れると思われる、L字路の角に向ける。そう、姿を見せてもまだこちらにその殺意を向けるのならば、三人とも引き金を引く覚悟を決めたのだ。そして、これを実行すれば、その轟音で近くにいる二人もやってくるだろう。まあ彼らのように、先端に円筒状のものが取り付けられていれば話しは別だが、しかし、ここにそんな都合のいい物はない。

足音はすぐそこまで迫つて来た。

三人が改めて覚悟を決めたその時である。

「警察だああ・・・キーン・ああああ!!!そこを動・キーン・・・ああああ!!!」

メガホンを通して発声しているのか、近所迷惑など通りこすほどの大声いや、ここまで来ると騒音という言い方が正しい凄まじい大声は、目暮、佐藤、高木の耳に嫌というほど届き、追跡者も突如現れた存在に驚いたのか、声が発声させられている方へ向いた。その騒音を耳にした他二名も、リーダーと思われる男の元に、駆け足で集まつてきた瞬間、その状況に驚いた。

そこには、自分達が入つてきた路地の入口に群がる大勢の警官が、対弾用の盾とヘルメットをして、待機していた。

因みにメガホンは所々、声を拡張できていないのか、時たま、キーン、という雑音を発していた。

目暮達は、その聞き覚えのある大声に驚き、ゆっくりと角から頭だけをだしてその状況を見た。そこにはメガホンを手にし、先ほどの騒音に似た声を発した、松本管理官と多数の警官がぞろぞろいた。それを見た目暮、佐藤、高木は、助かった、と心の中で呟き、笑顔になつた。そして、その笑顔を見た松本は笑顔で三人に、間に合つたか、と心の中で呟いた。

謎の三人組の襲撃と笑顔（後書き）

最後の松本の、『メガホン』の雑音は、
あまり上手く表現できていない気がします。

しかし、これ以上の表現ができませんでした。

では、評価、感想お願いします！

救いの手と招く手（前書き）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。

さて、昨日、私相手に『行間が空きすぎて、文字を追うのに疲れてしまっ』

という、ご意見を頂いたので、
今回から行間を、『少し狭く』しました。

それでも疲れてしまつのなら、どんどん感想のところ書き込んでください。

では、本編をどうぞ！！

救いの手と招く手

「全員その場に膝ま付けええ・・キーン・・ええ!!」

相変わらずこの裏路地と周辺には、声という名の騒音が響いている。騒音を発生させている一人の男は、目の前の不審人物を確保するため、気合いをいれている。

周りの警官達は、その男が発するあまり大声に耳が痛むのか、大声が発声される度に目を強く瞑っていた。

本人は、部下が危機に陥っている状況に怒りを覚えたのか、それとも自分の発している騒音とべも言うべき大声が聞こえていないのか、平然としている。

一方、そんな騒音に微動だにしない三人組は、突然懐に手を突っ込み、素早く抜き先端に付いているピンを抜くと、四方八方にそれを投げた。

「!!!」

それが動作が見えた松本は、自分達の方向に飛んできたそれから離れるため、部下に、「全員退避!!」と、電光石火の如く指示を出し、部下達も松本もその場から急いで離れた。

目暮達も、自分達のほうへ飛んできたものから身を守るため、L字路の角へ身を隠す。

因みに、目暮、佐藤、高木は、彼らが懐に手を突っ込む前から、自分達の使いたくもない切り札を構えていたが、彼らのあまりにも突然すぎる行動に動揺してしまい、我に返ったときには、すでに取りだされたものは投げられた後だった。

投げられた物が地面に落ちてから二秒ほどの間が空いた後、円筒状の物体から白煙が噴出された。

爆発するかと思っていた全員の期待は裏切られ、その白煙はあっという間に狭い裏路地を包んでいく。そう、スモークグレネードである。そしてその煙を吸い込み、むせて咳き込んでいる松本達は、

「視界が無いところに突っ込むのは危険」、と判断しその場に留まって白煙が消えるのを待つ。

目暮達もそんな状況であった。

そして数分後、ようやく煙がおさまり路地へ警官が突入したが、そこには目暮達以外、人っ子一人とていなかった。

「警視！犯人見当たりません！逃走した模様です」

「そうか」

報告に来た警官の報告を聞くと、松本は肩を下ろして残念そうに呟いた。

「目暮、佐藤、高木大丈夫か！？」

自分の方に向かってくる三人に気付いた松本は、彼らが無事かどうかを確認するための言葉をかける。

「ええ。私と高木君は大丈夫です。ただ佐藤君が、左二の腕に銃弾を掠めました」

「大丈夫です管理官。このくらい問題ありません」

目暮の説明を聞き終えた佐藤は、自分は大丈夫ということをし、微笑みながら松本に目を合わせて言う。

「そうか……。だが、念には念を入れて悪いことはない。後でちゃんと見てもらえ」

「は、はい。分かりました」

前に会ったときとは、別人のような雰囲気を感じていた松本に、目暮、佐藤、そして佐藤に付き添っていた高木は、目の前の男に違和感を覚えた。

そんな彼らの違和感を察してか松本は、「君達はこのままワシらと一緒に来い！話さねばならんことがある」、「そう言うと松本はクルツと体を振り向かせて、裏路地の向こうに止めてあるパトカーに乗り込む。

それに続き目暮、佐藤、高木、その他の警察官も、各自の車に乗り込み。その場を後にした。

場所は変わり、ここ毛利探偵事務所。

時刻は長針が上を、短針が六を示していた。夕日が街を、橙色に美しく染める時間である。

「ただいま」

「おう、お帰り」

「お帰り」

学校が終わり帰宅したコナンを、小五郎が迎えた後、白馬が迎える。

「あつ！白馬の兄ちゃん！来てたの？」

思いもよらない人物が事務所にいたことに、コナンは驚き、その表情で白馬に言葉を返す。

「ああ、君とは探偵甲子園以来だね」

「ん？なんだお前・・・、探偵甲子園に出てたのか」

「そう言えば毛利探偵にはお話していませんでしね・・・まあ私は、海外からのゲスト出演という形でしたが、あんな事が起こり、番組はメチャメチャになってしまいましたよ」

彼が言う『あんな事』とは、越水七槻が起こした事件である。

「でも、どうしてここに白馬兄ちゃんが・・・？」

コナンは、ここに白馬がいる理由を尋ねるため、彼に事情を聞く。「君と同じ事件を追ってるからさ」

白馬は、いつもの『微笑み』の表情をして、コナンの目を見ながら答える。

「僕と同じ事件！？それって、廃ビルと裏路地の射殺事件？」

コナンは自分と、正確には『自分達』が追っている事件を、彼が追っていると分かり、自分の予想が当たっているかどうか白馬に確かめた。

「そう。その事件さ」

白馬は、コナンの予想を確認する言葉を聞き終えた後、微笑みの表情を崩さずに即答した。

ブルルルル。

白馬がコナンに言葉を返した瞬間、小五郎の仕事用の机に置いてある、電話が音を発した。その音に驚き、小五郎、白馬、コナンは電話を見る。そして一番近くに居る、と言うよりその机に付いている椅子に座っていた小五郎が、受話器を取り耳に当てる。

「はい。毛利・・めっ目暮警部殿！」

小五郎が、電話をかけてきた人物に、この電話がどこの電話なのかを伝え終わる前に、その人物が話しかけてきたようで、その相手の名前を叫ぶ。

その声にビツクリした白馬とコナンは、何事か？ というような目で小五郎を見る。

「はい・・・はい・・・え？今からっスか？・・・分かりました、ではまた後ほど」

目暮の話に頷きながら返事を返し、相手が電話を切ったことを確認して、受話器機を置いた。

「白馬、コナン。すまないが、今から警視庁に向かうぞ」

「え？今からですか？」

白馬とコナンは、電話の内容を小五郎に聞こうと思っていたため、小五郎が、内容を自分達が尋ねる前に言ったことで、「聞く手間が省けた」、と思っていたが、今から警視庁に向かう、という内容に白馬が思わず聞き返す。

「ああ、何やら管理官殿が、重要な話をしたいらしい」

(松本管理官が?)

小五郎が、白馬の目を見ながらそう言った後、コナンが心の中でそう呟く。

そして、二人の『信じられない』という表情を見て、小五郎が、「まあ、信じられねえのは俺も同じだ。行ってみや分かるさ」、と言った後、「そうですね」、と白馬が独り言のように呟いた。

白馬がそう呟いたのを知ってか知らずか、小五郎が、「行くぞ」、と言いコナンは背負っていたランドセルを、事務所内のソファアに置く。そして先に出て、扉の向こうで待っている小五郎、白馬のと

ころに向かい、小五郎は、コナンが出たことを確認してから、扉を閉めて鍵をかけて、二人と一緒に階段を下りていった。

階段を降り切った三人は、近くを偶然通りかかったタクシーを拾い、警視庁に向かった。もうすぐ消滅してしまう、夕日をバックにしながら。

その頃阿笠邸では、コーヒ―を片手にパソコンをいじっていた阿笠の元に、一本の電話が鳴った。阿笠は席を立ち、電話にでる。

「はい。阿笠です」

彼は、電話をかけてきた相手に、間違い電話ではないことを確認するため、自分の名字を名のる。

その言葉を聞いた相手は、「阿笠博士ですね?」、と間違いでかけてきたのではないということ伝える。

「はい、そうですが……。失礼ですがどちら様ですか?」

いきなり、阿笠博士ですね? と話しかけられたことに、少々電話の向こう側にいる相手に不信感を持った彼は、相手のことを知るべく何者なのかということを探る。彼がこう思うのも無理はない。普通、自分が名のつたら、相手も自分の名前を言うのが礼儀である。

「お久しぶりですね。FBI捜査官のジョーディ・スターリングです」
「おお!ジョーディ先生じゃったか!」

なんと相手は、FBI捜査官であるジョーディ・スターリングであった。久しぶりの会話に、喜びの感情を表す阿笠であったが、彼女からの電話は、大抵あれ関連であるため、言葉では喜びの感情を表しても、頭の中では、まさか、という考えが芽生えていた。嫌な予感というものに限って、的中率が高いものである。

阿笠は、違ってくれと、頭の中で願いつつも、ジョーディからの電話が、あれ以外であった試しは一度もないため、阿笠の頭の中では、違ってくれ、という考えよりも、まさか、という考えが膨らみつつあった。

そしてジョーディは、挨拶のときは打って変わったような真剣な

声をだし、

「クールキツ……いや、コナン君いますか?」「、と阿笠に尋ねた。

救いの手と招く手（後書き）

今回は最後のほうのみでしたが、

“久しぶりに”阿笠博士を登場させました。

さてさて、「これからどういう展開に持って行くのかな？」という考えが次から次へと湧いてきます。いや、楽しいです。

では、感想、ご意見、評価お待ちしております！

事務局の女性捜査官の思惑と突如の電話（前書き）

今回は、『阿笠邸』と、『小五郎達の行動』とを、
前半後半に分けて書きました。

それでは、どうぞ！

しかし、今日は暑い……。

事務局の女性捜査官の思惑と突如の電話

「コナン君はいないぞ……。まさかジョーディ先生、彼らのことか？」

阿笠は今、FBIの女性捜査官ジョーディ・スターリングと、電話越しに話をしている。

「ええ、彼らに動きがあつてね。そこで情けないんだけど、コナン君の知恵を貸してもらいたいのよ」

ジョーディは言葉でも表現した通り、情けない声を発しながら阿笠に頼み込む。

その言葉を聞き、阿笠は心の中で、ハア、やっぱりか、と溜息をしながら呟き、仕方がなくジョーディに、「分かった。伝えておこう」と言うと彼女が、「ありがとう。場所は、明日の夜に米花埠頭に来るように伝えて。じゃあ、よろしくね」と言い受話器を置いた音がしたことを聞いた阿笠は、自身も受話器を置いた。

(米花埠頭じゃと?)

受話器を置き、パソコンをいじるため、座っていた席に戻りながら、阿笠は疑問を浮かべる。

米花埠頭と言えば以前、組織の幹部クラスと思われるベルモットが、ジョーディを罠にはめた場所である。なぜジョーディが、彼女にとつて因縁のあるあの土地を選んだのか？ 彼女はおそらく、夜になると人通りが全くと言っていいほど無くなる場所にするため……つまり、誰にも聞かれない話をするため、あの場所を選んだのだらうと阿笠は考えた。しかしその考えを阿笠は、考えついた瞬間に否定した。なぜなら、人通りがなくなる場所など、夜ならばそこら辺にある。しかも彼女には、FBIの仲間や自分達のような信頼のおける仲間がいる。それでもジョーディが、人気の無い場所を指定したのは、自分達には聞かれない話なのだろうか？ しかし、自分達のことはともかくとして、信頼のおける仲間ですら話せない話

とは何なのだろうか？　そもそも彼女はなぜここに電話してきたのか？　コナン個人の話ならば、彼の携帯に電話すればいいだけの話だ。別に、彼の携帯が故障しているわけでもない。電話が繋がりにくい場所について、通じずこの場所にかけてきたというのには納得いくが、あのコナンに限ってそれはまずない。常に通じる場所にいるはずだ。事件や緊急事態など、余程の理由があれば話は別だが。そんな考えを頭の中で張り巡らせて、パソコンをいじっていた阿笠は、ジョディの行動に明確な答えもでないまま、作業を続けた。

一方、阿笠邸でそんな事が起こっているなど、御塵も知らない小五郎達一行は、タクシーで警視庁に着いていた。時間帯はすでに、十八時をまわっている。

警視庁に着き、タクシーの右後方の扉から、白馬、コナンの順に出て、小五郎が料金を払った後、彼もタクシーから降りた。

タクシーの運転手は、小五郎が降りたことをバックミラーで確認した後、扉を閉めて、夜の闇へと走り去って行った。

タクシーが去った後、白馬はズボンの左ポケットから、自分の財布を取り出し、小五郎に、「毛利探偵。タクシー料金おいくらでしたか？」と聞く。その言葉を聞き、小五郎が前に立っていた白馬に向かって、どうしてそんなこと聞くんだ？　と疑問が混じったような声でタクシー料金を言うと、「これを」と白馬は小五郎が言った料金の半分の額を、自分の財布から取り出して、小五郎に渡そうとする。その白馬の行動を見て彼の考えが読めた小五郎は、「いいんだ、いいんだ。気にするな」と右手で結構結構という仕草を白馬に見せる。それを見た白馬は、「そういう訳にもいきませんよ。これは気持ちですから」と首を横に振りながら、小五郎に自分の気持ちを伝える。

「こういうのは受けとるべきじゃない？おじさん・・・」

その二人の様子を、下から見ていたコナンは、一向に受け取ろうとしない小五郎に、受け取るように勧める。

「そ、そうか・・・なら」

そんなコナンの気持ちに背中を押されたのか、小五郎はやや遠慮がちな態度で、白馬の右手にあるお金を受け取る。そして、長ズボンの左ポケットにしまつてある財布を取りだし、手の平でじゃらじやらと鳴るお金を財布にしまい、ポケットにしまつ。

小五郎がお金をしまつた後、白馬は左ポケットに財布をしまい、「では、行きましようか」と小五郎達と共に警視庁へ歩を進めた。

警視庁の入口につくと、やっと来たか、という顔つきをしながら、入口に立っている目暮に小五郎達は近づいた。

「お待たせしました、警部殿。話というのは」

小五郎は、時間がかかったということを謝罪して、話の内容を聞こうとした。

因みになぜ、小五郎達が時間を喰つたのかと言うと、運悪くタクシーが渋滞に突っかかってしまい、予定よりも十五分ほど遅れてしまったのである。

小五郎の話聞いた目暮は、「話は中に入ってからだ。まず、会議室に向かうぞ」と言い小五郎達に、「付いてこい」と言わんばかりに警視庁の中に入って行った。

彼の後ろに、小五郎達三人も付いていく。

白馬は移動中の時間を使い、右隣に歩いているコナンにこれまでのことを詳しく説明し始めた。コナンはその説明を、なるほど、それで？ など、納得及び話しを進める言葉を言いながら、白馬の話を聞いている。

前を歩いている目暮と小五郎は、時々話割り込んできて、白馬の代わりに話しを進めた。

白馬が全てを話し終えたころ、ちょうどタイミング良く会議室の扉が目の前に見えた。

コンコン。

「目暮です！松本管理官、毛利君達一行を連れてきました！」

「入れ！」

扉をノックし、中にいる松本に聞こえるように、少々大きめの声で言う。

目暮の言葉を聞き終えた松本は、間をおかずに目暮たちに入るように言葉をかける。

扉の外で耳にした目暮は、失礼します、と言い扉を開け、目暮は開けた扉が閉まらないように、ノブを持ちながら三人を部屋へ通す。そして最後のコナンが入ったことを確認した目暮は、音をたてないように緩慢に扉を閉めた。

中に入った三人は、奥に座っている松本に軽く会釈をする。その会釈に答えるように、松本は立ち上がり、右手で彼らに座る席を示すように合図して、「よく来てくれた。座ってくれ」、と三人に座るように勧める。三人は勧められた席に移動し、椅子を引いて腰を下ろす。

目暮も、予め決まっていた自分の席に着席した。

この部屋の机の並び方は、上から見ると数字の零を、縦長にしたような並びをしていた。上の部分に松本、左に松本側から、小五郎、白馬、コナンが、右側に松本側から、目暮、佐藤、高木、そして、その高木の右側には、『捜査を外された』と聞いていた千葉がいる。さらに、目暮と佐藤の間になぜか、目暮と同じ階級を持っている、白鳥任三郎が着席していた。

二人がいることに小五郎達は驚いたが、それに追い打ちをかけるかのように松本の真正面に、白馬にとつて今もつとも会いたくない人物が、腕と足を組み、首をやや下に向けて目を瞑って、威厳を剥き出しにしながら座っている。そう、その男は白馬の父親の、白馬警視總監であった。部屋に入ってくるときは、後ろ姿しか見えなかったため、どこの誰なのか全く分からなかったが、白馬が席に着こうと移動している最中に、その顔が徐々に見えてきてその正体が分かった瞬間、小五郎とコナンはもちろんのこと、白馬は目を見開い

て驚いた。

(なぜ父上がここに?)

そう白馬は思ったが、「そんなことは後でも聞ける」と思い席に着いた。

小五郎、コナンは、白馬警視総監にも驚いたが、白鳥と千葉がここにいることに驚きを見せていた。

まあ千葉は捜査に復帰したのかと思い、何となく納得したが、白鳥の方は全くの謎であった。予想すれば、彼もこの事件に関わっていることぐらいだ。

そして、そんな三人の疑問を知ってか知らずにいる松本は着席し、会議を始めた。

事務局の女性捜査官の思惑と突如の電話（後書き）

今回は、これまた久しぶりに、【白馬警視總監】と【千葉刑事】を、そして、新キヤラクターとして、【白鳥任三朗】を登場させてみました。

それと、ジヨディとベルモットが戦った場所なのですが、どなたかご存じの方いませんか？どこを調べても載っていないくて・
・私の『勝手な思い込み』で『米花埠頭』になりました。そもそも、『米花に埠頭はあるのか？』と聞かれると、答えは『？』です。もし、ご存じの方がいましたら、感想に書いてくれると幸いです。長文失礼しました・・・では、評価、感想お待ちしております！

管理官の偽りの芝居と管理官の真の姿（前書き）

今回は“かなり”長くなってしまいました・・・区切りが中々つか
なかつたもので・・・では、どうぞ！

追伸

六月十九日に、『書き忘れた』ことがあり、そのことを付け加えま
した。読者の皆さんに、このことをお詫び申し上げます。

管理官の偽りの芝居と管理官の真の姿

「では、会議を始めよう・・・」
松本がそう言つと、白馬警視總監を除く全員の目が、松本に集中する。

因みに、白馬警視總監は先ほどから指一本たりとも動かさない。松本は、警視總監に目もくれずに話しを進める。

「さて。今日皆に集まってもらつたのは、今現在二件発生している謎の射殺事件についてだ」

「白鳥、頼む」

松本に言われ、「はい」、と返事をした白鳥は立ち上がり、正面に向かつて一礼をする。

小五郎、白馬、コナンは、なぜここで白鳥がでてくるのか、ということを疑問に感じたが、ここは敢えて何も言わず、話を聞くことにした。

「毛利さん、白馬君、コナン君。今日、あなた達に来て頂いた理由は、ここ数日、あなた達が目暮警部達と、密かに調べていた事件の詳細を教えるためです」

「はあ！？詳細ってどういうことだ！」

白鳥が言つた詳細に意味が分からず、小五郎は座つたまま白鳥の目を見て、意味を聞こうとする。

一方白馬は、木村邸で見せた、両膝に両腕の握り拳を載せて、背筋を伸ばして白鳥の目を、じつと見ている。しかし、その顔にはいつもの微笑みはなく、真剣そのものの表情をしている。

コナンは、白馬と同じ座り方をしながら、これまた白馬と同じく、彼の目を真剣の表情をした顔と目で見ている。

「ええ。実は毛利さん達が調べている間、私は管理官に極秘の命令を受け、この事件の真相を追っていたんですよ。あなた方同様にね」
彼が極秘の命令を受けこの事件を捜査してたことに、小五郎、白

馬、コナンの三人は驚愕した。

一方、目暮達はすでに聞かされていたためか、表情一つ変えなかった。

白鳥はそんな三人を余所に、話しを進める。

「私は廃ビルでの五十嵐氏殺人事件の後、独自に捜査進めていたのですが、突如謎の三人組に襲われたのです」

「謎の三人組ですか？」

今まで白鳥の話しを真剣に聞いていた白馬が、謎の三人組という言葉に反応する。

正面に座っている目暮、佐藤、高木の顔が少々変化したのに、コナンは気付く。

「ああ、彼らの正体は一切不明。分かっているのは、銃器の扱いに長けていて、その体型から男だということだけだよ」

白鳥は白馬の目を見ながら、いつもの冷静な表情を崩さずに言った。

「それで、その三人組のこと何か知ってるの？ 目暮警部」

「！」

白鳥が話し終えた後、コナンが先ほどの、目暮たちの表情の変化に気付いたことを口にした。その言葉に驚くも、目暮は表情を崩さずにコナンに目を向けて、「なぜそう思うんだい？」、「と子供に話しかける優しい口調で話しかける。

「だって、白鳥警部が三人組のことを言ったとき、警部さんの表情が明らかに変わったもん。だから、何かあるんじゃないかな？」
「って思ってたんだ」

コナンは目暮の疑問に、子供らしさを忘れずに返答した。

「そうなんスか？警部殿」

小五郎が、コナンの意見の正否を知るために目暮に尋ねる。

目暮は、「ああ、コナン君の言うとおりだ」、「と小五郎に目を合わせて言った。

「実はな。今日君達と別れた後、我々を襲ってきたのだよ。その三

人組がな」

「!!!」

その目暮の言葉に、小五郎、白馬、コナンは、先ほどの驚きが可愛く見えるほどに驚いていた。

「ホントっスか!!!? 警部殿!!!」

驚きのあまり冷静さを失った小五郎は、勢いの余り椅子から立ち上がる。

その小五郎の様子を、黙って見ていた目暮は、「とりあえず落ち着くように」、と小五郎に冷静さを取り戻させる。

小五郎が冷静になり、椅子に腰かけたのを見た目暮は、

「本当のことだ。現に、佐藤君と高木君も襲われ、管理官に助けられたのだからな」

「それで警部殿、大丈夫だったツスか!??」

小五郎が明らかに心配という表情を浮かばせながら、目暮に問う。

「ああ。なんとかな・・・佐藤君がワシを庇い怪我を負ったが、かすり傷だったため、全員無事だよ」

「そうスか・・・佐藤君は大丈夫なのか?」

目暮の言葉を聞き安心した小五郎は、佐藤に怪我の具合を聞いた。

「ええ。左二の腕に、弾が掠っただけでしたから」

「そうか。無事で何よりだ」

佐藤は今上着を羽織っているため、彼女の左二の腕の怪我を伺うことはできないが、彼女の大丈夫という言葉と、その微笑みから無事だということを小五郎は察し、安堵した。

「まあ、その三人組の目的が何のかは分からんが、白鳥、目暮、佐藤、高木と、この事件に関わった者を狙っているのは事実だ」

「つまり、その内私達も、彼らに銃口を向けられるかもしれない、ということですね?」

白馬が顎に手を当てながら、視線だけを松本に向け、松本の言いたいことを当てる。

その白馬に視線を向けながら松本は、その通りだ、と言う。

「なるほど、しかし、管理官。なぜ、今になってその話をするのですか？」

松本の返答に納得した白馬は、話しを切りかえるため、この話が始まってすぐに感じた疑問を松本にぶつけた。

「うむ。君達は、ワシがこの事件の捜査を目暮達に、打ち切りを命令したことは知っていると思うが」

「はい。目暮警部に聞いています」

松本が捜査を打ち切ったことを、知っているどうかを確認するため、小五郎たちに顔を向けて話す。

そして、問いに白馬が三人を代表するように答えた。

「実はな。その打ち切りは、我々を彼らから守るためだったのだ」

白馬が返答した後、松本に変わり目暮が、松本の言いたいことを代弁して言った。

「警部殿を守るとは？」

目暮の『意味不明』な言葉に、小五郎は詳細を聞こうと、目暮に目を向けて話す。

「ワシは白鳥が襲われた後、その三人組のことを聞き、の事件に関わったものを襲うのではないか？ という仮説をたてた。何しろ白鳥が襲われたのは、廃ビルの現場検証が終わった後だったからな……そこでワシは、このことを上層部に報告し彼らと相談した末、一つの結論に達したのだ。この捜査を打ち切ることで関係者を少なくし、被害を減らす、という結論にな」

「！！」

またしても小五郎達は、松本の言ったことに驚きを覚えた。

「じゃあ管理官殿は、最初から部下を守るために」

小五郎は、松本の考えが以前聞いた、目暮の四つの考えとは全く違っていたことに、啞然としていた。そう、彼の一連の謎の行動は、部下を守る優しさが生み出したものだった。優しさというものは、全て甘ったれたものではない。時には心を鬼にして厳しく、冷酷なまでに冷たく突き放すことも、一つの優しさなのだ。

「そつだ・・・だが、目暮達は独自の捜査を始めてしまい、その上もつとも嫌な結末を迎えることになった。目暮達が奴らに襲撃を受ける、という結末にな。そしてワシの仮説は確信に変わった。間違いないく奴らは、この事件に関わっているやつらを狙っている」

「つまり、あたしたちに捜査を中止しろということっスか？」

松本の言いたいことを小五郎が言い当てる。しかし、彼から返ってきた答えは意外なものだった。

「いや違う。ここまで捜査に関わっているとすれば、君たち三人も奴らの襲撃を受ける可能性が高い！考えたくはないが、君達三名の名は奴らのブラックリストに加わっていると、ワシは考えている。そこで、ここは少々危険だったがな……この事件を一刻も早く解決することで、被害を最小限に留めることにした。よって、今まで捜査に加わっていたもの達は捜査をこのまま続行！もちろん、何人がガードをつけてな。君たちはどうするね？」

松本はこれからのことを話し終えた後、小五郎たちへ向いて彼らにこれからのことを問いかけた。

「管理官殿。あたしゃ、一度始めた事件を、途中で放ったことは一度もないんっスよ」

「私事です」

「僕もかな・・・えへへへ」

小五郎が笑みを浮かべながら、松本のほうへ顔を向け言った後、白馬とコナンも、自分たちの意見が小五郎と同じことを言った。

「フウ・・・。そうか。分かった。ただし、何人かつけるぞ」

「お断りします」

「！！！！」

松本が頭の中で、やっぱりそうか、と思い仕方なく了承し、彼らにガードをつけようと言い終わった後、白馬がNOの返事を即答した。その返事に小五郎、コナンと白馬警視総監以外が、驚きの表情を見せる。

「なぜだね!？」

目暮が、当然のように浮かんだ疑問を小五郎達にぶつけた。

「目暮警部。確かに私達は、彼らの『標的』に加わっているかも知れませんが。しかし、我々はまだ襲われてはいない。つまりバレてるとは言い切れないはずですが？ それに、目暮警部達を襲ったのなら、なぜ別れる前まで一緒にいた、私達を襲わなかったのかが不思議です。襲うためには、その人物の行動を監視している必要があります。好機的なチャンスを見つけるためにね。つまり、あの時も彼らは我々の傍、あるいはどこかで見ていたはずですよ。おそらく、木村邸の時も・・・なのに彼らは手を出してこなかった。襲うチャンスなどいくらでもあったはずですよ？ あの時の我々には・・・つまり、バレてるかバレてないか分からないこの状況では、私と毛利探偵だけで、このコナン君には必要ないと思えますか？」

白馬は自分の考えを松本たちに話した。

「しかし、君はさつき『断る』と・・・」

「あれは、コナン君にはということですよ」「
(なるほど)」

目暮は、白馬に疑問を投げた後、返ってきた答えに心の中で納得した。

「じゃあ、そろそろ、白鳥警部が調べたことを教えてくれる？」

コナンは白馬の考えに納得し、白鳥のほうに視線を向けて、話しを戻すようにした。

「ああ。では、報告します」

そう言つと、白鳥は立ったまま警察手帳にメモしたことを読み上げる。

この後、さらなる驚きがコナンを襲うとも知らずに。

管理官の偽りの芝居と管理官の真の姿（後書き）

評価、感想等お待ちしております。

進展と不安と正体（前書き）

皆さん、評価及び、お気に入り登録ありがとうございます！！
ホントに嬉しいです！

さてさて、今回で二十話ですね。

この小説を書き始めて、今日で六日目ですが、
二十話という数が、『多く』も『少なく』も感じています。

では、挨拶はこのくらいで、本編をどうぞ！

進展と不安と正体

白鳥が調べたことを報告するため、手帳に書かれたことを読み上げた。

「毛利さん達はすでにご存じかもしれませんが、木村武さんが射殺される二週間前、あの家の前の道路に黒い車が止まっていたことを……」

そこまで読み上げた白鳥は、視線を手帳から小五郎達の方へ移し、小五郎達を見た。

三人は何の反応もなく、白鳥の目を見ている。

ちなみに、本来ならここでコナンが驚くところだが、ここに来るまでの白馬の話を聞いて、十分驚いたため、ここでは何の反応もない。

そして、小五郎、白馬も何の反応もなかったため、白鳥はそんな三人の反応を、このことは知っている、と解釈し、再び視線を手帳に戻して続きを話し始める。

「この黒い車なんです、五十嵐拓也さんが殺される二週間前に、彼の自宅周辺でも目撃されていました」

「……」

その言葉に小五郎、白馬はもちろん驚いたが、一番驚いたのはコナンだった。

「白鳥警部！ その車の型は？」

少々取り乱しながら話しかけてくるコナンに、少し驚きはした白鳥だったが、そのまま話しを続ける。

「え？ あ、ああ……。目撃者が木村奈津美さんと同じく、車の知識に乏しかったんだけど、木村さんほどじゃなかったから、有効な証言が得られたよ。その特徴を元に調べたところ、車はポルシェだと言ったことが分かったよ」

（黒・ポルシェ、間違いないジンの車だ！！）

白鳥の報告を聞いたコナンは、この事件が組織絡みだということを確認した。

一方、報告が終わった白鳥は、突然様子が豹変したコナンが気になったが、今は敢えて触れずに、松本の目を見て、「以上です」と言い席に座った。

「どうやら、その黒いポルシェが、この事件に関わっているのは間違いないようですね」

白馬は、顎に手を当てながら自分の意見を口にする。

「しかし、分かりませんね。一体どこの車なのか」

今まで一言も話さなかった高木が、意見を言った。

「でも、なんとしても探し出さないと……」

続いて、高木と同じく、今まで一言も口を開かなかった佐藤も、自分の意見を言った。

「とにかく、その黒いポルシェが今のところ唯一の手掛かりだ！

何としてでも探し出すのだ！事件がこれで終わりとは到底思えんからな」

「はい！！」

松本の気合いの入った声で、目暮、白鳥、佐藤、高木、千葉が、松本の気合いを上回るような声で返事をした。

「では、これにて解散とする。皆御苦労だった」

松本が言い終わった後小五郎が、「じゃあ、帰るか。置手紙をしてきたとは言え、蘭が心配するからな」と言い白馬も、そしてまだ完全に冷静さが戻っていないコナンも、小五郎の言ったことに同意して会議室を出ようとした時に、「探」、と今まで不気味なまでに動かなかった白馬警視總監が、会議室を出て行くこととする白馬を呼び止めた。

突然呼び止められ、自分のほうへ歩いてくる父に、白馬は驚きつつも平静を保った。総監は白馬に何か言うのかと思いきや、彼の右を通り過ぎただけだった。そして、そのまま通路の先へと消えてしまった。

彼が何をしたかったのか分からない小五郎とコナンは、その場に立ちつくして、去っていく総監を見続けるものの、我に返った小五郎が、「行くぞ、オメーら」と言い、それによって我を取り戻したコナンは、「うん」と言っ、自分達と同じように立ちつくしている白馬に、「行くよ、探兄ちゃん」と言う。白馬が、「ああ」と返事をしてコナンのほうへ振り向くと、コナンは驚いた。そこには、今まで見たことのない、生き生きとした輝かしい瞳と表情がある。その白馬の顔つきを見て、コナンは彼の父が、あの時彼に何かをしたのは分かった。しかし、何かは全く分からなかった。

小五郎も、白馬がいつも以上に元気な声をだしたので、気になり彼のほうへ振り向いた。振り向いた小五郎もコナン同様、白馬のその表情に驚きつつも、敢えて深入りはせずに、再び百八十度体を回転させて、後ろにいる二人に、「ほら！行くぞ」と、再度言うところコナンは、右隣りに歩いている高校生に疑問を感じながら歩き、白馬は先ほどの生き生きとした表情を一つも崩さずに、前を歩いている迷探偵について行った。

しかし、他の二人が知らずとも、彼は知っていた。警視総監である父が、自分の横を通り過ぎる寸前に、「死ぬなよ……」、と愛情や優しさが籠った声で語ってくれたのを……。

警視庁を出たころには、すでに二十時近い時刻となっていた。警視庁に到着してから、約二時間ほど時間が経過していたが、小五郎達三人には、会議に集中していたことで時間の感覚を忘れており、今はまだ十九時ぐらいかと思っていた。当然、腕時計を見た三人の表情は、一驚の色に変わる。そんな三人は、目暮が用意してくれたパトカーで、探偵事務所まで送ってもらうことになった。遅い時間に警視庁に来てもらい、遅くまで会議に付き合ってくれた三人に、目暮が気を利かせてくれたのである。小五郎、白馬、コナンは、その言葉に甘えさせてもらい、目暮が運転するパトカーに、助手席に小五郎、後部座席運転席側にコナン、反対側に白馬が乗り込み、探

偵事務所へと出発した。

小五郎達が、目暮がハンドルを握るパトカーで警視庁を発ったころ、ここ阿笠邸。

現在この家では、変わり者の発明家の阿笠と、小学生にはとても似合わないオーラを放出した少女、灰原哀が、食卓を囲んでいるところである。

「え？ ジョディ先生がそんなことを？」

今、ご飯茶碗を左手に持ち、箸を右手に持った灰原が、正面に座っている。阿笠の話しを聞いて、疑問を言葉を吐いたところである。「そうじゃ。変じやろう？ どう考えても……」

実は阿笠は、先ほどかかってきたジョディの電話に様々な疑問を持ち、一人で考えるのが限界と判断して、灰原哀と話しあう貴重なこの時間を使い、ジョディの電話の内容と、自分が思った疑問を彼女にぶつけたのである。

「……」

灰原は阿笠の話聞き、ジョディの電話に阿笠と同じ疑問を感じていた。

灰原は思考中のためか、何も言わずに箸で左手に持っているご飯茶碗から、ご飯を一口掴み口に入れた。

「ワシは思うんじや。もしかしたら、“もしかしたら”じゃぞ。これは組織の罫で、コナン君をおびき出して何かをするつもりなんじやないか、とな」

阿笠は進んでいた箸を一旦止め、やや下を向いている灰原の、目を見ながら話しかける。二度目のもしかしたらという言葉を強調して……。

「『何か』って？」

灰原はやや下を向いていた顔を上げ、阿笠の目をポーカーフェイスを保ちながら見る。そして、彼が言った何かの、具体的な内容を聞こうとする。

阿笠は、自分の目を見ている灰原の目を見つめ返ししながら、「それは分らんが・・・」、と言いながら、止めていた箸を動かして食を進める。

何かのことを阿笠に聞きはしたものの、当然それは彼の予想であることを知っていたため、灰原は期待した答えが返ってくるとは思っていないかった。しかし、灰原には一つの予想が頭の中でできていた。もし仮にであるが、阿笠の疑問が的中した場合　つまり、電話してきたジヨディが何者かの偽りの姿、変装だった場合、灰原には思い当たる組織のメンバーが一人いた。名をクリス・ヴィンヤード、またはシャロン・ヴィンヤード、さらにもう一つの異名として、千の魔女と呼ばれる組織の上級メンバー。彼女はその異名通り、よほど背丈が違う人間を除き、老若男女全てに、その姿を上から下まで変えることができる技術を持っている。もちろん声色も、である。しかも、この阿笠邸の電話機は、かけてきた相手の電話番号が表示されないという、少々旧式の電話機である。つまり、ジヨディがどの電話もしくは、どこからかけてきたという事を知ることができなかつたのである。そのジヨディがもしベルモットだった場合、これが何らかの罫という阿笠の予感が、的中することになる。彼女ベルモットは、自分達の味方である行動がしばしば見られるが、仮にも組織の人間である。その考えが何らかの計画のために、自分達を利用して行いだとしたら？　もしくは別の理由があつてなど、考えられる可能性はいくらでもあるが、切りが無いため灰原は、その事については考えるのを止めた。

因みにコナンは、「彼女は敵じゃないねーよ」、と言っているが、灰原は今一信用できなかった。中々考えがまとまらない灰原は、「ハア」、と阿笠に聞こえるか聞こえないくらいの声で溜息をついた後、箸を進める。

阿笠もそんな灰原の様子が不安だったものの、今は聞かないほうがいい、と心の中で判断して、二人はそのまま一言も話さずに夕食を食べ始めた。

進展と不安と正体（後書き）

今回は、前半の『会議』のところにも意識しましたが、“それ以上”に集中したのが、白馬の父親及び、後半の『阿笠邸』のジヨディの疑問です。

白馬の父親が、『ああいう性格なのかどうかは不明』ですが、私なりに、『こういう性格ならいいなあ』という想像で、書きました。

ジヨディのほうは、『電話してきたジヨディ』の正体を、ここで“予想”という形で出そうかと思いましたが、『これからの展開』を考え、上記の考えはやめました。

では、評価、感想、お待ちしておりますので、“どんどん”書いてください！

高校生探偵の気遣いと小さな少女からの連絡（前書き）

さて、皆さん。

今回から『第三部』の始まりです！

このサブタイトルの『阻止』という言葉は、
いずれその意味が分かると思います。

もう一つ、念には念を入れて話しておきますが、

「第二部ちよつと短くない？」という疑問を、

お持ちになる方がいると思います。

確かに、“その点”は反省しています。

本当はもう少し長くしようと思ったのですが、

そうすると、ストーリーが進まなくなるので、やめました。

では、どうぞ！

高校生探偵の気遣いと小さな少女からの連絡

「ただいま」

「お帰りなさい」

阿笠邸で謎という空気が漂っていたころ、毛利探偵事務所では今日一日の疲れが、顔にはつきりと表れている小五郎達が帰宅した。

先に帰宅していた蘭が、事務所の扉を開けた父を迎えると、それに続きコナンが、「ただいま〜蘭ねえちゃん」、「と子供らしく」と言うより、子供そのものを演じて帰宅する。

そのコナンを蘭は、「お帰りコナン君。お父さん、コナン君をおんまり引っ張りまわさないでよ!」、と、コナンを迎えたときは、打って変わった表情をして、上着をソファアの上に放り投げ、仕事の椅子に座っている小五郎に向かって言い放つ。

「仕方ねえだろう……坊主が勝手について来たんだから」

小五郎は腕を組みながら蘭に、疲れて迫力など御塵も感じられない目をして言った。

「もう。コナン君あんまり無理しちゃだめよ」

小五郎の返答を聞いた蘭は、自分の左横にいるコナンと同じ目線になるようにして、コナンに言う。

コナンはそんな蘭の、心配している目を見ながら、お得意の笑顔を見せて、「大丈夫だよ。僕平気だから」、と外見だけ大丈夫な表情をしながら蘭に答える。

「ホントーに?」

「うん!」

確認するかのようには、コナンに再度聞いてきた蘭に対し、コナンは表情を壊さずに返答する。

「大丈夫ですよ。彼はタフですから……」

突然、自分の左側から声が出た蘭は、姿勢を戻してから体ごとその方向へ振り向いた。

「あ、あなたは確か　　黄昏の館のときに」

振り向いていたところに立っていた、十代後半と見られる青年に蘭は見覚えがあった。そして蘭は、海馬にある過去の記憶を思い出した、その青年が黄昏の館で会ったことを思い出した。

「覚えてくれていて光栄です。君とこうして挨拶を交わすのは初めてだね。僕は白馬探。君の幼馴染、工藤新一君と同じ、高校生探偵をやっています」

白馬は蘭に自己紹介をした後、蘭に右手を差し伸べる。

「毛利蘭です。よろしく」

蘭は礼儀として、自分の名前を名のった後、差し出された白馬の手を右手で掴み、握手を交わす。

「じゃあ、蘭。夕食頼む」

握手を交わした後、小五郎が空腹な表情をしながら、蘭に言い放った。

それを聞いた蘭は、呆れた顔をして小さく溜息をつき、白馬はクスツと笑いを零す。コナンは、空気読めよ、と心の中で小五郎に突っ込んだ。

そんな様子を、笑いをこぼしながら見ていた白馬は、「おもしろい家庭ですね」、と蘭に小声で言う。

それに対し蘭は、「ただのグータラ親父よ」、と呆れた表情のまま、白馬に小声で返答する。

「そこがおもしろいんですよ」、と白馬は再び蘭に小声で思ったことを言った。

「おい蘭早くしてくれ」

「もう、しょうがないな……白馬君は嫌いなものはある？」

小五郎がまたしても、場の空気を読めないことを言った蘭は、やれやれという表情をする。

白馬は、「いえ。ありませんよ」、と首を軽く横に振って答えて続ける。

「良かったら僕も手伝いましょうか？一人じゃ大変でしょ」

白馬は蘭のことを気遣い、事務所を出て自宅へ行くために、階段を上がっている蘭を呼び止めた。

「ありがとう。でも大丈夫よ。お客様の白馬君に、手伝ってもらうわけにはいかないわ」

蘭は、内心では嬉しかったが、初対面の人の気持ちと言えど、家事仕事をやってもらうのは失礼と感じ、敢えて白馬の気持ちを断った。

「いえ。これでも自炊してますので、足手まといにはなりませんし、それに、夕食を御馳走になるというのに、指をくわえて見ているというのは気が済みませんから……」

白馬は、蘭の断りの言葉をあっさり聞き流し、自分の気持ちを伝える。

そんな白馬の、引かないという表情を見て、蘭は、そこまで言うのなら、と内心で思い、「じゃあ、手伝ってくれる?」、と白馬に笑みを向けて言った。

その笑みを見た白馬は、「はい」、と笑顔で言い返して、二人はキッチンへ向かう。

一方、蘭と白馬が出ていき、上にある自宅の入口の扉が、閉まった音が聞こえた時、コナンの携帯が突然振動と音を発する。コナンはソファから立ち上がり、ポケットにしまっただけある携帯を取り出して開くとそこには、着信：灰原、と表示されていた。

(灰原から? こんな時間に珍しいな)

コナンは内心そう思うと、携帯の話しに迷惑がかからないように、事務所の扉を開けて外に出て、扉を閉めた後、通話ボタンを押した。「もしもし……」

「工藤君? 私よ」

普通この場合、相手がもしもと言ったら、自分の名を名のるのが普通だが、灰原の場合、「私よ」、と言うのが普通である。

「ああ、灰原か。オメエがこんな時間にかけてくるなんて珍しいじ

「やねえか」

「そうね。単刀直入だけど、明日の朝、阿笠邸に来てくれる？」

灰原は、そうねという言葉をも、笑いが混じったような声で言った後、用件を言った。

「ああ、分かった。九時ぐらいでいいか？」

「ええ。待つてるわ」

そう言うのと灰原は、電話を切る。

コナンは、用件ってなんだろうな、と思いつつも、明日になれば分かる、と自分を納得させて電話を切ると、携帯をポケットにしまつて事務所内に戻って行った。

コナンが電話で話しているころ、蘭は啞然としていた。その原因を作っているのが、左で作業している白馬である。彼はまさに完璧であつた。包丁さばき、材料選び、調理器具の扱い、味付けと、どれを取っても完璧という言葉が似合う。蘭はそう思いながら、白馬の手際良さを見ている。無論その彼は、そんなこと思つてもいないのだろう。

白馬は笑みを浮かべながらフライパンを持ち、菜箸を持って材料を馴れた手つきで炒めている。

「白馬君って料理好き？」

いかにも楽しそうに作業している白馬に、蘭は尋ねる。

「ええ。母に教えてもらつたんです。『覚えておいて損はない』と言われて。それ以来、自分なりに工夫しているうちに、料理が好きになつたんです」

白馬は、フライパンの上で踊っている材料を目にしながら、蘭の質問に答え、自分が料理を覚えた経緯を話した。

「へえ。努力家ね」

蘭は白馬の話聞いた後、白馬を尊敬すると共に褒める。

「努力家と言うより……自分でも無意識でしたから。それに、探偵の仕事に少し似ているからかなあ」

白馬は、蘭の言葉を言い直すように話した。

「似てるって？」

「例えば、材料選びは探偵で言う証拠集めに似ていて、この食材とこの食材を組み合わせたら、何ができるか？ という予想は探偵の推理に似てるでしょう？」

「あ、なるほど……」

蘭は、白馬の話に納得したような顔を浮かべ、同時に心の中で、どっかの探偵さん二人とは大違いね、と二人の探偵の顔を浮かべた。因みにその二人とは、今現在下の事務所で、空腹に耐える父と、今どこにいるかも分からない大バカ推理ノ介である。

「出来ました」

蘭がそんなことを思っていると、白馬がいつの間にか、お皿に出来上がった料理を載せて、テーブルに運ぶところだった。

「うわ、おいしいそう」

「ありがとうございます」

蘭は、白馬が手に持っているお皿の上に、綺麗に盛り付けてある料理を見て、思わず感声をあげる。

それを聞いた白馬は、感謝の言葉を述べた。

そして、二人がテーブルに料理を並べ終わり、蘭が事務所に居るコナンと小五郎を呼び、全員が食卓についたのを確認した白馬は、「いただきます」、と胸の辺で両掌を合わせて箸に手を付けると、他の三人も同じ仕草をして、楽しい夕食が始まった。

なお、小五郎、コナンは、白馬の作った料理を見て、驚きの声を上げたのは言うまでもないが、彼の料理を食べた、小五郎、蘭、コナンは、うまい（おいしい）、と感動の声を上げていた。

そんな三人の様子を見ながら、箸を進めていた白馬は、笑顔で食事を進めていた。

小さな黒の少女の予想と小さな少年探偵の推測（前書き）

皆さん、こんにちは。

今作で、『第三部二話目』を更新します。

では、どうぞ！

小さな黒の少女の予想と小さな少年探偵の推測

翌日

小五郎、蘭、コナン、白馬は朝食終え、小五郎はいつも通り依頼人を待つために、事務所の回転椅子に、蘭は自宅の掃除をしている。もちろん、指をくわえて見てられないという性格の彼も一緒である。そして、コナンは自室で出かける準備を終え、時計が八時半を示していたことから、「少々早いな」、と思いながらも、時間に余裕を持って行くために、出発することにした。

なお、今日は蘭とコナンは学校なのだが、昭和の日のため休みである。

自室の扉を開けたコナンは、丁度居間を掃除していた白馬と顔を合わせた。

「あ！ 行くのかい？ コナン君」

「あ、うん」

コナンは白馬と対面した瞬間、この部屋の状態に驚くと言うより、白馬に対して呆れていた。

「ん？どうかしたかい？」

そんなコナンの様子を見て、気になった白馬は声をかけた。

「え？ ううん！ 何でもなし。行ってきま〜す」

コナンは白馬の横を通って、居間の出口へと駆けて行く。

ところで、なぜコナンが白馬に呆れていたのかと言うと、その原因は現在の居間の状態にあった。なんと、コナンが自室に入るときに通った居間とは、別の部屋と思わせるほど、ピッカピカになっていたのである。塵一つたりとも落ちていない。

「ああ。行ってらっしゃい！」

そんなコナンの思いに全く気付かなかった白馬は、元気良くコナンを送り出した。

台所を掃除していた蘭は、白馬のその声を聞き、一旦手を止めて

居間に顔を出し、「行ってらっしゃーい！ 気を付けてね！」、と玄関で靴を履くコナンに言う。

それが聞こえたコナンは、「うん！ 行ってきま〜す」、と云ってから、子供らしく元気良く玄関の扉を開けると、扉を閉めてから階段を下りた。

事務所の扉の前まで行くと、扉を開けて椅子に座って朝刊を読んでいる小五郎に、「行ってくるね おじさん」、とドアノブを掴みながら言う。

「ん？ ああ、気を付けてな」

コナンの声に気付いた小五郎は、新聞から一旦目を離してコナンの顔を見て言った後、再び新聞に目を戻した。

コナンは扉を閉めた後、階段を下りて、いつものルートを通り阿笠邸に歩き出す。

因みに、コナンが今日阿笠邸に行くということは、昨日の夕食の時にコナンが、三人に話し済みである。

毛利探偵事務所を出て約十五分後、コナンは阿笠邸のチャイムを鳴らした。

「はい」

チャイムを鳴らした瞬間、中から老人の声が聞こえてきた。

「博士。俺だ」

「おお！ 新一か。ちょっと待つとれ」

彼は、カチャツという音と共に鍵を開けて扉を開ける。

「ありがとう博士。灰原は？」

家に入ったコナンは、通してくれた礼の言葉を言うと、自分をここに呼び出した主の居場所を聞いた。

阿笠は鍵をかけてコナンに振り向く。そしてテーブルに歩いて行きながら、後ろを付いてくるコナンに、「哀君は下におるよ」、「と背中を向けて言う。

「そうか……」

阿笠の言葉に納得したコナンは、ここに来たら聞こうと思っていた疑問を、台所でコーヒーを入れている阿笠に聞いた。

「なあ、博士。あれから灰原の様子はどうか？」

あれからとは、以前ここで阿笠に言われた頼みごとのことである。阿笠は二人分のコーヒーカップを両手に持ち、

「ああ。君のおかげで、あれから哀君の生活に変化が出始めてきている。ちゃんと三食ワシと一緒に食べるようになったし、夜もしっかりと寝るようになったんじゃない」

そう言いながらコーヒーカップを持ってきた阿笠はコナンにカップを渡し、それを受け取ったコナンはソファアに腰掛ける。

阿笠も、コナンの正面のソファアに腰掛ける。

コーヒーを一口飲んだコナンは、そうか、と嬉しそうに呟き、微笑みを浮かべながら、再び持っているコーヒーカップに口をつける。

「ああ。皆君のおかげじゃよ。ありがとう」

「いいって博士」

改めて礼を言った阿笠に対し、照れながらコナンは返答する。

「あら。工藤君もう来てたの？ 早いじゃない」

阿笠とコナンがそんな話をしている時、地下室へ続く階段から白衣を身に纏い、右脇にファイルを抱えて現れた灰原が、コナンの姿を視認すると声をかけた。

「ああ。時間に余裕を持って、早く来たんだよ」

コナンが顔だけを左に向ける。

「そう」

それだけ言うと灰原は、カウンターのの上にファイルを置き、キッチンにコーヒーを淹れに行った。

そんな彼女の後ろ姿を見てコナンは、あいつ、無愛想なのは相変わらずだけど表情が以前に比べて明るくなったな、と灰原の変化をその顔に見たような気がした。

コーヒーを淹れ終わり、右手にカップを持って阿笠の左に腰かけた灰原は、一口口に含んだ後にテーブルにカップを置き、コナンに

目を合わせてこれまでのことを話し始める。

「なるほど、確かにジョディ先生にしては妙だな」

灰原の話しをコーヒーを飲みながら聞いていたコナンは、疑念の面持ちをする。

「どうするんじゃない。新一君」

灰原はコナンの様子を、腕を組みながら横目で見ている。

コナンは考えがまとまったのか、やや下を向いていた顔を上に上げて、決意したかのような目をしながら、正面に座る阿笠の目を見る。

「俺は、その電話は灰原の予想通り、ベルモットからなんじゃないかと思う」

コナンのその意見を聞いた灰原は、やっぱり、と心の中で頷く。

一方、ポーカークフェイスを崩さない灰原とは違い、阿笠は、なんじゃと！！、と驚愕する。

驚きすぎなんじゃないか？　と思うコナンだったが、彼がその電話にでた張本人だということを思い出し、それなら仕方ねえか、と内心で苦笑いを浮かべながら納得した。

「じゃがなぜじゃ？　なぜベルモットはジョディ先生の声を使ったんじゃない？　使う声色なら他にもあるじゃろう？　それに、なぜわざわざ警戒させるようなやり方をとったんじゃない？」

冷静さを取り戻した阿笠は、自分の頭に浮かんでくる疑問を次々にコナンにぶつけた。

そう、阿笠が言い放った疑問は、灰原も分かっていなかった。

「ここからは俺の推測だが、ベルモットは、俺達に何かを伝えようとしてるんじゃないかと思う」

コナンは顎に手を当てるポーズして、自分の考えを話し始める。

阿笠と灰原は黙って聞く。

「ジョディ先生の声色を使ったのは、俺達がジョディ先生本人かどうかを確かめるために彼女に電話をさせるため。当然ジョディ先生

は覚えが無いから、電話してないわ、と答える。そうなれば、FBIはその電話主を警戒する。そして、電話の主が米花埠頭に現れると分かれば、FBIはその人物を捕らえるべく米花埠頭に向かう。そこでベルモットは埠頭に現れて、集まったFBIに何かを伝えるんじゃないか、と思う。因みに、阿笠邸に電話してきたのは電話番号を知られないため、つてところか。ここの電話機、電話番号が表示されない、旧式の電話機だからな」

コナンは自分の推測を話した後、コーヒーを口にして一息ついた。なるほど。でも、彼女らしくない行動ね」

「ああ。そこがどうも解せないんだよな」

コナンは、コーヒーカップを机に置くと腕組みをして、背もたれに寄りかかる。

「とにかく、ジヨデイ先生に電話してみたらどうじゃ？ 考えるのはそれからでも遅くはなからう。それに、ジヨデイ先生がかけてきたという可能性も、零ではないわけじゃからな」

彼の意見に、そうだな、と答えたコナンは、席を立って電話機に歩を進める。そして、彼女の携帯の番号をプッシュすると、静かな阿笠邸に機械音がリズムよく響いた。

一つの謎の答えと一つの前進（前書き）

今回から、『杯土町』を『杯戸町』と書くことにしました。実は、原作コミックを読んでいたところ、

『杯土町』ではなく、『杯戸町』と書かれていまして、それに気付き驚いた私は、

『あるQ&A』のサイトに、書き込みをしました。

そして、返ってきた返答は、『どちらの漢字も正解』でした。この答えに疑問を持ったのですが、

私はこの返答を信じて、この答えを受け止めました。

しかし、「原作通りのほうがいいかなあ?」、と思った私は、『杯戸町』と書くことにしました。

では、本編どうぞ！

一つの謎の答えと一つの前進

ここは、杯戸町のとあるマンション。今、一人の明らかに人相の悪い男が、二十階の部屋の扉を開ける。扉を閉めようとすると、閉じかけた扉の隙間から外の様子を警戒するような目で、扉の隙間から警戒の眼差しを外に送る。異常無しと判断したその男は、扉を閉めてスリッパに履き替えると、前方にある扉に向かって歩を進める。男が扉を開けると、開く音に反応した中の二人が男の方へ向く。

「キヤメル、お帰りなさい」

部屋の中心にあるソファーに腰掛ける女性が、男の顔を確認すると、キヤメルと呼ばれる男を笑顔で迎えた。

「キヤメル君、お帰り」

その女性の向かい側に腰掛けている男性が、女性に続いて言う。

「ええ。買い出し行って来ました。状況どうですか？」

女性が首を横に振ると、

「そうですね……」

キヤメルは残念そうに肩を落とす。納得したキヤメルは、買ってきた食材をしまったため、台所にある冷蔵庫に向かう。扉を開けると、様々な具材が詰め込まれている棚に一つ一つ丁寧に、レジ袋から取り出した食材をしまつていく。全てしまい終わった後、空になったレジ袋を、プラゴミ専用のゴミ箱に丸めて捨てた。

キヤメルは居間に戻り、眼鏡をかけたジェイムズ・ブラックの名を持つ男の、隣に腰かける。

その瞬間、金髪の女性ジョディ・スターリングの携帯が、着信を知らせる音を発した。その音にジェイムズとキヤメルは、ジョディへ顔を向ける。

ジョディはそんな二人の視線を全く気にせず、上着の右ポケットから携帯を取り出し、携帯を開いて着信相手を確認する。確認したジョディの目が、一瞬見開いたのを正面に腰掛けている二人は見逃

さない。

ジョディは通話ボタンを押して、携帯を耳に当てる。

「もしもし」

「ジョディ先生？コナンだよ」

「クールキッド？」

携帯の着信を知らせる表示のところに、阿笠邸と表示されていたことから、ジョディは阿笠博士か灰原哀かと思ったが、聞こえてきた声と名のつた名前が江戸川コナンだったということに、ジョディは驚いて彼のあだ名を言った。

その言葉に、ジェイムズとキャメルも驚き、静かに事の行方を見守る。

「あのねジョディ先生。聞きたいことがあるんだけど……」

「ん？何かしら？」

「昨日、阿笠博士の家に電話した？」

「え？ していないけど、どうして？」

(やっぱりな)、とコナンは心の中でそう思うと、ジョディの問いに答える。

「実はね。昨日博士の家に」

そう言ったコナンはジョディに、阿笠邸にかかってきた謎の電話の内容と、それに対する自分の推測を、一言残さずに話し始める。

因みにコナンが話し始めた時、ジョディは『覚醒ボタン』を押して、先ほどから静観していた二人に、聞こえるようにするため、携帯を机の上に置いた。

「
と言う訳なんだ」

全てを話し終えたコナンは、ジョディ達の意見を聞くこととする。

「では君は、ベルモットが我々に協力しようとしていて、何らかの情報を与えるために呼び出している、そう考えているのかね？」

「ジェイムズさん？ あ、うん。そうだよ」

「うーん、まあ何であれ、コナン君。一旦こちらに来てくれるかね

？　そこで話をしよう」

これ以上電話で会話するのは、危険と判断したジェイムズは、まだ続くと思われる会話を立ち切り、コナンに、こちらに来るように伝える。

「うん。分かった」

コナンから了承の返事が来ると、ジェイムズは自分達の現在地を伝えて、電話を切った。

電話が切れたことを確認したコナンは受話器を置き、コナンを捉えながら静かに話を聞いていた阿笠と灰原に、「俺、これからジェイムズさん達のところへ行ってくる」、と言いながら、玄関に向かって歩き始める。

「ジェイムズさんのところって？」

「たぶん、なにか重大な話があるんじゃないかと思う。まあ電話越しだと、奴らに盗聴されるということもあるしな」

「重大な話？　なぜそう思うんじゃ？」

玄関へ歩くことを止めないコナンに、阿笠は灰原同様席を立つてコナンに聞く。

「重大な話じゃなきゃ、ジヨディ先生がここに来るはずだろう？」

ジヨディ先生以外にもジェイムズさんがいることを踏まえると、FBIが集まって重要な話をしてるんじゃないか？　そして、それを俺にも聞かせたいってところだろうよ」

「なるほど」

阿笠はコナンの後ろをついて行き、玄関で土足に履き替えるコナンを見送ろうとする。

「じゃあな」

「ああ、気を付けてな」

そう言つとコナンは、玄関の扉を開けて外に出て行った。

扉が閉まったのを確認した阿笠は反対を向き、立ちながら不安そうな顔をしている灰原に、「大丈夫じゃよ哀君」、と笑顔で声をか

けた。

「ええ。そうだといいんだけど……」

灰原は、一応大丈夫そうに振る舞ったつもりだが、その表情が変わることはなく、コナンが出て行った玄関の扉を見詰めていた。

コナンは阿笠邸を出た後バスを拾い、杯戸町にあるマンションへと向かっている。コナンは、窓の外で流れている景色を眺めながら頭の中で、ベルモットの不可解な行動の理由をもう一度推測したが答えはでない。バスはコナンが目指す杯戸町のマンションよりも、少し離れたところにあるバス停に停車して、コナンは料金を払って降車した。

コナンが降りたことを確認した運転手はバスの前の扉を閉めて、次のバス停へと走り出した。

コナンはバスが走り出すと、自分もマンションというバス停に向かって歩を進めるのだった。

一つの謎の答えと一つの前進（後書き）

今回は【アンドレ・キャメル】 捜査官が登場しました。
個人的にこのキャラクターは、『好き』な部類に入りますね。
皆さんはどうですか？

では、感想等お待ちしております！

少年探偵の正体と秘密を知る者（前書き）

今回は、コナンが移動中のときに、

毛利探偵事務所では何が起きているのかを書きました。

それでは、どうぞ。

少年探偵の正体と秘密を知る者

コナンが杯戸町についたところ、毛利探偵事務所では別のことが起こっていた。ここは事務所の上の階、つまり毛利家の自宅である。居間のテーブルに、正面合わせて座っている二人の人物。彼らが座っているテーブルには、飲み物類が一切ない。これは、突然この会話が発生したことを意味している。そう、まさにそれは突然だった。

五分前。

一通り掃除を終え、居間で休憩していた白馬は、掃除道具を片づけて居間に来た蘭に、「お疲れ様」と口にした。その白馬に対し蘭も、「お疲れさま。手伝ってくれてありがとう白馬君」と白馬と同じ笑顔でお礼の言葉を述べた後、白馬と机越しに正面になるように座る。

「いえ。僕でよければいつでも手伝いますよ」と白馬はお礼の言葉を受け止め、且つ自分の気持ちを、正面に座っている蘭に言う。

すると蘭は、満面の笑みを浮かべて、

「ありがとう。ところで白馬君。頼みたい事があるんだけど、いい？」

「え？ ええ。僕にできることであれば、お力をお貸ししますよ」

突然、頼み事と言われ、驚きの表情を見せた白馬だったが、自分にできる頼み事なのかどうかを見極めるため、蘭に内容を聞くことにした。

「ありがとう白馬君。頼み事というのはね。新一のことなの……」

「工藤新一君のことですか？」

思いもよらない人名の登場に、白馬は目を見開いて蘭の顔を見る。「うん。白馬君に、今新一が『どこで何をしているのか』を調べてほしいの」

「どうしてそんな事を？」

白馬は一旦心を落ち着かせて、真剣な目をして蘭の顔を見ながら、詳細な理由を聞くこととする。

一方、蘭は少々下を向いて、寂しそうな表情をしている。

「その前に白馬君。今から言うことは誰にも言わないって約束してくれる？」

「は、はい。分かりました。約束しましょう」

白馬は内心、秘密の話なのか？ と思いつつも、そこには触れずに約束した。

「実はね。今まで私、不思議に思っていた事があるの」

蘭は、白馬の目を見ながら、寂しい表情を変えずに話しを進める。

白馬は、取りあえず蘭の話には口出しせずに聞くこと、座布団の上に正座をして、話しを聞く。

「新一がいなくなってもう随分経つけど、どうして新一の目撃情報がないんだろうって」

「……」

白馬は蘭の話しを黙って聞いている。

蘭はそんな白馬を気にせずに話しを進めた。

「白馬君も同じ探偵なら知ってるよね？ 新一が行方不明になっていること」

それは知っているに決まっている。何たって、新聞の一面に嫌でも分かるほどにのっていたのだから。

白馬は、「彼女が自分の返事を待っている」と思い、「ええ。知っています。と言うより今では、彼が行方不明だと言うことを、知らない人のほうがおかしいでしょうね」と、返事をする。

「そう。世間じゃ新一は行方不明となっているけど、実際には行方不明じゃないの」

そこで蘭は、一呼吸間を置いて続きを話す。

「私の携帯にかかってくるの　新一からの電話が」

「！」

そう言い終わると蘭は、ズボンのポケットから携帯を取り出して

白馬に画面を向ける。そこには、工藤新一からの着信履歴が、行方不明になった後の日付で表示されていた。それも一件ではなく、何件でもある。

白馬は蘭の言葉と、携帯の履歴に内心驚きつつもポーカーフェイスを保つと、顔をやや下に向ける。

蘭は携帯を閉じてポケットに入れると、白馬のその態度を思考中と判断し話しを進める。

「それだけじゃないの。白馬君は、服部平次君を知ってる？」

白馬は蘭の質問に、「ええ。探偵甲子園で顔を合せましたから」と表情を変えずに答える。

「その服部君がね……時たまコナン君に漏らすの、『工藤』って「！！」」

白馬はまたしても驚かされた。それは一体どういうことなのか？

白馬は一瞬ポーカーフェイスが崩れつつも、すぐにポーカーフェイスを直して、そのまま蘭の話しを聞く。

「服部君は、『間違えた』とか、『よく似とるんや』とかで、コナン君を『工藤』って言うたびにそのことを誤ってるんだけど、会うたびにそう口にするの」

そこまで言い終わった蘭は、喋りすぎで疲れたのか、五秒ほど間をおいて再び話し始める。

白馬は、蘭の様子をじっと見ている。

「それに白馬君不思議に思わない？ コナン君のこと」

白馬は首を、縦にも横にも振らずに蘭のことを見つめたまま黙っている。

そんな白馬を、蘭は疑問に感じたが、今は聞くことよりも話しを進める。

「コナン君はとにかく不思議な子　　うっん、異常だね。何もかも」

蘭は、自分を見てくる白馬の目を見つめ返す。

「推理力、行動力、知識、そして一番不思議なのは、彼のあの雰囲気

「気よ」

白馬は蘭の話聞いていて、表は全く表情を変えていなかったが、裏では彼女の意見に納得していた。自分も、あの少年のことは自分も不思議に思っていた。小学生にしては、彼女の言う三点が異常に高い。雰囲気もそうだ。子供にしては、大人の雰囲気を発しているような感じがしてならない。彼女もそう思っていたようで、自分が思っていたことを口にした。大人の雰囲気を持つ子供、子供にしては高い知能と、知識を持つ子供、そんな子供は世の中探せば沢山見つかるだろう。しかしあの少年は、その子供たちの遙か、上に位置している。

「それにね。新一が消えた日なの、コナン君が表れたのは」

白馬は、自分の中で考えをまとめていた。結論から言うと、これまでの蘭の話聞く限り、誰が考えても出る結論は一つしかない。

江戸川コナン「工藤新一、という結論。」

確かに、コナンのあの異常さは、高校生の頭脳ならば納得がいく。しかし、どうしても信じられないことが一つ。なぜ、彼は今の姿になっているのか？ という最大の疑問。アニメや何かの物語の話しなら、体が縮んだり大きくなったり、別の生命もしくは、別の物質に変身するなんてことは珍しいことではない。そこが解せない白馬は、蘭に質問してみることにした。ただし、その表情は探偵のものへと変わっている。

「蘭さん。君の言いたいことは分かります。結論から言うと君は、工藤新一は江戸川コナンと思っているのですね？」

その白馬の問いに、蘭は間をおかず、「ええ」、と首を縦に振りながら返事をする。

「しかし蘭さん。仮に僕たちの推測が当たっていたとしましょう。となると、一つの疑問が浮かんでくるはずですよ。なぜ工藤新一は江戸川コナンに若返ったのか？ いえ、幼児化したのか？」

白馬は微笑みを漏らす。

「それは……私にも分からない」

そう、蘭もそこがどうしても理解不能だった。体が縮むなんて話到底信じられなかった。そこで、蘭は白馬に聞くことにした。探偵として何件も事件を解決している彼なら、もしかしたら期待した答えをくれるかもしれない、と。しかし彼が出した答えは、自分と同じ疑問だった。と言うより、こんな話し信じるというほうが無理かもしれない。現に、工藤新一＝江戸川コナンというのは、自分達の勝手な思い込みに過ぎない。証拠が一切ないのだ。もしかしたら、本当に彼らは別人という考えも、かなり少ないが零ではなかった。それから二人はお互いに口を開かず、時間だけが経過していき、「こうしても仕方ない」、と思った白馬が立ち上がって、まだ座っている蘭に微笑みながら話しかける。

「まあ、蘭さん。何であれ、この事は僕もしばらく考えてみます」
そう言つと白馬は、居間を出ていった。

蘭は出ていく白馬に、「そうね。付き合ってくれて、ありがとう」と、「分かってくれなかったのかな?」、という寂しさを押し殺して、無理に作った笑顔で白馬に言った。

それを聞いた白馬は止まって顔だけを向けると、トレードマークと化している微笑みを返し、玄関から出て行った。

しかし、二人が別れた後、二人の表情は再び曇っていった。

少年探偵の正体と秘密を知る者（後書き）

さてさて、今回は、『白馬がコナンに疑惑を持ったらどうなるか？』という、私の個人的な思いで、こつこつ話になりました。

原作では、白馬がコナンの正体を疑っている模写はありませんが、これからはどうなんでしょうね？楽しみです。

では、評価、感想待ってまーす。

諜報員007からの情報と三人目（前書き）

皆さん、評価ありがとうございます!!

いや、 “嬉しい” の一言です!

これからも、

『一切手抜きをせずに、常に全力で書いていきます』ので、
よろしく願います!!

さてさて、サブタイトルの『007』とは誰のことか、
皆さんお分かりですよね？

では、本編どうぞ!!

探偵員007からの情報と三人目

「こんにちは。」

「コナンが扉をノックする。本当は、チャイムを鳴らしたいところなのだが、子供の背丈ではとても届かない。」

「はい。」

「ノックをして数秒待つと、聞き覚えのある声が扉越しに聞こえる。『ジョディ先生、コナンだよ。』」

「クールキッド？ ちょっと待ってて。」

「ジョディは、扉にコナンがぶつかからないように緩慢にドアを開けると、徐々に彼の姿を捉えていく。」

「良く来てくれたわ。入って。」

「お邪魔します。」

「子供らしい活気な雰囲気です。コナンは部屋に入り、靴を脱いでスリッパに履き替える。」

「ジョディもスリッパに履き替えると、こっちよ、と言って、コナンを後ろにして部屋へ案内する。」

「ジョディが扉を開けると、最初にコナンの目に入ってきたのは、ソファーに向かい合わせに腰掛ける二人の男の姿だ。」

「こんにちは、コナン君。」

「部屋に入ってきたコナンを、手前側に座っていたキャメルが、笑顔で挨拶をする。」

「こんにちは。キャメル捜査官。」

「コナンは子供らしい笑顔を作り、彼の顔を見ながら挨拶を返す。」

「ではコナン君、ジョディ君、座ってくれ。」

「はい。」

「ジェームズという言葉の聞こえと、キャメルの正面にコナンは腰掛ける。一方ジョディは、ジェームズの正面に腰掛ける。」

「さて、コナン君にも話があるとは思いますが、先に我々の話をさ

せてくれ」

コナンを注視しながらジエイムズが言うと、コナンはこくりと頷いて、「うん。僕もその話を聞きたいから……」、「と固い表情で答える。子供の無邪気な雰囲気は、彼にはもうない。

「ありがとう、コナン君。 さて、この間組織に潜入している本堂瑛海さんからある情報が入った」

本堂瑛海、偽名は水無怜奈、コードネームはキール。コナンが彼女と、初めて顔を合わせたのは、毛利小五郎の元に依頼しに来たときである。この依頼は一言で言えば、ピンポンダッシュである。この事件の犯人は、瑛海を気遣った小学生であり、コナンの活躍により解決に導かれた……と思われた。しかし、この事件の情報収集のため、コナンが仕掛けた盗聴器及び発信機が偶然、彼女の靴底に付いてしまう。そして、その盗聴器から聞こえてくる会話を、これまた偶然聞いてしまったコナンは、彼女が、自分が追っている組織の一員であることを突き止める。その後、思いもよらないトラブルによって、瑛海は杯戸中央病院に運ばれ、事件は一旦終わったかに見えたが、そのことを知った組織が瑛海を奪還するため、病院の人々及びFBI捜査官を、混乱に陥れる。結果、FBI捜査官やコナンの奮戦にも関わらず、彼女の奪還を許してしまう。しかし、彼女が奪還される前、赤井秀一とコナン、本堂瑛海の三人によって、密かな計画が立てられており、この本堂瑛海の奪還は、彼らの計画通りであったことが明かされる。なお、彼女が黒の組織のメンバーではなくCIAの諜報員であり、かつピンポンダッシュの依頼は表向きで、彼女の本当の依頼は、毛利小五郎に組織のことを調べている弟の、本堂瑛祐の保護を頼むことであったことも、この密かな計画で明かされている。因みにこの瑛海の奪還が、わざとであったことを聞かされたFBI捜査官たちは、当然驚愕したわけで、今は彼女の情報を元に、組織のことを探っている。しかし瑛海も、何の犠牲も無しに今の場所に立っているわけではない。自らのミスにより父を失い、組織にキールという鋼の楔を打ちこむために、FBIの

有能な一人の男をその手にかけて。そんな彼女の肩に載っている希望は大きく、それと同時に、責任も生半可なものではなかった。

「怜奈さんから情報が!？」

ジェームズの話聞き、コナンは喜びの感情に支配されるが、表情は驚きだ。

「ええ。その前に、コナン君は知ってるかしら？ 杯戸町で起きた射殺事件を……」

ジョディは、右隣に座っているコナンに、横目で顔を見ながら話しかける。

「うん。五十嵐さんと木村さんが殺された事件だよな?」

コナンは内心で、この事件にはやはり組織が関わってるのか?、と言う疑問を思いながら、ジョディの目を覗き込む。

「ええ。実はこの事件、組織のメンバーが起こしたもののな」

「やつぱり、そうだったんだ」

ジョディは、コナンが驚くものと予想していたため、彼のやつぱりという反応に瞬きをする。

「『やつぱり』とはどういうことだね?」

身を乗り出して、ジェームズが言う。

コナンは、ジェームズ視点を移して口を開く。

「うん。実は僕、その事件を密かに追ってたんだ。警察の人達と一緒に」

「本当なのかい? コナン君」

キヤメルが一驚の面持ちで言い放つが、コナンはそれには答ええない。ちなみに、ジェームズもジョディも、コナンが話したことに驚きを隠せないようだ。

「もしかしたら、その事件を起こしたのってジンとウォツカじゃない?」

「ええ、そうだけど……どうしてそれを?」

ジェームズとキヤメルの言葉を代弁するようにジョディが答えると、コナンはジョディに視線を移す。

「警察の人たちが、事件の二週間前に黒色のポルシェを見たついで目撃情報があることを、調べてくれたんだ」

「コナン君。警察が調べたということは、彼らは組織の目に入っているということだね!？」

普段の冷静な姿ではなく、慌てた面持ちを見せているのはジェイムズだ。

キヤメルとジョーディも、目を丸くしている。

コナンは、ジェイムズと目を合わせて答える。その雰囲気と表情は、彼だけ違う空気を吸っているかのように、落ち着いている。

「うん。その証拠に襲われたみたいだよ。謎の三人組にね」

「謎の三人組って?」

ジョーディが真顔で尋ねる。ジェイムズとキヤメルも、落ち着きを取り戻したようで、真顔を見せる。

「警察の人達が見たところによると、その三人組は黒色のスモークガラス付きのヘルメット、黒色のレザースーツ、そして黒色のオフロードバイクに乗ってみたい。拳銃も使ってみてみたいだよ」

「つまり、上から下まで黒。組織のメンバーですかね?」

キヤメルが、ジェイムズの顔を見ながら意見を言い放った。

「うむ。彼ら警察が、組織が関わった事件を捜査中に襲われた。しかもその人物たちは、組織のメンバーを連想させる黒で統一された服を着用。私はこれが偶然とは思えん」

キヤメルの意見にジェイムズは、横目でキヤメルの目を見ながら、腕組みをして自分の考えを言った。

「それで、ジェイムズさん。怜奈さんからの情報は?」

「うむ。彼女からの情報は……」

ジェイムズは腕組みを解き、両膝の上に握り拳を載せる。そしてコナンに視線を合わせる。

「『三人目の標的が決まった』というものだ」

諜報員007からの情報と三人目（後書き）

今回は名前だけの登場ですが、

【本堂瑛海】をだしてみました。

彼女の『過去』を振り返る部分で、

予想はできているとは思いますが、

『赤い彗星』は死んでいるという設定になっています。

もし、「彼もだしてほしかった」という方には、

「ごめんなさい」の一言です……。

では、評価、感想、待ってまーす！

少年の決意と高校生達の決断（前書き）

ふう〜。今日は昨日と違い、

『暑さ』があまりなく、気分的に書きやすい日です。

暑いと、書くころと違って、書く気力が湧かないんですね・・・。
皆さんはどうですか？

では、じじい！

少年の決意と高校生達の決断

「三人目!？」

ジェイムズの言葉を聞いたコナンは、また人の命を奪うのか!、と言う思いが怒りという形で言葉に表れる。コナンの子供離れた怒りが籠った声に、三人は目をぱちくりさせる。当然だろう。子供が大人の重苦しい雰囲気を持たせれば、驚くなどという方が無理な話だ。ジェイムズは、頭ではそれを気にしつつも話しを進める。

「ああ。彼女からの情報によると、今回狙われるのは本間広人さん。しかし、送られてきた情報は名前と住所だけであって、いつどこでどんな方法で狙うのかという情報はなかった」

コナンは、深く息を吸って湧き上がっていた怒りを殺すと、ジェイムズの目と視点を合わせる。

「今、本間さんには護衛をつけている。今のところは異常ないそう
だ」

聞き終えたコナンは、やや下に顔を向けて視線を外すと、沈黙する。

一方ジョディは、視線をコナンからジェイムズに移して、

「本間さんのことも気になるけれど、今は今夜のことを考えましよう」、「とジェイムズに提案する。

「そうだな」

そのジョディの意見に同意したジェイムズは、頭を本間さんから今夜のことに素早く切り替える。

コナンは、顔を上げて再びジェイムズの顔を捉える。視界の両端には、キャメルとジョディが入っている。

「そのことなただけど……」

コナンが口を開くと、ジェイムズらの目は彼に浴びせられる。

「米花埠頭には、僕が一人で行こうと思う」

「何ですって!？」

驚愕の言葉をあげたのはジョディだ。余りにも衝撃的な言葉に、驚きを押さえられなかったのだろう。ジェイムズ、キヤメルも、目を丸くしている。

「どういうことかね？」

ジェイムズが、キヤメルとジョディの言葉の代わりに務めるように尋ねる。

コナンは、子供特有の無邪気な笑顔でジェイムズを見ると、

「ベルモットが呼び出したのは僕一人でしょ？ まあ、一人で行くのは危険なことだって言うのは分かってるよ。だから、FBIの人達には周りで待機していてほしいんだ」

「なるほど。君が一人で行き彼女と接触して、話を聞くというのか。そして我々は、万が一の時に備えて待機か……しかし」

「大丈夫だよ。僕には病院でやったときのように、盗聴器と隠しカメラを付けて、FBIの人たちに映像と話し声を聞いてもらうことにするから。それに、返って大勢でぞろぞろ行くと、向こうが警戒しちゃうかもしれないでしょ？」

「うむ……」

ジェイムズは腕組みをして、口内で声を漏らす。

「大丈夫だよ。それに、ベルモットは敵じゃないよ」

安堵させるように、コナンは笑う。

「分かった。君の考えを信じよう」

コナンの言葉に納得させられたのか、ジェイムズは腕組みを解く。だが、表情は固い。

「いいんですか！？ ジェイムズ？」

ジョディは納得できないようだ。相手は、彼女が組織のメンバーの中でも、一番憎しみの心を抱いている人物だ。納得いかないのも無理はない。

キヤメルもジョディの意見に納得のようだ。「危険すぎるのでは」と真顔でジェイムズに言い放つ。

ジェイムズは、ジョディとキヤメルを視界に入れながら、

「確かに、コナン君一人というのは余りにも危険だ。しかし、コナン君の意見は間違っていない。君たちもそう思うだろうか？」

ジェームズは、二人の顔を交互に見る。

ジョディはコナンの考えに納得していた。しかし、これが組織の罠という可能性は零じゃない。しかも、罠ではないとしても、相手はあのベルモットだ。コナンは、「彼女は敵じゃない」、と言っているが、どうしても信じられなかった。

それは、キャメルも同感だった。彼らは赤井の死を経験したためか、これ以上組織の手によって、周りの人々が、命を失う光景を見ることは避けたかった。だが、コナンの考えに納得してしまう自分がいることも事実。おそらく、ジェームズも同じ考えだろう。それでも彼は、コナンの意見に納得して、了承の返事を返した。それは、江戸川コナンの力量を測ってなのか、信用しているのかは分からない。真意は本人の心の内、知る術は無い。

「ハア　分かったわ」

ジョディは、深い溜息をつく。

「分かりました。でも、コナン君。本当に気をつけるんだよ」

「うん！」

コナンは三人を捉えて、決意の輝いた眼差しを向ける。

「では、これから準備に取り掛かるう」

そう言うジェームズは立ち上がり、今夜の準備をするために動きだした。

そのころ、毛利探偵事務所。

蘭の話しを聞き、一旦外に出た白馬は、事務所の階段を降り切り、事務所と隣の建物の間にある路地に、二歩ほど歩を進めると、ズボンのポケットから携帯を取り出し、番号を素早く押した後、右耳に当てる。

プルルルル・・・プルルルル。

着信を知らせる機械音が、三回目を発しようとした瞬間、「もし

もし」と相手の声が聞こえた。

「お久しぶりですね。服部平次君」

「ん？ その声！ まさかあんた 白馬探かいな!？」

「嬉しいですね。声を聞いただけで僕だと分かるだなんて」

「ああ、ムカつくやつちゃからな。忘れよー思っても、忘れられへん」

「フフ。相変わらずですね」

「で？ 自分が電話してくるなんて珍しいやないか……なんかあったんか？」

服部は、珍しい人物からの電話に、胸に妙な違和感を覚える。

「ええ、服部君。単刀直入に言います。君は 江戸川コナン君の本当の顔を御存じですか？」

「『本当の顔』ってちゅうんはどう言う意味や？」

服部は白馬の言葉を聞くと、表情が驚きの色に豹変するが、幸い電話越しなため、その表情は白馬にはバレていない。

「どうもこうも、そのままの意味ですよ」

「……」

白馬が言い終わった後、平次はうんともすんとも言わずに、沈黙する。そのまま二人の間に、三秒ほどの静けさが流れるが、白馬はこの三秒で、ほぼ確信していた。服部君は何か知っている、と。

「白馬」

「何ですか？」

「今から俺、そっちに行くさかい。詳しくう事はそっちで話さんか？」

「分かりました。では、毛利探偵事務所に来てください。今は訳あって、そこにお世話になっていますから」

服部は、「分かった」と言い電話を切る。

「ツーツー」という機械音を聞くと、白馬は携帯をしまう。そして白馬はこの後、どんな未来が待っているようにも、全てを受け入れる覚悟を心に密かに決め、探偵事務所の階段を昇り、事務所の扉を開

けた。

場所は変わり、東から西へ。

ここ大阪、服部邸。

白馬からの電話を、自室で受けた平次は、できるだけ素早く簡潔に荷物をまとめると、リュックに詰めて背負ると、自室を出る。階段を駆け下り、台所を通り過ぎようとした平次は、中にいる母に気付き、顔を覗かせる。

「オカン。急やけど、東京に行ってくるさかい」

突然声をかけられるのは日常茶飯事と化している静華は、驚くこともなく振り向き、「行つてらっしゃい」、とだけ声をかけた。

「ああ、行つてくるで」

静華に返事をした平次は、走つて玄関に向かう。どたどた、という音は台所に届いていたが静華は木に留めない。下駄箱から素早く靴を取りだして履くと、その勢いを弱めずに平次は出て行く。そして平次は、空一面に広がる青空を見ながら思う。あの探偵は気付いとる、と。

少年の決意と高校生達の決断（後書き）

今回は、【服部平次】が登場ですね。

今まで『名前だけ』でしたので、

これが“本当”の登場かな・・・？

大阪弁は、私個人としては書けているつもりですが、皆さんには違和感があるかもしれません。

もし、間違っている部分がありましたら、教えてくれれば幸いです。

では、感想等お待ちしております！

変わる者、変わっていく者（前書き）

あと三話で三十話か・・・。

この間二十話更新したばかりなのに、

もう三十話だなんて・・・。

この調子でドンドン書きますのでよろしくー！

では、じゃー！ー！

変わる者、変わっていく者

現在時刻、十三時。

昼食を食べ終えた、ジエイムズ、キャメル、ジョディとコナンは、それぞれの仕事についていた。ジエイムズは今夜のために、仲間達に無駄のない動きで指示をしている。キャメルとジョディはジエイムズの指示で、必要な機材や人員の確認をしている。

コナンは作業の邪魔にならないように、マンシヨンの一階に来て外の空気を吸っている。そんなコナンの元に、一本の電話が届く。鳴っている携帯は、右ポケットに入っている江戸川コナン用のものである。相手を確認すると、そこには阿笠邸とある。コナンは通話ボタンを押すと、

「もしもし」

「工藤君、今大丈夫？」

電話は声を聞く限り灰原であつた。

「ああ、大丈夫だけど　なんだ？」

灰原は一呼吸おいて、

「今夜のこと決まった？」

「え？　ああ、決まったよ」

「どうなったの？」

「『どう』って……大丈夫だよ、上手くいく」

詳細を言わないのは、彼女に不安を持たせないためなのだろう。

「どう言つふうに『大丈夫』なの？」

「え？」

「あなた、また危険なことしようとしてるんじゃないわよね？」

コナンの今までの行動や、彼の性格を理解しているからだろう。だから彼女は、コナンの言ったことを信用しないのだろう。

一方コナンは、安堵の笑顔を浮かべると、

「ホントに大丈夫だって。心配することねーよ。FBIだってつい

てるんだ」

「　　ならいいけど」

「それと、念には念を入れて言っておくけどよ」

「なに？」

「オメエ、今回は来るなよ」

「え？」

灰原の目が刹那、丸くなる。

「あ、いや。勘違いだったらいだけだよ。　　ホラ、前にあの

埠頭でベルモットたちとやりあったとき、オメエ来ただろ？」

灰原は、くすつと笑うと、

「なるほどね。つまりあなたは、場所を知っている私がまた来るんじゃないかって、心配しているのね」

「あ、ああ……オメエまたあんな事したら　　」

曇った声で言ったコナンの言葉を、灰原が遮る。

「大丈夫よ、今回は行かないわ。それにもう、あんな事はしないって約束したでしょう？」

コナンや灰原の言うあんな事とは、灰原が自分を犠牲にして皆を守ろうとしたことだ。彼女は、組織と言う悪魔の手から周りの人々を守るため、何度か死後の世界に逝こうとしたことがある。しかし、それを何度も阻止された。そして、その行動を阻止した彼は言う。

「運命から逃げるな」と。この世界には、どんなに足掻いても逃れられない、運命というものが存在する。そう、運命からは逃れることはできない。それが彼女、灰原哀の過去の考えであった。しかし、運命は変えられるということを知った。……小さな探偵によって。その運命を拒否し、変えようと努力するか。その運命を信じ、未来を受け止めるか。　　それは人の努力しだい。そして彼女は変わった。その日から、自らの死という運命を拒絶し、組織を倒すという運命に変えようと、努力を始めた。小さな名探偵は、その頭脳と行動力で戦い、小さな科学者は、組織に対する知識と、並外れ

た科学力でコナンを支援する。その並外れた科学力は今、アポトキシン4869の解毒剤を作るために、活躍している。

「フツ、そうだな。じゃあな切るぜ」

「ええ。でも本当に気を付けてよ。何が起こっても不思議じゃないんだから……」

「ああ、油断はしねえ。じゃあな」

「ええ」

安心感の籠った灰原の声を聞くと、コナンは電話を切る。そして、両手を天一杯に伸ばして背伸びをし、空気を思いつきり吸い込む。肺まで行き届いた空気は、コナンの気持ちを新鮮なものへ変えさせる。

毛利探偵事務所では、小五郎、蘭、白馬が、白馬と蘭が作った昼食を食べ終えたところだ。

小五郎は再び事務所の回転椅子に腰かけ、依頼人を待っている。

蘭は、事務所内のソファに座って、昼食前に白馬が話した、服部が来るのを待っていた。

白馬は蘭と同じく、事務所内のソファに、蘭と向かい合わせに座っている。

因みに、事務所内に会話は一切ない。

小五郎は、二人の雰囲気を感じて話かけようとするが、どうにも声がかけづらい。その二人は、服部の来客を今か今かと待っている。

白馬は電話で話したこと、江戸川コナンの正体を知るために、内心では落ち着いていられない気持ちを覚えている。探偵の真実を知りたいという欲望が、それを生み出しているのだろう。蘭も白馬と同じ理由である。

そこに、タイミングが良いのか悪いのか分からないが、事務所の扉が開く。

「おう、邪魔すんで」

三人の視線が彼に集中しり中、

「服部君。ノックぐらいしてください。礼儀知らずですよ」

「固いこと言うなや」

服部は、小五郎と蘭に視線を向けると、

「おっちゃんもねーちゃんも久しぶりやな。探偵甲子園以来やな」

服部は背負ってきたリュックを床に置いてから、小五郎と蘭に、
彼なりの挨拶をした。

「ああ。久しぶりだな」

「久しぶり。でも和葉ちゃんは来てないの？」

「ああ。今日は連れてきてへんぞ」

「そうなんだ。珍しいね」

「そうやな。すまん、ねーちゃん」

「ううん。いいよ」

すると、白馬が席を立つて服部に近寄る。

「服部君。さっそく話があるのですが……」

「分かるとる　　せやけど、ここではよそつや」

服部は、目をきよるきよるさせながら言う。

「そうですね。上の自宅で、お話ししましょうか？」

「そうやな。おっちゃんええか？」

「あ、ああ。いいぞ」

いつもと雰囲気が、何となく違う服部に疑問を持ちながら、小五郎はそれを許可した。

服部と白馬は、開いている事務所の扉から出て、自宅に向かうため階段を昇ろうとした。その時、「待つて。服部君」と蘭が事務所内から出てきて、二人を呼び止める。同時に服部と白馬が振り向くと、服部が口を開く。

「なんや？」

「その話し、ここじゃだめなの？」

「こくりと顔いて見せた服部は、」

「ああ。男通しの話なんや」

「……そう」

そう呟くと蘭は、素直に事務所内に戻って行った。本当はここで、「コナン君のことじゃないの?」、と云うつもりだったが、小五郎がいるため言えなかった。できれば、今は父には言いたくなかった。自分の考えにすら整理がつかない状況では、言っても信じてもらえないだろうし、言いたくもなかった。その本人は、娘の様子が気になったものの、声はかけないほうがいい、と父親の勘がそう警告している気がして、声をかけなかった。

変わる者、変わっていく者（後書き）

今回は『運命』について取り上げました。

皆さんは、「運命は決まっているもの」なのか、

「変えるもの」なのか、どちらだと思えますか？

私は「変えるもの」だと信じています。

では、評価、感想お願いしまーす！

秘密を知った者と秘密を知ろうとする者

毛利探偵事務所の三階、自宅の居間。

机越しに二人の男が向き合い、目を合わせている。二人とも相手を注視したまま、目線を動かさない。真剣な眼差しだ。

「さっそく聞こうか？ 白馬」

今話したした、色黒で大阪弁のなまりを持つ青年は、目の前で正座をして、真剣にこちらを見ている、同年代の青年に向かって言った。

「ええ、服部君。電話で言ったことをもう一度問います。 服

部君、江戸川コナン君の本当の顔を御存じですね？」

胡坐をかいている服部は、暫し間を置くと、

「白馬。その前にあなたの考え、聞かせてくへんか？」

「分かりました。僕は、江戸川コナンという人物は存在しない、と考えています。彼はとにかく異常だ。小学生ながら、高い推理力、高度な知識、無駄のない行動力、小学生らしからぬ言動、死体を見ても動じない精神力、そしてあの大人びた雰囲気。……世の中には、小学生以上の知識を持っていたり、大人のような雰囲気を漂わせる小学生はいます。しかし、あのコナンという少年は、その子たちを遥かに凌駕している。いや、超越しているという言い方が正しいかもしれません。時には、大人でも知っているか知らないかの知識を持っている」

白馬は、フウ、と一息つく。

「でも、それは小学生だから異常であって、高校生だったら不思議じゃない。話しは変わりますが、毛利蘭さんから聞いたところ、コナン君が現れたのは、工藤君が消えた日、だそうです」

白馬の顔が、話しが進むたびに険しくなっていく。

「そして蘭さんはもう一つ言っていました。眼鏡を取った顔は、幼い頃の工藤君にそっくり、だそうです。まあ世の中には、自分と同

じ顔をしている人間が三人いると言いますが、僕はこれを偶然では片づけられない」

そこまで言った白馬は、細めていた目をさらに細める。

「結論を言いましたよ……。江戸川コナン君は　工藤新一君です。　そして、君はそのことを知っている、違いますか？」

ここで服部は目を開ける。白馬と同じく、剃刀のような鋭い目をして、白馬を見ている。白馬はその視線に全く動じずに、服部が口を開くの待っている。

「なるほどな……。しかしのお、白馬。仮にやぞ、アンタの言うとおり、コナンちゅうあのボウズが工藤だと思ったら、説明がつかんことがあるやろ？」

「なぜ、工藤君が小学生の体になっているのか、ですね？」

「そうや。それを自分、どう説明するんや？」

「それを説明するには、常識という言葉をも、頭から外す必要があります」

白馬は目を瞑り、二秒ほど閉じると目を開けて、服部を再び捉える。

「服部君。僕が今から話すことは、決してふざけている訳ではありません。その話しを真剣に受け止めてくれますか？」

(誤魔化されへんかもな)

服部は、内心で呟く。この男は、何もかも知っているのだ、と。

これから白馬が言うことを、聞くのは簡単なことだ。問題はその後、自分がどういった返事をするか、だ。場合によっては彼を、組織との戦いに巻き込むことになってしまう。　いや、彼がコナンの

正体を確信している時点で、もう引き返せないところまで来ているのかもしれない。自分が、本人の了承も得ずに正体を教えたら、新　一はどう思うだろうか？　怒るに決まっている。「何考えてんだ！？」

オメー！！、「とすごい勢いで怒鳴ってくるに違いない。だが、自分も誤魔化すことはできない。

「　ああ」

自分も引き返せないところまで来ていることを、内心で悟った服部は、首を縦に振る。

「これも蘭さんから聞いたのですが、工藤君は蘭さんに、『厄介な事件に関わっている』と言っているそうです。その厄介な事件に関わった結果、あのような姿になったんだと僕は思います。正確に言えば、彼は幼児化した」 正

白馬は、自身を落ち着かせるように呼吸を緩慢に吐くと、

「馬鹿馬鹿しいことだと思うかもしれませんが、しかし、常識という言葉を外してよく考えてみれば分かることです。この世界には、僕達の知らない事が沢山あります。例えば、人知れずに、人体に影響を与える薬を開発する研究員がいるとか……。あるいは、そう言った施設があるとか。そして彼、工藤新一君は、その薬を何らかの経路で投与されて幼児化した、違いますか？」

白馬は服部の様子を伺う。彼は目を閉じて話しを聞いていた。微動だにせずに……。

服部は、ゆっくりと目を開ける。

「フツ、まさかそこまで分かってたとはな」

そう言つと服部は心の中で、これ以上は無理やな……。すまん工藤！ 話すで、と謝罪をすると、自分が知っている事を全て話す決意をする。

「分かった。話そうやないか。せやけど、一つ約束してくれへんか？」

「約束……？」

「ああ、このことは誰にも言わへんて」

「もちろんです」

白馬は即答する。

「それともう一つ。この話しを聞くちゆうことは、アンタの命が狙われる事を意味してんねや。後悔はあらへんか？」

突然彼から、「命を狙われる」と言われ、白馬は内心で、やはり危険な何かが動いている、と呟き、「ありませんよ」「と服部に覚

悟の目をして言い放った。

そして、服部は話し始める。黒の組織、アポトキシン4869、灰原哀、全てを。

ガチャ。

今、毛利探偵事務所の扉がゆっくりと開けられ、中から二人の男が入ってきた。その音に反応した蘭は、ソファから立ち上がって振り向くと、服部が事務所の扉を閉めたところだった。隣には白馬がいる。

「服部君、白馬君。話しは終わったの？」

「ああ」

答えた服部は、ソファに腰を下ろす。白馬も、服部の左隣に座った。それを見ていた蘭は、「今度は自分が服部に話す時」、と思いを開く。

「ねえ、服部君」

「うん？ なんやねーちゃん」

「後で私の話し聞いてくれない？ 好きな時でいいから」

蘭は、白馬と話し疲れている服部を気遣って、好きな時に話そうと言った。正面の彼の目は、くたびれた、と言いたげな色をしているからだ。本心では、今すぐにも聞きたいのだが、今の服部にそんな事を言ったら、「休ませてくれ、ねーちゃん」、と言われることは目に見えていた。

「ああ。分かったで」

「ありがとう」

そう言い服部は、疲れが溜まっている口を休め始める、と言うのは芝居で、彼の頭の中には蘭からの話と、その答えをどう誤魔化すかという、策が練り始めていた。

白馬は何も話さずに、ソファに座ったままじっとしている。おそらく服部と話したことを、自分の中で整理をつけているのだろう。小五郎は、椅子に座りながら腕組みをして、目の前の三人の様子

を見ている。

蘭は、服部に話すことをまとめるため、自室に行ってベッドに座りこみ、頭の中で整理をつけていた。

時間は決して止まることはない。今までも、今も、これからも…
…。

秘密を知った者と秘密を知ろうとする者（後書き）

いよいよ、白馬が秘密を知りました。

この後、彼はどうするのか……。

そして、蘭はどうなるか……。

いや、書くのが楽しみです！

では、評価、ご意見などを、お待ちしております！

阻止・明かされる謎と明かす謎（前書き）

今回は、場所の行ったり来たりがあり、読む際にややこしくなるかもしれませんが。

では、どうぞー！

阻止：明かされる謎と明かす謎

「皆、準備はいいかね？」

「はい。どこにも問題ありません」

今、時刻十九時半。夜の『初め』が始まる頃である。

ここは、米花埠頭に続く道路。

その道路を一台のワゴン車が、

『制限速度ギリギリを維持』して走行している。

ワゴン車の中には、FBI捜査官多数と、

一人の少年が乗車している。

その車内は『緊迫した空気に包まれ』、

乗車している全員の顔が、固くなっている。

「ボス、もう少しで埠頭に着きます」

ワゴンを運転している捜査官が、

『目的地が目と鼻の先に迫っている』ことを、

正面を見ながら、後ろに乗っているジエイムズに伝える。

「うむ。埠頭に入る手前で停車してくれ」

「了解」

ジエイムズは、埠頭に直接入るより、

埠頭の手前で停車したほうが、警戒心を抱かせないと思い、

そのことを運転手に伝える。

「コナン君。もう少しで到着だ。準備はいいかね？」

ジェイムズは、車内の両脇に付いている席の、

右側の運転席側に座っているコナンを見て言った。

「うん。いつでも大丈夫だよ」

コナンは、ジェイムズの顔を『真剣な目』で見ながら言った。

キーー

運転手がブレーキペダルを踏むと同時に、

車が減速していき、やがて停車した。

「では、皆。配置についてくれ」

車が停車したことを確認したジェイムズは、

車内に待機していたFBI捜査官に、

ここに到着するまでに、

米花埠頭の地図を使って、説明した配置につくように指示する。

指示されたFBI捜査官達は、“駆け足”で各自の場所へ移動した。

その中には、ジョディとキャメルも含まれていた。

捜査官達が出て行き、十分ほど経過したころ、

各自捜査官から、「配置完了」、という通信が入った。

ジェイムズは、「分かった」と返事を返す。

「では、コナン君。頼むぞ。気を付けてな」

返事を返したジェイムズは、

顔だけを右に向けてコナンに言った。

「大丈夫だよ。万が一のことが起こったら、

ジェイムズさん達が助けってくれるんでしょ？」

「ああ。まあ、そうならないことを祈るがな・・・」

「うん。じゃあ行ってきますー！」

そう言うとコナンは、ワゴンの後部ドアから出て行った。

コナンがワゴン車から出て行った頃、

再び場所は変わり、毛利探偵事務所【蘭の自室】。

今この部屋には、二人の人物がいる。

一人は部屋の主の毛利蘭。

もう一人は、この事務所に泊まり込みで来ている、服部平次。

「ねーちゃん。話し、さっそく聞こうか？」

座布団の上に胡坐をかきながら、ベットに座っている蘭を下から見つめる形で座っている。

服部は夕食後、蘭と白馬が食器を洗っている時に、

蘭に、「ねーちゃん。話し、できるので」と言った。

その声に、洗った食器を布巾で拭いていた蘭は、

顔だけを、できるだけ後ろに向けて服部に話しかける。

「うん。じゃあ私の部屋で待ってて。これ終わったら・・・」

そこまで言うと、左隣で食器を拭いていた白馬が、

話しに割り込んできた。

「いいですよ、蘭さん。ここは僕がやっておきますよ」

「ありがとう、白馬君」

蘭は白馬の好意に甘えることにした。

もちろん、笑顔一杯でお礼を言って・・・。

蘭は、台所にある皿を拭く布巾とは、

別の布巾で手を拭いた後、服部を部屋へ案内する。

因みに、小五郎は現在入浴中である。

カチャ

蘭はドアノブを捻って、

扉を開けて自分が入った後、服部を入れる。

「入って服部君」

そう言われた服部は、『少々遠慮がち』に部屋に入る。

服部がこうなるのも無理はない。

いくら本人の許可がでていたとはいえ、

『女性の部屋』に入るのは遠慮してしまう。

そんな服部を気にせずに、蘭は扉を閉める。

服部は、『女性の部屋に入るのが初めて』だったため、

この部屋が『女性らしい』のかは不明であった。

部屋を上から見ると、北西の方向の壁につけるようにベッドがあり、

そのベッドの下にクローゼットがある。

東の壁にくっつくように、『勉強用の机』が置いてあり、

その机とセットになっていると思われる、

キャスター付きの椅子がある。

その机の上には、国語辞典、英和辞典など、

勉強するにあたって必要なものが、本棚に並べられていた。

そして、その本棚の右側に、

『今回の話の中心人物となるかもしれない男』が、

蘭と共に、両手に『ピース』を作って笑顔で映っていた。

「じゃあ服部君、座って」

そう言つと蘭は、机にしまつてあつた椅子を引いて、

服部に座るよつに進めた。

しかし、『遠慮がち』になっている服部は、

「あーいや、俺は・・・床に座るさかい」

「えっどつして?」

「何と言つ か・・・ ああ！、今は床に座りたい気分なんや」

「ふん、そう」

そう言つと蘭は、

椅子を戻して、部屋にある座布団を服部に渡し、

自分はベットの腰掛ける。

服部は渡された座布団を敷いて、その上に胡坐をかく。

「じゃあ、ねーちゃん。話し、聞こうか？」

そう服部が言うと、蘭は話し始めた。

再び場所は移り、ここ米花埠頭。

ワゴンから走ってここまで来たコナンは、

息を切らして目的の人物を待っていた。

今コナンがいるのは、ベルモットと戦ったとき、

ちょうどジョディの車が止めてあった場所に彼は立っている。

今となっては、あの時の対決が“嘘”のように、

ここは静まり返っていた。

今聞こえるのは、『自分の荒れる息』のみ……。

ここに来た瞬間、

コナンは『あの時』の、灰原が突然現れた光景がフラッシュバックした。

あの時は本当に驚いた。

彼女が表れた瞬間、『頭の中が真っ白』になったとまでは言わないが、

“それぐらい”必死になった。

目の前のベルモットの事も、

横で銃撃に合って苦しんでいるジョディよりも……。

「今度はあんなこと……ないよな……」

コナンはその時の記憶を辿っていった、

『また灰原が“あのような行動”を取るんじゃないか』と、

内心不安であった。しかし、『それは無い』と、

同時にその考えを否定する。携帯越しだったが、約束した。

“あんな行動”はしないと……。

それを信じているコナンは、その『不安』という名の鎖を、

『信頼』という名のチェーンカッターで、“一刀両断”した。

「待ったわよ」

コナンがそんなことを思っていると、

右側のコンテナの影から、聞き覚えのある声がした。

コナンがその声を聞き、声がしたほうへ顔を向けると、

そこには、こちらに歩いて近づいてくる、

『この場所に対決した張本人』がいた。

「べ、ベルモット!」

「久しぶりね」

「ボス。こちらキャメルです。」

「コナン君の右側にベルモットが……」

コンテナの影で、コナンの様子を見ていたカメラが、
小型マイクでジェイムズに報告する。

ワゴンの中で、カメラの報告を聞いたジェイムズは、

「ああ。今、こちらでも確認した」

ジェイムズはコナンの上着に取り付けてある、

隠しカメラから送られてくる画像を見ながら、

カメラに『待機を維持』するように命じた。

「でも、随分と慎重なのね。」

“隠しカメラ付き”だなんて……」

コナンの目の前に来ていたベルモットは、

コナンの上着に付いているものに不審を抱き、

それが、隠しカメラだと認識した。

コナンはそのことに驚くこともなく、

表情を崩さないように彼女と会話を続ける。

「さすがだな。隠しカメラを見抜くだなんて・・・」

「フッフ・・・。じゃあそろそろ、本題に入りましょうか」

ベルモットは、コナンの『褒め言葉』を笑いで受け流し、

本題に入る。

「・・・と言いたいところだけど」

「？」

本題に入るかと思ったが、

まだ言いたいことがあるらしいベルモットに、

コナンは思わず首を傾げる。

「その分だと盗聴器もしかかれてそうね。」

できれば、私達二人だけで話しをしたいのだけれど・・・。」

「聞かれちゃまずい話してことか？」

コナンは、盗聴器が自分についていることを読んだベルモットに、

驚きを見せることなく、『あつてはまずいのか』と聞く。

「そうね。まあ、そこら辺にFBIの仲間がいるんでしょっけど、

この距離だと私達の会話は聞こえないから問題ないけれど・・・、

盗聴器は問題ね・・・」

ベルモットは辺りをキョロキョロして、

『周りに人がいる』ということをし、仕草と言葉で表現する。

「分かった」

そう言い終わったコナンは、上着の右ポケットから盗聴器を取りだして、

スイッチを切った。

「これでいいだろう?」

「ええ。じゃあ話しを戻しましょうか」

そう言ったベルモットは、目の前の小さな探偵に、

情報を与えるために話します。

その様子をカメラが不安そうに見ていた・・・。

阻止：明かされる謎と明かす謎（後書き）

次でいよいよ三十話です！

今回は平次達よりも、ジエイムズのほうに力を入れました。

反省点は、『ワゴンの中の表現がほとんどできていない』ことですね。

車に詳しくないもので、

無理に表現すると、

『読者の方々に、不快感や違和感を覚えられるかもしれない』と思
い、

書きませんでした。

では、評価、感想等待着ってます！

阻止：新たなメンバーと新たな危機感（前書き）

皆さん、おはようございます！

今朝、感想が届き内容を見たところ、

「各キャラクターの仕草が多すぎる」ということが、
書かれていたため、

今作から、『仕草をできるだけ省いて、会話を多めにしました』。

もし、「仕草が少ない」という方がいましたら、

感想の欄に書いてください。

では、三十話目をどうぞ！

阻止：新たなメンバーと新たな危機感

「私がここにあなたを呼んだのは、

あなたとシェリーの正体を疑っている人間が、組織内部にいるから
よ

「！！！」

ベルモットのその言葉を聞いたコナンは、

目を見開いて驚愕した。

「なっ！！本当なのか！？ベルモット！」

「こんなことで嘘ついてどつするのよ・・・」

コナンの“真偽を確かめる言葉”に、

ベルモットは右手を右腰に当てながら、

興奮しているコナンとは正反対に、冷静に答える。

「だ、誰なんだ・・・」

「私と同じ幹部の人間よ。」

コードネームは・・・サイレント」

「サ、サイレント？」

「ええ」

「何者なんだ？」

「残念ながら・・・正体は私も詳しくは知らないの」

「オメエが知らないって・・・、つまり同じ幹部だけど、

オメエよりも“上”の人間ってことか？」

コナンはベルモットすら詳しくない、

『サイレント』なるメンバーに警戒心を高めた。

「いいえ、違うわ。私よりも少し“下”に位置する人間。

それに私だけじゃないわ。組織のメンバーの大半は、

彼の正体知らない」

「『彼』ってことは、その『サイレント』ってやつは、

男ってことだな……。でも、『大半が知らない』ってどういうことだよ……」

ここでベルモットは、上着の左ポケットから左手で煙草ケースを取り出し、

その中から右手で一本取り出して口に啜くわえて、

煙草ケースを左ポケットにしまい、

上着の右ポケットから取り出したライターで、煙草の先端に火をつける。

フウ っと一服して、ベルモットは話しを続けた。

「彼は“私以上の秘密主義者”でね。

組織のメンバーも、『彼の姿を見た』という人間は、

私を知る限りいないわ……」

「!!!……そんな奴なのか……」

コナンはベルモットが言う言葉に、次々と警戒心を増幅させていく。

「さらに追い打ちをかけるようだけれど、

サイレントはあの方に一目置かれている人物。

さらに、情報収集、暗殺術、変装術に長けているわ」

「……!!……」

ベルモットは一服しながら話しを進める。

コナンは『一つの驚き』が呑み込めない時に、

また『次の驚き』が来るこの話しに、付いて行けなかった。

「だがよ、そんな“秘密主義者”が、

俺達のことを疑っていることを、オメエはどうやって知ったんだよ」

確かにその疑問は“もっとも”だ。

組織のメンバーにも姿を見せないほどの秘密主義者なら、

ベルモットはどうやってその情報を手に入れたのか……。

「あの方から、よ」

「！じゃあオメエはやっぱり、あの方の正体を知ってるってことか！？」

再び興奮状態で言い終わったコナンを、ベルモットは右掌をコナンに向けて、

「待った」、という仕草を見せる。

「そのことは秘密よ秘密、教えられないわ」

「教える！！あの方って奴を捕まえさえすれば、

組織は崩壊！そうなれば、

サイレントって奴も活動できなくなるはずだ！」

ベルモットは両掌の上げて、「やれやれ」と言いつ仕草を見せた後、

自分を、組織に対する『怒り』の感情を剥き出しにした

表情と目で見てくるコナンを、半分呆れたような目で見つめ返す。

「あなた、組織を甘く見てない？」

「なに!？」

「あの方が掴まっても、組織は潰れないわよ」

ベルモットは一服して、

吐いた息の中に混じっている煙草の煙を見ながら、話しを続ける。

「あの方が掴まったとしても、誰かがあの方の椅子に座るだけ。

もしくは、組織のメンバーは各地に逃げ回ってチャンスを伺うでしょうね。

組織をつくり直すチャンスを・・・」

「なら、FBIやCIAと協力して散ったメンバーを・・・」

そこまで言ったコナンの言葉を、ベルモットの言葉が邪魔をする。

「とにかく・・・、あの方の正体は言えないわ」

ベルモットは“全く引きそつにも無いコナン”に、

『口が裂けても言わない』ということをし、目と口で語る。

「・・・なら、本部の場所だけでも・・・」

「だめよ。それも言えないわ。話しを戻させてもいいかしら？

そろそろ、戻らなきゃいけないから・・・」

ベルモットはそう言い終わった後、左手首に付けてる腕時計を見る。

「ハア、分かったよ」

本心では『聞きたい』という欲望があったが、

これ以上言っても無駄だということが分かったコナンは、

ベルモットの話を、“冷静さを取り戻して”聞き始める。

「サイレントは、“あの方のみ”に情報を渡すの。

それ以外のメンバーには決して言うことはない」

「つまり、あの方のお気に入りであるお前のみが、

その情報入手できるってわけか・・・」

「そう言うことよ」

「で？今そのサイレントって奴は、どこで何をしているんだ？」

「ええ。あの方によると、今は米花町に潜伏しているらしいわ」

「なんだと!!」

コナンは再び『警戒心』、それに加え『危機感』を覚えた。

無理もない。自分達の敵、それも、

正体を知っているかもしれない人物が、

自分達と同じ町にいるというのだから……。

「まだ少し話したいことがあるのだけれど、

続けても大丈夫かしら？」

ベルモットは、今のコナンの様子を見て、

話しを続けるべきか、続けないべきか迷った。

今日の前にいる名探偵は、

明らかに動揺、戦慄を覚えた表情をして、

『周りからの声が一切聞こえない状態』にあるのは“一目瞭然”だった。

「あ、ああ、大丈夫だ。続けてくれ・・・」

コナンは“あまり生気が入らない声”をだして、

ベルモットに続けるように言った。

「聞かれることだと思うから、話しておくけど・・・」

サイレントがなぜあなた達の正体、

つまり、『体が幼児化』したという夢物語を信じたのは、

彼が宮野博士、要するにシェリーの父親の研究を見ていたからよ

「灰原の父親の研究って、つまりアポトキシン4869か？」

「そう。詳しくは私も知らないけれど、

宮野博士のマウスを使った研究で、

幼児化したマウスがいたとか、いないとか・・・。

その研究に彼は立ち寄ったっていう“噂”があるのよ」

「噂？」

「ええ。あくまで“噂”だけれど・・・」

「でも、そんな噂が広まっているのなら、

どうして組織は俺達が幼児化したことを、知らないんだ？

俺は灰原が、パソコンの報告欄に『死亡確認』と書き変えてくれたから、

俺が狙われないのは説明がつくが……、

灰原はなぜ？」

「その理由は二つ」

そう言つとベルモットは、右手で“ピースマーク”を作つて、

『二つ』という言葉を強調する。

「一つ目は、組織のメンバーがその噂を“噂”としか見てないから。

彼には色んな噂が流れていてね……。

組織の人間は全く信用してないのよ」

「もう一つは？」

ベルモットは右手人差し指立てて、『一つ』という言葉を強調する。

「もう一つは・・・、理由は分からないけれど、

サイレントがこの事を、あの方以外のメンバーに話してないから

「！！それって、つ、つまり・・・。

あの方は・・・俺達の正体を知っている・・・ってことか？」

「安心して。あなたのことは、

あの方は死亡確認という記録を信じているから、疑ってないわ。

でも、問題はシェリーね・・・」

ベルモットは、

自分の話を聞いて、慌てるコナンを言葉で落ち着かせて、

『灰原に危機が迫っている』ことを言う。

「となると、灰原は命を狙われるってことか!？」

コナンは、ベルモットの『安心して』という言葉に聞く耳を持たずに、

灰原に危機が迫っていることの真偽を問う。

「そうなるわね」

ベルモットは少々固い表情をしながら、コナンの顔を見て答えた。

「・・・」

コナンはもはや言葉がでてこない。

頭の中は、「一刻も早く阿笠邸に行き、灰原の安全を確保しないと」

と、いつ考えに支配されていた。

「最後にもう一つ」

ベルモットの言葉に反応したコナンは、

下を向いていた顔を、少々上に上げる。

「刑事達を襲った謎の集団。あれは、組織のメンバーよ。

とは言っても、“下っ端”だけねどね・・・」

ベルモットはコナンにその事を伝えると、

時間が迫ってきたこともあり、

「じゃあ、もう行くわ。シェリーのこと、よろしくね」「と、

コナンの気持ちを『少しは和らげる言葉』を言った後、

吸っていた煙草を携帯灰皿にしまい、

後ろを向いて走って行った。

残されたコナンは、「これからどうする!?!?」

という危機感に支配されていた・・・。

阻止：新たなメンバーと新たな危機感（後書き）

今回、新たな組織のメンバー、【サイレント】を登場させました。この【サイレント】という名は、

カクテルの『サイレント・サード』から取りました。

もう一つ、『ベルモットがなぜ阿笠邸に電話をしたのか？』ということが、

一切書かれてないことに、疑問を持ったと思います。

これは、『敢えて書きませんでした』。

理由は、『答えを明かさないことで、

読者の方一人一人に答えをだしてもらおう』ためです。

つまり、読者が十人いたら、十人分の答えがあるわけです。

では、評価、アドバイス等をお待ちしてまいります！

阻止・遠ざかる真実と接近する危機（前書き）

いや〜暑くなってきた！

さっきまでは曇り空だったのに！

気温は・・・三十度！？冗談じゃない・・・。

さてさて、そんな暑い中書きました。

では、ごんごー！

阻止・遠ざかる真実と接近する危機

「では、その『サイレント』なるメンバーが、

ベルモットにシェリーと呼ばれていたあの茶髪の少女を、

そして君も狙っている可能性があるということかね？」

車に全力疾走で戻ったコナンは、

ベルモットに言われたことを話した。

当然、アポトキシシヤ、自分と灰原の正体は伏せて……。

因みに、FBIのメンバーは、

ベルモットが立ち去った後、

ワゴンに戻っていたため、コナンがワゴンに戻ったときには、

ジヨディ、キャメルを含めた全員のメンバーが集まっていた。

入った瞬間、

いきなり盗聴器のスイッチを切ったことで叱られたものの、

コナンはそれに“聞く耳を持たず”、

話し始めた。

「うん。とにかく、灰原を守らなくちゃ・・・」

「落ち着いてコナン君」

少々焦り気味で話すコナンを、

ジヨディが落ち着かせる。

「ボス。ここは彼女に護衛をつけたほうがいいのでは？」

キヤメルが自分の意見を口にする。

「いや、それは駄目だよ。」

まだ狙われてはいないから、奴らは灰原の居場所までは知らないはず……。

この状態で護衛をつければ……」

「彼女が目立ち、より危機が早まってしまうということが……」

ジエイムズは、立ったまま腕組みをしながら、

コナンの言いたいことを述べた。

「はっ」

コナンは、「そう言うこと」と、「……」といふことを、

肯定の返事で返した。

「とりあえず、灰原は僕が守るよ。」

灰原とは学校も一緒だし、よく阿笠博士の家に泊まってるから、

僕があの人に泊まっても、さほど怪しまれないだろうしね」

「なるほど・・・」

ジェームズはコナンの意見に納得する。

「でも、本当に大丈夫？」

あなたも命を狙われている可能性があるのよ」

ジョディはコナンの目を見ながら、

心配そうに話しかけた。

「大丈夫。心配しないで」

コナンは“内心”不安であったが、

ジヨディ達を心配させまいと、微笑みながら返事をした。

「だしてくれ」

ジェイムスは話しを聞き終え、運転手に出発するように命じた。

「了解」

運転手はアクセルを踏み、一行を乗せたワゴンは、埠頭を離れて行った。

時間を少し巻き戻し、

コナンがベルモットと話し始めた頃、

毛利探偵事務所の蘭の自室では、

別の話し合いが行われていた。

「服部君。『話したいこと』っていうのは、新一のことなの……」

「（やっぱりな……）」

今、ベットに座る蘭が話始め、

床に座布団を敷いて、その上に胡坐をかいて服部は話を聞く。

「工藤のことかいな？」

「うん」

「とは言われてものお。ねーちゃんに話すことなんか一つもない
で」

服部は取りあえず、“とぼける”ことにした。

「うづくん、あるわよ。」

・・・服部君。

あなたは、新一が今どこにいるかを知ってるんじゃない？」

服部は自分の予想が当たったことを残念に思った。

外れていてほしい、外れていてほしいと、

何度も心の中で呟いたものだ。

しかし、その予感は的中・・・。

事件なら『嬉しいことこの上ない』が、

今は『残念なことこの上ない』。

「何でそんなこと聞きはるん？」

それに、俺は工藤が今、どこで何をしとるかなんて知らへんで」

服部は、知っていることがバレないように、

『平静を保ちながら』答える。

あくまで“とぼける”つもりと判断した蘭は、

思い切って本題に入ることにした。

「とぼけるんだね？なら、私から言ってあげる。

コナン君は・・・新一なの」

蘭は、自分が考えた結果、でた答えを言った。

服部は表情を崩さずに返答する。

「あのボウズが工藤？ハハハッ！おもしろい推理やな」

服部は蘭の考えを、“馬鹿馬鹿しい”ということ強調するようにつ

笑いながら答えた。

しかし蘭は、『真剣そのものの表情』を崩さない。

「笑って誤魔化さないで！服部君！

服部君は知ってるんでしょ？・・・このことを・・・」

服部の態度に少々『怒り』を覚えた蘭は、

口調を激しくして服部に言い放った。

「証拠でもあるんか？」

「あるよ。」

服部君、コナン君に会った時に『工藤』って言ってるよね？

まあ、一度や二度なら服部君の言つとおり、

『新一に似てるから間違える』って言う言い訳も納得できるわ。

でも服部君は、会つたびに『工藤』って言うてる。

それは、あの子、コナン君を新一って知っているからなんじゃない？」

「ホンマに間違えてしまふんや……。工藤にホントツに似とるか
らのお」

服部は笑みを浮かべながら誤魔化する。

蘭は、「この証拠は駄目だ」と内心思い、二つ目の証拠を言うことにした。

「じゃあ最近、コナン君を事件現場から追い出さなくなったのはどうして？」

寧ろ、^{むし}コナン君が事件に首を突っ込んで

事件の相談をするようになったわよね？」

「ああ。初めのうちは『邪魔』と思っと思ったんやけど、

俺が気付かんことも、よー気付いとくれて頭も中々切れるやろ？

そやから、色々と情報を与えてもらってんねん」

とぼけ続ける服部に、蘭はもうネタが切れていた。

「それにや。もう一度よー考えてみ？」

仮にねーちゃんの言うとおり、

ボウズが工藤やったら説明がつかへんことがあるやろ？」

服部は諦めない蘭に、『白馬にした質問と同じ質問』をした。

「『』どうして新一は小学生の体になってしまったのか？』、という
こと。」

「そつちや」

服部は腕組みをして、蘭がどんな返答をするのかを待った。

「それは……分からないわ……」

蘭は下を向きながら、『残念そうな表情』を浮かべている。

「そつちやろ？つまりや、まあ〜言っちゃ失礼かもしれへんけど、

ねーちゃんのボウズ」工藤ツちゆう考えは、

ねーちゃんの単なる思い込みっちゆうわけや……。

それにや、仮に人間の体が小っさなったりしたら、

完全犯罪も可能になってしてもて、今の世の中メチャメチャやぞ。

……確かにあのボウズは、よー頭が切れる。

せやけど、“ボウズはボウズ”、“工藤は工藤”や。

それは天地が逆さまになっても変わらへん。

現げんに帝丹高校の文化祭のとき、ボウズと工藤は一緒にいたやないか」

蘭は両手に軽い握り拳を作っていた。

しかし、それは悔しさのあまりにでたこと……。

蘭は内心、『コナン君』新一』という方程式を削除してはいなかった。

しかし、服部の言葉に“納得”してしまう自分がいることに腹が立
った。

それが、『悔しさ』という形で表にでたのだ……。

「まあ、そう言いつつちやから、

ねーちゃんもそんな考えは忘れることや・・・」

そう言うと服部は、立ち上がり静かに部屋を出て行った。

扉を閉めた後、中の女性が泣き始めたのを知らないまま・・・。

「なんじゃと！！それは本当かね？新一！」

時間を戻して、ここ阿笠邸。

FBIのワゴンで、阿笠邸の近くまで来たコナンは、

すぐに家の中に入り、FBIのマンションの中で話したこと、

ベルモットの言ったことを、

“一言残さずに”阿笠と灰原に伝えた。

本当は阿笠だけに伝えるつもりだったが、

玄関の扉を開けた瞬間、

中で阿笠と共に灰原が、「やっと帰ってきた」と言うような表情で、

ソファーに座りながらコーヒーを飲んでいたため、

『やむを得ず』に話すことになった。

「じゃあ、その『サイレント』なるメンバーが、この町にいるのね
」？」

灰原はソファーに座りながら、冷静に返答した。

因みに、灰原の右隣りに阿笠、灰原の正面にコナンが座っている。

「ああ。ところでそのコードネームに聞き覚えは？」

コナンは冷静な灰原の目を見ながら聞いた。

灰原は黙って首を横に振る。

「そうか・・・」

コナンは少し残念な返答をする。

「新一君。

今は、そのメンバーの“魔の手”から哀君を守らねば・・・。

どうするんじや？」

「まあ、とにかく灰原は、外出を控えたほうがいいな・・・。

俺は今日からここに泊まる。いいよな博士？」

「ああ。もちろんんじや・・・」

阿笠はコナンがここに泊まることを許可する。

その後、灰原が口を開いた。

「ところで工藤君。彼らの標的になっている本間さんはどいつなの？」

「ああ。今のところ怜奈さんから新しい情報はないから、

情報が入るまでFBIは護衛を続けるそつだ。

俺もその判断に賛成だ」

「そつ・・・」

そつ言い終わると灰原は席を立ち、

地下室へ続く階段へ向かう。

「灰原！」

その灰原を、ソファから立ちあがったコナンが呼び止める。

「ん？なに？」

灰原は振り向いて、コナンと目を合わせる。

「念を入れて言っとくけど、またオメエ、

俺達を守るために死ぬなんてこと、考えてねえよな？」

そのコナンの言葉に、席を立った阿笠は灰原のほうを見た。

一方灰原は、ポーカーフェイスを保ちながらコナンの問いに答えた。

「バカね……。『そんなこともう考えない』って言ったでしょ？」

「フツ。ならいいんだ」

灰原は笑顔でコナンに言うと、階段を下りて行った。

阻止・遠ざかる真実と接近する危機（後書き）

今回は、『新志の小説』であることを強調するため、少し蘭を可哀想な立場にしてみました。蘭ファンの方ごめんなさい・・・。

評価、ご意見、感想お待ちしてまーす！

しかし、暑い・・・。

阻止・燃えたぎる決意の心と信じあう人（前書き）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。

さて、今朝再び感想が届いていたので読んでみると、

「まわりの事や仕草を多くしたほうがいい」、「
と言うアドバイスを受けました。

ここで私は悩みました・・・。

なぜならこの間、

「仕草などの表現をなくしたほうがいい」、
というアドバイスを頂いたからです。

そこで、お二人のご意見を合わせ、

「入れすぎず、入れなさすぎず」という方法を取りました。

ただ、今後の文章を見て、

「仕草を今よりも多く」、「または「少なくしたほうがいい」という、
ご意見を頂き次第、調整します。

では、どうぞ！

阻止：燃えたぎる決意の心と信じあう人

組織のメンバーの一人、【ベルモット】から情報を与えられ、

今日で五日が経過した。

不思議とここ阿笠邸では、

『灰原とコナンが学校へ行かなくなった』、というより、

『行けなくなった』こと以外、

変化は不気味なほどなかった。

そんな今日十五時に、阿笠邸に一人の訪問者が……。

ピンポーン

「はい」

チャイムがなったことで、阿笠が玄関に向かう。

「おお、ジヨディ先生！」

「どうも」

ジヨディは阿笠に軽く会釈をする。

「お邪魔してもいいかしら？」

「ああ」

そう言った阿笠はジヨディを中へ通す。

「コーヒーでいいか？」

「ええ」

阿笠はコーヒーを入れに台所へ向かう。

ジヨディはソファ―に腰かけていた。

「ジヨディ先生！」

自分の名前を呼ばれ、ジヨディは声のほうへ顔を向けると、

そこには地下室の階段から上がってきた、

コナンと灰原が立っていた。

あれから、コナンは常に灰原と行動を共にしている。

もちろん、入浴やトイレ、寝るときは別々だが……。

そのため、一日の大半を地下室で過ごす灰原に付き添い、

コナンも一日の大半を地下室で過ごすようになった。

灰原が外出できなくなったため、買い物や、

“外出しなければならぬ用事”ができた際には、

阿笠が行くようにしている。

因みに、コナンがここに泊まることは、

阿笠と灰原に【サイレント】のことを話した“あの夜”に、蘭に伝えてある。

その時、電話にでた蘭の声が、

『少々悲しい、元気の無い声』になっていたことが、

コナンには気になっているが、

『灰原の身を守ることが優先』なため、蘭に“その事”は聞かなかつた。

「クールキッド、哀話があるの・・・」

二人を視認したジヨディは、話しがあることを伝えるが、

コナン、灰原に、“良い予感”はしなかった。

「お待たせ」

台所からコーヒーを持ってきた阿笠は、

座っているジョディ、コナン、灰原の前にある机に、コーヒーを置く。

全て置き終わった後に、ジョディの右に腰掛けた。

「ジョディ先生、話っていうのは？」

コナンが正面に座るジョディに話しかけた。

「ええ。さつき水無さんから連絡があってね。

本間さんが暗殺される日付を伝えにきたわ」

「いつ？」

「明日の午後二時。米花センタービルの展望レストランで、

友人と食事をするところを狙撃するみたい」

「米花センタービル展望レストランとはな・・・」

コナンは独り言のように小さく呟くと、

苦笑いを浮かべた。

あそこは、『蘭との思いで』がある場所。

そして、「絶対帰ってくる」と、伝えた場所。

コナンがそんな思いに耽^{ふけ}っていると、

玄関の呼び鈴が音を鳴らす。

「はい」

阿笠は再び来客のために、玄関へと歩いて行った。

「久しぶりやの〜じいさん」

「！はっ、服部君？それに君は・・・」

阿笠は服部に驚くと、後ろにいる青年のことを尋ねた。

「初めまして。白馬探と言います」

「ああ・・・、じ丁寧・・・」

そう言い終わった阿笠は、白馬が差し伸べた手を握り、

握手を交わす。

「なんで平次に〜ちゃんがここに？」

阿笠の声が聞こえた三人は、当然その訪問者の姿を見て驚き、

コナンがソファから立ちあがって玄関に向かうと、

服部に『ここに来た理由』を聞いた。

なお、白馬やジヨデイがいるため、

コナンは子供らしく振る舞う。

そのコナンの様子を見た白馬が、

“フッフ”と笑いをこぼした。

「まあ、話の中に入れてからにしようや……。

邪魔すんでじいさん」

そう言った服部は、ほぼ強引に家に入り、

白馬はそんな服部の様子を見て、

“ 礼儀の悪さ ” に、心の中で呆れていた。

中に入った服部は、

コナンの左隣に移動した灰原の左隣に座る。

白馬は服部の左隣に腰かけた。

台所で二人分のコーヒーを淹れてきた阿笠は、

服部、白馬の前にコーヒーを置き、ジョディの右隣りに座った。

コーヒーを一口飲んだ服部はまず、

『 自分達がここに来た理由 』 を説明する。

「 俺らがここに来た理由は、あんたらFBIに協力するためや 」

「!！」

その言葉を聞いた四人は、服部の『協力』という言葉にも驚いたが、それ以上に、白馬がここにいなから、

服部が『FBIに協力する』と言った“本当の意味”に驚いていた。

「ちょっと待って服部君！」

私達に協力するって、彼がいながら言っただってことは……」

ジョーディの質問に、服部は笑みを浮かべて答えた。

「そつや。この白馬は組織の存在を知り、

“共に戦う意思”を持ったもんや」

「な、なんじゃとー！」

阿笠が驚きながら白馬のほづを見ると、

「ええ。そうです、と、白馬は答える。

「どづいづこと!？」

白馬が答えた後、灰原が白馬の顔を見て理由を聞く。

「服部君に聞かされたんですよ。

まあ、詳しいことはここでは話せませんが・・・」

「?なんか“まずい”ことでもあるの?」

今まで驚いていたコナンが、白馬に理由を問う。

「まあね。それより、ジョディさん」

「ん?何かしら」

「玄関の外でだいたいの話は服部君と聞きました。

私達二人も、本間さんの暗殺防止の作戦に加えさせてください」

その言葉を冷静に受け止めたジヨディは、

「それは、ありがたいけど……。でも、白馬君。

それが、“何を意味するか”分かってる？」と、

目を瞑ったまま、白馬に聞いた。

「ええ。全ては服部君のお話を聞いて、

あなた方FBIや、コナン君達が、

どんな敵を相手にしているかは承知しています！

この作戦に私が加われば、最悪の場合、

私の家族、友人が、命の危機にさらされることになります……。

しかし、この組織をいつまでも倒すことができなければ、

もっと多くの命が失われることになります。

“私のまわりの人々の命”と、“これから失われるかもしれない多くの命”、

この二つを天秤にかけたくはありませんが、

彼らを倒せるのなら、私は後者の秤はかりのほうに重りを置きます!!」

白馬は、目を瞑り、腕と足を組んで座ってるジヨディに、

力強く自分の意見を言い放つ。

「ジヨディ先生、じーさん、小っさいねーちゃん、ボウズ。

白馬は本気や、分かるやろ？

今この男に何言つても、この“決意”は変わることはあらへん。
覚悟を持つとるのや……。

『奴らをぶつ潰したい』つちゅう、覚悟をな……」

服部は、白馬の“決意”が『どれほどのもか』と言つことを、

ここにいる四人に語つた。

「分かつたよ……」

「江戸川君!？」

コナンが、服部の話と、白馬が語つた決意に押されたのが、

それを了承する。

しかし灰原は、“内心では認めているものの”、

それを認める訳にはいかなかった。

認めてしまえば彼自身にも、

彼のまわりの人々にも危険が及ぶのは、目に見えている。

いくら彼、“白馬探”がそのことを承知していても、

一度認めてしまえば、もう手遅れ。

そうになったら、もう引き返せない。

彼のまわりの人々の命も、

時計の秒針が進むたびに減っていくことになる。

本人も気付かないうちに……。

しかし、彼はまだ引き返せる。

チャンスは“今のみ”。

今を逃せば・・・もう・・・。

そう思うと、

灰原の心に“止めたい”という気持ちと、

“協力してくれて嬉しい”という二つの気持ちが、

ぶつかり合う。

一進一退の如く・・・。

そんな灰原の心中を見抜いてか、服部が声をかける。

「小っこいねーちゃん、分かっとなるやろ？」

白馬の決意は揺るがへん・・・。

誰が何を言おうと、何をしようとも、変わることはあらへん。

この男はもう、決めとるんや。

俺らと同じ決意を、心にちやくんと秘めとる。

その決意は今もこれからも、変わることはないやろ。

俺もねーちゃんと同じ気持ちや……。

白馬が引いてくれたほうが、“良い”に決まっとる！

そやけど、目え見りや分かるやろ」

ここで服部は白馬の目を横目で見る。

灰原も顔を上げて、白馬の目を見た。

そこには、普段の『微笑みを浮かべる』白馬ではなく、

『自分達と同じ決意を固め、

その思いを“表情と目”で放っている』白馬がいた。

「・・・」

灰原は“その目”を見て、黙りこむ。

「灰原、俺も服部の意見に納得だ」

コナンが俯いている灰原の顔を見ながら、

自分の考えを言う。

「哀君。ワシもじゃ」

コナンに続き阿笠も、“納得”の言葉を言った。

「まあ、FBIとしては大反対だけど、

個人としては、“新たな仲間”ができて嬉しいわ」

ジヨデイも、自分の意見を阿笠同様に、

俯いて一言も話さない、灰原の顔を見ながら言い放った。

「灰原さん。君の気持ちは嬉しいよ。

でも、僕は決めたんだ。引き返さないと・・・。

そして、戦い続けると・・・。

それに、探偵として悪を見逃す訳にはいかいしね」

白馬は灰原の顔を、

いつもの『微笑みの表情』を作って見ながら、

改めて自分の覚悟を口にした。

「・・・分かったわ。」

本当は分かりたくないけど・・・、仕方ないわね」

灰原は俯いた顔を上げ、

白馬の顔を見ながらクールな表情で、

白馬が“自分達側”に来ることを了承した。

「よっしゃー！ほんなら、改めてよろしくな、白馬」

その灰原の“了承”の返事を聞いた服部は、

左隣に座る白馬に、改めて『よろしく』と言う。

「ええ。こちらこそ」

白馬は服部と目を合わせながら、

服部同様改めて、『よろしく』と言った。

「じゃあ、私はこれで失礼するわ。

白馬君、これからよろしくね」

ジヨディは席を立ち、白馬の左に移動すると手を差し伸べ、

握手を求める。

「ええ。これからよろしくお願いします」

白馬は席を立ち、ジヨディの差し伸べられている右手を、

右手で握り、握手を交わした。

握手を交わしたジヨディは、そのまま歩いて玄関を出て行った。

「……さてと、工藤、話があんねん……」

ジョディが出て行った瞬間、

服部が話し出す。

「話って？」

コナンは服部の顔を見ながら、返事をした。

「俺らがここに来た理由や・・・」

阻止：燃えたぎる決意の心と信じあう人（後書き）

今回で白馬は、

『本当の意味でコナン達の仲間になった』と言えますね。

こう言う展開にしたのは、

「工藤新一、服部平次が組織のことを知っているのに、
どうして“同じ高校生探偵”である、

白馬探だけが知らないんだ？」という、
私の疑問からこの展開が生まれました。

では、ご意見等、お待ちしております！

阻止・沈みゆく天使と迷いを持った名探偵（前書き）

フウ〜・・・。

今日は、私なりに書きやすい気候です。
皆さんの地域はどうですか？

では、本編をどうぞ！

阻止：沈みゆく天使と迷いを持った名探偵

時刻は十一時、場所阿笠邸。

今、ソファーに腰掛ける西の名探偵が、

正面に座る東の名探偵に話しかけている。

ジヨデイが帰った後、彼らは席を移動した。

上から見ると、左のソファーの奥側に服部平次、

その服部の右側に白馬探、

ソファー右側の奥側に江戸川コナン、

コナンの左隣に灰原哀、

そして、灰原の左隣に阿笠博士が座っている。

「なに？平次にゃちゃん」

コナンは先ほどのジョディ達の“あまりにも真剣”な会話で、

思わず子供らしさを忘れてしまい、

今改めて子供を演じている。

「フフツ……子供の振りはいいですよ。」

僕は全て知っていますから……。

工藤新一君

「……」

「その言いつつちや……。」

ああ……、すまんな工藤。全部話してしもつた……。」

目の前に座る三人が驚愕しているのを見て、

服部は顔の前で両掌を合わせ、

コナンに向かって謝罪した。

「お前、なにやってんだよ!」

その言葉にキレたコナンは、

“血相を変えて”服部に怒鳴りつける。

因みに、コナンの左にいる二人は、

驚きのあまり言葉がでない……。

「彼を怒らないでください……。

全ては僕の考えを話した結果、やむを得ず彼が話したこと……。

“この種”は僕がまいたものですよ
「

服部の隣で、コナンの『怒り』の表情を見た白馬は、

『原因が自分にあること』を言う。

「どづいづこと・・・?」

灰原が白馬の目を見ながら、理由を聞こうとする。

「ええ。“事の発端”は蘭さんが、

僕に工藤新一君のことを頼みに来たことが始まりです」

白馬は少々顔を上に向けて、

記憶を思い出すように話始めた。

「え？蘭が俺のことをって?」

コナンは正体がバレているため、

真まことの口調で話す。

「ええ。実は蘭さんが僕に、

『君が今どこで何をしているのか』という事を頼みに来たのです」

「!?!? 蘭が・・・どうして」

コナンは、『驚き』と『疑問』の表情が混じったような、

声と表情を見せる。

「まあ、それは“建前”のようなものでして・・・、

彼女の本当の話は・・・、“君の正体の事”でした」

白馬は最後の言葉を強調して言い、

コナンの脳に“その言葉”を植え付けた。

「!・・・ど、どづいづことだ」

「ええ。」

はっきり言うと彼女は、江戸川コナン君は工藤新一君と言ったことを、

“ほぼ”確信しています」

「なんだって!!・・・っで、蘭は今どうしてるんだ？」

「そこんところは、何とか俺が誤魔化しておいたで・・・。」

まあ、あのねーちゃんが納得したかどうかは分からへんけどな・・・

服部は驚くコナンの顔を、腕組みをしながら見て言った。

服部が言い終わり、三秒ほど間を置いた後、

白馬が服部の続きを言う。

「……服部君が誤魔化してくれたとは言え、

蘭さんが君の正体を疑っていることは変わりません。

しかも、先ほども言ったように、“ほぼ”確信しています」

白馬は先ほど言った言葉を、コナンの頭に再び刻み込む。

一方、阿笠と灰原は、“事の行方”を静かに見守っている。

「ほんでな……」。

俺がねーちゃんにその事を話終えた後、

ねーちゃん部屋に閉じこもってしもつてのお……。

出てこなくなってもうたんや……」

服部は少々“言いづらい口調”でコナンに話しかけた。

「!・・・蘭さんが?」

今まで口を挟まなかった灰原が、

服部の言葉を“信じられない”というような表情で見る。

「それで、今蘭君は!?」

灰原に続き阿笠も、

服部の言葉を受け止めきれずに、現在の彼女の事を聞いた。

「三日目前に、事務所に妃弁護士が来て、

毛利探偵と共に蘭さんのことを見っていますが、

状況は“喜ばしいもの”とは言えませんね・・・」

「・・・教えてくれ・・・、蘭の状態を・・・」

コナンは、“半分放心状態”のような感じで、白馬に俯いて聞く。

「蘭さんは今、完全ではありませんが、

“心を閉ざしている”ように見えます。

そのためか、御両親にも何も話していません。

もちろん、僕らにも・・・。

この五日間、彼女は部屋に閉じこもっています。

“閉じこもっている”と言っても、

食事のときや入浴のときは顔をだしますが・・・、

その時に話しかけても、『大丈夫』とか、

『一人で考えたいの』と言って、

その悩みを僕らに話そうとしません。

御両親にも……。

もちろん、僕と服部君は、

彼女の悩みを知っています。

そして、その解決方法も……。

しかし、それを話す訳には行きません。

それは……分かるでしょう……。」

ここまで話した白馬は、上げていた顔を戻し、

コナンの顔を見る。

そこには、『驚き』のあまり固まっていたコナンの表情が見えた。

「・・・そこで今日俺らはここに来たんや。」

工藤にこのことを伝え、どうするかを決めるために・・・」

服部は、“放心状態”のコナン一旦見て、

話を続ける。

「これが、この五日間で俺らが見てきたことや・・・。

ほんで工藤、どないする?」

服部はコナンの顔を見る。

コナンは呼ばれたことに気付いたのか、

少々顔を上に上げる。

しかし、目に“いつも”の『輝き』は無い……。

「蘭に本当の事を言えば、蘭は元に戻る。」

でもそれを言うってことは、

蘭を安心させるのと同時に、蘭を危険に晒ひすってことだ。

蘭を安心させてやりてえが……それはできない……」

「じゃあ、どうするんじゃ？」

「このまま黙って見ているのか？」

阿笠がコナンを、『哀れむ』『ような目で見ながら、

コナンの意見を聞く。

「そっね……。」

残酷なようだけど、今の私達には、

彼女を安心させてやることはできないわ……。

工藤君の言うとおり、彼女を安心させるという事は、

彼女を危機に晒すと言うことなのだから……。」

阿笠の意見に、灰原がコナンの代わりに答えた。

「あ、哀君……。確かにそうかもしれないが、

せめて、新一の声で蘭君に電話するぐらい……。」

「駄目よ、博士。」

今の彼女に工藤君が電話をすれば、

彼女は少しは安心するかもしれない……。

でも、聞きたがるでしょうね。

彼の正体を……」

「そ、そうじゃな……」

灰原の言うことに納得した阿笠は、

顔を下に向けて黙り込んでしまう。

「あのねーちゃんを安心させてやりたいんやら、

奴らを倒す以外無いんとちゃうんか？」

服部は“場の空気”を変えるため、

笑って“自分の答え”を言った。

「ええ。

工藤君、服部君の言うとおりです。

組織を倒さねば、これからも彼女を苦しめ続けることになるでしょう。

それに、蘭さんだけじゃない。

彼らがいる限り、もっと多くの人々が気付いていくでしょう……。

ここは、組織を倒すために、“心を鬼”にするときではないんですか？」

白馬も服部同様、自分に意見を述べる。

「心を鬼にか……」

コナンは、言い終わった白馬の目を一瞬見て、

再び顔を正面に戻して呟く。

「そうよ。これはあなたにとって残酷な選択しようね。

でも、『組織を倒す』と決めた日から、

“いつかはこうなること”を予想していたはずよ……”

灰原は腕組みをして、横目でコナンを見ながら言い放った。

「……」

コナンは灰原の顔を、顔を向けて見た後、黙りこむ。

そんなコナンに皆の視線が集中する。

コナンは灰原の言った言葉に納得していた。

“組織を倒すと決めたあの日”から、

“何の犠牲も無しに組織を倒す”ということとは、

“単なる綺麗事であることは、百も承知”であった。

そのために、今まで蘭にも正体を聞かれた際も隠し通し、

『正体を明かしたい』という気持ちを押し殺して、

今があるのである。

もし、ここで『明かす』という選択をとれば、

今までの苦労は全て“水の泡”である。

なら今、自分がどう言う選択をするべきなのか、

コナンは改めて思った。

そして、決意した。

「フツ・・・、服部達の言うとおりだな・・・。」

そつだ。今ここでは心を鬼にするべき時だ。

蘭には悪いが、今は何もできない……。

そのためにも、奴らを一日でも早く潰す必要があるってことだな

コナンは皆の顔を見ながら、“笑顔”と、“迷いの無い目”をして、

皆に考えを言った。

「そつ、その目や！それでこそ工藤や！」

服部は笑顔で、コナンの“意思の強さ”を褒めた。

「じゃあ、今日は明日のために休みますか……」

白馬はそんな二人を見て、休みを取ることを進める。

「そつね。取りあえずお昼ご飯作るわ」

そう言った灰原は、台所に歩いて行く。

「あー宮野さん。僕も手伝いますよ」

「宮野さん？」

「ええ。それが君のホントの名前だろう？」

「．．．それとも、その名前で呼ばれるのは嫌いかい？」

「．．．好きにすれば．．．それよりあなた料理できるの？」

「ええ。大丈夫ですよ」

そう言った白馬は、灰原の後について行き、

作業を始めた。

灰原は、『宮野さん』と呼ばれたことに、

外見はポーカーフェイスを保ったが、

内心では嬉しかった。

そして、いつもより賑やかな、

昼食の時間が始まるのだった……。

阻止：沈みゆく天使と迷った名探偵（後書き）

今回のポイントは、コナンの迷いもそうですが、一番のポイントは、白馬が『宮野さん』と呼んだことでしょうか。。。

原作だと誰も灰原の本名を言いませんからね。。。

志保派の私には、『寂しい』感じがします。。。

では、評価等、お待ちしております！

阻止・阻止できた犯行とできなかった犯行（前書き）

今回は時間を飛ばし、暗殺の三十分前から始めます。

では、どござい！

阻止・阻止できた犯行とできなかった犯行

「ジェイムズ、今のところ異常ありません」

「うむ。そのまま続けてくれ」

「了解」

ここは米花センタービル。

そう、もう少しで本間広人が、狙撃される場所である。

現在時刻、十三時三十分。

ジョディはビルの入り口に入った本間広人を、

“護衛”としてつけているところである。

もちろん、気付かれないように、『離れず離れすぎず』の距離を保つて……。

ジェイムズは、米花センタービルの前にある道路の脇に止めてある、

沢山の車の中に自分の車を止めて、

ビルに入っているジョディヤ、

その他の捜査官の報告を聞きながら、指示をだしている。

因みに、車はスモークガラスがついているため、

外から中の様子を伺うことはできない。

その車の助手席と後部座席には、名探偵三人も乗車している。

「しかし、奴ら一体どこから撃つつもりなんや?」

助手席の後ろ側に服部は座っている。

そして、顎に右手を当てて、三人に問いかけるように呟いた。

「まあ、展望レストランにいる人間を撃つのですから、

その位置と同じ高さの場所から狙撃するのでしょうかね……」

服部の前つまり、助手席に座っている白馬が答える。

「うん。しかも、このビル周辺には、

そのぐらいの高さの場所はかなり少ない……」

数はかなり絞しぼられるよ」

運転席の後ろ側に座っているコナンは、

運転席にジェイムズが座っているため、

“偽いつわり”の口調で話す。

「ジェイムズさん。周辺のビルに潜入した捜査官からの情報は？」

「うむ。今のところ、異常は見られないそうだ」

白馬がジェイムズに、

他のビルに潜入した捜査官から、情報がないかどうかを確認した。

実は、捜査官が潜入しているのは米花センタービルだけではない。

近くの展望レストランと、同等の高さをほこるビルにも潜り込ませていた。

「ねえジェイムズさん。本間さんって何してる人なの？」

コナンが、バグミラーを通して、ジェイムズの目を見ながら話す。

「ああ。我々が調べたところ、

本間さんは杯戸町の〇丁目にあるレストランで、コックをしている
そうだ」

ジェイムズが、バググミラー越しに映るコナンの顔を見て答える。

「コックですか……。」

確か、前に射殺された五十嵐さんは銀行員、

次に殺された木村さんはバーテンダー、

そして、今回狙われている本間さんがコック、

三人とも職業がバラバラですね……。」

白馬が顎に右手を当てて、記憶を辿りながら言った。

「そっやな……。」

そもそも、何でこの三人は狙われておるんや？」

服部は、全く共通点が無い三人に疑問を持つ。

「ああ。それなら昨日、瑛海さんから連絡があったよ」

「ホンマか？」

「ああ。」

どうやらこの三人は、組織に金を渡していたようだ。

ああ……もちろん、彼らには組織とは知らせてなかったようだがな」

「なるほどな。ほんで、用が済んだからお払い箱っちゅうわけやな」

「そう言うことだ」

ジェイムズの話に、服部が腕組みをしながら納得する。

白馬、コナンも、「なるほど」「、と呟く。

「ジェイムズ、聞こえますか？」

そんな三人が話していると、無線からジョーディの声が聞こえてきた。

ジェイムズはマイクを左手で取り、ジョーディと会話する。

「本間さんが今、展望レストランに入り、窓際に着席しました」

「分かった。君も入り、彼の護衛を続けてくれ」

「了解です」

無線が切れ、

ジェイムズは取りあえず、本間広人が無事だったことに安心した。

まだ狙撃時刻ではないが、こう言った状況では安心するものだ。

「あと十分か・・・」

ジェイムズは車の時計を見て呟く。

「ボス」

再び無線から声がしたため、

ジェームズがマイクに向かって応答する。

「どづした？」

「センタービルの正面のビルにいますが、

いましたよ……。ライフルを片手に持っている女性が」

「何！？・・・それで彼女は？」

捜査官から通信に、車の中にいる四人は通信機に注目し、

次の報告に耳を傾ける。

「コナンは心の中で、「（女性のスナイパー……。キャンティか！）」

と思っていた。

「今のところ扉越しなため、気付かれた様子はありません」

「周りに仲間はい？」

「いえ。彼女一人のようです……」。

幸い背後を取れる位置です。捕獲しますか？」

「うむ、少々危険だが、頼む。くれぐれも慎重にな」

「了解」

「大丈夫なんか？」

無線が切られた後、服部がジェイムズを横目で見ながら、

心配そうに言う。

「まあ、彼を信じるしかない」

「そつやな・・・」

「ボス」

服部が言い終わった瞬間、また無線から声が発せられる。

声色からキャメルのようだ。

「なんだね。キャメル君？」

「今、センタービルの西側のビルにいるのですが、

屋上にスナイパー発見をしました。

外見から“コロン”と思われます」

「分かった。捕獲できるかね？」

「幸い、背後を取れます。やります」

「分かった。油断しないようにな・・・」

「了解」

「あとは二人の活躍に期待しましょう」

無線を切った後、助手席に座る白馬が“お得意”の微笑みを浮かべ、

ジェイムズに話しかけた。

「そうだな・・・。何も起こらなければいいのだが・・・」

ジェイムズは、二人の無事を祈るように窓の外から空を眺める。

「おかしくない？」

「何がや？」

後部座席に座るコナンが、

バックミラー越しに映るジェムズを見ながら言う。

「スナイパーの位置だよ」

「位置？」

服部がコナンに、どう言う意味かを聞こうとする。

「簡単に後ろを取れたことが、だよ。

組織ならこうなると予想して、護衛の一人か二人つけてるはず・・・

「つまり、“敢えて後ろを取らせた”、と？」

助手席に座る白馬が、顔だけを後ろに向けてコナンに意見を言い放つ。

「あるいは、スナイパー二人は囷とか・・・」

コナンは白馬の目を見ながら、真剣な眼差しで言った。

「では、もし囷なら、彼らはどんな方法で殺害すると言うのだね？」

ジェイムズは“予期せぬ事態”に少々焦り、コナンに問う。

「それは分からないけど・・・」

コナンはバッグミラー越しでジェイムズと目があつた後、

俯いて自信がなさそうに言った。

「ボウズの言うことはもつともやな・・・」

何かあるんかもしれへんな・・・」

服部はコナンの言葉が引っかかるのか、顎に右手を再び当てて考え始める。

「そろそろ時間ですね」

白馬が車の時計を見ると、『十三時五十九分』と表示されていた。

「ボス」

緊張が走る車内に、一本の無線が入る。

「何だね？」

その声色から、

先ほど“キャンティを捕獲しようとした捜査官”ということが分かる。

「それが、

彼女を捕獲しようとして跪ひざまずくように声をかけたのですが、

煙幕を張って逃げられました!」

「そうか……、まあ君が無事で何よりだ。

撤退してくれ」

「了解」

ジェイムズは、キャンティを逃がしてしまった事は残念だったが、

部下の無事が分かり、一息つく。

そこに、今度はキャメルからの無線が入る。

「どうしたね?」

「ボス、コルンの背後を取ったのですが、

それに気付いた奴にフラッシュを投げられ、

逃走を許してしまいました・・・」

「分かった。こちらもう一人のスナイパー、

『キャンティを取り逃がした』と報告を受けた。

まあ、狙撃が中止になっただけでも嬉しいことだ。

君も撤退してくれ」

「了解です」

キャメルからの報告を受けたジェイムズは、

再び『安堵』という溜息をついた。

時計を見ると、時刻は『十四時二分』とあった。

それを見た四人が安心していると、またしても通信が入る。

「ジェイムズ！ ジョディです！」

無線の相手はジョディのようだが、

その激しい口調から、

一行の心中に、「まさか・・・」と言つ考^かえが過^ある。

「どうしたね？」

ジェイムズは冷静に応答に応じる。

その様子を服部、白馬、コナンは黙って見ている。

心の中で本間広人の無事を祈りながら・・・。

しかし、ジョディの報告は、その祈りを撃ち砕くには十分だった。

「今、本間さんが突然苦しみだして、死亡しました！」

「なんだと!!」

そう、まだ終わってなかったのだった……。

阻止・阻止できた犯行とできなかった犯行（後書き）

うーん、何か今一かな・・・。

本当は『戦闘シーン』を入れようかと思ったんですが、どう書いていいかわからず、書きませんでした。

因みに、キャメルが言っている「フラッシュ」とは、

『フラッシュグレネード』のことです。

手榴弾の一種で、

閃光と爆発音で、『視覚』と『聴覚』を封じる手榴弾です。

では、アドバイスやご意見お待ちしております！

接近・悔やむ探偵と父親の内心（前書き）

皆さん、こんにちは。

今作から第四部に入ります！

私てきには、「もう四部か〜」という気持ちです。

こうやって小説を毎日書いていると、

三十五話なんてあっという間な気がします。

では、本編どうぞ！

接近：悔やむ探偵と父親の内心

「毒殺か・・・」

「はい。被害者は本間広人さん四十歳。

目撃者の証言によると、出されたワインを口にして突然苦しみだし、

倒れたそうです」

「で？その目撃者というのが・・・あなたか？」

「はい。お久しぶりですね。目暮警部」

ここは、米花センタービルの展望レストラン。

普段は、恋人や夫婦、友人が食事をして、

『楽しみ』を得る場所だが、

今は、床に喉を両手で押さえ『苦しい』表情をしている本間広人と、警察が事件の捜査をしている場所に、豹変している。

因みに、目撃者はジョディ。ここに警察を呼んだのは店の従業員。

客達の様子がおかしい事に気付き、

視線が集まっているところを見ると、

冷たくなっている彼を発見し、警察に連絡したのである。

白馬や服部、コナンもここに来ており、ジェームズは車の中にいる。

「鑑識さん。毒はどこから検出されましたか？」

「ええ。毒はワインのみから発見されました。

種類はトリカブトですね」

「分かりました」

目暮は鑑識にお礼を述べると、「トリカブトか……」、「と呟く。

「ジヨデイさん。怪しい人は見ませんでしたか？」

目暮がジヨデイに質問する。

「いえ、見てません。ただ、彼はずっと一人で時計を気にしてましたよ」

「時計ですか？」

「ええ。何度も」

「なぜそんなに時計を」

目暮は腕組みをして、被害者の“不可解な行動”の意味を考え始める。

「工藤。これ、奴らの仕業なんか？」

一方、その目暮達を、

現場から少し離れた場所で見ている、

服部、白馬、コナンは、独自の考えをまとめる。

「ああ。狙撃が失敗したと言うより、最初からこれが狙いだっただ」

「まんまと成功させられてしまった訳ですね・・・」

白馬達は、“成功を許してしまったことによる後悔”と、

“自分達の未熟さ”を痛感していた。

その後、組織の仕業ということもあり、

明確な手掛かりは得られず、捜査は一時中断となった。

事件現場から解放されたジヨディを連れ、

白馬、服部、コナンの三名は、ジェイムズの車に戻っていた。

「なに！？毒殺？」

「ええ、ジェイムズ。まんまと殺^やられてしまったわ」

車の助手席に乗車したジヨディは、運転席に座る上司に報告する。

助手席にジヨディが座ったため、

探偵三人は、後部座席に座る。

運転席側から、白馬、コナン、服部の順で腰かけている。

「そうか……。」

これで、彼らの暗殺対象の三人を守りきることができなかったか・
。。

なんてことだ……。我々の完全な敗北……」

ジエムズは、心に湧き上がる『怒り』を抑えられなかったのか、

右手握り拳でハンドルを、“少々”力を入れて叩いた。

「ジエムズさん。後悔ならいつでもできます！」

今はこの後どうするかを考えましょう」

白馬はバックミラー越しで、

ジエムズの『悔しさ』が溢れている顔を見ながら、

“正論”を言い放つ。

「そつだな……」

だが、彼らが次にどう動くか分からなければ……」

ジェイムズは、白馬の言葉に納得すると同時に、

“策が無い”と言うことを言った。

「取りあえず、今日はここまでだね。悔しいけれど……。」

博士の家まで行ってくれる？」

「うむ。そうだな……。」

コナンの意見に納得したジェイムズは、車を発進させた……。

米花センタービルをジェイムズ達が発った頃、

ここ毛利探偵事務所。

「困ったな・・・」

「ええ。学校に行ってくれただけでも少しの前進だけれど・・・」

今、事務所内のソファで、

二人の人物が向き合いながら、話をしている。

事務所の入り口側に腰掛けているのは、

『法曹界の女王^{クイーン}』の異名がある【妃英理^{きんえり}】。

彼女は名字こそ違うものの、

現在活躍中の名探偵、『眠りの小五郎』こと、

毛利小五郎の妻である。

つまり、彼女の本当の名は【毛利英理】であるが、

“別居中”のため、“旧姓”である【妃】の性を名乗っている。

しかし、“別居中”と言っても『中が悪い』という訳ではなく、

『近づきすぎず遠からず』と言った、

“様々な意味”で変わった夫婦である。

。大げさに言えば、『世界に二人いるかないか』と言っほどの……

そして、その“女王”の正面に腰けて、

煙草を吸っている男が毛利小五郎である。

今二人は、『娘の蘭のことについて』話し合っている。

話し合いの内容は、

『蘭が心を閉ざしてしまった原因と、その回復方法について』であ

る。

蘭は“前より”は回復したと言える。

心を閉ざしてから二日間、学校に行っていなかった。

学校には、小五郎が『風邪で休む』と伝えた。

“嘘も方便”というやつである。

蘭が心を閉ざした翌日、

部屋から出てこなくなった蘭に、

小五郎は当然心配になり、扉越しに色んなことを呼びかけた。

「大丈夫か?」、「どこか具合が悪いのか?」、「

「悩みがあるんだったら相談にのるぞ」など……。

しかし、娘から返ってくる返答は、

「心配しないで」「や、大丈夫……」だった。

いつもの“元気な声”ではなく、『泣き声』が混じった声で……。

時には、“返事が返ってこなかった”ときもあった。

小五郎は、『蘭がこうなった原因』が、

“だいたい誰にあるか”は予想できていた。

あの男……。

昨日蘭の部屋から出てきた、

あの“色黒ボウズ”が何か知っている……。

そう思った小五郎は、その“西の探偵”に話を聞いてみることにした。

「なんや、おっちゃん」

自宅の居間に、胡坐をかいて座っていた服部に、

「話がある」、と言って、事務所内に小五郎は連れてきた。

服部と一緒に居間に座っていた白馬は、

その様子を静観していた。

事務所に服部を入れた小五郎は、

開けた扉を閉めて、服部に、「座れ」と言う。

服部は入り口側のソファーに座り、

小五郎は服部と向かい合うように座った。

ソファーに腰かけた小五郎は、足を組み、

上着の懐から右手で煙草ケースを取り出して、

一本口に加えた後しまい、上着の右ポケットに入れてあるライターで火をつけ、

一服する。

「話ってなんや？」

服部は、いつもと明らかに違う小五郎に、

違和感を覚えながら話しを聞く。

「探偵ボウズ……。お前、蘭のこと知ってるだろう。」

小五郎は、普段の『間抜けな表情』ではなく、

『父親の表情』をして、服部に話しかける。

「ねーちゃんのことって、なんや？」

「とぼけるんじゃないよ……。」

蘭が“ああなった”原因をお前知ってるな」

服部は、“小五郎の自分を睨む眼差し”に、思わず身を引く。

「なんでそう思うや？」

「蘭が部屋に閉じこもる前、

俺は蘭の部屋から出てくるオメエを見た。

まあ、俺はその時湯につかっていたから、

蘭の部屋で何が起こったのかは分からねえ……。

だが、オメエが何かしたから蘭がああなった、違うか？」

小五郎は、服部の目を半分睨みつけるようにして、

自分の推理を話した後、一服する。

「なるほどな……。」

アンタの言うてはる事は合つとる。せやけど、言えへんのか……。」

「なぜだ？」

「すまん、おっちゃん。」

俺はあのねーちゃんが心を閉ざしとる理由を知つとる……。」

その解決方法もな……。」

せやけど、言えへんのか。絶対に……。」

服部は座つたまま頭を、小五郎に向けて下げた後、

頭を上げて理由を言う。

そんな服部を小五郎は、目つきを変えずに見ていた。

「そうか……。」

なら質問を変えよう……。

このままにしておいて、蘭は元に戻るのか？」

小五郎は理由を話そうとしない服部に、

「これ以上は無駄だ」と判断し、質問を変えた。

しかし、変えられた質問は服部にとって、『喜ばしいもの』ではなかった。

「分からへん、それは……。」

けどおっちゃん、これだけは信じてくれんか？

あのねーちゃんは今、もう少しで危険な場所に行きそうになった
んや。

その場所に行かせへんためには、

アンタにとっても、ねーちゃんにとっても苦しいことやけど、

俺が話すわけにはいかへんのや……。

自分勝手と思われるかもしれへん……。

せやけど、“いつか”、“いつか必ず”ホンマのことを話す！

それまで、待つといてくれへんか？おっちゃん……」

服部は半分“懇願”とでも言うべきような声をだし、

小五郎に“精一杯”自分の考えを伝えた。

その間小五郎は全く動かずに、

服部のそんな姿を『真剣な目』で見続けていた。

「・・・納得はできねえが・・・いいだろう。」

お前の“その言葉”を信じようじゃねえか・・・」

小五郎は服部の思いに『心打たれた』のか、

目を瞑って了承の返事をした。

「ホンマか？おっちゃん!？」

「ああ。だが最後に一つだけ聞かせてくれ」

「なんや?」

「オメエは蘭が『危険な場所に行きそう』と言ったな?」

服部はその言葉を聞いた瞬間、

『喜び』表情を崩し、『真剣』な表情になった。

黙り込む服部をよそに、小五郎は話しを続ける。

「つまり、オメエはその『危険な場所』ってところを知ってるんだよな？」

「……ああ……」

服部はゆっくりと答えた。

「オメエは大丈夫なのか？」

「……」

小五郎は黙り込む服部の様子を見て、

それは、『分からない』、と納得して、話しを進める。

「そうか……まあ、気をつけろよ」

「あ、ああ」

服部は、『もっと聞かれる』と思っていたため、

小五郎の“あまりにもあっさりとした返事”に、驚きながら返事をした。

「なら、オメエはとつと失せろ」

小五郎は左手で、『あっちに行け』という仕草をして、

服部に出て行くように伝える。

服部はそのまま扉を開けて出て行った……。

事務所の扉を閉めた服部は、ドアノブを右手で握りながら、

「すまん……おっちゃん」と内心で呟き、

自宅へと続く階段を昇って行った・・・。

接近：悔やむ探偵と父親の内心（後書き）

今回は前半で少しだけ、“久々”に警察を登場させました。

後半から少し時間が戻り、

毛利探偵事務所の五日間の一日を書きました。

さて、「これからどう言った展開にするか・・・」楽しみです！

では、評価、感想、ご意見お待ちしてまーす！

接近：米国西海岸からの情報と振りしぼった勇気（前書き）

今作は新たなキャラクターを追加しました。

その正体は読んでのお楽しみです！

では、どうぞ！

接近：米国西海岸からの情報と振りしぼった勇氣

「じゃあコナン君、服部君、白馬君、気をつけてね」

「ええ。では・・・」

時刻は十四時。場所は阿笠邸前。

ジェームズが運転する車で、阿笠邸まで送ってもらった白馬、服部、コナンは、

ジヨディの言葉に白馬が答えて、

去っていく車を見届けた後、鍵が開いていた阿笠邸に入った。

「ん？あら、お帰りなさい」

“珍しく”ソファアに座って、コーヒを飲んでいた灰原が、

玄関の扉が開く音に気付いて、

入ってくる人物を視認して言った。

「ただいま」

「ただいま」

「ただいま」

その灰原の言葉に、白馬、服部、コナンの順で返事をする。

「どうだったの？彼らのほうは・・・」

灰原はソファーに座るために、こちらに歩いてくる三人に結果を聞く。

「最悪や・・・。まんまとやれてしまった・・・」

灰原の正面のソファーに腰かけた服部が答える。

それに続きコナンが灰原の右に、

白馬が服部の左に座った。

「博士は？」

コナンはいつもいる人物がないことに気付くと、

左にいる灰原に、顔を向けて尋ねる。

「博士は今、あっちで電話してるわ」

灰原は右手人差し指で、博士の方向を指して答える。

コナンがその方向を見ると、確かに誰かと電話してる。

だが突然、博士がコナンの存在に気付いたのか、

『保留ボタン』を押して受話器を一旦置き、

コナンのほうへ走ってくる。

「新一。優作君から電話じゃ。『重要なことを話したい』と言っておったぞ」

「え？父さんから？」

そう言ったコナンは、電話機まで歩いて行った。

コナンが席を立った後、

阿笠は白馬、服部、コナンのコーヒーを淹れに、台所に歩いて向かった。

一方、コナンは受話器を取り、『保留ボタン』を押して、

受話器を右耳に当てる。

「もしもし」

「ああ、新一か。久しぶりだな」

電話の話し相手は、工藤新一の実父である【工藤優作】。

彼は“世界的有名な推理作家”であり、

代表作として『闇の男爵』ナイトハロンシリーズがある。

現在はロサンゼルスに、

妻の【工藤有希子】と共に住んでいる。

「父さん、『重要なこと』ってなんだ？」

「ああ。さっきインタポールの友人から連絡があつてな・・・」

「！！ま、まさか父さん。奴らの情報が入つたのか！？」

優作の言葉を聞いたコナンは、気持ちが一気に高ぶる”。

「まあ、落ち着け新一。」

入ってきた情報によると・・・、

どつやら鳥取の倉吉という場所に、彼らの廃棄された研究施設があるようだ」

「く、倉吉に!?!」

「ああ。・・・行くのか?」

「フッ・・・もちろん!」

「コナンは優作の問いに、“高ぶる感情を剥き出しにして”答える。

「そうか・・・。まあ、お前が決めたことに口を挟む気は無いが、

気をつけてな・・・」

「ああ。分かってる。

「・・・じゃあ切るぜ。情報サンキュ」

「ああ」

そう言い終わると、優作が静かに受話器を置いた音が聞こえた。

コナンも静かに受話器を元の位置に戻した後、

博士達が腰かけているソファアに、歩いて行った。

「おお、新一。終わったのか？」

「ああ、博士」

阿笠はテーブルに置いてある、コーヒーをコナンに渡した後、

コナンは受け取ったコーヒーカップを持ちながら

灰原の右に座り、阿笠は灰原の左に腰かける。

腰かけたコナンは、コーヒーを一口飲んだ後口を開いた。

「博士。いきなりなんだけど・・・、今から鳥取の倉吉に行きたいんだ」

ブツ！

阿笠は思わず、飲みかいていたコーヒーを吐きだしそうになる。

幸い、“間一髪”のところで止まった・・・。

阿笠以外の三人もコナンを驚きの表情で見る。

「な、なんじゃと！何で今から・・・」

「さっきの電話やる。工藤？」

阿笠がコナンに顔を向けて言った後、

服部も、『顔のみ』をコナンに向けて話す。

「ああ。父さんからだったんだけど、

インターポールにいる人が、鳥取の倉吉に、

“廃墟になった組織の研究施設”があるって情報を届けてくれたらしい」

「組織の研究施設？」

灰原がコーヒークップを右手で持ちながら、

横目で右に座るコナンを見ながら言った。

「ああ。まあ、ただの研究施設ならともかく、

組織が関わると“鳥取の倉吉”という場所を時たま聞くからな……。

“ただ”の研究施設ってことはないだろうぜ」

コナンは正面を見ながら、『笑み』を浮かべて話した。

「なるほど……。」

そこに行けば、少なくとも彼らの手掛かりが掴めて、

「歩近づけるといっわけですね」

白馬が顎に右手を当てて、正面のコナンの目を見ながら言った。

「ああ」

コナンは笑みを浮かべながら答える。

「じゃ、じゃが忘れてはいないか？新一。」

君は組織の『サイレント』というメンバーに“目をつけられている”のじゃぞ」

阿笠は笑みを浮かべ続けるコナンの顔を、

“少々焦り気味”な表情で見ながら、“早口”で話す。

「そう。問題はそこだ。」

博士も行くとするれば、灰原もついて行かざるを得なくなるし、

そもそも、その『サイレント』って奴が、

今どこで何をしているのかさえ分かっていない。

それにベルモットの話しによると、

サイレントが狙っている人物は灰原っぽいし、

・・・うん、やっぱりここは、博士と灰原がここに残り、

白馬、服部、俺が行くって方法をとったほうがいいかもな・・・」

コナンは腕組みをしながら、

考えた結果を言った。

だが、左に座る灰原がその意見を否定する。

「私も行くわ。工藤君」

その言葉に皆の視線が、コナンから灰原に移る。

「な、何考えてんだオメエ！！自分の言ってることが分かってんのか！？」

コナンは灰原の顔を、『血相変えた表情』で見ながら言い放つ。

それに続き阿笠も口をだす。

「そ、そうじゃ、哀君。

・・・君がここを出るといふことが何を意味するか”ってことは、

分かってるじゃろっ」

「そっや、ねーちゃん。」

今回はじーさんと一緒にお留守番するとき」

服部は灰原の顔を見て言った後、コーヒーを一口飲む。

しかし、三人の言葉でも灰原の考えは変わらない。

因みに白馬は、静かに灰原の顔を見たまま一言も話さない。

「分かってるわ。ここを離れるということがどれだけ危険なことか
・・・。

でも、行きたい。

工藤君の言うとおり、その研究施設が“ただ”の施設じゃないのな
ら、

もしかしたら、アポトキシンのデータがあるかもしれないわ。

もし、そのデータがあつたら、あなた達じゃ理解不能でしょ？」

「そ、それはそうだけどよ……」

コナンは灰原の意見に、納得しつつも反対する。

そんなコナンを横目で一瞬見た後、

視線を正面に戻した灰原は話しを続ける。

「それに、その【サイレント】って人がこの米花町に潜んでいるのなら、

この町から出てしまえば大丈夫ってことでしょ？……逆を言えば「

灰原は意見を述べた後、コーヒーを口にする。

「そ、それはそうじゃが……」

引かない阿笠に、灰原は顔ごと阿笠のほうへ向けて再び口を開く。

「それに、ここにいたほうが危険なんじゃない？」

工藤君達が行ってる間に、

『【サイレント】がここに来ない』とは言い切れないはずよ」

そう言い終えた灰原は、顔を正面に戻して、再びコーヒを口にす
る。

「……はあく。しゃーなーな。

悔しいけど灰原が言ってることも正解だ。

灰原を連れて行こう博士」

コナンは“渋々”灰原の意見を承知する。

「……分かった。じゃが哀君、気をつけるんじゃないぞ」

博士もコナン同様、“不承不承”ふしようぶしょうで承知した。

「では、行きますか。」

今から車を飛ばせば、午後四時半の羽田発鳥取空港行きの飛行機に乗れますよ」

白馬が飲み干したコーヒーカップをテーブルに置いて、

阿笠の目を見て話す。

「よし！じゃあ準備して行くぞ」

コナンのその一言で、皆がコーヒーカップを手早く片づけ、

荷物を“テキパキ”手際良くまとめてビートルに乗車し、羽田へと向かった。

接近：米国西海岸からの情報と振りしぼった勇気（後書き）

今作のポイントは、

『灰原が組織のメンバーに怯えず、勇気をだした』ことですね。

原作だと、組織がでてくるとその気配を感じ取り、
怯える彼女を見て『可哀想』と感じ、

今回は、“立ち向かう彼女”を描写しました。

ところで原作だと、

『鳥取倉吉』という言葉が稀にでてきますが、
一体何があるんでしょうね・・・。

では、評価等お待ちします！

接近・停止する天使の心中と未来へ進む五人（前書き）

今回は“ほぼ”蘭の一人称です。

では、ごっごー！

接近・停止する天使の心中と未来へ進む五人

「じゃあね、蘭」

「うん。また明日」

今私は、学校からの帰宅道で園子と別れたところ。

二日前、私が学校へ行き始めた時、

登校道で会った園子は、

私の姿を見た瞬間に、駆け寄ってきた。

そして私に近づくと、「心配したんだよ蘭。大丈夫風邪?」、

と、『心配』という言葉を、

言葉だけではなく、表情、目、雰囲気と全身から放ち、

私の目を、その『心配』な目で見ながら聞いてきた。

私は、「大丈夫。心配かけてごめんね」、と言い安心させた。

その言葉に園子は本当に安心したようで、

「良かった」、と呟いて私に向かって笑った。

私もその笑顔を見て、笑いを返した。

でも、それは“表”だけで、

心という名の“裏”の私は、本当の笑顔を作れていなかった。

園子と話しをしながら学校へ登校した私は、

いつも通りに下駄箱に靴を入れて上履きを履き、

いつも通りそのまま教室へ向かう。

そしていつも通り、クラスメイト達の雑談が聞こえる教室の扉を開ける。

ここまでも、これからも普段と変わらないが、

唯一違うのは、私の心と、

入ってきた私に気付いた生徒が、私の復帰を歓迎する声が聞こえたこと。

「毛利、大丈夫か?」、「もう、いいのか?」とか、

私に話しかけてくる。

私は園子と同じく、「表だけの笑顔」で「大丈夫」と答える。

本当は大丈夫じゃないけれど……。

それを聞いたクラスメイト達は、

安心したようで再び先ほどの雑談を始める。

私はそんな雑談を聞きながら、自分の席に座る。

席に付いた私は、考えごとをしていた。

窓に映る景色を見ながら……。

考え事の内容はもちろん、コナン君いえ、新一のこと。

あの夜、私は服部君を自室に招き、

自分の推理を話した。工藤新一は江戸川コナンだと言ったことを……。

でも、彼から返ってくる返答は、

どれも期待しないようなものばかり……。

結局明確な答えが得られないまま、話しは終わってしまった。

服部君が出て行った後、私はこらえきれなくなった感情を、
涙という形で体から出した。

服部君の話しを聞くうちに、「服部君も白馬君と同じで隠し事をす
るの?」「、

という考えが膨れ上がっていき、

服部君が話している最中に、目の前が霞かすんできた。

彼らが新一の秘密、いえ、

コナン君が新一だと言つことを知っているのは明らかだった。

でも、二人とも必死に“見え透いた演技”をして、

それを誤魔化している。

そこまでして隠さなければならぬことなのだろうか？

私は泣きながら考えた。

“半信半疑”だが、

『人の体が幼児化した』なんてことが世間に知られれば、

服部君の言つとおり、世の中がメチャメチャになるだろう。

もしかしたら、彼らは“それを”恐れているのだろうか？

いや、違う。

服部君は、コナン君が新一だと言つことを知っている。

恐らく、新一が話したのだろう。

それに、阿笠博士も知っているはず……。

彼は服部君同様、コナン君を『新一』と呼んだ記憶がある。

博士も新一に聞いたのだろう。

もし、彼ら二人が新一から聞いて知ったのなら、

新一がそんな事を話す理由が分からない。

まあ、博士は新一が信頼できる人物の一人だから、

話しても当然として……、服部君のほうだ。

秘密が漏れることを恐れているのなら、

なぜ新一は服部君に話したのだろうか？

博士だけで十分はず……。

それに白馬君も知っていた。

こんなに色んな人が知っているということとは、

新一はもしかしたら、仲間を求めているのだろうか？

なら、なぜ自分に話してくれない。

幼いころから共にいた自分になぜ……。

博士が信用できる人物というのなら、

自分も“それに”値する人間のはず。

でも、彼は話してくれない。

なぜか分からない。

考えても……。

それから、私は泣いた……。

涙が枯れても、声だけで泣いた……。

泣きつかれた私はいつの間にか寝てしまったのか、

気付いたら朝になっていた。

私はダルイ体を起こし、朝食を作るため台所に向かった。

部屋から出てきた私を最初に迎えたのは、

父だった。

「おお蘭。おはよう」

私に気付くと父は、笑みを浮かべて挨拶をした。

「おはよう……」

私は、“今自分がだせる精一杯の元気”で挨拶を返したが、

その声は自分が聞いても元気がない。

私が台所へ向かうと、すでに白馬君が目玉焼きを作っていた。

「おはよう・・・白馬君」

私が再び元気の抜けた声で挨拶をすると、

白馬君がフライパンから目を話し、

微笑みの表情で、「おはよう蘭さん」と挨拶を返した。

それから私は、白馬君の手伝いをして、

寝坊してきた服部君と共に、朝食を食べた。

皆は朝食を食べながら、色んな話しをしていたが、

私はその話に加わることは無かった。

朝食の片づけを白馬君と共にした私は、

部屋に戻った。

しばらくして、お父さんが学校へ行かないことを不審に思ったのか、扉をノックしながら、「蘭。学校はどうするんだ?」、と言ってきた。

私は正直に、「今日行きたくない」、と言った。

父は私の気持ちを察したのかどうか分からないが、

「そうか・・・」、と言って部屋を離れて行った。

次の日も学校を休んだ私を、さすがに“不審”に思ったのか、

父が扉越しに声をかけてきた。

私は適当に答え、父の声が聞こえなくなっただ後、

枕に顔を押しつけて眠ってしまった。

目が覚めたのは、もう『おやつ』の時間』だった。

「こんなに寝てしまったのか」と、自分自身に苦笑いを浮かべる。

昼食を抜いたためか、お腹が空いていた。

でも今は、何も口にしたくなかった。

そのまま部屋に閉じこもり、

昨日の事を考えたが、全く答えがでないまま夜を迎えた。

さすがに『空腹という敵』に耐え切れず、

私は部屋を出て、父達と共に夕食のテーブルを囲んだ。

夕食の準備をしている白馬君に、「何か手伝う？」と言ったが、

笑顔で、「いえ、大丈夫ですよ。蘭さんは休んでいてください」と
言われ、

私は白馬君の好意に甘え、居間の座布団に座った。

私に気を使ってくれたのだろう。

今は、彼のその好意が気持ちよく感じる。

夕食、入浴を済ませた私は、

部屋に戻りベットに横になって眠りについた。

翌日、

「これ以上心配をかけたくない」と思った私は、

今日から学校へ登校することにした。

それを聞いた父も、白馬君も、服部君も喜んだ。

私は、彼らの『喜び』のおかげか、

心が少しは晴れて学校へ向かう。

そして、現在。

私は授業中もずっと、窓の外を眺めていた。

ただ、不思議なことに、

先生の言ってることは耳に入ってきて、

当てられたときも答えられた。

でも、授業中も、お弁当のときも、

園子と一緒に下校道を歩いている時も、

話し声は頭に入ってきて返事もしているけど、

頭の中では“あの考え”、

新一「コナン君ということを考えていた。

でも、やはり答えが見つからない・・・。

“新一が自分に話してくれない”こともそうだが、

それ以上に、“なぜ今の姿になっているのか？”というほうが難問であった。

結局、今日も答えが見つからないまま、

私は帰宅した・・・。

蘭が帰宅した頃、場所は西へ移り、ここ鳥取空港。

時刻は十七時四十五分。

「さて、これからどうするんじゃない？ 新一」

空港ロビーでこれからのことを、阿笠はコナンに尋ねる。

「ああ。倉吉駅までここからバスが出てるから、それに乗ろう」

コナンはバスの時刻表を見る。

そこには、『十七時五十五分にバスが出る』とあった。

それを見たコナンは、そのことを皆に伝える。

「あと十分でバスが出る。そのバスに乗ろう」

コナンが言い終わった後、服部が『草臥くたびれた表情』をして言う。

「今度はバスかいな・・・」

そんな服部の顔を見た白馬が、

彼の顔を横目で見ながら微笑んで言う。

「頑張ってください、服部君。行きますよ」

そんな会話をしたコナン達一行は、

バス停でバスに乗り、料金を払った後に席につく。

ここ、鳥取空港発のバスだったためか、

丁度一番後ろの席が開いており、

そこに運転席側から、コナン、灰原、阿笠、服部、白馬の順で腰かけて、

約四分後、バスは扉を閉めて走り出した・・・。

接近・停止する天使の心中と未来へ進む五人（後書き）

一人称はこれで二度目ですね。

正直、コナンのよりも、蘭のほうが書きやすいですw。

では、感想、ご意見待ってまーす！

接近・深夜に聳える研究所と謎の記録（前書き）

今日はこれで四話更新。

いや〜書いた書いた・・・。

そのキックバックか、指が痛い・・・。

では、ごうぞー！

接近：深夜に聳える研究所と謎の記録

「あれだな……」

ここは鳥取県倉吉市。

現在コナン達一行は目的の建物を発見し、

近くの森林地帯に身を隠し、少々遠くから建物を様子を伺っている。

「どつちや？工藤」

服部は、右隣りで“阿笠持参”の双眼鏡を覗いているコナンに、状況を聞く。

コナンは双眼鏡を覗いたまま答える。

「ああ。今のところ、何も変わったところはないな……。」

人影も見当たらないし……。」

そのコナンの答えを、コナンの左隣にいる灰原が聞き、口を開く。

「そう。ならそろそろ行きましょう」

「そうだな。行くか」

コナンは灰原の意見に納得して、元研究所に向かった。

そのコナンの後ろを、四人が付いて行く。

二分ほど歩き、

一行は研究所の『正面ゲート』と思われる門の前に着いた。

「近くで見ると不気味ですね」

時間帯が“夜”であることと、

研究所が使われなくなって随分と時間が経過していたため、

建物の所々が老朽化し、不気味さが感じれた白馬が思わず呟いた。

「入るで」

そう言った服部は、“ゆっくり”と門を開ける。

門は錆びているせいか、『ギィィィ』という耳触りな音をだした。

門を通過した一行は、正面に見える扉に向かって歩きだす。

扉に向かっていくと、

辺りを見回しながら歩いている灰原が話します。

「ここ、研究所以外、外には何も無いのね」

そう、門がつけてある扉が、研究所の周りを囲っているのだが、

扉の中の敷地内には、“研究所以外何も無かった”。

「そうみたいじゃの・・・」

灰原の言葉を聞いた阿笠が言い、

その後には頭を歩いている服部が言った。

「そつやな・・・。せめて駐車場ぐらいあってもよさそつやけどな」

白馬、コナンも、辺りを見回しながら歩いている。

「開けるで」

そんな考えを、頭の中に思いながら歩いた一行は、

目指していた扉の前に着く。

服部がドアノブを握り、

後ろにいる四人に、確認のため顔だけを振り向く。

服部と目があったコナンは、「ああ」と呟く。

その言葉を聞いた服部は、扉を静かに開けた。

扉を開けると、

長い直線状の通路の両脇に、扉が取り付けられている光景が目に入った。

そんな光景を見たコナンが、自分の意見を言う。

「奴らがいる可能性もあるからな。」

皆で一つ一つ慎重に調べよう

「よっしゃ」

「妥当な判断だね」

服部、白馬が答えた後、阿笠と灰原も、首を縦に振って了承する。

そして、コナン達は一つ一つ“静かに”且つ、

見落としが無いように、慎重に部屋を調べて行った。

各部屋は、研究資料や薬品が置かれたものが“大半”を占めていた。

その資料の中には灰原が見覚えのある、

組織のいたところに目にした薬の、

データが書かれていたものがあつたが、

アポトキシンの情報は今のところは無かつた。

「ふ〜。一通り一階を調べ終わっけど何もあらへんな」

服部は二階に続く階段の前で、壁に寄りかかりながら呟いた。

そんな服部の目を見ながら灰原が言う。

「でも、ここが組織の研究施設だということは明らかね。

私が組織にいたところに目にした薬品もあったし・・・」

灰原を見ながら、彼女の話しを聞いていた白馬が、

階段を見ながら言う。

「では、次は二階に行きましょう」

「ああ」

コナンは了承し、一行は二階へ進むため階段を昇る。

二階も一階と同じ構造と思いきや、

そうではなく、

階段を昇りきって“六歩”ほどの距離のところだ、

扉が一つあるだけだった。

その扉を見つめている服部が、口を開く。

「なんやこれ？扉が一つあるだけやんか」

「とにかく入ってみよう」

服部の言葉を聞いたコナンは、

扉に近づきながら言った後、ドアノブを回す。

扉が完全に開き、目に入ってきた光景は、

“部屋の隅々まで無駄なく使われた”研究施設だった。

コナン達は思わず息を飲む。

「なんて広さ」

灰原が思わず、『驚き』の言葉を言った。

「驚いている暇はねえ。皆で分担して探そう」

コナンは後ろにいる四人に、自分の意見を述べ、

四人は首を縦に振った後、部屋に散った。

この部屋は上から見て、“上を北の方角”にすると、

北にビーカーや試験管などの実験器具が置かれた机、

ここを今、阿笠が調べている。

東には薬品の棚が“ギッシリ”と並べられている。

ここは白馬が調べている。

北西は、研究情報をまとめるためにあるのか、

パソコンや筆記用具、メモ用紙などが置かれている。

ここは服部が調査している。

そして、南西には資料や実験結果をまとめたものが、

ファイルとして保存され、そのファイルが棚に並べられている。

ここはコナンと灰原が調べている。

調べてから五分ほど経過したところ、

服部が声をあげた。

「ねーちゃん、工藤。ちょっと来てみ！」

服部は右手で、コナンと灰原に手招きしながら呼びかける。

「どっした？服部」

「見てみ」

服部はそう言って、いじっていたパソコンの画面をコナンと灰原に見せる。

「なーい、これは」

何とそこには、「APT-X4869の研究」というファイルが、

“何者かの日記”として保存されていた。

コナンはすぐにそのファイルをクリックする。

コナンのその声を聞きつけ、阿笠、白馬が駆け寄ってくる。

「どうしたんじゃ？」

「何か見つけましたか？」

阿笠と白馬が駆け寄りながら言う。

「ええ。目的のものが見つかったかもしれないわ」

灰原はパソコンの画面を見ながら、「笑み」を浮かべて言い放った。

日記を見ていたコナンは、日記を読み始める。

「八月十日。

あの男に言われ、この場所に来て研究をしてきたが、

成果は全くでない。

実験のマウスに“気が遠くなる”ほどの量の試作品を投与したが

全て死亡。これでは駄目だ。

やはり今日も、目覚ましい成果はでなかった。

八月二十日。

駄目だ！あれから全く成果が無い。

実験体として補給されてきた百体のマウスは、

『例によって例の如く』とでも言うように全て死んだ！

そもそも、あの男はなぜこんな薬を求める？

・・・いや、止めておこう……。考えるほうが無意味だ」

ここでコナンは一旦読むのを止める。

「この日記間違いなく、ここの研究員のものやな」

服部はコナンの顔を見ながら言い放った。

それに続き灰原が言う。

「ええ。ここはアポトキシンの研究施設だったのね」

「それにしても、さっきから出てくる“あの男”とは一体……」

白馬は顎に右手を当てながら、考え始める。

「続きを読むぜ……ここから一気に月が飛ぶな」

コナンはそう言いつつ続きを読み始める。

「十月十五日。」

あれから我々は無駄な時間を過ごしていた。

実験は成果はせず“業を煮やした”我々は、

研究を一からやり直した。

薬品の量、調合するタイミングと時間全てを……。

しかし、その努力を“あざ笑う”かのように成果はでなかった。

唯一変わったと言えば、実験で死んだマウスが増えたぐらいか……。

分からない。これからどうすればいい……」

コナンは次の文章を読もうとしたが、

“あるもの”が書かれていないことに気付く。

「ん？日付が書かれてないな……」

コナンは不思議に思ったが、今は置いておいて続きを読み始める。

「……あれからどのくらい経ったのだろうか？

我々、いや私は、身も心も死んでいた。

とうとう我々は、“成果がでないことに業を煮やしたあの男”に限られた。

私以外の研究員はここを次々と止めていき、

今は私一人となった。

だが、私は一人だが私は一人ではない。

私には家族がいる。

愛し合うもの達が……。

だが、その家族にも会えない。

せめて、この間生まれた娘の顔ぐらい見てやりたかったものだ。

そう、“失った”も同然だ。

……そろそろ潮時か……」

ここまで読み上げたコナンが、口を再び開く。

「ここまでだな・・・」

コナンが言い終わった後、灰原がコナンの顔を見て言う。

「結局、アポトキシンの詳細は書かれてなかったわね」

「もしかしたら、その棚にあるかもしれねーぞ」

コナンがさつきまで、自分と灰原が調べていた棚を見ながら言った。

「そうね。探してみましよう」

そう言った灰原は、棚に向かって歩き出した。

その灰原を見ていた白馬が口を開く。

「そもそも、この日記を書いたのは誰なんでしょう？」

さつきからでてる“あの男”についても気になります「

その白馬を横目で見ていた服部が自分の意見を言う。

「そつやな。」

それにこのおっちゃん、家族がいるゆつてるで」

「・・・」

パソコンの前に立っている四人は、考え始めるが答えはでずに黙り込む。

そんな静かな部屋に、

灰原が棚を探している『ガサガサ』という音が、

大きく響いていた・・・。

接近・深夜に聳える研究所と謎の記録（後書き）

今回は、『謎の研究者が残した日記』がポイントですね。
この日記を書き残した人物、皆さん分かりますか？

では、評価、感想等お待ちしております！

接近・出来損ないの名探偵の情報と忍び寄る脅威（前書き）

皆さん、こんにちは（＾＾）。

さてさて、今日は暑くなりそうですが、ジメジメしてないので、嫌な陽気にはなりそうもありません。暑いのは嫌ですけど・・・。

皆さんは、暑いのと寒いのがどちらが好みですか？
私は寒いのが好きです。

では、本編どうぞ！

接近・出来損ないの名探偵の情報と忍び寄る脅威

「!・・・工藤君、あつたわ」

今灰原が目的の資料を見つけたのか、

ファイルを手にして言った。

その言葉に、パソコンの前で考え込んでいた四人が、

灰原のほうへ顔を向ける。

「本当か!? 灰原」

コナンが灰原のほうへ、駆け足で近付きながら言う。

そのコナンを見ながら灰原が答える。

「ええ、見て。『APT X 4 8 6 9の研究結果』って書かれてるわ」

灰原は駆け寄ってきたコナンに、ファイルの側面を見せる。

「ホンマや！でかしたで、ねーちゃん」

コナンの後ろから来た服部が、

その文字を見て灰原を、笑みを浮かべて褒める。

その言葉を“聞き流した”灰原は、

ファイルを開けて中身を見始める。

まず、目についたのが研究者の資料だ。

そこには、研究員の名が『あいうえお順』に並べられていた。

灰原はその項目には大して興味は無かったが、

一番最後の、

『最高責任者』という欄に書かれている名前を見て、表情を曇らせる。

それに気付いたコナンが声をかける。

「どうした？灰原」

「これ……」

そう言った灰原は、ファイルの『最高責任者』という欄を、

右手人差し指で指す。

「……宮野厚司……って、じゃあやっぱり……」

コナンがその名前を言い終わると、

“予想”を口にするが、灰原が割り込む。

「ええ。やっぱりお父さんはこの薬を研究していたのね」

「なんじゃと？」

その言葉を聞いた阿笠が、コナン達のほうへ歩いてくる。

「じゃあ、宮野博士は……」

阿笠はファイルに書かれているその名前を目にすると、

残念そうに呟いた。

阿笠にとって宮野厚司は、『自分の発明を気に入ってくれた』人物の一人。

コナンや灰原の話しで、

“彼らの仲間”ということとは分かっていたが、

その証拠を見てショックを受けたのだろう。

「……博士……」

そんな阿笠の様子を見上げながら、コナンが呟く。

灰原はファイルの中身を、一ページずつ慎重に見ていく。

「何が書いてあるか分かるのか？」

コナンが、灰原が見ているページを覗きながら、

“一行ずつ慎重”に見ている灰原に聞く。

「ええ」

灰原はその一言だけで答える。

コナン達は、灰原が集中できるように話しかけないようにする。

同時に、『彼女を連れてきて正解だった』と思うコナン達であった。

阿笠、服部、コナン、

そして、パソコンのほうからこちらに歩いて来た白馬も、

灰原が見ている資料を覗いているが、

『日本語で書かれていること以外、“一行たりとも”理解できない。』

「ところで、妙じゃありませんか？この施設……」

資料を覗いていた白馬が、

下に向けていた顔を正面に戻して、疑問を言い放った。

それを聞いた阿笠が、白馬の顔を見て答える。

「何がじゃ？」

白馬の疑問が理解できていない阿笠の代わりに、

灰原の資料を見ていた服部が、

白馬と同じく顔を下から正面に戻して、左隣にいる白馬のほうに向けて答える。

「この資料の数やる？」

建物は廃墟やのに、資料やパソコンのデータは消されてへん。

まるで、今も誰かが使っている見たいにな」

その服部の話しを横目で聞いていた白馬は、

視線を正面に戻して答えた。

「ええ。建物が廃墟ということは、

この研究施設は廃棄されたと言っことになります。

しかし、廃棄されたのなら、

中にあるこの大量の資料や薬品も、処分かどこかに持ち去られているはずですよ」

その白馬の疑問を聞いた阿笠は、

頭の中に“嫌な予感”が浮かんでくる。

そして、その“予感”をぶつけるかのように、

右隣りに立っている白馬を見ながら言い放つ。

「ビ、ビ、ビと言いつつじゃ？」

ま、まさか・・・彼らの罠ということか!？」

『彼ら』というのは組織のこと。

阿笠は、『その組織』の罠ではないか』と不安に駆られ始める。

そんな“焦り”の表情を見せる阿笠を見上げながら、

三人の話しを聞いていたコナンが口を開く。

「それは分からねえ。

・・・だが、この施設を誰かが使っているのは確かだ。

でなきゃ、ここまで廃棄された建物に、

“これほどの資料”が揃っている理由が思い当たらねえ」

コナンの話しを聞き終えた阿笠が、

焦りの表情をそのままにして意見を言う。

「なら、このことをFBIに連絡したほうがいいんじゃないか？」

その阿笠の意見に、コナンが反論した。

「いや、それはまずい。

ただの研究施設ならいいとしても・・・、

ここにはアポトキシンのデータがある。

もし、今ここにFBIが乗り込んできたら、

アポトキシンのデータが発見されてしまい、

そのデータやこの研究施設で俺達がまだ見つけて無い資料に、

幼児化のことが書かれていたら、

いくらFBIと言えどもまずいことになる。

だから、連絡するのはもっと施設を調べてからにしよう」

コナンが言い終わった瞬間、

“コナンの話しに追加するように”、服部が阿笠に顔を向けて話し

だす。

「それにや、じーさん。

ここにジョディ先生らが乗り込んできてしもーたら、

最悪の場合組織に発見され、

この小っこいねーちゃんと工藤が、

【サイレント】 っちゅうメンバーに狙われるかもしれへんで……」

服部の話しを聞いているうちに、

阿笠は“顔が徐徐に青ざめていき”、

服部の意見に納得する。

「そ、そうじゃな……」

パタンッ

阿笠が言い終わった後、灰原がファイルを閉じる音がした。

その音に反応して、四人は灰原の顔を見る。

「終わったんか？」

服部が顔を下に向けて、灰原に話しかけた。

それに灰原は、目を服部に向けて答える。

「ええ。」

このデータがあれば、“完璧な解毒剤”が完成するわ」

灰原は『完璧な解毒剤』という言葉を、

“嬉しそうな”声で強調しながら言った。

その言葉にコナンが、“喜び”の表情を向けて言い放つ。

「本当か！？灰原」

灰原は左にいるコナンに、視線を移して答えた。

「ええ、工藤君」

灰原は“嬉しさ”に満ちた声と表情をそのままに、

コナンに言った。

「よっしゃー！なら、とっくと出まじや。

もう、ここに留まる理由はあらへんからな」

服部は灰原と同じく、

“嬉しい”という表情を浮かべ、

他の四人に出るように促した。

「ああ、灰原もいいよな？」

コナンは服部の顔を見て、彼の意見に同意し、

顔を右にいる灰原に向けて話しかけた。

「ええ」

灰原はコナンの目を、横目で見て賛成する。

灰原の“賛成の返事”を耳にした一行は、

部屋の出口に歩いて向かい、出た後、

服部が扉を静かに閉める。

服部が扉を閉めたのを確認した一行は、

そのまま歩いて階段を下りていく。

そして、再び“真つすぐな通路”を歩いて出口へと向かっていたが、

出口のほうから“妙な音”を耳にしたコナンが止まり、

後ろを歩いてついて来た四人に、“正面を向いたまま”話しかける。

「何か音が聞こえねえか？前から・・・」

その言葉に後ろの四人は、耳をすます。

すると、コナンの言うとおり、前方から何か音が聞こえる。

コシ・・・コシ・・・コシ・・・コシ・・・

「これ靴音やな・・・」

一番後ろにいる服部が、“やや小声”で話す。

「誰か来ますね・・・」

服部の右斜め正面に立っている白馬が言う。

それに続き、服部の左斜め正面に立っている阿笠が口を開いた。

「ま、まさか組織の人間なんじゃ・・・」

その阿笠の言葉を、彼の右に立っている灰原が口を挟む。

「いえ。気配が感じられないわ」

灰原は、自分の“第六感”が警戒音を発していないことを述べた。

「そうか・・・。」

でも念のため、近くの部屋に身を隠そう」

そう言ったコナンは、

自分の右側にある扉を、音を立てないように“ゆっくり”と開ける。

扉を開けたコナンは、四人が入ったことを視認した後に、

再び“ゆっくり”と閉め、

扉が閉まるギリギリの位置で止め、

扉と壁の間から通路の様子を伺う。

そして、足音は徐々に迫ってきた・・・。

接近・出来損ないの名探偵の情報と忍び寄る脅威（後書き）

今作は名前だけですが、『宮野厚司』が登場ですね。

ここでは“施設の最高責任者”となっていますが、

原作では一体、どう言った人物だったのでしょうか？

では、評価、感想、ご意見お持ちしてまーす！

接近・招かれざる客と逃げ惑う五人（前書き）

ふう〜。四十話更新です。

いや〜、三十話のときもそうでしたが、

『十話』というのは、長いようで短く感じます。

では、エンディングー！

接近・招かれざる客と逃げ惑う五人

コツ・・・コツ・・・コツ・・・

ここ、コナン達一行が忍び込んでいる研究所では、

一人の大人と思われる、“重い足音”が通路に響いている。

その人物は、コナン達が隠れている扉を通過して、

通路の奥に進んで行った。

扉と壁の隙間から、その人物の姿を“一瞬”捉えたコナンは、

その人物が一般人じゃないことを知った。

顔には、『目だし帽』を被り、『ゴーグル』を装着。

そのため、顔を伺うことはできない。

手には黒色の手袋をはめ、

右手には“あろうことか”拳銃が握られていた。

足には黒色のブーツを履いている。

そして体には、

これまた黒色のレザーシャツの上に、

同じ黒のレザーコート、

下半身にはレザースボンを履いている。これも黒色である。

上半身には、レザーコートの際間から、『ホルスター』のような物が見えた。

今も外の様子を伺っているコナンの後ろから、服部が小声で声をかける。

「どつちや？」上藤

コナンは外の様子を見ながら、返事をする。

「ああ。一般人じゃないな……。」

それに、黒で統一された服を来ているとなると、奴らの仲間かもしれないねえな」

「な、なんじゃと」

『奴らの仲間』という言葉に阿笠は驚き、

思わず声を出す。

「ホンマなんか？」

せやけど、このねーちゃんは『気配が感じられん』言つとるぞ」

服部は右にいる灰原に、顔を向かせながら言った。

その服部の顔を見ながら、灰原が“冷静な表情”をしながら言う。

「いえ。気配は最近鈍くなってるから、感じないだけかも・・・」

「つまり、あの人物も『彼らの仲間』と考えた方がいいわけですね」

灰原が言い終わった後、

彼女の後ろにいる白馬が、顎に右手を当てて呟いた。

白馬が言い終わった後、

通路の奥から、扉を開ける『ガチャ』と言う音が、微かに聞こえた。

それも、やや上のほうから・・・。

それを聞いたコナンが、“視線を動かさず”に言い放つ。

「どつちやら、二階に行ったみたいだな・・・」

「チャンスやな・・・、今のうちや」

コナンが言い終わった後、服部が小声で意見を述べた。

「ああ、行こう・・・」

コナンは服部にそう言い返すと、

扉をゆっくりと開け外に出る。

念には念を入れ辺りを見回したコナンは、

『誰もいない』ことを確認すると、

四人に向かって右手で手招きし、

その仕草を見た四人は部屋から出て、

最後に出た白馬が、“ゆっくり”と扉を閉めた。

白馬が扉を閉めたことを視認した四人は、

そのままコナンを先頭にして、

なるべく音を立てないように慎重に且つ、

早歩きで出口に向かう。

緊張状態のせいか、

目に見えるが、“やたら遠くに感じた”出口の扉を開け、

一行は外の空気を吸う。

「ふう……。何とか出られましたね」

出口の扉を静かに閉めた白馬が、

“安心感”から来た言葉を言った。

「まだまだこれからだ。この鳥取を出るまで安心できねえ」

コナンは白馬に目を合わせながら言い放った。

彼らの目には、入ってきた門が見える。

あそこを出て走れば、まずこの状況を少しは、良い方向に進めることができる。

誰もがそう思った。しかし、それはいけない。

ここで慌ててミスを犯せば、

今自分達の背中に建っている、研究所の中をうろついている人物に、

見つかってしまう。

その出口を見ながら服部が小声で言いだす。

「あそこを出れば少しはマシになるんやろっけど、

問題はあの門やな」

コナン達四人もその門を見つめる。

先頭に立っているコナンが、門を見つめながら呟く。

「ああ。開ければ音が出ちまうからな。

・・・となると、あそこの塀を昇るしかないか・・・」

一呼吸置いた後、コナンは視線を門から、

門の左右にある塀を見る。

その塀はちょうど、大人一人が腕を伸ばせば、届く高さだった。

「なら、行きましよう。

こうしてる間も危機は迫ってるのだから・・・」

扉を見ていた灰原が、自分の前にいるコナンの、背中に語りかける。

幸い、この建物の門側には窓は無い。

つまり、門側から出れば、

中にいる人物に気付かれる確率は格段に低くなる。

「そうだな。行こう」

顔を後ろに向けたコナンは、

“慎重な顔つき” になっている灰原の目を見て、

返事をした後、前に顔を向き直して前進した。

後ろの四人も、コナンの歩調に合わせて付いて行く。

コナン達は周りに見える、何も無い敷地内に目もくれず、

塀一点を見つめて前進して行く。

少々急ぎ足で、門の左側に着いたコナン達一行は、

時間があまり無いため、間をおかずに塀を昇ろうとする。

しかし、ここでトラブルが発生。

そう、白馬、服部は塀に手を伸ばせば越えられ、

コナン、灰原は、他の三人に手を貸してもらえば、

越えることができる。

問題は阿笠である。

彼はその体型から塀に手が届かない。

塀の前に、そのことで悩んでいた四人だったが、

服部が名案を出す。

「しゃーないの。俺と白馬が背中貸したるさかい。

じーさんは俺らを踏み台にして越えろや」

服部は自分の後頭部を右手でかきながら、

目を瞑って言い放った。

「す、すまんのおゝ服部君」

阿笠は『申し訳ない』というふうじ、

苦笑いを浮かべながら、正面の服部の顔を見て答えた。

そんな阿笠を左で見ていたコナンと灰原は、

“別の意味”で苦笑いを浮かべていた。

「では、さっそく始めましょう。服部君」

「ああ」

服部の左側に立っていた白馬が、

少々笑いをこぼしながら、塀に向かって歩き、

塀の前で尻を、塀のほうに向けて四つん張りになった。

白馬の右隣りに、面倒くさそうに歩いて来た服部も、

白馬と同じ体制になる。

その体制になった服部が、

目の前に歩いて来た阿笠に顔を向けて言った。

「よっしゃ。ええでじーさん」

白馬も服部に続き、「どうぞ」と顔を上げながら言った。

二人の視界には阿笠と、後ろにいるコナン、灰原が、

さらに後ろには、研究所が不気味な雰囲気で建っている。

しかし、今の二人が気になっているのは、

阿笠でもコナン、灰原でも、研究所でもない。

研究所の入口、そこが開かないことを祈るばかりだ。

二人の視線が扉に集中していると、

阿笠が服部の背中に左足を載せてから、右足を白馬の背中に載せる。

その瞬間、二人の両腕と両足に力が入る。

コナン、灰原は、阿笠が扉を越えるのを願いながら、

二人の背中に載った阿笠を、視界に入る塀と一緒に見ている。

阿笠は精一杯両手を伸ばし、

塀の上部を掴むと、腕に力を入れて体を持ち上げる。

阿笠の足が離れたことを感じた白馬と服部は、

すぐに立ち上がり、

阿笠の足や尻を、両腕で支えながら上に持ち上げてフォローする。

二人のフォローもあり、「よいしょっと」、

と声をあげながら、

阿笠は目に飛び込んできた、深夜の森林地帯を見ながら塀を越える。

阿笠が塀を越えたのを視認した四人は、

次はコナンと灰原を塀の外に行かせるため、

「まずは灰原が行けよ」と、コナンが灰原の目を見て言った。

灰原は、「じゃあお言葉に甘えて……。服部君頼むわ」と言い、

服部にフォローを頼む。

服部は灰原の目を見ながら、「任せろや」と言った後、

灰原の両脇を掴み、

灰原の両腕が塀に届くところまで持ち上げる。

なお、彼女が両手で持っていたファイルは今、白馬が持っている。

灰原は両手で塀を掴み、体を持ち上げる。

阿笠同様森林地帯を目視した灰原は、

体を塀の向こう側に持っていき、そのまま飛び降りた。

灰原が塀を越えるのを目視した白馬は、

コナンに「君が塀を越えたら門まで来てくれ。

門の隙間からファイルを渡そう」と言う。

コナンは白馬と目線を合わせながら、「分かった」と言った後、

コナンも灰原と同じ方法で塀を越える。

白馬はコナンが塀を越えるのを目視した後、

門に向かい門の隙間からファイルを出す。

それを、塀を越えて走ってきたコナンが受け取った。

「じゃ、俺らも越えようか」

服部が白馬に近づいて、彼の目を見ながら言った。

「ええ」

白馬も服部に目を合わせ言った後、

門の左の扉に両腕を伸ばして掴み、

体を持ち上げて扉を越え、体を向こう側に持っていき飛び降りた。

「何とか脱出成功ですね」

白馬が、目に映る阿笠達四人を見ながら言う。

その白馬に服部が答える。

「そっちな。ほな、行こうか」

服部は答えた後、森林地帯に向かって歩きだす。

それに続き阿笠、白馬、コナン、灰原が後ろをついて行った。

阿笠が腕時計を見ると、もう二十三時三十分だった。

「これから、どうするんじゃない？」

阿笠は左手についている腕時計を見た後、

正面に映る森林地帯を見ながら言い放つ。

その阿笠の問いに、彼の右側を歩いていたコナンが答える。

「そうだな。取りあえず宿泊施設を探そう。」

ネットで調べたところ、どこも空き部屋はあるそうだけ

「なら、そうしましょう。疲れたわ・・・」

阿笠の左側を歩いている灰原が、『いかにも疲れ切った表情』をして答える。

そして、そのまま一行は森林地帯を利用して、

身を隠しながら最寄りの宿泊施設へ向かった。

接近・招かれざる客と逃げ惑う五人（後書き）

今回の反省点は、最後の部分で、

『塀を越えるところを描写しすぎたこと』ですね。

その分、他のことが書けずに、

読んでいて飽きてきた方がいると思います。

うーん、まだまだですね……。

評価、感想待ってます！

接近・帰路につく五人と漆黒の二人（前書き）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。

さて、今回から少々書き方を変えました。

それほど激しいものでもありませんが……。

では、ごうござい！

接近：帰路につく五人と漆黒の二人

翌日

倉吉市にある、『松風荘旅館』に宿泊したコナン達一行は、

疲れも取れ、気持ちいい朝を迎えようとしている。

「・・・うん・・・朝か・・・」

布団を敷き、部屋の入口側から、

阿笠、コナン、灰原、服部、白馬の順で寝ていた彼らの中で、

コナンが目を覚まし、起き上がった。

コナンは左を見て、自分の布団から二歩ほどの距離を開けたところに、

寝ている阿笠を部屋の入口と共に視認する。

右に顔を向けると、窓の外に映る一面の松の木が、

朝日に照らされ美しい緑の芸術を生み出していた。

その景色をバッグに、手前から灰原、服部、白馬が気持ちよさそうに寝息を立てている。

そんな三人を見た後、

コナンは布団から立ち上がり、右にいる灰原の顔を見下ろす。

普段はクールというか、ポーカーフェイスを保っているというか、

その表情の“素”を、ほとんど見ることができないが、

今自分が見ている彼女は、

“誰が見ても”、幸せそうな夢を見ている顔をしていた。

「（こうして見ると、結構いい笑顔作るんだよね……こいつ……」

・」

コナンは灰原の寝顔を見ながら、

内心そう思う。

そして、「普段の彼女も、こつこつ顔をしてくればいいな」とも思った。

コナンは布団をたたみ始める。

もちろん、他の四人を起こさないように静かに……。

布団を片づけたコナンは、一先ひつまず眠気を覚ますため、

部屋の入口から、三歩ほど進むと左にある洗面所に、

欠伸あくびをしながら向かう。

その途中で、玄関の上の壁に設置されている時計を見ると、

時刻は七時半だった。

洗面所で歯磨きを始め、

「もう起きる時間か……いつもなら……」ということ思いながら、

歯を磨く。

その歯を磨く音＋自分が起きた時から、

部屋中に響いている阿笠の躰こしで目を覚ましたのか、

白馬が先ほどを変わらない、『緑の芸術』をバッグに起き上がる。

「おはよう。白馬」

歯磨き中に部屋を覗いたコナンが、

歯ブラシを一旦口から外して挨拶をする。

その声に気付いたのか、白馬が右手で寝むそつな目を擦りながら、顔をコナンに向けて、「おはようございます」と挨拶を返した後、立ち上がり布団をたたみ始める。

たたみ終わった白馬もコナン同様、

玄関と、寝ている三人を視界に入れながら、

洗面所に向かい歯を磨く。

「工藤君。これからどうしますか？」

白馬が、洗面所の鏡に映る自分と、コナンの姿を見ながら言う。

「ああ。とにかく鳥取を出なくちゃな。」

このまま旅館で朝食食って十時半頃にここを出発。

近くの新町停留所で、倉吉駅までバスで移動して、

倉吉駅から鳥取空港だな……。

後は、鳥取空港に着いたら、一番早い飛行機までの出発時刻まで、

一時間十五分ほどの時間が余ってるから、その間どうするかだな……」

コナンは話し終わった後、

歯ブラシを口内に入れて歯磨きを再開する。

「なるほど……空港に着いてからの時間潰しですか……」

白馬が言い終わった後、二人は鏡に映る自分の姿を見ながら、

歯磨きを終える。

二人は洗面所を出て、顔を右に向けて時計を確認する。

時刻は七時四十五分を指していた。

「じゃあ、そろそろこいつら起こすか……」

コナンは今だに部屋で寝ている三人を、

白馬と共に体を揺すって起こし始める。

「服部君、起きてください。朝ですよ」

白馬は服部の寝顔を見ながら、胸元を右手で揺すりながら声をかける。

「……ん？白馬か？……朝かいな……」

目を開けた服部は、白馬の顔を、

背景に映る木造の天井と一緒に視認した後、

ダルそうな体を起こす。

「おい。博士も灰原も起きろ！朝だぞ」

コナンは阿笠と灰原の間に立ち、

声を少々大きくして言った。

「・・・う、うん・・・もう朝かしら・・・」

灰原がゆっくりと目を開け、

眠たそうな目を右手で擦りながら起き上がる。

「おはよう。灰原」

コナンは彼女の布団を視界に入れながら、顔を見て笑顔で挨拶をする。

「おはよう工藤君」

灰原は左目だけを開け、コナンの顔を、玄関を背景にして視認し、挨拶を返した後立ち上がって、布団をたたみ始める。

一方阿笠は、まだ髪をかきながら夢の中である。

「ったく・・・」

コナンはそんな阿笠の寝顔を見て、呆れた表情を浮かべる。

そして、服部と灰原が洗面台に向かうのを、

背後で発生した足音で認識したコナンは、

阿笠に近づき、体を右手で揺すり始める。

「おい、博士。起きろって」

それでも起きない阿笠に、「博士」という声を三回かけた時、阿笠

がよじやく目を覚ます。

「……おはよう新一」

阿笠が右に立っているコナンを、バッグの松の木と一緒に視認し、

立ちあがって、背伸びをした後、

布団を片づけ始めた。

阿笠、服部、灰原が歯磨きを終えた後、

コナン達は自室で、

全く変わることがない、朝日に照らされる松の木を背景にして、

朝食を食べ始める。

彼らは、「これからどうするか?」

「空港に着いたら、何をして時間を潰すか」など、

先のこの話しをメインにして、箸を進めた。

朝食を食べ終わり、出発の準備や着替え、これからのことを話している内に、

あっという間に時間は過ぎていき、玄関の上の時計を見たら、

十時二十分を指していた。

「そろそろ行くか。ちょっと早いけどな」

コナンが言うと、部屋で寛くわいでいる四人が賛成さうせいの声をだし、

一行は荷物を持って、旅館の従業員や、

他の宿泊客に挨拶をしながら、旅館の出口へ向かう。

出口のカウンターのところで、

左薬指に、指輪をはめている女性従業員に、

料金を払ったコナン達は、「ありがとうございました!」という、

従業員の声を聞きながら、旅館から出ていった。

旅館を出たコナン達は、

コナンを先頭に、最寄りのバス停に辺りを警戒しながら歩いて行った。

幸い、自分達をつけてくる人物や、

奇妙な気配や視線を感じることなく、バス停につくことができた。

バス停では、コナン達以外に待っている人はおらず、

車のエンジン音や、近くを通りかかる人達の話し声を聞きながら、

コナン達は警戒することを忘れずに、

五分ほど待った後に来たバスに乗車して、

倉吉駅へと向かう。

バスの中では、ここに来た時と同じくガラガラで、

一番後ろの席に、来た時と同じ順番で腰かける。

「今のところ僕達をつけてくる人物はいませんね・・・」

一番出口側に座っている白馬が、

左側の窓に映る、鳥取の景色を眺めながら言い放った。

「そやな。このバスん中にも、俺ら以外客はおらんし、

油断は禁物やけど、安心して良さそうやな」

白馬の右隣りに腰かける服部が、

前方に映るバスの座席を見ながら答えた。

「ああ。今のところはな・・・」

一番左側に腰掛けるコナンは、

少々固い表情をして、右に映る車の流れや、

人の動きを横目で見ながら答えた。

そのままバスは、一度もバス停に停車せず、

五人の乗客を乗せたまま、倉吉駅へと到着した。

到着したバスから、料金を払って外に出た一行は、

十一時十五分発のバスに乗車するため、

次のバス停に、倉吉駅を通過する電車や、

通り過ぎていく通行人を眺めながら、

歩いて向かう。

時刻は十時五十五分。

まだ、バスが来るまで時間が余っていたため、

コナン達はバス停のベンチに座り、バスを待つことにした。

場所は西から東へ変わり、

ここは杯戸町のとある道路。

その道路を、一際目立った車種と色で走行している、

一台の黒い色のポルシェが走っていた。

その車内の運転席には、漆黒の色をした服を纏まとい、

他の者を寄せ付けぬ殺気を放っている、銀髪の男【ジン】が、

ハンドルを握り、愛車を手足のように操りながら、

杯戸町を駆けている。

その助手席には、ジンの相棒として長い間付き合ってきた、

漆黒のサングラスをかけた男、【ウォツカ】が座っている。

今ウォツカは、右耳に携帯を当てながら、

窓に映っている杯戸町の流れる景色を見ながら、

電話をしている。

電話を終えたウォツカは、携帯を切ってジンのほうに顔を向け、

内容を話します。

「兄貴。倉吉の研究所に侵入したサイレントからの情報です」

ウォッカの話しを耳にしたジンは、

視線を正面から外さずに答える。

「言え」

「侵入したところ、何者かに荒らされた後があったそうですぜ。」

それに、アポトキシンのファイルが無くなっていたそうですぜ。」

「アポトキシンのファイルだと？」

ここでジンは、視線を一瞬正面の風景からウォッカに移し替える。

「ええ。それと、パソコンを起動させた後もあったらしいですぜ。」

まさか、兄貴。あそこに侵入したのはシェリーでしょうか？

あの女がまだあの薬に未練があるのなら……。

そもそも、サイレントが俺達に連絡してきたのは初めてのことですぜ。

どういづつもりなんでしょう？サイレントの野郎は……」

ジンは暫し黙った後、視界に見える前の車や、

杯戸町のビル群を見ながら口を開く。

「……サイレントの電話も気になるが、

あの男が何を考えてようが関係はない……。

ウォッカ。シェリーの行方を調べさせる。

そして、少しでも情報が入ったら俺に聞こすように伝える。

人員は誰でもかまわん」

ジンはその冷徹の表情を全く崩さずに、

正面を見てウオツカに伝えた。

「分かりやした」

ウオツカは少々不気味な笑みを浮かべて答え、

組織のメンバーに電話をかけた・・・。

接近：帰路につく五人と漆黒の二人（後書き）

久しぶりにジン、ウォッカの登場ですね。

今回は状況を詳細に伝えるため且つ、コナン達が移動中とのこともあり、会話がほとんど無かったのが反省点ですね。

うーん、やはり小説を書くというのは、難しい……。

では、評価、感想お待ちしております！

終焉：終わりの始まり（前書き）

皆さん、おはようございます。

今作から第五部に入ろうと思います！

「四部めちやくちや短いんじゃない？」と、
思われる方がいると思います。

実を言つと、『第四部は長く書くつもりはありませんでした。』

さて、話は変わりますが、今朝ログインしたところ、
評価とお気に入り登録が上がっていました！
ありがとうございます！！

では、本編どうぞ！！

終焉：終わりの始まり

倉吉駅からバスで、鳥取空港に到着したコナン達は、

ちょうど昼食の時間だったため、今空港の喫茶店にいる。

彼らは、店の左側にある四人掛けの席に、二組に分かれて腰かけている。

店の入り口側の席に、服部と白馬が向かい合わせで座っている。

白馬が通路側、服部が壁際だ。

その左隣の席に、阿笠と灰原が通路側に、

阿笠と向かい合わせでコナンが壁際に腰かけている。

彼らが食べているのは、『フランクフルター。』

要するにホットドッグである。

しかし、今の彼らの簡単な昼食は、

決して“楽しい”ものではない。

そう、【サイレント】の存在である。

今現在この喫茶店には、お昼ということで客足が増加している。

今も、入口の扉が開く『カランカラン』というベルの音と共に、

二人の会スーツを着た社員が入ってきた。

「この会社員のどちらかは、サイレントの変装かもしれない。」

そういう考えが頭を過る。

それだけではない。

この店で食事をしている人々、従業員、全てが怪しく見えてしまう。

「ねえ。工藤君」

フランクフルターを口にし、呑み込んだ灰原が、

コナンに話しかける。

「ん？何だ灰原」

コナンは灰原を見ながら、

彼女の後ろの席で食べている人達も、警戒しながら答える。

「昨日、研究所で出会ったあの人。何者だと思う？」

「灰原はどう思う？」

「私は……、気配こそ感じられなかったけど、

組織の人間じゃないかと思うの……」

「やっぱり俺と同じ考えか・・・」

「じゃあやっぱり・・・」

「ああ。これは俺の勘だが、奴がサイレントの可能性が高い。

まあ、何の証拠もねえけどな・・・」

コナンは言い終わると、フランクフルターを口にする。

その味が口の中に広がり、

呑み込めるほどの大きさになったのを感じて、喉に流し込んだ。

ここで、コナン達がまだ、

二つの内の二つ目のフランクフルターを、

半分ほどしか食べ終わっていないにも関わらずに、

すでに完食している服部が話に入ってきた。

「そつやな。今思うと、あんな簡単に俺らが脱出できたのが気になるん。」

あん時は必死で気付かへんかったけどな・・・」

服部は、左の席に座るコナンの顔を見て話した。

「確かに・・・。」

何である時奴は部屋を一つずつ調べなかつたんだ？

侵入者がいると分かかっていてあそこに入ったのなら、

部屋に隠れているぐらい想像つくはずなのに・・・。」

コナンが顎に手を当てて、考えながら答えた。

「じゃあ、なんじゃ・・・。」

奴はわざと逃がしたと言うことか？」

阿笠が正面にいるコナンに、少々声をあげて言い放った。

「しっ！博士声が大きいって」

その阿笠に、自分の口もとで右手人差し指を立てて、

『静かにするように』と、コナンは阿笠に仕草を見せる。

そのコナンを見て阿笠は、「すまん」と声を小さくして言った。

「博士の言うとおり、“その”可能性も無いとは言えない」

コナンは再び考えるポーズをして呟く。

「ありがとうございました」

その時、店のレジが置いてあるカウンターから、女性の声が聞こえ

た。

コナンは一瞬その女性のほうを向くと、

再び視線を元に戻す。

「まあ、とにかく今は、

そのサイレントなる人物のことも重要でしょうけど、

ここを出て東京の土を踏むことも重要です」

白馬はコナンの後ろにある、

白色の壁も視野に入れながら、コナンに話しかけた。

「そっだな・・・」

コナンはそっ言いつつ、

残っているフランクフルターを食べ始める。

そして、全員が食べ終わると、

各自で出し合ったお金を阿笠がレジで払う。

会計を済ませた阿笠が、出口付近で待っていたコナン達に合流すると、

一行は喫茶店を出て行った。

道行く人々をやり過ごしながら、コナン達は搭乗ロビーへ向かう。

その人達の中には、男児を連れ、

楽しそうな表情を浮かべながら、会話をしている子連れのパウヤ、

仕事で疲れたのか、よれよれのスーツを着て、

スーツケースを引っ張りながら搭乗ロビーに向かう男性。

色んな人々が見える。

コナン達はもうすぐ搭乗時刻なため、搭乗ロビーに並び飛行機に搭乗する。

搭乗したコナン達は自分の席に着席する。

並びは、窓際からコナン、灰原、阿笠で、

彼らの後ろに、窓際から服部、白馬が座る。

機内はスチュワーデスが歩いていて、

乗客に突然声をかけられても、冷静に対処していた。

そして、出発時刻の十三時十五分になると、

離陸のアナウンスが流れ、飛行機はエンジン音と共に、

青い大空へ旅立った。

コナン達が鳥取空港を発ち、空の旅を快適に楽しんでいる頃、

ここ鳥矢町のとある道路の道脇。

そこに、太陽の温かい光の恵に逆らう者達がいる。

その色は漆黒という闇の色。

通行人はその珍しい型と色に目を奪われるが、

視界から消えると視線を正面に戻して、歩いてその場を去っていく。

その車内には、運転席に黒づくめの服を着て、

銀色の髪をしている男、ジン。

助手席には、同じく黒づくめの服を纏い、
まと

サングラスで表情を隠している男、ウォッカ。

今ウォッカは、携帯での会話が終了して携帯を閉じ、

『兄貴』としたうジンに、携帯で聞いた内容を顔を向けて報告する。

「兄貴。調査の報告がきましたぜ」

「言え」

ジンはウォッカの目を、殺気溢れる瞳で睨みながら命令する。

「シエリーは見つかりませんでした、

『シエリーに似たガキがいる』と報告がありやした」

ジンは、「シエリーに似たガキ」という言葉に、眉を一瞬動かして反応する。

ウォツカはそれに気付かずに報告を続ける。

「名前は灰原哀。

米花町に住んでいる、阿笠博士っていう発明家のじーさんの家に、

やっかいになっているそうですぞ。

今は、帝丹小学校の一年生として通ってるようです。

因みになんですが、このガキ不思議なことに、

シェリーが組織のガス室から、

謎の方法で脱出した後に、その日をおかずに表れたらしいですぞ」「

ジンはウォツカの報告を、

正面に映る人だけに、視線を移して黙って聞いた。

「そのガキ、今どこにいる？」

ジンは正面を向いたまま、ウォッカに問う。

「はい。理由は分かりませんが、

昨日の夕方に、阿笠のじーさんや他の“連れ”と思われる青年、

そして、彼女と同年ぐらいの眼鏡をかけたガキと一緒に、

羽田空港の搭乗口を潜ったと、

この空港の従業員が証言しているそうです。

行き先は鳥取空港のようです」

「鳥取……か。

サイレントが見た侵入者はそいつらの可能性があるな」

ジンは、窓越しにポルシェを見てくる通行人の視線を無視しながら、

考えを言った後、暫しの後ウォッカが、ジンに顔を向けたまま、

その向こう側に映る通行人を視野に入れながら、質問した。

「・・・兄貴。一つ聞いていいですかい？」

「なんだ？」

ジンは横目で、ウォッカのサングラスに隠されている目を睨む。

「もし、その『シェリーに似たガキ』がシェリー本人だとしたら、

奴は幼児化したってことになりますよね？」

「そついうことになるな・・・」

ジンは間をおかず、冷徹な表情を変えずに答える。

そのジンの視線の先には、

青信号になったことで走り出す、車が『群れ』を作っていたが、

ジンはウオッカしか目に入っていない。

「兄貴は信じますか？人間の体が幼児化するなんてこと・・・」

ウオッカは睨んでくるジンの瞳を見ながら、

“強張った表情”でジンに問った。

それを聞いたジンは視線を正面に戻し、

「フツ」と、笑いをこぼした後、話始める。

「ウオッカ。

『信じる信じない』の問題じゃねえよ。

それが現実だというのなら信じるしかない。簡単なことだ・・・。

それにもしかしたら、疑うのは我々人間が頭の中で考えている常識のほうかもしれないぜ」

ジンは薄っすらと笑みを浮かべた顔で、正面を見ながら答える。

正面には窓越しに、乗用車やトラック、

赤信号になつとことで横断歩道を渡る人々が見えていたが、

彼の目は“それら”を捕らえているのでは無い、

そうウオツカは感じた。

「では、どうするんですかい？」

ウオツカは強張った表情のままジんに問う。

ジンは間をおかずに答えた。

「ウオツカ。組織の科学者どもに、

【『出来損ないの名探偵』の試作品を百体のマウスに投与しろ』と伝える。

『結果がでたら俺のところに報告をしろ』ともな

「了解」

そう言ったウオツカは、懐から携帯を右手で取り出し、

番号をかけて右耳に当てる。

ウオツカもこの時、正面に映る車の群や、通行人が見えていたが、

“ジンと同じもの”は見えなかった……。

終焉：終わりの始まり（後書き）

今回は、お気づきになられた方も多いと思いますが、

『風景を入れる場面を多くして見ました。』

今まで『そんな場面がなかった』のも、

小説の面白さが欠けていた、一部かもしれないね……。

では、評価等お待ちしてまーす！

終焉・希望へ進む未来と絶望に進む未来（前書き）

さて、そろそろこの小説の前半である、

『組織壊滅』の話が終わりに近づいてきました。

とは言っても、“話てき”にはまだまだ続きますが……。

ネタばれになってしまうかもしれませんが、

後半からが、『新志』の物語を書いていきたいと思ってます。

では、どうぞ！

終焉：希望へ進む未来と絶望に進む未来

現在時刻十四時三十分、ここ東京国際空港、

通称羽田空港。

今、この空港に一機の飛行機が着陸して、

中から乗客が降りてくる。

皆様々な荷物を持ち、様々な表情を浮かべ、

そして、様々な服装をして到着ロビーに向かっている。

その顔は、「やっと帰ってきた」と思わせる疲れ切った表情や、

「また遊びに行こう」と、

笑顔で子供と会話をしている楽しそうな家族。

中には、何があったのかは分からないが、

『怒り』の表情を剥き出しにして、

文句のような言葉を言い放っている女性と、

それを一步引いた表情で慰めている男性の姿もある。

この二人の左手薬指には、結婚指輪がはめられている。

そんな乗客達が、到着ロビーを次々と潜くっていく中、

老人、青年二名、子供二名もその到着ロビーを潜くった。

「いや、快適な空の旅じゃった」

老人、阿笠博士は、目に映る搭乗ロビーに並ぶ人達を見ながら、

笑って言った。

その阿笠を見て少年、江戸川コナンが見上げながら、

半分呆れた表情で言い放つ。

「博士。俺達は空の旅を楽しむために、乗ったんじゃないんだぜ。」

分かってんのか？」

「まあ、いいじゃない。ゆっくりできたんだし」

コナンが言い終わった後、彼の左隣にいる少女、

灰原哀が目を瞑りながら言った。

因みに、彼女が持って帰るファイルは、今阿笠のリュックの中にある。

「そうだね。でも、安心はできませんよ。」

分かってますね？」

阿笠の後ろにいる青年の一人、

白馬探が、搭乗可能になったのか、

進んで行く搭乗ロビーの人々を見ながら言った。

その光景を見ながら、白馬の左にいる関西弁の青年、

服部平次も続いて言う。

「そやな。とつととじーさんの家に行こうや。

せやないと安心できへん」

「そうだな、行くか」

後ろにいる服部の姿を、彼の後ろにいる人混みにも、

気を配りながら見たコナンは、出口に向かって歩を進め始めた。

他の四人も、彼の歩調に合わせて前進する。

進んでいる最中にコナンは、右に見える搭乗ロビーを横目で見る。

昨日、自分達もあそこに並んだ。

あの時は、“こんなに上手く行く”と思っていただろうか？

いや、思ってなかった……。

もしかしたら、自分達に目をつけている、

『サイレント』に皆殺しにされるんじゃないかと、思ったぐらい緊張していた。

でも、今自分達はここにいる。

目的のファイルも見つかり、五人揃ってここに帰ってきた。

もちろん油断はしない……。

無事は“今だけ”かもしれない……。

奴らを相手に、“気を抜くことが何を意味するか”、それは分かっていた。

だから、今も注意を常に周囲に払う。

自分達とすれ違う人々、椅子に腰かけて休む人、

こここの従業員、全てに……。

そんな警戒心を抱きながら歩いていると、

出口が見えてきた。

向こうには、バスに乗車しようとする人々が並んでいる。

そして、バスもその人々を送り届けるため、

次々とバス停に停車して、乗客の乗り降りを行っている。

そんな光景を目に入れながら、ようやく外の空気をコナン達は吸った。

ひと安心したコナン達は、そのままビートルを止めてある、

駐車場へ向かった。

もちろん空港内と同じく、警戒心をその心に宿しながら……。

コナン達が駐車場でビートルに乗車した頃、

烏矢町の道路を、黒色のポルシェが走っていた。

乗車しているのはこの車の持ち主のジーンと、相棒のウォッカ。

ピッ

今、ウォッカが携帯を切り懐にしまった後、

正面一点を見つめ、ハンドルを握っているジンに顔を向け、

電話の内容を報告し始める。

「兄貴。組織の科学者から、例の件で報告がありやした」

ジンは黙って運転に集中している。

長年共に活動しているウォッカは、

これは彼が、「話を続ける」と言いたい時に行く、

仕草だと分かっていたため、そのまま続ける。

「報告によると、百体のマウスは全部、何の変化も無しに死んだぞ
うですぜ」

「少しの変化も無しですか？」

ジンは、前方の車一台を抜いた後、ウオツカに問う。

「ええ」

ウオツカはジンの目を見ながら、

彼の向こう側に流れる、ビル群の景色を視界に入れながら答える。

「やはり、兄貴。本当に別人なんじゃないんですかい？」

そのシエリーに似たガキとシエリーは……」

ウオツカの言葉を黙って聞きながら、

ジンはポルシエを走らせる。

「……だがウオツカ。可能性は零じゃねえ……。」

それにあの女は、あの謎めいた研究ばかりやっていた宮野厚司の娘

だ。

奴の研究を継いだのなら、独自の知識を得ている可能性がある。

そして、もし幼児化の話が真実ならば、

あの女があの時なぜ脱出できたのかが説明がつく……」

ジンは少し“にやついた”表情を浮かべ、

赤信号で停車した前の車に合わせて、減速した後停車する。

「と言いますと……?」

ウォツカは、ジンの不気味な笑みを見つめながら聞いた。

「ああ。あの時奴が、アポトキシンを隠し持っていた場合、

それを自らの命を絶つために飲んだが、逆に体が幼児化し、

それによって手錠から手が解放され、

あの部屋にあったダストシユートで脱出した。

その後、偶然か何かの理由があつたのかは知らねえが……、

今奴が住んでいる阿笠の家の前か、

もしくはその“変わり者の発明家”に拾われ、

身を隠しながら俺達を探り始めた、といったところか……」

ジンは言い終わると、前方の車が走り始めたのを視認して、

自らの車も発進させる。

「なるほど……。確かにそれなら説明がつきますね」

「ウオツカ。今の俺の話をおの方に伝える。」

あの方の了承が得られ次第、シエリーをこの世から葬る」

ジンは正面を見ながら、不気味な笑みを崩さずに、

冷たい声でウォツカに言い放った。

「了解」

そして、ポルシエは鳥矢町の道路を疾走して行った。

二人の悪魔を乗せながら……。

「ふう。ようやく帰ってこれたな」

阿笠邸では、羽田から到着したコナン達が、

ソファアールでコーヒーカップを片手に一息ついていた。

外はすでに、沈みゆく夕日が、街を茜色に染め始めている。

そして、その光は阿笠邸の窓から家内に入り、

家の中を美しく染める。

灰原は家に入った途端、疲れなど忘れたかのような勢いで、

ファイルを片手に地下室で研究を始めた。

ソファで休んでいるコナン達も疲れたのか、

誰も口を開く者はいなかった。

時計の秒針が五週程回った時、白馬が口を開いた。

「さて、服部君、工藤君」

白馬は正面のソファに腰かけている二人に、

疲れ切った表情を隠さずに話しかける。

「明日。探偵事務所に戻ってみませんか？」

その話二人の目が反応する。

「蘭のことか？」

コナンが右正面に座る白馬に顔を向けて話す。

その後ろには、今も研究をしていると思われる灰原が降りて行った、

階段が見えていた。

「ええ。あれから彼女がどうなったのかが気になります。

それに君も会いたいですよね？彼女に……」

「ああ、そうだな……」

コナンは白馬の意見に、心配そうな表情を浮かべて答えた。

そのコナンを、彼の右に座る服部が、

横目で見つめていた。

「服部君はどうしますか？」

白馬は視線を、コナンから服部に移して言った。

服部も視線を、コナンから正面の白馬の目に移して返事をする。

「もちろん行くで」

服部は少々笑いながら答えた。

「うむ。哀君のことは任せてくれ。蘭君のことは任せたぞい」

白馬の右でコーヒーを飲んでいた阿笠が、

微笑みながら服部、コナンの目を交互に見ながら言った。

「ああ」

コナンは阿笠の目を見つめ返して返事をする。

地下から夕食の支度をするために上がってきた灰原と、

一息ついた白馬が作った夕食を食べ、

入浴を終えた後、就寝についた。

終焉・希望へ進む未来と絶望に進む未来（後書き）

今回は、ジンとウォッカを“できるだけ長く”登場させてみました。理由は、『前半の終わり』が近いからです。

では、評価、感想等お待ちしてます！

終焉・喜びの再開と最悪の再開（前書き）

今日はジメジメしていますが、
暑さはあまりないため、書きやすいです。

そんな中書きました。

では、ごっごー！

終焉・喜びの再開と最悪の再開

「お邪魔しました」

今、朝食を終えた白馬、服部、コナンが、

阿笠邸の玄関の扉を開けるところ。

そして、白馬が見送りにきた阿笠に、一礼をして挨拶をする。

「じゃあ、博士。灰原のこと頼んだぜ」

コナンが白馬の次に言い終わると、

阿笠がコナンの目を見ながら、「ああ。任せてくれ」と、笑顔で返事をした。

「ほな」

阿笠が言い終わった後、

服部が挨拶をしてから玄関の扉を開け、

三人は春の温かい日差しを浴びながら、

毛利探偵事務所まで歩いて行った。

因みに、灰原は朝食を終え、片づけも終わった後、

疾風の如く地下室に向かい、

指、手、目、頭を精一杯動かしながら、

アポトキシンのファイルのデータを見て、研究を進めている。

「あのねーちゃん、必死やな」

事務所に向かって歩いていている服部が、

道路を走る車の走行音を聞きながら、

左を歩いている二人に、正面を見ながら話す。

「まあ、灰原は結構責任感してるからな、

必死になるのも無理はねえが・・・」

コナンはやや下を向きながら、

歩を進めるたびに動く道の模様を見ながら、

心配の感情剥き出しの声で言った。

「しかし、彼女ももう昔とは違います。

以前のように、研究に没頭しすぎて、

三食と睡眠を手抜きするなんてことはありませんよ」

白馬は右隣りで下を向いているコナンに、

安心させるように、微笑みながら優しく言った。

「ああ。そうだな」

コナンは白馬の言葉に納得したのか、

顔を正面に向けて、休日のためか人通りが多い道を歩いていく。

そんな三人は、

客が入るたびに、「いらっしやいませ」と声をかける店員や、

電気製品を売っている店から聞こえてくる、

大音量のテレビのニュースや、バラエティ番組、

車のクラクションなど、日常的な音を聞きながら探偵事務所に着く。

「ただいま」

コナンは事務所の扉を開け、

久しぶりに子供らしさのオーラを全身から解き放ち、

笑顔満々で事務所に入った。

「お邪魔します」

「邪魔するで」

それに続き白馬、服部も事務所に入り、服部が扉を閉める。

「おう、オメエら。久しぶりだな。お帰り」

いつも通り、仕事用の椅子に座っていた小五郎が、

右耳にイヤホンをしながら、三人を迎えた。

その後、入り口側に腰かけていた妃英理が、

顔だけを扉側に向けて、

「久しぶりね。お帰りコナン君」と笑って迎える。

そして・・・、

その英理の向かい側のソファーに座っていた蘭も、

彼らを視認すると、「お帰りなさい。コナン君」と、

少し明るさが消えていたが、彼女が今できる精一杯の笑顔で迎える。

「蘭ねーちゃん。大丈夫？」

その蘭の笑顔を見たコナンが、彼女に駆け寄って見上げながら、

心配という表情と声で話しかける。

「大丈夫よコナン君。心配かけちゃったみたいね」

そう言った蘭は、姿勢を少し低くして、

コナンの顔と自分の顔が、同じ高さになるようにして返答した。

しかし、その如何にも彼女らしくない表情と声で、

コナンだけでなく、服部も白馬も、

彼女が大丈夫じゃないことは予想できたが、今は聞かないことにする。

「（蘭、少し・・・痩せたな・・・）」

コナンは蘭が姿勢を戻した後、改めて近くで見た彼女が、

以前見たときよりも、違ったことに自分の心を痛める・・・。

同時に、“奴ら”を潰したいという気持ちだが、湧きあがってきたのを感じた。

そして、「（蘭、もう少しで会えるからな・・・）」と心の中で、
呟いたのだった・・・。

その頃阿笠邸では、先ほどの状況とは一変していた。

今、この家のソファの前に二名、

玄関に三名の人物が向かい合う形で、目を合わせている。

「久しぶりだな。シェリー・・・」

そう呟いた銀髪の男は、ソファの前に立たせている二名の内、

左側の少女に銃を向ける。

「ジン・・・」

少女、灰原哀は戦慄を覚えた目で、銀髪の男の、

殺戮衝動を秘めている目を見ている。

「フツ、驚きやしたね。まさか本当にガキの姿になっていたとは……」

銀髪の男、ジンの左側で、彼と同じく灰原に銃を向ける男、ウォツカ。

そして……、ジンの右側に、研究所で出会った人物もいた。

その人物は、“あの時と同じ格好”で一言も喋らないが、

右手に握られた銃は他の二人とは違い、

灰原の右側に立たされている阿笠に向いている。

そもそもなぜこんなことになっているのかというと、

時間は一旦、十分前に遡る……。

十分前

白馬、服部、コナンを見送った阿笠は、

いつも通りパソコンをいじり始めた。

灰原は地下室で、忙しそうに研究をしている。

これがいつまでも続くかに思えた……。

いつも通りに……。

しかし、コナン達が出て行き、三十分ほど経過した時、

阿笠邸の扉が勢いよく、「バン!!」という音をたてて開いた。

なくなったコーヒーを淹れに行こうと、

台所に向かって歩いていていた阿笠は、その音にビックリすると、

扉のほうに振り向く。

「なんじゃ！」と、声をだそうと思ったが、

その人物達の姿を目視した瞬間に、

“時が止まってしまつような感覚”に襲われた。

「お前が阿笠博士か？」

入ってきた男は、長身で長い銀髪を生やし、

上から下まで黒で統一された服を着ていた。

「き、君は……」

阿笠は、見覚えがあったその特徴的な姿を見て、

言葉がでず立ちつくしていた。

そのせいか、右手に持っていたカップが床に落ちる。

だが、今の阿笠にはその音は聞こえていない。

「質問に答える……。お前が阿笠博士か？」

その殺気を剥き出しにした目を、

立ちつくす老人に向ける男、ジンは改めて問った。

「あ、ああ。そうじゃ」

我に返った阿笠は、彼らの狙いが灰原だと直感で感じ、

とにかく、この事をコナンに伝えようとするが、

自分には銃が向けられている……。

動けばどうなるかは……目に見えていた……。

「そうか。なら、次の質問だ……。

この家に灰原哀というガキがいるはずだが……

今どこにいる？」

「（やはり哀君が狙いか……）」

そう心の中で呟いた阿笠は、

「は、灰原哀？し、知らんな……。」と嘘をつく。

それを聞いたジンは、「フツ」と笑いを一瞬漏らすと、

「あくまでとぼけるか……、いいだろう。」

なら、こちらから探すでしょう……。

ウォッカ調べる」

そう言ったジンは、背後にいるウォッカに命令し、

ウォッカは笑みを浮かべながら、

家内に入り調べようとする。

「な、何をするつもりじゃ？

そんな子供はおらんと言ってるじゃろ！」

阿笠は、家に入ってきたウォッカを、焦りの表情で見ながら言い放つ。

そんな時である。最悪の状況になってしまったのは……。

「博士？何さっきの音？」

あるつことが、さっきの扉を勢いよく開けられた音を聞きつけた灰原が、

地下室の階段を昇ってきたのだ。

「い、いかん・・・」

阿笠は心中そう思い、この状況でできる最善のことをした。

「に、逃げるんじゃない！哀君！！」

その阿笠の声と同時に、

「フッ」とまたしてもジンは微笑み、ウォッカは階段に向かう。

突然の阿笠の大声に気になった灰原は、

「なにから逃げろって・・・！！」と言い終わると、

目の前に立っていた男に啞然とした。

「久しぶりだな・・・シェリー」

「・・・」

灰原はもはや言葉がでなかった。

そんな灰原に構わず、ウォツカは銃を向けながら彼女に近づき、

左手で灰原の左手を掴むと、そのまま阿笠の傍に放り投げた。

「!つう・・・」

灰原は着地の衝撃の痛みには耐えられず、声を多少漏らした。

「だ、大丈夫か？哀君」

阿笠は、自分の足元に投げられた灰原に声をかける。

「ええ・・・大丈夫」

灰原はゆっくりと立ち上がりながら、

玄関に立っているジンに、一瞬驚き阿笠に返事をした。

「な、なんであなた達がここに……」

灰原はまず冷静になり、彼らの目的を聞こうとする。

「二人ともそのソファの前に並べ」

ジンは質問には答えず、右手でソファーを示し、

二人に殺気をあびせながら要求する。

そのジンの瞳に一步も引かずに、阿笠と灰原は要求に従う。

そして、今の状況である。

阿笠達が移動した後、ウォッカはジンの左側につく。

「さてシェリー。話してやるう……と言ってえが、

俺やウオッカがお前のことをシェリーと呼んだことで、察しはつくんじゃないか？」

ジンは殺気の目をそのままに、笑みを浮かべて灰原を見る。

「私を消すことかしら？」

灰原はやや震える声で言い放った。

そんな灰原の声を耳にし、

怯えた表情を少し見せている彼女に、ジンはさらに笑みを浮かべる。

「ああ。だがそれは昔の話だ」

「！・・・どういこと？」

灰原は内心で驚くと、詳細を聞こうとジんに問う。

「我々の任務は・・・お前を連れ戻すことだ」

「!!…なんですって?!」

その言葉に阿筈、灰原は驚きの表情を浮かべる。

そして、ジンとウォツカは改めて、

“うっすら”と不気味な笑みを浮かべた・・・。

終焉・喜びの再開と最悪の再開（後書き）

今回は、後半の阿笠邸で、

『雰囲気を表す言葉がほとんどでなかった』ことが、反省点ですね。外は描写しやすいのですが、家内はどうも・・・。

では、評価、感想等お待ちしてまーす！

終焉・囚われの身になった発明家と黒の科学者（前書き）

今朝、このサイトにログインしたところ、

感想二件＋評価が上がっていました！

皆さん、ありがとうございます！！（＾０＾）

では、本編どうぞ！！

終焉：囚われの身になった発明家と黒の科学者

「私を連れ戻すって・・・どういうこと？」

今、ここ阿笠邸では、少女灰原哀と、老人阿笠博士が、

三人の男に銃を向けられているという、

危険極まりない状況にあった。

銃を向けている男達の名は、

長い銀髪がトレードマークの長身の男、ジン。

そのジンの左側に、夜でも外すことがない漆黒のサングラスをかけ、

それがトレードマークとなっている男、ウォッカ。

そして、ジンの右側に立ち、

黒で統一された服装、顔にはゴーグルと目だし帽でその正体を完全に隠している男、

サイレント。

今、ジンが見かけだけが幼い少女、灰原哀に、

自分達がここに来た理由を語ったところ、彼女と阿笠が驚いている状況である。

「そうだろうな……。お前には到底信じられんことだろうな」

ジンは、「信じられない」という表情を剥き出しにしている灰原に、
笑みを浮かべながら答えた。

そして、間をおかずに理由を話す。

「理由を話そう。」

まず、我々はお前の正体についての仮説をたて、

その仮説をあの方に報告したところ、

あの方は『シエリーを阿笠博士と共に連れ戻せ』との命令を下されたのだ」

「ちょっと待って?!なんで博士が・・・」

灰原は、

「自分だけならともかく、なぜ博士が出てくるのか」ということに疑問を抱き、

それをジンにぶつける。

「そのジジイは人質だ」

「人質?!」

灰原は驚きのあまり、思わず『人質』という言葉を言い、

阿笠は黙って、ジン達を睨んでいる。

しかし、その睨みをジン達は全く気にとめない。

「そう。お前を連れ戻す理由は、

お前がいなくなって以来開発が難航している、

アポトキシンの開発だ。

そしてその老人は、お前が研究を進めるため且つ、

お前の手伝いをしてもらうために連れて行く」

「哀君の手伝いじゃと?!」

今まで静観していた阿笠だったが、

ジンが述べた後者の理由に驚愕し、聞き返した。

「そうだ。我々の調査によると、

貴様はシェリーほどではないが、薬学に多少は精通していると聞く。

なら連れて行けば、

アポトキシンの開発を多少は早められると、あの方はお考えなのだよ。

それに、そばに置いとけばいつでも殺せるからな……」

ジンは、不気味なほど表情を変えずに話し終える。

「分かったわ……。従いましょう」

「あ、哀君?!」

灰原の突然の判断に、阿笠は顔を勢いよく彼女に向け、

「信じられん」という表情を浮かべて言った。

「ほう。随分と早く答えをだしたな……」

ジンは銃を彼ら向けながら、『意外』という表情を浮かべ始める。

その表情を見た灰原が、ジンの心中を見抜いたかのように、

彼の冷たい目と、その両脇にいる二人を視野に入れて、

言い放った。

「今ここで断ると返答しても、無理やり連れて行くんでしょ？」

そんなことは分かっているわ。

組織の……あの方の命令は絶対だから……。

でも、条件があるわ」

「内容にもよるが聞くだけ聞こう」

ジンは内心、彼女が自分に条件をだしたことに、

彼女、灰原哀は変わったと思った。

少なくとも組織にいた彼女は、

自分に条件をだすことなどできなかったはず……。

自分が知らない間に彼女に何が起こったのか、

それを知ることができない。

しかし、今のジンの目には、

姿こそ自分より小さいものの、その存在が大きく見えたような気がした。

そして、そんなことを内心で思いながら、

ジンは灰原が言い終わると即答した。

「私達が行く変わり、他の人達には手をださないで。」

もし、手をだしたら・・・その時は私も博士も死を選ぶわ」

灰原が言い終わると、左隣に立っている阿笠も首を縦に振り、

納得したことを仕草で見せた。

「なるほど、仲間を守りたいか・・・いいだろう」

「え？」

灰原は、ジンがあまりにもあっさりと答えたことに疑問を持った。

その疑問の答えを得ようと、ジンに聞くこうとするが、

この男が素直に答えるはずもないし、

そんな時間も与えてはもらえないようだ。

ジンはウォッカと共に銃を向けながら、阿笠と灰原のほうへ歩いてくる。

そして、ジンは灰原を右脇に抱え込み、ウォッカは阿笠の後ろにつき、

銃口で背中を突きながら、「行け」と命じた。

状況が状況なため、阿笠と灰原は一声もださずに指示に従う。

阿笠は、自分の右側を歩いているジんに体当たりをして、

灰原を解放しようと考えたが、

抱え込まれている灰原の頭に、銃口が突き付けられているため、

迂闊^{うかつ}には動けなかった。

そのまま二人は、阿笠邸の前に止めてあるポルシェまで連れて行か

れ、

先に向かっていたサイレントが、後部座席の扉を左手で開ける。

因みに彼、サイレントの右手は、

握られている拳銃が顔と共に、阿笠に向いている。

ポルシェの後部座席の扉の前まで行くと、

ジンが抱え込んでいた灰原を、その中に放り込む。

幸い、そう力強く投げられず、車の座席がクッションになったため、

灰原に痛みが走ることは無かった。

「あ、哀君！」

その光景を見た阿笠は思わず叫び、ジンを怒りの目で睨みつけた。

しかし、ジンは相手にせず、そのまま運転席に乗り込む。

「さて、ジーさんも乗ってもらおう訳だが・・・

この家の鍵を渡してもらおうか」

阿笠の背中に、今だ銃を突き付けているウオツカが、

背中越しに阿笠に話しかける。

「この家の鍵じゃと?!」

阿笠はウオツカの言葉に、驚きの声で聞き返しながら、

顔を少し後ろに向ける。

「そうさ。鍵を掛けとけば、留守だと思わせられるだろう・・・?」

多少は・・・」

ウォツカはジンほどではないが、前歯を見せながら不気味な笑みを浮かべた。

「くっ！」

阿笠は軽く舌打ちすると、

白衣の右ポケットに入っている鍵を右手で取り出し、

ウォツカの鍵を見せる。

「これじゃ・・・」

阿笠は少し視界に入るウォツカを、

先ほどのジン同様に睨む。

だが、ウォツカは怯むどころか、笑みを維持するだけ・・・。

その鍵をサイレントが、

阿笠に銃を向けたまま近づいて左手で取ると、

そのまま無言で玄関に向かい、

開けっぱなしの扉を、“遅くもなく速くもない”速さで閉めると鍵を掛ける。

「乗れ」

ウォッカは、サイレントが扉を閉めたことを視認すると、

阿笠に指示をする。

阿笠は無言で乗車すると、右隣りに座っていた灰原の右腕側に、

自身の右腕をまわして、右脇に抱え込むようにする。

阿笠は言葉にこそ出していないものの、

その仕草は灰原に、「そばにワシがついとる」と安心させるもので

あつた。

灰原も無言であつたが、

阿笠のその気持ちが伝わったかのように、

彼の白衣を右手で軽く握つた。

そんな二人の行動を知つてか知らずか、

ウォツカは阿笠を乗せた後、助手席に乗り込み、

玄関の鍵を掛けたサイレントは、

鍵をジャケットの左ポケットにしまうと、

左手に銃を持ちかえてから、

阿笠の左隣に座りこみ、後部座席の扉をしめる。

その後、阿笠の額に銃口を軽く突き付ける。

阿笠はその銃口を、横目で一瞬見た後、サイレントに視界を移す。

灰原は顔をサイレントに向けて、“じっと”見つめる。

そして、灰原がサイレントを見た瞬間、

ポルシェが、独特のエンジン音と共に走り出す。

ジン、ウォツカは無表情で、

サイレントは顔を隠しているため、表情は分からない。

阿笠、灰原は、バックミラーに映っている阿笠邸を、

懐かしむような目をしながら、

一行を載せたポルシェは、太陽の光を車の屋根で遮りながら、

彼^{ひが}私の距離を縮めていった・・・。

この頃、探偵事務所にいるコナン達は、

阿笠邸でこのようなことが起こっていることなど、

知る余地もなかった・・・。

終焉・囚われの身になった発明家と黒の科学者（後書き）

今作は、今までの作品よりも文字数が少なくなっています。

そのため、

「いつもより短いんじゃないか？」と感じられた方がいると思います。

本当はもっと書くつもりだったのですが、

今作は、

『阿笠邸の事だけを書く』と決めていたのでこうなりました・・・。

では、評価、感想、ご意見お待ちしております！

終焉：絶望に染まりゆく少女の心と意思無き人形達（前書き）

今回は初めて、灰原哀の一人称に挑戦してみました。

では、どごぞー！

終焉：絶望に染まりゆく少女の心と意思無き人形達

今私達は、黒に染められた人達に拉致され、

ある場所に連れて行かれようとしている……。

その場所は、人の道を外れた者達が集う、

人の世界でありながら、人の世界ではない場所……。

そこには夢も、希望も、信頼も、ましてや感情さえ持たない人達が
巣を作っている。

545

今私の目の前にいる三人のように……。

私と博士はひょんなことから、この黒の車に乗っている。

仕方がなかった……、仕方がなかったのだ。

あの時……今運転席に座っている男が銃を向け、

私にホントか嘘かさえ分からない理由を話したとき、

私はこの・・・『原点に戻るしかない』と思った。

もちろん、戻りたくなどない・・・本心では。

しかし、あそこで“あの”判断をしていなかった場合、

今頃私達はどうなっていたか・・・。

彼らはあの方と呼ばれる、

どこの誰とも分からない存在の命令に従っているだけ・・・。

まるでそんな彼らは、“あの”童話、『赤い靴』にでてくる女の子のようだ・・・。

あの童話は要約すると、

『教会や、身内の老婦人がこの世を去った日に、

場の空気に合わない赤に染められた靴を履き続けた女の子が、

呪いをかけられてしまい、踊らされてしまっ』というもの。

まるで、そのままだ。この組織のメンバー達は……。

あの方の命令という名の赤い靴を履き、

その命令に従うためだけに踊り続ける。

そんな彼らが哀れに見える……。

彼らは気付いているのだろうか？このことに……。

私情すら入る余地の無い、“命令”という名の踊りを、

一体いつまで踊り続けるのだろうか……。

明日？、明後日？、一週間後？、一ヶ月後？、一年後？、

それとも・・・一生？

そもそも、彼らは知っているのだろうか？

その靴の脱ぎ方を・・・。

私は知っていた。

あの童話は、踊り続けた少女は最終的に両足を切断され、

呪縛から解放された・・・。

私は、アポトキシンという名の刃物で、

組織の命令に踊らされていた自らの足を切断した。

そして、呪縛から解放された私は、灰原哀という新たな人生を送った。

それが、いつまでも続くかと思っていた……。

あのまま工藤君や博士、少年探偵団の皆、

毛利家の人達と共に一生暮らすんだ。

そして、組織を倒し平和な未来を掴むんだ……。

そう思っていた。

これは変わらない未来、言わば“必然”なのだ……。

でも、どうやらそれは大きな思い過ごしだったらしい。

運命の悪戯か何のかは分からないが、

再び私は、赤い靴を履こうとしている。

いや、正確に言えば、“履かざるを得なかった”。

今こうしている間も、その靴を履く時間は迫っている。

履きたくない・・・あんな靴は二度と履きたくない・・・

履かないと誓ったのだ、心にしっかりと・・・。

でも、赤い靴はそれを許してはくれないらしい。

あの童話の最後では、少女の足から切断された靴は、

切断された足首と共に、どこかに行ってしまったのだと言う・・・。

今の私は、この童話に重なる部分がある。

切断された私の黒の足首は、

。今までも、今も組織という名の場所で、私の返りを待っている・・・。

私自身が切断した足を、再び私の足に戻すために・・・。

今向かっている場所の土を踏んだ瞬間、

その足も同時に私の足にくっつくのだろう……。

そして、私は再び踊る。

あの方の命令に従ってしまつ、恐怖という名の赤い靴を履き、

多分、一生踊り続ける。

しかも、今回はもう一人……。

博士というパートナーを連れて……。

今、車は米花町も道路を走っている。

窓から見える景色はいつもと変わらない。

春の温かい太陽光、車のエンジン音やクラクションの音、

目的地を目指して歩を進めて行く通行人、

いつもと変わらない景色。

でも、その景色も今日限り……。

もうすぐ見れなくなる。

そう思うと、悲しい気持ちに心を支配されていったのが、

涙が流れそうになる。

この町には色々な思い出がある。

博士や工藤君達との出会い、

少年探偵団や警察と共に事件を追いつけたこと、

組織の人間がこの町に来て、工藤君と共に戦ったこと、

悲しみの感情がそれを思い出させるかのように、

一つ一つ鮮明に映し出される。

しかし私は、その映像を遮断し、流れ出ようとした涙も『グッ』と、

止める。

この先、感情は無用の長物。

私もここにいる三人のように、感情など忘れてしまった・・・、

いや、消し去ってしまった人形に成り果てるのだ。

赤い靴を履いた操り人形に・・・。

でも、そんな事を考えていても、

今私の左で銃を突き付けられている博士と、“彼”の顔だけは忘れ去れない。

“彼”、そう、あの小さな名探偵は私がどんな状況に陥っても、

火の中水の中どこまでも追いかけてきて、

私に“救い”という手を差し伸べてくれた。

もしかしたら・・・もしかしたら、今回も彼が助けてくれて、

私の足に無理やり履かされている赤い靴を、

脱がしてくれるんじゃないか、ということを考えてしまう。

けど、『そんなことはあり得ない』と、

すぐにその考えを思っでは消して、思っでは消すということを繰り返した。

なにしろ今回は相手が違う。

今までは、相手が少人数だから乗り越えられた。

でも、これから向かう場所は、

“人であることを捨てた者たち”が集まる場所。

そんなところに向かうには、軍隊でも動かさないと対処できないだろう。

・・・大げさすぎる表現かもしれないが・・・。

つまり、“助けは来ない”。

そもそも、あの名探偵は私達が、どこに連れて行かれたのかも分からないのだ。

場所が分からなければ助けようがない。

仮に来たとしても、警察や軍隊といった存在がない状況では、

態々（わざわざ）蜂の巣になりに行くようなもの・・・。

まあ、FBIがついてくると思うが、

FBIと言ってもそんな大勢じゃない。

組織の人間達と対等に戦うのは不可能だ。

でも、それでも彼は諦めず、来るだろう。

あの観察力で手掛かりを見つけ、

様々な手段で、自分達が向かっている場所を付きとめ、

乗りこんでくるに違いない。

彼、あの工藤新一という男はそういう男だ。

もしかしたら、私と博士を助けるために、彼女に正体を明かすかも
・
・
・

でも、もしその選択をとれば彼女、毛利蘭は警察に言わずにはいられないだろう。

確かに、そうなれば自分や博士が助かる確率、

そして、彼らを倒せる確立の大幅に上昇する。

でも逆を言えば、“失敗したときに多くの犠牲が出る”ということ
を意味する。

そんなことを考えていたが、

これからどうなるかなど分かるはずもない……。

これからの未来は工藤新一の心の中……。

彼じゃない私に分かるはずがない……。

「早く降りろシェリー」

突然、左からジンの声がした。

気がつくと、車はいつも間にか止まっており、

車内には私以外誰もいなかった。

左を見ると、すでに降りていた博士が、

サイレントに背中に銃を突き付けられながら、

私のほうを、「どうしたんじゃ？」というような表情で見ている。

博士の左に立っているジーンもウオッカも、

私が降りるのを『今か今か』と待っている。

どうやら、いつの間にか着いてしまったらしい……。

私はジーンに言われた通りに車から降りた。

そして、降りて地面に足を付いた瞬間、

足に妙な違和感を感じ、顔を下に向けると……。

なんとそこには、あの童話で出てくる赤い靴を履いた私の足があった。

もちろん、それは“幻”である。

実際に履いている訳ではない。

その事は十分頭の中で認識している。

でも、見えてしまう……。

赤い靴を履いた私の足が……。

そして、聞こえてしまう……。

赤い靴に命令されているように、頭の中に響く声が……。

私はそんな“幻”を消し去るように、

固く目を瞑り、ゆっくりと目を開ける……。

そこには、元の足が見えた。

赤い靴を履いてない足が……。

「行くぞ」

そのことを認識した瞬間、ジンの声が前からした。

博士は後ろから、サイレントに銃を突き付けられ歩き始める。

私も博士に続くように歩き始めた。

因みに、ジンとウォッカは私の前を歩いていて、

なぜか私には銃は向けられていなかった。

私が抵抗できないのを知っているかのようだ……。

ここは地下駐車場のためか、

靴音が駐車場の壁に反響して、全体に響き渡る。

私もその音に混じりながら、彼らの後ろを付いていく。

そして、駐車場に止められている沢山の車が視界から消え、

建物内に入るための自動ドアを潜り、

私と博士は、“悪魔の巣窟”に足を踏み入れた……。

終焉：絶望に染まりゆく少女の心と意思無き人形達（後書き）

うん。

書いていて思ったのですが、

灰原の一人称というのは難しいですね……。

何と言うか、表現が難しいというか……。

もっともっとと練習しなければ！

では、評価、感想等お待ちしてまーす！

終焉・闇に引きずり込む手と希望という名の光（前書き）

さて、そろそろ物語が終わりに近づいてきました。
どんな最後にしようか悩み中です。

では、どごぞー！

終焉・闇に引きずり込む手と希望という名の光

ジン達の襲撃により、阿笠邸から突如、

謎のビルに連れてこられた阿笠と灰原は、

地下駐車場から建物内に入り、

通り過ぎる黒服の者達を視界に入れながら、エレベータに乗っていた。

そのままエレベータ内の沈黙の空気を感じながら、

阿笠と灰原は、階を示すランプを見ていた。

そのランプが二回の点滅で止まり、

それと同時にエレベータも止まって扉が開き、

鳥取の研究所で見たような、長い通路の両脇に扉がつけられている光景が、

二人の目に飛び込む。

ただ、あの研究所と違うのは、

部屋一つ一つを広くしているせいか、

扉がついている間隔が、鳥取の研究所のよりも広がった。

ジン達はその通路に入っていく。

阿笠と灰原もジン達に続く。

扉を三個過ぎて、四つ目の左の扉をジンが右手で開けた。

「じつだ」

静かなせいか、大きな声をだしていないジンの声が、

通路に響いた。

だが、阿笠と灰原にとってそんな事はどうでもよかった。

扉を開かれた瞬間二人の目には、

研究室とは思えないほどの広さを誇る部屋が広がった。

「入れ」

ジンにそう言われた二人は、

ジンが灰原、サイレントが阿笠に銃を突き付けながら、

部屋の奥へと進む。

扉から入ってきた灰原達が、まず目についたのは、

入口から三步ほど歩いたところで、左に抜ける通路だ。

歩いていたため見えたのは一瞬だったが、

中には台所のようなものが見えた。

そのまま五歩ほど前進すると、先ほど目に飛び込んできた研究室が目に入った。

そこで、阿笠達は止まる。

近くで見ると、「すごい」としか言いようがなかった。

まず、右の壁には棚がズラリと並べられており、

その中には薬品がギッシリ詰まっている。

その量は、“他の研究室に分けられるのではないか”と思わせるほど。

視線を正面に持ってくる。

研究室の代名詞である研究のための机が、

長方形を縦にしたような形で並べてある。

長さは縦四m、横二mぐらいだ。

その上には必要な器材が、丁寧に並べられている。

左には鳥取の研究所を真似たように、

左正面に机が一つと、キャスター付きの椅子が一つ、

そして、その机の上にパソコンが一台。

左後方には、記録を保存するためのファイルが置かれた棚がある。

「・・・」

それを見た阿笠と灰原は言葉がでない。

だが、ジンとウォッカが正面に来たことで、我に返る。

「今からここがお前達の部屋だ。」

この部屋にある物は全て好きに使っていい。

それと、分かっているとは思いますが、

この部屋には盗聴器と監視カメラが至る所に設置してある。

お前達がここで何を話して何をやっているかは、

全て我々に筒抜けだ。無益な事は止めるんだな……」

ジンは灰原を見下ろしながら言った。

その視線に灰原は臆することなく見つめ返す。

「いい目じゃねえか、シエリー。」

お前が組織を出て行った頃とは、別人のような目だ……」

ジンは見つめ返してくる灰原の目を、

にやついた顔で見ながら言った。

ウォッカと入り口に立っているサイレントは、

無言、無表情で二人のことを見ている。

阿笠は顔を左下に向けて、灰原を見ている。

「・・・」

灰原は何も言わずに、視線と表情を維持する。

その灰原に、「フツ」と鼻で笑ったジンは、

出口に向かって歩いていき、

ウォッカが部屋から出ると無言で扉を閉めた。

その後、扉の向こうで、

“コツコツ”という靴音が、徐々に小さくなっていった。

「フウ・・・大丈夫か？哀君」

阿笠は灰原の顔を見ながら聞く。

その阿笠に多少の笑みを作って、「大丈夫よ」と言い返した後、

灰原は冷静な表情になり、先ほど一瞬見た台所に向かう。

「・・・やっぱり」

台所についた灰原は、予想が当たっていた事を確信する。

「どっしたんじゃ？」

追ってきた阿笠が、灰原の背後から台所を視野に入れて尋ねた。

「いい、生活に必要な物が揃ってるわ。」

台所、寝室、脱衣場、風呂場・・・全てね」

「何じゃと?!」

阿笠はそう言うと辺りを見渡す。

自分達が入ってきた通路の先が台所、その台所の先にも通路があり、

脱衣場が見える。そして台所の右側の壁、つまり、

研究所の方向に扉があり、開けると二人分のベットが置いてある。

「た、確かに・・・」

全て見終わった阿笠は、研究所へ戻っていた灰原の後ろで呟いた。

「で？哀君どうするんじゃ？これから・・・」

阿笠は振り向いた灰原に話しかけた。

「ええ。まず、昼食にしましょう」

灰原はそう言った後、台所へ歩いて行った。

『昼食』という言葉に阿笠は、半分呆れたような表情をして、

灰原に言い放った。

「ちゅ、昼食って哀君。こんな時に食事をとっている場合じゃ……」

「あら。こんな時だからこそでしょ？腹が減っては戦は出来ぬって言うしね」

歩きながら言った灰原は、台所で作業を始める。

灰原の言葉に納得したのか、

阿笠は自分のお腹の虫が鳴いていることに気づき、

台所に行き灰原の手伝いを始めた。

その頃、毛利探偵事務所でも、

白馬、蘭が作った昼食を食べるため、五人が机を囲んでいた。

蘭は何が起こったのかは分からないが、

体調が回復し元に戻っていた。

そんな蘭に驚いた英理は、一緒に昼食を食べようとしたが、

タイミングが悪いことに仕事の電話が入ってしまう。

英理はキャンセルしようと思ったが、

小五郎や蘭が、「大丈夫」という言葉を笑顔で言っ
て安心したのか、彼女も笑顔で仕事に向かっ
て行った。

そして現在。

蘭は復活した笑顔を振りまきながら、

心の底から楽しそうに会話をしながら、箸を進めている。

その様子に小五郎も白馬も服部も、もちろんコナンも啞然としていたが、

彼女の笑顔につられて、自分達も不思議と楽しそうに箸を進めた。

その場にいた蘭以外の者達は、

内心なぜ蘭がこうなったのかを問おうとしたが、

その事を聞いてはいけないような気がして、

敢えて聞かなかった。

食事を終えたコナン達は、白馬と蘭が片づけをして、

服部とコナンが居間で蘭のことを考えており、

小五郎は依頼人を迎えるため、事務所に向かった。

そんな時、コナンの携帯が音を発した。

その音に蘭、白馬、服部がコナンのほうへ向く。

コナンは三人の視線を感じながら、右ポケットから携帯を取り出す。

コナンは携帯を開くと、そこには『非通知』と表示されていた。

コナンは疑問を抱きながら、話し声が聞こえないように自室に入り、

扉を閉めた後通話ボタンを押した。

「もしもし」

「久しぶりね。クールガイ……」

「な?!その声……ベルモット?!」

コナンは電話の相手の声を聞いた瞬間、驚愕の表情と声を上げる。

「ふっ……驚くのも無理ないと思うけど、今は冷静になって……」

ベルモットはコナンに落ち着くように促すと同時に、

真剣な声へと変わった。

その変化にコナンが疑問を抱く。

「お前が俺の携帯に掛けてくること自体珍しいが、

その真剣な声をだすのも珍しいな……。何かあったのか？」

コナンも真剣な声をだし、頭の中に過った“嫌な予感”が的中してないことを祈る。

「その様子だと知らないみたいね。

はっきり言っわ。・・・阿笠博士とシェリーが、

ジン達によって本部に連れてこられたの・・・」

「なんだって!!」

コナンは部屋の外に聞こえるほどの大声をだし、

頭の中が真っ白になる。

そして、“焦り”と“慌てる”の感情が混じった、

勢いのある声でベルモットに尋ねた。

「そ、それで?!博士達は無事なのか?!」

「落ち着きなさい。感情的になっても何にもならないわ」

ベルモットは再度コナンに、落ち着くように呼びかける。

その言葉に頭を冷やしたのか、

コナンは改めて冷静な声で、ベルモットに尋ねた。

「そ、そうだな……。で?二人は……」

「今は無事よ。地下の研究室に閉じ込められていること以外は……」

「『閉じ込められてる』って、要するに監禁?」

「ええ。盗聴器と監視カメラつきでね……」

でも、安心なさい。二人が妙な真似さえしなければ、

永久の安全が約束されているわ」

「そうか……。でも、どうして博士達を？」

コナンは安心した声を上げると、「フウ」と溜息をつきベルモットに問う。

「目的はアポトキシン4869の研究を再開すること。」

阿笠博士を拉致したのは、シェリーの手伝いをさせるためよ。

彼、少しは薬学に通じているそうじゃない。

そこに目を付けたのね」

「な、なるほどな……。それとベルモット」

「ん？」

「灰原のことをシェリーと呼ぶのは止める。」

あいつはもう組織の人間じゃない……」

コナンは多少怒りが混じったような低い声で、ベルモットに言い放った。

「そうね、分かったわ。じゃあ、志保でいいかしら？」

「ああ、そうしてくれ。それで話しは戻るが、

ベルモット……本部の場所を教えてください」

ベルモットは顔を少し固くしてから、電話の向こうにいるコナンに返答した。

「来るの？」

「もちろんだ」

「……あなた、それが何を意味するか分かってる？」

「ああ、死ぬかもしれない。でも・・・それでも行きたい。

約束したからな・・・守るって」

その言葉を聞いたベルモットは、

コナンの意思の固さを再認識すると同時に、

少しも考えを変えるつもりがないことを感じ、

「ハア」と溜息をついた後、語りだした。

「分かったわ。場所は鳥矢町の〇丁目にある、高層ビルよ。

知ってると思うけれど、あの辺りは高層ビルが無いからすぐに分かるはずよ」

「分かった。ありがとな」

コナンは真剣な声で返事をする、優しい声で礼を言う。

「・・・幸運を祈ってるわ」

ベルモットは真剣な声をそのままに電話を切った。

そしてコナンも電話を切り、

心に決意を新たにした後、扉を開けて自室を出て行った・・・。

終焉：闇に引きずり込む手と希望という名の光（後書き）

今回本部の場所が、
ベルモットによって齎もたらされましたが、

「本部の場所の判明があっけない」と思われる方がいると思いき
が、

その辺はスル してください。

最初からこうするつもりでした。

理由は、組織の中で唯一の味方である彼女を、
活かすためです。

では、評価、感想等お待ちしてます！

終焉：未来へ走り出す名探偵達と孤独を覚える女性（前書き）

今回から、“またしても”『書き方を一部変更』しました。
どこを変更したかは、お読みになればすぐに分かります。

では、どうぞ！

終焉：未来へ走り出す名探偵達と孤独を覚える女性

「おおボウズ。電話なんやったんや？」

えらいでかい声出しはっとたけど」

ベルモットのからの電話を終え、

自室からでてきたコナンを、

居間で胡坐をかいて座っている服部が声をかける。

「どづかしたんですか？」

服部に続き台所での作業を終え、

白馬と蘭がコナンに近づきながら、白馬が尋ねる。

コナンはその服部と白馬の問いに、

少々焦りながら答えた。

「え？え、え〜と・・・探兄ちゃんと平次兄　ちゃんに話があるんだ。」

僕の部屋に来てくれない？」と、コナンは子供らしさをだしながら、

コナンは服部と白馬の目を交互に見ながら話しをして、

自室の扉を開ける。

「ああ、分かったで」と言い、服部は立ち上がってコナンの自室に入っていく。

その後ろに白馬も続く。

二人が入った後、蘭は子供らしい笑みを浮かべながら、

扉を閉めようとするコナンを呼び止める。

「ねえ、コナン君。私がいちゃマズイお話しなの？」と、

蘭はコナンに、寂しげな表情を浮かべながら聞く。

そんな蘭の顔を見てコナンは、

置いて行かないで

とても言いたげのような蘭の言葉に、

心を痛めながらも表情を変えず、

「うん。内緒のお話なんだ・・・」と、

表情は子供でも、声は先ほどよりも低くなってしまったが、

蘭が次の言葉を出さない内にコナンは、扉を閉めた。

だが蘭は、コナンのその行動が、

自分を拒絶しているように

感じてならなかった・・・。

扉を閉めたコナンは、（ごめんな、蘭）と心の中で謝罪した後、

「服部、白馬、話があるんだ。とても重大な……」と話した。

「のようですね。先ほどの電話ですか？」と、

白馬はコナンの心を見透かしたかのように、言葉を返した。

「ああ。まあ座れよ。立ったままじゃ辛いだろう？」と、

コナンは小五郎が睡眠に使っているベットを、

右手で示す。

そやな　と、服部は腰かけ、白馬も服部の右隣りに腰かけた。

二人が座った後、コナンは床に座布団をしいて、その上に胡坐をか

ぶ　と、一息ついた後、

「じゃあまず、さっき誰と電話していたか、から話すぜ」と、

コナンは二人を見上げながら言う。

二人は首を、分かった

とでも言うように縦に振る。

それを見たコナンは、話しを進める。

「さっきの電話の相手は……ベルモットだ」

白馬は目を少し見開いて、驚きの表情を作る。

服部は……、「なんやと!?!」と、

探偵事務所の外まで聞こえるような大声で叫ぶ。

「バカ!声がでけえよ」と、コナンは慌てて服部の気を静める。

すまんすまん

と、服部はコナンに苦笑いで謝る。

その服部を、横目且つ、呆れた表情で見ていた白馬は、

「それで？内容は？」と、コナンを見て尋ねる。

「ああ。一言で言えば、最悪の状況になった……」

コナンはそう言いつつ、視線をやや下に向ける。

「さ、最悪って……。ま、まさかお前の正体が組織に

「

「いや、そうじゃない。灰原と博士が……」

服部が言い終わる前にコナンは否定するが、その様子は明らかに、

言いにくそう　　という雰囲気だった。

そんなコナンを、腕組みをして白馬は言う。

「言うてください。どんなことを言われようとも、

覚悟はできています」

「ああ。俺もや。二人に何があつたんや？」

服部も続いて言うと、コナンは目線を二人に向け、

「灰原と博士が……組織に囚われた……」と、

小さな声で言った。

「……そういふことですか……」と、

白馬は肩を落として、納得する。

服部は、「そうか……。二人が……」と、

コナンに同情するような目を向けて呟く。

「ほんで、今その二人無事なんか……？」

服部は目をそのままに、コナンに状況を尋ねる。

コナンは、ああ　　と首つように頷いた後、

「監禁状態らしい。詳細は聞かされてないが、

『妙な真似をしなければ永久の安全が約束される』、らしいぜ」

「『妙な真似をしなければ』・・・ですか・・・」

白馬は、心配ですね　　という言葉を、別の言葉に置き換えて言った。

「ほんで工藤。もちろん自分、その場所聞いたんやろ？」

服部が口元を少し緩めて、笑みを見せながら聞く。

彼らと戦えるのを喜ぶかのように・・・。

「ああ。場所は『鳥矢町の〇丁目にある高層ビル』、だそうだ」と

コナンは、

ベルモットに言われたことを正確に伝える。

「○丁目か。」

確かにあそこは、高層ビルが一個だけ建っていましたね・・・」

白馬は記憶を思い出すように言う。

「その地下研究所に監禁されているようだ」

コナンが言い終わった後、

服部は、なるほど　と呟く。

「それで、これからジヨディ先生達にこのことを話す。

オメエらも来るか？」と、コナンは立ち上がり、

座布団を片づけながら、ベットに座っている二人に聞く。

それに白馬は、もちろん と、

服部は、行くに決まっとるやろ！ と、返事をして立ち上がる。

それを聞き終わるとコナンは、携帯を右ポケットから出し、

ジョディの携帯番号を押し始めた。

その頃、

昼食を食べ終えた灰原達は、

研究所の棚に詰まっている、薬品を片っ端から見ている。

幸いこの棚は、子供用に作られたのか、

灰原の視線が合う高さに、薬品が置いてあった。

灰原は薬品のビンを、手に一つ一つ取りながら、

ふーん　　と、納得したような声をだした後、棚に戻す。

これを繰り返していた。

ここにある薬品は、危険物指定を受けているものばかりである。

例を挙げると、アセトアルデヒド、アセトン、過酢酸、カリウムなど、

その他の危険指定の薬品も、数えきれないほどある。

一方、阿笠は灰原の後ろで、薬品のビンに貼ってある名前を見ただけで、

驚きの声を上げていた。

「な、なあ哀君。こんなことしてて大丈夫なのかう？」と、

阿笠が不安の感情を声に出しながら話しかける。

相変わらず灰原は、薬品を順番に見て行きながら、

「『こんなことって』ってどんなこと？」と答える。

「じゃ、じゃから、早く研究を始めんとマズイんじゃないか？

彼らは今も、監視カメラでワシらのことを見とるんじゃないか？」

阿笠はかなり焦っているようで、

アタフタしながら早めの口調で話す。

「あら。どの薬品がどこにあるかを把握しておかないと、

研究はスムーズに進まないし、

それに、どんな薬品があるかということも知っておきたいしね」

灰原は、冷静な表情、冷静な声で返答した。

それに　　と、灰原は続けた。

「こんなことをしてて彼らがイラついていれば、

今頃ここに来て、『早く研究を進める』とか言ってくるはずよ……。

でも、彼らは来ない……。

つまり、これは『やっていい行動』として、認識されているってことでしょ?」

灰原は状況に合わない笑みを浮かべながら、

阿笠に振り向いて話した。

話し終えた後、彼女は再び、棚の薬品に目を通し始める。

その灰原の意見に安心したのか、

阿笠は、なるほど と言った後、灰原と同じく薬品を覗き始める。

驚きの声を上げながら・・・。

プルルルル・・・プルルルル・・・

数回のコール音がした後、『ガチャ』という音と共に、

相手が電話に出る。

「Yes」

女性の声が電話から聞こえた後、コナンは、

ジヨディ先生？

と聞く。

その声色で分かったのか、「Oh！クールキッド！」と、

元気そうな声が返ってきた。

それと同時に、車のエンジン音が微かに聞こえる。

「ジヨディ先生。

話があるんだけど、これから会えないかな？」

「いいけど……。電話越しじゃ駄目なの？」

「うん。とても大切な話だから……。」

コナンは“大切”という言葉を強調するように、

真剣な低い声で言う。

「・・・分かったわ。どこに行けばいいかしら？」

ジヨディはそれを察したのか、元気な声を変えずに、場所を尋ねる。

「じゃあ、今から前の、杯戸町のマンションでございっ？」

「ええ、分かったわ。じゃあまた後でね」

そう言ったジヨディは携帯を切った。

コナンも携帯を切って右ポケットにしまうと、

行くか　　と、後ろの白馬と服部に顔を向けて、

笑みを浮かべながら言った。

白馬も服部も、ああ　　と、納得するように首を縦に振る。

それを見たコナンは、自室の扉を開け、そのまま玄関に向かう。

蘭が、どこ行くの？

と尋ねてきたが、

コナンは、「その辺に行ってくる」と、その場の思いつきで返答した後、

毛利探偵事務所を、白馬、服部と共に、後にしたのだった・・・。

終焉：未来へ走り出す名探偵達と孤独を覚える女性（後書き）

さて、あともう少しで『対決』です。

そろそろ、その後の話しも考えなければ・・・。

では、評価、感想、ご意見等お待ちしております！

終焉・動かされる心と団結する心（前書き）

いよいよ次が五十話か・・・。

いや、今までのことを振り返ると、

『長くも短く』も感じますね。

では、どうぞ！

終焉・動かされる心と団結する心

ピンポーン

杯戸町のマンションに、バスで到着したコナン達は、

以前コナンが伺った、

ジヨディ達が、仮の住まいとして使っている部屋を訪れた。

はい　　と、服部がチャイムを押して、

間をおかずに中から、男性の声が聞こえた。

その声を聞いたコナンは、キャメルの声色だと分かり、

「コナンだよ」と、扉に向かって言った。

その声を聞いたキャメルは、

「ああ、コナン君か。今開けるよ」と言いながら、

玄関に降りて鍵を外し、扉を開けた。

扉を開けたキャメルは、背丈が低いコナンよりも、

服部と白馬に視線を奪われた。

「あれ？君達は？」と、彼ら二人を視界に捉えながら、

やや顔を右側に傾けて、不思議そうに二人を見る。

そのキャメルを見上げながら、コナンが理由を話す。

まあ、キャメルがこういう反応をするのも無理はない。

電話でのジョディとの会話から、『ここにはコナンが来る』としか、

言われてないのだろう……。

コナンは、実は　　と、話しを進めた。

「ジヨディ先生と電話している時に、そばに二人がいたんだ。

それで、付いてくることになったんだ」と、

コナンは無邪気な笑顔を浮かべながら、事情を話した。

そのコナンの話しを聞いたキャメルは、

ああ　　と、納得の声を上げる。

その言葉に続き、「じゃあ、中へ」と、三人を家内に通し、

玄関の扉をコナンの次に潜った服部が、「お邪魔します」と、

白馬が、「お邪魔します」と、キャメルに向かって挨拶をした後、

スリッパに履き替えて家にあがった。

キヤメルは挨拶をされる度に無言で頷き、

最後に入った白馬が通った後、扉を閉める。

キヤメルは、三人を奥の部屋に通すため、

こつちへ

と言った後、三人の先頭を歩き部屋の扉を

開けた。

白馬、服部、コナンは無言で付いて行く。

扉を開けるとそこには、以前と変わらない席順で、

ジェイムズとジョディが座っていた。

「クールキッド！来たわね」と、

入ってきたコナンを見ながら、ジョディは笑って迎えた。

ジョディに続きジェイムズも席を立て、

コナン達のほうへ体を向けると、

「コナン君。さっそく話しを聞こう・・・。座ってくれ」と、

三人に座るように促す。

なお、ジヨデイもジェムズも、服部と白馬がいることは、

玄関でのキャメルの話しが、

静かにしていれば聞こえるぐらいの音量で聞こえていたため、

二人の存在に違和感を感じることはなかった。

コナン達は促されるまま、席に着いた。

ジヨデイが、ジェムズが言い終えた後、

ジェムズの左側に席を変えたため、

今は、コナン達三人と、FBI三人が向かい合う形になっている。

「じゃあ、僕が言った『話したいこと』を話すよ」

そうコナンは言った後、正面の三人の顔を視野に入れながら、

話しを始めた……。

「
というわけなんだ」と言って、コナンは話しを終
えた。

話しの途中、FBIの三人は、所々で驚きの声や表情を見せたが、

コナンに質問や、聞くことはせずに、黙って聞いていた。

一方、コナンの右に座っている、服部、白馬は静観していた。

声も出さず、表情も姿勢も崩さずに……。

話しを聞き終えたFBIは、

ジェイムズ、キャメルが腕組みをしながら、

ジョディは膝に両手を置きながら、うーん　　と、唸っていた。

服部は正面の、ジェイムズ達全員を視野に入れながら、

腕組みをして、「信じられへんことかもしれへんけど……。

これが今ぶつかっておる現実や……。」と、

やや低い声で言い放つ。

服部が言い終わると、コナン達三人は、

返答が返ってくるまで沈黙する。

どのくらいかは分からない、その間、時計の秒針の音だけが部屋に響いていた。

その、『カチ・・・カチ・・・』という秒針の音を、

十回以上二十回未満ほど聞いた後、考えがまとまったのか、

ジェイムズがコナン達三人の、

中心に腰かけている服部を見ながら、両脇に座る白馬、

コナンを視野に入れながら口を開く。

「正直。今起こっている現実を飲み込めないというのが本音だ。

組織の本部の場所が分かったことは、これ以上ないほどの喜びだ。

これで彼らとの戦いも終わる。

・・・だが、阿笠博士とあの少女が人質同然の状態とは・・・」

ジェイムズの両脇に座っている、ジョディもキャメルも、

意見が同じ

と言うように、沈黙している。

そんな三人を見ながら、コナンが自分の考えを言ったため、

顔を少し前に出しながら言う。

「状況はかなり不利。

でも、ここで僕達は何もせずに指をくわえて見ていたら、

博士も灰原もずっと囚われたまま……。

そして灰原は、博士や僕達を守るために、

次々と毒薬を作り続ける……。

そうならばどうなっちゃうか……分かるよね？」

FBIの三人は、考え込むように沈黙している。

そんな三人を見ながら、コナンは話を続ける。

服部と白馬は、横目でコナンの顔を、ジッと見ている。

「そうなる前に、僕達が止めてあげなくちゃ。

。今度こそ灰原を、この呪縛から解放して自由にしてあげないと……。

いつか、また灰原は奴らのいいように使われる。

これは多分、奴らを倒さない限り、永遠に繰り返されるんだと思う。

まるで、時間が何度もループするように……」

コナンは言い終わると、顔を戻して姿勢を正した。

その後服部が、腕組みをして笑みを浮かべながら、自らの意見を述

べる。

「俺もボウズの意見に賛成や。

ここであのねーちゃんやじーさん救つとかんと、

また厄介なことになるとちゃうんか？

それにや、折角組織の巢せっかくが分かつたんや。

ここは思い切って乗り込んだらどうや。

このままやったら、宝の持ち腐れやないか……」
と言い終わった
後、

服部は目を瞑る。

続いて白馬が、そうですね
と云って、

服部同様笑みを浮かべながら、姿勢を正して話を切り出す。

「服部君やコナン君の意見は正しいと思います。」

確かに今突入すれば、彼ら二人の命が危機にさらされるでしょう……。

しかし、それはこれからも変わらないのではありませんか？

……変わるとすれば、

阿笠さんと灰原さんの苦しみが増すことぐらいです。

そんなの待っていても、

彼らにとっても私達にとってもメリットは零……。

寧ろ、デメリットが増えるだけでしょう。

それを恐れているは何も始まりません。

ここは前に進むべきでしょう……。勇気を出して……。」

白馬が言い終わった後、FBIの三名は再び沈黙する……。

コナン達も沈黙し、彼らの答えを待つ……。

再び、時計の秒針が部屋中に響く。

音が壁に反響し、大きく成長しながら、

部屋で沈黙している六人の耳に届く。

『チク・・・タク・・・チク・・・タク・・・』と、一定のリズムを崩さずに……。

その音が、先ほどと同じくらい聞こえた時、

ジェームズが重たい口を開く。

「そうだな。確かに君達の言うとおりだ……。

恐れているには始まらない。進まなければな……。

まさか、君達に背中を押されるとは……私も年かな……」

ジェイムズは最後の言葉を、苦笑いを浮かべながら言った。

そのジェイムズを右で見ていたジョディが、そうね　　と、続ける。

「私もジェイムズの意見に賛成です。」

すぐにFBIのメンバーを集めて、作戦会議を開きましょう」と、

ジョディは笑顔でジェイムズに言い放った。

ジェイムズの左に座るカメラも、

ジェイムズとジョディを視界に入れながら、

「善は急げです。ボス急ぎましょう」と、

ジョディ同様笑みで、ジェイムズに言い放った。

そして・・・意を決したようにジェイムズは、

「うむ。これからここにメンバーを集めて、

突入のための準備を行う。ジョディ君、キャメル君、準備を！」

ボスとしての威厳を、全身から出しながら、

二人の顔を交互に見て言う。

ジョディ、キャメルの二人は、分かりました
に、
と言っよう

首を縦に振った後、部屋を出て行った。

その様子をコナン達三人は、笑顔で見ていた。

二人が出て行った後、ジェイムズはコナン達に視線を向け、

「ありがとう。終わらせよう・・・全てを」と、笑って言った。

コナン達もジェイムズの目を、笑いながら見つめ返す。

決戦は近い・・・。

終焉・動かされる心と団結する心（後書き）

今作は、『団結』という言葉を強調する話に見えました。まさに、“一致団結”。

自分で書いていて、こんなこと書くのも難ですが、団結って素晴らしい！

では、評価、感想等待着ってまーす！

終焉・決戦へと近づく日々(前書き)

今回は、コナンの一人称です。

では、じじい……

終焉：決戦へと近づく日々

今俺達は、鳥矢町の高層ビルにいる。

つまり、奴らの巣窟に足を踏み入れている。

現在、俺達は地下駐車場から建物内に侵入し、

ロビーと思われる場所を通過して、

その先にあるエレベータに乗り込んだところだ。

当然俺の両脇には、服部と白馬がいる。

ジェイムズさん達に、俺達の思いを理解してもらって
から三日、

随分長く感じた。

あれからジェイムズさん達は、各地に散っているFBIのメンバー
を、

杯戸町のマンションの自宅に手早く集めると、

俺達も含めた作戦会議を始めた。

しかし情報が少ないため、各自で意見を出し合ったが、

あまり有効な作戦は思いつかずに、時間だけが過ぎていった・・・。

無論、俺達も意見はだしたが、今一なものばかりだった・・・。

そんな時、全く進歩が無い会議に苛立ちを感じた服部が、

「なら、困っちゃうのはどうや?」と、意見をだした。

その服部の意見が、今一理解できなかった俺や白馬、

FBIのメンバー達は服部の顔に注視する。

そんな視線をお構いなしに、服部は話を進めた。

「つまりや。アンタらFBIが正面から突入し、

俺ら三人は、別のルートから地下に侵入して、

じーさんとねーちゃんを救い出し脱出する。

要するに、アンタ達が奴らの注意を引き付けるってこっちゃ」

その話に、その場いた者の時間が、止まったような気がした……。

俺達三人を除いて……。

「なるほど。単純な事ほど効果的かもしれないね……」

俺の左隣りに立つ白馬は、顎に手を当てながら服部の意見に納得した。

俺もその考えには同意だ……。

返って難解な作戦を立てたほうが、バレやすいかもしれない……。

簡単な事ほど難しいって言うしな……。

しかし、そう思っていないFBIの人は、当然反論したわけで……。

「無茶だ!」とか、「冗談じゃない……」などのブーイングが、

服部を襲う。

因みに、ジェイムズさん、ジョディ先生、キャメル捜査官は考え中なのか、

腕組みをしながら、やや下に顔を向けて黙っている。

そのブーイングに対抗するように、服部が少々が大声で言い放った。

「確かに、アンタらの言うてはる通り無茶や。」

・・・けどな。他に有効な作戦思いつくんか?！」

その服部の言葉に反論できないのか、

FBIのメンバー達は黙り込んだ・・・。

「・・・その作戦・・・採用しよう」

黙り込むFBI達を見たジェイムズさんは、

決意したように口を開いた。

「よろしんですか?!ボス」と、

俺の正面に立っている、やたら筋肉が膨れ上がっているFBI捜査官が、

ジェイムズさんに顔を向けて、

お気は確かですか?

とでも言つよつに、言い放った。

ジェイムズさんはその捜査官に目を合わせて答える。

他のメンバーも、服部も、白馬も、俺も、ジェイムズさんを見る。

「私も反対したい気持ちはある。

・・・だが、悔しいことに服部君の言うとおり、

有効な作戦が無いのが事実だ・・・。

なら、彼の意見を採用するしかあるまい・・・。

あまりにも危険だがな・・・。」と、固い顔をしながら言った。

その言葉にFBIのメンバー達は、

納得せざるを得ない

とでも言いたげなように、

黙り込む・・・。

俺はその空気を変えるため、視界に映るジェイムズさん、

ジヨデイ先生、キャメル捜査官、FBIのメンバー達に話しかけた。

「その作戦で行くなら、早く準備をしよう。」

こうしている時間すら勿体無いんじゃない？」

その俺の言葉に、全員の視線が俺に集中した。

俺は引くことなく、ジェイムズさんの目を見続ける。

ジェイムズさんは俺から視線を外すと、その場にいる全員の顔を見ながら言った。

「そつだな。コナン君の言つとおりだ。」

皆。この作戦に不満があるとは思つが、

良策が無いのならこの作戦を採用する。

異議のある者は手を上げてくれ」

ジェイムズさんが言い終わった後、

皆難しい顔をしていたが、誰一人として手を上げなかった。

それを見たジェイムズさんは話を続ける。

「うむ。では、これより準備にかかる。

各自私の言つとおりに従って来てくれ！」と、威厳ある声で指示をする
と、

はい！
と、了承を得る声が部屋に響いた。

その後ジェイムズさんは、ジョディ先生やキャメル捜査官、

FBIの捜査官達に、「君と君は、武器の調達を頼む」や、

「君は車両のチェックを頼む」と、リーダーらしく次々と指示を出し、

指示された捜査官はテキパキと動いていた。

そんな中、俺の左側にいた白馬が、急に部屋を出て行った。

俺は気になり、後ろ姿の白馬に、どうした？
と、声を掛けた。

その声に白馬は、「ちょっと電話を・・・」と、

俺のほうに振り向いて、微笑みながら言った。

その言葉に俺と同様疑問を持ったのか、

俺の右側に立っている服部が、どこにや？
と、

白馬の目を見ながら言った。

白馬はそのままの状態で、フツ
と、微笑んだ後、

「家族にですよ。もうかけられないかもしれませんから……」

その白馬の言葉に、俺と服部は啞然とした。

服部は目を見開いたまま立ちつくしているから、

何を考えているかは分からない……。

だが、俺は一瞬だけだが、頭の中が真っ白になった。

幸いなのか分からないが……、FBIの人達には聞こえて無いみたいだ。

仕事に集中している。

白馬は啞然としている俺達を余所に、部屋から出て行った。

右手に携帯を握りしめながら……。

白馬が部屋を出て行った後、右に立っている服部が、

フッ

と、笑いを漏らした。

俺は服部の顔を見上げると、服部は俺の視線に合わせて、

「そやな。・・・工藤、俺もかけてくるわ・・・。

お前も、早よかけたほうがいいんとちゃうんか？」

そう言った服部は、白馬と同じ扉から出て行った。

そうだな
と、内心で納得した俺は、ズボンの右ポケットから、

江戸川コナン用の携帯を出すと、その携帯を右手に握りしめながら、

服部と同じ扉から部屋を出た。

中に入った俺は、服部と白馬がいないことを視認すると、

右手で番号を押した携帯を左耳に当てる。

トゥルルルルルル・・・トゥルルルルルル・・・という、

着信音を聞きながら、俺は相手がでるまでの時間を使って、

近くの壁に寄りかかった。

寄りかかった瞬間、タイミングがいいことに、

ガチャ
と言う音がした後、「hello?」という男性の
性の声がした。

「こんにちは・・・なんて時間じゃねえか、そっちは・・・」

俺は、やや笑いが混じった声で、冗談混じりの言葉で応答した。

「ああ・・・何かあったか?」

父親の勘で感じたのかどうかは分からないが、

真面目な声で聞いてきた。

この鋭さは今に始まったことじゃないが、今は“有り難い”ように感じる。

態々（わざわざ）遠回しな言い方をせずに済む……。

「ああ。実はな父さん……。

正確な日はまだ分からねえんだけど、組織の本部に、

FBIと共に載り込むことになったんだ」

「……」

父さんが何を思っているのかは分からないが、

父さんは一言も話さない。

聞こえるのは、彼が生きている証の一つである、呼吸の音のみ……。

「……父さん？」

俺は黙り込んでいる父さんに、らしくない
と思ひ、

声をかける。

近くに母さんもいるのか、

「どうしたの？優作……」と、話しかけた声が聞こえた。

その母さんの言葉を微かに聞いた後、

父さんは話始めるのか、息を吸い込む音が聞こえた。

「新……」

「ん？」

「俺はお前の父親だ。今までお前のことを無駄に見てきたわけじゃない。」

ここで俺が何と言おうと、お前は考えを変えんだろつな……」

その言葉に俺は、言い返す言葉が無い……。

そのまま黙っていると、父さんが話を進めた。

「だから、俺は止める気は無い……。

無責任な言い方になるかもしれないが……お前の好きにやれ。」

お前がそれでいいのなら、俺は何も言わん」

「父さん……」

俺はその父さんの、愛情が籠った声に、心を温められたような感じを受け、

視界がボヤケてきた……。

だが俺は、その目から出るものを、グッ

と抑え込む。

「ただ、一つだけ約束がある」

「なんだ？父さん」

「『死なない』と約束できるな？」

「父さん？」

俺は父さんの言いたいことが分かっていたが、

敢えて聞くという、ちょっととした意地悪をした。

「探偵として、沢山の人の死を見てきたお前なら分かると思うが、

……残された者達がどんな思いをするか……、分かっているな？」

「・・・」

俺は、『残された者達』という言葉聞いた瞬間、

今まで事件で見てきた、悲しむ人々の顔がフラッシュバックした。

死体を前に泣き叫ぶ家族、その顔は歪み涙で溢れていた。

俺が死んだら、父さんや母さんもあんな顔をするのだろうか？

なんてことを思った。

だが、そんな顔はさせない
と、心に誓う。

そして、言葉に出した。

「ああ。分かってる！」と、力強く。

「そうか。頑張ってたな」

「ああ。じゃあな」

そう言っつて俺は携帯を切った。

母さんとは話せなかったが、きっと父さんが俺の思いを伝えてくれるだろう。

そして、俺はもう一人、忘れちゃならねえ人物の携帯にかける。

ただし、今度は左ポケットの、工藤新一用の携帯で……。

コナン用の携帯を右ポケットにしまうと、左手で工藤新一用の携帯を取り出し、

右手で蝶ネクタイ型変声機の声色を、

工藤新一に変えて口元に近づける。

その後、左親指で番号を押して、左耳に携帯を当てる。

数回のコール音の後、コール音が切れたと同時に、

もしもし?!

と、慌てた女性の声が聞こえた。

俺はその声を冷静に受け止め、本当の声で応答する。

「久しぶりだな。蘭」

終焉・決戦へと近づく日々（後書き）

さてと、ようやくやく五十話ですね。

ここまで書いてきて、「よくこんなに書いたなあ」と、
今まで投稿した小説を見ながら思いました。

これからも頑張るので、よろしくお願いします（＾＾）。

では、評価、感想、ご意見お待ちしております！

終焉：痛める心と痛めさせる心（前書き）

いや〜参りましたね・・・。

今朝、ログインしたところ、評価とお気に入りが下がっていました・
・・・。

あらら・・・。

しかし私は、これを経験にして、もっと頑張りたいと思います！

『失敗は成功の元』と言いますから・・・。

では、どうぞ！

終焉：痛める心と痛めさせる心

「新一？・・・新一なの?!」

携帯の向こう側で、泣くという感情と、

焦りの気持が混じった蘭の声が、俺の耳に届く。

「ああ。ホント久しぶりだなあ」

俺は“本当”の俺の声で、蘭に話しかける。

「『ホント久しぶりだあ』じゃないよ!どうして、連絡くれなかったの?」

電話越しだが、その声の様子から、

蘭が心配の表情を浮かべたいることが容易に想像できた。

「ああ、ホントにすまねえ・・・。」

事件の調査や、一日中動きまわったせいで、疲れが溜まっちゃまってな。

帰ってきてても、すぐに寝ちまってたんだ・・・と、

俺はいつものように嘘をついた。

いくら蘭を守るためとは言え、心が痛む。

針でチクっと、突かれているようだ・・・。

「もう。ほどほどにしてよね・・・。その内体壊しちゃっよ

蘭は本当に俺のことを心配してくれているようだ。

そんな蘭に嘘をつく俺が許せない・・・。

だが、もう少しでこの痛みともオサラバできる。

そのことを伝えようと話始めた。

「なあ蘭。嬉しいことがあるぜ」

「え？なに？『嬉しい』ことって・・・」

「ああ。実はな・・・今関わってる厄介な事件が、

もう少しで終わりそうなんだ！」

俺は、高まる喜びの感情をそのままにして、笑いながら蘭に言った。

「・・・本当なの?!!!」

蘭は喜んだ、というより、驚きの声を上げて聞き返してきた。

俺は、ああ　と、返事をする。

「じゃ、じゃあもう少しで帰ってこられるのよね?!!」

「そういうことだ。・・・もう少しで会えるぜ、蘭」

そう俺が言つと、蘭は本当に嬉しそうで、

「いつ、いつなの?！」と、嬉しいという感情を剥き出しにしたよ
うな、

高い声で聞いてきた。

その声を聞いていると、俺まで嬉しくなる。

「まあ、そう慌てるなって。・・・俺も正確な時間は分からねえ。

でも、そう遠くないってことさ!」

「そっか。やっと会えるんだね……。今までずっと近くにいたの
に、

離れていたみたいだったから・・・寂しかったよ」

この言葉に俺は確信した。

やっぱり蘭は気付いていると……。

でも、まだ隠さなければならぬ。

ここでもし、やっぱり気付いてか
ば、
などと、言ってしまう

蘭はこの姿になった理由を、聞かざるを得なくなるだろう。

それだけは避けねばならない……。

だから、ここで俺は心を鬼にする……。

「『今までずっと近くにいた』ってどついついことだ？」

自らを“最低”と思いながらも、これも組織を倒すため
と、

無理やり自分自身に納得させる。

「うっん。何かそんな感じがただけ……」

女の勘ってやつかな？」

蘭は、声の調子を全く変えずに返答した。

でも、俺は感じる……。

今蘭は、心を俺以上に痛めたと……。

「そっか……。だがよ、もう少しでその、

当たるかどうかも分からねえ勘が現実になるぜ」

俺は、少しでも蘭に元気になってもらおうと、

いつも通りの俺達の会話になるようにした。

そして、予想は的中し、

「『当たるかどうか分からない』は余計よ！

女の勘は当たるんだから！」と、少々御立腹な蘭の声が聞こえてきた。

「へえ、そうかい……」

俺は半信半疑のような返答を返す。

「そうよ、勘って結構役に立つものよ。

新一も事件の調査で、勘に頼ることって結構あるんじゃない？」

「『結構』は無い。まあ……多少はあるけど……」

「要するに、“ある”んじゃない」

「へっ！……う、うるせ……」

そう俺が言い終わると、俺達二人は笑い声を出して、

本当に楽しそうに笑った。何もかも忘れて……。

だが、楽しい時間というのはあっという間だ。

これ以上の電話は、いくらなんでも急にいなくなった俺達を探しに、

この部屋をFBIが探しに来る恐れがある。

そう思った俺は、電話を切るように話を進めた。

「じゃあ、蘭。もう切るな」

「うん。話せて嬉しかったよ。また電話してね」

「いや、もう電話は無しだ……」

「え？」

「今度話すときは、顔を合わせて、だぜ」

「うん、そうだね。じゃあ、待ってるから」

その言葉に俺は、また心を痛める。

電話して会えると約束したとは言え、待たせていることに変わりはない……。

でも、この気持ちも後少しで終わる。奴らを潰せば……。

「ああ。じゃあな」

「うん。じゃあね」

蘭の声を聞いた俺は、静かに携帯を切った。

電話を切った後俺は、顔を上に向け、天井を見る。

何の変哲もない天井だ……。

でも、俺の目に映るのは、天井ではなく蘭の顔……。

電話で聞こえた蘭の声は、最初は“寂しそう”だったが、

話が進むに連れて、徐々に徐々に明るくなっていった。

その明るくなったとき、蘭はどんな顔をしていたのだろうか？

もしかしたら、明るいのは声だけで、顔は暗かったのかもしれない。
。。。

だが、あの蘭はそんな事ないと信じる。いや、信じたい！

蘭は感情表現が正直なやつだ。

心が笑っていれば顔も笑い、心が悲しんでいれば顔も悲しむ。

決して偽りの表情は見せない。

でもなぜか、頭の中ではそう思っているのに、

心の中では、『それは違う』と知っている俺がいる……。

なぜだ？
と、仮に誰かに聞かれても、答えられない
だろう……。

自分自身で分からないのだから……。

だが、思い当たることはある。

さっきの蘭の言葉、

『今までずっと近くにいたのに、離れていたみたい』、
という言葉。

そう、蘭はやはり気付いている。

江戸川コナンは……工藤新一だということ……。

なら、なぜそれをはっきりと言わないのだろうか？

……分からない……。

・・・そう言えば以前服部に言われたっけな、

『待ってるんや・・・お前の口から直接、話聞かせてもらっくんをな
!!!』

もし、服部のこの言葉が真実なら、

蘭が遠回しな言い方をしたのも頷ける。

でも・・・やはり今は言えない・・・。

それにもう少し、・・・もう少しだけ待てば、言うことができる。

奴らを潰せる日は近い。

そして奴らが倒れれば、俺も、蘭も、博士も、灰原も自由な日々を
過ごせる。

それまでの辛抱・・・。

蘭にはまだ、辛い日々を過ごさせてしまいが、

それも後もう少し・・・。

俺は顔を、天井から正面に戻すと、今日何度目か分からない決意を新たにする。

その決意を心にした時、前方の扉と、左側の扉が同時に開き、

中から服部と白馬が出てきた。

二人は俺に気付くと、微笑みながら近づいてくる。

「君も電話してたんですね・・・」

左の白馬が、ズボンの両ポケットに両手を突っ込んで、話しかけてきた。

俺はその問いに、ああ

と、軽く返事をする。

その返事に続き、俺は服部と白馬の顔を交互に見ながら、話しかける。

「オメエらも電話終わったのか？」

その問いに正面の服部が、「ああ、終わったで。もう話すことはあらへん」と、

満足したのか、満面の笑みで答えた。

白馬も、「ええ。服部君と同じく、僕も十分すぎるほど話しました」と、

服部と同じ、満面の笑みで答えた。

だが、同じ“満面の笑み”でも、顔が違うせいか別々の表情に見えた。

そんなの当たり前
が、
と言われても、可笑しくないことだ

今の俺には、『別々の表情に見えることが』、可笑しくないことだった。

二人の顔を、あまりにも“じっと”見ていたせいか、

二人の顔が徐々に強張っていき、

服部が、「どないした？自分・・・」と、声をかけてきた。

俺は、「何でもねえよ」と答えると、

服部と白馬の顔が再び柔らかくなっていき、笑みを取り戻す。

その顔を見た俺は、もう一度安心感に心を奪われると、

服部、白馬と共に、部屋を出て行った・・・。

終焉：痛める心と痛めさせる心（後書き）

今回も前回に引き続き、コナンの一人称ですね。

ここで感想なのですが、

私個人的に、『三人称よりも一人称が書きやすい』と感じました。
理由は自分でも分かりませんが・・・。

もう一つ、この話をお読みになって、

「なんだか、新蘭になってない？」と思われる方がいると思います。

これは、まだ小説が“前半”だからです。

この小説は“新志”ですので、誤解はなされないように・・・。

では、評価、感想等お待ちしてまーす！

終焉：破滅への未来（前書き）

今回もコナンの一人称です。

では、じじい！

終焉：破滅への未来

今、鳥矢町の高層ビルに偽装された奴らのアジトに、

ジェイムズさん率いるFBIの人達が乗っているワゴンが、

高層ビルから三百mほど離れた位置に停車した。

この場所は時刻が十時頃にも関わらず、

人通りがほとんど無い場所だ。

密かに行動するには絶好の場所だ・・・。

俺と服部、白馬の三人は、今ジェイムズさん達が乗る、

主力メンバーが乗車しているワゴンに乗っている。

もちろんこのワゴンには、ジョディ先生やキャメル捜査官も乗車している。

ワゴンが到着すると、後部ドアの両脇に座っていたFBI捜査官が立ち上がり、

ドアをゆっくりと静かに開ける。

扉が開けられると、後ろに付いて来た、別のFBIのワゴンの正面が見える。

それと同時に、外の太陽光が入ってきて、俺は一瞬目が眩んだ。

その光を、目が眩むのと同時に右手で遮る。

「では、行こうか」

俺の後ろで、右手に銃を握り締めていたジェイムズさんが、

大声にならないように、その場にいる全員に気合いの入った声をかける。

その声にワゴンの車内にいる、ジョディ先生も含めた捜査官達は、

了解

とでも言うように、首を縦に振った。

因みに、銃を所持しているのはFBIだけではない……。

俺達も、だ。

もちろん、使う気などない。

これは、あくまで緊急時の最終手段だ。

“護身用”と言えば聞こえはいいかもしれないが、

これの引き金を引くということは、“人を傷つける”ということの意味する。

いくら守るためとは言え……。

以前俺は、やむを得ずに引き金を引いたことがあった。

あの時は仕方がなかった。あれ以外手段が無かったから……。

それに・・・蘭を守るためだったから・・・。

何も気付けずに何かを手に入れようなど、綺麗事なんだろう・・・。

それは、十分に分かっている。

だから、これはあくまで最終手段。

それは服部も白馬も承知しているのか、拳銃は上着の右ポケットにしまっている。

俺も上着の右ポケットにしまう・・・と言いたいが、

子供服のせいなのか、拳銃がポケットに入らない・・・。

俺は、（子供はホントに不便だな・・・）と、

入らなかった拳銃を見ながら内心で呟き、仕方なく右手に持ち続ける。

「ボウズ、俺らも行くで」

右隣りに立っている服部が、俺を見下ろしながら言う。

俺は、ああ　　と、返事をしてワゴンから出て行った。

そのまま、俺達は事前に調査しておいた、

高層ビルの地下駐車場に向かう。

俺達は駐車場の出入り口から、

慎重に且つ足音をたてないように前に前進する。

所々に監視カメラが設置してあるが、

今は全く気にする必要がない。

なぜなら、一昨日の午後四時に、

水無さんからジェイムズさんの携帯に電話がかかってきた。

内容は、「組織に阿笠博士と灰原が捕まっている」というもの。

せっかく報告してきてくれた彼女には悪かったが、

その事は知っている ということを、

ジェイムズさんが話しているときに、近くで聞いていた服部が、

携帯を変わってもらい今日の事を話したのだ。

俺は水無さんの声を聞けなかったので、彼女が何と言ったのかは分からないが、

服部との会話のやり取りで、相当驚いていることが分かった。

水無さんが落ち着いたのか、服部は話を変えて頼み事をした。

その頼み事とは、

「今日の十時頃に、セキュリティのスイッチを切ってほしい」というもの。

水無さんは本部の位置を知らなかったのか、

服部が本部の位置を知らせると、その後、水無さんとの話し合いが始まった。

話し合いは二分ほど続いたが、なんとか納得してくれたようで、

服部が、頼むわ　　と言って、電話を切った。

その彼女の行為を無駄にしないためにも、

俺達は慎重に歩を進める。

作戦通り、組織の目が上に向いているせいか、

地下駐車場には人っ子一人いなかった・・・。

俺達は警戒しながら、上半身に防弾ジャケットを装着して、

いつもと違う違和感を感じる体を、慣れさせながら前進する。

その間俺達は、一言も喋らない……。

何の問題も無く駐車場を抜けた俺達は、

やがて、ビルの中へ入れる、ロビーの入口に着いた。

俺達は、自動ドアの手前にある柱に一旦身を隠す。

そこから顔だけを覗かせて中を見る。

「……誰もいないようですね」

俺と同じ方向から見ている、白馬が小声で呟く。

服部は俺達とは反対側、左側から覗いている。

「行くか？工藤」

服部は一旦顔を俺に向ける。

俺は、ああ

と思いながら頷く。

それを見た服部と白馬は、慎重さを忘れずに、自動ドアへと歩を進める。

俺も後に続く。

七歩ほど歩き、扉の前についた俺達は、互いに顔を合わせて頷くと、

白馬の存在を感知した、自動ドアのセンサーが扉を開ける。

俺達は中へ入ると、辺りを確認する。

ここは至って普通のロビーだ。

右正面に茶色のカウンターがある。

接客用のものだろう・・・。

左正面に視線を向けると、手前から煙草の自動販売機、飲み物の自動販売機が、

青く染められて置いてある。

右側と左側には、観葉植物が黒色の鉢に入れられて、

三個ほど横に並べられている。

正面に視線を戻すと、奥にはT字路の通路があり、

その通路の分かれ部分の天井に、

看板が吊るしてある。

右に階段のマークの看板、左にトイレのマークの看板が、

そしてその看板の下、つまり一番奥には、

エレベータの銀色の扉があった。

部屋の確認を終え、誰もいないことを確認した俺達は、

正面のエレベータに無事に辿りつく。

何とかここまでできたが、警備の無ささに不快感を覚える……。

だが、今は博士と灰原を救出することが先決なため、

その考えを頭の隅に追いやり、左に立っている白馬が、

エレベータの下りのボタンを押した。

エレベータを待っている間、上での銃撃戦の激しさを物語るように、

銃声が休むこと無く耳に入る。

十秒ほどエレベータの扉の前で待つと、

『チン』という音と共に扉が開く。

白馬、服部、俺の順で入ると、ボタンの傍に立った白馬がボタンを押し、

扉が静かに閉まった後、下に降りて行く感じを受けた。

エレベータの中でも俺達は言葉を交わさない。

緊張という名の空気が流れ続ける……。

息が苦しく感じる……。

そのせいか、汗が一適一適と、顎から伝わり床に落ちて行く。

それは、俺の左にいる服部も、

右正面に立っている白馬も変わらないらしい……。

二人の足元に、水たまりが小さくできていた……。

そんな空気を破るか のように、

エレベーターが『チン』という音と共に停止し、

扉が開くと、どこかで見たような、

長い直線状の通路の壁の両脇に、

扉が一定の間隔で取り付けられている光景が、目に入ってきた。

(似ている……あの場所に……)と、内心思いながら、

鳥取の研究所の、入口を開けた時の光景が思い出された。

しかし、一つ一つ調べている時間は無い……。

どこにいるんだ？

と、俺は思いながら、

通路に並ぶ扉を見つめる。

とその時、左に立っている服部が、

「工藤、白馬。あそこ見てみ」と、小声で話しかけながら、

前方のとある場所を、左人差し指で指す。

俺と白馬はその方向を見ると、

手前から数えて、四番目の左側の扉が少し開いており、

中から光が漏れているのが見えた。

「まさか、あそこに？」

白馬は小声で言うと、服部は正面を向いたまま、

「ああ、多分な・・・」と、呟いた。

俺も服部に続き、「行こう」と、促す。

意見が一致した俺達は、今まで通り、慎重にゆっくりと扉へ前進する。

そして、正確な時間は分からないが、一分二十秒ほどかけて扉に辿りつくと、

服部が左手で、『チョン』と扉に触れると、

扉は『ギイイイ・・・』という音を立てながら、

ゆっくりと開けられる。

静かなこともあるんだろうが、その音が通路に微かに響く。

俺は扉が完全に開いたことを視認すると、

前の服部と、後ろの白馬に視線を合わせて、

お互い首を縦に振ると、服部、俺、白馬の順で、扉の中に駆け足で入る。

そして中に入り、研究場らしきものが見えたのと同時に、

博士、灰原も視界に入る……。

……彼らの後ろで背中に銃を向けている、

ジンとウォッカも視界に入りながら……。

「江戸川君！」

俺達を見た灰原はそう叫ぶ、それに続き、

灰原の後ろで歯を剥き出しにして笑ってるジンが、

「ようこそ。死へと歩を進める名探偵達……」と、低い声で喋った。

・・・俺達は、その状況を理解できず、

入口から四歩ほど入った場所で、立ちつくしていた・・・。

終焉・破滅への未来（後書き）

うん。やっぱり戦闘は苦手だ・・・。
上手く表現できない・・・難しい。

では、評価、感想お願いします・・・。

終焉：焦りの代償と失われていく光（前書き）

いや〜暑い!!!

今年は去年に比べて、暑く感じます!

これも地球温暖化のせいかな・・・?

正直言つて、地球の未来大丈夫か?!

さてさて、そんな暑い中ログインしたところ、

評価が上がっていました!

ありがとうございます!(^o^)

では、ごうぞー!

あちい〜・・・

終焉：焦りの代償と失われていく光

「は、博士……は、灰原!!」

研究室に突入したコナンは、目に映っている光景を見て、

意思とは関係なく叫んだ。

「……」

コナンの両脇に、同じく立ちつくしている白馬、服部は、

啞然としている。

そんな三人を見てジンは、フン　と、鼻で笑った後、

「驚きのあまり身動きも取れないか……」と、

灰原の頸椎^{けいつい}辺りに、銃口を突き付けながらコナンを見て言った。

一方、ジンの右で阿笠の背中に、銃口を突き付けているウォツカは、口元をにや付かせながら、不気味な笑みを浮かべ、

彼のかけているサングラスが、その不気味さを倍増させている……。

因みに、阿笠と灰原は両腕を、後頭部辺りに組まされている。

「……ジン、なぜここに?!」

コナンは灰原、阿笠、ウォツカを視界に入れながら、ジンに怒鳴りつける。

その声が部屋の扉を抜け、長い通路に響き渡る。

「フツ……お前達の動きは、あの女の行動でだいたい予想できていた」

「あの女?」と、コナンは聞き返す。

「キール……水無怜奈だ……」

ジンは口元を吊り上げて、殺人者の笑いを見せながら、低い声で答えた。

「……水無って……い、今……彼女はどこにいる?!」

コナンは頭の中に過る、最悪の結果を振り切り、震える声で聞き返す。

「……」

ジンはそのままの表情で、コナンを黙って見ている。

そのジンの様子で、コナンの頭に振り切ったはずの結果が、

確信に変わっていく……。

「……ま、まさか……」

コナンの左で静観していた白馬が、目を丸くしながら呟く。

ジンは全く表情を変えない。

一方、阿笠と灰原は結果を知っているのか、目を強く瞑っている。

「言え!! ジン・・・水無さんはどこにいる?!」

コナンは思っている結果が違うことを願いつつながら、

ジンに再び怒鳴りつける。

そして・・・ようやくジンが答える。

「さあな・・・今頃、三途の川でも渡っている頃だよ・・・」

「・・・」

ジンの言葉に白馬、服部、コナンは驚いたが、

フリーズしてしまったかのように、身震い一つしない。

目を見開き、口をポカンと開けている。

頭の中は“無”と化していた・・・。

博士と灰原は、目を少し半開きになっているが、

その目は悲しみに満ちて、瞳が微かに震えていた・・・。

そんなコナン達を無視して、ジンは話を続ける。

「あの女が時折、不審な行動をとっていたのは知っていた。

そこで、監視をつけた・・・もちろん、本人に気付かれないように・・・。

そして今日、あの女は組織のセキュリティを破壊する、

という行動を起こした。

まあ、あの女が何のためにそんなことをしたのかは分からなかったが、

FBIの襲撃で予想はついた。

そして、FBIがあんな大胆な行動をとるはずがない……。

すぐに読めたよ……あれは罠だと……。

つまり、別に動いている何者かが、

この二人を取り返しに来るのだとな……。

「……」

コナン達は驚愕したまま、ジンの話を聞いていた。

白馬、服部、コナンは思考が回らなくなっている。

まさに、頭の中が“白”の状態である。

「・・・江戸川コナンと言ったな・・・」

コナンはジンの冷たい声に、我を取り戻す。

しかし、その目に“光”は宿ってない・・・。

「お前が今まで、FBIと協力して我々を追っていたことは、

ある人物からの情報で分かっていた。

ガキのくせに頭が切れ、我々を翻弄していたことは知っている・・・。

なのに今回はやたら単純だな・・・。

それとも、これも何かの作戦の一部なのか？」

「・・・」

コナン達は、頭の中は今だに“白”だが、ジンの声は届いていた。

しかし、返す言葉が無い……。

「答えられないのか？」

ジンはそう言うと、徐々に表情を固くする。

「……兄貴。早く殺っちまいましょうぜ」

ウォツカは不気味な笑みを維持しながら、左に立つジンに顔を少し向け、

許可を得ようとする……。

そんなウォツカにジンには、横目で睨み、

その強烈な殺気と、氷以上に冷たい目で黙らせる。

ウォツカはその目を見るなり、黙って阿笠の背中に顔を戻す。

ジンも視線をコナンに戻す。

しかし、コナンに視線を戻したジンの目は、殺気が無くなり、

氷の如く冷たい目もしていなかった……。

「江戸川コナン、もう一度問おう……。」

この作戦、なぜこんな単純なものにした……。」

コナンは徐々に我を取り戻し始めたのか、

輝きが宿り始めている目を、ジンに向けて答える。

しかし、その輝きは“完全”ではない……。

一方、コナンの両脇にいる服部と白馬は、我を取り戻し、

ここが戦場だということ意識し始めたのか、

その目は輝きに満ちて、白馬はジン、服部はウォツカを見ながら、彼ら二人の前にいる阿笠と、灰原を助け出す有効な策を練り始めていた……。

阿笠と灰原は、姿勢を崩さず且つ、背後の二人の存在と拳銃が与える、

暴力的プレッシャーから耐えながら、目を開いてコナン達を見ている。

「フツ……ジン、お前の言うとおりだ」

そのコナンの言葉に、服部と白馬が一瞬コナンを横目で見る。

「俺はもしかしたら、焦っていたのかもしれない……。」

博士と灰原を助け出すために、一刻も早く行く必要があるって。

その焦りが、俺にこんな作戦を言わしたのかもな……。」

コナンは、自分自身が馬鹿馬鹿しいように感じながら、

笑いを漏らす……。

そのコナンを見た灰原は、「江戸川君……」と、

コナンに聞こえるか聞こえないぐらいの声で呟く。

その目は、そんなコナンを哀れんでいるのか、

そこまでして自分達を助け出しに来てくれた、という彼の、

自分達を心配する気持ちの強さに心揺れたのか、

瞳が揺れている……。

「ほんなら、俺もやな」

「僕も同じですね……」

服部と白馬は、微笑みながら言う。

しかしその微笑みは、“喜び”の微笑みではない。

コナン同様、自分が自分で馬鹿馬鹿しくなるといっ、

情けない微笑み である。

「確かに僕も、心のどこかに焦りがあったのかもしれない……。

それを自分で気付くことができなかった……。

冷静でしたよ……表だけは」

白馬は情けない微笑みをしながら、ジンの目を見ながら語る。

白馬に続き服部も、そうやな と続く。

「俺も同じや……。もしかしたら、自分の死っちゅう恐怖心が、

俺らの心を支配してたのかもしれない……。

そやから、いつの間にか焦ってしもうた……。

親父とアイツに電話したとき、

『これが最後の電話になるかもしれへん』、そう思ったら、

寂しさ、悲しさうちゅう、負の感情が俺らを支配して、

思考や判断力を狂わせてしもーたんやな……」

服部も白馬同様、情けない　　という、

表情丸出しの微笑みを浮かべながら、ジンに語った。

ジンは、話をしている者の目を見ながら、黙って聞いたていた。

ウォツカ、阿笠、灰原は、ジンと同じく静観している……。

と、そのまま静観が続くかと思いきや……、

ジンの目が“黒の目”に変わり、

「そうか……なら、その悲しみと情けなさを背負いながら、

あの世へ……いや、先に仲間の死を見てもらおう……」

そう言うと、灰原へ向けられている拳銃の引き金が、

少し引かれる。

「……」

コナン達は、ジンの左人差し指の動きに警戒する。

(まずい……だが、どうすれば……)と、コナンは内心で思いつ。

しかし、今動けばどうなるか……それは分かっていた。

そんな事を考えている間にも、ジンの指は止まらない……。

灰原は死を覚悟しているのか、目を強く瞑る……。

白馬も服部も、まずい
　　と思いつながら、頭をフル回転させ
ながら、

策を考えるが思いつかない……。

パツシュ！

一発の銃声が響く……。

サブレッサ　を付けているため、音はそれほどでもない。

しかし、コナン達三人にはそんな事はどうでもいい……。

目に映る光景に驚愕していたからだ……。

終焉：焦りの代償と失われていく光（後書き）

今回は、『名探偵達が未熟』という部分を、強調して書きました。

『人の心の弱さ』というのは、思ったより書きにくいですね……。

でも、これも“小説を書く”という、

楽しみの一つだと私は思います！

では、評価、感想等待着ってまーす！

終焉・過ちを受け入れる者達（前書き）

皆さん、こんにちは。

もう少しでこの『組織編』が完結です！

今、組織編の後の、『新志』の物語をどうするかを思案中です。

では、ごうざー！

終焉：過ちを受け入れる者達

一発の銃声が地下研究所に響く……。

その元は、ジンと呼ばれる、組織の幹部の男が放ったもの。

その射線上には、後頭部の辺りで腕組みをさせられ、

頸椎の部分に銃口を向けられていた、

“元”組織の一員の、灰原哀。

その前には、状況が読めず、啞然と突っ立っている名探偵達三人……。

チユン！ と、着弾の音がした……。

しかし、三人が驚愕しているのは、その音でも、銃声の音でもない。

眼前には、首の辺りから血を噴き出し、

スローモーションの如く倒れるこむ灰原が……。

見えるはずだった……。

しかし、灰原はまだ立っている。“一適の血も出さずに”……。

そして、その灰原の後ろには、

ドサツ という音と共に、倒れ込むジンと阿笠が見えた。

その音と同時に、カランカラン という音がして、

床に薬莢が落ちる。

「!?!」

ジンは、突然の出来事に動揺を隠せずに、目を見開いて、

自分に伸しかかる阿笠を、 とでも言うような、

目で見続ける。

ウォッカは、阿笠の咄嗟の行動に動揺したものの、

「このジジイ!」と、怒りの感情丸出しの声を上げ、

倒れ込んだ阿笠の頭部に銃口を向ける。

「!?!」

コナンは阿笠の行動に、ジン、ウォッカ同様驚いていたが、

ウォッカの動作を見るなり、我に返ると、

“どこでもボール射出ベルト”から、サッカーボールを眼前に射出し、

“キック力増強シューズ”のスイッチを押すと、

サッカーボールを勢いよく蹴る。

そのボールは正確にウォツカの顔面に命中。

ウォツカは、ぐあっ！
と声を上げた後、反動に耐え切れずに、

床にうつ伏せの状態で倒れ込む。

動かないところを見ると、意識を失ったようだ……。

サッカーボールは、ウォツカの命中した後、

床に、トン・トン
と、音をたてながら二丁三回バウンドした後、

シューウウウ……
という音をたてながら、

空気が抜けていき、ペシャンコになった。

ウォツカが吹っ飛ぶのを見た服部は、全力でジンに向かって走り、

阿笠によって今だに身動きができない彼に近づくと、

左手に持っている銃を奪い取り、右手に奪い取った銃のマガジン部分で、

ジンの頸椎辺りを軽く殴り、気絶させた。

「ハア・・・ハア・・・大丈夫か？二人とも」

コナンは突然激しい動きをしたせいか、息を荒らしながら、

阿笠と灰原を視界に捉えながら、言葉をかける。

「ああ。ワシは大丈夫じゃ」と、阿笠はゆっくりと立ち上がり、

ジンから離れる。

白馬は微笑んで、阿笠に歩いて近づきながら、

「無茶しますね、阿笠さん。あなたという人は・・・」と、

声をかえた。

因みに彼、白馬探が今している微笑みは、

先ほどのような“情けない微笑み”ではない。

阿笠を心から心配し、無事だったことに安心した、“安堵の微笑み”である。

服部も右手の銃を、上着の左ポケットにしまいながら、

「全くやで……。ま、jeeさんのおかげで助かったけどな……」
と、

やれやれ とでも言うような、表情をしながら言った。

その二人の言葉に阿笠は、

「すまんかったのお……。じゃが、哀君が殺されると思ったら、

無意識にあんなことをしておったのじゃ……。

それよりも哀君。怪我は無いか？」

阿笠は正面で、自分を見ている灰原に問う。

灰原は、「ええ、大丈夫よ。ありがとう博士」と、

笑みを見せながら素直に礼を言った。

「ホントに大丈夫かよ？オメエ・・・」

灰原の右隣りに立っているコナンが、顔を彼女に向けて声をかける。

「ええ、本当に大丈夫よ。・・・それよりも、工藤君。

さっきの話・・・」

「ん？さっきの話って？」

「ジンが言ったこと・・・」

灰原はコナンを、引きしまった表情で見ながら問う。

彼を心配しているように。。。。。

「。。。」

コナンは、そのことが

と、納得したように黙り込む。

「あれ、本当のこと?」

「。。。。ああ」

コナンは灰原の問いに、数秒間をおいて答える。

「。。。。どうして?。。。。どうしてもっと考えなかったの?」

「。。。」

コナンは徐々に、怒りの表情に変わっていく灰原を見ながら、

黙って話を聞く。

阿笠、服部、白馬は、二人を視野に入れながら、二人の様子を静観している。

「あなたがもつと考えれば、博士も私も、

もつと安全に助け出す方法があつたはずよ!!

この判断のせいで、水無さんや上で戦っているFBIの人達、

多くの人が犠牲になる!博士だつて、

こんな危険な目に合わずに済んだはずよ!!!」

灰原は次々と頭に思い浮かぶ事を、コナンに怒鳴り声でぶつけていく。

その声は部屋から抜け、通路に響いていたが、

今の彼らにそんな事はどうでもいい。

「……………これ哀君。」

新一も悪気があったわけじゃないんじゃないし、

……………何よりワシらは助かったんじゃない。もういいじゃろ？」

阿笠は灰原を落ち着かせようとするが、今の彼女はまるで、

聞く耳持たず　　のように、阿笠の言葉に耳を貸さない。

それどころか、阿笠にも怒りをぶつけるように、彼のほうを向いて、

「そういう問題じゃないわ！博士。工藤君がもっと考えてくれれば、

犠牲者の数を減らすことができたはずよ！！

水無さんだって、FBIの人達だって、生きれたかもしれないのに
！！！！と、

阿笠に向けて言っているが、

その言葉はコナンに言っているようだった……。

止まることを知らない灰原に、服部は彼女を見下ろしながら言う。

「ねーちゃん。工藤だけを責めるのはやめてくれや……。

その作戦になんの疑問も持たずに実行した、俺らも同罪なんやから……」

707

服部に続くように、白馬も灰原を見下ろしながら、

彼女を安心させるように、敢えて微笑みながら言い放つ。

「ええ。それに、こういう言い方は失礼かもしれませんが、

もう作戦は始まってしまっただんです。

今更どうこう言いおつが、この作戦は止まりません。

ならば、ここで『誰の責任』とか、『後悔の念』にかられているのではなく、

水無さんやFBIの方達の犠牲と勇気を無駄にしないためにも、

少しでも努力するべきなのでは？」

「・・・」

白馬の意見に内心、その通りね
と、納得した灰原だっ
たが、

それを表に出せないのか、顔を下に向けて黙り込んでしまう。

「哀君。ワシも彼の意見に賛成じゃ」

阿笠は俯く灰原に、意見を述べた。

その阿笠に続きコナンも、

「ああ。白馬の言うとおりだ。

灰原、俺達は逃げるつもりはねえよ。この自分のミスから……。

だから、この失敗に悔むよりも、この失敗を心に刻んで、

少しでも前に進もうと思う。

それが“正しい”と、俺は信じる……。

いや、信じたい！」

コナンは、俯いたせいで、髪に隠れている灰原の目を見ながら、

“光”を灯した目をして、力強く自分の意見を言う。

その言葉に納得したのか分からないが、

灰原は顔を上げると、コナンの顔を見て小さく頷いた。

「よっしゃ！ほんなら、この二人連れてとっとと退散しようや！」

服部は灰原が頷いたのを視認すると、気合の入った声で全員に言い放つ。

その声にコナンは、ああ　　と言つと、灰原が続く。

「ちょっと待って。この二人、どうやって運ぶ気？」

その言葉にコナン達は、そう言われてみれば　　とても言うように、

悩みだした。

そう、この二人見かけどおり、体重が“かなり”ある。

服部は背負って行こうと思つたが、とても背負って歩けるような、

体重と体格ではない。

本来は『ロープのようなもので縛って、ここから一旦出て、

ジェイムズ達を連れてもう一度来る』、という方法を取りたいのだが、

生憎、その“ロープ”のような物が無い。

仮にここに放置して出て行っても、ジェイムズ達を連れてくる前に目覚め、

逃走される可能性がある。

悩むだけで全く答えが出ないコナン達……。

その時、入り口から聞き覚えのある声が出た。

「終わったみたいね」

その声に驚いたコナン達は、一斉に入口に振り向くと、

「ジョディ先生！」と、全員が叫んだ。

終焉・過ちを受け入れる者達（後書き）

やたら、ジンとウオツカが“あっさり”終わりましたが、
「もっと激しい戦いにしないの？」とかいう質問は無しで。
そういう読者さんは、戦闘系の小説をお読みになってください。
ここは“新志”です。

では、評価、感想等お待ちしてまーす！

終焉・始まりの終わり、終わりは始まり（前書き）

今回で第五部を終了しようと思います！

フウ。よっやくここまで来た。

では、ごんぞー！

終焉：始まりの終わり、終わりは始まり

「その様子だと、ジンとウォッカを倒して、

哀ちゃんと阿笠博士も助け出せたようね」

入口から入ってきたジヨデイが、

コナン達に歩きながら言う。

「ジヨデイ先生、大丈夫なの?!」

コナンはジヨデイが正体を知らないため、子供を演じる。

「私はね・・・」

「『私は』ってどづいづこっちゃ?」

服部はジヨデイの言葉に不審を抱いた後、それをぶつける。

白馬、阿笠、灰原は、ジヨディの引きつっていく表情を見ながら、嫌な予感が頭を過るが、静観することにする。

「ええ・・・上での戦闘は一段落したけど、状況は最悪よ」

『最悪』という言葉に一行は反応するが、

ジヨディに、続けて　　と言うように、静観を続ける。

ジヨディはその沈黙を、『話を続けて』と理解したのか、

腕組みをして話を続ける。

「一つずつ説明するわね。

まず、私達はFBIは、死者こそ出てないけれど、

ほとんどの捜査官が負傷して、動けない状態よ。

応急手当はしたけれど、ここでまた戦闘なんてことが起こったら、

・・・全滅もあり得るわ」

ジヨディは最後の言葉を、溜息を履いて言った。

「そうですね・・・でも、死者が出てないことだけでも幸いなのでは？」

白馬は、肩を落としているジヨディに、励ましの言葉を微笑みと一緒に送る。

その表情と言葉に、元気を取り戻したのか、

そうね　と、白馬に微笑みを返した後、話を続けた。

「そして、組織のほうだけど・・・。

彼らは、今動ける捜査官が確認しているところ、・・・全員自決しているわ」

「！な、なんじゃと?!」

阿笠は目を見開き、信じられない
情で、
とでも言つような表

ジヨディを見た。

阿笠以外の四人も驚愕の表情をしている。

ジヨディは驚愕した彼らを見ると、一旦話を止めようかと思つたが、

ジン達がいつ目覚めるか分からないので、

そのまま話を続けた。

「とにかく、仲間を呼んで彼らを運んでもらいましょう」

「え?・・・う、うん。そうだね・・・」と、

コナンはがっかりしたような声で返事をした。

ジヨディは上着の右ポケットから、携帯を取り出して仲間に連絡をとるつもりをする。

「……もしもし。ジヨディです、ジェイムズ。実は」

その後、ジヨディは簡潔に報告し始める。

コナン達は電話の会話の邪魔をしないように、静かにしている。

コナンの内心は、“悔しさ”に満ちていた。

この作戦で死者が出ることは想定内、

しかし、彼ら組織のメンバー達だけは、“あの世”ではなく、

“牢屋”に一人でも多く送りたかった。

（くそっ！）と、コナンは苛立ちという舌打ちを、心の中でした。

無論、服部、白馬も同様に……。

その後、話が終わったジヨディは、

仲間を呼び、ジんとウオツカを外に運び出す。

そのFBI達に付いて行き、コナン達は外の空気を吸った。

外に出たコナン達は、暗い地下にいたためか、

太陽の光に一瞬目が眩む。

720

コナン達が出てくると、出口でFBIの捜査官達に指示をしていた
ジェームズが、

コナン達に気付くと、

「おお。君達、無事だったか・・・良かった・・・」と、

安堵の声を出しながら、笑ってコナン達の無事を喜んだ。

コナンはその気持ちを素直に受け取ると、

“気になること”を聞いた。

「ジェイムズさん。組織のボス……あの方って呼ばれる人はどうなったの？」

コナンは口調は子供だが、表情は固く、声も低くかった。

コナンの問いに、彼以外の四人は反応し、コナン同様ジェイムズを見た。

ジェイムズはコナン達の視線を受け止めると、

実はな　　と、話を続ける。

「その、あの方についてなのだが、……死体となって発見された……」

「……」

その言葉にコナン達一行は驚き、コナンは思わず聞き返す。

「『死体となって』ってどういこと?!」

ジェイムズは、重たい口を再び開く。

「うむ。順序良く説明しよう。」

・・・私達はこの一階から、組織のメンバーとの交戦を交えながら、

上へ上へ昇って行った・・・。

そして最上階についたところ、今までとは違う雰囲気を持つ部屋に辿りついた。

部屋の雰囲気から、その部屋は組織のボスが使っていたものだろう・・・。

だが、その部屋には・・・誰もいなかったのだ・・・。

二人の死体を除いてな・・・。

一人はあの方と思われる男性、もう一人は女性だった……」

「……女性って？」

「……ベルモットだよ」

「な、なんだって?! 本当なの？」

コナンは驚きのあまり、一瞬“素”を出したが、すぐに子供に戻る。

阿笠、灰原、白馬、服部は、驚きの表情を見せるが、静観を続ける。

「ああ。額に銃痕を残してな……」

「銃痕？」

コナンは冷静になり聞き返す。

「……これは、私の予想だが……おそらく、」

ベルモットはあの方に殺されたのだろうと思う」

「なるほど……つまり、あの方って人は、

ベルモットを何らかの理由で殺害して、逃げたってわけだね？」

コナンは顎に右手を当てて、考えるポーズをしながら、考えを言う。

ジェイムズは、「そういうことだ」と述べた後、

彼の後ろから来たFBI捜査官に、「ボス。出発の準備整いました」と言われると、

分かったと、返事をして、

コナン達に、「取りあえず、阿笠邸まで送ろう。乗りたまえ」と言
って、

コナン達を促した。

コナンは軽く頷くと、ジェイムズの後に続く。

阿笠、灰原、服部、白馬も、コナンの後ろに続き、乗車した。

そして、車はゆっくりと走り出した……。

走行中の車の中では、車のエンジン音が聞こえるのみで、

乗車していたFBIのメンバーも、阿笠達も一言も話さなかった。

疲労しているせいか、誰も話さないことに気を使っているのかは分からない。

コナンは、フロントガラスから見える前方の景色を、

ボーっと、眺めている。

そこには、運転席と助手席の座席に阻まれた光景が見える。

だがコナンは、“そこを見ていてそこを見ていない”。

コナンが見ているのは、流れていくビル群でも、前方を走る車でも、快晴の青空でもない。・・・未来である。

コナンはこれからの事を考えていた。

“これからやること”。

まず、元に戻らねばならない。

組織のメンバーはもういないはず・・・。

つまり、もう“偽りの姿”で生活する必要はどこにも無い。

コナンは景色を眺めながら、他にも色々な事を考えたが、

一つ一つ確実にこなしていくために、

まず、元に戻ることを最優先で考える。

そんなことを考えている内に、車は阿笠邸に着く。

停車すると、助手席からジェイムズがまず降りた。

それに続くように、コナン達五人も後部ドアから降りる。

一番後部ドア側に座っていた阿笠が先に降りると、

先に降りていたジェイムズが、阿笠に近寄り、

「阿笠さん。これを……」と言い、右手に持っていたものを渡す。

阿笠は無言でそれを受け取ると、「これは……ワシの家の鍵？」と、

その右掌に乗っている鍵を、なぜ？
と見つめる。
と言つような目で

ジェイムズはその阿笠の顔を見て、

思考を読んだかのように

言う。

「その鍵は、我々と交戦していたサイレントというメンバーが持っていたものだ」

阿笠は話を聞くと笑みを浮かべ、

「ありがとうございます！」と言い、一礼する。

ジェームズはその言葉を笑顔で返すと、

「では、失礼」と言い、助手席に戻って行った。

その後、灰原、コナン、白馬、服部の順で降車した。

そして外に出た服部が阿笠邸を見て、「やっと帰ってこれたわ」と一言呟いた。

コナン達が全員降りると、

後部ドアから降りてきたジヨディが、

後ろ姿のコナン達に、「ありがとう」と笑顔で気持ちを伝える。

その言葉にコナン達五人は、息が合うように一斉に振り向くと、

どういたしまして
と言うように、笑みを向けながら会
釈した。

それを見たジヨディは、彼らと同じく会釈で返し、

後部ドアから車内に入ると、左、右と扉を閉め、

車はエンジン音をたてながら、走り去って行った……。

それを見送った後、コナン達は渡された鍵を使って、

阿笠邸に帰宅したのだった……。

終焉：始まりの終わり、終わりは始まり（後書き）

組織は結果的に、ジンとウオッカしか捕まりませんでした。

原作では、最終的にどうなるんでしょうね？

今から楽しみです（＾・＾）。

話は変わりますが、次話からいよいよ“新志”の物語に入ります！
まだ書いていませんが、今から楽しみです！

では、評価、感想、ご意見お願いしまーす！

解放・それぞれの時間とそれぞれの未来へ（前書き）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。

いや〜暑い・・・。

そんな中、新たなスタートです。

では、ごうござい！

解放・それぞれの時間とそれぞれの未来へ

「さて、これからどうするか・・・」

コナンは今、阿笠邸のソファでコーヒーを飲んでいる。

コナンの左には、灰原が、彼女の左には阿笠が、

阿笠の正面には服部、

そして、服部の右に白馬が座っている。

彼らは全員、右手にコーヒーカップを持ち、

疲れ切った体を癒している。

それと同時に、未来のことを話し合っていた。

「灰原はどうする？」

コナンは灰原に顔を向けて聞く。

コナンの言葉を聞いた灰原は、コーヒーを一口飲み、

「私はもちろん、解毒剤の研究を進めるわ。」

幸い、地下室に置いてあったあのファイルは取られてなかったから、

研究は続けられる」

灰原は、当たり前じゃない

とでも言うように、

コナンを横目で見ながら言った。

コナンは、「ああ、頼む。．．．でも、無茶はすんなよ」と、

微笑みながら言葉を返す。

灰原は、うん

と言うように頷く。

コナンはその仕草を視認して、安心したように正面に顔を向けて、

コーヒーを口にする。

コーヒーカップから口を離れた後、

コナンは正面の服部と白馬を視界に入れながら、

「オメエらはどうする?」と、問う。

服部はカップを口から離し、

「そやな。取りあえず無事に帰ってこれたんやから、

オトンと和葉に連絡して、安心させてあげんとな・・・」

そう言うと、服部は再びカップに口を付ける。

続いて白馬が、服部に続くように言う。

「僕も父上に伝えなければ……。無事に帰ってきたことを……」

それからの事は……。それからですね」

白馬は最後の言葉を、笑いながら言い終わると、

服部同様カップに口を付ける。

コーヒーを一口飲んだ白馬は、正面の阿笠に目をやり、

「阿笠さん」

声を掛けられた阿笠は、カップから口を外し、

ん？ と言つように、白馬に目を向ける。

白馬はその目に視線を合わせ、

「急なことで申し訳ないんですが、ここに泊めてもらいたくないでしようか？」

白馬は頭を低くして頼み込む。

「いいぞい。・・・じゃが、どうしてじゃ？」

「ええ。あの探偵事務所に泊まってもいいのですが、

今は三人にしたほうがいいと思ひましてね」

そう言つと白馬は横目で、チラッ　と、

コナンを一瞬見る。

阿笠はその目を追つよつにコナンを見ると、

（なるほど・・・そういつことか）と、内心で呟いた後、

「ああ、いいぞい。

・・・じゃが、そうなると服部君も泊まるってことじゃらっつ、」

阿笠は話の途中で、白馬から服部に視線を変える。

服部は視線を阿笠に合わせた後、カップから口を外すと、

「そやけど・・・何かあるんかいな？」

「うむ。二人が泊まるとなると、ベットが一つ足りないんじゃないよ・・・」

阿笠は、言いづらそうに口を開くと、

服部と白馬を視界に入れながら答えた。

服部は、どうしようも言ってるような阿笠を見ながら、

「大丈夫や、jeeさん。俺はソファで寝るさかい。

心配いらへんで」と、笑って答えた。

服部が言い終わると、阿笠、白馬、服部の会話を、

コーヒーカップを片手に聞いていたコナンが、服部の目を見ながら、

「服部。俺はまだ、『探偵事務所に戻る』なんて言ってね ぜ?」

服部はコナンの疑問を、コーヒーを飲みながら聞くと、

コナンを見つめ返しながら答えた。

「ん? 違うんか? 毛利のおっちゃんとねーちゃんに、

近々ホンマの事、若しくは、

『江戸川コナンが傍からいなくなる』っちゆうことを言わなきゃあかんやろ?」

その話に、なるほど
ーを口にする。

と云うように、頷きながら「ーと

「じゃあ取りあえず、遅めのお昼にしましょう。白馬君手伝って」

灰原は丁度、空からになったカップを持って、台所に向かう。

因みに、時刻は十三時十分。

昼食には確かに、“遅い時間”だ。

白馬は灰原の後ろ姿を、ソファーに座りながら、「はい」と了承の返事を返すと、

自身の空からのカップを右手に持ちながら、

灰原の後を追った。

その後、阿笠邸で久々の、昼食が始まった……。

阿笠邸で、会話が弾みながら着が進んでいる頃、

場所は変わり、ここ杯戸中央病院。

今ここには、一般の患者に紛れて、組織との戦いで傷を負った、

FBI捜査官達が運び込まれて、手当てを受けている。

その人数が多かったせいか、彼らの運び込まれた三階では、

医師や看護師達が慌ただしく、忙しそうに駆けまわっていた。

その三階の数多くある病室の一つでは、

右足の太ももと、右二の腕を撃たれ、ここに運ばれてきたキャメルが寝ていた。

そして、キャメルの左側にジョディが、キャメルの右側にジェイムズが立っている。

ジェイムズは窓から見える、杯戸町のビル群や、

この病院の入口に出入りする人々、

病院の前の道路を、蟻あじの群れの如く走行する車を見ている。

ジヨデイは椅子に腰かけて、右足と右二の腕に包帯を巻かれ、

痛々しい姿で横たわっている、キャメルの顔を見ている。

とても、心配した表情で……。

ジェイムズは窓越しから見える光景を楽しみながら、

これからの事を話し始める。

「さて、これからのことなのだが……、

まず、組織の事がマスコミによって報道されるとして……、

問題はその後だな」と、窓にうつすらと移りこむ、

ジヨデイとキャメルを見ながら言った。

ジェイムズが口を閉じると、

そうですね。と、ジョディはジェイムズの背中に話し始めた。

「マスコミの報道は避けられないでしょう……」。

報道されないのが一番なのですが……」

溜め息混じりに喋ったそのジョディを、

ほとんど自由が効かないカメラが、

顔だけを左に向けて、ジョディに話しかける。

「ええ。今あのビルには、『騒ぎを聞きつけた警察やマスコミが殺到している』と、

仲間から報告がありましたからね……」

「うむ。さすがに誰が関わっていたかは知られないだろうが、

組織のことは知られてしまっただろうな……どうしても……」

ジェイムズは、やむを得ない　　と言つよつに、

目を瞑りながら話した。

その話にはジョディが続く。

「ええ。そしてこの杯戸中央病院に、

『戦闘によるものの傷を負った人達が多数運び込まれた』、

という情報を掴めば、察するでしょうね……」

ジョディが言い終わると、

ジェイムズはジョディのほうに振り向き、

ジヨディとキヤメルを視界に入れながら、

ズボンの両ポケットに両手を突っ込み、

「ああ。そうなった場合、どうするかだな……」

と、悩んでいるように、「うーむ」と、唸った。

キヤメルは、ジヨディからジェイムズに顔を向けると、

「まあ何にせよ……。私達の事がバレとしても、

コナン君達が関わっていたことは、

“絶対”に知られないようにしなければ……。

……あの子達の未来のためにも」

キヤメルの話を聞いたジェイムズとジヨディは、

納得するように

頷いた。

二人が頷くと病室の扉が、コンコン

と、

ノックの音を発し、扉の向こう側から、

「キヤメルさん。昼食をお持ちしました」という、

女性の声が聞こえた。

一番扉の近くにいたジョディが、扉を開けると、

お盆に食事を載せた看護婦が立っていた。

再び場所は変わり、ここ阿笠邸。

昼食を美味しく食べ終わったコナン達は、

各自、別々の行動をしていた。

服部と白馬は、自分の無事を伝えるため、

携帯を片手に電話をしている。

二人は会話を聞かれないためか、外に出て電話をしている。

そのため、中にいる三人には、

その会話は聞こえない。

阿笠はコーヒークップを片手に、パソコンをいじっている。

灰原は地下室に閉じこもり、

解毒剤の研究を熱心に進めている。

コナンは阿笠邸の電話を使って、両親に電話をしている。

電話が繋がったのか、コナンは喋りだした。

「もしもし？父さんか？」

解放・それぞれの時間とそれぞれの未来へ（後書き）

今回は場所を移動して書いたため、
あまり話が進まなかったのが反省点ですね。

では、評価、感想等待着ってまーす！

解放：不安から解き放たれた名探偵（前書き）

えー・・・、皆さん、昨日は一話しか更新できずに、
申し訳ありませんでした・・・。

暑さのせいか頭が働かず、

「こんな状態で書いても、まともな話は書けない」と判断した私は、
書くのを止めてしまったわけです・・・。

では、どうぞー！

解放・不安から解き放たれた名探偵

太陽が一番高く昇り切り、降りようとしている頃、

阿笠邸の家内及び外では、計三名の人物が電話を掛けていた。

一人は服部平次。

彼は阿笠邸の玄関から右に、五歩ほど家に沿って歩いたところで、

電話をしている。

相手は服部平蔵、彼の父親だ。

白馬は、服部と丁度反対側のところで電話をしている。

彼の電話相手も父親だ。

因みに、この二人の姿は家内の窓から見える。

阿笠はパソコンをいじりながら、時たま視点を変えて、二人の様子を見ていた。

声は聞こえないが、二人とも笑いながら話をしている。

そんな二人を見て、会話が順調に進んでいることを察し、

阿笠は安心できた。

そして、もう一人。

家内の電話を使って話をしている少年、江戸川コナン。

彼も服部、白馬同様、自分の父親に掛けている。

ただ、服部達と違うのは、家内で電話しているため、

その話が阿笠の耳に、嫌でも届くことである。

「ああ、俺だ。新一」

「父さん・・・帰って来たぜ。奴らを倒してな」

コナンはさっそく言いたいことを言い放つ。

だが、その言葉に優作は、驚くことはなかった。

優作はしばし黙り込んだ後、

「・・・新一。何の犠牲も無しにか？」

「・・・え？」

コナンは思わぬ事を聞かれたことに、動揺を隠せず、声を上げる。

優作は、（凶星か・・・）と、内心で思うと、

「新一。その返事は“肯定”と受け取っていいんだな？」

その問いにコナンは、返事をせずに黙り込む……。

「……」

優作も沈黙して、コナンの返事を待つが、

聞こえるのは呼吸の音のみで、返事は返ってこない。

……一向に返事をしない息子に、自分の言っていることが当たっている　と、

感じた優作は、溜息をして、「そうか……」と言った。

「……父さん」と、優作が言い終わった後、二秒ほど間を置き、

受話器から息子の声が聞こえてきた。

しかし、その声は落ち込んでるように、力が籠ってなかった……。

優作は敢えて返事をせずに、息子の話を聞く。

「俺、今回の作戦で情けないことに焦っちまったんだ……。」

そのせいで、FBIの人達には死者は出なかったんだけど、

沢山の怪我人を出す結果になっちまった……。

もっとよく考えて、皆で意見を出し合えば、

負傷者を少なく出来たかもしれねえのに……。」

ここでコナンは情けないように、ハハ…… と笑いを

こぼす。

「そうか。……だがある意味、良かったじゃないか」

優作の、『良かった』という言葉に、コナンはその言葉の意味が分からず、

無神経の内に、「え？」と、聞き返していた。

「あー・・・変な意味じゃないぞ・・・」

コナンの疑問を理解したのか、優作は笑い声混じりに、コナンの疑問を解く。

そして、つまりだな

と、話を続けた。

「お前は今回、取り返しのつかない失敗を犯した。そして、その事を悔やんでいる。」

・・・違うか？」

コナンは、優作の相変わらずの鋭さに、内心で感心した。

その後、心の中の考えを、正直に話始めた。

「父さんの言うとおりだよ。俺はこの失敗を悔やんでいる・・・。

そして、どんなに祈っても戻るわけねえのに、時間が戻ってほしい。

あの、『組織の本部に乗り込む三日前に戻ってほしい』って思ってる。

・・・フツ・・・馬鹿だよな・・・戻るわけねえのに」

コナンは先ほどと同じく、情けない笑い声を出しながら話した。

優作はコナンの話を、頭の中で考えをまとめながら聞いていた。

暫しの後、優作は、フウ・・・ と、息を

ゆっくり履いて、まとめた考えを話始める。

「新一。確かに、時間は戻らない・・・。お前がどんなに願おうが、どんなにそれを望もうがな・・・。」

それは、分かっているな？」

コナンはその問いを、沈黙で返す。

優作はそれを肯定と受け取り、話を進めた。

「だが、その時間を未来に活かすことはできる……」

「未来に……活かす？」

「そつだ。……人はな、失敗することで前に進むんだ。

お前も分かっているはずだ……。最初から何でも完璧にできる人間などいない。

天才と呼ばれている人も、数えきれない程の賞を授与された人も、

それまでに重ねてきた努力や、失敗、経験……それらが積み重ねることだ、

初めて天才と呼ばれるようになるんだ。

俺だつてそつだ。

最初から有名な推理作家だったわけじゃない……。

地道な努力を積み重ねて、今の場所に立っているんだ。

お前だってそうだろう？・・・新一」

コナンは優作の話を黙って聞きながら、内心で、“こんな当たり前のことに気付かなかった自分に呆れていた”。

しかし逆を言えば、“当たり前的事ほど気付きにくい”
、のかもしれない。

「父さん・・・」

コナンが呟いた言葉に、優作は声が聞こえた息子に安心したのか、

ハハハ・・・

と笑うと、再びを口を開いた。

たださつきと違うのは、その声が明るくなっていたことだ・・・。

「あー・・・つまり、俺が言いたいのには、“人は失敗した時に、

次を取る行動によって先が違う”ということだ」

「・・・次に取る行動？」

コナンは、話の続きを聞きたい、という欲望を抑えながら、

冷静に且つ、いつも通りの声と調子で聞き返した。

その言葉に優作は、ああ　　と言って、話を進める。

「人が失敗した時、取る行動は三つだ・・・。

一つは、失敗を受け入れて、その失敗を次の経験に活かそうとする行動。

・・・これは素晴らしいものだ。

こういう人間はドンドン強くなっていく。心身共にな・・・。

二つ目は、失敗したことを恐れて、その失敗から逃げることだ・・・。

これは好ましくない行動だ……。

これが、どういふ結果を生み出すか分かるか？」

優作は突然、コナンに問った。

しかしコナンは、突然の問いに動揺せず、そうだが、と、考え込んでから答える。

「多分、いつまでも逃げ続けるから進歩がなく、

最悪の場合、墓場までそれを引きずるんじゃないかねえか？」

コナンが言い終わると、優作は、そうだと、間を置かず
に答えた後、

話を続ける。

「そして三つ目は……受け入れることもしなければ、逃げることもしないことだ……」

「え？どついつ」と？」

コナンは優作の話が分からず、思わず聞き返す。

しかし優作は、フツ　　と笑った後、「その答えは・・・教えないことにしよう・・・」と、

笑い声混じりで答えた。

コナンは、「はあ？！なんだよそれ！教えるよ」と、

思いもよらない答えに半分キレかかり、父親に要求するように言う。

そのコナンの言いように全く動じずに、笑い声混じりに優作は返答した。

「ハハ・・・新一。俺は別に、お前に意地悪しているわけでも、冗談を言っているわけでもない」

「なら、どついつして？」

「その答えは・・・“お前自身が自分で見つける”と言ったことだ」

「・・・フツ、そう言うことか・・・」

コナンは父親の考えが理解できたように、鼻で笑った後に、納得の返事をした。

「ああ・・・ところで、お前はどつするっ？」

「え？何をだ？」

「今、俺が話したことだ。失敗から逃げるのか？それとも、受け入れるのか？」

コナンは一息ついた後、笑顔を浮かべて、「もちろん。受け入れるに決まってるだろ！」と、

当たり前だろ
い放った。

と言うように、父親に向かって力強く言

その元気な声に安心感が膨れ上がったのか、

優作は、「そうか・・・じゃあそろそろ切るぞ」と、安堵の声で言った。

コナンは、ありがとな、と言つと、受話器を置いた。

そのすぐ後、タイミングを計ったかのように玄関の扉が開き、

白馬と服部が、満足した笑みをしながら入ってきた。

コナンは受話器を置いた後、フウ　と、安堵の溜息を出した後、

受話器から右手を離し、音がした玄関に振り向く。

服部と白馬、阿笠は、振り返ったコナンの顔を見て安心すると、

服部、白馬、コナンは、互いに笑顔を向けながら、ソファアーに腰かけたのだった・・・。

因みに、ロサンゼルスで受話器を置いた優作が、

近くのベットに座って静観していた妻、有希子に、

「優作。あの質問の三つ目の答え、教えないってのはホントかなあ
〜?」と聞かれ、

それに、「あー・・・実はあの答え・・・俺も知らないんだ・・・
ハハ」と、

。笑いながら言っ、有希子が呆れたことを、コナンは知らない・・・

解放・不安から解き放たれた名探偵（後書き）

今回は“失敗”という言葉を、メインにしてみました。
まあ、読者の方によって着眼点は様々でしょうが、
今作のポイントはこれですね。

さてと、これからどういう展開にしようかな〜・・・。

感想、評価等お待ちしてます！

解放・残された時間と伝えなければならない事(前書き)

今日は湿気が多いですけど、過ごしやすい陽気です。

皆さんはどうですか？

では、ごんねー！

解放：残された時間と伝えなければならない事

「じゃあ、博士。俺は探偵事務所に行ってくるぜ」

「ああ。気を付けてな」

阿笠邸でコナンは、阿笠、服部、白馬の三人と、

コーヒーで一息つきながら先のことを話し合い、

その結果……、

今日探偵事務所に帰り、毛利小五郎と毛利蘭に、

親の元に帰ることを話す

ということになった。

ただ、具体的な日にち……つまり、解毒剤が完成する日が分からないため、

小五郎達には、「近々帰る」ということを伝えるだけに留める。

そして、コーヒーを飲み干すと、笑顔満々で言いながら玄關から出て行った。

阿笠は太陽のような笑顔で温かく見送ると、

再びパソコンをいじり始めた。

外に出て、早く蘭達に伝えたいコナンは、

駆け足で探偵事務所に向かう。

コナンが通る道は、いつもの帰り道だ。

そのため、見ている光景はさほどの変化はない。

ただ、時刻が十五時を回っているためか、

買い物袋を持った女性や、

ランドセルを背負った、コナンと同じぐらいの年齢の男児女児。

その小学生達は楽しそうに笑って、愉快そうに会話を楽しんでいる。

ただ、コナンの知らない顔だったため、

上級生だということを感じ^した。

そんな彼らを目に入れながら、

いつもより人混みが少ない道を駆けていくと、

目的地が見えてきた。

コナンは、事務所の階段の前で一旦止まり、

両膝に両手を付き、乱れている息を落ち着かせる。

ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハアと、

落ち着いていく息を整えた後、

久しぶりに見る階段を、ゆっくりと昇って行く。

コツコツと、靴音が壁に反響しながら、

階段の外に抜けていく……。

この時コナンは、いつもと同じ段数の階段が少なく感じていた。

そして、右手を精一杯伸ばしてドアノブを握ると、

(久しぶりだな)と、内心で呟き、扉を開ける。

「ただいま」と、コナンは残り少ない子供の時間で出来る、

少ない挨拶を言った。

そうするといつも通りに、仕事用の椅子に座っている小五郎が、

「おう。おかえり」と言ってくるはずなのだが、

今回は・・・、「?!・・・コナン！お前どこ行ってたんだ?!」と、

コナンの姿を目視した小五郎は、一瞬目を丸くしたが、

すぐに平静に戻り、椅子に座りながら聞く。

コナンは小五郎が驚いている時に、

事務所の中を見渡したが、“彼女”の姿が見えなかった。

コナンはその事を認識すると、小五郎に目を向けて、

聞かれたことには答えずに、彼女のことを聞いた。

「おじさん。蘭ねーちゃんは？」と、子供らしく甘い声で話しかけた。

「オイ！先に聞いたのは俺だ！まず、俺の質問に答える！」

小五郎は席から立ち上がり、入り口のところに突っ立っている、

コナンの正面に早歩きで来ると、見下ろしながら言い放った。

コナンは、自分の慎重の倍以上ある小五郎を見上げながら、

（そうだよな・・・）と、内心で思いつつ、

え・・・と　　と言いながら、理由を頭の中で考えるが、

全く思いつかないため、取り敢えず、

「蘭ねーちゃんがいるときに話すよ。」

蘭ねーちゃんにも聞いてもらはなくちゃいけないから・・・と、
答えた。

小五郎は、「そっか」と、返事を返すと、椅子に戻って腰かけた。

コナンは小五郎が座つたのを視認すると、

「おじさん。蘭ねーちゃんは？」と、

先ほどの質問と同じ質問をした。

小五郎は腕組みをしながら、「まだ学校だ」と、ぶっきら棒に言った。

コナンはその答えを、「そっか」という返事で返すと、

事務所のソファーに腰かけた。

そのまま互いに無言の時間を過ごし、

三十分ほど過ぎると、事務所の扉が開き、

同時に、「ただいま」と、元気且つ優しい声が聞こえた。

コナン、小五郎は、声のしたほうに顔を向けると、

「お帰り」と、息が合っているかのようにハモツた。

事務所に入ってきた彼女は、その“ハモリ”にも驚いたが、

ソファーに座っている少年、江戸川コナンを視界に捉えた瞬間、

「コナン君！」と声を上げて、駆け寄ってきた。

その彼女、毛利蘭を座りながら見上げると、子供らしい無邪気な笑顔に向けて、

「お帰り。・・・そして、久しぶりだね、蘭ねーちゃん」

コナンの声を久しぶりに聞いて、“嬉しさ”が溢れて来たのか、

蘭は涙目を見せながら、「コナン君！どこ行ってたのよ！心配したんだよ・・・」と、

コナンに顔を合わせるように、姿勢を低くしながら言う。

ただその声は、涙声になっていた……。

コナンは今にも大泣きしそうな蘭の目を見ながら、

優しく柔らかい声で言った。

「ごめんね、蘭ねーちゃん。……夕食の時に話すよ。

それに、話したいこともあるから……」

「話したいこと……?」と、蘭は涙声で言い返した。

その言葉に、うん　　と、コナンは頷いた。

その後時間が進み、

夕日も沈んで空が闇に変わった頃、探偵事務所の自宅では、

三人が夕食の机を囲んでいた。

ただ、箸は順調に進んでいたが、三人の・・・特に蘭の表情は固かった。

そして、箸を一旦止めて、コナンは口を開く。

「じゃあ・・・話すね。僕が、今までどこで何をしていたのかを・・・」

その言葉に二人の視線が、コナンに集中する。

蘭はコナン同様、箸を止めているが、小五郎は箸を進めている。

コナンは二人を視界に入れながら、話しだした。

「僕は今まで・・・ある事件の捜査をしていたんだ」

「・・・ある事件って?」

蘭が聞き返す。

「……それは……今は話せないんだ」

コナンは間を置くと、やや下を向きながら答えた。

その答えに蘭は、信じられない
と言つような顔を
して、

「なんで?!」と、半分怒鳴るような、激しい口調で言い放った。

コナンはゆっくりと顔を上げ、蘭の顔を見ると、

「ごめんね、蘭ねーちゃん。

でも……今は言えないんだ……。でも、いつか必ず言うから……。

待っていてくれる?」と、自分勝手と思いつつもコナンは言った。

コナンは、この夕食までの時間をフル活用し、

組織のことを言おうかどうかを考えた。

考えた結果コナンは、言うべきでない
と判断。

理由は、組織が完全に潰れたという保証がないからだ。

組織が目の前で倒れるところをコナンは見た、

だがそれは“見ただけ”で、逃げ延びたメンバーがいるという可能性は、

“零”ではなかった。

実際、阿笠邸での話し合いも、『元に戻るのは組織が全滅したという、
う、

報告を聞いてからにしよう』と、話しあったからだ。

蘭は、コナンが口を開かない

という

ことを感じたのか、

それ以上問わなかった……。

「……本当に……ごめん蘭ねーちゃん。」

自分勝手なのは分かってるよ。でも……」

そこで蘭が言葉を遮る。

「いいよ……コナン君。……でも、”いつか必ず”話してね」

蘭はコナンに顔を向けて話したが、

その表情は歪んで、今にも知りたい
と、

コナンに訴えているようだった。

コナンはそれに気付いているのか、

話したい

という気持ちを押し殺し、

「うん」と頷いた。

因みに、小五郎は話を聞いているのか聞いていないのか、

箸を進めていた。

しかしコナンと蘭には、小五郎の姿は見えていても見えておらず、

箸を鳴らす音も、聞こえていて聞こえていないという、状態になっていた。

そして、コナンはもう一つの事を話し始める。

「じゃあ、もう一つのことを話していい？」

コナンは蘭の顔を見ながら聞いた。

蘭は表情を元に戻して、微笑みながら、

「うん、なあに？」と、優しい声で聞いた。

コナンは、“元に戻った蘭の表情が崩れる”のを覚悟の上で、話し始めた。

「……うん。……実は僕……お母さんの元に戻るようになったんだ」

その言葉を言い終わると、コナンの予想通り、

蘭は表情を崩して啞然とし、小五郎も驚愕したような顔でコナンを見た。

毛利探偵事務所の夜は、まだまだ長い……。

解放：残された時間と伝えなければならない事（後書き）

今回は久々に、小五郎と蘭を登場させました。

さて、これから蘭をどうやって“幸福”にしていくか・・・。

楽しみです。（＾ ＾）

では、感想等お待ちしてまーす！

解放・痛感する悲しみと驚愕の情報（前書き）

今回から、少し書き方を変更します。

どこが変わったかは、“読んでから”ということだ……。

では、ごっせー！

解放：痛感する悲しみと驚愕の情報

現在時刻、二十時。

ここは毛利探偵事務所の居間。

この場所には今、重苦しい空気が流れている……。

この空気を生み出したのは、コナンの一言だ。

コナンの話を聞き終えた小五郎と蘭は、信じられない
というような表情で、

コナンの顔を目を見開いて見た。

視線を浴びている少年は、その視線……特に、正面左から来る蘭
の視線に耐え切れず、

顔を下に向け、胡坐をかいている自分の足と、いつも見ている床を
視界に入れる。

この間にも時間は進んでいる・・・しかし、この三人の時間は止まっている。

時間がどれほど進んだかは分からない・・・。

それは三人にとって、十分、三十分、一時間、

・・・それ以上かもしれない。

しかし、時計の秒針はそれほど音をだしてはいなかった・・・。

その秒針の音が響き続ける、居間の沈黙を破ったのは
蘭だった・・・。

「本当なの？・・・コナン君」

蘭は、コナンの言ったことが、“嘘”だということを信じながら、
恐る恐る聞いた。

コナンは顔を下に向けたまま、

「本当なんだ・・・蘭ねーちゃん・・・」と、

悲しそうな声で言う。

蘭は頭しか見えないコナンに、「どうして・・・そんな・・・突然」と、

コナンに半分涙声も含んだ、寂しい声で途切れ途切れに聞いた。

小五郎は、蘭とコナンを視界に入れながら、静観している。

「うん。さっき、『僕が事件に関わっていた』っていうことを話したよね？」

蘭は、うん、と、声を変えずに返事をする。

「その事件のことを調べている時に、一緒に捜査をしていた探偵さんが、

『危険だから』って言って、僕を無理やりお母さんの元に帰そうとしたんだ……。

僕は『大丈夫』って言ったんだけど、その探偵さんが譲らなくて、

僕からお母さんの携帯電話の番号を聞いて、全部話したらお母さん、

納得しちゃったみたいで、迎えに来ることになったんだ……。」と、
コナンは蘭の顔を見ながら話した。

しかし、蘭の表情を見続けることが耐えられなかったのか、

話の途中でコナンは、再び下を向いてしまった……。

話を聞き終えた蘭は、内心で納得して、息と心を落ち着かせてから、

「いつ迎えに来るの？」と、コナンの頭を見ながら聞く。

コナンは少し顔を上に上げるも、見えるのは、

机に並べられた食事と、小五郎と蘭の首から下までの体、

二人の顔は見えていなかった……。

いや、“見ることができなかった”……。

コナンはその視線で、「分からない。迎えに来る時には連絡が入ることになってるんだ……」

そのコナンの声は、先ほどよりも悲しさが増していた。

おそらく、蘭に嘘のことを話し続けるのが辛いだろう……。

しかしコナンは、これまで何度も思ってきたこと、

(この思いも後少しで終わる)という気持ちを、決して忘れずに耐える。

自分の心に刺さっていく、“蘭の悲しみ”という名の針を、

その思いの強さで取り除く。

コナンがそんな苦しみに合っていると、蘭の口が開きだした。

「そうなんだ……。じゃあ……。もうすぐお別れなんだね……」

蘭は涙声が増しただけでなく、心に膨張し続ける悲しみを抑えられなくなったのか、

目から一筋の涙を零した。

……無理もない。彼女、毛利蘭にとって、江戸川コナンは言わば、“心の支え” 同然だった。

工藤新一が姿を眩ましたあの日から、蘭の心にはポツカリと、穴が空いてしまったのかもしれない。

その穴を埋めたのが、この少年の存在。

蘭は彼を、工藤新一と同じように見ていた。

彼、コナンが傍にいと、自分の大切な人も傍にいと思っていた。
。。。

しかし今の蘭は、江戸川コナンを工藤新一と見ている。

つまり今の蘭の目に映っているのは、江戸川コナンではなく、工藤新一。

本人は認めていないが、蘭は確信していた。

その“大切な人”がいなくなってしまう。。。

その言葉で、彼女の心にはまた、穴が開きそうになっていた。。。

コナンは少しだけ、目線を蘭にほうに向け、彼女の顎まで視界に入る。
れる。

すると、両頬に涙線が見えた。

コナンは、蘭が泣いていることを感じ、心をまた痛める……。

しかし、その痛みを必死に取り除くと、

「大丈夫だよ……蘭ねーちゃん。

新一にーちゃんも、もうすぐ戻ってくるから……。」と、

彼女を慰める。

しかし、その視線は蘭の“顎止まり”で、それから上を捉えてはいない……。

蘭はその言葉に、そうだね

と言つように頷くと、

続けて、「じゃあ、コナン君が行っちゃうまで、一杯思いで作ろうね!」と、

目が震えていたが、精一杯の笑顔でコナンに言った。

コナンは蘭のその優しさを感じたのか、視線を上に向けて、彼女の顔を捉えた。

そこには、目が震えていたが、笑顔でいた蘭の姿があった。

コナンはその顔を見ると、また痛みを心に感じたが、

“彼女の優しさ”も同時に感じたのか、痛みはすぐに消えた。

そしてコナンは、「うん。ありがとう蘭ねーちゃん！」と、力一杯お礼の言葉を言うと、

子供の無邪気な笑顔を作った。

それから三人は、夕食を食べ始める。

いつも通り・・・いや、いつも以上に会話をして、楽しそうに・・・。

しかし小五郎は食べているだけで、会話に加わることは無かった・・・。

彼が内心何を考えているのかは分からないが、

箸を進めながら、正面で蘭と楽しそうに会話をするコナンを、

ジッと見つめていたのだった……。

夕食を食べ終わった三人は、蘭が片づけをし、小五郎は湯に浸かり
に行き、

コナンは居間で漫画を読んでいた。

居間で、蘭の皿を洗う音を耳にしながら、彼女の後ろ姿を見ていた
コナンの元に、

電話が入った。

プルルルルル
じて立ち上がり、

という音に反応し、コナンは漫画を閉

ズボンの右ポケットから携帯を取り出す。

これは、コナン用の携帯だ。

携帯を開くとそこには、ジヨディ先生

とあった。

その名前を確認すると、コナンは居間を歩いて出て行き、自室に入
って通話ボタンを押す。

「もしもし」

「クールキッド。ジヨディだけど・・・今、時間大丈夫かしら？」

携帯からは相変わらず元気な声で、ジヨディが話しかけてきた。

「うん。大丈夫だよ」

その声のコナンは、子供の口調で少し低い声を出して答える。

その返事を聞いたジヨディは、

「今日電話したのは、組織のことなの」

その『組織』という言葉にコナンが反応して、顔が引き締まる。

「何かあったの？」

コナンは恐る恐る聞く。

その慎重な声にジヨディは、コナンが嫌な予感をしている
と感じ、

その予感を振り払うように、明るく元気な声で、

「そんな声出さなくても大丈夫よ。」

実はね・・・組織はもう復活しないってことが分かったの！」

コナンは、それ本当?!

とでも言うような驚いた声で、

「どっぴりっつと?!」と聞く。

その言葉を返した瞬間、電話越しでも手に取るように分かるように、

ジヨデイの声と表情が暗くなった。

「死んだのよ……」

「!」

コナンはその言葉が信じられず、目を見開いたが、すぐに平静を取り戻して、

「詳しく聞かせてくれる?」と、冷静な声で聞いた。

ジヨデイはその冷静な声を受け止めると、コナンと同じく、冷静な声で話し始めた。

「今から三十分ぐらい前に、あの高層ビルを調べていた仲間から報告があったの。」

・・・報告の内容は、『組織のメンバーリストが入ったデータを見つけた』というもの・・・」

コナンは内心で驚きを見せていたが、表には出さずに、

黙ってジヨデイの話聞き続ける。

「組織のメンバーの情報や、組織の詳細のデータは、あの方の部屋にあったパソコンに入っていたんだけれど・・・、

全部消えてしまっていたわ・・・。多分、あの方が消したんでしょ
うね・・・。

でも、組織のベルモットの部屋から、そのデータのコピーと思われるデータが見つかったのよ。

ベルモットがどうやってそんなコピーのデータを手に入れたのかは
分からないけど、

そのデータを元に私達が確認をしたところ、

・・・全員の死亡が分かったわけ・・・」

話し終わるとジヨディは、ハアと、溜息を付いた。

コナンはその溜息を聞いた後、疑問をぶつけた。

「ねえジヨディ先生。今、『全員の死亡』って言ったけれど、

ジンとウォッカも・・・？」

コナンは恐る恐る聞く。

彼ら二人は今頃、牢屋にいるはずだ。

ジヨディは一呼吸置くと、

「ええ。・・・彼らも例外ではないわ」と言う。

コナンは詳細を聞くために、驚きの感情を見せずに聞いた。

「死んだってこと？」

「……ええ。牢屋の壁に……自分の頭を何度も打ちつけてね……」

ジヨディは教えるのを躊躇うように、ゆっくりと答える。

その答えを聞いたコナンは、立ちつくしていた。

隠していた“驚愕”の表情を、剥き出しにしながら。

そんなコナンを、窓から入ってくる三日月の光が、

その表情を強調するかのように照らしていた……。

解放：痛感する悲しみと驚愕の情報（後書き）

さて今作では、蘭とコナンの心の痛みがポイントですが、

『組織のメンバーが全員死んだ』ということもポイントです。

次話はどんなことを書こうかな・・・。

では、評価、ご意見等お待ちしております！（＾－＾）

解放：終結した戦いと果たせなかった目的（前書き）

今日も夏らしく暑い一日ですね……。

私……もうダウン寸前です……。

そんな中書きました。

では、ごうござー！

解放：終結した戦いと果たせなかった目的

「・・・じゃあ、組織のメンバーは全員・・・もっ」

コナンはジヨディの話聞いた後、衝撃のあまり立ちつくしていた。

しかしジヨディの、コナン君？、という呼びかけに反応し、

我を取り戻した。

ジヨディは、コナンの元気が無くなった
声を聞くと、

ような暗い

「ええ」と、彼女も暗い声で返答をした。

コナンは我を取り戻したものの、心の悔しさは消えてはいない。

あの組織のメンバーは、ジンとウォッカ以外、全員死なれてしまった。

コナンの当初の目的は、“彼ら全員を刑務所に送ること”。

そして、“自分の体を取り戻すこと”。

後者の目的は今、灰原が必死に研究を進めてくれているため、

“ほぼ”完遂されたと言っていいたいだろう。

しかし、前者の目的はこれで、“完全に果たせなかった”ことになる。

コナンは、ジンとウォッカだけでも逮捕できたことに、満足していた。

しかし、その気持ちもジョディの話で、

衝撃を受けて砕け散ったガラスのように、バラバラになってしまった……。

「・・・それでコナン君」

ジヨディはコナンに呼び掛ける。

コナンは、バラバラになってしまった気持ちを表現する
ように、

「なに？ジヨディ先生・・・？」と、明らかに元気が無い声で返事
をした。

ジヨディは、コナンの声の調子が気になったが、

敢えてそこには触れずに、話を進めた。

「あなたはこれからどうするの？」

「え？」

コナンはジヨディの質問の意図が分からず、声を上げる。

「あー・・・ちょっと言い方が悪かったかしらね・・・。

つまり、組織が壊滅した今、あなたは どうするか？ってことよ」「

コナンは ジョディ が、何で そんなことを 聞くのか
疑問に 思い、

を

その疑問を正直にぶつけた。

「ねえ、ジョディ先生。・・・何でそんなことを聞くの？」

コナンは先ほどの声とは、打って変わったような、

低く冷静で且つ、ジョディの考えを見透かすような声で問う。

コナンの問いを聞いたジョディは、

五秒ほど沈黙すると、まるで、犯人に尋問するかのような冷徹な声
で、

「あなた・・・何者？」と、逆に問いかけた。

コナンはその言葉を聞いた瞬間、無意識のうちに、「え?」と声を出す。

ジヨディはその声を耳にすると、冷徹な声を維持したまま、

ごめんなさいね

と言って、話を進めた。

「実はね。君のことを調べさせてもらったの」

コナンはその話で、思考がほぼ停止していた。

ただ表情が、驚愕という感情を見せている。

声を発しないコナンを気にせず、ジヨディは話を進める。

「単刀直入だけど、あなた・・・戸籍が無いわね?」

「!?!」

コナンはもはや、驚愕の表情を大きくするしかなかった。

しかし、そのショックかどつかは分からないが、思考が徐々に回復し始めた。

そして、恐る恐る聞く。

「ジヨディ先生・・・その前に一つ聞いていい？」

コナンは子供の声を出しているが、その声は微かに震えていた。

ジヨディは声の震えを感じていたが、

それを無視して、何かしら？ と、返事をする。

「そのこと・・・ジヨディ先生が一人で調べたの？」

コナンは震える声で聞く。

「言い忘れていたわね……。ええ、そうよ。」

これは、飽くまで私個人の調査よ……。」と、

声の調子を変えずに答えた後、先ほどの質問を再度する。

質問を再度されたコナンは、

息をゆっくり吸い込んで、再びゆっくりと吐くいて、気持ちを落ち着かせた後、

「ジヨディ先生……。」と、彼女と同じく冷徹な声で呼んだ。

その声には、“子供らしさ”は無い……。

ジヨディは、なに？ と、聞き返す。

「その事は……、今は触れないでくれる？」と、コナンは頼む。

「……。」

ジヨディは黙り込む。

そのまま二人の間に沈黙が流れ、

外を走る車の走行音とエンジン音だけが、部屋に響いた。

その、どれくらいの長さだったか分からない沈黙を、

ジヨディの返答が破る。

「・・・分かったわ」

「え?! 本当?」

コナンは、納得してもらえないと思っていたため、

思わず聞き返す。

「ええ。納得はできないけれど、あなたにも理由があるだろうし……」

それに今回は私一人の調査、FBIとしてではないわ……。

だから……ここまでにするわ」と、

ジヨディは普段の明るい声で答えた。

コナンは、「ありがとう」と、安堵の声で言う。

「じゃあ、夜遅く悪かったわね。……おやすみ」

「うん。おやすみ、ジヨディ先生」

コナンは子供らしく言い返すと、二人は『切』ボタンを押すと、

携帯を閉じてポケットにしまった。

携帯をしまったコナンは、顔を窓に向けて、

正面上空に見える三日月を視線に捉える。

そのまま、フウ

と溜息を付き、部屋から出て行った。

部屋から出ると寝巻姿の小五郎が、机を前にして胡坐をかきながら、

「おお、コナン。やっと電話が終わったか」と、

正面のコナンに視線を合わせて言った。

コナンは、うん

と返事をして、

机越しに小五郎を正面に捉え、

「蘭ねーちゃんは？」と、子供らしく聞いた。

小五郎は、「蘭は風呂だぞ。蘭が出てきたら、お前もさっさと入っちゃまえよ」と、

コナンに言った後立ち上がり、コナンの左脇を通って自室に入った。

その後、蘭が出てきた後コナンが入り、そのまま毛利家は就寝についた。

「行ってきまゝす」

翌日、窓から入ってくる、春の温かい太陽光に照らされながら起床したコナンは、

小五郎、蘭と共に朝食を済ませ、蘭と一緒に元気よく出かけて行った。

蘭とコナンはいつも通りに、並びながら歩いている。

二人は正面を向き、前を歩いている黒のスーツ姿の男性、

自分達とは反対側に走っていく、腕時計をやたら気にしながら駆けて行く男性、

同じ帝丹高校の制服を纏った女子学生。

その日常的な光景を目にしながら、二人は笑いながら会話をしている。

お互い、残り少ない時間を貴重に使ったために、今できる精一杯に会話をしている。

しかしその内容は、外まで聞こえる店内放送や、絶えず聞こえる車のエンジン音で、

かき消されている。

そんな会話をしている内に、目的地までの距離は近づいていき、

二人の後方から、「おーい、コナン君」と、子供らしい元気一杯の声が聞こえてきた。

蘭とコナンは、その声を耳にすると、立ち止まって振り向いた。

「おう。おはようオメエら」と、コナンが視界に入ってきた、

子供四人に挨拶をした。

それに続き蘭も、「おはよう、皆」と、明るい声で挨拶をする。

駆けてきた四人は礼儀正しく、「おはようございます！」と、蘭を見て挨拶を返す。

その声は蘭とコナンだけでなく、傍を通る通行人にも届いていた。

聞こえた通行人は、彼ら四人に顔を向けて、感心する
ように笑顔を向けた。

その四人、小嶋元太、円谷光彦、吉田歩美、灰原哀は、周りからの視線を気にせずに、

コナン、蘭と共に歩き出した。

しかし、二歩ほど前進したところで、またしても後方から、

「らん」と、声がした。

一行はその声に反応して再び振り向くと、

そこには、息を多少乱した園子が立っていた。

「あ、おはよう園子」

蘭は息を乱している園子の顔を見ながら、

微笑んで挨拶をした後、コナン達少年探偵団も、

「おはようございますー!」と続く。

園子は息を落ち着かせた後、

「ガキンチョ共、おはよう」と、無愛想に挨拶を返す。

その態度に探偵団は“ムッ”としたが、

園子は無視して学校へ向かう。

その園子に蘭や探偵団も続く。

通り過ぎて行く人々をやり過ごしながら、

彼ら七名は学校へ向かい歩を進めている。

しかし彼らは、“普通”に歩いているのだが、

自然と蘭と園子、元太と光彦と歩美、コナンと灰原と別れている。

そして、一番後方を並んで歩いているコナンと灰原は、

“お決まり”となっている会話を始める。

「なあ、灰原。解毒剤の研究はどうだ？」

コナンは左隣で、自分と歩調を合わせて歩いている灰原を、

横目で見ながら聞いた。

それに灰原は、横目でコナンの目を見ながら、

「ええ。順調よ」と、簡潔に答える。

「後どのくらいで完成しそうだ？」

「正確な時間は分からないけど、大体一週間ぐらいかしら・・・」

灰原は顎に右手を当てながら、考え込むように答えた。

コナンは、そうか、と言って、正面の元太や蘭達を視界に入れた。

灰原は横顔のコナンを、顔を向けて見ながら、“ある事”を聞いた。

「ねえ、江戸川君」

その声にコナンは再び、ん？
と云って、灰原を横目で見る。

灰原は目線を合わせながら、変な事聞かかもしれないけど
と言った後、

目線を外して正面を見て続ける。

「江戸川君。・・・元に戻りたい？」

その言葉にコナンは、ん？
と、キョトンとした後、

「もちろん。・・・何でそんなこと聞くんだけ？」と、

答えた後に灰原に聞いた。

灰原は視線をそのままに、別に
と言った後、

早歩きで元太達の中に入って行った。

取り残されたコナンは、灰原の言ったことの意味が分からずに、

そのまま学校へ向かうのだった……。

解放：終結した戦いと果たせなかった目的（後書き）

今作で“ようやく”進展があっただ感じですね。

ほとんど進展が無いのは、

細かい描写をしているせいなのですが、

それを除いて物語だけを進展させると、“面白み”が欠けると思うので、

そこところは、ご了承願います・・・。

では、感想等待ってまーす！

解放・近づきつつある思いと選択すべき未来（前書き）

本日二話目更新です。

いや〜またまた暑くなってきた〜・・・。

暑さはホントに苦手なんですよ、私。

皆さんはどうですか？

では、どござー！

解放・近づきつつある思いと選択すべき未来

「じゃあオメエらまたな！」

「気を付けてね！」

学校が終わり、帰路についていたコナン達五人は、

元太、光彦、歩美と別れようとしている。

正面のコナンと灰原の声に光彦が、

他の二人の言葉を代弁するように、「分かりました。では、また明日！」と、

元太、歩美と同じく、手を振りながら返事をした後振り向いて、

二人と共に、茜色の夕日に進んで行った。

見送ったコナンと灰原も振り向き、夕日に背中を照らされながら、正面下に縦長に出来ている、自分達の影を視界に入れながら、歩いて行った。

彼ら二人の間にしばらく会話は無かったが、

灰原がコナンのことを、“チラチラ”見ながら歩を進めていた。

その視線に気付いたのか、コナンは歩きながら視線を左に向け、

灰原の目を捉える。

灰原は突然向いたコナンの視線に驚き、視線をすぐに逸らすか、

コナンはそれを見逃さない。

「何だよ……」と、コナンは聞いてみるが、

灰原は顔を少々下に向けて、別に

と答える。

しかし、彼女の様子がおかしい事に気付いたコナンは、聞くことを止めない。

「どうしたんだよ？オメエ・・・なんか今日変だぞ。

朝も“あんな事”聞いたりして・・・」

コナンが言う『あんな事』とは、

灰原が言った、『元に戻りたい？』ということだ。

「・・・」

灰原は顔を下に向けたまま、無言の返事をする。

その灰原にコナンは、今日学校で考えた理由を話すことにした。

「なあ・・・あのさ、オメエが言った“あの言葉”の意味って、

解毒剤の副作用とか？」

言い終わったコナンに灰原は、顔を下に向けたまま、

目だけをコナンに向ける。

そして、「何で……そう思っの？」「と、聞く。

「もしかしたらただけど……、例えば元に戻ったら何かしらの副作用が働くとか……。」

それでオメエは、その副作用を出さないために、

俺が戻るのを止めようとしている……とか？」

コナンは髪に隠れて薄っすらと見える、

灰原の目を見ながら推理したことを話した。

聞き終わった灰原は、ゆっくりと顔を上げて、

右隣りを歩いているコナンに、ギリッ
の目つきで睨む。

と、少々怒り

コナンはその目つきを見て、さっきの推理は間違っていたどころか、

彼女の怒りを買ってしまったことを“直感”で感じると、

アタフタしながら、「あ、いや・・・さっきのはあくまで推理だから・・・、

その・・・間違ってたみたいだな・・・すまねえ」

その謝罪の言葉を聞いた灰原は、許したのかどうかは分からないが、

普段のクールな表情に戻り、「そんな副作用ないわ・・・。

今作っている解毒剤は“完璧”よ。副作用なんてないわ」と、

表情と同じくクールな声で答えた。

それを聞いて安心したのか、コナンは、そ、そうか・・・と、

安堵感に包まれた。

そして、フウ　　と、一息付いた後改めて問う。

「じゃあ、何なんだよ・・・」

それを聞くと灰原は、視線を正面に戻して、「何でもないわ・・・」と、言った。

「・・・」

コナンは、（これ以上聞いても無駄だ）と思ったのか、

それ以上聞かずに、無言で阿笠邸に二人は着いた。

因みに、コナンがここに来たのは、

“江戸川コナンと灰原哀を消す理由を話しあうため”、である。

毛利家の人達には朝食の時に、博士の家に帰りに寄る　と、

伝えてあるため、心配を掛けることは無い。

「ただいま」

そう灰原が言いながら、玄関の扉を開けると、「邪魔するぜ」と、

コナンも続いた。

二人の声の家内中に届いた後、中から老人の声で、

「お帰り哀君」と、返事が返ってきた。

その老人、阿笠博士に続き、「おかえり〜」と、

ソファーに仰向けで寝ころんでいた服部が、顔を上げて迎え、

その服部の反対側のソファーに、

腰かけて姿勢を正しながら本を読んでいる白馬も、

「お帰りなさい」と、一旦顔を上げて言った。

コナンと灰原は、その二人の声を耳にしながら歩いて、

白馬が座っているソファーの、

肘掛の部分に立て掛けるようにランドセルを床に置く。

その後、コナンと灰原は台所に向かってコーヒーを淹れて、

カップを右手に持ちながら、コナンは白馬の左側に、

灰原は姿勢を戻した服部の左側に腰かけて、

息が合ってるように、カップに同時に口を付けた。

そして、カップを眼前の机に置くと、

コナンは服部と灰原を視界に入れながら、

さてと　　と、口を開く。

「俺がここに来た理由は、俺達二人の消し方だ」

コナンが話始めると、パソコンをいじっていた阿笠も含めた、

四人の視線がコナンに集中する。

コナンはその視線を受け止めながら、

「俺は・・・やはり転校という方法が一番だと思う。

・・・皆はどうだ？」と、意見を言った後、顔を少し右に向けて、

白馬も視界に入れながら意見を聞く。

すると、間を置かずに服部が、「俺はその意見に賛成や」と即答した。

その服部に続き白馬も、「僕も工藤君の意見に賛成ですね」と、即答する。

コナンは服部と白馬の意見を聞くと、白馬の顔を見た後、

服部の顔を見て、深く頷いた。

頷いた後コナンは、灰原に視線を向け、

「灰原はどうだ？」と聞く。

灰原はコーヒーを一口飲んだ後、コナンの目線に合わせて、

「私も工藤君の意見に賛成……」。

でも、問題は私ね」

灰原が後に言ったことに、服部が疑問を持ち、

左に腰かけている灰原に顔を向け、「何が問題やねん？」と、尋ねた。

灰原は、カップを右手に持ちながら目を瞑って、

「同時に転校すればバレるかもしれないでしょ……？」

私達二人には何かあるって」と言った後、カップを口に付ける。

服部は、なるほど　　と言うように、顔を正面に戻して頷いた。

コナンは再度、服部、白馬、灰原の三人を視界に入れると、

「ああ。……問題は時期だな……」と言った後、

右手にカップを取り、一口飲む。

「そうですね。さすがに工藤君が転校してから、

二日後とか三日後は怪しまれますから、

最低でも一週間は間を置く必要があるでしょうね……」

白馬はここで、腕を組み考え込む。

と、ここで灰原が口を開いた。

「ねえ……。さっきから話が進んでいるけど、

私……“元に戻る”なんて言っていないわよ」

「……」

その言葉に四人の視線は一気に彼女に集中する。

視線を浴びている当の本人は、目を瞑りながらコーヒートを飲んでい

「ど、どいごじとじゃ?! 哀君……」

今までキャスター付き椅子に腰かけ、四人の会話を静観していた阿笠が、

信じられん
と云つような表情で、灰原の傍に駆け寄つて言い放った。

その阿笠の問いに間を置かず、コナンも灰原に聞く。

しかしコナンは、阿笠と違い、“冷静を保って”灰原に聞こうとする。

「何でだよ?」

コナンの問いを受け止めた灰原は、カップを机にゆっくりと置き、

「元に戻って……私、どうすればいいのよ」と、腕組みをしなが
ら、

目を瞑って答える。

「・・・」

それを聞いた四人は意味を理解したのか、言葉が出てこなかった・・・。

暫^{しば}しの沈黙の後、コナンが今だに腕組みをして、

目を瞑っている灰原の顔を見て、

「元に戻ったら、居場所が無いからか・・・？」と話しかける。

そのコナンの言葉に、服部、白馬、阿笠の三人は、

灰原の顔に視線を向ける。

灰原はゆっくりと目を開けると、誰にも視線を合わせずに、

正面一点を見ながら、「そうね・・・それもあるわ」と、“普通”

に答える。

コナンは灰原の言ったことに疑問を持ち、

その疑問を聞いた。

「『それも』ってどういふことだよ……」

「実はね……この姿の生活も気に入ってるのよ」

灰原はそう言った後、口元を徐々に緩めて、少し笑みを作った。

自分の言ったことを表現するように……。

その表情を見たコナンや、静観している三人は、灰原の気持ちを察した。

。彼女はこのことを心から嬉しく思っている
と……

灰原はそんな四人の気持ちに気付かず、カップを右手で取り、

「それに、仮に戻ったとしても、私には居場所が無い……。

でも、この姿ならある。居場所も、仲間も……ね」

珍しく“素”になった灰原は、言い終わった後コーヒーに口を付けた。

コーヒーカップから口を外した灰原を視認した阿笠は、

先ほどとは違った冷静な態度で灰原に話しかけた。

「居場所ならあるぞい、哀君」

その言葉に灰原だけでなく、服部や白馬、コナンも阿笠に顔を向けた。

「君が元に戻ってもワシが預かるし、

学校だって新一と同じ学校に行けばよからう……。

まあ、確かに、同じ町に住んでいても、

行く場所が違えば世界は変わってしまうじやろうが・・・、

その新たな世界で新しい仲間を作ればよからう。

そうすれば、そこが君の居場所になるはずじゃ」と、笑って話かけた。

話しを聞き終わった灰原は、顔を元に戻し黙りこむ。

服部、白馬、コナンは灰原に顔を向け、彼女の返答を待った・・・。

解放・近づきつつある思いと選択すべき未来（後書き）

今回は、コナン（新一）と灰原（志保）の心を少し接近させてみました。

さてと、ここから“鈍感”なコナンを、
どういう方法で恋心に気付かせるか・・・。

では、評価、感想等お待ちしてまーす！

解放：謎の探偵（前書き）

今日は珍しく、三話目の投稿です！

え、今回はサブタイトルがシヨボイですが、そこはスルーしてくださいw。

これ以外思いつかなかったもので・・・。

では、本編どうぞ！

解放：謎の探偵

チク・・タク・・チク・・タク・・

夕日が作りだす美しい橙色の光が、

街を照らして美しくし、人を照らして一日の終りが近いことを告げる。

そして、ここ阿笠邸にもその光は届き、

窓から入ってきた“美”という太陽光が、

家内の家具や電子器具を、美しい芸術に見せる。

しかしこの家には、その芸術に相応しくない沈黙が流れていた・・・。

その沈黙を表現するように、時計の秒針が響き続ける。

その、時を刻む音が聞こえるか聞こえないかは分からないが、

ソファーに座っている三人と、一人の少女の左側に立つこの家の家主、

阿笠博士が、その少女に視線を浴びせている……。

その視線を浴びている少女、灰原哀は、

ソファーに座りながら顔を下に向け、考え込んでいる様子だ。

そして、彼らにとって長かったのか短かったのか分からない沈黙が、

顔をゆっくり上げて正面を見て、フウ
と一息付いた灰原が破った。

「……そうね。考えておくわ」と、微笑んで考えを言った後、

コーヒーを飲み、空になったカップを持って台所に向かった。

その小さい後ろ姿を見ながら、四人は安心した
ような
笑みを浮かべる。

「さて、工藤。毛利のねーちゃんの事はどうなったんや」

服部は正面に座るコナンに顔を向けて、視線を合わせて言った。

阿笠も白馬も、その服部の問いに反応して、二人を視界に捉える。

コナンは表情と声を変えずに、

「ああ。一応、俺が近々いなくなることは伝えたよ。

ただな・・・」

そこでコナンが、目をやや下に向けて話を中断する。

その変化に気付いた三人はコナンを注視して、

二人の言葉を代弁するように、白馬が尋ねる。

「『ただ』・・・何ですか？」

コナンは、そう聞かれる

のを待っていたかのように、

口を再度開いた。

「おっちゃんだよ・・・」

ここで阿笠が、灰原が座っていた場所に腰かける。

しかし、白馬と服部はコナンに集中しているため、

そのことには気を配らない。

「毛利君が？」

腰かけた阿笠が、コナンの顔を見ながら聞き返す。

コナンはその言葉を受け止めると、三人を視界に入れて、

「ああ。おっちゃん、俺がいなくなることや、

俺がどうして連絡しなかった理由を話している最中、

ほとんど表情を変えずに、平気で食事を取っていたんだ……。

一言も話さずにな……」

「それは、君に気を使っているからじゃないのかね？」

阿笠は視線をそのままに、自分の考えを言い放った。

「そうかもしれないねえ……。でもそうだとしたら、食事の手ぐらい止めるだろ？」

阿笠はコナンの言ったことに、素直に頷いて納得する。

そして頷いた後、「じゃあ、どうして・・・」と、続けた。

コナンは二秒ほど時間を置き、

「それに、今までのことだってそうだ」

「今までのこと?」

阿笠はコナンの言いたいことが分からないように、

首をキョトン

と傾けながら、聞き返す。

一方、服部と白馬は共に、腕組みをしながら考え込んでいる。

「ああ。博士も知ってるように、俺は今までおっちゃんを麻醉銃で眠らせ、

“眠りの小五郎”という名探偵を演じてきたよな?」

「ああ・・・」

阿笠はまだ話しが見えないようで、曖昧な返事をした。

「おかしいじゃねえか」

「な、何がじゃ？」

「だってよ。おっちゃんはその事何も知らねえんだぜ。」

普通思うよな？』何で自分の意識が無いときに事件が解決してるんだ』って」

ここで阿笠は話しが見えてきたのか、「た、確かに・・・」と、

目を少し開きながら納得した。

その阿笠の表情を無視して、コナンは続ける。

「まあ、一度や二度なら偶然と思ってもおかしくないかもしれねえ・・・。」

でも、今まで俺が撃ち込んだ数は何百発っていう膨大な数だ。

いくらおっちゃんか迷探偵でも、さすがに気付くだろう。

・・・何かがおかしいってよ・・・」

阿笠は、“事の重大さ”というものを理解し始めたのか、

ゴクリ と、唾液を飲む音が聞こえた。

「そして思うだろうな。」

自分がそういう現象を起こし始めたのは、江戸川コナンが現れてから。

だから、“あの少年には何かある”ってな

コナンはここまで話し終わると、顔を下に向けて、フウと一息付く。

そして顔を上げ、阿笠、服部、白馬を視界に再度捉えると、

口を開いて続きを話し始める。

だがその前に、阿笠がコナンの顔を、

血相変えた表情で見ながら、考えを言い放った。

「じゃ、じゃあ毛利君はまさか、君の正体を知ってるってことか？」
「！」

「え?! あ、ああ……まあ、確証はねえが、可能性はあるな……」
「とコナンは、」

突然話しだした阿笠に少し驚き、彼に顔を向けた後答えた。

「もしそうならば、昨日なぜおっちゃんが、」

“一言も話さなかった”理由が頷ける」

そうコナンは言い終わると、顔を戻して三人を視界に入れる。

コナンが言い終わると、阿笠は“ますます”驚いた表情を見せ始め、「し、しかしなぜじゃ。なぜ毛利君はその事を君に聞かないんじや？」と、

やや早口でコナンに問う。

コナンはそれを冷静に受け止めると、さあな　と続ける。

「それに、これは俺の“勝手な思い込み”ってこともある。

もしかしたらおっちゃんは、本当に何も気付いてねえのかもしれないしな。

まあ、もしそうならば、昨日の“あの”態度が説明できねえけど・・
「・

「・

阿笠はもはや、言葉が出ない状態である。

話しに付いていけないのだろう・・・。

「ほんなら、どないすんねん？工藤」

ここで服部がようやく口を開いた。

コナンは視線を服部の目に合わせると、

「『どっつて？』と、聞き返した。

服部はその言葉に間を置かずに、

「要するに、あの事務所帰るんか？うちゆうことぢや。

・・・俺らも一緒に」と、再度コナンに問いかける。

コナンは顔を下に向けて腕組みをし、暫し間を置いた後、

顔を上げて服部の顔を捉えると、

「そうだな。一旦俺達三人で事務所に戻ろう。」

蘭にも、オメエらが無事ってことを伝えなきゃな」

「そつやな」

「そつですね」と、コナンが言い終わった後、

服部と白馬が了承の返事をする。

それを耳にしたコナンは、机の上に置いてあるコーヒーカップを右手で取り、

残り少ないコーヒーを一気に飲みすると、

机の上に置いて立ち上がり、立て掛けていたランドセルを左手で取って背負うと、

「行くぞ。白馬、服部」と声を掛け、

二人は共に、「ああ」と返事をした後、コナンの後ろに付いていき玄關に向かった。

阿笠は、「気を付けてな。哀君にはワシから伝えておくぞい」と、後ろ姿の三人に声を掛けた。

しかし、その声を耳にしたコナンが、土足を履く手を止めて、

阿笠のほうに振り向く。

「そういえば灰原どこに行ったんだ？」

コナンの思わない発言に、阿笠、服部、白馬は、ハア？
と言うような、

呆れた表情を見せた後、阿笠が話した。

「何を言っとなるんじゃ。疾とうの昔に地下室に行ってしまったぞい」

コナンは何時だったか思い出せず、阿笠の呆れている表情を見て、

「いつだよ」と、言い放つ。

その言葉に間を置かずに、阿笠は答えた。

「君が『俺が近々いなくなることは伝えたよ』と言った時じゃよ」と、

やや笑みを浮かべながら、大丈夫か？

と言っよう

な表情で、

コナンを見ながら言った。

コナンは顎に右手を当てながら、灰原が地下室に入っていた記憶を探すが、

思い当たらない。

どうしても、記憶が浮かんでこないコナンは、

両脇に立っている服部と白馬に、「本当か？」と聞く。

聞かれた二人は、本当
をしなから頷く。

とでも言うように、腕組み

それを見たコナンは、ハハハ

と、笑って誤魔化する。

阿笠、服部、白馬は、やれやれ
した後、

と言うような表情を

阿笠が、「じゃあな」と言った。

それを耳にした三人は、「お邪魔しました」と言って玄関から出て
行き、

阿笠邸内と同じく、橙色に染まっている外に歩き出した・・・。

解放：謎の探偵（後書き）

さて、今作は私が抱える、“小五郎の謎”を描写してみました。
実際のところどうなんでしょうね？

私は気付いてもおかしくないと思うのですが・・・。

では、評価、ご意見等お待ちしております！

解放・迫る幸福の時間と悲しみの時間(前書き)

えゝ皆さん、おはようございます(^ w ^)。

昨日から私、“活動報告”なるものを書き始めました。
良かったら覗いて見てください。

まあ・・・大したこと書いてありませんけど・・・w。

では、どござー！

解放：迫る幸福の時間と悲しみの時間

「ただいま」

阿笠邸から毛利探偵事務所に着いたコナン達三人は、

事務所の扉を開け、“子供”を忘れずに挨拶をした。

そのコナンの声に、相変わらず暇そうに、仕事用の椅子に腰かけている小五郎が、

「おう、お帰り」と、言った後に、

コナンの後ろから、「お邪魔します」と入ってきた二人を目にする時、

「お、オメエら！」と、目を丸くしながら驚きの声を上げた。

コナンは小五郎のその声を無視して、事務所内を見渡すと、

蘭がいないことに気づき、「おじさん。蘭ねーちゃんは？」と、

子供らしい高い声で尋ねた。

小五郎は椅子に座ったまま、「蘭なら上だ。メシ作ってるからな」と、

コナンの顔を見て言った。

コナンは、ふん　と、頷く。

それを聞いた小五郎は、コナンの左側に並んで立っている、

服部と白馬を見て口を開く。

が、ここで、「服部君?!白馬君?!」と、

事務所の入り口の外から、女性の声が聞こえた。

その声に事務所内の四人の顔が、一斉に入口に向いた。

そこには、信じられないものでも見た
をした、

と言つような顔

驚きの表情の蘭が立っていた。

服部は蘭を視認すると、「久しぶりやな。ねーちゃん」と、微笑みながら言った。

白馬も服部に続き、「お久しぶりですね」と、微笑みながら、

軽く会釈して言った。

その声を聞いた蘭は、服部と白馬に歩いて近づくと、

「良かった。無事だったのね」と、まるで自分の事のように、

心配した表情で見ながら言い放った。

その蘭の表情を見るなり服部は、

「『無事』って、俺ら何も危険なことしとらんで。ねーちゃん」と、

ここに来るまでに考えた、“嘘”を話す。

白馬も服部に続き、「ええ。でも、ご心配をおかけしたようで……すみませんでした」と、

微笑みを崩さずに謝罪する。

蘭は、この二人の返答に疑問を持ち、その疑問を隠さずに聞いてみた。

「ホントに？服部君達も、コナン君と同じことしてたんじゃないの？」

蘭は服部と白馬を視界に入れながら、二人の嘘を見抜くように言い放った。

しかし、二人は表情を全く崩さずに、首を横に振る。

さらに、白馬と服部の後ろに立っているコナンが、

二人を助けるように、「違つよ。蘭ねちゃん」と、

話しに割り込む。

その言葉に蘭は諦めたのか、納得したのかは分からないが、

表情を“いつもの彼女”に戻して笑みを作ると、

まあ、いいわ と、続き、

「白馬君。夕食の準備手伝ってくれる？」と、白馬の顔を見て言う
と、

白馬は、当然です とでも言つよつた、「はい」と返
事をした後、

二人は事務所を出て、階段を昇って行った。

その後久しぶりに、五人で食卓を囲み、入浴して

就寝に付いた。

そして、学校に行き、楽しい会話をし、食事をして寝るといふ、

一日を七日ほど過ごし、あっという間に一週間が経過した……。

今はその日の朝。

いつも通りの朝……、太陽の温かい光が地上に捧げられ、

会社員や、制服を着た生徒達が登校する。

遠い目的地に向かうため沢山の車が、エンジン音を鳴らして走る。

そんな朝だった……普通の人には……。

ここ毛利探偵事務所では、寂しさと温かさが混じった、複雑な朝を迎えた。

その“複雑な朝”を作った原因は昨日のこと……。

昨日、時刻二十二時。

夕食、入浴を終え、就寝に付こうとしたコナンの元に、一本の電話が入った。

床に敷いたベットに入ろうとしたコナンは、

枕の右側に置いてあるコナン用の携帯が、音と光を発したことに気付く。

「なんだ？こんな時間に誰だ……？」と、寝むそつな目を右手で擦りながら、

携帯を左手で取る。

因みに小五郎は、たかいびき高軒をかきながら、寝室のベットでグッスリ寝て

いる。

白馬と服部は、その鼾いびきがうるさいせいで寝付けず、眠くなるまで居間で過ごしている。

蘭も小五郎同様、今頃夢の中だ・・・。

コナンは携帯を開いて、相手の名前を視認すると一驚いっせいきょうした。

表示されていた名前は“灰原哀”。

コナンは、彼女がこんな夜遅くに電話をしてくることが、珍しいということを知っているため、

“よほどの事”があったということを探した。

そして、今の自分達にとって、その“よほど”は大体見当が付いた。

コナンは部屋に小五郎が寝ているため、電話に出るのは気が引けたが、

小声で話せば大丈夫

と思い、

胸に期待を膨らませて通話ボタンを押し、左耳に当てた。

「もしもし」と、コナンは小声で口を開いた。

「私よ」と、コナンの言葉に間を置かずに、携帯に表示されていた人物の声が聞こえた。

「灰原。どうしたんだ？こんな時間に？」とコナンは、

灰原が言いたい事は予想できていたが、敢えて気付かないフリをする。

しかし、灰原はそれを見透かしたかのように、

「『気付かないフリ』なんてする必要ないんじゃない？

・・・分かってるんでしょ？私がこんな時間に電話しないことぐら
い」

コナンは、（さすがだな・・・誤魔化しは通用しねえか・・・）と、
内心で感心しながら、

「じゃあ、まさか・・・」と言うと、灰原が先を話し始めた。

「ええ。たった今完成したわよ。私達の体を侵している毒を浄化する薬が・・・」と、

嬉しそうな声を混じらせながら、クールな声で言った。

「ほ、本当か?! 灰原!!」と、予想していたとはいえ、

実際に聞かされると“喜び”という感情を抑えられなかったのか、

無意識に大声を上げてしまう。

「ちょっと、そんな大声ださないでくれる?」

「博士に頼んでくれないか？」

ここで灰原が、コナンの頼み事を予想して口を挟む。

「転校手続きのこと？」

コナンは、「・・・ああ」と、笑いが混じった声で、

再度灰原へ、感心の気持ちを込めて言った。

「そっちのほうは任せて。明日、学校に連絡するわ」

灰原はいつも通りクールな声で返答する。

しかし彼女の内心は、コナンの“笑いが混じった声”を聞いて、

自分も嬉しくなっていた・・・。

「分かった。じゃあ、おっちゃん達には俺が話すよ」と、灰原の内心に気付かずに、

じゃあな
と言っ
て、灰原から、ええ
とい

う返事を聞いた後、
電話を切った。

電話を切ったコナンは、あの時と同じく窓の外を眺める。

そこには、漆黒の夜空に星が点々と輝いており、視界の中心には、
黄金色に輝く満月が、丸丸とした堂々たる姿を、

“夜の帝王”の如く晒していた。

その満月を眺めながら、（ようやく……ようやくこの時が来たんだ）と、

喜びと嬉しさが丸出しになっている笑顔を浮かべながら、

今までの……組織との戦いを思い出していた。

トロピカルランドでの事、杯戸シティホテルのこと、

埠頭でのベルモットとの戦い・・・、

その一つ一つを細かく且つ、鮮明に。

「長かったよな・・・」と、無意識のうちにコナンは、

目に映る月を見ながら呟く。

そして、明日の朝話す事を頭の中でまとめて、夢の世界へ旅立った。
・・・。

解放・迫る幸福の時間と悲しみの時間（後書き）

え〜と、今作の反省点は、

“物語の都合上、時間が一気に飛ぶことですね”。

皆さんもしかしたら、付いていけなかったかもしれない・・・。

本当は、一日一日を細かく書いていくつもりだったのですが、そんな事をしていると、いつまでも新志の物語が始まらないので、こういう方法を取りました。

では、評価、感想等待着ってまーす！（^ ^）

解放：子供らしい大人と大人らしい子供達（前書き）

本日二話目更新します！

あともう少しで、新一の物語・・・。

どんな物語にしようかな・・・。

では、ごうぞー！

解放：子供らしい大人と大人らしい子供達

「え?!じゃあコナン君。今日お母さんが迎えに来るの?」

蘭はコナンが言ったに、驚きと動揺を隠せずにコナンに聞き返す。

今、毛利家の人々は、朝食の机を囲んでいる。

朝食を食べ始めて、いきなりコナンが喋りだし、こういう状況になっっている。

コナンは左隣で、自分に顔を向けている蘭に、寂しい表情を見せながら、

「うん。昨日の夜電話があっただ...」。

今日の夕方、学校が終わったら迎えに来るって」

コナンが話し終わると蘭は、

この日が来てしまったのね

と云うような表情を浮かべな

がら、

コナンの顔を彼を同じく、寂しい表情と目で見つめ返す。

コナンは彼女のその表情を見るなり、

「だ、大丈夫だよ、蘭ねーちゃん。またいつか会えるよ」と、

咄嗟に思いついた“嘘”で、蘭を安心させようとする……。

そのコナンの言葉を信じたのかどうかは分からないが、

蘭は少し笑みを作り、「うん。そうだね……」と、

表情は変わっても、寂しいという感情剥き出しの目で答える。

コナンはその“目”を見て、蘭が全く安心してないことを感じたが、

そこには触れず、止まっていた箸を動かし始めた。

蘭もコナンに続き、箸を動かす。

一方、コナンの正面の小五郎は、箸を進めながら、コナンと蘭の事をジッと見ている。

コナンの右正面の服部と、左正面の白馬は、

食べながら横目で二人の様子を静観している。

そして現在。

毛利探偵事務所を発ち、いつも通りの通学路を通り学校へ向かう。

しかし、一つだけ違うことがあった。

それは、蘭が一言も話さなかったことだ……。

コナンは左隣を、自分の歩調に合わせて歩く蘭を、

時々横目で、チラチラ
気にしていた。

と見ながら、彼女の様子を

その表情は、探偵事務所を出た時から全く変化が無く、

普段の明るい彼女とは間逆に、暗く寂しい表情をしていた……。

おそらく、今朝のことの整理が付いていないのだろう……。

無理もない……。

前から話していたとは言え、突然だったのだ……。

こうなるのも仕方ない……。

コナンは蘭の様子を気にしながら歩く。

しかし、言葉は掛けられない。

……いや、掛けづらい。

そんな沈黙な時間を歩いていくと、

あっという間に少年探偵団と合流。

蘭はさすがに、「おはよう」と挨拶をしたが、

その表情は曇ったままだったので、

探偵団の四人が蘭の様子が違うことに気付くのに、時間はいらなかった。

しかし、蘭にはその事を直接聞かず、

後から来た園子と別れた後に、コナンに聞いてきた。

「あのコナン君」と、コナンの左隣に歩いている光彦が、

彼らしくない不安な表情を浮かべて、

自分より少し背が低いコナンを、見下ろしながら話しかけた。

コナンは光彦に顔を向け、「蘭ねーちゃんのことか?」と、

考えを見透かしたように言った。

光彦はそれに驚きもせず、ええ

と、話しを続けた。

「どうしたんですか? 蘭さん」

その言葉に続き、コナンの右隣りを歩いていた歩美も、

光彦同様似合わない、不安な表情をしながらコナンに顔を向け、

「うん。変だったよね・・・蘭お姉さん」

その歩美に、光彦の左隣を歩いている元太も、

「ああ・・・全然違ったよな・・・」と、彼だけは不安な表情では

なく、

首を傾けて疑問の表情で続ける。

因みに、歩美の右隣りを歩いている灰原は、

横目でコナンの顔を見つめながら静観している……。

元太、光彦、歩美の三人に聞かれたコナンは、

その問いには直接答えずに、それよりも
と、話しを
変える。

「実はオメエらに……、言わなきゃならねえことがあるんだ……
」と、

コナンは正面に見えてきた、帝丹小学校を視界に入れながら、

今朝も見せた寂しい目をして言う。

探偵団の三人は、コナンの目や雰囲気で察したのか、

「何ですか？」と、光彦が濁声で話し掛ける。

元太、歩美も言葉は発しなかったが、“良い予感”はしないのか・
・、

言わないで

と言うような表情でコナンを見ている。

灰原は先ほどと同じく沈黙を守っている……。

コナンは三人の顔を見ず、迫りつつある学校を見ながら、

「俺さ……今日……転校することになったんだ……」

そうコナンが言い終わると、

元太。光彦、歩美は、コナンと灰原が想像した通りに、

固まってしまった表情をして、歩を止めてしまう……。

「・・・」

コナン、灰原も、彼らが止まったことを視認すると歩を止め、

四人が視界に入るように、コナンは二歩ほど前へ進んで振り向き、

コナンの顔を、嘘　　と言つような表情で見ている、

三人を視界に入れる。

道行く人々や、同じ帝丹小学校の生徒達は、道の真ん中で突っ立っている彼らを、

迷惑もしくは不思議に思ったが、声は掛けなかった・・・。

そして、まず光彦が重い口を開いた・・・。

「ほ、ホントなんですか？コナン君」と、涙声が混じった声で言った。

コナンは、ああ　　と、声質を変えずに返事をする。

その言葉を聞いた瞬間、歩美が揺れている瞳を見せながら、

コナンに駆け寄り、「ど、どうして?!」と、少々大きめの声で聞いた。

その歩美の声に、通行人の視線を一瞬捉えたコナン達だが、

彼らは全く気にせず話しを続ける。

コナンは眼前で、今にも泣いてもおかしくない歩美の顔を見ながら、

「ごめんな、歩美ちゃん。

・・・ホラ、少し前に俺、オメエらに連絡もせずに行動したことがあっただろ？

その事を聞いた母さんが、『危ないから引き取りに来る』って言うちまってよ・・・。

「あなたたち。寂しいのは分かるけど、

別に永遠のお別れになるわけじゃないんだし、

ここは温かく見送るべきじゃない？」と、前で沈黙している四人とは違い、

笑顔で意見を述べた。

その意見に元太、光彦、歩美は振り向き、

コナンは、光彦と歩美の間から見える灰原の顔を、

（灰原・・・）と、内心で呟いて見る。

四人の視線が集中している灰原は、

その視線を笑顔で返す。

その、今の元太達三人にとって、

“何よりも温かい笑顔”は、彼らの心を温めて同時に、

表情も柔らかくなる。

「そ、そうだよな！どーせなら明るく見送ってやろうぜ！」と、

探偵団の“自称”ボスの元太が、ボスらしく力一杯言い放つ。

「そうですね。・・・寂しいですけど、僕達が寂しがってちゃ、

コナン君が寂しい思いのまま行っちゃうことになりますからね」と、

明るい表情を取り戻した光彦が、左隣の元太の顔を見て言う。

「オメエら・・・」

コナンは、“体は小さいが大きな心を持った三人”に、

微笑みを向ける。

しかし、コナンの目の前に立っている歩美は、

コナンのほうに振り向くと、“笑ってはいたが目が潤っていた”。

そんな彼女を見たコナンは、「歩美ちゃん・・・」と、

優しく声を掛ける。

歩美は流れそうな涙を、グツ　　と抑えながら、

「ねえコナン君」

「ん？」

コナンは先程と変わらずに、優しい声と優しい表情で返事をした。

目の前の小さな少女を癒すように・・・。

「突然こんなことになっちゃって、何て言ってもいいかわからないけど・・・。」

どんなに離れていても、どこに行っても、

絶対に！ぜくたついに、歩美達のこと忘れない?!」と、

歩美はコナンの心に言うように、大きめの涙声で言い放つ。

その大声に周辺からの視線を浴びる一行だが、

気にせずにコナンは返答する。

「ああ。絶対に・・・約束するよ。

・・・歩美ちゃんのこと、探偵団のこと、そして・・・作った思い
出も・・・な」と、

コナンは歩美の目を見ながら、彼女の後ろに立っている元太、

光彦、灰原にも言うように話した。

自分達にも言っている

と感じた元太と光彦は、

「はい。僕も忘れません！君との思い出・・・君のことも」と、

光彦がコナンに歩きながら言い、元太も光彦に続いて歩きながら、

「俺もだぜコナン！だから安心して行けよ！」と、

コナンの背中を押すように言い放つ。

その見かけと同じく、大きな声で・・・。

「・・・フツ・・・ありがとな」

コナンは彼らの、小学生とは思えない強き芯こぶを持った三人に、

笑顔で心から礼を言う。

しかしその笑みは、子供のような無邪気なものではなく、

少し“素”を出した大人の笑みに近かったのだが、

探偵団の三人は気付かなかった・・・。

・・・灰原を除いて・・・。

「ホラ、あなたたち！もう行かないと遅刻するわよ」と、

灰原が目と鼻の先に見える学校に歩きながら、

後ろの四人に言い放った。

それを聞いたコナン達は、灰原と同じ笑顔で、学校へ向かうのだった・・・。

解放：子供らしい大人と大人らしい子供達（後書き）

今回は探偵団との別れの描写でしたが、

実際、探偵団はコナンと別れる時、

どんな反応をするんでしょうね？

では、評価、感想等お待ちしてまーす！（＾W＾）

解放：逃れられない未来と必然的な運命（前書き）

いや〜皆さん。

今日も暑い一日が始まりましたね。

日射病にはお気を付けて！

では、どうぞ！

解放：逃れられない未来と必然的な運命

「では、毛利さん。今までこの子をありがとうございました」

今、毛利探偵事務所の入り口に、江戸川文代、

本名工藤有希子が、息子であるコナンを引き取りに来ていた。

因みに有希子には、コナンが灰原から解毒剤の完成の連絡を受けた後、

有希子に連絡していた。

そして、今事務所内には毛利小五郎、毛利蘭、白馬探、服部平次、

小嶋元太、円谷光彦、吉田歩美、灰原哀と、主役である江戸川コナンがいた。

しかし、コナンの正体を知る白馬、服部、灰原以外の人物は、

窓から入ってくる夕日の光に照らされながら、

悲しい表情を見せている。

夕日の光も今の彼らには美しく見えず、悲しい自分達の心を映し出したかのような、

悲しくて寂しい色に見えてならなかった……。

そんな空気を察しながら文代は、正面に見える九人を視界に入れながら、

「コナン、そろそろ行きましょうか……」と、

小五郎と蘭の前に立っている、コナンの後ろ姿を見て曇った声で言った。

本当はもっと長くいさせてやりたいのだが、

これ以上いると別れが辛くなるかもしれない
考えを持った有希子は、

という

コナンに『行く』ように促した。

それはコナンも同感だったようで、振り向いて文代に顔を見せる。

そのコナンは、夕日の橙色に照らされて、

悲しい表情がさらに悲しく見えた。

895

コナンは、「うん」と、表情と同じ悲しい声で言つと、

文代のほうに歩いて行く。

「もう行くのね。・・・コナン君」と、後ろ姿のコナンを蘭が呼び止める。

コナンは立ち止まるつもりは無かったが、

彼女の寂しい声を聞くと、“つい”立ち止まってしまふ。

そして、顔だけを少し後ろに向け、

「うん。今までホントにありがとね、おじさんも・・・蘭ねーちゃんも、

オメエらもな」

そうコナンが言うと、元太、光彦、歩美は、溜めていた涙を一気に出すように、

泣きだしてしまう。

ここに来るときには、絶対に泣かない
と、決めていたのだが、

大切な親友の別れの前に、耐え切れなくなったのだろう・・・。

三人の中でも一番大泣きしている歩美を、

彼女の右隣りに立っていた灰原が、両肩に自分の両腕を載せて慰める。

それを感じた歩美は、俯いていた顔を上げて、

笑っている灰原に顔を合わせると、彼女に抱き付いて泣き始める。。。

灰原は歩美の背中に両手を静かに回して、

無言で彼女の心を温める。

897

その光景を見たコナンは振り向いて、笑って蘭達に一礼する。

ここに住まわせてもらった気持ちを込めて・・・。

そして顔を上げながら、正面の八人を視界に入れるともう一度、

ありがとう、皆　　と、瞳を揺らしながら言った。

また会えるとは言え、“コナンで会うのはこれが最後”。

コナンもやはり寂しいのだろう・・・。

そのコナンを小五郎、服部、白馬は無言、微笑んで見つめ、

探偵団の三人は、泣いたままなため気持ちは分からないが、

悲しさが膨れ上がったのか、泣き声がさらに大きくなった・・・。

コナンはそんな三人を見ながら、半分涙顔で笑みを浮かべると、

振り向いて眼前に立っている文代に、「行こう。母さん」と、

涙声が混じった小声で言う。

それに文代は無言で頷くと、顔を小五郎に向け、

「では毛利さん・・・失礼します。」

本当にありがとございました」と、一礼をしながら述べた。

小五郎はその言葉を聞くと、満面の笑みを浮かべて、

「いえいえ。もしまた、お預かりのお願いがあれば、

喜んでお引き受けしますよ」と、“お金に目が眩んでいる心”剥き出しの声で返答をした。

彼の左隣に立っている白馬と服部は、フッ

と笑いを

漏らす。

コナンもその二人を見て、表情を少し緩めて微笑んだ。

しかし、探偵団の三人の表情は変わらぬまま……。

「じゃあ、行きましようか」と、文代はコナンを見下ろして言う。

コナンは彼女の顔を見て、無言で頷く。

そして、コナンの左手を右手で掴むと、再度小五郎と蘭に文代は礼をして、

事務所の階段を下りて行った。

その二人を見るなり、当然　　のように、

小五郎、蘭、元太、光彦、歩美は後を追う。

一方、白馬、服部、灰原は事務所内に残っている。

事務所の階段を降り切ると、目の前には夕日の色に似合う、

赤色の車が止まっていた。

文代は車の後部ドアを左手で開ける。

その時にした、ガチャ

という音が、

文代とコナンの後ろに立っている五人には、

“別れを告げる悲しい音”に聞こえてならなかった……。

コナンは無言で後部座席に乗り込むと、扉を閉める。

その後、閉めた扉の窓を開けると、

「じゃあね。蘭ねーちゃん、おじさん」と、

別れという悲しい気持ちを押し殺しながら、笑顔で別れを告げる。

それを聞いた蘭は、コナンの近寄り、「うん。元気でね、コナン君」と、

溢れてきた涙を、必死に拭いながら答えた。

一方小五郎は、状況に似合わない沈黙を守りながら、

コナンの笑った顔を見つめている。

鋭い視線で……。

「オメエらも、じゃあな。色々ありがとうな」と、

コナンは蘭の後ろにいる探偵団の三人に、蘭と同じように笑って別れを告げる。

その言葉を聞いた元太は、「お、おう。ま……た、会おうなコナン！」と、

涙声剥き出しで答える。

光彦も元太と同じく、「は……い。連絡くださいよ……コナン君」

そう、涙声で気持ちを伝える。

そして歩美も……、

「コナン君……絶対に忘れ……ないでね……絶対だよ！」と、

他の二人と同じ涙声で言う。

その三人の言葉にコナンは、

本心では彼らと同じく、涙を流したい気持ちで溢れていた。

しかしそれを見せれば、“別れを辛くさせるだけ”と分かっていたため、

無理をして笑顔を作り、「ああ。またな!」と、元気良く言い放った。

・・・そして、いつの間にか運転席に座っていた文代が、

「そろそろいい?コナン」と、顔を後ろに向けて聞く。

コナンはまだ“ここに”いたかったが、

また会える

と思い、「ああ」と返事をする。

返事を聞いた文代はエンジンを掛けて、アクセルペダルをゆっくりと踏んだ。

そして、車は走り出した。

毛利探偵事務所と、その前でコナン達を見送る小五郎、蘭、探偵団、

悲しみの色に見える夕日を背景にして……。

「皆、寂しがつてたわね……」

毛利探偵事務所を発ち、探偵事務所がバググミラーに映らなくなつた頃、

運転席の有希子に変装したまま、

バググミラーに映るコナンをミラー越しに、目だけを動かして見る。

コナンは有希子の呟きに、サイドウィンドウから見える、

夕日が照らされることでできた、茜色の米花町を眺めながら、

「仕方ねえよ……。何時かはやらなきゃならなかったことだ。

避けられねえ未来だからな……。これは」と、

車の速度に合わせて、流れて行く景色を見ながら、

元気の無い声で答える。

「……」

有希子は、寂しい顔をしている息子の顔を見て、

今は話掛けないほうが良い

と思ったのか、

沈黙して前方の銀色のシボレーが、停止してことを目視し、

減速しながらゆっくりと停車する。

コナンは車が停車したことで、

流れていた景色が、“ハッキリ”と見えるようになった。

そこに映るのは、歩道をよれよれの黒のスーツを着て、

疲れ切った表情をしながら、ヨタヨタ歩く男性、

買い物袋を片手に持ち、息子と思われる少年と、

楽しそうに笑顔で会話をする、四十代ほど女性。

・・・その他の人々が、群れの如く移動している。

コナンはそんな街の日常的な光景を、ボーッと見ていた。

何を思う訳でもなく、何を考える訳でもなく、

ただ、ポーっと……。

そして、信号が青色に変わったことで、

前方のシボレーが動き出し、有希子もそれに合わせてアクセルを踏む。

アクセルペダルを踏まれた車は、徐々に速度を上げて行き、

やがて、景色が流れて見えるほど達した。

解放：逃れられない未来と必然的な運命（後書き）

うん．．．。

今作は今一ですかね．．．。

何というか、“別れ”という表現を出し切れてないような気がします。

まだまだかな．．．。

では、評価、感想、ご意見等お待ちしております！ (^ ^)

解放・接近する偽りの最期（前書き）

皆さん、こんにちは。本日二話目です。

いつもながら暑いですね……。

早く夏が終わってほしいです……。

では、ごっごー！

解放・接近する偽りの最期

「新ちゃん、着いたわよ」

「ああ。母さん」

そう言ったコナンは、後部左ドアをゆっくり開けて、

地面に両足を付いた後、正面の阿笠邸を視界に入れる。

そこに映る阿笠邸は、“あの時”と同じく、

白い壁が夕日によって橙色に染められ、昼夜の阿笠邸とは、

“別の阿笠邸”が建っていた。

コナンは振り向くと、運転席に座っている有希子に、

「ありがとな。母さん」と、笑って礼を言う。

その声には有希子は、顔だけを後ろに向けて、

「ええ。頑張つてね、新ちゃん？」と、右目をウィンクして、

可愛らしい声で言った。

それを聞いたコナンは、ああ　　と言って、扉を右手で閉める。

閉めた扉は、バンツ　　という音を立てて閉まると、

車は有希子一人を乗せて、ゆっくりと加速して走り出した。

コナンは、段々遠ざかって行く車の後ろ姿を見ながら、

（ありがとな。母さん）と、心の中で礼を述べると、

左に建つ阿笠邸に、歩いて進んで行った・・・。

「邪魔するぜ」と、コナンは何度も入り、

これが“ある意味”最後になる、阿笠邸の玄関を開けた。

玄関を開けるといつも通りに、「おお。新一」と、阿笠博士の聲が耳に届いた。

その声を聞きながらコナンは、歩いてソファアに座る。

阿笠は気を使い、コナンと反対側のソファアから立ち上がり、

台所に向かう。

暫しの間の後、阿笠が右手にカップを持ちながら、

ソファアに歩いて来た。

そのカップからは、湯気が絶えず立っている。

その温かい、というより、熱そうなコーヒーカップを、

阿笠はコナンの正面にある机に置く。

その後、コナンと向かい合わせになるように、反対側のソファアームに腰掛けた。

阿笠が腰掛けたのを視認したコナンは、

机に置かれたカップを右手で取り口を付ける。

しかしコナンは、口を付けた瞬間カップから口を離す。

（アチッ！）と、内心で思いながら、

コーヒーが冷めるのを、カップを持ったまま待つ。

反面阿笠は、フーフー……と、右手に持ったカップに息を吹きかけている。

そして、四度ほど息を吹きかけた後、

コーヒーカップを徐ろおもむに口に付けた。

しかしコナン同様、アチツ！
と声を上げて、勢いよく
口から離した。

その反動で、カップの中のコーヒーが、数滴床に零れる。

コナンはその阿笠を、呆れた
ように無言で見る。

阿笠はその視線に気が付いていないのか、コナンの目線に合わせて
話し掛ける。

「新一。言ったのか・・・？別れの言葉を」

コナンは阿笠との目線を外さずに、

「ああ。正直・・・辛かったけどな」と、正直な気持ちを話した。

阿笠はそれを聞くと、「そうか・・・」と、

コナンの辛さを理解

するように、低い声で答えた。

そして、その空気を破るように、「ただいま」と、

玄関から女性の声がした後、「お邪魔します」、「邪魔すんで」と、

男性の声も聞こえた。

その声に反応した阿笠とコナンは、

玄関に顔だけを向かせると、灰原の後ろに白馬と服部が、

横に並んでいた。

「哀君。お帰り」と、灰原を視認した阿笠は、

笑顔を見せながら明るい声で迎えた。

灰原も阿笠ほどではないが、笑って、

「ただいま、博士」と、返答をする。

いつも通りの声で・・・。

灰原の返事を聞いたコナンは、彼女の顔と後ろの二人を視界に入れながら、

「灰原。蘭達はどうか？」と、自分が去った後の様子を聞いた。

その問いを聞いた灰原は、“笑みから曇り”に表情を変え、

「この世の終わりみたいに沈みこんでるわ」と言いながら、

台所に歩いて行った。

阿笠とコナンは、灰原の後ろ姿を見ながら沈黙する。

「ほんで、俺らがいられへん雰囲気になってもうての。」

「そうか・・・」と、コナンは白馬と同じ悲しい目をして答えた。

そこに台所から、お盆にコーヒーカップを三つ載せた灰原が、

コナン達が座っている前の机の中心に、

自分で取りなさい

とでも言うように、お盆を置く。

その後灰原は、阿笠の右に腰掛け、

お盆の上から一番自分に近いカップを、右手で取る。

服部、白馬も、当たり前

のように、灰原が取った後、

自分に近いカップを右手で取った。

白馬、服部、灰原の三人は、カップを取ると一口飲み、

灰原は正面に座って、カップの中のコーヒーを見つめているコナン

に、

工藤君

と呼びかける。

コナンは、ん？

と言った後、灰原の顔を見る。

それを視認すると灰原は、

「いつ始めるの？」と、冷静な表情と声で聞く。

コナンは表情を変えずに、

「そうだな。・・・このコーヒーを飲み終わったらでいいんじゃないかねか？」

そう言った後、冷めてきたコーヒーを飲む。

灰原は、分かったわ

と返答して、

コナン同様、コーヒーをゆっくり飲み始める。

服部は左でカップに口を付けているコナンを、

横目で見ると内心で、（いよいよか・・・工藤）と、

心配している目で思った。

おそらく、無事に終わるのが不安なのだろう・・・。

灰原からは、

「失敗はあり得ないわ。これを飲めば“完全”に元に戻るわ。

・・・そして、二度と幼児化することはないわ」と聞いている。

その時の彼女の目が、珍しく“真剣そのもの”だったため、

服部は疑ってはいないが、不安な気持ちは消えない。

コナン達五人は、十分ほどでコーヒーを飲み干すと、

カップを机に置く。

そしてコナンが立ち上がり、

「じゃあ灰原、解毒剤を……頼む」と、正面の灰原の顔を見ながら、

“決意”の目を向けながら言った。

灰原は目線をコナンに合わせ、その“決意”を受け取るように立ち上がって、

地下室への階段をゆっくり降りて行く。

二分ほどで灰原が、降りて行った時と同じく、

ゆっくりと階段を昇ってきた。

右手を握り拳……というより、何かを持っているようにしながら……。

コナンは階段から昇ってきた灰原に、

歩いて近づくと、彼女の右手を見る。

灰原はそのコナンの視線を感じ、

右手をコナンの胸の辺りに差し出すと、その手を開ける。

コナンはその手の中心に転がっていた、一つのカプセルを見ながら、

「それが……そうなんだな」と、

嬉しそう　　に笑みを作りながら言う。

灰原はそのコナンの顔を見ると、クールな表情をしながら、

「ええ・・・そうよ。」

これで元に戻るわ・・・“完全”にね

『完全』という言葉を、コナンの脳に刻み込む

ように、

強調しながらコナンに言った。

コナンはそのカプセルを、無言で右手で受け取る。

その動作を見た灰原は、

「念のために言っておくけど・・・、

元に戻る時の痛みはいつも通りだからね」と、表情を変えずに言った。

コナンは、ああ　と、納得の返事をする。

それに続いて、「ありが・・・」「と言っている最中に、

「待って。その言葉は戻ってから言つべきじゃない?」と、

灰原が話を遮って言った。

コナンは、「フツ・・・そうだな」と言つと、

「飲む場所は、俺の家のほうがいいかもしれねえな。

服もあるしな」と続ける。

灰原は、ええ　と、短く返事をする。

その返事を聞いた後コナンは、

「じゃあ行ってくるぜ」と、眼前の灰原だけでなく、

後ろのソファーに座っている、阿笠、白馬、服部にも言つよつた言
い放った。

それを聞いた阿笠は、「頑張つてな！新一」と、コナンの顔を見ながら言い、

服部も阿笠に続き、「無事を祈つとるで！」と、

少々大声で言い放つ。

白馬も服部が言い終わった後、「幸運を」と、

微笑みながらコナンを、送り出すように
言った。

明るい声で

その三人の声を、心に“しっかり”刻んだコナンは、

「ああ！行ってくる！」と、家内中に響くような声で、

自分の決意を伝える

ように言った後、

勢いよく玄関を出て行った。

外は夕日が沈み、暗くなっていた。

星が空一面を多い、その中心に満月が、黄色く綺麗に輝いた。

まるで、コナンの無事を見守るようだった……。

解放・接近する偽りの最期（後書き）

あゝ・・・そろそろコナンとお別れか・・・。

新一とコナンは同一人物とはいえ、別れは寂しいですね・・・。

では、評価、感想、ご意見待ってまーす！

解放・解放される体と子供な名探偵（前書き）

お待たせしました。

本日、“ようやく”更新です！

少々物語のことで手間取ってしまいました・・・。

では、ごうぞー！

解放：解放される体と子供な名探偵

「遅いわね」

阿笠邸でソファーに座りながら、灰原が左手首に付けている腕時計を見ながら呟く。

「そっじゃの……。あれから、もう少して一時間じゃぞ」

灰原の右隣りに腰掛けている阿笠も、灰原同様、不安な表情を剥き出しにして言った。

阿笠に続き、彼と向かい合わせて腰掛けている白馬が、

灰原の顔を不安そうな目で見て、

「宮野さん。あなたの頭の中の計算では、どのくらいで戻るのですか？」

灰原は白馬に視線を合わせながら、不安な表情を直さずに、

ええ

と続ける。

「薬を飲んでも、最初の五分間は何も起きないの……。」

効果が表れ始めるのはその後よ。

それから、激痛が走り始めて徐徐に戻って行くんだけど、

その時間が大体三分ぐらい……。」

灰原の話を顔を向けながら聞いた阿笠は、

左手首に付けている腕時計を見て、「じゃあ、もう帰ってきてもおかしくないんじゃない？」と、

左隣に座っている灰原に聞く。

灰原は阿笠に顔を向けながら、

「でも、元に戻ってもすぐに動けるわけじゃないの。」

・・・体が急激に大きくなるから、その反動でしばらく動けないはずよ」と、

先程の話の続きを言うように話した。

「その時間、どれくらいなんや？」と、灰原の正面で、

他の三人と同じ不安な表情を浮かべている服部が、憂慮ゆうりょな目つきを
して聞く。

灰原は顔を、阿笠から服部に向き直した後、

「個人差はあるけど、最低十分、最高十五分ぐらいかしら・・・」

服部はそれを聞くと、

「ほんなら、もう戻ってきててもええな・・・」と、灰原から視線を外さずに言った。

「・・・」

灰原は肯定も否定もせず、服部から視線を外して下を向いてしまう。

阿笠、白馬、服部は、それを肯定と解釈する。

「なら、見に行ってみますか？」と、白馬は三人の考えを言い当てるように、

阿笠、服部、灰原を視界に入れながら言った。

その白馬の問いに間を置かずに、

「そうじゃな」と、阿笠が言った瞬間、

ガチャ
と、玄関の扉が開く音が、四人の耳に入る。

阿笠達は玄関に顔を向けると、

「遅くなって悪かった・・・結構疲れが溜まっててよ」と、

間違いなく工藤新一の声と姿をしている、江戸川コナンがそこにい

た。

その姿を見るなり、阿笠達は目を見開いて、

「戻ったか！新一」と阿笠は、新一に近づきながら、

嬉しいという表情を表した笑みで言い放つ。

新一は、「ああ」と即答する。

新一は阿笠の後ろに見える、服部、白馬、灰原に近づいて、

「待たせたな。三人とも」と、満面の笑顔を浮かべながら、

明るい声で三人を視界に入れながら言った。

服部達は新一の明るい笑顔を見ると、

自分達も笑いながら、

「ホンマや。死んだかと思ったで」と、服部が安堵の息と共に、言葉を吐いた。

続いて白馬も、

「その姿では、“初めまして”だね・・・改めてよろしく

そう言うとソファから立ち上がって、

右に立っている新一に、右手で握手を求めた。

新一は、白馬らしい　　と思いながら、

目線が同じになった白馬に、新一も『初めまして』の気持ちになり、

「ハハハ・・・そうだな。工藤新一だ、よろしくな」と、

笑い声を上げながら手を右手で握り返す。

握手をしながら互いの目を見続け、

“言葉”ではなく“目”で意思疎通をする。

その状態が三秒ほど続いた後、笑顔を保ったまま、二人は無言で手を離れた。

そして新一は、右正面に顔を向ける。

視界にはソファーに腰掛けながら、

新一の顔を微笑みながら見ている、灰原の姿が見えた。

灰原は新一と目が合いながらも、一言も話さない。

まるで、新一の“ある言葉”を待つように……。

新一は灰原の意思を理解した　　ように、

フウ　　と一息付いた後、

「今なら言ってもいいよな？」と、灰原の微笑みの顔を、
微笑みで返しながら聞く。

灰原は表情を崩さず且つ、無言で肯定の意思を伝える。

一方、阿笠、服部、白馬は、笑顔で静観している。

新一は灰原の意思を再度理解すると、

「ありがとな！」と、彼女の耳だけでなく、

心にも届くような大声で礼を述べる。

灰原はその声を正直に心に刻む。

しかし、刻んだのは“新一の言葉だけ”で、

その気持ちは“拒絶”した。

・・・正確には、拒絶せざるを得なかった。

そんな複雑な気持ちを抱えながら、表情を保ったまま、

「お礼を言うのは勝手だけど、私は“当然”の事をしたまでよ」と、

その表情とは裏腹な、不器用な言葉で返答した。

新一は呆れたような表情を灰原に見せながら、

(ホントツに正直じゃないやつ)と内心で思う。

しかし、新一は今の灰原の、“本当の気持ち”に気付くことは無かった・・・。

少しも・・・。

新一だけでなく、阿笠、服部、白馬も、

灰原の気持ちに気付かないまま、

「さて、これからどうするんじゃない？新一」

そう、阿笠は眼前に立っている、背中姿の新一に問った。

新一は振り向いて、阿笠と目を合わせると、

「まあ、まずは蘭に連絡を……と言いたえが、

まだ疲れが残ってるみたいだよ……。

眠くてしょうがねんだ」と、右手で両目を擦りながら、

大きく口を開けて欠伸をする。

そんな新一を見上げながら、

「その様子じゃ……検査は今日は無理ね」と、

灰原はいつものクールな表情をしながら、

気を使う

ように言った。

新一は、すまねえ

と言った後、もう一度大欠伸をする。

服部はその新一の、“いかにも寝むそうな顔”を見ながら、

「ホンマに寝むそつやな。

・・・自分かなり無理して来たんちゃうんか？」と、

新一の内心を見抜く

ように言った。

新一は眼前の白馬の後ろに見える服部を見ながら、

「ああ・・・まあな」と、寝むそつな声

で答える。

阿笠は、今に寝てもおかしくない新一の顔を左から見ながら、

「何ならここに泊まっていったらどうじゃ？」

その様子じゃと、自宅に帰るのもきつかるう」と、

心配している表情を見せながら、気遣いの言葉を掛けた。

その阿笠の考えを聞いた新一は、寝むそうな顔を緩めずに左に顔を向け、

ありがとう、博士　　と、礼を言ってから続ける。

「でも、さすがにここにはもう泊まれねえだろう。

・・・大丈夫、家には帰れっから」

そう言いながら、安心させる　　ように、少し口元を緩めて笑みを見せる。

阿笠はその言葉と表情で、少し安心したのか、

・・・それともまさか貴方、『早起きできない』なんて言うんじゃないでしょうね？」と、

まるで子供を見るような目つきで、驚きの表情をしている新一の顔を見た。

新一は灰原の、『早起きできない』という言葉を聞き、

『馬鹿にされてる』と思ったのが、

表情を少タイラつかせながら、

「へっ！六時なんて楽勝だぜ！」と、子供そのものの口調で、少し大声で言い放つ。

それを聞いた阿笠、白馬、服部の三人は思わず、

ブツ　　と笑いを漏らした。

新一はその三人を視界に入れながら、何だよ！

と、

少し怒ったような口調で言い放つ。

白馬は笑った表情を崩さずに、

「いえ、何でもありませんよ。

くれぐれも寝坊はしないように」と、眼前の新一の顔を見ながら答えた。

新一は、『白馬にも馬鹿にされてる』と思ってしまったのか、

そのまま無言で玄関に歩いて行った。

その後ろ姿はまるで、“大きくなった子供”である。

土足に履き替えた新一は、顔を少し後ろに向けて、

視界に阿笠達四人を捉えると、「お邪魔しました」と、

ご立腹な声で言う。

それに四人は再度、フッ

と笑いを漏らすと、

「おやすみ。新一」と、阿笠が笑い声が混じった声で、新一を見送った。

そして新一は玄関を出た後、

駆け足で自宅に戻り、入浴と簡単な夕食を済ますと、

自室のベッドに仰向けに寝て、あっという間に寝てしまったのだっ
た。。。

解放・解放される体と子供な名探偵（後書き）

ここからは、新一の物語が本格的に始まりです。

さてと、ここからは恋愛だから、一人称を多くした方が良いかな・
・？

恋愛を三人称で書くには、無理がありますからね。

では、評価、感想等お待ちしてまーす！（＾－＾）

変化・新たな旅立ちと隠される理由（前書き）

おはようございます、皆さん（＾Ｏ＾）。

昨日更新できなかった、第七部の始まりの小説、投稿です。

では、本編をどうぞ！

変化：新たな旅立ちと隠される理由

「邪魔するぜ」

まだ太陽が昇り始めて、暗さと明るさが交錯している頃、

阿笠邸の玄関が静かに開けられ、復活した工藤新一が、

ボサボサの髪をそのままにしながら、帝丹高校の制服を着用して、

阿笠邸に入ってきた。

しかし何時ものように、「おお。新一」という声はなく、

代わりに大舅おおこうじが、新一の耳に嫌でも届いた。

「皆まだ寝てるのか・・・」

新一は玄関で、ポツン
見渡す。

と突っ立って、阿笠邸の中を

右には、この軒の主である阿笠が、寝巻姿で仰向けで寝ている。

正面に視界を持つてくると、

何時も自分達が座っているソファーに、白馬と服部が寝巻姿で、

スー・スー・・・と、寝息を静かに立てながら寝ていた。

新一はその二人を見ると、

(どっかの誰かさんとは大違いだな)と、心の中で感心する。

「来たわね」

いきなり左から声がしたことで、新一は眉を一瞬動かして少し驚くが、

その驚きを悟られないように、ゆっくりと声がしたほうに顔を向けるよ、

如何にも寝むそうな灰原が、右手で両目を擦りながら立っていた。

「おお、灰原。おはよう」

新一は彼女の姿を視認すると同時に、挨拶をする。

更にその挨拶に続いて、寝むそうだな　と、灰原の顔を見下ろしながら、

気遣う　　ように言った。

灰原は目を擦るのを止めて、

「仕方ないでしょ。じゃないと学校に間に合わないから」と、

新一の心配している顔を見上げながら言う。

それを言われた新一は、自分が悪い　　と思ひ、

正直に、すまねえ　　と謝罪する。

灰原は、表情にも言葉にも、“謝る”という気持ちが込められているのを感じ、

「別にいいわ。昨日の貴方はそのまま検査しても、検査中に眠ってしまっただろうしね、」

と言うと振り向いて、地下室へ続く階段へ歩いて行く。

新一もその灰原に続く。

しかし、背丈が大きくなった分、自分のほうが歩幅が大きいため、

灰原を抜かさないように、歩幅を小さくして歩いた。

灰原の後ろを付いて行きながら、階段をゆっくりと降りて行く。

この時新一は、灰原に少し違和感を感じていた。

(少し前までは、同じぐれえの背だったのにな……)

元に戻るとオメエがこんな小さく見えるぜ」と、表情に少しの笑みを浮かべ、

内心で呟きながら、灰原の背中を見つめ続ける。

反面灰原は、そんな新一の心境を知ってか知らずか、

正面を見続けたまま歩いて行く。

階段を降り切ると、灰原が地下室のドアノブを右手で握って開ける。

新一は中に入ると、以前入った時と全く変わらない地下室に、

内心で少々驚きの声を上げた。

新一が入ったことを視認した灰原は、まだ寝ている阿笠達を気遣ってか、

静かにゆっくりと扉を閉める。

「じゃあ、工藤君。そこに寝て」と、灰原は部屋の左隅にあるベツトを、

左人差し指で指しながら言った。

新一は、ああ

と言って、ベツトまで歩くと、

仰向けに寝転がる。

寝転がった新一は、顔を左に向けて灰原を捉えたと、

「で？この後どうすりゃいいんだ？」と、机の上でガチャガチャと、

音を立てながら物をいじっている灰原に聞いた。

灰原はその動作を休めずに、「貴方はそこに寝ているだけでいいわ」と言いつつ、

手を休めて右手に注射器を持ちながら、新一に歩いて近づく。

新一は意識はしていないのだが、灰原が持っている注射器に、

どうしても目が向いてしまい、

「なあ、その注射器で何するんだ？」と、恐る恐る聞く。

灰原はベットに近づくと、冷静な表情を変えずに、

「安心して。貴方の血を少しもらっただけよ」と、表情と同じ冷静な声で言った。

それを聞き、フウ　と、安堵の息を吐くと、

「何？それは。」

「・・・まさか、私が危ないことをするとも思っていたの？」

灰原は新一の顔を見ながら、心を見抜く

よつに言い放つ。

新一は、「い、いや・・・べつに」と、笑いながら誤魔化する。

そう
と、呟いた灰原は、新一の左腕に慣れた手つきで注射針を刺す。

針が刺された瞬間、新一の顔が少し歪む。

そして注射器の中に、誰がどう見ても血を連想させる、

赤々とした液体が、注射器に入る。

満タンになったのを視認した灰原は、ゆっくりと針を抜いた。

針が抜かれたのを目視した新一は、

仰向けの状態で灰原に顔を向け、「その血、どうすんだ？」と尋ねた。

灰原は、実験器具が多数置かれている部屋の右隅に移動しながら、

「ええ。この血を
業をし始める。」

「と、長い説明をしながら、作

それから三十分ほど経過して、検査が終了した。

「お疲れ様」

灰原は使った器具や道具を片づけながら、ベットに寝ている新一に言った。

新一は立ち上がりながら、「ああ。灰原もな」と、正面で手を動かしている灰原に、

お疲れ様

という気持ちを込めて言った。

その言葉を聞くと灰原は振り向いて、

「ああ、工藤君。しばらく、解毒剤の副作用で疲れやすくなると思
うけれど、」

それは、異常でも何でもないから気にしないで」と、自分の倍以上の背丈になった、

新一の顔を見上げて言った。

新一は灰原に近づいて、ああ　と返事をした後、

「それってどのくらい続くんだ？」と続けた。

灰原は腕組みをして、顔をやや下に向け、そうね　と言っ
て考え始め、

暫しの後顔を再び上に向けると、

「大体、二三日ぐらいかしら」と、新一と目を合わせて言った。

新一は、分かった　と軽く返事をする、それに続いて
“ある事”を聞く。

「なあ、灰原」

「ん？何かしら？」

「オメエ、決めたのか？……戻るかどうかを」

それを聞いた瞬間、灰原の目が一瞬見開いたのを新一は見逃さなかった。

しかし、そこには触れずに、灰原から返答を待った。

灰原は目線を新一の目に合わせたまま、

「私は……元に戻る気は無いわ」と、冷静な声を変えずに言う。

新一はその言葉に動揺せず、何でだよ？
と、表情
と声を変えずに聞いた。

その問いに灰原は、目線を一旦新一から外し、左側にある壁に歩いて寄りかかった後、

再度新一の目を捉えると、

「やっぱり、この姿での生活が気に入っているからかしら。」

灰原哀には、色んな思い出がある。

楽しい思い出が・・・。

・・・でも、宮野志保にはそんな思い出が無い・・・」

ここで灰原は、新一が口を開くのを見て、言おうとしていることを言い当てる　　よつに話します。

「『思い出がなきゃ作ればいい』って思ってる?」

「?!」

灰原が言ったことに、新一は目を少し見開き、驚きの表情を作った。

そしてその表情のまま、あ、ああ　　と、彼女の内心を当てる鋭さに、

驚嘆きょうたんの声を上げた。

灰原はそんな新一を見続けながら、

「そつね……。無ければ作ればいい……。簡単な事よね。

……言葉で言えば」

灰原はここで一旦深呼吸をして、心を落ち着かせるようにした後、

再び口を開く。

「でもね。理由があるのよ」

「理由？」

「ええ……。二つね」

灰原は右手の人差し指と中指を立てて、新一と自分の目線の間かざに翳かざして、

ピースマークを作る。

そして、灰原は中指を下ろしながら、

「一つ目は、少年探偵団達のことよ」

「探偵団？」

「ええ。あの子達、あなた・・・江戸川コナンが居なくなったことに、」

ショックを受けてるでしょ？

それも、かなり大きめの」

「！」

新一はここで顔を大きく歪ませる。

灰原はそんな新一を余所に話を続ける。

「そんな時に、私まで元に戻って居なくなったりしたら、

あの子達、どんな思いをするでしょうね。」

それは・・・分かるでしょ？」

新一は、ああ　　とでも言うように、黙り込む。

灰原は、新一の沈黙を肯定と理解して、

人差し指を下ろした後、翳していた右手を右脇に持っていきながら、

「二つ目の理由は・・・」

ここで灰原は、先の言葉を言わずに口を閉じる。

まるで、新一の視線を向けるように・・・。

そして、言葉を言わない灰原に疑問を持ち、

新一は顔ごと灰原の目を見る。

灰原は新一と目が合った瞬間、

「・・・これは、言わないわ」と、彼女らしくない事を言った。

それを聞いた新一の疑問は膨れていき、

「何だよ」と、彼が普段使っている、普通の声で聞いた。

「さあね・・・」

灰原は寄りかかっていた背中を壁から離し、

笑って答えた。

しかしその笑みは、嬉しい、楽しいという感情が表す笑みではなく、

新一に、答えは自分で考えなさい

と言うような、不気

味な笑みであった。

新一は灰原を見下ろしながら、「何だよそれ？ハッキリ言えよ」と、少々怒り混じりの声で、

灰原に再度聞いた。

しかし、灰原はその問いには答えず、

「とにかく、今のところ元には戻らないわ。

さっきも言ったように、今の吉田さん達には心の支えが必要だしね」

そう言うと灰原は地下室の扉を開けて、

「上に行きましょう。・・・朝食、博士達と一緒に食べるでしょう？」と、

地下室でまだ突っ立っている新一の目を見ながら言い放つ。

新一はさっきの疑問が頭に残りつつも、

ああ と、笑って言って、上にながって行った。

そして、灰原も新一の後ろを付いて行って、

起きていた阿笠、白馬、服部、そして新一と共に、

窓から入ってくる温かい朝日を浴びながら、朝食を食べるのだった。
。。。

変化・新たな旅立ちと隠される理由（後書き）

今回は、特に進展は無しですね。

“第七部の始まりの合図”のような感覚で、
読んで頂ければいいと思います。

では、評価、感想、ご意見お待ちしてまーす！（＾０＾）

変化・克復する日常と復古する日常（前書き）

今回は“ある意味”、

初めての新一の一人称を書きました。

では、どうぞ！

変化・克復する日常と復古する日常

「ごちそうさまー」

俺は灰原の検査を受けた後、博士の家で朝飯をごちそうになった。

食事はトースト三枚に、野菜のサラダ、そしてコーンスープとシンプルなものだったが、

上手かった。

以前ここに来た時、まああの時はまだコナンだったが、

灰原のメシは上手いと感じた。

今も思う、「蘭の料理よりも上手い」と。。。

ただ不思議なことに、味は二人ともそう変わらない。

しかし、灰原の料理には何か感じるものがある。

まあ、その“何か”は全く分からねえが……。

俺は食べ終わった皿を台所へ持って行くと、

駆け足で玄関に向かった。

そして、土足を手際良く履くと、「じゃあ行ってくる!」と、

台所で灰原の手伝いをしている、博士と白馬に聞こえるように、大声で言った。

「ああ、気を付けてな!」と博士が、俺に負けないぐらいの大声で言った。

続いて白馬も、「お気を付けて!」と、大声で言った。

そして、ソファーに座っている服部も、

「気いつけてな！工藤！」と、彼らしい大きな声で、俺を送り出してくれた。

俺も服部の顔を見て、目線を合わせながら、

「ああ」と、返事を元気良くした。

返事を返した後、俺は玄関の扉を開けて、外の空気を吸いながら学校へ向かう。

博士の家を出ると、俺は何度も通ったことのある道を歩く。

しかし、“何度も”と言っても、そのほとんどはコナンの時のもの・・・。

工藤新一の姿で通るのは久しぶりだ。

そのまま歩き続けると、人通りが多く、車のエンジン音が日常茶飯事のように聞こえる道に出た。

ここは、毛利探偵事務所を蘭と一緒に出た時、少年探偵団と合流していた道だ。

そう言えば蘭に連絡していなかったのを思い出した。

俺は他の通行人の邪魔になる、歩道の真ん中に突っ立って、携帯を取り出して連絡しようと思ったが、

学校で会える

と思い、そのまま歩き始めた。

歩き始めると、コナンの時に何度も見た光景が、違うように見える。

体が高校生に戻ったからだろうか・・・。

俺とは反対側に進む、OL姿の女性。

すれ違う時にチラッと見えたのだが、左手薬指に指輪がしてあった。

その女性とすれ違うと、青いジャージ姿で、

息を荒らしながら走っている男性が、俺の右隣りを走って行った。

視線を上に向けると、雲一つ無い青々とした空が、空一面に広がっている。

まるで、光輝く海が、そのまま空に移ったかのようだ。

そのまま目を右に向けると、

この星に光を降り注いでくれる、空に浮かぶ太陽という名のシャンデリアが、

キラキラ と、輝きを休めずに全てを照らし出す。

俺はその輝きを見ると、耐え切れずに思わず目を瞑る。

再度視線を正面に持つてくると、さっきよりも人が多くなっており、

俺の前も右も左も後ろも、人だらけだ……。

上から見たら、歩道が見えないのでは？

と思うほどだ。

俺はその人混みに流されるように進んで行く。

さすがに学校に近くなると、人混みと別れることができ、

俺は四方八方が見える状態で、学校に歩を進める。

学校が近くなると、俺と同じ制服を着た生徒達が、同じ方角に歩いて行く。

しかし、同じ制服を着ていても、辺りを見渡すと生徒達は、

俺と同じ一人で登校していたり、二人以上でワイワイガヤガヤ話をしながら、

耐えることのない笑みを浮かべながら歩いている生徒、

中には、登校時刻までは余裕があるのに、走って学校に向かう生徒もいた。

そんな様々な生徒達を見ながら、俺はとうとう“ここ”に着いた。

帝丹高校。

俺は校門前に立つと、正面に建っている校舎全体を視界に入れながら、

(懐かしいぜ・・・)と、内心で呟き、

顔も自然と笑顔になる。

俺は、横を通って行く生徒達に釣られるように、校庭の土を踏んだ。

その感触は、帝丹小学校のものと大差は無いが、

懐かしい土のせいか、新鮮な感触を覚えた。

その土の感触を楽しみながら、俺は回りを歩いている他の生徒と共に

に、

下駄箱に付いた。

いつもならこの扉を開けると、上履きが見える前に、

大量のラブレターが入っていたのだが、休校中だったため今日は、

上履きがすぐに目に付いた。

俺は土足を閉まって、上履きに履き替えると、

以前と全く変わらない校舎を懐かしみながら、自分の教室を目指す。

俺が歩いていると、通り過ぎた生徒や先生が、俺の顔を“妙な目で見ていた。

まあ、無理もない。

。。
工藤新一がこの学校に来たことは、俺以外誰も知らないのだから。。

俺はそんな生徒達や先生を見ながら時折、おはよう
と
挨拶をしながら教室へ向かう。

挨拶をされた生徒や先生は、信じられないものを見た
よ
うな表情で、

おはよう
と挨拶を返してきた。

・・・そして、ここ、二年B組の扉の前に来た。

俺は扉の前で、フー・・・と一呼吸すると、

眼前の扉を右手で勢いよく開ける。

しかし、あまりにも勢いすぎたためか、扉が柱に当たって大きな音
を立て、

その音に気付いた教室の懐かしい顔ぶれが、一斉に俺のほうに向き、

俺はいきなり恥ずかしい気持ちになった・・・。

教室の机の大半を占めていた生徒達は、俺の顔を見るなり、目を丸くして驚愕している。

俺はまだ消えない“恥ずかしい”気持ちを押し殺しながら、

少し笑って、「ひ、久しぶりだな・・・オメエら」と、笑って誤魔化する。

・・・正直言つて情けない・・・。

しかし、彼らはそんな俺の気持ちを知ること無く、

息が合ってる
かのように、「工藤!」と、一斉に俺の名前を叫んだ。

俺はそんな声を聞きながら、教卓の前を通って俺の席に付こうとする。

が、俺のことを誰よりも驚いて見ている女性が一人・

。

「し、新一？」と、その女性は俺の姿を見るなり、瞳を揺らして俺に向かってきた。

俺はその女性、毛利蘭が眼前に来たことを目視すると、

「蘭」と、温かい声で彼女の名前を呼んだ。

すると、蘭はますます目を揺らして、「何時帰ってきたの？！」と、

教室中に聞こえるような声を出して聞いてきた。

俺は、「電話したじゃねえか。』もうすぐ帰る』って」と、「コナン
の時に言った言葉を

思い出させる ように言った。

「そ、それはそうだけど・・・帰ってきたなら携帯とかで連絡ぐらいしてよー！」

蘭は俺への心配な表情を崩さないまま、回りの視線も気にせずと言ってきた。

俺はその“視線”が、かなり気になっていたのだが、

敢えて気にせずに蘭との話を進めた。

「ワリイ・・・帰ったら疲れ果てて寝ちまってよ。」

今日会えるからいいと思って、連絡しなかったんだ・・・」

俺は正直に蘭に謝り、少し嘘を付いた・・・。

でも・・・まあ、「嘘であって嘘じゃねえ」。

だってよ・・・、俺は“元の体”っていう場所に帰宅して、

その反動に疲れて寝ちまったんだ。

まあ、博士ん家に寄ったけど・・・。

でも、すぐに寝ちまったのは事実だからな……。

だからこれは、言い方は違っても嘘じゃねえと思う。

……それに、蘭に本当の事……。

組織のことやコナンのことを話すかどうか、迷っている自分が居ることも事実だしな……。

「……もう」と、

俺の言い訳を聞いた蘭は、まるで風船のように頬を膨らませて、

仕方がない　　ように言った。

この表情を見た俺は、いつもの蘭に戻った　　と、内心で安心した。

もちろん、それは表に出さない。

というより……恥ずかしくて出せねえ……。

そして蘭が、「もう」と言ったすぐ後、

教室の前の扉が、ガラッ
担任が入ってきた。

と開けられ、久しぶりに見た

クラスメイト達はその姿を視認すると、

一斉に席に付き始める。

俺も……蘭もだ……。

そして、懐かしく且つ、何もかもが本当に久しぶりの高校生活が、

一時間目開始のチャイムと共にスタートした……。

変化・克復する日常と復古する日常（後書き）

新一とコナンは同一人物とはいえ、

一人称を描写していると、不思議と違う人物に思えてきます。

やっぱり場所が違うせいでしょうか？

それとも、私だけ・・・？

皆さんはどうですか？

では、評価、感想、ご意見等お待ちしております！

変化・消えない罪悪感と変わらない現実（前書き）

今回は、久しぶりの灰原の一人称です。

では、ごっごー！

変化：消えない罪悪感と変わらない現実

「じゃあ、宮野さん。御疲れ様でした」

工藤君が出かけて行った後、白馬君と博士が手伝ってくれたおかげで、

早く片づけが終わった。

私は白馬君の、“ねぎらい”の言葉を受け取り、

御疲れ様

と笑って、ねぎらいの言葉を返した。

白馬君は心の底から嬉しさを表現するように、

満面の笑みを私に見せながら、台所を去って行った。

私は、白馬君が言ってくれた、御疲れ様
嬉しかった。

という言葉が

御疲れ様・・・この言葉は、同僚と目上の人に使う言葉。

私は“見た目”は小学生なのだから、

普通の人なら目下の人に使う、ご苦労様

という言葉だ。

なのに白馬君が、御疲れ様という言葉を使ったのは、

私を小学生としてではなく、“同い年の人間”として見てくれているという事だった。

博士もその言葉を使ってくれるが、彼以外の人が言ってくれたのは、

白馬君が初めてだった……。

それに白馬君は、私の事を『宮野さん』と呼ぶ。

この名前と呼ばれるのは、少々複雑な気持ちだった。

宮野志保という名は、組織に居た頃の……言わば、犯罪者の名前……。

知らなかったとは言え、人を殺めるために使われる薬を開発していた、

私のもう一つの名前……。

正直なところ、私は白馬君にその名を呼ばれるま
で、

宮野志保という名を忘れていた。

ただ不思議と、忘れたいという気持ちは無く、

いつの間にか記憶の片隅に寄せられていた。

自分でもどうして、記憶の隅に寄せたのか分からない……。

もしかしたら、私はいつの間にか、“灰原哀”になっ

ていたのかもしれない・・・。

この新しい名を受けた時から、

私はホントの自分を、無意識のうちに忘れようとしていたのかも・・・。

灰原哀になり、新しい生活、新しい場所が出来て、

仲間　　という、新しいものまで手に入れた。

そして、とうとう組織を倒して解毒剤を完成させ、

工藤君は元に戻った。

でも、組織を倒すまで、色んな事、色んな思い出ができた。

工藤君と事件現場を駆けたり、少年探偵団や警察の人達との、新たな出会いを経験した。

その他にも数えきれないほどの思い出がある。

そんな出来事を経験していくうちに、

私の心を、灰原哀という人格が支配していったのかもしれない。

そして、宮野志保という本当の人格を記憶の隅に追いやり、

身も心も灰原哀になりかけていたのかも……。

……自分でも気付かないうちに……。

でも、白馬君に呼ばれたことで、私の本来の人格が再び目覚めた。

……いや、目覚めさせられた。

そういう意味では、白馬君に感謝している。

私の過ちを思い出させてくれたのだから……。

でも同時に、その名前で呼ばれたことが嬉しかった。

宮野志保という名は、私の親が与えてくれた名なのだから……。

博士も、工藤君も、服部君も、私の正体を知ってながらその名前で呼ばない。

工藤君のことは本名で呼ぶのに……。

まあ、私に気を使ってきているのかもしれない。

この名前で私を呼ぶと、組織のことやお姉ちゃんのことを思い出すかもしれないから……。

だから、呼ばないのかもしれない。

もし……そうならば、その気遣いは嬉しい。

でも……苦しい。

名前はその人の存在を表すもの。

・・・でも、この灰原哀という人間には戸籍が無い。

つまり、本当は存在しないはずの人物。

“名はあっても戸籍が無い”・・・。

そう思うと、本当の姿に戻りたい と思ってしまう。

・・・しかし、本当の姿に戻って何なる？

宮野志保にはもう何も無い・・・。

家族も・・・居場所も・・・友人さえも・・・。

そんなところに戻ったて苦しいだけはず・・・。

そう思うと、検査のときに工藤君に言った言葉が頭を過る。

『無いなら作ればいい』

そう、“作ればいい”・・・本当に簡単なことだ。

言葉で言えば・・・。

私はその考えには賛成・・・でも、元に戻れば高校に通わざるを得なくなる。

そうなれば、通うのは工藤君と同じ帝丹高校。

でも、その場所に行けば、嫌でも“あの人”と会うことになる。

・・・毛利蘭さん。

本人達は否定しているけど、誰がどう見ても工藤君と結ばれる女性。

私はその人の悲しみと苦しみを作つた張本人。

会えばあの方は、その優しい性格から、友達になろう

と

言ってくるはず……。

そんな事を言われたら、私の苦しみはさらに増すばかり……。

灰原哀の時に会っても、胸が締め付けられる感覚を覚えるのだ。

友達になろう

なんて言われたら、

どんな思いをするか……。

そもそも、私があの人と友人になるなんて合ってはならない。

組織が壊滅した今でも、

私の心には、彼女に対する罪悪感が消えない。

……いや、消えることは無いだろう……これからも……永遠に……。

当然のこと。

それだけの事をしたのだから……。

台所の仕事を一通り終えた私は、

地下室に行くため、階段を目指して歩き始める。

白馬君はソファで推理小説を読んでいる。

少しの笑みを浮かべながら……。

やっぱり白馬君も探偵。

工藤君と同じ、趣味があるのかしら……。

私はあんなものを読んでも、退屈なだけけど……。

服部君は白馬君と、反対側のソファに仰向けに寝転がりながら、

推理小説を読んでいる。

白馬君と同じ表情で……。

しかし、彼はここが“人の家”だということを、自覚していないのかしら？

姿勢を正して座っている、白馬君の爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだ。

私も言えはいいのだけれど、服部君が直すとも思えない。

博士はいつも通り、パソコンで何やら調べものをしているみたいだ。

そんな三人を見ながら、私は白馬君が座っているソファアの、

左の肘掛け部分に立て掛けてある、赤いランドセルを右手で取って、

背負いながら玄関に向かう。

玄関で土足に履き替えた私は、

一旦振り向いて、「行ってきます、博士」と、一声掛けた。

その私の声を耳にした博士達が、

声を揃えて、「いつてらっしやい！」と、大きな声で見送ってくれた。

その声を聞いて玄関から出た私は、いつも見ている通学路の景色を見ながら、

私の頭に一つの疑問が浮かんだ。

（白馬君や服部君は何時帰るのだろうか）と。

組織も倒したのだから、ここに居る理由は無いはず……。

と考えたが、すぐにその考えを頭から放り出した。

彼らが何時帰ろうが彼らの自由……。

でも、あまり長居してもらっても困る。

世話が増えるからだ。

白馬君は良いとしても、服部君は早く帰ってもらいたい。

彼は、家事仕事を一切しない……。

せめて、お皿を洗うぐらいしてくれればいいのに……。

逆に白馬君は、少し休憩を進めたいぐらいに、何でもしてくれる。

料理、洗濯、掃除、買い物と、自ら進んで……。

特に、買い物の際は本当に助かる。

博士が来れない時、私が持ち切れない物を持ってくれる。

“荷物持ち”と言ったら聞こえは悪いが、

彼はそれを喜んでやってくれる。

つくづく服部君には、白馬君を見習ってほしいと思う。

そんな事を考えながら、私は太陽の光がサンサンと照らせられた、

明るい街を見ながら帰った時の事を考えていた。

帰宅したら工藤君の検査結果をまとめて、

今後、彼の体に異常が起きないかどうかを調べる必要がある。

もちろん、異常など起きてはならない。

今はそれを願ひ続ける……。

工藤君と言えば、今朝の朝食を食べている時、

美味しそうに食べていてくれた。

白馬君が手伝ったとはいえ、私が作った料理・・・。

その料理を食べて、美味い

と言いながら、

笑って食べている工藤君の顔が嬉しかった。

まあそれは内心で、その気持ちが工藤君に届いてはいないが・・・。

997

そんな事を考えていると、目の前に多数の人の靴が見えた。

私はその正体を確認するために、視線を下から上に向けると、

そんなに多くは無いが、人混みが飛び込んできた。

右の車道には、車が休むことなく走り続けている。

（もう、ここに来てしまったのね）と、いつの間にか来ていた米花町の歩道を見ながら、

私は再び歩き出した・・・。

変化・消えない罪悪感と変わらない現実（後書き）

うん。

なんか今一だな・・・。

何というか、こっ・・・上手く表現できていないような、妙な違和感が・・・。

では、評価、感想等お待ちします。

変化・変わりゆく心と変わっていく心(前書き)

今日ようやく一話更新です。

今回は新一の一人称となります。

では、ごうござー！

変化…変わりゆく心と変わっていく心

(フウ・・・ようやく終わりか・・・)

今帝丹高校の最後の授業が終わった。

・・・正直、退屈の一言だ・・・。

授業の内容は俺が知っている事ばかり・・・。

授業中俺は、退屈な気持ちから出る欠伸を抑えながら、

“一応”教科書、ノート、筆記用具と、

必要な物を一式机の上に置いておいた。

まあ、“置いてあるだけ”で開いてはいない。

先生は俺のことを無視しているのかどうかは分からないが、

一回も当てられずに全授業が終わった。

仮に当てられたとしても、目を瞑ってても答えられるような問題ばかりだ。

でも、こんな退屈な授業が、

俺が高校に復帰した

という事を感じさせてくれる。

そんな授業が終わり、教材を鞆の中に手早く詰めると、

鞆を右手で持って席を立つ。

ガラッ という音と共に、椅子を机の中に戻すと、

俺の左の列で、二つ前の席の蘭に声を掛けた。

「蘭。帰るか」

俺が後ろから声を掛けたせいか、蘭は少し体を震わせて、

驚きの表情をそのままにして、顔を後ろに向けて俺の目を見た。

「!・・・新一」

俺を見ると、驚かさないでよ

と続け、

俺は素直に、ワリィワリィと謝った。

蘭は、フ

と、口元を少し緩めて笑った後、

「じゃあ、行こう」と言って席を立ち、

ガラッ

という音をさせながら、

椅子を机にしまった。

俺達はそのまま教室を出ようと、歩き出したわけだが・・・

「おゝ工藤！夫婦で帰宅ですか？」

それも、登校初日から」

その一人の男子生徒の言葉を合図のように、

ピュ〜ピュ〜
響き渡り、

と、口笛のやたら高い音色が教室中に

「ゴール地点へは何時頃到着で？」とか、

「いや〜羨ましい」

それに続き、パチパチ

と、

口笛以上の音で、教室に拍手の豪快な音が響き渡る。

俺は、その拍手と口笛の音にも負けないぐらいの声で、

「あゝ！！うるっせえよ！オメエら！」

その声が教室や廊下に響き、

クラスメイト達は静かになるどころか、

ますます勢いを増して、

「工藤が怒った〜！」と、面白半分に、

俺をからかうような声で言います。

俺は、（ホントに懲りねえ奴ら・・・）と、

内面で呆れながら、さっきから左隣で、

俺と同じく、「そんなんじゃないって！」と、

変なこと言わないで、と、

俺に負けなくらいの声で反論している。

そして、俺達はそのまま休むこと無い、

クラスメイト達のカラカイの声を浴びながら、

教室を逃げるように立ち去った。

・・・まあ、いつものことだ・・・。

・・・そう・・・“いつもの”・・・。

・・・でも、何かが・・・“何かが”足りない。

何というか・・・心にモヤモヤしたような感覚が・・・ある。

ただ、不思議と、

俺の意思じゃない……。

俺の体が訴えているような感じだ。

「キミハソレデイノ？」と……。

でも、俺は分からない。

その正体が……。

「……」
「……新……ってば……！」

「え?!」

俺は突然左隣から声を掛けられたことに、

愕然とした表情で左に勢い良く向く。

俺が蘭の顔を捉えると、

「どっしたの？新一」と言った後、

顔を歪ませながら、さっきからボーっとして、と続ける。

俺は、謎の“モヤモヤ”とした感覚を打ち消して、

何でもねえよ

と、笑って安心させる。

それを聞いた蘭は、

「何でもあるよ！新一がボーっとするなんて変だよ」

それを聞いた俺は、

(さすがだな・・・隠してるのバレバレか)

そう思いつつ答えようとするが、

自分でも分かっていないのだから話しようが無く、

正直に答えようとしたが・・・

「ちょっと関わっていた事件のことで気になることがあってな」と、

なぜか嘘を言った。

(ハ?・・・俺、何言ってるんだ?)

俺は改めて本当のことを言おうとするが、

口が開かない。

まるで、口がそれを言うことを禁じている

よじりたて・・・。

「事件？終わったんじゃないの？」

蘭は当然、俺の言ったことを真に受け止め、

歪んでいた表情をさらに歪ませる。

また、どこかに行っちゃうの？

と言っよつた。。。。

俺は、「そんな顔すんなって！もうどこにも行きやしねえよ」と、

蘭の問いには答えず、表情から読みとった、

蘭の内心の問いに答えた。

そっか

と、蘭は歪んだ表情を豹変させて、

蘭独特の笑顔を向ける。

組織の一員であるベルモットが、

エンジェル

と呼んだその笑みを……。

俺もその笑顔を見ると心が癒される。

俺達はそのまま、通り過ぎて行く生徒達をやり過ごしながら、

下足場で慣れた手つきで土足に履き替えると、

外に足を踏み出した。

蘭を左隣にしながら俺は、

夕日の茜色に染められた、登校時とは違う校庭、

これから部活動が始めるのか、

テニスラケットを片手に持つ生徒達……。

そんな目に映る光景を楽しんだ。

「ねえ、新一」

俺はその声に反応して、目を左にチラッと向け、

夕日に顔を照らされた蘭の顔を捉える。

（綺麗だ）

俺は蘭の顔を見た瞬間、そう思った。

夕日の茜色に照らされ、明るく無邪気な笑顔を見せている蘭は、

まさに“絵に描かれた上上の芸術”。

「新一、何見てるのよ」

俺はその蘭の声に我を取り戻し、

「え？ああ・・・いや・・・で？何だ？」と、

慌てた声で返事をした。

蘭は俺のそんな様子を気にせず、

あのさ

と言い始めるよ、

「新一は、今までどんな事件を追ってたの？」

「え？」

俺はその問いに、思わず声を上げる。

その質問は、何時かはされる

と思っていたが、

こんなに早く且つ、突然聞かれたことは、

予想外もいいところだった。

そのため理由を考えて無く、

俺は頭をフル回転させながら、理由を考える。

しかし、それと同時に“ある事”も考える。

何で答えることを躊躇うんだ、と。

組織はすでに壊滅して、生き残ったメンバーはいない。

ここで真実を話しても、問題は無いはず……。

まあ……蘭が信じるかどうかは別として……。

でも、躊躇う自分が居る。

……というより、言うのが面倒くさい
という考えが頭
にある。

(何でこんな事思っただ？正直に話したらいいじゃねえか)

そう思いながら、口を開こうとするが、

言葉が喉で止まってしまった ように、

中々話すことができない……。

俺はそんな気持ちを感じながら、

「どうしてそんな事聞くんだった？」と、蘭に尋ねた。

蘭は、そ、それは と言いつつ、

「知りたいから。今まで新一が何をやってたのかを……」

「蘭、知りたいだけ」っていう理由だけなら止めとけ」

俺は蘭の理由を遮って言った。

蘭は俺の言ったことに驚いたのか、

少し目を見開いて、教えてくれないの？
で、

と不安そうな声

俺の顔を見ながら言った。

俺は蘭のその表情を和らげるように、

急いで言い直す。

「あ、いや・・・長話になるし、それにオメエには関係ないしな」

蘭は話を聞き終わった後、

「え？・・・そっか」と、表情を少し和らげたが、

完璧に笑顔を取り戻さなかった。

寧ろ、表情は和らいだが、

雰囲気が悪くなったように俺は感じた。

（何だ？何かいけない事言ったか俺？）と、

その変わった雰囲気の正体を探るが、見つからない……。

そして、俺達二人はそのまま一言も話さずに、

校門を出て行った。

橙色の空を眺めながら……。

変化：変わりゆく心と変わっていく心（後書き）

うん．．．新一と蘭の恋愛感情の変化は、

描写しやすいような、しにくいような。

私なりに、描写できたつもりですが、

伝わりにくいかもしれませんね．．．。

では、評価等お待ちします！

変化・不安に支配されてく者（前書き）

こんにちは。

今日ようやく更新です。

実は書き方を“大幅”に変更しまして、

その詳しい方法を色々試していたところ、遅れてしまったわけです。

では、どうぞ！

変化：不安に支配されてく者

『関係ない』

今毛利蘭の頭の中には、
その言葉が繰り返されていた。

彼女の幼馴染であり、
恋人と言っても可笑しくない工藤新一は、
校門を出た時から、
一言も口を開かない蘭に疑問を持ち、
蘭の顔を横目で時々、
チラチラ と見ている。

「なあ蘭。どうしたんだ？」

新一は、考えても分からない、蘭が黙ってしまった理由を、
顔を彼女に向けながら尋ねる。

「・・・」

しかし、蘭は話し掛けられた瞬間、顔を下に向けてしまう。

まるで、新一と顔を合わせたくないように……。

一方、歩道を歩いて新一達とすれ違っている行人は、二人の雰囲気気を留めるが、話し掛けずに通り過ぎる。

「お、おい……蘭」

新一は行人の視線を気にも留めずに、下を向いてしまった蘭の顔を、覗き込む　　ように見る。

蘭は、自分の靴と地面しか見えない視線をそのままに、「ねえ、新一」と、

右隣りを歩いている新一に、聞こえるか聞こえないぐらいの声で言った。

新一は、ん？　　と軽く返事をする、それを車の走行音と共に耳にした蘭が、

「ちっきの……」関係ない』ってどついでついで？」

「『どついでついで』って……どついでついでだ？」

新一はフザケテルような言葉で聞き返すが、今の彼らは“真面目”である。

そのせいか、蘭も新一の返答を素直に受け止めると、少し顔を上げて、

この時間になると現れる、

買い物袋を持った女性や、疲れ切った体を全身から表現している、三十代ほどのサラリーマンが混じっている、人混みを捉える。

新一はやっぱり気付いてない……。

そう心の中で呟いた後、

蘭は正面の光景を見ながら、

少し低い声で、

「な、何かさ……新一……少し変わったんじゃない？」

蘭は新一の問いには答えず、
自らの内心を見せる
ように、
新一に尋ねた。

新一は蘭の顔を、不満げな表情で見つめながら、
そうか？
と、
思い当たるフシが無いように答えた。

しかし、蘭の表情が変わることはなく、
時間と景色だけが、
次々に過ぎて行く。

「なあ……もしかして、『関係ない』って言ったことに怒ってん
のか？」

新一は蘭の横顔と、
その向こう側に見える車や、人混みを視野に入れながら、
恐る恐る聞く。

しかし蘭は、
その問いに答えず沈黙してしまっている……。

「・・・悪かったな・・・ちよつと、言い方が悪かったな」

その沈黙を肯定と納得した新一は、正面に顔を戻して、素直に謝罪の言葉を述べた。

「蘭、『関係ない』って言ったのは、その・・・悪い意味じゃねえんだ。・・・何というか・・・その・・・」

「フフフ・・・」

新一が必死に謝ろうとしていると、蘭が突然肩を震わせながら、吹き出しそうな笑いをこらえ始めた。

「蘭？」

新一は何の前触れも無く起きたことに、
蘭を注視した。

蘭は新一の目線に合わせると、
堪えていた笑いを表現するように、
笑みを作って口を開いた。

「冗談よ！・・・分かってるよ、『新一があんな事は言わない』つて。

・・・まさか、本気で言ってると思った？」

「え？・・・ああ・・・いや」

新一は、蘭の言ったことが冗談だと分かると、
「ハハハ・・・オメエが芝居をしてたなんて最初から分かってたぜ」と、

大笑いしながら誤魔化した。

その大笑いしている新一を、
顔を向けながら見ている蘭は、
ホントにいゝ？

と、悪戯っぽく笑いながら、

新一の顔を注視した。

その後、
米花町の夕方の景色を目に入れながら、
歩を進める。

「じゃあ、蘭。また明日な」

「うん。新一も気を付けてね」

二人はいつもの丁字路で、
夕日に照らされて強調される笑顔を向け合って、
表情に似合う声を出して別れる。

蘭と別れた新一は、
自宅へ向かって、
人通りが少ない道を一人で歩いていた。

この道はいつも人通りがほとんどない……。
そのため、新一はこの道を通るたびに思う。

（夜は危険だな、ここは……。）と。

特に女性が一人で歩いていれば、誘拐には絶好の場所と言える。
しかも、

家は何件もあるが人通りが無いため、

助けて

と叫んでも、

助けに来る人はあまりにも少ない……。

そんな事を思いながら、

鞆を右手に持ちながら歩いていると、

ピリリリリリ……ピリリリリリ……

(ん？電話？)

新一は左ポケットに入っている携帯を取りだすと、
相手を確認する。

そこには、“服部平次”とあった。

(服部から？……あれ？アイツ今、博士ん家だよな……？)

新一は頭の中に疑問を残しながら、左親指で通話ボタンを押して、左耳にゆっくり当てる。

「もしもし・・・」

「おお、工藤。自分、学校終わったか？」

新一の、違う相手かもれない
という考えを、

打ち消すようなハイテンションな声が、
電話から聞こえた。

(相変わらずだな・・・コイツは)

そう思いながら新一は、服部の問いに、

ああ
と答える。

それに続き新一は、今も残っている疑問を服部に、声を変えずに聞いた。

「それよりもオメエ、今博士ん家だろ？」

「ちやうわ、大阪や」

服部は新一の問いに、ハイテンションな声をそのままに、
間を置かずに答える。

ハア？何で？

と、新一は服部に少々慌てた口調で聞く。

「ああ・・・それがやな、昼メシの後に和葉から電話もろつてのお

」

それから服部は電話の内容を、時間を掛けて丁寧に説明した。

服部の話によると、昼食の片づけを阿笠、白馬、灰原
がしている時、
ソファーで推理小説を読んでいた服部に、
一つの電話が掛かってきたらしい。

服部は小説に左手で槩を挟んで、携帯を右手で取り出すと、開いて相手を確認した後、通話ボタンを押す。

「もしもし」

「『もしもし』やない！あんた今どこにおんの？」

電話に出た瞬間、元気……というより、怒りの怒鳴り声が、服部の耳をつんざいた。

服部はその声に耐え切れず、思わず右耳から携帯を離して、再度当たった後、落ち着かせるように言う。

「か、和葉……そんなに怒鳴るなやな……」

（とは言っても……全然連絡せえへんかったからのぉ……。しゃーないか……）

服部は内心で思いながら、大阪の彼女の質問に答えた。

「今は東京や」

服部は躊躇うことなく言ったが、それが痛めにでる。

「東京?! あんたまだ居たんか!?!」

その服部の返答が、彼女の怒りの炎を強めてしまったらしく、和葉の声がより大きくなる。

やれやれ と内心で思いつつ、彼女とは正反対の冷静な声
で返答する。

「すまんな和葉。連絡すんの忘れとったわ」

服部は、ハハハ

と、誤魔化すが如く笑う。

一方阿笠達は片づけを終わり、服部の電話を邪魔しないように、服部の右にある、食事用の椅子に腰掛けながら、服部の様子を見守るように見ている。

「『忘れとったわ』じゃ、あらへん！

あんたのオトンもオカンも心配しとるんやで！」

服部は彼女の、『オトンもオカンも』という言葉を、聞き逃すことはできなかった。

そして・・・服部は彼女の様子から、「嘘は言ってない」と判断し、二秒ほどの沈黙の後、口を開いた。

「・・・ホンマか？」

「ホ・ン・マ・やー！」

服部の声質が低くなったことが気になったが、和葉は東京の彼の頭残るように、強く同じ言葉を再度言った。

服部はまた暫し沈黙して、（しゃーないな・・・）と頭の中で呟くと、

ゆっくり口を開く。

「・・・分かったわ。今から帰るわ・・・」

「!?!」

その服部の言葉に、腰掛けていた阿笠達三人は、無意識に目を見開いた。

和葉は、待つとるで
と言った後、ピッ
と
携帯の電源を切る。

服部は、ツーツー・・・という音が鳴り続ける携帯を切つて、右ポケットにしまう。

阿笠達は服部が携帯をしまつのを視認すると、内容を聞くことと口を開くが、先に服部が言葉を吐く。

「ジーさん、突然なんやけど・・・」

服部は言い終わると右に顔を向けて、彼らの頭にある、嫌な予感的中させるような表情をしながら、三人を視界に捉えて言った。

「俺・・・今から大阪に帰るわ」

阿笠、白馬、灰原は、やっぱり
と思いつながら、その言葉を受け止めた。

彼に余計な感情を持たせないために、無表情で・・・。

変化・不安に支配されてく者（後書き）

どうでしたか？新しい書き方は。

感想は、メッセージか感想のメールを送ってください。

その内容によって、これからの書き方の判断をします。

では、評価、感想、ご意見待ってまーす！

変化・西探偵の試練と父の温もり（前書き）

今日は私なりに過ごしやすいです。

・・・夏としては・・・。

では、ごんねー！

変化・西探偵の試練と父の温もり

「　　　　　ちゅわけや」

全てを話終えた服部は、フウ　　と息を深く吐き、
話疲れた口を休ませる。

歩きながらその話を、黙って聞いていた新一は、息を吐く音を耳に
すると、
そっか　　と、一言で納得の意思を伝える。

（まあ・・・和葉ちゃんが怒るのも無理ねえ・・・）

新一は前方に薄っすらと見えてきた、橙色に染まっている自宅と阿
笠邸を、
視認しながら内心で思う。

「それで今オメエどうなんだよ？」

和葉ちゃん怒ってねえか？
安心させるように言う。

と、続けて言うと服部は、

「ああ。オトンとオカンには正直に話したで」

和葉には嘘言っただけど・・・と、服部が言い終わると、
新一は『正直』という単語に反応して、
その意味を知るために問う。

「『正直』って、オメエまさか・・・」

「ああ。話してもうたで・・・組織のこと・・・。
何かマズかったか？」

別にマズいことはねえけど
に出して表現する。

と、新一は不満な気持ちを声

(少しは考えろよな・・・少しは！)

新一は心の中でツッコミながら、そのまま話を聞く。

「まあ、そういうことや。・・・何かすまへんかったな工藤。突然で・・・」

「いって。・・・こっちこそ悪かったな。学校に行っていたとはいえ、ちゃんと見送りもしないで・・・」

新一の謝罪を服部は、気にせんでええ　と、彼らしい明るい声で否定した。

それに続き、ほな　と別れの挨拶をすると、新一も、「ああ。じゃあな」と言っけて携帯を閉じた。

ちょうど新一は自宅の前に付き、夕日に照らされる洋館の門を開けた。

(やっぱマズかったんやろうか？)

服部は携帯を閉じた後、内心そう呟いた。

久しぶりに戻った我が家の自室で、服部は携帯を使って、東の大親友に連絡をした。

態々(わざわざ)自宅の電話ではなく、携帯を使って自室で電話をしたのは、

その会話を台所で夕食の支度をしている静華に、聞かれないためである。

(そやけど、もう話してもうたからな・・・)

新一には敢えて話さなかったが、服部も“話したくて話したわけじゃない”。

“話さざるを得なかった”。

大阪に新幹線で戻り、長期の間見ていなかった自宅を
視野に入れた服部は、

懐かしい・・・という気持ちを心に宿しながら、

自宅の玄関を開け、家中に聞こえるほどの大声で、

「帰ったで！オカン！！」と、叫んだ。

しかし、「お帰り、平次」という、母の声は聞こえず、

家の中は服部の声が響き終わった後、

夜の如く静まっていた。

(何や？留守かいな？)

あまりにも静かすぎる家内に不信感を抱いた服部は、
玄関の扉を静かに閉めながら思ったが、すぐに否定する。

(・・・いや・・・留守やないな。鍵が開いとった)

危機感　　というものを、“直感”で感じた服部は、物音を
立てずに静か且つ、

ゆっくりと靴を脱ぐと、爪先から家内の床に、音を立てないように

入る。

視界に二階に上がる階段と、台所と居間に続く廊下を捉えると、右肩に担いでいた灰色のバッグを床に置いた。

もちろん、ドサツ

という音を立てずに……。

因みに服部のバッグは、雪山の事件……そう、俳優の箕輪奨兵氏が殺害された事件で、雪が大量に詰まっていたバッグと種類が同じ物だ。

服部は爪先から床に足を降ろし、踵かかとを降ろすという音を立てずに歩く方法で台所に向かう。

七歩ほどで台所の入口に辿りつくと、顔をゆっくりと覗かせる。

最初に目についたのは、縦横一m十?ほどある茶色の机と、その机の右左に二個ずつ整理されている、机と同色の椅子。

その向こう側には、銀色の調理器具が“乱れ一つ無く”置いてある台所が、服部の視界に入った。

普段はその場所で母……静華が、包丁をタンタンと、食欲を誘う愉快的音を立てているが、今は物音一つしない……。

服部はそんな台所に不気味な感覚を覚えながら、顔を左へ向けて奥

を覗く。

視界に入ってきたのは、白色の冷蔵庫と茶色の食器棚。
しかし、人影は見当たらない……。

服部は、異常は無い
と判断して、廊下を三步ほど前進
して、

居間と廊下を隔てる扉に辿りつく。

フゥ
と、心の中で一息付いた服部は、ドアノブを右手で
静かに降ろし、
完全に降り切ったことを“感覚で確認”すると、
ゆっくりと扉を開けて、中の様子を少しずつ視認していく。

しかし、扉を五？ほど開いた時、居間の中から低い男性の声で、
「待つとたぞ。・・・平次」と、
忘れるはずが無い声が耳に届いた。

(!!)

服部はその声に内心だけでなく、両目を丸くして驚くと、
その声の主をハッキリと確認するため、

勢いよく扉を開ける。

「！・・・お、オトン！！」

服部は扉を開けて、居間の全てを視界に入れた後、

白色のソファで腕組みをしながら、

自宅でもその威厳を崩さない父、服部平蔵と、

その父の左側に、足を揃えて両手をその上に置いている静華が、
普段は見せない“厳しい目つき”で、服部のことを見ている。

静華はともかく、平蔵がここに居ることに服部は驚いたが、
それ以上に、その二人に向かい合うように腰掛けている、
黒髪をポニーテールにしている自分と同年代、

・・・そして幼馴染の女性がここに居ることが、
服部を驚愕させる。

「か、和葉！何でここに・・・？」

「ワシが呼んだんや。・・・『和葉ちゃんにも真実を話したるか』

思ってたなあ」

平蔵は右目だけを開けて、居間の入口に今だに突っ立っている息子を、

威圧的な目で見ながら口を挟んだ。

「ともかく、座れや平次」

平蔵は目を瞑って、平次に座るように促すと、服部は素直に言葉を受け止め、

和葉の左に腰掛けて、正面の静華を視界に入れ、右に腰掛けている平蔵も視界に入れる。

服部は両親を視界に入れた後、右で俯いている幼馴染に一声掛けようと思ったが、

両親そして、和葉の様子が“徒ならぬ雰囲気”を発していたため、声を掛けるのを断念した。

「な、なあオトン。・・・『真実』つちゆうことは、知つとるんか？！」

平蔵は肯定の返事を、首を縦に振ることで伝える。

その仕草を見た服部は、（何で知つとるんや？）という考えを頭に思いながら、

啞然とした気持ちで、父親を注視した。

平蔵はその視線を一切気に止めずに、啞然の表情を変えない息子自身にも、

一切気を止めずに口を開く。

「そやけど・・・まだ“何も言っへん”」

ふえ？ と、平蔵の予想外の言葉に思わず、奇妙な声を

上げる服部だが、

間を置かず、何やて？

と言い直す。

「お前自身から話すんや」

平蔵は両目を開け、威圧感ある目を息子に向けながら、まるで犯人を尋問する如く重い口調で、服部に言い放った。

服部はその父の目を直視して、背中に寒気と全身に戦慄を覚えると、何時も以上に恐ろしく見える、父親の目を見ながら口を開く。

服部は思わず目を逸らそうか
と思っただが、そんな事を
すれば、

今の父から逃げることになる
と思ひ、
決して視線を逸らさずに話始める。

左に静華、右に和葉を捉えながら……。

「そやな……どこから話したらええんやろつか……?」

服部は、話すことがあまりにも多すぎて、言葉に迷う。

そもそも、この三人に組織のことは話してもいいとして……、
工藤新一や宮野志保のことを話してもいいのだろうか？

本人の許可も無しに……。

まあ、彼ら二人のことを話さなくても、話は進められるが……。問題は父の平蔵だ……。

“この父親に隠し事は通じない”。
そのことは服部は十分に承知していた。

「話したくない事は話さんでもええで」

ちつとも話そうとしない服部に、平蔵は息子の、悩んでいる
という考えが、

見え見えな表情をチラツ と横目で見て、
息子の思考を言い当てるが如く言った。

服部は、へ？ と言って、父の顔を改めて見たが、
彼は目を瞑り、話したすのを待っているようだった……。

服部はそんな父の気遣いに、ありがとな、オトン と、内
心で感謝しながら、
威圧的な雰囲気を消した父から視線を外して、
平蔵、静華、和葉を視界に入れながら話しだす。

もじすく茜色に染まる血毛の中で・・・。

変化・西探偵の試練と父の温もり（後書き）

今回は服部平次をメインに描写しました。

もし、組織との戦いが終わったら、服部はどっするんでしょ？
ね？
彼の今後が楽しみです。

では、評価、感想等お待ちしてます！（＾　＾）

変化・居場所に帰って行く者達(前書き)

こんにちは皆さん(^ ^)。

今日は風が強く、湿気が多い一日です。

あーいやだ。。。。

では、さようならー！

変化・居場所に帰って行く者達

「ハア」

「ん？どした、蘭？」

新一が自宅に帰宅した頃、新一よりも近い位置に自宅がある蘭は、先に帰宅して夕食の準備を始めていた。

ただ、彼女の“雰囲気”がいつも通りではなく、居間で胡坐をかき、まだか・・・まだか　と、夕食を待っている態度では無く、台所で調理中の娘を、心配するような目で見ている。

蘭は、トントン　と包丁の音を響かせ且つ、父親の視線を背中に浴びながら、
敢えて気付かないフリをして、作業をテキパキ進めている。

「何でも無いわ」

「そうか・・・」

蘭は、心配掛けまいと明るい声で返答するが、表情を見せないように背中姿で且つ、

先程の溜息を聞き逃さなかった小五郎に対しては、
説得力は御塵も無い……。

小五郎は娘の返答に納得できなかったが、

今の娘には言葉を掛けても無駄　　と思い、口を閉じる。

蘭は目に映る、食欲を湧かせるように青々としたキュウリを輪切りにしながら、

待ち焦がれていた幼馴染

のことを考えていた。

(ハア)

本日何度目になるか分からない溜息を内心ですると、

これまた……今日一日で何度も思った、工藤新一のことを考え始める。

(新一は変わってしまった)

・・・そう、幼馴染は変わった。

一つ・・・“ たった ” 一つだけだったが、その一つが大きい。

関係無い・・・。

あんな言葉を今まで蘭は、彼の口から聞いた記憶は無い。
多分、当の本人は御塵も気付いていないのだろうが・・・。

しかし、蘭は感じている。

・・・幼馴染の心の中で、自分への変化があるのではないかと・・・。

本人にも気付かないような、微かな変化が・・・。

だが、それを知る術が無い。

本人に聞いても、気付いていないのだから、納得できる答えが返ってくるとは思えない。

・・・それに、“仮”にそのことを言ったとしても、おそらく彼を苦しめるのではないだろうか？

最悪、その気持ちに気付いてしまつのでないか？
そうならば・・・自分との関係も・・・。

その気持ちの正体を知りたい・・・でも、新一を苦しめたくない。

彼女の内心は、その矛盾で満たされていた。

この矛盾を払いたい・・・でも、言う勇気が無い。

蘭は作業を終えると、父と机を囲んで夕食に箸を付け始める。

彼女は笑って、向かい合わせに座っている父親と、会話を弾ませながら箸を進めるが、

心の底から笑ってない笑顔に、“癒し”は宿っていない……。

小五郎はその蘭の笑顔が、“無理やり”なものと分かった上で、会話を娘と同じく笑って楽しんだ。

しかしその父親の笑みも、無理やり作ったものであるため、娘に癒しは届いていない……。

そんな偽りの楽しみで包まれた夕食を食べ終え、洗い物、入浴を済ませた蘭は、その矛盾を心に抱いたまま、何の進歩も無く夜を過ごしたのだった……。

一方少し時間を戻し、工藤邸に帰宅した新一は、自室で手早く私服に着替えると、
雷いかづちの如く速さで玄関を飛び出して、
隣の阿笠邸の玄関に飛び込んだ。

バタン

という音に、台所で夕食の支度をしていた、

阿笠、白馬、灰原は、
何事か　　と言つような驚いた表情で、顔を後ろに向けると、
玄関の扉を閉めている新一を注視した。

「新一、どうしてここに？」

阿笠は右手に包丁を持ちながら理由を尋ねるが、“大体の予想”は
できていた。

阿笠同様、作業を止めて新一を見ている二人も同じである。

「ああ。夕食ここで食べようかって思ってたさ」

新一はジト目で見ている、阿笠と灰原を視界に入れながら、
ダメか・・・？　　と、後頭部を右手でボサボサ
かきながら言つ。

因みに白馬は、三人の様子を気にしつつ手を動かしている。

「あ、ああ・・・構わんぞ」

なあ哀君 と、阿笠は左隣りで作業をしている灰原に、
了承を求めると見下げて言った。

灰原は顔を戻して手を動かし始めると、「もう作っちゃてるわよ」と、
出て行きなさい と言うように、冷たく言い放つ。

「まあ・・・そう言わずに、今からでも作れますから・・・」
それに、食事は大勢で食べたほうが楽しいですからね」

白馬は説得させるように笑って灰原に顔を向けた後、
笑みをそのままに顔を戻して、作業を再開する。

灰原は、仕方ないわね と言うように、「好きにきなさい」と、

ぶつきら棒な言い放ち作業に集中する。

「サンキュ、灰原」

新一は背中姿の灰原に笑顔でお礼を述べると、ダイニングチェアに腰掛けて、
台所で作業をしている阿笠ら三人の背中を、
口元を緩めた柔らかい表情で見つめる。

それから時計の秒針の音、台所から聞こえてくる、
グツグツ という煮え込みの音を聞きながら、
新一は出来上がる料理に心を踊らせる。

・・・暫くして、白い湯気を立てた味噌汁や、水色のご飯茶碗に盛

り付けられた、
降り積もった雪の如く白々としたご飯。
後は豆腐や野菜、魚と、カロリーを抑えたおかずが、
丁寧に並べられる。

(随分とシンプルだな・・・)

新一は並べられたメニューを見ながら内心で思うが、ああ・・・博
士のためか　と、
すぐに思い直す。

おそらく、阿笠一人だけこういうメニューは可哀想と思い、
灰原が全員同じメニューにしたのだろう・・・。

そんな事を思いながら新一は、左の席に白馬、向かい合わせで阿笠、
阿笠の左に灰原が席に付いたのを見ると、
両手を合わせて食事を始める挨拶をする。

「いただきます！」

その挨拶に合わせて、阿笠ら三人も両手を合わせて、いただきます
と、
笑みを浮かべながら挨拶をして、阿笠邸での夕食が始まった。

「ところで新一」

「ん？」

阿笠はご飯茶碗と箸を持ちながら、味噌汁に手を付けている新一を
呼ぶ。

新一は、口に付けた味噌汁の御椀を一旦離して、阿笠と視線を合わ
せる。

返事をした後、何だ？博士
と続けると、
阿笠は用件を口にする。

「服部君のことは聞いたかね？」

「ああ。下校中に電話が掛かってきたからな」

新一は言い終わった後、味噌汁を飲んで御椀を置き、おかずに箸を伸ばす。

そのおかずを良く噛み飲み込むと、目だけを白馬に向けて口を開く。

「なあ白馬。オメエは何時帰るんだ？」

白馬は箸を止めると、横目で新一の目を捉えると、それは

と話始める。

「正直分かりません。父上からは、『好きにしる』と言われていますが、

何時までもここに長居するつもりはありません」

いくらなんでも迷惑ですから
と、白馬は言い終わる
と視線を下に向ける。

阿笠は、そんなことないぞ
と、はばをきかせるが、
白馬はその言葉に甘えることはなかった。

因みに、この時三人の会話を箸を進めながら聞いていた灰原が、
(私としては出て行ってほしいわね)と、内心で呟いたのを知る者
はいない……。

「そっか。何か残念だな……」

「そうじゃな・・・」

新一と阿笠は、残念な気持ちを言葉と表情で表現するが、白馬の考えは変わらない・・・。

特に新一は、白馬に感謝していた。

組織を倒せたのは彼のおかげでもある。
自分達と一緒に捜査をして、アジトに乗り込み戦い抜いた戦友だ。

服部にしてもそうだが、新一は彼ら二人に感謝してもしきれないほどの恩がある。

・・・しかし、今の自分にできることは“あまりにも少ない”・・・。

新一はそんな自分に苛立ちを覚えるが、すぐに消し去って箸を進めている白馬を、

横目でチラッと見つめながら、

（ありがとな、白馬）と、彼にお礼の言葉を述べるのだった。

その礼を知ってか知らずか、白馬は口元を少し緩める。

新一はその事に気付くと、フッ

と内心で微笑み、

食事を再開するのだった……。

変化・居場所に帰って行く者達（後書き）

さて、今回は毛利邸と阿笠邸の両方を描写しました。

白馬はもう少しでお別れにしようと思ってます。

しかし、その後の彼をどうするか・・・悩み中ですw。

では、感想等お待ちしてます！

変化・小さな少女の内心と突如の飛報（前書き）

皆さんおはようございます、こんにちは、こんばんは（^ ^）。

さて、今回は灰原の一人称となります。

では、どうぞ！

変化：小さな少女の内心と突如の飛報

「以上が我々が掴んだ情報です。しかし、この情報以外にも、

警察が隠している情報が多数あると見られ、

私達は今後も調査を続けようと思っております」

「とうとう報道されたか・・・」

昨夜、工藤君が夕食を食べ終わって帰宅しようとした時、彼の携帯が何の前触れも無く音を発した。

工藤君は玄関で土足を履いて、身に着けていた変声機をイジって、江戸川コナン用の電話に出ると、「ジヨディ先生」と、相手の名前を呼んだ。

私はソファで、食後のコーヒを少しずつ飲みながら、笑って話している工藤君を横目で見ながら、彼の反応を見ている。

工藤君は、「うん」とか、「それで？」という、懐かしい声色と口調で返事を時たましながら、

そう、「一人も」。

「ありがとう！ジョディ先生」

私はそんな事を考えていると工藤君が電話を切って、なぜか土足を脱ぎ家内に再び入ってきた。

私は深刻な表情を御塵も崩さずに歩いてくる工藤君に、どうしたの？ と声を掛けたが、工藤君は溜息を深く付いた後、博士の左に腰掛けて私の目を見てきた。

「とじとじ、」の「この時」が来たってところだな・・・」

「この時？」

私は工藤君の言っていることが理解できず、無意識のうちに聞き返していた。

博士もそんな様子で、首を傾げながら右隣りに座っている工藤君を見ている。

「ああ。マスコミが・・・“組織のことを報道する”らしい」

「な、何じゃと?!!」

博士は丸い目をさらに丸くして、驚愕の声を上げた。

もちろん私も驚いたが、声は喉で止めてそのまま唾液と一緒に呑み込んだ。

私はポーカーフェイスを保ちながら、工藤君に冷静に質問した。

「どついでとっ。」

「ああ。俺達には言ってなかったが、
どつやら今まで組織のことが報道されなかったのは、
FBIが押さえていてくれたおかげらしい」

なるほど
を注視する。

と内心で呟いた私は、口を開き始める工藤君

博士は冷静さを取り戻しつつ、それで今まで静かだったんじゃな
？と、

工藤君の顔を見ながら意見を言った。

工藤君は横目で博士を捉えると、ああ
と、短く返事をし
て、
再度視線を私に向けた。

「ただ、マスコミにバレているのは組織の犯罪の事だけで、アポトキシンの情報はバレていないらしい」

これは組織に感謝だな
言つと、

と、工藤君は苦笑い混じりに

博士も納得したように頷き、
私も「ええ」と、納得の言葉を言った。

・・・これには感謝しなくてはいけない。
変な言い方だけど・・・。

もし、アポトキシンの情報が漏れていたらどうなっていたことか
・・・。

世界は想像絶するパニックに陥るだろう。

それ以上に私達だ。

研究者達がこの情報・・・幼児化の情報を入手すれば、私達のとがバレる可能性がある。
そうなれば最悪、実験材料に・・・。

まあ私はいいとしても、工藤君だけは守らねば。

彼女のためにも・・・。

「どうした？灰原」

私は突然工藤君に声を掛けられた。

どうやら、自分の世界に入ってしまったらしく、様子が変わるのを察したのだろう。

私は心配している心丸見えの目をしている工藤君に、

「何でも無いわ」と、相変わらずの無愛想な声質で答える。

工藤君は「そうか」と、口元を緩めて安心した顔を見せると、それに釣られる様に博士も笑う。

(心配性な人達・・・)

その笑顔を見た私は、内心でそう思うと同時に、この人達は本当に自分を心配してくれていると、改めて彼らの心の温もりを感じる。

・・・しかし、この温もりを見せられる度に、私の“心”という名のガラス玉にヒビが入る。

まだ誰にも言うてはいなけど、今の私の中には“ある疑問”があ

る。

・・・それは、自分がここに居てもいいのか？という疑問。

私がここに居た最初の理由は、工藤君と一緒に組織を倒して解毒剤を完成させること。

・・・この理由はもう達成している。

組織はFBI、服部君、白馬君・・・そして、工藤君の協力で倒すことができた。

そして工藤君は元に戻り、蘭さんとの幸せな生活を取り戻しつつある。

でも・・・“その理由”が達成された瞬間、

私と工藤君との関係も“終わり”を迎えてしまったような気がする。

そもそも、工藤君と私が繋がっていたのは、組織とアポトキシンの鎖のみ……。その鎖が断ち切られた今、私と工藤君を繋ぐものも無い。何

今、目の前で私を見ている工藤君は、私のことをどう思っているのだろうか？

相棒？

仲間？

友達？

……分からない。

でも、その答えが知りたい。

彼が私の事をどう思っているのか、を。

それを知りたい・・・でも、聞く勇気が無い。
もし聞いてしまったら、後戻りできなくなるような・・・そんな気がしてならない。

「あれ？工藤君まだ帰っていないかったですか？」

突如右側から声が出たことで私は考え事を中断し、
寝巻姿でこちらに歩み寄ってくる白馬君を視界に入れる。

まだ乾ききっていない髪を、白いタオルで拭きながら歩み寄ってくる姿は、

いい湯だった

と言ってるように感じる。

「ああ。ちょっと重要な話ができてな」

工藤君は博士と一緒に、風呂上がりの白馬君を見ながら、
高くも無く低くも無い声で言った。

白馬君は髪を拭く手を止めて、「重要な話とは？」と、軽く首を
傾けて、
重い声質で聞き返す
が。

「それは、博士と灰原から聞いてくれ」

工藤君は重い腰を上げながら白馬君に言つと、「じゃ、帰るぜ。おやすみ」と言つて、
長ズボンのポケットに両手を突っ込みながら玄関に歩き出す。

私達三人は“その気”は無かったが、おやすみ と、声を揃えて、
背中姿の工藤君を送り出した。

工藤君は右手を上げて返事をする、月明かりが照らす夜の街に出て行つた。

玄関の扉が閉まると白馬君が工藤君が腰掛けていた場所に座り、私と博士を交互に見ながら、

「話してくれませんか？彼が言っていた『重要な事』というのを・

・と、
謹直な顔きんちよくをしながら、その表情に似合う重い声で言つた。

私は普段の微笑みが似合う白馬君とは全く違つ、
正反対の威圧感ある目を見ながら軽く頷くと、
工藤君が話したことを一言一句残さずに話始めた。

私は白馬君に話している最中、

彼の返事を聞きながら、頭の中では別の事を考えていた。

（組織のことが報道されたら、蘭さんはどんな反応みせるだろう？）

“何も反応しない”・・・それは無いだろう。

マスコミは日時も報道するだろうから、

その時間と工藤君が帰ってきた日にちが近いことに気付けば、辿りつく答えは一つ・・・。

（幼馴染が関わっていたのは“この事件”だと・・・）

そうならば、彼女は幼馴染にどんな考えを持つだろうか？

・・・良い考えは持たない・・・。

私は毛利蘭ではないから、彼女の心は分からない。

・・・でも、プラスの方向に考えることは無いだろう。
それだけは分かる。

あの女性は他人事の事も自分の事のように心配する。
それは、これからも変わらないはず・・・。

そんな分かるはずもない自分自身への問いの答えを見つけている
と、
話を聞き終えた白馬君が口を開く。

「分かりました。今後はマスコミの動きにも注意が必要ですね」

「そうじゃな・・・」

博士が白馬君の意見に同意するように言うと、
白馬君は表情を和らげて、“普段の彼”に戻った。

そして私達は、私が淹れた紅茶を飲みながら一息付いて、
一日の疲れを癒すべく、目を閉じた……。

変化・小さな少女の内心と突如の飛報（後書き）

さてと、そろそろ次話から進展させようかと思えます。

まあ、どうなるかは分かりませんが・・・。

では、評価、感想等お待ちしてまーす！

変化・抑えられない欲望と耐えることの無い苛立ち（前書き）

おはようございます、皆さん。

・・・とは言っても、そんな時間じゃないかもしれないかもしれませんねw。

さて、評価とお気に入り登録ありがとうございます！（＾O＾）
今朝見たら驚きました！

これからも気を抜かずに努力していきたいと思っておりますので、
よろしく願います（＾＾）。

では、本編どうぞ！！

変化・抑えられない欲望と耐えることの無い苛立ち

あれから一週間

そう、それはまさに突然だった。

“世界的犯罪組織壊滅”

このニュースはその日の朝刊、夕刊の一面を埋めてあっという間に広がった。

まさに、電光石火の如く……。

ただ、警察が隠している情報が幾つかあるらしく、判明しているのは、

鳥矢町の高層ビルで激しい銃撃戦があったこと。

その銃撃戦で多数の死者が出たこと、

ビルの地下に広大な研究施設があったことの三つ。

しかし毛利小五郎の娘、蘭にとってそれはどうでもよかった。彼女にとって問題だったのは、“時間”である。

幼馴染であり、互いに正直になれないではいるが、恋人と言っても過言ではない人、

工藤新一から、もう少して帰れる　　という電話をもらった日から三日後……。

蘭はその日にちを、赤色のスーツに身を包んだニュースキャスターが言った瞬間、
思わず右手に持っていた箸を落としそうになった。

反面、向かい側でそのニュースを大して気に留めずに朝食をとっていた小五郎は、
娘の様子に気付かずに着を進め続ける。

蘭はそんな父親の態度は目に入らず、頭の中で一つの考えに辿りつく。

幼馴染が関わっていたのはこの事件かもしれない・・・と。

その考えに至った瞬間居ても立っても居られなくなり、

蘭は食べ掛けの朝食をそのままに、携帯を片手に立ち上がると、小五郎の呼びかけにも答えず自室へ入る。

そして馴れた手つきで、自分でも押しているのか分からないほどの速さで、

ある人物の番号に掛ける。

数回のコール音で電話の主は、「もしもし」と電話にでたが、蘭にはそのコール音がやたら長く感じた。

そして、心臓がドラムの如く高まる中蘭は、もしもしと続けて、

相手の言葉を待たずに本題に入る。

「今ニュース見たんだけど、新一が関わっていた事件って犯罪組織の事件なの？」

蘭は溢れてくる“聞きたい”という気持ちを抑えられず、
相手が聞き取れているかどうか分からないほどの早口で話した。

「・・・」

「ねえ新一、聞いてる？」

「・・・」

再度の問いかけにも沈黙で言葉を返す幼馴染に蘭は、
自分の言っていることは間違っていないと、確信する。

しかし、それでも少しの否定の返事を期待して、
幼馴染の返事をひたすら待つ。

・・・密室状態の自室で、自身の呼吸の音、
机に置いてある時計の秒針の音を聞きながら、
蘭はとても長く感じられた、二十秒足らずの時間を過ごした。

「・・・ああ、オメエの言うとおりだ」

電話からは、認めざるを得ない
声で、
肯定の返事が返ってきた。
とでも言うような低い

そしてその返事に続き、「すまねえ」と謝罪の言葉が聞こえたが、

・・・しかし、彼の返事を聞かない内に、
思いもよらない人物の音が扉越しから聞こえた。

「蘭！いつまでいるんだ？！学校遅刻するぞ！」

その父親の大声で、反射的に机の時計を見た蘭は、
もうこんな時間　　と、内心で思うと、左手で携帯の声を送
る部分を抑えながら、
「分かった！」と、了承の返事を扉に向かって、大声で返した。

扉から離れて行く小五郎の足音を聞きながら、
蘭は左手を外して再び話します。

「新一。続きは学校でね」

「ああ。じゃあまた後でな！」

新一は中々電話が終わらないことに困っていたらしく、慌てたように早口で言った後、電話をすぐに切った。

蘭は今から歩いて行けば、学校にはまだ余裕で間に合うが、登校中に新一から話を聞こうと思い、携帯を素早く制服の上着の右ポケットにしまい、ベットのの上に置いてある、教材が入った鞆を取ると勢いよく扉を開けて、自宅を飛び出す。

その勢いを少しも緩めず、階段を降りながら事務所に居る父に、いつてきます！ と、朝の空気に似合う元気な声で言つと、返事を待つことなく工藤邸まで走った。

蘭が事務所を発ったころ、ここ警視庁正面玄関。

普段は制服警官が警棒を片手に入口を見張っているが、最近ではここに、蜂の群れの如く集まる集団がある。

「何とか言ってくださいよ！警部！！！」

「ノーコメントだ！！！」

「警部！！！」

入口で群れを防ぐ壁のように立ちはだかっているのは、捜査一課の目暮十三警部である。

そして、その目暮を質問攻めにしながら押し寄せているのは、マイクやカメラを手にしたマスコミの集団である。

目暮はその集団を入り口の前で、

警視庁の制服警官や刑事達と一緒に押し戻している。

その刑事の中には白鳥、佐藤、高木、千葉も含まれていた。

しかし、その四人もマスコミという波に飲まれてしまい、

目暮の位置からは影も見えない……。

目暮はその事を一切気にせず、

眼前のマスコミをどうにかする方法を考えているが、

彼らの休むことを知らない質問に答えるのに、精一杯の状態である。

「ノーコメントと言ってるだろ！…どれだけ質問しようと考えは変わらない！…」

目暮はその言葉を言い放つと、
まだ質問を続ける彼らに苛立ちが頂点に達し、
背中に聞く耳持たずのマスクミの声を浴びながら、
警視庁の入口を潜った。

その足で目暮は松本管理官と話すため、ロビーを抜けてエレベーターに乗り込む。

彼以外誰も居ないエレベーターの中で目暮は、
扉の上に点滅し続けている数字を見ながら、
上へ上へ上がっていく気圧を体全体で感じながら、到着をひたすら只管待つ。

ハア・・・

目暮は上がり続けるエレベーターの中で、マスコミに対する苛立ちと、

彼らの諦めの悪さを溜息という形で外に出す。

「全く困ったものだ・・・」、そう目暮は呟くが、その言葉は上昇する箱の中に、多少響いただけだった・・・。

チン・・・という音と共に、

エレベーターが目暮に到着を知らせると同時に、扉が開くと見慣れた光景が目飛び込む。

一直線に長い通路の左の壁に、クリーム色の扉が一定の間隔で取り付けられている。

そのクリーム色の扉に適應するように、天井、壁、床が白色に塗装されている。

この光景は何度も見たが、今回は“一つだけ”違うことがあった。刑事がエレベーターの前で八人ほど待っていたことだ。

目暮はその光景にはさほど驚かず、右肩を前に出すようにして、黒色や灰色のスーツを着こなした、刑事と刑事の狭い間を歩いて行く。

「失礼します」

目暮は礼儀として言葉を言つと、
重く感じられる扉を右手でゆっくり開ける。

中に入り、黒色の回転椅子に腕組みをしている男に、
頭を深く下げ一礼すると、音を立てないように静かに扉を閉めた。

「管理官……」

「目暮」

扉を閉めた後、威圧感を絶やさぬ男と茶色の机越しに正面に立ち、

互いに相手の名を言うことで挨拶を交わすと、
目暮は早速本題に入った。

。 自分を睨みつけるような目をして見てくる男の瞳を見ながら……

変化・抑えられない欲望と耐えることの無い苛立ち（後書き）

今回は久々に松本管理官や、目暮を含めた警察の人々を登場させました。

あまりにも未登場だったため、忘れていた読者さんも多いのでは・
・？w

では、評価、ご意見等お待ちしてまーす！（＾　＾）

変化・亀裂が入り始める関係（前書き）

今日はまた暑い日です・・・（^^;）。

「夏なんだから・・・」と言われてたら、
返す言葉もありませんが・・・w。

では、どつど！

変化：亀裂が入り始める関係

「新一く！！！」

「ん？」

『新一』と呼ばれた、青色の制服に身を包んだ青年は、頭に焼き付いているほどの声を背中から感じて振り向くと、肩を激しく上下させて、ハアハア・・・と、とても荒い呼吸をしている女性を捉える。

「蘭？！・・・オメエまさか走って来たのか？！」

新一は彼女の様子から、全力疾走でここまで来たことは予想できていたが、
信じることができずに思わず口に出す。

『蘭』と呼ばれた女性は、額から顎にかけて少量の汗を流しながら、
荒れた呼吸を深呼吸で、
数秒かけて整えてから、固い表情で大切な人の顔を見ながら口を開く。

「ええ・・・少しでも早くさっきの話の続きが聞きたかったから・・・」

「だからってオメエ・・・走ってくるか？普通・・・」

（学校の帰りでも話せんだろうが・・・）と内心で思いつつ、
呆れた表情を見せながら新一は、
「とにかく歩くぜ。このままだと遅刻すつからよ」と、
蘭に促した。

蘭はその意見を素直に聞くと、いつも通りに彼の右側を、
肩を並べて歩き始めた。

今日の天気は雲の影一つたりとも見えない青空に、
太陽がサンサンと輝く晴天そのもの。

しかし、この二人の心はその天候に似合わない、
雲が掛かった曇り空……。

そんな太陽の光の恵を体一杯に浴びながら歩き始めた蘭は、
さっそく顔を左に向けて新一の顔を捉えると、

今でも心中に溢れ続ける、“知りたい”という名の欲望を、
何の躊躇いも無く彼にぶつけた。

「新一、さっきの話なんだけど……」

「ん？」

蘭の視界に映る“彼”は、普通に返事を返した。

しかし蘭は、その普通が異常に感じられた。

理由は・・・“彼が自分を見てくれないこと”・・・。

左で自分と同じ歩調で歩き続ける彼は、ずっと正面を向いたまま歩いている。

いつもならどんな些細な話でも、彼は自分に視線を送ってくれた。

口元が緩み太陽の光を浴びて微笑むその表情は、
ある友人の言葉を真似れば、キラキラした顔
が相応しい。
という表現

・・・でも、今の彼は“百”では無い・・・。

自分が想像している工藤新一とは何かが欠けている……。

まるで……その話題には触れて欲しくないように……。
しかし、蘭はそれでも聞かねばならない。

今まで彼が何をしていたのかを……。
結果、彼を気付ける事になるかもしれない。
でも、思ったのだ。

ここに走ってくる途中で彼女は、自分の頭で自分なりの答えを出した。

(気付けることを恐れていては前に進めない)

しかしその答えで、気付けたくない
という考えが、
完全に吹っ切れたワケではない。

彼女の心にはまだ、迷いが微量だが残っていた。
その迷いを半ば強引に蘭は吹っ切って、

今だに正面を向き続けている彼に問った。

「ねえ……」

「蘭、あのさ」

突然口を挟まれたことに蘭は、え?!

と、

動揺と驚きを隠せずに無意識に声を出した。

反面新一は、自分の目に視線を浴びせ続ける蘭を直視せず、通学路で必ず見る見慣れた光景を視界に入れながら、蘭の問いには答えず、自分の考えを言い放つ。

「オメエの言いたいことなんだけどよ……」

何？　　、　　蘭は先程とは真逆の声を出した新一に再度驚くが、

それは内心だけに留めて、新一の話を聞こうとするが、彼の雰囲気やその声色から、“良い予感”はしない……。

「聞かないでくれねえか……」

「どござして……？」

蘭はその言葉が受け止めきれずに、その場に立ち止まってしまふ。

新一は突然立ち止まった彼女にすぐに反応して、

蘭の一步先で止まり振り向いて、

彼女の寂しげな表情を捉える。

因みに通行人達は、道の真ん中に突っ立っている二人を、迷惑そうな目で見ながら通って行く。

しかし、新一と蘭はその視線には全く気付かずに、

話を進めようとする。

「なんつーか……その……話したくねえんだ」

新一は溜息混じりに語るが、蘭は諦めることを知らない。

「どづして？……どづして話してくれないの？」

「……」

「昔は話してくれたたよね？どんなに小さな事件でも細かく……。でも、どうして？どうして……。この事件の事は何も話してくれないの？！」

ずっと待ってたのに……」

蘭は壊れたテープのように、どうして
繰り返す。

という言葉を

そして、顔を自分に向けてはいるが、
目線が下を向いている彼の頭に焼き付けるように、
声を徐徐に大きくしていく。

その声は新一だけでなく、
彼らをやり過ぎしながら歩く通行人の気を一瞬引く。

「ワリイ・・・蘭。俺自身にも良く分からねえんだ・・・」

何でなのか不思議だけどよお
りに語る。

と、新一は苦笑い混じ

新一は言い終わった後、蘭の目線に合わせるが、
今度は逆に蘭が目線を逸らす。

「蘭?!」

新一はその蘭の仕草が信じられず、
驚愕の声を上げて、
それを強調するように目を丸くする。

・・・自分が同じことをしたとは、御塵も気付かずに・・・。

蘭は新一の気持ちを知ってか知らずか、
視線を逸らしたまま歩道の灰色のタイルと、
一定の間隔で見える黒色の革靴やハイヒールシューズを見ながら、
重たい口を開き始める。

・・・しかし、その声は小さく、活力が感じられなかった。

「なんかさ・・・新一、ホントに変わったよね」

「え？」

変わったのか？俺が・・・？
と、

新一は蘭に問いかけるように呟くが、
眼前で視線を違う場所に向けている彼女は、
突然振り向いて背中姿で新一に語った。

「私・・・帰る・・・先生には適当に言っというて・・・」

「え?!ら、蘭?!!!」

言い終わった後まるで、

自分から離れて行くような走り方で帰って行く蘭を見て、

彼女の背中に向かって思いつきり叫ぶが、

自分から離れて行く蘭の足は止まらず、

あっという間に人混みの中に消えてしまった……。

ハア……

深い溜息を付きながら新一は、

蘭とは逆の方向に向かって歩き始めた……。

……この行動が彼女の心を、さらに傷つけることになるとは知らずに……。

新一は重い足を無理やり動かしながら、
やや早歩きで学校に向かう。

(何で俺、学校に向かってんだろっ?)

そう彼は無駄に歩を進めてはいない……。
さつき別れた彼女の事を考えながら進み続けている。
……。というより、
なぜ自分は彼女を追い掛けなかったのか
を考えている。

『ホントに変わったよね』

今彼の頭には、その言葉が繰り返されている。
カセットテープの巻き戻しの如く、何度も・・・何度も・・・。

新一自身、それは自覚していた。
“確かに自分は変わった”と・・・。

しかしそれは、コナンとなり色んな人々と出会い、
様々な経験をして、
心身共に成長したことによるもの
と想っていた・・・。

・・・でも、何か違う。

以前の自分・・・組織と出会う前の自分なら、
蘭がさっきのように離れて行ったら、
追いかけていたはず・・・。

でも今の自分は、彼女の方向ではなく学校の方向に歩を進めてい
る。

しかし彼女、毛利蘭が“どうでも良くなった”という気持ちは無い・
・・・。

今でも自分の心にあるのは蘭だ。

・・・それは変わらない。

いや、“そうだ”と信じてる。

ではなぜ今自分は彼女を追いかけないのか？

その疑

問の答えは、
まるで出ない。

新一は全く進まない疑問に少々苛立ちを感じながら、
登校への足を止めずに進み続ける。

・・・気持ちの変化に答えが出ないまま・・・。

変化・亀裂が入り始める関係（後書き）

今回は新一と蘭の関係を、大きく変化させました。

まあ、“新志に一步近づいた”って感じかな。

では、評価、感想、ご意見等お待ちしております！ (^ ^)

変化・追い詰めて行く心と悔やみ続ける心(前書き)

昨日書き掛けた小説を、ようやく更新できましたw。

では、どござー！

変化：追い詰めて行く心と悔やみ続ける心

「ん？・・・蘭?!」

事務所で依頼人を待ち続けた小五郎は、

閉まっていた事務所の扉の窓に映った見覚えのある人影に、
嘘だろ？
という考えを浮かべながら、
駆け足で扉に近づき、その勢いのまま開ける。

ボタン！
という音が、通路中に響き外まで響き渡ると、
その轟音を聞いた人影の主は、
自宅のドアノブに手を掛ける寸前で、
階段の下から自分を見続ける父の姿を捉える。

・・・ただその父は、
自分がここにいることが信じられない
情で見ている。
こんな父はほとんど見たこと無い・・・。

と言うような表

「蘭?!オメエなんで?・・・」

父はその表情をそのままに、
階段を一段一段重い足取りで昇ってきながら、
目を丸くしながら言い放った。

「ああ・・・お父さん。ちょっと・・・気分が悪くなっちゃて・・・」

「そ、そうか・・・。待ってる!今車用意するから!」

小五郎は蘭の返答を聞くと、娘の一大事
とでも言っよ
うな、

焦りの表情と声を上げて階段を駆け降りようとするが、

「待つて、お父さん！！」という、娘の大声に引き止められる。お

小五郎は振り向いた体をもう一度振り向かせて、
娘よりも二段下で彼女に体を向けると、

何だ？

と、

先程の声とは正反対の冷静な声で返事をする。

「病院はいいよ・・・そんなに悪くないし」

「で、でも・・・」

「大丈夫よ！ちょっと休めば治るから！」

蘭は、父の不安を消し去るように元気良く振る舞う。

・・・しかし、そんな芝居で父親の目を誤魔化すことはできず、
小五郎は蘭の無理に輝かせている瞳と表情を見ながら暫し黙り込む

が、
「そうか・・・無理はするなよ」と、
事務所の扉にゆっくりと足を運び、音を全く立てずに閉めた。

蘭は事務所の扉が閉まるのを目視すると、
偽りの笑顔を消して真まことの表情を作り、
自宅の扉を静かに開けて中に入って行った・・・。

重い足を動かしながら蘭は自室に入り、
鞆を机の右側に立て掛けて、ベットに倒れ込むようにつつ伏せに寝る。

「何でこうなっちゃたんだろう・・・？」

蘭は一人しか居ない自室で、自分自身の心に問いかけるように、
やや泣き声で呟く。

・・・しかし、その声は部屋に響くことも無く消えてしまう・・・。

その儂さを埋めるように、窓から太陽光が蘭の背中を照らし続けるが、

今の彼女はその恵みを避けたい気分だった・・・。

そして、彼女は心の中で自問自答する。

(どうして新一は変わってしまったのだろうか?)

事の発端は、彼が帰ってきたあの日に言われた、『関係無い』という四文字の言葉。

しかもその言葉を、彼は御塵の躊躇いも無しに言った。

それは、“本気でそう思っている”ということ。

以前の彼はそうじゃなかった……。
どんな事だって話してくれた。

些細なことでも細かく詳細に、
それも楽しそうに……。

……でも、戻ってきた彼は違った。

蘭は新一が戻ってきたら、
彼がどんな事件に関わっていたのかを聞くつもりだった。

何しろ、相当頭のキれる彼がここまで時間を掛けた事件だ。

その内容は、今まで見てきた事件よりも遥かに巨大なものだろう
と、

蘭は感じていた。

・・・しかし彼からの答えは、肯定でも否定でも無く、『関係無い』という、拒絶の冷たい言葉だった。その冷たさは蘭の太陽の如く温かい心を、一瞬で絶対零度の如く冷たさへと豹変させた。

そして、そう思えば思うほど彼女の頭は、“マイナスの方向”に物事を考えようとする。

(新一は自分を避けている)

(自分は新一の力になれない)

そういう考えが次から次へと蘭の頭には溢れて行く。

・・・本人の意思に関係無く・・・。

同時に、彼女の心を孤立や孤独感といった感情が支配し始めて、蘭の心をゆっくりと確実に飲み込んでいく・・・。

「・・・」

娘のことを心配しつつ事務所に戻った小五郎は、

黒色の回転椅子に腰掛けて、

頭を働かせる時に無意識にしてしまう、

顎に手を当てるポーズをしながら考え込む。

彼の頭を巡りに巡ってるのは当然娘の事である。

今の彼女は化けの皮を被っている状態・・・。

あの元気良さ、笑顔・・・全てが偽り。

しかも、父親の自分にすら隠すというのは相当な事だ。

・・・小五郎は珍しく頭の隅から隅まで使って考え始める。
目を静かに閉じながら・・・。

蘭をあそこまで悲しみに陥れることができる人物・・・あるいは原因。

一つは江戸川コナンの存在。

蘭はあの眼鏡のボウズを息子同然に可愛がっていた。自分と血は繋がって無くても、家族として見ていた・・・。一度も“居候の子供”とは見なかった。

「そうは言っても連絡のしようがねえしな・・・」

小五郎は独り言を呟くが、
独りしか居ない事務所に答えをくれる者は存在せず、
あっという間に消えてしまった・・・。

実は小五郎は、コナンが事務所を発つた日から、
悲しみに暮れている蘭を見るに見かねて、
コナンに連絡を取ろうと思っていた。
せめて声だけでも聞かせて、
悲しみを取り除こうと考えたのだ。

・・・しかし小五郎はこの時に、ハッ
とした。

そう、 “何も知らないこと” に気が付いたのだ。

住所、電話番号、郵便番号、家族構成、
・・・全てを知らない事に・・・。

「何てこった・・・情けねえ」

小五郎は苦笑い混じりに自分の青臭さを痛感する。
実の親でなくても、預かった以上保護者という立場。
預かった子供の事を知る必要があった。

・・・しかし彼、江戸川コナンは他人の家に来たというのに、
一つの躊躇いや怯えも無くここに馴染み始めた。
それに、連絡一つ無しに突然現れたこともあり、
その重大な事を聞きそびれていた・・・。

「ハア・・・眠りの小五郎の名が泣くぜ」

小五郎は深い溜息混じりに、自らの未熟さを改めて痛感する。
・・・心に切り傷を付けるように・・・。

トゥルルルルル・・・トゥルルルルル・・・

心を苦しめ続ける小五郎を我に返すように、
仕専用の机に載っている電話機が音を発した。

小五郎は電話に出たい気分ではなかったが、
誰だ？
と、面倒くさそうな声を出しながら相手を確認
する。

「！」

小五郎は表示されている名前に目を見開くと、
先程の動きとは正反対に素早く受話器を取り、相手の声も待たずに、
もしもし？もしもし？！
と、
事務所中に響き渡るような大声で、相手の返答を待つ。

「そう大声を出すな・・・毛利君」

電話の相手は小五郎を落ち着かせるように呼び掛ける。
小五郎はその声を聞くと一呼吸して、
警部殿 と、再度呼び掛けた。

「毛利君、今時間は大丈夫かね？」

「ええ。・・・分かったんですか？警部殿？」

小五郎は一旦冷静になった頭を再び焦りへと戻し、
早く言ってくれ とでも言つように、
先を促す。

反面目暮は、小五郎の反応を予想していたように、
冷静な口調を崩さずに答える。

「それがだな・・・毛利君。とんでもない事が分かった」

「え?!」

目暮の言ったことが信じられず、小五郎は無意識に声を上げる。
・・・が、すぐに頭を冷やして目暮の話に備える。

・・・この後彼の言葉通り、“とんでもない事”が教えられるとも
知らずに・・・。

変化：追い詰めて行く心と悔やみ続ける心（後書き）

今回は探偵事務所のみを描写しました。

本当は新一の帝丹高校を描写しようと思ったのですが、探偵事務所と帝丹高校を同時に描写すると、

『読者さんが付いていけないじゃないか』と思ひまして……。

では、評価、感想等お待ちしてまーす！

正体・無（前書き）

今回はサブタイトルを簡単に見ました。

・・・こういうサブタイトルもいいかな・・・。

では、本編どうぞ！

正体：無

・・・カチ・・・カチ・・・カチ・・・と、

時計の秒針の音が響き続け、

太陽の白色光がホツキョクグマの如く眩さで事務所内を照らし、

その光を背に浴び続けながら受話器を片手にしている探偵が、
照らし続ける光とは真逆の、

黒色の回転椅子に腰掛けながら話をしている。

「『とんでもない事』・・・というのは？」

知ることを恐れるように怖々しい声色で、

毛利小五郎は元上司に聞き返した。

その元上司目暮十三は、フウ

と息を深く吐いて、

返答を待ち続ける元部下に低い声で答える。

「……戸籍だよ」

「は？」

意表な言葉を聞き、小五郎は間拔けな声を上げてしまうが、目暮は構わずに、

「実はな

」と、今までの出来事を話始めた。

約三十分前、警視庁

いつも重苦しい空気が流れ続けるこの部屋は、

この部屋の主^{ぬし}松本清長警視と、

彼と机越しに立ち、目線を合わせ続けている目暮十三警部。

……そして、二人がこれから始める会話の内容により、

慣れていないと押し潰されてしまうような空気が流れている。

その空気をさらに重くするように、二人の間には沈黙が守られており、

視線を合わせたまま互いに口を開くのを待っている。

「……管理官、どうでしたか？」

目暮は部屋の雰囲気に対応しい重い口をゆっくりと開いて、自分の目を睨みつけながら威圧している松本を、一切恐れずに尋ねた。

「うむ。お前が毛利から連絡を受けてから、江戸川コナン君のことを調べたのだが……」

松本は一旦目を瞑り暫し黙り込む。
目暮は口を開かず、腕組みをしながら目を瞑り続けている松本を、
注視し続ける。

・・・床一面に敷かれた赤色の絨毯^{とんないもじ}、
その上に置かれた黒色の回転椅子に腰掛けている松本は、
話す決意を固めたように目と口を同時に開いた。

「一言で言えば・・・あの子供、
江戸川コナンは“存在しない”・・・」

「!・・・ど、どついうことですか?!」

『存在しない』・・・この言葉に耳を疑った目暮は、
冷静沈着な態度を豹変させて、
声を大きくしながら詰寄るように返答を求める。

「無いんだよ……“戸籍”が」

「!!……ホントなんですか……それは?!」

目暮は丸くしていた目をさらに丸くするが、
松本はそれに気付いていながら、敢えて無視して話しを続ける。

「目暮……お前は毛利から、
『江戸川コナン君には江戸川文代なる母親が居ると聞いた』
……そう言ったな」

「……それが何か？」

話しを急に変えた松本に不審を抱きながら、
目暮は呼吸を落ち着かせながら言葉を返した。

「彼女もな・・・コナン君同様存在しない人間・・・
つまり戸籍の無い人物なのだよ」

「!!!」

目暮はもはや言葉が出てこない状態になっていた。
無理も無い・・・知り合いの男の子の正体が戸籍の無い人間、
しかも彼の母親までもが戸籍の無い・・・存在しない人間だと分か
ったのだ。

松本はさすがに目暮が落ち着くまで口を閉じる。

目暮は上司の気遣いに気が付いたのか、
意識を我に戻して、「つ、つまり」と、冷静な口調で言った。

・・・しかしその声質には、少々焦りが含まれていた。

「・・・ああ、江戸川コナン・・・あの少年は何者なんだね？」

松本は威圧感を消し去り、自分自身に問いかけるように問う。
目暮は、うーむ　　と唸って黙り込んだ。

「　　というワケだ」

「・・・」

全てを聞き終えた小五郎は放心状態であった。
思考は停止して、頭の中はホワイトアウトの如く真っ白になっていた・・・。

聞いとるかね？毛利君 と、返答を返さない小五郎を、
心配しているような声質で目暮は言い放った。

「・・・はい」

小五郎は目暮の呼び掛けに少しは思考が回復したが、
まだ“白”が大部分残っていたため、
生気が感じられないような声で返事をする。

「……まあ毛利君。コナン君……というより江戸川家のことは、我々がもう少し調査してみよう」

じゃあな、毛利君　　と言って目暮は電話を切り、
小五郎は納得できない表情と頭をそのままに、受話器をゆっくりと電話機に戻した。

「一体……どういうことだ」

小五郎は背凭せもたれに背中を預けて、顔を上に上げて見慣れた天井を見る。

……が、彼が見ているのは天井ではなく、
幻影の如く薄っすらと見えるコナンの顔を見ている。
あの無邪気な喜色満面の笑みを見せるコナンを……。

「蘭の様子でも見てくつか・・・」

疑問が浮かんでくるだけで全く答えが出ない難題に、
少々ムシャクシャしながら腰を上げて、重たい足を自宅へと運んだ。
。。。

トゥルルルルル・・・トゥルルルルル・・・

小五郎が自宅へ向かっている頃、
彼が目指している娘の自室でも、携帯の呼出音が鳴っていた。

鍵を掛けて窓も閉め、他人の部屋への立ち入りを拒み、
独りだけの空間を作り出している・・・。

・・・まるで自分の心を、自室というキャンバスに写し出すように・・・。

しかし完全な孤独になつたわけではない。
彼女、毛利蘭は助けを求めるかのように、“ある場所”に携帯で連絡を入れた。

然程時ていらいも置かず少し老けた声で、もしもし　と、
何度も聞いた声を耳にすると、間を置かずに用件を焦り気味の声で話す。

「毛利蘭です。阿笠博士、白馬君居ますか？」

電話の相手は、あ？ああ・・・と、

現在学校に居るはずの人物が電話してきたことに疑問を感じながら、「ちよつと待ってくれ」と続けて、保留のメロディを流した。

・・・それほど間を置かずにメロディが途切れて、

「はい。お電話変わりました」と、明るく高い声が蘭の耳に心地好く届くが、

今はそんな気分にはなれずに、単刀直入に本題に入る。

「白馬君、今から会えない？話したいことがあるの・・・」

「い、』今から』って・・・蘭さん学校は？」

蘭が学校に行っていないことに阿笠同様の疑問を抱いた白馬だったが、
それ以上に彼女らしくない、
焦り気味で早口で話す蘭に白馬は不審を抱く。

「それよりも、今から会える？・・・できれば・・・二人きりで

」

話を逸らし且つ、『二人きりで』という言葉聞いて、
白馬は膨らんでいた“疑わしさ”をさらに膨張させる。

「白馬君？聞いてる？」

沈黙を続ける相手に蘭は呼び掛けるが返事は無い。

反面白馬は、顎に右手を当てて考え込んでから、

蘭さん と口を開いた。

「何？」という彼女の焦りさが消えて無い声を耳にすると、
間を置かずに口を開く。

「分かりました・・・事務所に行けば良いですか？」

それを聞くと蘭は、ありがとう白馬君 と、

“少し”だが明るい声で礼を述べた後、「じゃあ、また後でね」と
言って電話を切った。

反面白馬は、ツーツー・・・と、電子音しか聞こえない受話器を
片時の間、

ジツ と見つめて電話機に戻すと素早く振り向いて、

玄関に早足で向かう。

そんな白馬を、ソファーに座りながらファッション雑誌を見ている灰原と、

彼女と向かい合わせに腰掛けて、コーヒーを片手に一息付いている阿笠が見続けるが、

本人は視線を背に浴びながらも前進を止めない。

「白馬君どこに行くのかね？」

阿笠は呼び止めるように土足を履いている白馬に声を掛ける。

靴を慣れた手つきで履き終えた白馬は、顔を左に向けて横目で阿笠と灰原を捉え、

「ええ。毛利探偵事務所に行つてきます」と言った後、

阿笠の返事を聞かずに外に飛び出した。

「気を付けてな！」と、阿笠は聞こえたかどうか分からないが、白昼の世界に走って行った彼に言い放った。

因みに灰原は、ファッション雑誌から一度も目を逸らさずに、二人の会話だけを耳にしていた。

正体：無（後書き）

いや、今日も暑い一日で……。

さて、今回は探偵事務所から阿笠邸に場所が突然変わってしまったことが、

反省点ですね……。

すみません、毛利探偵事務所での出来事を、あれ以上描写できなかったもので……。

では、評価、感想、ご意見お待ちしております！

正体・拒否され続ける真実と探偵達の秘事（前書き）

こんにちは皆さん。

。活動報告にも書きましたが、評価ありがとうございます（＾０＾）

まさか・・・ここまで評価が上がるとは思ってませんでした・・・。

これからもこの評価に恥じないように頑張りますので、
よろしく願います！（＾　＾）

では、本編どうぞ！

正体・拒否され続ける真実と探偵達の秘事

「お邪魔します」

晴天の名の如く輝き続ける太陽光を浴びながら、

米花町の象徴の一つとして名が知れている毛利探偵事務所の扉を、
一人の青年が叩いた。

青年・・・白馬探は、ソファアに腰掛けていた蘭と、

奥の回転椅子に右耳にイヤホンを付けている小五郎を捉えて挨拶を
した。

「こんにちは。白馬君」

「ええ蘭さん。こんにちは」

白馬は挨拶を返した後、では・・・さっそくお話を聞きましょう

か　　と、

蘭の顔に視線を移して、
御得意の好印象な明るい声と微笑みで話し掛けた。

しかし蘭は、「ごじやなくて、私の部屋で・・・」と言いな
が腰を上げて、
白馬の左を通って事務所から出て行く。
付いてきて　　と言うように・・・。

「分かりました。では毛利さん、失礼します」

「ああ」

小五郎は前触れ無く話し掛けられたことに全く動揺せず、
短く返事をする集中力を、
白馬と娘からイヤホンから聞こえてくるラジオに戻した。

・・・小五郎の返事を聞いた白馬は蘭の後に続いて自宅へ向かった。ただ、移動中のこの二人は、
昼の空気に似合わない沈黙という闇の空間に居るように、
一言も話さずに蘭の自室に入った。

移動中白馬は、前を歩いて一言も話そうとしない蘭の背中から、
ただならぬ雰囲気を感じていたが、それは電話でも感じていたため、
敢えて触れずに付いて行った。

部屋に入り蘭が扉をゆっくり閉めると、
彼女は机に閉まってあるキヤスター付きの回転椅子を引いて、
腰掛けの部分をベットの方向に向けて、
座って白馬君 と彼に進めた。

「ありがとうございます」と、微笑みの表情をそのままにして、
白馬は女の子らしい桃色の可愛い色をした椅子に、
ゆっくりと腰掛けて姿勢を正す。

(さすがに白馬君は座布団に座らないわよね)

蘭は、以前この部屋に服部が訪れた時の光景を思い出し、
白馬が座布団に座ったらどんな姿勢になるのだろうか？
と、

頭の中で想像しながら、
椅子と同色の布団が掛けられているベットに腰を下ろす。

「では蘭さん・・・改めて、『お話』というのは？」

白馬は蘭が腰掛けたことを視認すると、
右側の窓から入ってくる太陽光に顔を照らされながら、
自分と視線を合わせている彼女に話し掛ける。

その彼女は、待ってました
と言っようじに、
白馬の問いにすぐに答えた。

「貴方達が……正確にはコナン君が関わっていた事件のことよ」

蘭は自分の目線から目を逸らさない白馬の表情を、

一時も逃さずひことぎに観察していたが、

正面の探偵は眉毛一つとて動かさない。

「僕達が関わった事件ですか？」

「そう……その事件の事を教えてほしいの」

（予想通り……ですか）、白馬は内心で呟くと、自分の予想が当たっていたことを残念に思いながらも、表情を崩さずに蘭の願い事に答える。

「なぜですか？」

笑い、悲しみ、泣き……どの言葉にも当てはまらない、無表情で白馬は理由を尋ねる。

尋ねられることを予想していたのか、蘭は疑問を持たずに質問に答える。

「その事件……新一が関わっていたんじゃないの？」

「新一……以前、僕に話した工藤新一君のことですね？」

「そうよ……教えて」

最後の言葉を言った蘭の目には“力”が宿っていた。

白馬の“見た者の心の内を見透かすような目”に対抗するように、彼の目を押し返すような“力強い目”で対抗する。

反面白馬は、その目に一步も後退りせずに、冷静な声を維持しながら答えた。

「・・・その前に、一つ聞いて良いですか？」

質問を質問で返してきた白馬に内心で少々苛立ちを覚えるも、表には出さずに無言で頷いた。

「なぜ・・・ご本人にお聞きしないのですか？」

「！」

もつとも聞かれたくないことを唐突に聞かれたことに動揺を隠しきれなかった蘭は、

目線をチラツと一瞬だけずらしたが、

眼前の探偵に悟られまい

と、すぐに視線を戻す。

・・・が、その“一瞬”が数秒に感じられた探偵の目を欺くことはできず、

彼が“見て見ぬフリ”をしているとは御塵も気付くことは無かった・・・。

1162

「・・・答えなきやダメ？」

蘭は若干震える声だったが、本人はそれに気付いていないようで、訂正せずに言葉を最後まで言い放った。

当然白馬はそれに気付いたが、ポーカークフェイスを保ち続けなが
ら、

「はい」と、短く肯定の返事を返す。

・・・この時、白馬探の内心は、聞きたくない という気

持ちで溢れていたが、

彼女の理由を知るために、その気持ちを強引に押し殺す。

・・・しかし、求めた答えはそう簡単には来なかった。

肯定の返事をした後言うべきか迷っているのか、蘭は顔を下に向け
る。

ただ、温かい光を遮って出来た影の領域に入ったその表情は、

彼女の暗く寂しい顔を強調していた・・・。

どれほどの時間が経過したかは二人には分からない。

ベットに座る蘭は下を向き続け、太陽光に照らされて白々しく見え
る自らの足と、

視界の上のほうに微かに見える、

白馬の水色の長ズボンをつえながら口を開かない。

一方、回転椅子に姿勢を正して腰掛けながら俯いている蘭の姿を、日焼けしているクリーム色の壁と共に視界に入れている白馬は、蘭が話し始めるのを落ち着いて待っている。

「話したわ・・・」

俯いたままで沈黙を破った闇の領域に存在する天使に、白馬は全く驚かずに彼女の話しを無言で聞く。

蘭は、一言も口を開かない白馬を気にせずに、
でも・・・
と、続ける。

「教えてくれないの・・・前はどんなことも教えてくれたのに。
この事件だけは全然・・・」

自らの孤独感を訴えるが如く、蘭は震えて且つ涙声が混じった声で、

顔を勢いよく上げて白馬と目線を合わせる。

白馬は彼女の瞳が揺れていたことに、心を爪で引っ搔かれたように痛めたが、

真実を話したい という気持ちを沈めて、

ゆっくりと口を開いて答えた。

「蘭さん。君が工藤君のことでどれほど苦しんでいるかは良く心に染みました。

でも・・・言えないんです」

「!...!!...どうして?!」

蘭は、彼が最初に言った『心に染みる』という言葉に期待を寄せたが、

『言えない』という言葉聞いた瞬間、

その期待というガラス玉は、強い衝撃を受けた如くバラバラに砕け散ってしまった……。

信じられない

という気持ち丸出しの声を上げた蘭に、

白馬は微動だにせずに答える。

「『工藤君が事件に関わっていた』……これは認めます。しかし……それ以上は言うことはできません」

「だからどうしてよ?!」

新一が事件に関わっていたことは認めてくれたものの、自分が一番知りたい、“そこで何が起こったのか”を教えてくださいな
い白馬に、
蘭は頭の中で膨れ上がっていく苛立ちを抑えきれずに、
大声でその苛立ちをぶつける。

「では、蘭さん。君に一つ質問しますが・・・」

立ち上がるような勢いで問い質してくる涙顔の彼女に対して、
白馬は不気味なほどポーカーフェイスを崩さずに質問を、
蘭自身ではなく、“彼女の心に問う”ように尋ねた。

蘭は勢いをそのままに、「何よ?!」と返事を返す。

「君は親友の許可も得ずに、その親友の秘密を話すことができますか？」

そ、それは・・・と、内心で答えは分かっていたが、
それを表に出せずに、勢いを消して黙り込んでしまう・・・。

白馬はそんな蘭の様子を見ながら、慰めるように言葉を掛けた。

「蘭さん。僕も正直に言えば、君に真実を話してあげたい。
・・・でも、やはり無理なんですよ・・・。
さっきも言ったように、ご本人の許可も得ずに秘密を話したら、
その人がどんな思いをするか・・・それは、分かるでしょう？」

・・・心が清らかな君なら
と、白馬は優しく且つ明る
い声で続けて、
表情も普段の微笑みに戻して言った。

反面蘭は、再び顔を下に向けて黙り込んでしまふ・・・。
白馬はそんな彼女を哀れむような目で見ながら腰を上げて、
「では、失礼します」と、
聞こえているか分からなかったが礼儀として挨拶をして、
音を一切立てず部屋を出て行った・・・。

正体・拒否され続ける真実と探偵達の秘事（後書き）

・・・自分で書いておいてこんな事を書くのは変ですが、
蘭が可哀想になってきました・・・。

私は蘭よりも志保派なのですが、蘭は嫌いというワケではないた
め、

彼女がこういう思いをするのは辛いですね・・・。

では、評価、感想、ご意見待ってまーす！

正体・移り変わっていく胸中と悪友からの質疑(前書き)

今回は新一の物語になっています。

では、どしどしー！

正体：移り変わっていく胸中と悪友からの質疑

「フー……今日は疲れたぜ……」

白色光の太陽が金盞花きんせんかの如く、橙色に染まり始めた頃、
帝丹高校の校門を他の生徒達とは違い、独りで学校の敷地を出た青
年が居た。

その青年工藤新一は、鞆を片手に珍奇ちんきな雰囲気で帰路に付いてい
た。

『珍奇』……この言葉の正体は、彼の隣に彼女が居ないこと
である。

今朝、その彼女とひよんな事から別れた新一は、
その足で登校して二年B組の教室ではなく、滅多に行かない職員室
に足を運んだ。

コンコン　と、右手でノックをたたき、クリーム色の扉を左
にスライドさせて、

「失礼します」と礼儀をした後、

顔を部屋の隅から隅まで向けて担任の教師を探す。

目当ての人物は時間を掛けずに見つかった。

・・・というより声を掛けてきた。

「工藤、どうした？お前がここに来るなんて珍しいじゃねえか・・・

黒縁の眼鏡を掛けた彼は、不思議そうに新一の顔を見ながら、表情通りの言葉を言った。

「先生。蘭は今日休みます」

「え？」

単刀直入に言われたこともあるのだろうが、それ以上に彼工藤新一が、

毛利蘭が休むことを冷静に言ったことに教師は疑問を持ったが、「分かったよ。理由は？」と、疑問を隠しながら尋ねた。

「詳しくは分かりませんが、登校中に気分が悪くなったって……」

「そうか……分かった、じゃあ行こうか」

担任の『行こうか』という言葉の意味が今一理解できなかった新一だが、

担任の後ろの柱に掛かっている茶色の掛時計の時間が、ホームルーム開始時間五分前だったことでその意味を理解した。

担任教師と肩を並べながら、

行き違う生徒や教師に挨拶を交しつつ教室へ向かう。

「なあ工藤」

左隣を自分と同じ歩調で歩く担任に突然声を掛けられたことで、新一は内心で驚くも顔には出さず、

「何ですか？」と、顔を左に向けて返事をした。

「お前……やけに冷静だな……」

「は？」

担任がした質問の意図が分からず、新一は思わず声を上げる。

新一の目に映る彼は、声の意味を悟ったように口を開いた。

「だってよ、毛利蘭が体調崩したんだろ？
・・・なのに、よく平気で学校に来れたな。
今も平然として・・・心配じゃないのか？」

(そういうことか)と内心で納得した新一は同時に、
(そう言えばそうだな・・・)と思い始めるが、
答えは全く思い浮かばずに正直に返答する。

「・・・それが・・・分かりません」

「はあ?!」

「まあ蘭は強いですから・・・。
体調を崩したぐらいで見舞いする必要は無いかなあって」

担任の驚きの声など気にせず意見を言い放つが、
新一の意見に全く納得できない彼は、
心配そうな表情を少しも見せない新一を疑問の目で注視するが、
当の本人は正面を向いたまま歩き続けるだけであつた・・・。

そのまま無言で教室に入ると、
席に付いていたクラスメイト全員の視線が二人に向き、
新一は少し恥ずかしさを覚えるが、表情には出さずに歩いて着席した。

因みに、席に移動中の新一の姿にクラスメイトの視線が集中したが、
彼は無視して着席した。

教卓に付いた担任は新一が着席したのを視認すると、
「皆さん、今日は毛利蘭さんが欠席することになりました」と、
いきなり蘭の事を話し始めた。

そのことを聞いた生徒達は、「マジかよ?」、「嘘?!」と、驚愕の声を上げながら新一に自然と視線を送る。

一方新一は、そんな視線を浴びているのを知ってか知らずか、担任の顔が無表情で見ながら平然としている。

「ああ・・・皆さん落ち着いて。毛利さんの体調の詳細いことは分かりませんが、

連絡が入り次第お伝えします」

担任は言い終わると、「では、これで終わります」と、続けて言って教室の扉から出て行き、

入れ違いに一時間目の数学の教師が灰色のスーツを着て入ってきた。

クラスの生徒達はざわめいていたが、

教師が静かにするように呼び掛けると一斉に静まって、一時間目の開始のチャイムと同時に授業が開始された。

・・・一時間目、二時間目、三時間目と、新一にとって暇な時間を過ごした後、
昼食の弁当を手早くお腹に入れて、左に見える窓越しの昼間の米花町を見ていると、
その視界に突如人影が入ってきた。

「新一君。話があるんだけど・・・」

腰掛けている新一を、不機嫌な表情を剥き出しにしながら見下ろしているその女性は、
何時もと何の変わりも無い茶髪のショートヘアに紫色のカチューシヤを付けている。

「『話し』って何だよ・・・園子」

ぶつきら棒に返事を返し、面倒臭そうな面構えと目付きで自分を見てくる新一を、
窓から入ってくるサンサンとした光を遮りながら睨みつけている園子は、
ムツとした声で答える。

「とにかく来なさい。・・・ここじゃ話しづらいから」

分かったよ と、教室の教卓側の出口に歩いて行く園子の後ろを、
ズボンの両ポケットに手を突っ込みながら新一は、
一mほどの距離を保ちながら付いて行く。

二分ほど掛けて二人は屋上に辿りついた。

園子が屋上の扉を開いた瞬間、目を瞑るほどの眩い光と共に、ドミノの如く立ち並ぶビル街と、その中心に果てし無く伸びる道路に、
数多の車と通行人が休む事無く流動している。

・・・しかし、新一の目はその光景よりも前に見える、
普段の御調子者な性格からは想像できない、
真剣そのものの表情で自分の目を見ている園子を捉えている。

その目からは、自分の体を弾丸の如く射抜くような怒りという名の威圧感が感じられ、
新一は彼女らしくない姿から、真面目な話しを始めることを悟る。

「新一君・・・単刀直入に聞いわ」

「蘭のことか？」

新一は屋上に来るまでの時間を有効に使って、
頭の中で、何を聞かれるのか？　　ということを用意していた。
その予想を新一が園子よりも先に言つと、
答えは間を置かずに戻ってきた。

「ええ、そうよ。一体彼女と何があつたの？」

園子が、自分と蘭の間に何があつたのか　　を、
どうやって知つたのかを新一は疑問に思ったが、
瞬時に担任が言った理由と同じだと思ひ返答した。

「『何が』って・・・何にもねえと思つけど」

「あるわよ！蘭が体調崩したって時に、何でそんな平然としていら

れるのよ!」

込み上げてくる怒りを抑えられなくなったのか、
声が次第に大きくなっていく。

・・・それと同時に迫力も・・・。

新一はその大声にも迫力にも全く屈せず、
無表情で話しを聞いて無表情で答える。

・・・無意識のうちに感情を隠すように・・・。

「『平然』なワケねえだろう・・・。

先生にも言ったけど、蘭は強いから大丈夫だって」

当たり前前のことを聞くな

とでも言うように、新一は少

々面倒臭そうに答える。

・・・が、その態度が園子の怒りの炎に油を注いってしまったらしく、
口調と声が激しさを増す。

「なによ！その態度！あんだ蘭のことが心配じゃないの？！」

（『心配』・・・か・・・）と、内心で思う新一だったが、園子の問いに答える事はできなかった。

確かに心配なことに変わりはない・・・。

ただ不思議と以前のように、心底から心痛な気持ちが溢れてはこなく、

“普通に”心配という不安な気持ちを感じる程度だった・・・。

「黙っていないで何とか言いなさいよ！」

新一が頭の中でそんな事を考えているとは思ひもしない園子は、黙り込んでいる彼に痺れを切らして声を上げる。

「そんな事言われてもよお・・・分かんねえんだよ俺自身。どうして蘭のことが心底心配じゃないのかが・・・」

右手で後頭部の辺りをグシャグシャ擦りながら、正直な気持ちを園子に目を瞑って言い放つ。

新一の悩んでいる胸中丸出しの仕草や言い方で、彼の言っていることは嘘ではない　と感じた園子は、これ以上怒鳴り散らしても無駄だと思い、一旦心を沈めて冷静になつてから、改めて眼前で頭を擦っている新一に声を掛けた。

「・・・じゃあ新一君、質問を変えるわ」

『質問を変える』という言葉に反応した新一は、
頭を擦っている手を止めて目を開け、先程とは打って変わり、
怒りを消して冷静そのもので自分の目を見つめてくる園子を注視す
る。

園子はその目を受け止めると、ゆっくりと口を開いて用件を言っ
た。

「あなた・・・蘭のこと好き？」

・・・その質問で時間が止まったかのような二人の間を、
どこから吹いてきたか分からない風が、
彼らの髪を靡かせながら通過していった・・・。

・
・
・園子が言った質問を吹き消すように
・
・
・。

正体：移り変わっていく胸中と悪友からの質疑（後書き）

今作で初めて鈴木園子を“大きく”描写しました。
個人的に彼女は好きなキャラクターですね。

理由は、親友のためになら何でもする勇敢さを持ち、
物事をテキパキとハッキリ言う性格が好きですね。

では、評価、感想、ご意見お待ちしてまーす！

正体・指摘される変化と探偵の問い（前書き）

一日ぶりの更新です。

では、どしどしー！

正体：指摘される変化と探偵の問い

青々とした快晴の空の元で、少年少女達が体の元気良さを全身から表現するように、笑顔と笑い声を上げながら汗を気持ち良く流し、体をテキパキと動かしている。

・・・そんな校庭の様子とは打って変わり、気まずい空気が流れている校舎屋上では、

二人の人物が顔を合わせながら、目と鼻の間の距離で立っている。

一人は鈴木園子。

彼女は目の前に立っている幼馴染の男性の目を注視し続けているが、

その幼馴染の目は園子の視線からズレている。

そしてその男性の名は工藤新一。

彼は眼前の幼馴染にされた、

“ある問い”の答えを探すように視線を下に向けている。

・・・が、その問いの答えは一向に出ずに新一は口を開かない。

園子も彼の答えを聞くまで口を開かないと決めているため、

二人の間には沈黙という静寂な空気が流れ続ける。

「ハア」……答えは無し……か……」

溜息混じりに園子は、時間だけが無駄に過ぎて行くことに苛立ちを覚え、

呆れた表情と共に私考を述べる。

その後、全く……と呆れながらも、彼の心を知るために、

園子は質問を変える。

「じゃあ貴方、蘭のことを“どう見てるの”？」

その質問を聴取した新一は視線を園子に合わせる。

しかしその目は、『どう』という単語の意味が理解できていないため、

少々だが疑問を持っていた。

「『どづつって……具体的にどづいつことだよ？』」

「具体的なものにも無いわ。言葉通りの意味よ」

園子の問いに新一は当たり前前の如く、大切なヤツだ
する。

と即答

……内心では少し恥ずかしかったが……。

「ならどづつして、さっき『分からない』って言ったのよ？」

「そ、それは……」

新一は目を逸らしながら自信が無さそうに答えた。

園子はまたもや沈黙してしまった新一に、ハアと、と、
内心で深い溜息を付きながら、全く進歩が無い会話を見切り、
自分の意見を述べた。

「新一君さ……自分でも気付かないうちに変わり始めてるんじゃない？」

「！」

園子から言われたことに驚きを隠せなかった新一は、
登校して初めて無表情以外の顔を見せる。

「その顔は凶星ね」

園子は、あまりにも急変した新一の表情をジト目で見ながら急所を付く。

「あ、あのさ・・・園子」

「何？」

呼び掛けられたことで園子は、自分が遮っている太陽の光を浴びれずに、

全身が薄暗く染まっている眼前の幼馴染を改めて捉える。

その彼は、聞きづらい　とでも言うように、
目をアチラコチラに泳がせながら聞いてきた。

「お、俺さ・・・」

「・・・」

その声は震えが多少混じっており、
まるで知ることを恐れているように園子は感じた。

しかし、その事は頭に思うだけに留め、
無言で彼の次の言葉を待った。

「どこが・・・どういつぶうに変わったんだ？」

その問いに園子は然程驚きはせず、「『どいつぶう』・・・ね
え」と、

腕組みをして視線を下に向け、考える姿勢をとりながら呟いた。

新一は、彼女の滅多に見せない姿を、
太陽の眩い光をバックにしながら注視し続けるが、
まるで態わざと自分に光を浴びさせないように立っている彼女に、
疑問を感じていた。

・・・そんな新一の考えを知らずに、うん・・・ と、
悩み続ける園子は暫し考えた後、視線を眼前の彼に合わせて話し始
めた。

「何て言うか・・・大人っぽくなったかな」

「大人っぽく？」

「うん。行方不明になる前よりも、大きく見えるようになったかな」

言い終わると園子は、恥ずかしそうに頬を桃の如くピンク色に染めながら、
わ、私何言ってるんだろ?!
と、顔をブンブン横に振りながら、
言ったことを取り消そうとした。

・・・しかし、時すでに遅く新一は内心で、（遅いって・・・）とツッコミを入れながら、
園子の様子をジト目で見ていた。

そんな二人の会話を中断させるように、
休憩時間終了のチャイムが校舎全体に響き渡る。

「もうそんな時間か・・・戻ろっぜ」

新一がチャイムを耳にしながら呟くと、そうね
と、園子
も頷き、

新一の背中に続いて屋上を後にした……。

「『大きく見えるようになったか……』、確かにそんな感じがしなくもないかな」

昼間学校で言われた事を微細に思い出しながら、
新一は鞆を片手に、何度も通ったことのある通学路を、
朝とは異なる橙色に染まった風景を眺めながら、一際目立つ洋館の
玄関を潜る。

家内に入り雑に靴を脱ぐと、疲れた体を癒すため居間に足を運び、
薄緑色の三人掛けソファーにドサツと体を倒した。

うつ伏せのまま顔を右側に傾け、一定の間隔で聞こえる秒針の音
を聞きながら、
ゆっくりと目蓋まぶたを閉じる。

・・・自分の中の自分を覗くように・・・。

(あなた・・・蘭のこと好き?)

今の新一の心は、悪友から言われた言葉に満ちている。

「バード、好きに決まってるんだろ」

新一は自分の心に言い聞かせるように、

少々大きめの声で呟く。

その声は、静けさが漂う居間に少しだけ響いた後消えてしまったが、

自分の心に言い聞かせるには十分だった。

(そろそろ行くか)

完全に疲れは取れていなかったが、

今から行かないと阿笠邸での夕食に間に合わないため、

新一はまだ重く感じられる体を力一杯起こして、早歩きで二階の自室に向かった……。

「邪魔すんぜ」と、返事も待たずに新一は阿笠邸内に入り、

そのまま来客用のソファアを通過して、食卓用の椅子に腰掛ける。

……台所で自分を、呆れて物が言えない
な目で見ている、
とでも言っよう

二人を全く気にせずに……。

一方、新一の行動に目もくれず、黙々と作業をしている茶髪の青年は、

口元を緩めながら手を動かしている。

「ちょっと工藤君……誰も『入っていい』なんて言ってないわよ」

「かてえこと言っなよ、灰原」

人の家を我が物顔で訪れた新一に、灰原は当たり前のことを言い放ったが、

まあ、いいじゃないか哀君 と、

阿笠の言葉に納得させられてしまった。

・・・しかし内心では彼、工藤新一が来てくれたことに、喜びの感情を抱いている自分が居た。

右側で銀色の鍋に味噌をといでいる白馬のように、『宮野』と、本名で呼んではくれないものの、新一独特の微笑みを見るだけで心が温まる。

台所から心地好く響いてくる食材を順序良く切っदैく音や、

鍋の中でグツグツと音を立てながら、食欲を誘うように鼻をついてくる匂いを感じながら、新一は夕食の時間を迎えた。

茶色の机上に整えられたメニューは、白米を充分に使用した白一色のご飯、

その右隣に味噌の香りを漂わせながら、ゴボウ、人参、大根といった野菜が豊富に使われたトン汁、そして、ご飯とトン汁のやや上におかずとして、

赤色の見るからに辛そうなソースが掛けてある、エビチリが置かれていた。

「いただきます」

新一が、早く食べたい　　という思考、丸出しの笑顔を向けながら言い放つと、
それに合わせて三人も、「いただきます」と続ける。

「お！このトン汁、出汁が効いててウメエじゃねえか」

真っ先にトン汁に手を付けた新一は、口内に溢れ舌に行きどいた味に歓声を上げる。

それに続き、新一と向かい合わせに座っている阿笠も、「全くじゃ。さすがじゃの、白馬君」と、

新一の左隣に腰掛けている白馬の顔を見ながら、左手に持っている

トン汁の味を称えた。

「ありがとうございます。お口に合って何よりです」

二人に気に入ってもらったことを喜びとして感じた白馬は、その気持ちを隠さずに、阿笠と新一の顔を捉えながら満面の笑顔で礼を述べる。

その後、美味しいわよ、白馬君　と、
クールな性格から滅多に見せない笑顔を、向かい合わせに腰掛けている白馬に向けて、
灰原も感想を言い放った。

その気持ちを素直に心に受け止めた白馬は、
先程と同じように、「ありがとうございます」と、灰原の笑顔を注視しながら言った。

そんな楽しい夕食の時間はあっという間に過ぎ、
ごちそうさまでした　と、四人揃って礼の挨拶を言った後、
いつも通り阿笠、白馬、灰原が片づけをする。

カシャカシャと、食器と食器が擦りあう音を耳にしながら、新一は来客用のソファーに腰掛けて、左側に見える三人の背中姿を見続けている。

・・・しかし、目線は自分でも気付かない内に、三人の一番左で食器を丁寧に着に布巾で拭いている、茶髪の少女を捉えてしまう。

暫くの後、片づけを終え台所を後にした三人の一人、白馬探が、ソファーで近づいてくる自分を不思議そうな目で見ている新一に声を掛ける。

・・・ただその表情は、食事の時に見せていた、見ただけ笑ってしまうような気持ちの良い笑顔ではなく、犯人を追いつめる時に見せる、“探偵の顔”に豹変していた。

「どうした？白馬」

新一は、彼らしくない表情を不審に思いながらも、気付かないフリをしながら声を掛けた。

白馬はそれに間を置かずに、
「話しがあるのですが・・・今お時間大丈夫ですか？」と、いきなり本題に入る。

単刀直入に聞かれたことに大して動揺をせずに、
ああ、大丈夫だぜ と、不審な気持ちを消さずに新一は答える。

「分かりました。では・・・君の自宅に行きましようか。
ここでは話しづらいので・・・」

「?・・・ああ、分かった」

『ここでは話しづらい』という言葉に、
新一は益々（ますます）白馬に対する疑問を増していくが、
ここでは敢えて触れずに返事を返した後、腰を上げて玄関に向かう。
白馬は新一が自分に疑問を持っていることを、
彼の雰囲気ですわったが、それは聞かずに黙って彼の背中に付いて行く。

「ん？二人ともどこに行くんじゃ？」

パソコンをいじっていた阿笠は、二人が玄関に向かうのを気配で感じた後、

回転椅子ごと体を振り向いて、両名を注視しながら問う。

その問いに新一は足を止めず、「俺ん家だ。白馬が話があるんだってよ」と、

後ろの白馬を横目でチラッと見ながら答える。

大丈夫です。そう時間は掛かりませんから　と、

阿笠、新一二人の視線を浴びている白馬は、阿笠に心配させないように笑みを向けながら、明るい声で答えた。

「そうか・・・気を付けてな」

阿笠は、白馬の答えに納得して二人を送り出したが、

新一は白馬の阿笠に対する雰囲気の不気味に感じられながらも、やたら重く感じられた玄関の扉を開けた・・・。

正体：指摘される変化と探偵の問い（後書き）

今回は新一の変わりぶりを、園子が表現する部分がポイントですかね……。

ホントはこの役、優作や有希子にやらせたかったのですが、彼らを日本に招くあるいは、電話を掛ける理由が思い浮かばなかったので、

園子に言わしてみました。

では、評価、感想等お待ちしてまーす！（＾０＾）

正体・白き探偵の推理と迫る自身の気持ち（前書き）

今日も暑い一日ですね・・・。

こんな日はホラーでも見て涼しい気持ちになるべきかな？

では、ぶじぞー！

正体・白き探偵の推理と迫る自身の気持ち

「で？話して何だよ？白馬」

阿笠邸から工藤邸の居間まで、

一言も言葉を交さずに向かい合わせにソファ―に腰掛けた新一は、さっそく用件を自分と視線を合わせている白馬に尋ねた。

・・・因みにこの二人の間には、冗談や芝居が通じない重く厚い空気が流れている。

「ええ。単刀直入に本題に入りますが・・・」

新一は、白馬の目付きや声質の低さから、重大且つ真剣なことを言われるのだということを知る。

「今日、蘭さんに会って来たんですよ」

「え？蘭に？」

「どうして？」

と続けた新一に、

その疑問を打ち消すように白馬は語りだした。

「工藤君。君は今日、蘭さんが学校を欠席したことは知っていますね？」

「ああ……もちろん」

「帰宅した彼女は、阿笠邸に電話を掛けてきたんですよ。……その内容は、『僕に聞きたいことがある』というものでした」

「聞きたいことって？」

新一は首を傾げて、腕組みをしながら内容を次々に語っていく白馬に、

幼馴染の彼女が何を聞いたのかを知るために、急かすように尋ねた。

白馬は新一の言葉を受け止めた後、

突如針の先端の如く鋭い目付きで、新一の目を見つめてから答えた。

新一はその目付きに一瞬目を少し見開き驚くが、すぐに元の表情に戻して白馬の話しを聞く。

「君が蘭さんに真実を話していない事です」

ああ、そのことか　と、あまりにも素っ気ない返事に今度は白馬が驚かされ、

そのことに我慢ならず、「なぜですか？」と思わず理由を尋ねた。

・・・が、新一はいつの間にか白馬ではなく、居間の先に見える玄関の扉に視線が向いていた。

「あの・・・工藤君。僕も話しを聞いていますか？」

白馬はその態度を見過ぐすことはできず、
心中に少し湧いた怒りの感情を抑えながら、顔は自分に向けていて
も、

視線が明後日の方向を向いている新一に聞く。

新一は白馬の呼び掛けに反応すると、少々ムツとしている彼の顔
を見ながら、

「フレイフレイ」と、笑いながら謝罪する。

白馬は、「まあ、いいでしょう」と、溜息混じりに許すと、
“ある事”を続けて問う。

「工藤君。今どうして、玄関のほうを見ていたんですか？」

「え？あ、ああ・・・アイツ今頃どうしてるかな？って思ってたよ」

新一は、“アイツなる人物”を思い出すが嬉しいように、
口元を緩めながら白馬の目線に合して言い放つ。

思考よりも先に、アイツ？ という言葉が口に出た白馬は、
彼が言った“アイツなる人物”を思い浮かべるが、
人物像が浮かぶ前に新一の口から聞くことができた。

「灰原だよ」

「え？宮野さんですか？」

（今は蘭さんの話しをしているのですが・・・）という内心を白馬
は覚えるが、
それ以上に“ここに灰原が出てくることに疑問を抱き”、
その理由を新一に冷静に問う。

「工藤君。彼女のことを気になるんですか？」

自分が真剣な表情に対し、新一は灰原のことを思うのが楽しいように笑みを見せている。そんな新一と視線を合わせながら答えを待つが、

その問いの答えは、高速の如く速さで返ってきた。

「ああ、今どうしてるかな？って思ってたよ」

白馬はその言葉と新一の表情を見て、兼ねてより予想していた思案を確信に変える。

それと同時に心中で、自分の予想が的中していたことに深い溜息を付いた後、別のことを問う。

「ところで工藤君。質問を変えますがよろしいですか？」

「ああ」

「君は宮野さんのことをどう思っていますか？」

その問いを聞いた新一は腕組みをして暫し考えると、
微笑みを浮かべながらハッキリと、「守りたいヤツかな」と明るい
声で言い放った。

白馬はその答えを聞くと、詳しいことを知るために、
新しい質問を口にした。

「では工藤君。君は彼女を何から守りたいと思っているんですか？」

「アイツ、組織の一件で色々酷い……というより怖い目にあっ
た
だろ？」

だから俺が傍に居て怖い思いをさせないように守ってやらなくちゃ
って思うんだ。

それに、約束したからよ……アイツが『守ってくれるんでしょ？』
って聞いた時、

俺は『ああ』って答えて約束したんだ。

……だから守ってやんねえと」

決意というものが十分に籠った新一の話は、

これ以上無いほどの説得力を秘めていた。

そして、「そうですね」と、白馬はその鋼の如く固い決意に心を揺らされ、

納得の言葉を小さく呟いた。

その後、君の宮野さんに対する思いはよく分かりました
と言って続ける。

「では、話を戻して・・・改めて問います」

新一は再び白馬の顔つきが真剣なものに変わったことを視認する
と、

ゆっくりと頷いて返事を返した。

「工藤君。君は蘭さんをどう思っていますか？」

「そ、そりゃ・・・大切なヤツだ」

真剣な白馬とは違い、恥ずかしさのあまり頬を林檎の如く赤らめ
ながら、

照れくさそうに新一は答える。

「では、“どういう意味での大切なのか”を教えてくださいませんか？」

「そ、そうだな・・・」

そう返事をした後、新一は腕組みをしながら考え込む。

「なぜ考えるのですか？工藤君」

その白馬の問いにハツとした新一は、

そ、それは・・・と、頭の中で理由を探すが、答えが見つからずに沈黙してしまう。

白馬は彼の鈍感さに内心で深い溜息を付くと、

正面の探偵の心に潜んでいる気持ちを言い当てるように口を開いた。

「工藤君。それは家族愛なのではありませんか？」

『家族愛』という言葉を新一は受け止めきれず、
そんな馬鹿なことがあるか とでも言うように、「何言っ
やがるんだ！」と、
否定の声を上げながら詰寄る。

白馬は全く自らの胸中の変化を認めない新一に、苛立ちの気持ち
を少々覚えるが、
表情には出さずに、ところで、工藤君 と話しを変えた。

「君は夕食のとき、宮野さんのことをチラチラ横目で見ていまし
たがなぜですか？」

(コイツは何が言いてえんだ?)と内心で思いながら、
先程の気持ちを沈めて冷静になった新一は、
白馬の心を見透かすような鋭い視線に怯むことなく、
視線を合わせ続けながら記憶を振り返る。

確かに、白馬の言つとおり食事中に灰原のことを見ていたのは事実だ。

しかし新一は、（そんなことを聞いて何になるんだ？）と、疑問が膨張していくばかりだったが、そんな考えを頭の中に留めて正直に返答した。

「いや・・・理由はねえよ」

白馬は、理由が無いのに見ていたのですかと、怪しむような細かい目付きで、
即答した新一を見つめる。

その目付きを注視している新一は、「理由が無くちゃ見ちゃいけないのかよ」と、
反論するような目付きで見つめ返す。

実際のところ、彼自身何で視線が灰原に向いていたのかが分からない。
分からないことを答えると言われても答えようが無い。

「では、工藤君。質問を変えさせて頂きます」

新一は内心で、またかよ　　と思いつつながら面倒臭そうな声質で、「どうぞ」と、背もたれに寄りかかりながらぶっきら棒に答える。

白馬はそんな新一の態度に動揺を一切せず、
彼とは真逆の真剣な表情と目付きで質問を投げる。

「君は宮野さんと一緒に居る時、どんな気持ちになりますか？」

「『どんな』って？」

「言葉通りの意味ですよ。嬉しいとか、楽しいとか、寂しいとか・
」

新一は暫く背もたれに寄りかかった状態で、
うーん と声を出しながら考える。

白馬は黙って答えが返ってくるのを、
顎に手を当てながら考え込んでいる新一の顔を注視しながら待ち続ける。

彼ら二人がしている呼吸の音すら部屋に響くような静け
さの中、
新一がその沈黙を破る。

「楽しいかな・・・」

「・・・」

言葉だけでなく、表情、雰囲気から“楽しい”という感情を表現している新一に、
白馬はポーカーフェイスを保ったまま、冷静に内心で一つの結論を出して、
躊躇せずに新一の顔を見ながら言い放つ。

「工藤君」

「ん？」

呼び掛けられたことで新一は、
楽しそうな表情のまま白馬と視線を合わす。

「君は……宮野さんが好きなのではありませんか？」

正体・白き探偵の推理と迫る自身の気持ち（後書き）

ようやく新一が白馬の協力で恋心に接近しますね。

因みに、白馬にこの役をやらせたのは、この小説を書くときに決めたからです。

では、評価、感想、ご意見お待ちしております！

正体・探偵の思惑と念頭の人（前書き）

どんどん接近する新一の思い、
今回もまた近づきます。

しかし、新一の鈍感さには呆れる・・・w。

では、本編どうぞ！

正体：探偵の思惑と念頭の人

「ざけんな!!」

茶色の机を破壊するような勢いで、両手をボタン！
と叩き付け、

落ち着いている白馬を否定という怒りの気持ちを新一はぶつける。

白馬はソファーをひっくり返すような勢いで立ち上がって、
自分を揺らめく瞳で見下ろしながら見ている新一を、
文字通り冷静沈着な瞳で見上げながら、彼の怒りを受け止めた。

「俺が好きなのは蘭だ!!灰原のワケねえだろ!!」

「・・・」

怒りという感情が彼の心を支配しているせいか、『好き』という言葉は何の躊躇いも無く言い放つ。

白馬は無言でそれを受け止めると、

新一とは正反対の冷静且つ、落ち着いた声で口を開く。

「では、蘭さんと居る時には宮野さんと同じ気持ちになりますか？」

新一はその質問を聞いた瞬間目を見開いて、

それは……
と云って、目を細めながらソファーに腰を降ろした。

……まるで気力を失ったように……。

「ならないんですね？」

白馬は新一の明らかな変化から、
宮野と同じ気持ちにはならない
が、
ということ悟っていた

新一に認めさせるために心を鬼にして言い放った。

一方新一は、『ならない』という言葉を確認たくないという気持ちと、
ちと、

認めざるを得ない気持ちに心が別れて、複雑な気持ちになっていた。

「工藤君。いい加減認めたらどうですか？自分の胸中の変化に・・・」

「でも・・・だけだよ！俺は蘭に『帰ってくる』って誓ったんだぜ
?!」

今更、「あの時の誓いは嘘でした」なんて言えるかよ！」

新一は怒りの感情に再び心を支配され始めていたが、その怒りは
さっきのものとは違い、

雰囲気からは悲しみ、言葉からは涙声が混じっていた。

その悲しみという名の怒りを素直に受け止めた白馬は、真剣な眼差しを解き、同情するような眼差しを向けて、興奮している新一を落ち着かせるように話した。

「誤解はしないでください。僕は何も蘭さんに、『そんな言葉を言え』とは言ってはいません」

「なら、どんな言葉を言えって言うんだよ！」

「正直に話せばいいんですよ。一言残さずに……」

『正直に話す』……この言葉を聞いた瞬間、新一の怒りはさらに増し、

ざけんな！！正直に話せば蘭は……と、行き場の無い怒りを白馬にぶつけるように言い放った。

「では工藤君。君はこのまま納得できない気持ちのまま、
蘭さんに誓った『帰ってくる』という約束を果たすというのですか
?」

「そんなこと言ってねえじゃんか・・・」

自分の中でも整理がついていないせい、

答えが見つからない新一の勢いは弱まっていき、

白馬はこの機会を逃すか　とでも言うように、

「なら、どうするといふのですか?」と、目の力も弱くなっている
新一に問い掛けた。

・・・しかし、方法が思いつかない新一に質問の答えが出る訳も無
く、
顔を下に向けて沈黙してしまふ・・・。

「工藤君。今の君は矛盾している」

「・・・」

新一は下に顔を向けたまま白馬の話しを、ウンともスンとも言わずに聞く。

「宮野さんに恋心を持っているが、

待たせている彼女を傷つけずに事を進めようとしている」

「・・・」

白馬の言うことは正しいと新一は思う。

・・・いや、思ってしまう。

しかし、それを認めたくないと思う自分の気持ちが勝っているため、

新一は白馬の言う事を飲み込むことができずにいた・・・。

白馬はそれを知ってか知らずか話しを続ける。

「しかし工藤君。そんなことは無理なんですよ。

何かを手に入れるには、それに釣り合う代償を払わねばならない・・・

。

世の中そんなものでしょう。

誰かが幸せになれば誰かが不幸になり、誰かが不幸になれば誰かが幸せになる」

違いますか？ と、白馬は顔を上げない新一の心に問いかけるように言う。

しかしながら新一は返事を返さないまま、石の如く微動だにせず沈黙を守っている。

今の彼の沈黙は、心中で苦悩している証拠 と読んだ白馬は、フウと一息付いた後、話しを続けた。

「もう一つ、“人間は変わる生き物”なんですよ」

『変わる生き物』・・・という言葉聞き終えた時、新一は顔を少し上げるが、その表情は前髪に隠れてしまっており知ることができない。

だが、表情は知ることができずとも、変わる生き物？ と

呟いた声が、
明らかに先程の声質よりも高くなっていったため、
白馬は彼の心中で変化が生じていることを悟り、話しを進める。

「そう。人は生きて行く上で、“難関”という巨大な壁にぶつかります。」

そして人は、その壁を多種多様な方法で乗り越えて行く」

ここで白馬は声質を少し落とし、

まあ・・・壁の大きさに驚愕して背を向けてしまう人もいますが・・・
と続ける。

この言葉を強調するように・・・。

言い終わると声質を戻して、前髪で隠れ続けている新一の顔を見ながら、
ゆっくりと口を開いた。

「しかし、大抵の人はその壁を乗り越えて強くなっていきます。
心身共に・・・」

「・・・」

フウ と、一旦口を休めるために一息付いた白馬は、沈黙して聞いている新一に話しを続ける。

「ですが、その難関は何の代償も無しに乗り越えられるものではありません。そのほとんどが、大きな何かを犠牲にして越えられる壁ばかりなのです。」

・・・そして、その“何か”には人の心も含まれます」

誰のことを言っているのか分かりますよね？
うが、

と新一に問

彼は表情を隠したまま、肯定も否定の返事も返さない・・・。

白馬は、冷たいことを言うかもしれませんが・・・ と、再び声質を少し落としながら語り出した。

「よく考えてみればこの世界は“代償ばかり”です。
・・・例えば、物を購入するにはお金という代償を払う必要があります。」

僕達が着ている服、生きるために食べる食事、家具、家、その他諸

々・・・、

全てお金という代償を払って手に入れたものですよね？」

ちよつと大げさな表現かもしれませんが・・・と、

肩を上げながら少し笑みを浮かべて、付け足すように白馬は言う。

「でも・・・」

新一は表情を隠したままだったが、ようやく口を開く。
・・・しかし、その言葉を白馬の声が遮る。

「『お金と人の心は同じ代償でも大きさが違う』・・・と？」

「あ、ああ・・・」

そうだろうか？
ら微かに見える、

と、新一は顔を少し上に上げ、前髪の間

白馬の“鋭さ”が戻りつつある瞳を注視しながら、
同意を求めるように言った。

新一のその言葉を聞き、
前髪の間から見える“覇気”が感じられない目を暫し見た白馬は、
そうですね　と、笑いが若干混じっている声で返事をした後、
間を置かずに話を進める。

「僕が言ったのは“あくまで”大げさな表現です。
確かに君の言うとおり、お金と人の心では同じ代償でも全く違いま
す」

この話しを聞いた新一は内心で、（そうだよな・・・）と肯定の
言葉を呟く。

「しかし、“代償は代償”です」

その内心の言葉を、彼の瞳で予想した白馬は、
肯定の言葉を言い直すように言い放つ。

新一は、言っている意味が分からない　とでも言うように、
その疑問を目で表現しながら白馬と視線を合わせ続ける。

「工藤君。さつきも言いましたが、今の君は矛盾している」

「そう・・・だな」

この問いに返事が返ってきたことで白馬は、
新一は矛盾していることを受け入れている
と内心で納得する。

「では、改めて問います。」

工藤君、君の胸中に居るのは誰ですか？」

「・・・」

「言うておきますが、この問いに私情は禁止ですよ・・・。
君の胸中に居る女性の名を正直に言うてください」

無言で聞き続ける新一の目を注視しながら白馬は、
重たい空気が流れ続ける部屋で返事を待つ。

正体：探偵の思惑と念頭の人（後書き）

今回は“代償”という言葉がポイントですね。

書いてて思いましたが、ホントにこの世界は代償という言葉で満ちていますね。

個人的にはそう思います・・・。

では、評価、感想、ご意見お待ちしてまーす！（＾　＾）

正体・存命で乗り越えられないもの（前書き）

今回も上藤邸のことを描写します。

評価ありがとうございます（＾Ｏ＾）。

これからも暑さに負けずに頑張っていることと思います。

では、さようばー！

正体：存命で乗り越えられないもの

通行人もほとんど見かけなくなった夜の暗い世界に、

昼間見る時とは別の建物にも感じられる不気味そのものの洋館に、二人の探偵が向かい合わせで居間のソファ―に腰掛けている。

この部屋には外界の光景を見ることができるといえる物が一切無いため、

街中をネオンの光や街灯と一緒に照らす黄金色の月光は入らない。

・・・まさに外界と隔離された世界である。

そのため、部屋の天井に取り付けてある蛍光灯の温白色の光が無ければ、

目を瞑っていてもさほど景色は変わらない・・・。

そんな光に照らされながら、一方の探偵は自らが問い掛けた質問の答えを聞くべく、

沈黙しながら正面の目を泳がせている探偵の顔を注視している。

その目を泳がせている探偵は、目の前の探偵の視線を感じながらも全く気にせずに、

自らの胸中を覗き込んでいた・・・。

（『俺の胸中に居る女性』・・・か）

この工藤邸に白馬探に連れてこられ、何の話しをするのかと思いきや前触れ無く、

『これ以上重大な話しがあるか』と言っても過言ではない話しを始めた。

その内容を一言で言えば、自分が愛する女性のこと　　だ。

工藤新一は今まで、どんな状況になろうとも自分の大切な人は毛利蘭だと決めていた。

それは、決して変わることに無いもの・・・言わば“必然”なのだと・・・。

・・・しかし、ここに来て白馬の話しを聞くうちに、

その必然は思い込みだったんじゃないか　　と思う自分が出てきた。

そして今では、その気持ちのほうが心の半分以上を満たし始めている。

『家族愛』

これは先程、白馬の口から出た言葉……。

自分の毛利蘭に対する感情は、家族愛に変わり始めているのでは？　と彼は推理した。

正直……というより、悔しいがその推理は的中していると言わざるを得ない。

偶発に発生した事件を解決して、これまた偶発に見てしまった取引で、

江戸川コナンとなった工藤新一は、毛利探偵事務所に着候して様々な経験をしてきた。

事件・・・出会い・・・別れ・・・、
その中には新一の時には決して経験できなかったことも含まれてい
た。

そんな経験を積み、大切な人と一緒に暮らし続けていくうちに、
自分の中で彼女に対する変化があったのだろう・・・。

ところで、本日午後には園子に、『大人っぽくなった』と言われた。
そしてさつき白馬には、『変わらない人間は居ない』とも言われた。

確かに、生せいを受けてから死を迎えるまで、
一つも変わらない人間が居るだろうか？

仮に、この質問を百人の人に質問すれば、全員が「居ない」と答
えるだろう・・・。

現に今の自分・・・いや、今までの過去の自分も「居ない」と答え
るだろう。

・・・ただ、そのことを理解していなかったのかもしれない・・・。
もしくは、理解することに恐れを抱いていたのか・・・。
・・・分からないが・・・。

『分からない』が、“一つだけ”分かることがある。
それは、灰原と蘭の違いだ。

最近・・・というより、組織との戦いが終わってから、
蘭と居るときに物足りない“何か”を彼女に感じるようになった。
それに対し、灰原と居るときにはその“何か”が消える・・・。
言いかえれば、心の底から気持ち良く話しができる。

だが、その“何か”の正体が全く分からない・・・見当すらつかない。
しかし、分からなくても、灰原と居るときには気持ち良く話せるのは事実だ。

そして最近、気が付いたら灰原のことを考えていた　　という
ことが良くある。

これはすなわち、胸中の女性が蘭から灰原に変わっている、
何よりの証拠なのではないだろうか？

突然呼び掛けられたことにも関わらず、眉一つ動かさずに、
答えがでましたか？ と、冷静な声を崩さずに言った。

。 . . . 新一の答えがどんなものでも受け止める覚悟をした目で . . .

「俺の答えは」

「」

「 灰原 かな？」

その新一の答えと決意を固めた目を見て白馬は、
その言葉に嘘は無い　　と直感で感じると同時に、
自分の説得に効果があったことに歓喜を感じる。

「でもよ・・・白馬」

「なんですか？」

「蘭には・・・何て言えばいいんだよ・・・」

この話しの目的は、新一の思っている人物が変わっていることに
気付かせるのが目当て。

この目的は達成できた・・・。

しかし、それ以上の難関が、

今彼の口から不安が混じった低い声で出てきた女性の存在である。

「工藤君。悩む必要は無いと思いますよ」

白馬は声だけでなく、表情も徐々に不安に変化していく新一と視線を合わせながら、

ここに来るまでに思案していたことを、彼の不安を取り除くように落ち着いて且つ、

明るい声で話し始める。

「『悩む必要は無い』って……どういうことだよ」

「どうもこうもありません……そのままの意味ですよ」

聞き終えた新一の顔は血が引いていくのが一目瞭然であり、その結果がどうなるかを恐怖したためか、焦り気味の声質で不気味なほど落ち着いている白馬に言い放つ。

「要するに……正直に話せてることか？」

白馬はその問いに一秒たりとも時間を開けずに、はい　と、
明るい声質を崩さずに即答する。

この返答を聞いた後新一の口が、ふざけるな　とでも言う
ような勢いで開かれるが、

白馬はそれを自分の声で遮る。

「『そんなことを話せば蘭さんがどうなるか?』、と言いたいの
ですか?」

自分の心を見透かされているような奇妙な感覚に襲われながらも、
ああ　と、怒りが少々籠った高い声質で新一は返答する。
白馬は、その新一に御塵も同情することなく意見を述べる。

「確かに君の言うとおり、真実を話したら蘭さんは深く傷つくでしょう……。」

何しろ、『待つてくれ』と言った人物が、

別の女性に恋心を抱いてしまったのですから……。」

新一は眼前で腕組みをしている探偵の言う事が、正しく真実だ

と思いながらも、

躊躇せずにテキパキと真実を言われたことに腹が立ったが、

その怒りを押し殺して口を挟まずに聞き続ける。

「……でも言いましたよね？何かを手に入れるには代償が必要だと……。」

先程の話しを思い出させるかの如く白馬は問い、

尋ねられた新一はその問いの意味を知ったためか、答えずらいようにそろりと頷く。

「なら判っていますよね？宮野さんを手に入れるには、

“毛利蘭さんという代償”を払う必要があると」

そんなことできるワケが…… と言いたい新一であったが、

彼が談じた代償の話しに納得していたため、それは止むを得ないこ

と　　と無意識に思い、
反論することはできなかった・・・。

白馬は視線を一瞬だけ下に向けた仕草を見逃さず、
その仕草は納得していて納得していない　　と直感で感じて、
その迷いを消し去るように言葉を掛けた。

「工藤君。冷静になってよく考えてみてください。」

これは蘭さんにとって“良い機会”だと思いませんか？」

「良い機会？」

「そうです。言わばこれは、彼女にとっての試練ですよ」

その言葉には重大な意味がある　　と、
自らの瞳をジッと見つめてくる真剣な眼差しで新一は感じ取って
いたが、

『彼女にとっての試練』という意味が理解できずに、
どういう意味だよ　　と、疑問の声で聞き返す。

白馬は、そうですね　と腕組みをして、彼に判り易い言い方を考え始めるが、
その時を置かず口が開いた。

「工藤君。『人生には様々な試練がある』ということと言つまでもありませんよね？」

その問いに緩慢かんまんに新一は頷く。

「例えば、今の君・・・自らの胸中の変化を知ったのも、“それに当てはまります”」

新一は、判り易く説明してくれていることに感謝の気持ちを抱いていたが、
同時に言いたい事が何時までも判らないことに苛立ちを覚えていた。
そんな心情に気付くこと無く白馬は淡々と話しを進める。

「そして当然、彼女にも試練はあります・・・“君から卒業する”という試練が」

「『俺から卒業』？」

新一は、自分から卒業　　という言葉の意味がさっぱり理解できずに、

目を少し見開いて口をポカンと開けた、他人から見れば間抜けな表情と声を上げる。

反面白馬は、彼の気の緩みを見て自分の気も緩め、

フフ　　と笑い声を漏らしながら真剣な眼差しを解いて穏やかな眼差しを作り、

優しく且つ明るい声で“言葉の意味”を語り始めるのだった……。

正体：存命で乗り越えられないもの（後書き）

さてと、暫く工藤新一の事になりそうです。

阿笠邸や探偵事務所のことはもう少し先になるかと思います。

まず、新一が毛利蘭という試練を乗り越えることを描写したいので……。

では、評価、感想、ご意見お待ちしております！

正体：決別した過去の自分と受け入れる今の自分（前書き）

一話更新します。

いや〜今日も暑い暑い・・・。

くたびれますね・・・w。

では、ごっごー！

正体：決別した過去の自分と受け入れる今の自分

「どつという意味だ？白馬」

「そうですね・・・詳しく説明しましょう」

白馬の言ったことが理解できないままでいる新一は、
“その意味”を知りたい　　という欲望により、我知らずに聞き返す。

「その前に工藤君。君はもしかしたら・・・毛利蘭という女性のことを知っているようで、
知らないではありませんか？」

「!?!」

その言葉は新一にとって聞き捨てならないことだった。
今まで自分と共に高校まで進み、時として両親以上の心の支えになった彼女のことを、
『知らない』と言われては黙ってはいられない。

「何言つてやがるんだ！蘭のことは誰よりも知ってる！」

たった数回しか会ってないオメエに言われたかねえよ！
と、

堪忍袋の緒が切れたが如く怒り叫ぶ新一に、

白馬は血相が変わった彼の顔を注視しながら、いいえ・・・判つて
いませんよ　と、
腕組みをしたまま即答する。

その返事に火に油を注いだが如く新一の怒りは増し、
「なら、何が判つてねえのか言ってみるよ！！」と、
家内中に聞こえるかのような大声で、冷静な眼前の探偵を怒鳴りつ
ける。

「彼女・・・毛利蘭さんは、君に甘えているんですよ」

冷静に言い放った白馬の『甘えている』という言葉聞いて頭が冷えたのか、

新一の心にメラメラと燃え滾っていた怒りの炎は、大洪水にあったように瞬刻に鎮火された。

その炎が消えたことを表現するように、

どろろということだよ？ と、打って変わったような落ち着いた口調で聞く。

「君が蘭さんをどろろという目で見ていたのかは判りませんが、おそらく心の支えとして見ていたのではありませんか？」

「あ、ああ……」

どうしてそんなことが判ったのか新一は疑問に思ったが、それを聞くことよりも蘭のことを聞きたいという気持ちのほづが遙かに勝っていたため、肯定的返事だけに留めた。

「……それが原因なんですよ」

その言葉を聞き益々（ますます）深まる疑問に新一は思わず、ハッキリ言えよ　と、苛立ち混じりの声質で白馬に言い放つ。

しかし白馬は気にすることなく、そう苛立たないで　とでも言うように、

冷静な声質を崩さずに話しを続ける。

「蘭さんは、君が心の支えとして見てくれていることが嬉しかったはずです。

そして彼女も“君を心の支え”として見ていたはず……。しかし彼女の“支え”は、君のとは比べ物にならない大きさになっているんですよ。

・・・そしてその“大きさ”が仇となっている」

「・・・どういうことだよ？」

新一は白馬の言っていることが理解できず、首を傾けながら理解の遅さを表すように、
遅い返事を返した。

「判りませんか？・・・蘭さんの心にある支えという君に対する感情は、

君と過ごすたびに膨れ上がっていき、

今では“君が傍に居なくては孤独感を覚える”ようになってしまっているんですよ」

おそらく　と、言ったことが予想であることを示すように、付け加えるように言った。

新一は白馬の、『おそらく』という言葉聞き逃さず、でもよ、それは予想だろ？　と聞き返す。

「確かに・・・でも、現実はどうですか？」

「現実・・・」

「はい。実際蘭さんは、君が変わってしまったという理由だけで、周りの人々を避けるようになっていきます」

その話しを聞いた新一は言葉も出ない……。そして内心で、俺の……。せいで　と自分自身を責め始める。だがその気持ちを白馬の言葉が瞬時に消し去った。

「工藤君。マイナスの方向に考えてはいけませんよ」

「え？」

「言いましたよね？……これは『蘭さんの試練』だよ」

何が言いたいのかが判らないのか、新一は無言のまま不安な表情を消さずに、

白馬の真面目な顔になりつつある表情を注視する。

「……残酷な言い方ですが、蘭さんは敢えてこのままにしておきましょ」

その言葉で新一の不安は焦りに豹変し、放っておくっていうのかよ?! と、

その焦りの感情を表現するように、早口と大声で白馬に問いかける。

白馬は、「『放っておく』とは一言も言っていないですよ」と、冷静な声質で返答して話しを続ける。

「これは蘭さんが、“君”という存在から卒業する試練です。ですから、蘭さんが君に救いの手を差し伸べないように、必要最低限の言葉しか掛けないようにするんです」

新一は冷静にはなったものの、じゃあ・・・蘭は誰が救うんだよ? と、

不安な声質を残したまま白馬に問う。

「居るじゃないですか・・・彼女の心の支えになる人達が」

白馬はフツ と口元を緩めながら、安心させるように意見を述べる。

「“親や仲間、友”という存在が・・・」

親・・・か　と、新一はその存在に気付けなかった自らの青
臭さを内心で痛感する。

同時に“白馬探”という、眼前の探偵の技量を高く評価する。

「つまり・・・『自分の傍には頼れる人達が俺以外にも居る』って
ことを、
思い出させるワケか」

その推測に、はい　と短く返事をした白馬は、
「それに、これは君の試練でもあります」と、お得意の微笑みを保
つたまま続ける。

「俺の？」と、どどういうことだ？　と言うように新一は、
顔を傾けながら疑問の言葉を口にする。

その疑問に、そう　と軽く呟いた後、
新一の返事を待つことなく続けた。

「君がこれから苦悩していく蘭さんを、
『幼馴染』として見守っていく』という試練ですよ」

なるほどな　と、フツと笑みを浮かべながら、
自分の心にその試練の言葉を強く刻み付ける。
決して忘れないように“心”という名の木に、
言葉という名の彫刻刀で何度も・・・何度も彫り刻む。

「・・・ありがとな、白馬」

「え?!」

突然お礼の言葉を言われたことに白馬は、一驚の声を思わず上げて、
表情も驚きのものへと変容する。

「俺の変化を気付かせてくれただけじゃなく、色んな大切で大事な事を教えてくれてよ」

感謝してもしきれるものではないが、
心底湧き上がってくる深謝しんしゃの気持ちを、
白馬に負けないぐらいの明るい声質と、太陽の如く眩しい笑顔で力一杯述べる。

「如何致しまして」

白馬も新一に負けない程の明るい表情と声質で挨拶を返すと、
僕も嬉しいですよ。君が説得に納得してくれて と、正直に意見を述べる。

・・・そして、最後に確認するように、「もう・・・大丈夫ですね？」と、
明るさを消して無表情で彼の心に問う。

その問いに何の躊躇ちゅうちゆいも無く、且つ太陽の如く笑顔を保ったまま
新一は、

「ああ！」と、自らの心に迷いは無い と言っように、
力強く返答する。

その言葉という気迫に安堵感を覚えた白馬は、

ゆっくりと腰を上げ少々痺れが走った両足を気にせず、

「それでは僕は失礼します。おやすみなさい」と、見下ろしながら挨拶を述べるが、

「いや、俺も博士ん家に行くぜ」と、新一も腰を上げる。

そうですか　と、短く呟いた白馬は、

彼がこんな遅い時間に阿笠邸に訪問する理由が大体予想できたが、

そこは聞かずに互いに痺れる両足を隠しながら、玄関の扉を開けた。

阿笠邸に移動する間、二人は一言も話さず肩を並べて歩き続ける。

これからの未来を見守るように照らしている幾多の星や、

黄金色の月明かりの光を浴びながら……。

「ただいま博士」

「遅くなってすみませんでした」

玄關の扉を静かに開けた新一は、自分達の声に反応して、ソファーに向かい合わせに腰掛けながら顔を向けている阿笠と灰原を捉える。

「おお・・・遅かったじゃないか」

阿笠は二人の顔を視界に入れながら、ようやく帰ってきたか！

とでも言うように、

心配な声質で言い放つ。

「すみません。思った以上に長引いてしまって・・・」

白馬は新一と共に阿笠の近くに移動しながら、

後頭部に右手を当てて、言葉だけでなく全身から謝罪する。

阿笠はその謝罪を聞き終わると、どんな話だったんじゃないかと、

二人に尋ねる。

「え〜と・・・灰原、ちょっといいか？」

新一は話しをはぐらかすように阿笠の左隣に立ったまま、左側に腰掛けて自分達をジッと見ている灰原に声を掛ける。

何かしら？

と視線をずらさずに返事をする。

それに間を置かず新一は、「取りあえず地下室に行かねえか？」と、視線を一瞬左に見える階段へ向ける。

「こじじや駄目なの？」

「ああ」

当然の如く疑問に思った灰原の言葉を即答した新一は、彼女が了承の返事をしていないのにも関わらず、階段へ向かって歩き出す。

（仕方ないわね）と内心で思いながらも、灰原は無言で席を立て彼の背中へ続く。
その様子を静観していた二人を気にせずに・・・。

正体：決別した過去の自分と受け入れる今の自分（後書き）

ようやく工藤邸での出来事が終了ですね。

原作やアニメを見ていて思うのですが、

どうして新一は（服部も）恋愛感情に鈍感なのでしょう？

あそこまで鈍いと“異常”な気がします・・・w。

では、評価、感想、ご意見お待ちしております！（^ ^）

正体・伝える思いと近接する心（前書き）

今日“よつやく”更新です。

では、どしどしー！

正体・伝える思いと近接する心

パタ・・・パタ・・・と、薄暗い階段を一段一段、

一定の間隔で降りて行く二人分のスリッパの音が途絶える。

それと同時に、カチャ　　と扉が開く音が通路に響いて居

間に抜けた後、

暫しの時も置かず消えて行った・・・。

「で？態々（わざわざ）呼び出して何の話しをしようって言うのか
しゅっ。」

地下室に入り、この部屋を自室の如く使用している、

茶髪の髪をウェーブにしている小さき少女が、眼前で巨人の如く佇む名探偵に尋ねる。

・・・しかし、返ってきた答えは“問いの答え”ではなく、

その前に座らねえか？　　と、話しが長引くことを連想させる言

葉だった。

灰原は無言で阿笠が設置してくれたが、ほとんど使用しない“形だけのベット”に腰掛ける。

新一は灰原の姿を目線で追った後、後ろにある回転椅子を引っ張って腰掛け、

身体を椅子ごと灰原に向ける。

互いに遠すぎず近づきすぎずの距離をあげながら、新一は珍しく姿勢を正して座り、

白色のミニスカートからスラリと伸びる白い足を揃え、

白衣を通して手だけが見える腕を組んだ灰原と、視線を合わせながら口を開き始める。

「灰原さ・・・何度も聞くようだけど、戻る気は・・・」

「無いわ」

新一が言い終わる前に彼女らしくハッキリと返答すると、
そ、そうか・・・と残念そうに肩を落とす。

・・・が、すぐに姿勢を戻して、「探偵団のことか?」と、

自分なりに思い当たる原因を言う。

その予想は的中したらしく、ええ　と軽く頷いた後、
灰原は話しを続ける。

「彼らの精神は安定してきたわ・・・あなたが居なくなつた時と比べればね」

（やっぱりショックが大きかつたんだな・・・）と、新一は彼ら探偵団にとって、
“江戸川コナン”という存在がどれだけ大きかつたのかを改めて思い知らされる。

そんな彼の内心を知つてか知らずか、灰原はクールな声質と口調で話しを進める。

「でも、まだ“百”じゃないわ」と・・・。

「じゃあよ。元太達が元に戻つたら、オメエは元に戻るのか？」

新一は心中に少しの希望を抱えて、
その希望を口元を微量に緩めることで表現しながら問う。

・・・しかしその光は、判らないわ　　という、

灰原の曖昧な返答により儂くも崩れ落ちる結果となった・・・。

同時に彼の口から緩みが消え、ハア　と、

灰原に聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな溜息をする。

・・・が、その仕草を見逃さなかった灰原は、直球にその疑問をぶ
つける。

「工藤君。なぜ、私が戻ることに拘るの？」

「拘ってるワケじゃねえんだけど、俺が戻ったんだからオメエも戻
るのが自然かなって」

灰原は、（ハア）と心中で溜息を付くと、

「変な誤解は止めてほしいわね。私は私、貴方は貴方でしょ？」と回答するが、

そりゃそうなんだけど・・・と納得していない新一に再度内心で呆れ、

“もう一つの質問”を投げる。

「話しは変わるけど、そんな事を聞くために呼び出したんじゃないんでしょ？」

新一は、バレてたか・・・さすがだなと、彼女に対する高い評価を、

“呆れる”という形で思うと降参したように理由を話す。

「実は蘭がな・・・」

そう言うとな新一は、自分が戻ってからの蘭のことを話し始める。

反面灰原は、彼の表情が突如固いものに豹変したところから、

良い話ではないことを悟って目線を一切ずらさずに聞き始めた。

「 本当・・・なの？それ」

「・・・あ、ああ」

これ以上丸くできないほど目を大きく見開いた灰原は、自分が予想していたこと以上のことを知り、動揺と驚愕の感情を隠しきれないでいた。

そのシヨックは相当なものだったのか、灰原は無意識に顔を下に向けて、

自らの白い両足と灰色の床を捉えるが、彼女が見ているのは幻の如く透けて見える毛利蘭の泣き顔である。

「大丈夫か？灰原」

新一は顔を下に向ける前の彼女の表情が普通ではなかったため、

サラサラと流れる茶髪越しに彼女の顔を注視する。

「……っ」

「え？」

「どっしてそんなこと言ったのよ?!」

顔を上げた彼女は、普段のクールで大人しい表情とは打って変わ
り、

腕組みを解いた両手で白色のシーツを握りしめ、
正面で心配そのものの表情で見つめている、
探偵への怒りを剥き出しにしたものへと豹変していた。

落ち着けよ灰原 と、何度か見たことがあるが、
普段のクールな姿からは想像できないほどの変わりように、
慣れない態度で気持ちを安定させようとする。

……しかし灰原にして見れば、なぜそんなに落ち着いていられる
のか? と、
疑問が膨らんでいくばかりで、

脳という小さな部屋に限界まで膨張して行き場の無くなった気持ちを、
怒りという形で外に放出して正面でアタフタしている探偵にぶつける。

「どうして・・・そんな蘭さんを悲しませることを」

毛利蘭を悲しませる　これは灰原にとってある意味、
組織以上に精神へ圧迫を掛ける事であった。

灰原は彼女の顔を見たり思い出すたびにどうしても、
“あの人”の姿が幻影の如くユラユラと宙に浮かぶ。

・・・そして彼女、毛利蘭が笑えば幻影の“あの人”も笑顔になり、
彼女が怒ればあの人も眉を鋭くして似合わない怒りの表情を作り、
悲しめば瞳をユラユラ揺らしながら、止まることを知らない涙を、
一滴一滴頬に涙線を残しながら、水滴となり重力に引かれながら落ちて行く。

まるで精神が繋がっているかのように……。

そして、あの人と重なり合う蘭の泣き顔を想像するたびに、親族が苦しんでいるような途轍もない激痛が、自分の心をナイフで何度も付き刺されるような、グサリとした痛みが心だけでなく、体中を雷鳴の如く激しく駆け廻る。

「取り敢えず灰原、もう一つの話しを聞いてくれないか？」

灰原の気持ちを探しながらも新一は、正面のベッドで顔を下に向けて、

茶色の髪しか見えない彼女をここに連れてきた理由を話そうとする。

ええ……と、弱い返事が返ってきたことに、今話すべきかどうか迷いを覚えた新一だったが、ここで話さなければ好機が何時訪れるか判らなかつたため、

白馬から言われた事を重い口を無理やり軽くして話します。

時を刻む音が場の雰囲気に関係無く聞こえる中、
新一は顔を上げた灰原の表情の変化を気にしつつ話しを進めていき、
三十分ほどの時間を掛けて話し終わる。

……だがその三十分は、他人を寄せ付けけないほどの重い空気を放ち、
且つ集中力を一瞬たりとも崩さない二人にとっては、
“時が止まっている”かの如く刹那の出来事であった……。

「家族愛？」

信じられない

と言うような震える声で、

自分とは正反対の平然とした顔で座っている新一を驚愕の表情で注視しながら、
語られた話しの中でも一番信じられなかった言葉を無意識に聞き返す。

「ああ。最初はもちろん恋愛感情だったんだけど・・・何て言うのかな、

コナンとして探偵事務所で暮らしていくうちに、

蘭やおっちゃんの心の温かさを身近で感じるようになって、自分でも気付かないうちに“彼女として”じゃなくて、

“家族として”守りたいっていう胸中の変化があったんだ」

自分でも何時変わったのか判らねえんだけどな　と、
ハハッと自らの変化に気付かなかった未熟さを情けなく笑うと、
驚愕の表情から真剣な顔つきで目線を合わせている灰原に話し始める。

「それでよ・・・オメエと一緒に組織と戦っているうちに、
最初に出会ったときとは違う感じを覚えるようになったんだ」

「『違う感じ』?」

灰原はその感じを知りたいという欲望と、“何となく”であったが、
知ってしまうと後戻りできないような感じを覚え心中で悩むが、

そんなことを知りもしない新一の口は構わず次の言葉を出す。

「ああ……一言で言つと……馬が合うんだよ」

「『馬が合う』ってどついつい意味？」

胸の中にモヤモヤと湧き上がってくる嫌な感じを覚えながらも、同時に湧いてくる知りたいという欲望を抑えきれず、灰原は聞き返す。

それを聞いた新一は、そうだな　と暫し考え込んだ後、顎に当てた右手を膝の上に戻し口を開く。

「一つはやっぱり……同じ経験をしたことかな……と書いてえん
だが……」

「？」

「本当は……オメエと話してると楽しんだよ」

「楽しい？」

新一の言っていることが判らず、灰原は顔を少し傾けながら聞き返す。

「ああ。オメエはさ・・・薬学の知識が豊富だろ？」

その中には俺が知らねえこともあって、そのことを話しているとワクワクするんだよ」

「ワクワクって？」

「俺とは違う環境で育ち、そこで得た様々な経験や知識は、普通の人には決して真似できないようなことばかりだ。・・・もちろん俺もな」

話しを黙って聞いている灰原は、組織に居たことを褒められているような感じになり、

嬉しいような悲しいような複雑な気持ちになっていた・・・。

その気持ちを表すように視線を新一からずらす。

それに気付いた新一は、変な意味じゃないぞ　とやや焦り気味の声を出す。

それを聞いた灰原は、判ってるわ。続けて　と促して、

目線を再度合わせる。

「そんな普通の環境以外で育ったオメエと話していると、
“世界にはまだまだ色々な世界があるんだ” ってことを思い知らされて、

同時にオメエを“スゲエヤツ”だって思えるんだ」

『凄い』・・・か と内心で灰原は思いながらも、
(そんなことはない) とその言葉を否定する。

そんな彼女の心境を知ってか知らずか、新一は沈黙している灰原に話しを続ける。

「だからさ・・・俺」

「・・・」

「そんなオメエに・・・恋しちゃったみてえなんだ」

何を言われたのか判らない灰原の思考は停止して、雪原の如く真っ白になり、
勇気を心底振り絞り告白した新一の心臓は、ドラムの如く激しく動く。

・・・そしてそんな二人に時間が動いている事を知らせるため、掛時計の秒針が一定のリズムで音を流す。

・・・が、今の二人にはそんな音は耳に入らなかった・・・。

正体・伝える思いと近接する心（後書き）

ようやく告白の時ですね。

原作では、新一は蘭にどろいどろいという形で告白するのでしょうか？
そもそも、何時になるんでしょうね？

では、評価、ご意見等お待ちしております！（^ ^）

正体・拒否される者と拒否する者（前書き）

皆さん、こんにちは。

さて・・・行き成りこんなことを言うのも気が引けますが、
評価が四ポイント下がっていました。（　・　）。

ミスがありましたら指摘お願いします。

因みに、内容が悪いというのは謝るしかありません・・・。
申し訳ありません・・・。

では、どうぞー！

正体・拒否される者と拒否する者

「ふざけないで」

「灰原？」

新一が思いを伝えた後、この地下室には時計から見れば短い、二人から見れば長く且つゆっくりとした時間が流れていた。

視線を互いに外さず、一方は返答を待ち、

一方は思いを受け居られず思考が停止したまま……。

そんな終わりを知らない沈黙状態が続くと思われたが、思考が徐々に回復し始めた灰原が真面目な表情で口を開く。

「工藤君。良く考えて見て？貴方が戻ったのは何のため？」

「……それは、蘭のためだ」

新一は言いづらい口を強引に開き、正直に過去の気持ちを話す。
・・・が、でもそれは昔の話だ　と、間を置かずと言い直す。

しかし灰原にはその言葉は届かず、尚も否定し続ける。

「いいえ、“今も”よ。貴方の言うとおり人は変わっていくものよ。実際、私は変わったわ・・・組織に居た頃よりもね・・・。でも貴方のその気持ちは変化じゃないわ、“忘れている”だけよ」

「何言ってるんだよ・・・忘れてなんかいいえよ」

ホントだって　と、灰原の予想外の回答に啞然とした新一は、自分の気持ちを改めて伝えるために、腰を上げて灰原に近づきながら、感情に任せて言い放つ。

「いいえ、忘れてるわ。貴方は“ホントの自分”を忘れてるのよ。」

そして偽りの顔を信じ込んでしまっている」

距離が縮まり、目線を合わすには顔を上げなければならぬ位置まで来た新一を、首が少々痛むのを我慢して見上げながら、本当の感情を無理やり押し殺して言った。

「そんなことねえよ！ホントの気持ちだ、ホントのことだ！」

あくまで否定する灰原に苛立ちを覚え始め、知らず知らずのうちに口調が激しさを増していく新一だったが、見下ろしている彼女は眉一つ動かさずに無言で首を横に振る。

「灰原……俺は嘘なんて言っただけだよ！」

「じゃあ聞くけど、貴方は蘭さんが傷つくことに耐えられるの？」

その問いに詰寄る勢いで意見を言い続けてきた新一の勢いはパツと止み、
耐えられる自身は・・・ねえ　と、明らかに自身が無さそうな低い声質で返答する。

「なら彼女を見守って・・・」

「でも！」

何の前触れも無く大声を発した新一に、
灰原は言葉を止めて彼の意見を口を挟まずに聞く。

「耐えられる自身はねえけど・・・耐えてみせる。
白馬にも決意を話したしな。だから俺もこの試練を乗り越えて見せる・・・必ず」

灰原は彼の瞳、言葉、雰囲気からその決意が生半可なものではないことを感じたが、
どうしてもその気持ちを受け取るわけにはいかなかった。

正直に言えば、彼のその気持ちは嬉しいことこの上無しかった。
灰原も組織との戦いを通じて新一のことを、仲間や戦友や相棒とし

でなく、
異性の見方をするようになったことが何度かある。

・・・しかし、その新一の気持ちを受け止めるワケにはいかなかった。

自分は彼の運命という歯車を狂わせてしまった張本人。

組織を倒したものの、彼女の心に残る罪悪感は今だに消えず、
忘れてはならない　　と言つように、心に刻まれている。

そしてそれ以上に『待つてくれ』と言った人物が、
帰ってきたらで別の女を好きになっていたということを知ったら、
どんな思いを抱くだろうか？

そのことを受け入れる？・・・それはないだろう。

彼を恨む？・・・これは止めてほしい。

元凶は私、毒薬を作っている意識は無かったとは言え、現実には嘘を
つかない。

その薬のせいで工藤新一の人生を狂わせ、同時に毛利蘭の人生も
狂わせてしまった。

そんな私が彼女から幸せを奪うことなど、“絶対に許されない”こと。

「……帰って」

「え？」

「今日は……帰って」

顔を下に向けながら震える声質と身体で、懇願するように頼み込む。

「……灰原」

新一は納得するまでこの場を離れないつもりだったが、彼女の声や小刻みに震える身体を見て、心境がどういつ状態かを察して考えを改める。

判った、考えといてくれよな　　と言つと、
黙ったままの顔が見えない彼女を心配しながら、地下室の扉を音を
立てずに開ける。

そして外に出ると、
「おやすみ」と一言掛けて、ゆっくり扉を閉めた。

・・・新一が出て行った後、
抑え込んでいた感情が一気に噴き出たように少女が涙したのを、彼
は知らなかった・・・。

パサ・・・パサ・・・と、降りてきたときよりも、
数倍重く感じられる足音を耳にしながら、
新一は背後の薄暗く、足音よりも重い部屋を気に留めながらも、
明るさが階段の入口まで漏れている地上へ戻って行った。

蛍光灯が齎す人工的な光の下で、家主の阿笠と居候している白馬が、襲ってくる睡魔を抑えながら向かい合わせにソファーに腰掛けている。

何も知らない阿笠を余所に、灰原を導くように新一が連れて行った後、

なぜ新一が灰原を連れ出した理由が判らずに、呆然と立ち尽くしている阿笠をソファーに腰掛けるように促す。

あ、ああ　と、面喰らったような返事をした後、阿笠が地下室の階段側にゆっくりと腰を下ろし、それを視認した白馬も緩慢に腰掛ける。

そうして互いに強張った表情と目付きで向き合いながら、厚く重い空気の中で対話が始まる。

「阿笠さん。単刀直入ですが・・・新一君は宮野さんに告白しに行

きました」

「な、なんじゃと?!」

娘同然に大切に且つ、大事に思っている灰原が告白されるということに、

驚愕の感情を隠せない阿笠だったが、その相手が“あの”工藤新一であることが、

仰天の対象となったことに、外まで聞こえるほどの大声で叫号する。

椅子から飛び上がりそうになっている阿笠を、

身振り手振りで落ち着くように促すと、表情が治っていない阿笠を気にしつつも、

話しを続ける。

本心は、完全に気持ちが悪くなるまで待ちたいところだが、

出来れば新一が戻ってくるまでに話し終えたいので、

大して時間を置かず次々と真実を話していく……。

最近の毛利蘭の状態、工藤邸での新一の変化……そして、

工藤新一が蘭ではなく灰原を選んだ事……。

それらを出来る限り阿笠の返答に答えながら、丁寧且つ素早く話していく。

まあ、彼が話しに付いて行っているかどうかは別として……。

時に驚き、時に哀しみ、時に共鳴する阿笠を、
背後の薄暗い階段を視野に入れながら、白馬は休むことなく話し終えた。

その直後である……阿笠の後方に肩を落としながら、
重い足を一步一步進めて階段を昇って来た新一の姿が視界に入ったのは……。

新一の容姿から良い予感はいしなかったが、
彼の薄暗い地下室の階段のような雰囲気は少しは知るため、
阿笠と目を合わせて意見が同じことを頷いて確認すると、
肩を並べて近づきながら、慰めるように話し掛ける。

「新一。白馬君から話しは聞いた……」

「ワリイ博士・・・俺、帰るよ」

「そうか・・・気を付けてな新一」

自分の言葉を遮り且つ、その容姿のとおり気力の欠片も無い声質で返答した新一に、
理由を尋ねずに阿笠は、その背中を白馬と共に見送る。

「大丈夫じゃろうか？新一君は」

ガチャン　と、多少家内に響いた扉が閉まる音を聞き、
深夜の暗き闇の世界に消えて行った新一を視認した後、
左隣で玄関を見続けている白馬に顔を向けながら、阿笠が心配と不安の声質で尋ねる。

そうですね　と、大丈夫では無いと聞き取れる返答をした後、
阿笠に顔を向けて、「明日、宮野さんに話しを聞いてみましょうか」と、

眼前の家主同様、心配そうな声質で返答する。

・ ・ ・ 普段の明るく微笑みが似合う彼とは違い、
仲間を心配している歪んだ表情を浮かべながら ・ ・ ・ 。

正体・拒否される者と拒否する者（後書き）

今作で一旦、工藤新一の出来事を終わりにしようと思います。
さてと・・・ここからどういう展開にするか・・・。

では、評価、ご意見、ご指摘お待ちしております！（^ ^）

正体・探偵の苦痛と親友の気遣い（前書き）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。

今日は雨も降り、夏としては過ごし易い陽気です。

では、本編どうぞ！

正体：探偵の苦痛と親友の気遣い

ピヨピヨ・・・ピヨピヨ　と、小鳥の囀なげりが一日の始まり
“朝”を告げると、

ここ毛利探偵事務所では、
街中を春らしく温ぬくい光で包み込む太陽を拒絶するように、
暗く静かな朝を迎えた。

「おはよう、蘭」と、小五郎が寝室及び自室から、
眠そうな目と寝癖丸出しの髪形で出てくると、
台所で包丁の音をリズム良く鳴らしている蘭の背中に、
起きたてのダルそうな声質で挨拶を言う。

・・・しかし、おはよう・・・お父さん　と、返事は返ってき
たが、
顔は向けずにその声を聞いただけでも、
天使の表情は消えている事を悟らせるほどに沈んだ声質だった・・・
。

小五郎は聞き慣れるほどに耳にしたその声を無言で聞き流すと、

紫色の座布団が敷いてある自分の特等席に、胡坐をかいてゆっくり腰を下ろすと、正面の台所で、作業をいつも通り手際良く行っている娘の背中姿を見詰めながら、数分の時を得て朝食を迎えた。

いただきます　　という挨拶を交わした後、互いに無言で箸を進めながら、娘は明るさ一つ無しで食事を淡々と進め、父はそんな娘の顔を心配と不安の表情で見詰めている。

「なあ、蘭」

小五郎は一旦手を止めて、黙々と食事を進めている蘭に話し掛ける。こういう時にこそ、彼女の心中を聞き、それを解決しなければならぬと思ったのだ。

「何？お父さん」

表情と同じ気迫無き声質で蘭は、手を休めて返答しながら目線を合わせる。

「今日は学校・・・どうすんだ？」

「ゴメン・・・お父さん」

期待は抱いていなかったが、実際に落胆の返答が返ってくるとシヨックは大きい・・・。
しかし、気落ちをしている時間も無く、先程の衝動も消えぬまま話題を変える。

「なあ蘭・・・そろそろ話してくれねえか？」

「ゴメン・・・お父さん」

正直、今の彼女は人形のようにだ・・・。

幼馴染の生意気な探偵が帰ってきて、

これ以上の笑みが無いほど笑いながら登校して行ったと思っていたが、
三十分もしないうちに破竹の勢いの如く階段を駆け上がり、
そのままの勢いで自宅の扉を開けようとしているところを小五郎は
呼び止めた。

・・・しかし、娘から返ってくる返答はその場の思い付きばかりで、
一つたりとも本当のことを知ることはできなかった・・・。

その後、頼んでいた目暮から連絡が来たものの、
その内容は小五郎の心に重く押し掛かっていた不安という名の重圧
を、
さらに重くするものだった・・・。

そして、突然訪問してきた白馬探の存在・・・。

小五郎は、蘭が白馬を事務所から連れ出したことから、

娘がこの探偵を呼んだことを察する。

敢えて口を出さなかった小五郎は、この探偵に微かな“希望という光”を抱いていた。

（もしかしたら、娘にプラスの影響を与えてくれるんじゃないかと・・・。）

・・・しかし、その光は数秒も輝かずに消えてしまう。

小五郎自身、無駄に時を過ごしたわけではない。

娘にあれほどの影響を与える人物・・・そんな人物は、思い当たるところ一人しか居ない・・・。

そして、蘭を戻せるのは“あの青年だけ”だと・・・。

“嫌な勘”なほどの中率は高いものだ・・・。

白馬探が帰った後、蘭の心はプラスの方向どころかマイナスの方向に進み始めた。

本人の口からはそんなことは聞かないが、彼女の顔を見れば一目瞭然であった。

・・・まるで、大きな希望という白色の光を、
絶望という名の黒色に塗り潰されたように・・・彼女の表情は沈んでいた。

その日の昼食は、「食べたくない」という理由で、

小五郎一人で簡単な食事を作って終わり、夕食は一緒に食卓を囲んだものの、

自分で腕を振った料理にほとんど手を付けずに席を立ってしまった・・・。

小五郎は娘を心配しながらも、

全く口を開こうとせず就寝に付いてしまった蘭を気にしつつも、
今までの中で一番長く感じられた夜を過ごした。

そして現在、朝食を食べ終え、片づけをしている蘭の背中姿を見ながら、

じゃあ、俺は事務所に行つてくるな　と、精一杯の明るい声で
伝えたが、
返ってきた返事は、「うん。判った」の、五秒にも満たない短い言
葉だった……。

内心では仕事などしている場合では無かったが、
仕事を休むと逆に心配を掛けてしまつんじゃないか？　という
思考が無意識の内に働き、
事務所へと足を運ぶことにしたのだ。

……いつも通り事務所の奥の回転椅子に腕組み足組みをしながら、
右耳から聞こえてくるアナウンサーの、
けたたましい熱気の入った声に目を瞑って集中しながら、
頭の中で緑色の芝生を土ごと蹴飛ばしながら、
一頭の茶毛の馬が後方に地響きが立つほどの凄まじい足音を大地に
鳴らしながら
迫ってくる、数頭の馬に追いかけれながら、
白いラインを踏むところを想像する。

しかし、探偵の思うとおりにはならないのか、時間が経過するごとに顔が歪んでいく。

そんな中・・・来客を知らせるコンコン　　という音が左耳に届く。

小五郎は何時ぶりか判らないほどの依頼人に心踊らせながら、ラジオを机上に置いて、よれている灰色のスーツを両手で整えながらドアノブを回す。

「!・・・オ、オメエは・・・」

久々の依頼人はどんな人物なのかを満面の笑顔で視認した瞬間、小五郎の顔から笑みは消え、その消えた笑みを補うように、目を見開いた驚愕の表情が現れる。

「久しぶりね・・・オジサマ」

茶髪のショートヘアにこれ以上無いほどの高く明るい声で挨拶をした女性は、

眼前で一驚している探偵を眼中に置かず用件を述べる。

「蘭に用があつて来たんだけど、今は自宅かしら？」

「あ、ああ……そうだが……」

蘭に会つてどうするんだ？ と、小五郎は気持ちを安定させ

て続ける。

そもそも、彼女が学校に行つてないことに疑問を抱くが、

娘のことしか頭にない女性は、その疑問を聞くことを許してくれず、

「判つたわ。ありがとう」と、礼の言葉を述べた後、

階段を上がつて自宅へと上がってしまった……。

（蘭のことは任せるか……）、そう内心で呟いた小五郎は、

右手で扉を静かに閉めながら“期待”を胸に事務所へ戻つて行つた……。

「蘭、居る？ 園子よ」

「!・・・そ、園子?!なんでここに?」

「取り敢えず入れてくれる?中で話すわ」

連絡も無し且つ、今の時間では高校の一時間目の授業を受けているはずの親友が、

なぜここに居るのかと疑問が浮かんできたが、彼女が何の理由も無く行動を起こす女性でないことは百も承知のため、

蘭は躊躇うこと無く、「入って」と自室に通ず。

園子は扉越しに生氣の感じられない声を耳にした後、
キィィィ　と音を立てながら扉を開ける。

・・・そして最初に目に付いたのは、ベットに力無く腰掛けて、カーテン越しに入ってくる太陽光を左半身に浴びながら、自分を明るさが御塵も感じられない笑顔で見ている蘭の姿だった。

「おはよう、蘭」

「うん。おはよう園子」

園子は持ち前のハツラツとした明るさで挨拶をするが、その明るさを消し去るかのように暗い声が返ってきた。

・・・まるで、この部屋の雰囲気表現するように・・・。

園子はその暗い声が、

彼女が精一杯の明るさを出した声質だということは理解していたが、部屋の暗さもあってどうしても暗く感じられてしまった・・・。

しかし、当然ながらそこには触れず、

「座って」と回転椅子を右手で示す蘭を視認した後、自らの右手で引き女性らしくゆったりと座る。

そして、フウ

と一呼吸して心を落ち着かせると、蘭と目線を合わせながら前置き無しで用件を話し始める。

「私がここに来たのは……“新一君のことを話したいから”なの」

園子の予想通り……というより当然の如く、
『新一君』という名前に目を大きく見開いた蘭は、
血相変えた表情で園子に詰寄るように返答した。

「な、何なの園子?! 話つて……早く教えて!」

まるで返答を返す隙を与えないかのように口を開き続ける蘭に、
園子は両手を前に翳^{かき}して、落ち着いて蘭 と、彼女の乱れてい
る心を、
言葉と仕草で整える。

蘭はハツとした後冷静になり、フウ と深く息を吐くと改め
て尋ねる。

……今度は冷静且つ慎重な声質で……。

「実はね。昨日・・・新一君と話をしたの」

正体：探偵の苦痛と親友の気遣い（後書き）

え〜久しぶりの探偵事務所ですねw。

やはり、沈んだ蘭の心を癒すには、

園子が最適なキャラクターでしょうか？

まあ、私自身好きなキャラクターですからね・・・。

では、評価、感想、ご意見お待ちしております！（^ - ^）

正体・親友に訴える予想と公表されない裏情報(前書き)

一日ぶりの更新ですね。

昨日色々とありまして、更新できました・・・。

では、どごぞー！

正体：親友に訴える予想と公表されない裏情報

『新一君と話しをした』

目の前の親友の口からこの言葉を聞いた瞬間、蘭の時間は刹那停止していた。
まさか、昨日彼女が自分の心を悩ましている“あの人”と話し合っていたとは、
驚愕以外の感情が出てこない。

「どんな事を話したの？」

早く・・・一刻も早く聞きたい という欲望が、限り無く心中に湧き続け、
それが焦りという形で感情を支配するが、それに飲み込まれること無く、
冷静さを失わずに園子に尋ねる。

「結論から言つとね・・・新一君・・・変わってたわ」

「・・・そう」

やっぱり　　とでも言つように、蘭は短く低く、そして沈んだ
声質で返事をする。

園子は気にはなつたが、全て話し終えたら聞こうと思ひ話しを続
ける。

「ねえ蘭・・・『新一君は変わった』ってあんたは思ってる？」

園子はそんな問いの答えは判り切っていたが、
彼女が彼をどういうふうに思っているのかをハッキリと知るために、
沈んだ表情をしている蘭に尋ねる。

「変わったわ・・・ものすごく」

大げさに言えば別の世界の人みたい　　と、付け足すように言
ったが、
彼女の微かに震える薄い桃色の唇から、本心では泣いていることを
悟る。

園子はそのには触れず次の問いを投げ掛ける。

「じゃあ、どういつぶつに変わったかと思っている？」

「それは・・・」

蘭は視線を少し下に向けて、暫し考え込む。

左半身が彼女の心を写しているが如く暗く、
逆に、右半身が本当の彼女を表しているが如く明るい、

左右非対称の容姿をしている蘭の姿を注視しながら、園子は答えが返ってくるのを待ち続ける。

一つの音を除けば無音の部屋で園子は、時を刻む音を聞きながら蘭が口を開くのを目視する。

止むことなく鳴り続ける、
カチ・・・カチ・・・という秒針の音響が煩わしく感じられたが、その音を体内には納めずに、眼前の幼馴染だけに集中をした。

「・・・大きく見えるようになったかな」

園子は、そっか　と、そのことを理解してくれていたことに感謝した。

・・・受け入れているかどうかは別として・・・。

「ねえ・・・園子」

「ん？」

先程よりも沈んだ声質で呼び掛けてきた蘭に、園子は微笑みながら返事を返す。

「新一はさ・・・私の知っている新一はもう居ないの？」

蘭　と、園子は瞳を揺らし始めた彼女を、哀れむような目で見つめ返す。

その目付きを認識しながらも、蘭は問い掛けを止めない・・・。

・・・私の言ってる事間違ってるじゃないよね？
と、親友に訴えかけるように・・・。

「私の知っている新一は・・・帰ってこないの？」

「・・・蘭」

「あの変わったちゃった新一はもう戻らないの？」

蘭の泣き顔と涙声を聞きながら、園子は親友の心の痛みを痛感しながらも、
正直に真実を言い放つ。

「蘭、キツイ事を言うようだけど・・・帰ってこないわ」

永遠にね
と、少し声質を低くして目を瞑りながら、冷たい言葉を言い放つ。

まるで、現実を見なさい　　と言わんばかりに……。

「！！！」

その言葉を聞いた瞬間、予想もしてなかった返答が返ってきて、且つ一番の親友からそんな冷たい言葉を言われたことに、驚愕の表情を隠せなかった蘭は、無意識に絶句して顔を下に向け沈黙してしまふ……。

そうなることを想定内にして冷たい言葉を言い放った園子は、俯いてしまい黒色の髪しか見ることのできない蘭に、優しく語り掛ける。

「蘭……冷たい事を言っているように聞こえるかもしれないけど、今のアンタがしていることは……アンタが嫌っている“逃げ”なんじゃないの？」

現実からの　　と、目を吊り上げて髪の上から蘭の目を注視する。

それに対し蘭は無言で返答をする。

自らの光に照らされ白さが強調されている左足と、
光を浴びれず半分黒に染まっている右足を視界に入れたまま……。

「ねえ蘭。逃げてばかりじゃ一歩も前に進めないのよ」

それは判るでしょ？ と、続けて述べるが、彼女は首を縦にも横にも振らない……。

肯定も否定もしない蘭を、『納得している』と解釈した園子は話しを続ける。

園子は無駄に、今まで毛利蘭という女性を見てきたわけではない。

彼女が沈黙を守ってウンともスンとも言わない時は、
納得はできていてもそれを認めたくない という気持ちになっ
ていることは、
手に取るように判る。

そして、園子は“それ”を認めさせるために次の言葉を掛けようとするが、
突如蘭の曇った声質が園子の口を止める。

「あ、あのさ・・・園子」

今まで沈黙を守り通していた彼女が、突然喋り出したことに刹那目を丸くした園子だったが、咄嗟に平静な雰囲気です、なに？蘭と高い声質で対応する。

その応答を耳にすると緩慢に顔を上げて、眼前の明るい表情を見せている園子の目を捉えた蘭は、両親にも話せなかったことを口に出す。

嘘は話さない　とでも言うような、真剣そのものの表情と目付きで・・・。

「園子・・・これから私が話すことを信じてくれる？」

信じられないことを話します　そう言わんばかりの口調は、園子の頭を一旦停止させるが、その“信じられないこと”が彼女の心を悩ませている原因かもしれない、　そう予想した園子は、「言っていてらん」と言うようにゆっくりと頷く。

園子の目付きと表情から、信じてくれる　　という希望を胸に
抱きながら、
蘭は徐ろに話し始める。

「『新一が……コナン君だった』っていう話し」

「新一君が……コナン君か……どうしてそう思うの？」

内心では、信じられない　　という気持ちで一杯だったが、
彼女の顔つきから“嘘”は読みとれなかったため、その胸中を表に
は出さずに話しを聞く。

「園子も知ってるよね？『犯罪組織』の事件」

「もちろんよ……テレビや新聞で死ぬほど見たしね」

「うん。その事件はね……新一が関わっていた事件なの」

「！……そうだったんだ」

(あの事件に新一君が)・・・そう内心で納得しつつも、それが新一＝コナンにどう繋がるのかが判らない園子は、我知らずに右手を顎に当てる。

その仕草を気に留めない蘭は、淡々と話しを進めていく。

「ところで園子、コナン君が表れたのが、

新一が行方をくらました“ほぼ”直後だったことは知ってるよね？」

もちろん知ってるわよ

と言うように、「ええ」と明るく園

子は返事を返す。

「そして新一が表れる前に、コナン君がこの事務所から出て行ったわ」

「・・・」

蘭の話している内容から、彼女が何を言いたいのかが薄々判ってきた園子は、

無言且つ固い表情で聞き続ける。

「新一が居なくなるとコナン君が現れて、コナン君が居なくなると新一が現れる。」

・・・そして、こういうことは何度かあったわ」

「じゃあさ、蘭」

「なに？園子」

ここで園子は一つの疑問を尋ねる。

蘭は前触れ無く園子の口が開いたことに一切動じず、自分の話しを一旦中断して、

彼女の疑問に答える準備をする。

「学園祭のとき新一君、コナン君と一緒に居たわよね？あれはどういうこと？」

想定内の疑問が投げ掛けられたことに動揺を見せずに、蘭は落ち着いて自らの推理を話す。

「多分・・・あの時のコナン君は哀ちゃんの変装よ。」

あの時、哀ちゃんは『風邪で学校を休む』っていう会話を、元太君達が話しているのを耳にしたの」

「じゃあ、哀ちゃんは新一君の秘密を知ってるってこと？」

表情は冷静だが、声質に少々の焦りが混じっている園子に対して、蘭は表情も声質も真剣を維持しながら返答する。

「そうなるわ……ここまで話せば……判るでしょ？」

理解を求めるように目を細めながら尋ねた蘭は、その答えを知ったのか、ゴクツと喉を鳴らして固まった表情をしている園子に結論を言い放つ。

「コナン君は……新一なのよ」

その結論を言い放った後、その場には重苦しい空気が流れ始めたが、
その原因を作っている彼女達は御塵も感じる事無く、その空気に
相応しい薄暗い部屋で、
話しを緩慢と進めていくのだった……。

正体：親友に訴える予想と公表されない裏情報（後書き）

最近、コナンを見てて思うのですが、本堂瑛祐は今どうしているんでしょうね？

CIAになるために日本を発つようですが、彼は日本を離れたのでしょうか？

ちょっと気になりますね・・・。

では、評価、感想、ご意見お待ちしております！（^ ^）

正体・隔てられる長年の仲（前書き）

読者の皆様、おはようございます、こんにちは、こんばんは）＾
（）。

評価ありがとうございます）＾Ｏ＾（）。

相変わらず暑い一日ですが、今日も頑張っていきたいと思えます！

では、本編どうぞ！

正体・隔てられる長年の仲

「新一君がコナン君か……」

嘘は言っていない　　そう思いながらも、
眼前で煙草の如く細い視線で自分の目を見続けている蘭に、
園子は納得せざるを得なかった。

なぜならその目がまるで、信じてくれるよね？　と、
少々涙ぐんでいていたのだから……。　　。

……しかし、どうしても疑問は残ってしまい、
それを聞きたいという欲望を抑えることはできない。

「でもそうになると、疑問が残るんじゃない」

大口を開けて笑われる　　とっていたが、
御塵も疑いの目を向けずに、自分と同じく細い目線で見ってくる園子
の疑問を、
口を挟まずに聞き続ける。

「どうして新一君は、あんなに小さくなってしまったの？」

「そこが、まだ漠然としなくて」

(つて……蘭……)と、

内心で状況に合わないツツコミを入れながら呆れ顔を作る園子だっ
たが、

真剣な顔を少し緩めて柔らかい表情を作る。

「でも、確証はあるの」

「え？」

眉を上げて一驚の表情を見せる園子を目視した後、蘭はその確証を、

過去の記憶を思い出すように話し始める。

「前にね、この部屋に白馬君と服部君を招いて、

『新一はコナン君』っていう私の推理を話してみたの。

そうしたら二人とも、新一を庇うように誤魔化したの」

園子は両度、え？ という驚きの声を上げ、

「それってつまり……服部君と白馬君も知ってるってこと？」と、顔を少し前に出して詰寄るように言い放つ。

あの二人に聞けば判ると思うんだけど と、顎に右手を当てながら考え込むように呟く。

「蘭はさ……もちろん反論したのよね」

園子は彼女がそんなことを言われただけで引き下がる女性ではないことを知っていたため、

顎から手を外して膝の上に置いた蘭に問い掛ける。

反面蘭もその質問はされて当然のように、もちろんよ　と強く言い放った後、
高低差の無い声質で答えた。

「でも、『友達が言っていていいと許可していない秘密を勝手に言えるか?』って、
白馬君に言われて反論できなくなっちゃって」

「なるほどね……確かにそんなことを言われたら、反論できなくなるのも無理ないか」

自分の意見に同意してくれている園子に、
蘭は何時ぶりか判らない“嬉しい”という感情を心に覚える。
それと同時に、“親友”という温かい存在に感謝するのだった。
そして、その感情を表現するように自然と顔も柔らかくなっていく。

園子は本人が気付いているのかどうかは判らないものの、
口元が緩んできた蘭の顔を見ると、心境に変化が起こったことを悟り、
自らの心も自然と温もりを覚えていく。

そんな中、園子は一つの質問を問う。

「ねえ蘭。このことオジサマには話したの？」

「ううん。お父さんにはまだ話してないよ。自分の中でも整理が付いてなかったから……」

（それでも、私には話してくれた）と、園子は内心で、蘭の自分に対する信頼の厚さをその言動から察し、自分はこのように信頼されているんだ　と、蘭に対し感謝と喜びを感じた。

その温かさという熱水を心という名の器に注ぎ終わると、園子は深く息を口から吐いて肩を落とすと、かんじょ緩徐に口を開く。

「じゃあ蘭。話を戻すけど、これから新一君とどうしようと思う？」

その言動を聞いた瞬間、蘭はまたしても暗い顔に戻ってしまい、

目線も園子から逸らしてしまう……。

園子はそんな蘭の表情は見なくなかったが、彼女がこれから普通に暮らしていくためには、

これは避けられないことなので、心を痛めながらも話しを続けた。

……真剣な表情と眼差しに顔つきを戻して……。

「蘭。さっきも言ったけど、新一君は……貴方の思っている新一君はもう……居ないわ。」

彼は変わった、何時の間にかね」

でも、それは仕方の無い事じゃない？ と、続けるように言

うと、

蘭が目線を戻して、「仕方の無い事？」と、打って変わった低い声質で聞き返す。

「そうよ。この世界に変わらない人なんて居ないわ。」

誰しものが経験や修羅場を潜って一歩ずつ一歩ずつ成長していく」

私だってそうよ　と、彼女らしく右手を胸に置いて自慢げに語る。

そんな彼女が、存在、雰囲気共に大きく見えた蘭は、言葉には出さなかったが内心で首を縦に振る。

……しかし、どうしても“理解はできても納得できなかった”。

彼、工藤新一は、「待ってて」と言った。

何度も……何度も……耳が痛くなるほど。

だが、帰って来た彼は別人のような雰囲気を漂わせていた。

まるで、自分が立ち入れないような巨大な壁が立ち塞がっているように……。……。

それでも蘭は信じた……その“巨大な壁”は、
自分の思い込みが幻として見せているものなのだと……。

……しかし、“それこそ”が思い込みであり、新一の言動や態度を
時間と共に見ていくうちに、
その“壁”は幻などではなく、“現実のもの”だということを思い
知らされた。

確かに、園子が述べたように変わらない人間など居るはずが無い。
実際自分も、小学生・中学生の自分と比べれば一変した。

……外側も内側も……

それは新一も例外では無い。

名探偵・日本警察の救世主と世間にもてはやされていても、
彼とて自分と同じ“一人の人間”だ。変わらないはずは無いだろう
……。

事実、蘭自身工藤新一が変わったことは、“自分のことを除けば”嬉しかった。

新一は知らずのうちに一歩二歩前に前進して、大人に成長していたんだ……と。

然^{しか}しながら、“あの言葉”だけは『変わった』という理由で、水に流すことは到底できないことだ。

『待っていてくれ』……この言葉だけは……。

「ねえ……園子」

蘭の中では長たらしい時間が経っていたが、存外それほど現実の時は進んでいなかったのか、

姿勢を正して目線を外さない園子は、ようやく口を開いたわね

と言っような、

徒然な態度を見せずに返事をする。

「なに？蘭」

「『新一が変わった』っていつのは認めるよ。」

でも……“あの言葉”だけはどう処理すればいいの？」

『あの言葉』……これは『待っててくれ』を示してるのだと、

園子はその単語を耳にした瞬間に“そのこと”を理解すると、
一刹那いっせつなに返答する。

「確かにそうよね。新一君が言った“あの言葉”は水に流せるものじゃない。」

……でも、そのことは彼自身、百も承知のはずよ」「

「!……判っているんだったらどうして?!」

園子の新一に対する予想を、理解をされていてやっているかと、

マイナスの方向に考えてしまった蘭は、刹那心に突然現れた新一に対する怒りの感情を隠すことができず、無意識に大声をだしてしまう。

その大音声だいおんじょうに一驚いちけい一つたりともせず、園子は血相変わった蘭の表情を注視しながら、自若じじやくな声質で返答する。

「判っているから“こそ”よ」

「え?」

どつという意味? と言うように、怒りを消して園子の真似をするように、

自若な態度で話しを聞く。

「蘭……新一君と長い間過したアンタなら判るはずよ。」

……工藤新一という人間は、“無責任な男じゃない”ってことを「

『無責任な男じゃない』……これは長年彼を見てきた蘭が知らないはずも無く、躊躇無く内心で納得する。

しかし、どういう形でこの責任を取るつもりなのか　　が判らない蘭は、
彼女がそのことをどう思っているのか　　を知るために尋ねる。

「じゃあ、どうやって責任を取ろうと思ってるのかな？ 新一は」

来たわね　　と言わんばかりにその問いを予想していた園子は、間を置かずに「多分」と、話すことが自分の予想であることを悟らせてから話した。

「ずっと待たせていた貴方との約束を破ったっていう、とても重い罪を背負ったまま一生を過ごす……とか？」

まあ、あくまで予想だけだね　　と、笑い声混じりに付け足す。

反面蘭は、予想とは言え納得できないという思考丸出しの表情を見せながら、沈んだ顔を園子に見せる。

その表情を見た園子は、いい加減な予察を言ったことを内心で深く後悔しながら、
少々焦り気味で言い直すように言い放つ。

「ま、まあ……最終的にはやっぱり本人に聞くしかないわね。
新一君の考えは新一君の中にしか無いから」

「でも新一、話してくれないんだよ？」

聞きようがないじゃない と言わんばかりに、園子に訴える
ように言い放つ。

「ねえ蘭……思い切って聞いてみなよ」

「な、なにを？」

彼女の言う事が予想できない蘭は、思わず首を傾げる。

その蘭を目視すると、園子は迷っている蘭に覚悟と勇気を与える

よつに言い放つ。

「『貴方には愛する人が居るの？』ってさ」

正体・隔てられる長年の仲（後書き）

蘭の胸中の変化は正直、新一よりも難しいかもしれません……。

何と言つか、工藤新一という人物に囚われている心と言いますか

……、

それを解放させる術すべがあんまり思いつかず、

苦勞する毎日ですw。

では、評価、感想、意見お待ちしてます！（^ ^）

正体：訪れる変化と解放される心（前書き）

こんにちは、読者の皆様（＾＾）。

今日は曇りなのにやたら蒸し暑い……やれやれw。

さて、今作は都合上、今までの小説よりも長くなっています。
ご了承ください。

では、本編をどうぞ！

正体：訪れる変化と解放される心

「…………え？」

眼前で滅多に見せることの無い威圧感ある見据える目付きと、強張った表情を崩さない園子の提案に、驚愕のあまり口をポカんと開け、目を球体の如く丸くしている蘭は、一驚の声を上げてからも、その意味を受け止められない心境になっていた。

一方、蘭がこうなることを予測して提案を述べた園子は、開いた口が塞がらないと言うような幼馴染の表情に全く動じずに、説得の言葉を掛ける。

「蘭。アンタの気持ちは判るわ。『そのことを話したら』って思うと、
どんなに辛い気持ちになるかってことはね」

「……………」

「でも、そのことは近い未来に必ず経験することになると思うの。
“新一君に言う形”か、“言われる形”かは判らないけど」

「……」

驚愕の表情は消えたものの、先程から一言も話さず、
且つ目を泳がせながら沈んだ表情を見せている蘭に、園子は気にし
つつ説得を続ける。

「ねえ蘭。このままここに閉じ籠っていたって、何にも変わらない
ってことは判ってるでしょ？」

「……というより、苦しみが長引くだけなんじゃない？」

園子の言ってることが『正しい』と思いつつも、
新一から返ってくる返事に恐れを抱いている蘭は、肯定の返事を返
すことはできなかった。

確かに真実を知れば、今より楽になるのは目に見えている。
……ただそれは、“プラスの返事”だった場合である。

だがもし、マイナスの返事だった場合どうしたらいいのかと思うと、

背筋に寒気と共に戦慄が電撃の如く走る。

「でも……園子」

「ん？なに？」

沈黙していた蘭が俄然に口を開いたのにも関わらず、驚きという名の動揺を感じない園子は、
普段の明るい声質で、彼女の心を和らげるように返事をする。

「もし聞いたとして、最悪の返事が返ってきたら……私どうすればいいの？」

自らの未来を予想しているかのように、涙ぐんだ声に歪んだ表情を見せながら、
不安に押しつぶされそうな雰囲気だ蘭は尋ねる。

そんな親友の苦しむ姿に心痛めながら、園子は先程の声質とは正
反対の、
低く籠った声で刹那に返答する。

「それは……受け止めるしかないわ」

「『受け止める』ってそれが怖いのよ！」

「落ち着いて蘭。ただ受け止めるだけじゃないわ」

身を乗り出すような勢いで大声を発した蘭を声質を変えずに落ち
着かせると、
続きを彼女の頭に焼き付けるようにゆっくりと話し始める。

「その事実を受け入れることで……工藤新一君という人間から“親
離れ”することよ」

「親離れ？」

園子の言ったその単語が露程も理解できなかった蘭は、我知らず
に聞き返す。

「蘭……アンタ新一君に甘えてるんじゃない？」

（私が……新一に甘えてる？） 彼女が述べたことが到底信じ

られない蘭は、

そんなこと無い と言つように、激しく反論した。

「な、何言ってるのよ園子！何で新一に甘えなきゃいけないのよ！」

普通の園子と話すときには全く見せない取り乱した態度と、怒りの感情に囚われた激しい表情を見せられながらも、園子は心身動揺せずに返答する。

「『何で』……か。それは私にもハッキリとは判らないわ。本当の理由は貴方の心の中……。多分、蘭は自分でも知らず知らずのうちに、新一君のことを“恋人以上の存在”として見てたんじゃない？」

普段なら、恋人なんかじゃないわよ！ と彼女が反論するところだが、我を見失うほど熱くなっている蘭は、反論すること無く園子の話しに口を挟みながら聞く。

「どっぴいっ」とっ」

「つまり心の支え……親と同等の存在として見てたんじゃない？」

無意識のうちに と続けて言うと、蘭の怒りは限りが無いように膨らんでいき、行き場の無い怒りを激越げきえつに園子にぶつける。

「『親と同等』って……そんなこと無いわ!」

「じゃあ、どうしてそんなにムキになってるの?」

蘭の返答に即答した園子は、ここで言うべきね　とでも言うように、切り札を出す。

「べ、別に……ムキになってなんか!」

その切り札に対抗するように反論するが、時すでに遅く、言い訳とも取れるその反論に説得力は無い……。

「蘭……アンタ、ホントは判ってるんでしょ?……今まで私が言ったこと。」

ただ、『それを認めたくない』っていうアンタの気持ちに邪魔をして、素直になれないでいる……違うかしら?」

「……」

まるで探偵のような口調で話す園子の推理に反論できずに蘭は、降参　とでも言うように沈黙して下を向いてしまう……。

その仕草を見て園子は、自分の推理は外れてはいないことを確信するが、

蘭が肯定の返事を見せていないため説得を続ける。

ハッキリとした返事を言わせないまま止めてしまつと、彼女の心境が戻ってしまうと思つたからだ。

「現にアンタは、今心を閉ざして誰も近づけまいとしている」

まだ話していないことを言われたことに蘭は目を見開きながら、何でそんなこと判るのよ？　と、一驚混じりの口調で問うが、
「そんなこと、この部屋に入ってきたときのアンタの目を見ただけで一目瞭然よ！」と、
自慢げに返答した園子によって、一時的に逸れた話しは瞬時に戻された。

アンタを一体何年見てきたと思つてるの？

と言わんばかり

の口調によって……。

「そして、自分の心を回復させられるのは……というより、今のアンタには“新一君しか見えていない”んじゃない？」

「！」

またしても自分の心境を言い当てられた園子に、ほんの一瞬だったが目を見開く。

しかし、その『一瞬』が数秒にも感じられた園子はその僅かな仕草を見逃さず、
存外、強情な親友の心境が自らの予想通りだということを内心で確信すると、

“ 終わりが見えそうで見えない説得 ” を続行する。

「でもね、蘭。アンタの回りには色んな人達がいるでしょ？

オジサマやオバサマ……少年探偵団のガキンチョ達……警察の人達

……そして、

私や和葉ちゃんと言った掛替えの無い親友……その人達のこと忘れて無い？」

園子から名前を言われる度に、その人達の満面の笑顔が蘭の脳裏に、

写真の如く鮮明に浮かび上がっていく。

それと同時に、その人達と共に作ってきた、

記憶という名のアルバムに仕舞い切れないほどの無数の思い出も、

テレビの映像の如く、早くも無く遅くも無い速度で幻のようにユラ

ユラと揺れながら、

蘭の目に映る。

(こんなこともあったな……)と、海馬に入りきれずに忘れ掛けていた記憶も思い出しながら、
蘭は懐かしさを覚え始める。

確かに、自分は工藤新一という男に甘えてたのかもしれない……。

彼が自分の傍に居ることは“当たり前”だった。

小学生から約十一年間、ずっと……。

……然し逆を言えば、自分は新一に会ってから一度も、
“彼の居ない生活”というものを過ごしたことが無い。

住む家は違っても住む場所は同じだったため、会いに行こうと思えば何時でも会えたし、
連絡を取りたいと思えば、
電話機の番号を数回プッシュするだけで会話ができるのが“自然”
だった。

然しながら、あのトロピカルランドの別れを堺さかいに、
その“自然”が“希まれ”に急変した。

そしてその“希”を補うように、何の前触れも無く現れた一人の
少年、江戸川コナン。

彼は本当に新一と“瓜二つ”だった。

推理力……行動力……得意分野……不得意分野……好きな食べ物
……嫌いな食べ物……

そして眼鏡を外した時の、まるで幼い新一の顔をコピーしたかの如くソツクリな顔つき。

これだけ酷似していれば、同一人物と思わないほうが不自然だ。
事実、蘭は何度か“その考え”を持ったことがある。

然しながら、その度に彼及び、彼の正体を知っている協力者達の巧みな策略によって、その考えを否定され続けた。

されども彼女、毛利蘭も馬鹿では無い。

どんなに否定されようが現実は変わらず、次々と掌中に入ってくる、幾多の手掛かりというパズルのピースを組み合わせていくことで、蘭の頭の中では一つのパズルが組み上がった。

江戸川コナン「工藤新一という名のパズルが……」。

それから蘭はコナンという少年を、“少年ではなく青年として見始めた”。

何のために正体を隠しているのかは定かではないが、正体を隠すということとは、

“隠さなければならぬほどの理由がある”ということになる。

それがどんな理由かは想像も付かなかったが、この小さい幼馴染が、無意味にそんなことをするはずが無いということを知った。蘭は、彼が自分の正体を自らの口から明かすことを待つことにした。

……然しながら、ただ無駄に時を過ごすのではなく、せめて彼がどんな事件に首を突っ込んでいるのかを知るために、正体を知っていると思われる二人の探偵に話しをして、その理由を知ること、新一が背負っている重みを共有しようとした。

それが待ち続ける自分が幼馴染にしてやれる、悠一のことだから……と。

だが、返ってきた答えは納得できるものどころか、肯定もせず否定もしない曖昧な答えであり、結局蘭は、自らの何もできない心を痛感する日々を過ごした……。

誰にも理由を話さず、ただ苦しみを自分の小さい心に閉じ込めながら……。

そして、避けられない未来と言わんばかりに訪れた、江戸川コナンの別れ。

蘭は内心では、今度は工藤新一として会える　と判っていないが、

今まで毛利家の一員として、時には精神安定剤として自分の脆い心を支えてくれた少年に、感謝と別れという名の哀しみを込めて涙した……。

少年との別れを経験して然程時を置かず、自分の思っていた“彼”は真の姿で突然現れた。

……然し、戻ってきた彼は別人のようになっていた。

まるで、自分との関係は終わりと云うように。

だが蘭は、それは自分の頭が勝手に思い込んでいるものだと思い、必死に否定し続けてた。

現実とは残酷なものだ。

信じていた“その思い”は、返ってきた幼馴染以上恋人未満の男性と過ごしているうちに、徐徐に徐徐にゆっくりと、スローモーションの雨水の如く一滴一滴と崩れていき、そして一週間もしないうちに、その雨水は一滴も残さずに落ち切ってしまった……。

『親と同等』……これは眼前で返答を待ち続けている親友に言われた言葉だ。

確かに、あの時の自分の哀しみは、自分自身でも判るほどに“普通ではなかった”。

言葉では上手く表現できないが、心の中の大半を占めている“何か

”が、
ガシャン！

という凄まじい轟音を立てながら砕け散るのを感じた。

あの時はその“何か”の正体は判らなかった。

……然し、園子の話しを聞いていくうちに、その正体が判ってきたような気がした。

それは、“養親に別れを告げられたものなのではないか？”と。

(園子の言った通りなのかな？)……現実とは時間の流れが異なる心中の時間で自問自答し、
やがて蘭は親友の言っていることが正しく、且つ自らの胸中の気持ちに気付く。

そして、ありがとう　　と言つように、
その目を見ただけで誰もが微笑みを作れる柔らかく、且つ温かい視
線を園子に送る。

園子はその目を見て彼女の胸中の変化を悟ると、それを聞く勇気
を内心で固める。

「園子」

「何？……蘭」

明るく高い声質に、同じく明るく高い声質で返答すると、
“あの笑顔”を取り戻しつつある親友の口が開かれるのを待つ。

「私、今日話すよ……」『今までありがとう』って

正体：訪れる変化と解放される心（後書き）

いよいよ蘭の変化が訪れました。

実は、もっと自問自答を繰り返して長引かせるつもりだったので
すが、

そんなことをするとチットモ先に進まず、

逆に読者さん達に苛立ちを覚えさせてしまうのでは？ という

考えになり、

今回で変化をさせました。

では、評価、ご感想、ご意見お待ちしてまーす！（＾　＾）

苦悩・覗かれる黒の心境と覗き見る白の眼（前書き）

今回から九章に入ります。

その始まりは“何時ぶりか判らない”ほどの一人称です。
誰の一人称かは『読んでから』ということ……w。

では、どうぞ！

苦悩・覗かれる黒の心境と覗き見る白の眼

カチ……カチ　と、どこに行っても聞くであろう、

この時間の流れを知らせる秒針の音を聞きながら僕は、

“この家の居候”という身になって“初めての二人だけの食事”を取った後、

この家の家主がカタカタ　とキーボードを叩く音を、

秒針と共に耳にしながら、日が昇る今の時間に相応しくない色をしたブラックコーヒーを、

少しずつ喉に通しながら、今日一度も顔を見せない少女のことを考えている。

口の中にジワツと広がる、彼女の苦痛を表現しているかのような苦みを味わいながら……。

「白馬君。大丈夫じゃろうか？哀君は」

右側で灰色の回転椅子に腰掛けながら、

手は休むことなく動き、

目線は検索して表示され、画面に映し出された情報に向いているが、意識は明かり一つ付いていない薄暗い地下室へ向いている阿笠さんが、

僕に不安と心配という二つの負の感情によって生まれた、沈んだ声質で尋ねてきた。

僕は目線を、茶色の机をバッグに映っている白色のコーヒーカーツプから、

顔ごと右に向けると、この人には似合わない八の字に眉毛を曲げて、屈折した表情で僕を見ている。

……まるで、僕に彼女をどうにかしてくれ とでも言うように

……

「阿笠さん。先程もお話したように、今は待つて様子を見ましよう」

僕は一旦一呼吸すると、宮野さんの親である貴方がそんな不安な

お顔をしていたは、
彼女も不安になってしまいますよ　と、
できるだけ明るく振る舞うことで不安を取り除こうとしましたが、
阿笠さんは、「そうじゃな」と返事をしましたが、
明るくなることは無かった……。

『先程も』……この言葉が示すように、阿笠さんの問いは朝食の
時もされた。

昨日、工藤君が地下室から結果を予想させるような暗く沈んだ顔
つきで出てきた後、
僕と阿笠さんは宮野さんにお話しを聞こうと思いましたが、
時間帯が深夜ということ而就寝に付くことに……。。

……然し、それが間違いだと気付いたのは翌朝……

いつもなら眠そうな顔を丸出しにしながら、

整えていない乱れた髪形で包丁の音立てているはずの彼女が見えず、僕は不審に思い地下室へ駆け降りた。

相変わらず静けさが流れる空気と共に漂うこの扉の前は変わらな
い。

僕は慣れてしまったこの空気の中で軽くノックをすると、

「宮野さん。起きてますか？」と、扉越しに一階に聞こえるか聞こえないぐらいの声で、

この部屋の中に居るかどうかも判らない女性を呼ぶ。

「……白馬君？」

数秒の後、宮野さんが居ることは確認できたものの、声を聞いただけで元気が無いことを予想できる声質の低さは、僕の心中にある不安というマイナスの感情を増幅させる。

それに飲まれること無く僕は、用件をできるだけ明るく言う。

「どうかされましたか？朝食の時間ですよ」

『どうかされましたか？』……か。

言い終わった後、確信に近い理由を予想しながら、その言葉を言った自分に苦笑いを浮かべると、暫しの間の後聞こえてきた返答に耳を貸した。

「朝食は……いらないわ。……学校も休む。博士には心配しないように言うておいて」

扉越しの会話なので表情は覗えない。

然し、全く変わらない声質から手に取るように判る彼女の感情が、僕の心中に居続ける不安という寄生虫を成長させる。

判りました と、短く且つ明るさを崩さずに言った僕は、

朝食を作るべく宮野さんのことを考えながら台所に向かう。

宮野さんと工藤君の間に何があったか……。

僕はサンドイッチの材料となる食パンを、白いまな板の上で半分に切りながら、

頭では昨日、彼ら二人に何があったのかを憶測した。

昨日の工藤君の様子からして、話し合いが下り坂に向かったのは間違いない……。

ただ、その下り坂がどんな結果で終わったのかによって、掛ける言葉が違う。

……話し合いが終点に辿り着かずに中断になったのか……
それとも“最悪の結末”になってしまったのか……

工藤君の雰囲気からして前者の終わり方は無い。

中断して次回に持ち越しになったのなら、“期待”という希望を抱いているはず……。

然し、後者でもない気がする。

階段が上がってきた彼は沈んでいた。

ただ、その沈み方は彼女との恋は実らないという絶望感ではなかった。

その“沈み”の理由が判らず手だけが動き、自分自身でも判らないうちに

あつという間に朝食の時間が訪れた。

作った四つ一組のハムチーズサンドイッチを白いパン皿に丁寧に盛り付けて、

僕が座る席と向かい合わせになるように、茶色の食卓に一皿ずつ置いておくと、

おはよう　と、元気そのものの明るく高い声質が背後から聞こえた。

「おはようございます」と、右手を口に当てて欠伸をしながら近づいてくる阿笠さんに、

普段と変わっているようで変わらない挨拶を交わすと、今日はサンドイッチか！　と、歓声の声を上げる。

然し、その声を上げて一秒も経過しないうちに“机上の違和感”に気付いたらしく、

左顔を見続けている僕と視線を合わせて、不審を持った顔つきで話し掛けてきた。

「白馬君。一人分足りないんじゃないか？」

「宮野さんのことですよね？その前に席に付きましょう」

腰を下ろした方が楽だと思った僕は、
阿笠さんが表情を変えずに、緩慢に奥の席に付いたのを目視すると、
向かい合わせの席に腰を下ろす。

「では、阿笠さん。宮野さんのことなのですが……
彼女はそっとしておいたほうが良いと思います」

僕の意見を聞いた阿笠さんは、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする。
おそらく、なぜ僕がこんなことを言ったのかが理解できていないの
だろう……。

…。
まあ、経緯を話していないのですから当然と言えば当然ですが…

「実は宮野さんは今、地下室に閉じ籠っています」

「………ど、どしどしとどしどし……白馬君」

血相変えた顔つきに豹変し、席から立ち上がるような勢いで尋ねてきた阿笠さんを、
高低差の無い声質で落ち着くように促した僕は、まだ冷静になれていない彼を注視しながら、
順序良く話しを進めることにした。

「昨日、工藤君が肩を落としながら帰って行ったことは阿笠さんもご存じのとおりです。」

……そして、宮野さんが今の状態になっているのも“それ”が原因でしょう」

「つまり昨日、新一君と哀君の間に“何か”が起こったということじゃな？」

表情から焦りは完全には消えていないものの、冷静に予想をした彼に内心で驚嘆すると、
姿勢を正したまま続行した。

「はい。ただ……その“何か”の正体が全く判りません」

僕の意見を聞き終わると、うん　と顎に右手を当てながら、
阿笠さんは考える仕草を見せる。

……正直、僕は彼を甘く見ていたかもしれない……。

この話しをすれば取り乱して、宮野さんに電光石火の如く速さで話しを聞きに行くと思っていました。一時的に焦ったとは言え、今は冷静に僕の話聞いています。

おそらく、焦っているのは正しい判断ができない　　という考えを持ち始めているのだろう。

……無意識のうちに……

「そこで先程の提案です。理由も判らないままここで無理に声を掛けても、返って逆効果になってしまう可能性があります」

「然しのお……」

不安が消えない阿笠さんに僕は説得を続ける。

無論、判ってもらっただけで強制をするわけじゃないが……。

「お辛い気持ちは僕も同じです。……然し、“悩み”の中には一人で答えを出す必要があるものもあるんですよ」

「……」

視線を外して無言になった彼を、自分の意見に傾きつつあると判断した僕は、その“傾き”を確実なものにするため説得を続けた。

「ですから阿笠さん。今は敢えて言葉を掛けず、彼女の心である程度の決意ができてから言葉を掛けるとしましょう」

まあもちろん、強制はしませんが　そう続けて問い掛けた後、僕は顎に手を当て続けながら沈黙している阿笠さんの口が開くのを、最早視界に入りながら忘れ去られているサンドイッチと共に待ち続ける。

どんな時でも電池というエネルギーが無くならない限り、鳴り続ける秒針の音を聞きながら阿笠さんの口が緩慢に開かれる。

「すまんが白馬君。……ワシにはまだ判らんよ」

首を横に振りながら、『判らない』という単語を強調しながら言った阿笠さんは、

この場で判断が下せないことを痛感しているように、歪んだ表情で僕を見てくる。

僕はその顔を見ながら彼の“心の痛み”を表情と目から感じ取る
と、

一旦気分を変えようと話しを変えた。

「そつご自分を責めないで下さい。……さあ、サンドイッチを食べ
て気分を変えましょう」

僕の慰めの言葉で心が癒えたのかどうかは定かではないが、
阿笠さんは表情を和らげると、そつじやな　と、自分だけな
く、

僕自身も安心させるような明るい声質で呟く。

「じゃあ、いただきましょうか」

その僕の言葉を合図に、互いに声を合わせて「いただきます」と
述べるど、

僕は地下室に籠っている彼女を気にしながら朝食を食べ始めた。

そして現在、不満・不安に満ち始めている阿笠さんに気付きながら
らも、

僕は朝食終了から一時間ほど経過しても、物音一つしない地下室に
続く薄暗い階段を見詰めながら、
閉じ籠っている彼女の内心を考えていた。

1380

然しながら、昨日何が起こったのかすら判らない僕に、
彼女の心境に見当を付けられるはずも無く、
ハッキリ言えば“無駄な時間”をソファ―に座りながら過していた。

……まあ、工藤君に聞くという手も無くは無い。

だが彼が帰宅するのは夕方。
その間の時間を無駄に使うなど到底できるはずも無い。

そんな時だ……右から声を掛けられたのは……

「なあ、白馬君」

「何ですか？阿笠さん」

回転椅子ごと身体を向けながら、高低差の無い声質で話し掛けてくる彼に、

僕は顔を向けて阿笠さんの後ろに映る白い壁と、その下の茶色の棚に敷き詰められている本を視界に捉えながら返事をする。

「哀君に簡単な食事でも持って行ったらどうじゃろうか？
さすがに何も食べないのは体に毒じゃろう」

「……………」

少々口元が緩んでいる阿笠さんの顔を見て僕は、その提案が“表向き”だということを悟る。

朝食を持っていくのは序ついでで、本来の目的は、

僕に宮野さんと話しをしてくれ　　というものだろう。

（素直にそう言えばいいのに）　　そう内心で思いながら、
思わず笑いが少し零れた顔で僕は台所へ向かう。

背中に温かい視線を感じながら……

苦悩・覗かれる黒の心境と覗き見る白の眼（後書き）

初めて白馬探の一人称を書きました。

読んでいて気が付かれましたが、

丁寧語が多いのは白馬探という人物を強調するためです。

では、評価、ご感想、ご意見お待ちしております！（＾　＾）

苦悩・進まない孤独と遠ざかる環境（前書き）

皆さん、こんにちは。

さて、今回は灰原哀の一人称なのですが、

“かなり長くなっています”。

理由は次話に引き継がず、今作で終わらせようとしたからです。
なので、休憩を挟んで読むことをオススメします。

では、どうぞ！

苦悩・進まない孤独と遠ざかる環境

『そんなオメエに……恋しちまった』

「工藤君のあの言葉がまるで、それを認める
に、
と言わんばかり

幻聴の如く頭の中に木霊する。

昨日……いえ今日と言うべきかしら……私は一睡もできなかった。
今では巨人と小人の如く、身長差ができてしまった彼から言われた
ことがまるで理解できずに、

なぜ彼はあんなことを言ったのか？
という悩みを抱えたまま
夜を過した。

けれど、その夜は長くは感じられず、この暗さに慣れなければ影
すら見えない扉から、
“彼らしい”明るく、誰にでも好印象を与えるような声で呼び掛け
られるまで、

朝が来たという実感が無かった。

元々今日は学校に行く気は無かったため、正直に白馬君に理由を
話して、

博士に心配しないように伝えてくれるように頼んだ。

今の私の心とは真逆の白いシーツを敷いてあるベットに腰掛けながら……。

白馬君のスリッパ越しの足音が微かに聞こえる中、私は工藤君がどうして“あんなこと”を言ったのかを考えていた。

彼が組織を倒したのも

元の姿を取り戻すのも

全ては彼女のため……。

そのために今まで、常に鋭利な刃物で切り刻まれるような、苦痛に耐えながら正体を隠して来たはず……。

それなのにどうして今になってあんなことを……。

私は、元に戻ってからの工藤君は、

蘭さんと共に幸福な私生活を送っているんだと思っていた。

然し、それは単なる私の思い込みだということを、工藤君の話しを聞いて思い知らされた。

工藤君の話しによると、蘭さんへの愛情は“家族愛”という別のもものへと変化して、彼女に向けられていた“愛”は、今……“私に向いている”のだという。

嘘だ　　と何度も思った、然し否定する度に、
“あの言葉”が何度も……何度も脳内に響く。

まるで言葉という名の金槌が、頭という金属を叩くように……。

前までは解毒剤の作成のため、絶えず指を動かしていたこの部屋
だけ、

今となつては暗く且つ物音一つしない、

他人から見れば不気味なことこの上なしの部屋となっている。

そんな部屋の中で唯一の音を発している時計の音響を耳にしなが
ら、

工藤君の心境を考え続ける……。

然し、突如数回のノックの音がその思考を遮る。

「宮野さん。居ますか？」

ノックが鳴り止んだ瞬間、先程も聞いた声で私は意識を頭から現実へと戻されると、
何の用か？と思いつながら返事をする。

「白馬君？何の用？」

無意識のうち口に出してしまった内心の気持ちを気にせずに、
私は刹那に返ってきた返答に耳を貸す。

「良かったら中に入れてくれませんか？朝食を食べないのは毒ですから、
簡単な食事を持ってきました」

「悪いけどいらないわ。お腹も空いていないし」

博士の計らいか彼自身の判断なのかは判らなかったが、
私はその気持ち嬉しかった。

然し、今は誰にも会いたい気分にはなれない。
空腹感を感じないと言ったら嘘になるが、喉に食べ物を通るような

状態じゃない……。

「では、お話しだけでも聞いてくれませんか？……扉越しで構いませんから」

「何の話しかしら？」

ちつとも帰ってくれない白馬君に少量の苛立ちを感じながらも、何の話なのか気になった私は、それを表には出さずに、自分でも判るような曇った声で聞き返す。

「今、君の心を悩ましているものについて……ですよ」

『私の心を悩ましているもの』……つまり、工藤君のことについて話すということ。
それを聞いた刹那私は、

白馬君が何を考えているのか？ という気持ちと、

なぜそんなことを聞くのか？ という二つの疑問を抱く。

然し、二つの質問に答えるのは幾ら白馬君と言えど困難なため、私は聞きたいという欲望が強い疑問から尋ねることにした。

「貴方……何を考えているの？」

私は、“以前の自分の色”を再現しているような、御塵の隙間も無く揃えている光が照らされず、純白の輝きを失った黒い両足を視界に入れながら、姿形が見えない探偵さんの返答を聞く。

その探偵さんは、「何を考えているの？」……ですか」と、私の言ったことを彼の声色で繰り返してから本題に入った。

「僕が考えていることは二つです。

一つは素直にならない君を素直にさせてあげたい……そしてもう一つは、

工藤君と結ばれることで、その苦しみから解放してあげたい……この二つですよ」

「私と工藤君が結ばれる？」……馬鹿なことを言うのは止めなさい。

彼と結ばれるのは“蘭さん”よ」

この二人の間に第三者が入ることは火を見るよりも明らかだわ
と、

自らの薄っすらと見える両足と、その先にあるはずの床を視界に入
れながら、

私は嘘を言う。

本心は嬉しいという、喜びと幸せの気持ちで溢れていた。

夢にも思っていなかったことが……単なる妄想として、
私自身で勝手に想像していたことが叶うのだと……。

けれど、それは妄想のまま終わらなければならいこと。

……言わば“許されないこと”……。

アポトキシソ4869という研究中に偶発的にできた毒薬により、

彼に関連する数多のものを奪ってしまった。

工藤君は「気にするな」と言っているけど、解毒剤を完成させた今でも、

その罪悪感私の胸中に、糊のりの如く粘着力でへばり付いている。

そして私には、その糊を除去する術が無い。

心中で自分の罪を振り返っていると、宮野さん と、

自分の心とは正反対の声質で呼び掛けられると、

私は然程時間が経過していなかった現実世界に意識を戻してから、
なに？ と、短筒たんかんに返事をする。

「いい加減素直になつたらどうですか？……君は過去に囚われ過ぎだ」

『素直』……か。

確かに素直になれば、この囚われの心が解放されることは目に見えるている。

でも……できない。……できるはずがない。

私は“解放”を望んではいけない女……この生せいが終焉を迎えるまで、

過去という牢獄に囚われ続けなければならない罪深き咎人。とがにん

……そう、今のこの地下室のように、

一筋の光も射さず先が見えない暗き重い牢獄に……。

そして私は、そのことを理解してもらったために、喉元まで来ている本当の“素の言葉”を飲み込み、嘘八百を並べ始める。

「あら……過去っていうのは自分の犯した過ちを忘れないためにあるんじゃないの？」

「そうですね……“それも”あります」

『それも』という単語を耳にした私は、他には何があるのかを尋ねるために、一旦話しを変える。

「『それも』って……じゃあ白馬君は、過去は何のためにあると考えているのかしら？」

「これは僕個人の考えですが……過去というのは君の言うとおり、犯した過ちを忘れないためにある……この意見に僕は反対はしません。然し、“付け足す”ことがあります」

「付け足す？」

「そう……その過ちを忘れず、二度と同じ道を歩かないと思つこと
で、
現在を……そして未来を“強く生きていく”ことですよ」

もちろん……これは一例であつて、
過去というものは様々な意味をもっていますが と、白馬君は
付け足すと、
私は暫しの沈黙に入る。

『強く生きる』……か。

過去現在の私は、自分の過ちを痛感しながら一日を過す日々が続いている。

……今現在この時も……

それが私の“強さ”だと思っていた。

決して今までの自分を忘れず、且つそれを表に出さないことで、
回りの人達に心配を掛けずに終生を迎え、自分の墓場までその罪を
持っていく。

でも、今まで誰に何を言われようが御塵も変わることの無かった
その思いが、

白馬君の話しを聞いていくうちに、別のものへと変化を始めている。

それは“弱さ”なんじゃないかと……

いつまでも過去という名の牢獄に囚われ続ける。

……これは罪を忘れないという意味であるのと同時に、

“ 一歩も前に進まない ” ことを意味している。

つまり、世界の時間は絶えずその針を休めずに動いていても、私の時間は何日…何年…何十年経とうが、ずっと休んだまま……。

私の身近な人達は前進し続けていても、“ 私だけ ” が前進も後退もしない。

これは、私が置いてけぼりされて、徐徐に孤独になっていくことを意味しているのではないだろうか？

外側だけは私に近づいていてくれていても、内側は時間が一秒進むごと一歩ずつ離れていく。

私は自問自答を繰り返しても答えが出ないことに不安と苛立ちを覚え始め、

それらを消すため……そして答えを知るために言葉に出した。

「 白馬君。貴方の意見には納得できるわ……でも 」

「 『 アポトキシンの件は忘れることができない』……ですか？ 」

自分の言いたかった問い掛けを先に言われ、しかもそれが的中していたことに、

え?! と無意識に一驚の声を上げる。

「でも、彼にも君に対する“重い罪”があります」

私に対する重い罪……彼に関する有りと有らゆる記憶を一つ一つ鮮明に思い出すが、これに該当する記憶が無かったため、止むを得ず白馬君に尋ねることにした。

彼の単なる誤解か勘違いという疑惑を抱きながら……

「……思い当たる記憶が見つからないんだけど」

「いえ、ありますよ。……“君のお姉さんを救えなかった件”ですよ」

即答した白馬君が述べたのは、勘違いも通り越した大きな誤解だった。

お姉ちゃんのごことは工藤君が一言残さずに話したはず。
無論、お姉ちゃんが組織に利用されて、ジンにその命を絶たれた
ことも……。

そんなことを内心で一驚の感情と共に考えていると、
その考えを見透かしたように白馬君が、
お姉ちゃんの死によって寂しく悲しい思いをしてきた私を慰めるよ
うな、
曇った声質で話し掛けてきた。

「君のお姉さんのことは工藤君から“全て”を聞いています。
……無論、組織に利用されてジンという男に命を奪われたことも」

「ならどうして、工藤君に重い罪があることになるわけ？」

彼の言いたいことが判らない私は、
答えを早く言ってほしい　という気持ちを込めながら聞き返す。

そして彼は間を置かずに返答した。

「確かにお姉さんはジンに殺されたことに間違いはありません。

……然し、工藤君の話しを聞くところによると、

“彼の目に明美さんが映っている状態で彼女は倒れた”そうですね「

遠回しな言い方をする白馬君に私は、何が言いたいのかしら？

と、

苛立った声で即答する。

「つまり、彼があともう少し早く事件を解決していれば、

“彼女は助かったかもしれない”……違いますか？」

「そ、それは」

驚愕した。確かに彼の言うとおりかもしれない。

……でも、その時の工藤君は精一杯頑張ってくれた。

そのことで私は彼を責めたこともあった。

然し、精一杯の努力で解決して、彼自身が奈落の如く深く反省していたため、

今ではそのことは水に流した。

内心で納得と否定の双方の考えが、絵具の黒と白の如く入り混じっている、

助け船を出すように言葉を掛けてきた。

「宮野さん。君はアポトキシンという名の毒薬で工藤君の人生を奪った。」

……そして工藤君は、自分の未熟さにより救えたはずの明美さんを救えなかった。

そんな君達二人は、互いに“大切なものを奪った者同士”……つまり、

“重い罪を共有するもの同士”なのだと思います」

「……」

私は言葉が出ない状態にあった。

(そんなことは無い)と思う自分が居ると同時に、

(白馬君の意見は正しい)と感じてしまう自分が居る……。

まるで、二重人格の如く……

そして自分の世界に入っけていても、聴覚の意識は現実に留めてある私は、

白馬君の言葉に耳を傾ける。

「宮野さん。僕はそんな君達だからこそ結ばれるに相応しいと思います。」

一緒に暮らすことで“互いが互いの罪を知って”……そして、“互いが互いに解決策を生み出す”」

私はもう頭が空白になり、目の前に映るあらゆるものが真っ白に見える。

思考が働かない…感情が判らない。

でも不思議と、聴覚だけは感覚を保っている。

その理由が白馬君の説得をもっと聞きたいと思っているのかは定かではないが、

唯一の感覚に私は意識を集中すると、フウ　と、話し疲れたのか、

白馬君の息を深く吐く音が微かにした後、聞きたいかどうかも判らない声質が、扉越しに聞こえる。

「取り敢えずここまでにしておきましょう。」

宮野さん、もう一度よく考えてみてください。

工藤君のこと……自分自身のことを」

耳には入りはしたものの、頭は認識していない彼の話しを聞き終わると、

階段を一定の間隔で昇っていく足音が聞こえた気がした。

そして私は、自分の中の自分を見る。

薄れていく意識の中で……

苦悩・進まない孤独と遠ざかる環境（後書き）

あゝ長かった。

こんな長い小説書いたのは初めてですね……。

さてと、ここから彼女達をどうやって近づかせるか。

色んな方法を思っていて悩みます。

では、評価、感想、意見お待ちしてます！ (^ ^)

苦悩：来るべき決断示し時と久しい再会（前書き）

今作は二話ぶりの三人称です。
文字数も三千前後になってます。

それと評価ありがとうございます（＾Ｏ＾）。
これからも頑張っけていきます！

では、どござ！

苦悩：来るべき決断示し時と久しい再会

「フウー……今日も退屈な一日だったぜ」

他の生徒にとっては未来に役立てる…若しくは、
自らの進むべき道を歩むために必要なことを学ぶ授業であったが、
高校生以上の知識を身につけている彼、工藤新一にとっては、
退屈なことこの上無しの時間であった。

そんな時間から解放された彼は、下校中には必然的に目にする、
夕日の茜色が作り出す米花町を視界に入れながら帰宅した。

疲れ　　という言葉は一切連想させない身体を自室に運ぶと、
新一は白色のベットに、どうでもいいように鞆を乱暴に放り投げる
と、
正面の茶色のクローゼットに五歩ほど進んで両手で扉を開ける。

ベットの上で衝撃を消すことができず、弾んだ鞆に目もくれずに

……

青色の長袖シャツにクリーム色の長ズボンと、質素な服装で身を飾ると、階段を早歩きで駆け降りて、窓から入ってくる光によって橙色に染められた我が家の玄関に手を伸ばす。

行き先はただ一つ、隣家に居候している彼女の様子を見に行くため……。

学校に行っても先生や友人の声に全く無反応だった彼は、心中に居座る“彼女”がどうなったかを、ようやく知ることができ、胸を躍らせながら、帰宅したままになっている茶色の革靴に足を突っ込むと、床にトントン　と、三度ほど爪先を鳴らして靴を履き終わる。

その時である、ズボンの右ポケットから振動と音が同時に発せられたのは……

「電話か？」

そう呟いた新一は、面倒臭そうな表情で携帯を右手で取り出すと、相手の名前を見た瞬間、我知らずに目が見開かれる。

鳴り止まずに何千回と聞いた着信音と、

音が鳴るたびに薄い光で点滅する画面を見ながら、

どうしよっかな

と悩む新一だったが、彼女がどうなったのか

を知るために、

通話ボタンを右手親指で軽く押して右耳に当てた。

「も、もし…もし」

普段より鼓動が早まる心臓によって、震える唇を強引に抑えながら呼び掛けを行う。

相手はそのことを一切気にせずに、自らの体調を表現するかのよう
うな、

明るくハツラツとした声質で、新一　と返す。

新一はその声を耳して、彼女の体調が元に戻りつつあることを悟

ると同時に、

思ったより早かったな　という、

自分と彼女の試練が始まることを告げるこの会話を恐れてもいた。

然し白馬にも話した通り、恐れていては前には進めないため、その気持ちを抱きながらも彼女に用件を話す。

「なあ蘭。これから会えねえか？話したいことがあるんだ」

それを聞き終わった蘭は電話越しの新一にも判るほど、え？！　という一驚の声を上げる。

何でそこで驚くんだよ　と、ツツコミに近い口調で返事をすると、

「偶然だな」と、蘭は可笑しそうにクスクスと笑いながら続ける。

「実は……私も話したいことがあって電話したの」

（ああ……それで）と、一驚の理由を内心で納得した新一は、話しを続ける蘭に耳を貸した。

「じゃあ今から新一の家に行くね」

「ああ……待ってる」

短く返事をした新一は、彼女の明るさを不審に思った。

そもそも、彼女は何の話しをしようと言うのか……今思えば、電話で聞いておけば良かった。と後悔を始める新一だったが、時間が戻るはずもなく、足だけで土足を脱ぐと、携帯をポケットに仕舞いながら居間に向かうのだった……。

“ただ待つだけ”というのは暇なものだ。

やることも無く暇を持て余しながら来客を待つ。

然し、彼はその暇な時間を使って、蘭がなぜあんな明るくなっていたのかを、ソファーに腰掛けながら考えていた。

白馬からの話しでは、蘭は酷く沈んでいたという。

……別人のように……。

然しながら、先程の蘭の声質は明らかに元に戻っていたと断言していいだろう。

つまり、“何か”起こったのだ……自分も白馬も知らないうちに。

新一は無意識に顎に右手を当てると、その“何か”の正体を探るため、目を瞑り意識を思考に集中させる。

白馬の話しによると蘭は心を閉ざし、孤独感という一人ぼっちの部屋に閉じ籠っていると聞く。

……その部屋の入口に南京錠の如く固い鍵を掛けて……

そして、あの聞き間違うことの無い明るく、聞いているだけで心が癒される声質は、孤独感という闇に染まった彼女が出せるものじゃない。

何かの出来事によりその鍵が解錠されたのだ。

……では、その解錠される原因は何なのか？

「ハア」

事件ではなく人の心境を推理することが滅多に無いせいか、

“謎が謎を呼ぶ”こと、そして手掛かりが全く無いことに、

焦燥ウツクシという苛立ちを感じ始めた新一は、
それを深い溜息として外に吐き出す。

……が、外に吐き出しても胸中に絶えること無く湧き続ける、
モヤモヤとしたその気持ちを鎮めることはできず、
台所の冷蔵庫に入っている、缶コーヒーを取りに行こうとしたその
時である。

ピンポン

その音が工藤邸の広い空間に、隅々まで二度響き渡ると、一度目の音が席を立った直後の、新一の耳の鼓膜を震わせて来客……というより、待ち望んだ人が来たことを知らせる。

そして、そのことを確実にするかのように、
新一……居る？ という乱れた息が混じった声が、工藤邸の玄関から居間に抜ける。

(蘭のヤツ……やたら早いと思ったら走って来たのか)

やれやれ とでも言うようにジト目で呆れながら、やや早歩きで玄関の扉を開ける。

帰宅した時と瓜二つの茜色の空の下で、黒色の柵越しに左半身を沈み逝く太陽に照らされた蘭を、玄関の扉を開けた瞬間に目視した新一は、彼女の左右非対称の色には目もくれず、別れた時とは真逆の表情をしていた蘭に、内心で一驚の声を上げると、久しい彼女に自然と微笑みを見せなが

ら、
自分達二人を阻むように立ちはだかっている黒き柵を、左手で思い
つきり手前に引く。

ギィィィ　　という、少々耳障りな音を立てながら、
障害という名の柵を開けると、“あの”笑顔を取り戻していた蘭の
顔を、
目線を合わせて注視する。

(やっぱりオメエにはその顔が似合うよ……蘭)

この後の自分達の会話によっては、その笑みが消えてしまつかも
しれなかった。
そのため新一は、今現在見る事ができるその笑みを、
緊張が解けた柔らかい瞳で見つめ続ける。

……ただ、左は明るく右は薄暗いその顔に違和感を感じていたが、
右は明るく左は薄暗い自らの顔と同じ顔をしている彼女を気にする
ことは無かった。

「ちょっと新一……なにジロジロ見てるの?」

玄関から出てきてから一言も話さず、且つ自分の顔から視線を外さない新一に、

不審と恥ずかしさを同時に心に覚えた蘭は、頬を少し赤らめながら、幾分憤り混じりの声質で、我を戻すように声を掛ける。

……然し、その声にも無反応の彼に、蘭はジト目で幼馴染の顔を注視しながら、

内心でハア〜 と深い溜息を付くと、改めて呼び掛けを行う。

今度は音量を、近所迷惑にならない程度に上げて……

「新一!いつまでボーっとしてるのよ!」

「え?!あ、ワリィ」

突如大きくなつた蘭の声に刹那驚き入ると、明らかに自分の世界に入っていた新一は、意識を一驚という衝撃によって現今げんこんに呼び戻される。

そして、改めて彼女の顔を注視すると、中に入るうぜ　と、右手で入口が開いたままになっている自宅を示しながら、

蘭に橙色に染まつた洋館に入ることを促す。

うん　と、明々（あかあか）とした高い声で頷くと、背中を見せている新一に付いて行きながら、これから話すこと…そして、

眼前の“元”恋人が話すことを、自分なりに脳裏で想像しながら工藤邸の扉を潜った。

苦悩：来るべき決断示し時と久しい再会（後書き）

新一と蘭の関係もそろそろ終局を迎えます。

小説を始めてから、色々と変更点があったこの話ですが、

一番の変更点は新一と蘭の別れさせ方ですね。

何というかアツサリしている感じがしまして、

「もう少し悩む部分を入れた方が良かったかな？」と思う自分がい
ますw。

では、評価、感想、ご意見お待ちしております！（^ ^）

苦悩・別れの時（前編）（前書き）

こんにちは、読者の皆様。

さて今回は、初めて前編、後編の小説を書きました。

本当は今作で終わらせるつもりだったのですが、

あまりにも話しが長いので、二つに分けることにしましたw。

因みに、今回は蘭の一人称です。

では、本編をどうぞ！

苦悩：別れの時（前編）

親友の園子に説得されホントの気持ちに気付かされた私は、その思いを伝えるために本人の元を訪れた。

この決意を早く伝えたいため、お父さんの声にも耳を貸さずに事務所を飛び出した私は、

帝丹の制服を着た二人一組、三人一組の生徒達や、左手薬指に汚れ一つ無い指輪をした、よれよれの黒スーツを纏った男性、

その他の通行人が群衆を作りながら、歩道を隙間無く埋めている中、私はできるだけ身体を横に向けて、人混みの間を上手く通りながら、前方の視界が使えない代わりに、左上部に見えるビル群の名前を視認しながら、

現在位置を確認して新一の邸宅に続く歩道に入る。

歩道に入った私は、遅れた時間を取り戻すために、全速力で新一の家を目指した。

橙色の空は変わらず、時計も持っていない私に時間を知る術は無

く、
どれくらい時間を掛けて“ここ”に付いたかは判らない……。

然し私は、そんなことお構い無しに新一の家のチャイムを、躊躇無く押した。

ところが返事は無く、前もって連絡したのだから居ないはずは無いと思った私は、
インターホンに顔に近づけて、息が荒れていることを気にせずに、
新一…居る？ と呼び掛けを行った。

……そして現在。暫しの後、キィイイという音と共に、
夕日に照らされた茶色の扉がゆっくりと開かれると、
中から私の顔を懐かしむように見てくる“彼”が、
その姿をもう少しで消す太陽に右半身を照射されながら、
視界を遮っていた黒い柵を引いた。

柵を引いても尚、無言のまま私の顔を見たまま、口を開く気配すら見せない新一に、
私は一言声を掛ける。

「ちよつと新一……なにジロジロ見てるの？」

「……」

然し返答は無く、まるで人形のように眉一つたりとも動かさない新一に不審を抱いた私は、近所の迷惑にならるように気を配りながら、再度呼び掛ける。

「新一！いつまでボーっとしてるのよ！」

「え?!あ、ワリイ」

一瞬目が大きく見開いた新一は、すぐに平静を装って自宅に入るように促した。

本当はここで、自分の世界に入っていた理由を尋ねたかったが、それよりも重大なことがある今は、敢えて聞かずに、久しぶりに足を踏み入れるこの洋館に、素直にお邪魔することにした。

土足を新一と隣り合わせで脱ぎ、

外と変らない色をしている家内を顔だけで一通り見渡すと、

以前来た時には感じなかった一つの違和感を覚えた。
……まあ、心の四分の一にも満たない程度だが……

然しながら、壁や天上…家具の色、家具の配置は全く変ってはいない。

前に来た時と瓜二つだ。

けれど、その違和感は心に残り続けている。

(何かが変わっているんだ…何かが)

とは言ったものの、その“謎”の正体が判らないまま、私は新一の後ろ姿と、

目線を動かしながら入ってくる光景から、出来る限りの情報を入力しようとするが、

結局大した収穫は無く、気が付いたら、蛍光灯によってもたらされる、

白き光が照射された居間に付いていて、

二歩ほど先に立っている新一が、向かい合わせに設置されているソファ―をバッグして、

私の方に緩慢に身体を向けると、自然と目線が合う。

「蘭。飲み物いるか？」

目線が合った刹那に、新一は“珍しく”飲み物の有無を尋ねてきたが、

私は動揺せず、ううん。居らないわ と、遠慮がちに答える。

……というより、飲み物を口にできる話とも思えない。

そうか と、残念そうに呟いた新一は、左側のソファにゆっくりと腰を下ろすと、

蘭も座れよ と、姿勢を正したまま顔を私に向けて、座るよう促してきた。

無言で言葉に甘えた私は、新一と向かい合わせに腰掛けると、新一と同じく姿勢を正す。

目線を合わせて話せる雰囲気を作り出した私は、改めて新一の全体を捉えると、
不謹慎かもしれないが、私の前で行儀良くしている新一に、内心でフツと笑いを零した。

……まあ、新一から見れば私も同じようなものかな？

そんな考えを思っただけで間もなく消し去った私は、
内心で改めて深呼吸と共に決意を固めると、新一の目を注視しながら、

重く感じられる口を開く。

「新一」「蘭」

え？ と、息が合っているようにハモってしまった私は、我知らずに声を上げると、

体温が高くなっていくのを感じ、思わず視線を逸らしてしまう。

握り拳一つ分の間隔を空けた両膝の上に、両手を置いた新一の下半身の手前に、

栗色のダイニングテーブルが視界の中心に入っていたが、

私にはそれらのモノは見えていて見えておらず、

無意識のうちに視線をあちらこちらに動かしながら、新一が話し始めるのを待ち続ける。

……然し、どれだけ待とうが新一の声が聞こえてくることは無く、唯一の音と言え、自分の左胸で元のリズムを取り戻しつつある心臓の鼓動だけ……。

止むを得ず私は視線を元に戻して、新一の顔を彼の身体ごと視界に捉える。

並びに新一は、私の視線に気付いたようで、泳がせていた目を緩慢に私の目線に合わせる。

……恥ずかしそうに頬を、桃の如く赤らめながら……。

「新一から話していいよ」

私は遠慮がちに話しの先導権を譲る。

実際、新一の話しを先に聞きたかったのは事実。

「え？……あ、ああ……そうか」

一瞬目を見開いた新一は、判ったと続けると、気を落ち着かせる為か、

息を思いつきり鼻から吸い込むと、口からゆっくりと息を吐いた。

私はその仕草に一切口を挟まずに見届けながら、

自分自身も新一に判らない程度に深呼吸をして、本当のことが近づいていることで、

高まっている気持ちを落ち着かせる。

「実はさ……蘭」

「……何？新一」

言葉を一旦切った新一に、私は続きを言ってくれるように促す。
……ただ、新一のモジモジとした様子に、予想はプラスの方向には傾いていなかった。

そして、この居間に入ってから絶えず聞こえてくる秒針の音から、さほど時間は経っていないことを察するが、私には長々と感じられた“暫し”は、
ようやく終わりを告げた……。

「俺……好きなヤツができたんだ」

『好きなヤツ』…新一はこの言葉を、“何の躊躇いも無く”言い放った。

それは、新一に“迷いが無い”ことを意味する。

私は予想していたとはいえ、実際に言われたことにショックを受けた。

然し、そのショックは不思議と大きいものでは無く、
そっか　と、軽く納得する程度だった。

そして私は、自分の気持ちを正直に新一に言うことにした。
嘘を付いていても苦しいだけだから……新一にとっても、私にとっ
ても。

「やっぱり…そうだったんだ…悔しいな」

心底から限り無く湧き上がってくる哀しみという名の煙を、
私は出来る限り吐き出さないように返答したが、
自分ですら判る震えた声を新一が気付かないワケも無く、
眼前で少々歪んで見える新一の顔は、愕然とでも言うべき表情をし
ていた。

「驚かねえのか?…蘭」

目をこれ以上無いほど丸く見開いたその顔……言い換えるなら、
開いた口が塞がらないとでも言うべきその表情で言った。
……新一にとって予想外の反応を見せたのだろう……。

口にもそ出さないが、私自身驚いている。
どうしてこんなに早く且つ、素直に納得できたのか?

以前の私だったら絶対に無理だったはず……。多分、新一のことを責めて…責めて…責めまくって、彼を困らせるような行動しかできなかったはず。

……でも、現在の私いまは違う。

親友の必死の説得に耳を傾けて、悩み…苦悩した今の私なら、新一の言葉を…そして想いも受け止められる。

まあ、悲しくない　　と言えば嘘になるが……

そして私は、今も表情を戻さない“元”恋人に、その理由を話すことにした。

「私さ、今日園子に会ったの」

「え?...園子に？」

新一の顔から一驚の表情は消えたものの、

何でここに園子がでてくるんだ？ という疑問を感じたのか、

眉を上げて、どういうことだ？と言わんばかりの目で、私の顔を見
てくる。

私は新一のその表情を消すために、間を置かずに答えを話し始め
る。

「うん。今日ね、事務所に園子が来てくれて、新一のことで話しを
したの」

「なるほどな。それで園子は今日、学校を休んでいたのか...でもよ、
『俺のこと』っていうのは？」

「そう...私の傍に“以前の新一”はもう居ないこと...
私の回りには沢山の人達が居ること...そして」

ここで私は、この話の中でも一、二を争うことを言うため、
ハッキリと言い切れるように一呼吸する。

「新一を“親と同等”に見ていたこと」

「!…『親と同等』って、どういう意味だよ？」

信じられない　　当たり前だ。私が新一をそんなふうに見ていたなんて、

名探偵と言われている彼でも想像できなかったはず。

その疑問の答えを一刻も早く知りたいのか、他人の私でも判るよ
うな、

一驚の表情で聞き返してきた新一に動揺せず、冷静に私は話す。

「私ね…今まで新一を彼氏というより養親…つまり、
お父さんの変わりとして見ていたの」

「…」

私の言ったことが信じられないのか、それともその続きが知りた

いのかは判らないが、
啞然とポカンと口を開けている新一を、私は気にせず話しを続けた。

「ホラ、私のお父さん。お母さんと別居してるでしょ……
仲直りの兆しもあんまり見えないし、
その上お酒飲んで家事のことはほとんどやらない……
そんなお父さんを見ていくうちに私、お父さんのことを憎んでいたのかもしれない」

言わなきゃならないことでも、悲しく辛いことを話すのは心が痛む。

でも私は、針で突かれるようなその痛みを耐えながら、
私のこの気持ちに同情してくれているのか、
無言のまま話しを聞いてくれていた新一に真実を話し続ける。

私のこの胸中の痛みを感じてくれているような、
哀れむような表情と瞳をしている新一と、目を合わせながら……。

「……そして、新一と一緒に過ごしていくうちに、
無意識に思い始めたのかもしれないわ。

……新一みたいな人がお父さんだったら良かったのに……って」

「…そういふことか」

声質を落とした声で納得の言葉を述べた新一は、一つ聞いていいか？ と、

質問をすることを臭わせる言動を続けて言う。

私はその問いに答えるため、心の気持ちを素早く切り替えてから返事をした。

「うん」

…：然し、“切り替えた”のはその瞬間だけで、徐々に気持ちが戻りつつあったが、私は気に止めずに口を動かす。

「オメエさ…今、おっちゃんのことをどう思ってる？」

あまりにも予想外の質問だったため、私の頭は刹那、思考が停止したが、

我知らずに質問の意味を理解していた私の意思是、

脳裏の状態などお構い無しに返答した。

……偽り一つ無い、正直な答えを言ったために……

苦悩・別れの時（前編）（後書き）

今回の一人称も四千文字を越えました。

一人称になるとなぜか、長い小説になるんですよ…不思議なこと
に。

では、評価、ご感想、ご意見お待ちしてます！（^ ^）

苦悩・別れの時（後編）（前書き）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。

え、今日は弟が外出中のため、

遅くまでパソコンが使えるそうだったので、頑張って書いてみました。

なおこの小説は、何と文字数が六千五百以上という数になっており、

二話分はありますので、休憩を挟んで読むことをお勧めしますw。

では、本編をどうぞ！

苦悩・別れの時（後編）

（お父さんのことか）

白々とした人工の光が真上から注ぐ中、私は新一の、
思いもよらない問いの返答を述べようとしていた。

なぜ、“あんな”質問に悩まず、すぐに答えられるのかは判らな
い。

無意識に自分の中で答えが出来上がっていたのか、
それとも“それ以外”の答えはあり得ないのかは定かじゃないが、
私は戸惑うこと無く、澄んだ声質で返答した。

「憎いかもしれない…でも」

「『でも』？」

「同時に好きかな。私を心配してくれるお父さんが」

私は『好き』という単語を強調するように、精一杯の明るい声と、精一杯の笑顔を作って新一に言い放った。

それを聞くと、安堵したように短く息を吐き、そっか　と、口元を緩めて微笑みかけてくる新一を、内心でカッコイイと思った私だが、
口が裂けても言えないその言葉を口には出さず、
私は“一番”気になっていたことを、新一に問う。

「ねえ、新一」

その呼び掛けに、ん？　と、短く返事を返した新一に、私は
単刀直入に問い掛ける。

「新一が好きな人って誰？」

問われた新一は、聞かれることを覚悟していたためか驚くことは
無く、
微笑みの表情から眉を寄せた真剣な表情に変わった。

「その前に、今まで俺がどこで何をしていたのかを話す必要があるんだ」

「え?...その話しをしなくちゃ教えてくれないの?」

私は、話しを逸らされるんじゃないか　　という疑問が、
我知らずに働いてしまったらしく、気が付いたらそんなことを聞いていた。

「『教えてくれない』ってワケじゃねんだけど、
そのことを話さないと、アイツのことが判らないまま聞くことになるからな。
それに、このことはオメエも知りたいだろ?」

そういうことが　　と、安堵の気持ちを感じた私は、
判った　　と短簡に返事を返すと、真剣な眼差しを解かない新一
に、
目線を合わせ続けながら耳を傾ける。

「一言で言うと俺は今まで、“あの”『犯罪組織』の事件に関わってたんだ」

(やっぱり)

私はこの時、自分の推理が当たっていたことを、納得と並びに後悔した。

聞くところによると、あの組織は数々の犯罪に手を染め、その犠牲者の数は現時点で確認されている限り、“百を軽く超える”という……。

そんな危険極まり無い人達と関わっていたなんて、背中に想像しただけでも身の毛もよだつ戦慄が疾走する。

「事の発端は、あのトロピカルランドでの出来事が始まりだったんだ」

新一は私の心境を知ってか知らずか、真剣な表情のまま話しを淡々と進めていく。

「『あのトロピカルランド』って、
もしかしてジェットコースターの事件を解決したときの？」

トロピカルランドは高校生以外の時にも何度か行ったことがあるが、
これしかない　とでも言うように、
脳裏に真っ先に浮かび上がった忘れられない“あの記憶”が、
フラッシュバックの如く、眼前に映像として一瞬表れる。

新一が自分に右手を振りながら、
あの時間：夜に相應しい黒づくめの男の人を追いかけて行った、
予感が現実になったあの悪夢のような記憶が…。

「ああ。あの後、俺は黒づくめの男の取引現場を見ていたんだが、
迂闊にもその取引に夢中になっていて、周囲に気を配っていなかった俺は、
背後から気配を消して近づいてきた、
“ジン”という組織のメンバーに気絶させられてしまったんだ。」

「え?!それからどうなったの？」

『気絶させられた』…これを耳にした一刹那、私はその後の彼が

どうなったのかを、

一刻も早く知るために思わず声量を上げて聞く。

然し、あくまで冷静な新一に、落ち着けよ蘭　　と言われ、

心配という焦りの気持ちを鎮めるも、彼の様子を知りたいという欲望は消えず、

内心では焦りの気持ちは消えてはいなかった…。

「ああ。俺は気を失った後、組織が開発している毒薬を飲まされ

」

「ちよ、ちよつと待って、『毒薬』って　　」

耳を疑った私は刹那、頭が空白の如く真っ白になり、思考よりも先に口が動く。

…が、人の話しは最後まで聞けよ　　という、ジト目で私の目を

見てくる新一の言葉が、

思考を戻すと同時に、私の気持ちを多少落ち着かせる。

「別に俺は死んだワケじゃない。現に俺は今ここに居るだろ？

…ただ、死を免れた変わりに俺は…“時間を戻されちゃった”んだ」

「それって…つまり」

私の中で“ある”方程式の確答が、徐徐にゆっくりと文字として描かれていく。

「ああ。摩訶不思議な小学生、江戸川コナンの誕生だ」

「じゃあ、やっぱり…コナン君は新一だったのね？」

「その言動からすると、やっぱり気付いてたんだな…俺のこと」

… 新一は真剣な表情を解き、相好を崩したようにニコニコ微笑む。
… 自分の予想は合っていた とでも言いたげなように。

その微笑みを見て、自然と私の顔も緩むと、
今まで言いたくても言えなかったことを口にした。
… 新一の心にまで届くように。

「うん。私が何も考えずにコナン君と暮らしていたとでも思った？」

それを聞いた新一は、ハハ　と笑い声を出して、「そっか」と呟くと、突然固い表情へ豹変して思わず言葉を口にした。

「蘭：すまなかつたな。オメエを騙しててよ」

私は突然謝罪の言葉が出てきたことに、え？　と、我知らずに一驚の声を上げる。

「でも、そうせざるを得なかつたんだ。奴らは秘密を知つたヤツを執念深く、どこまでも追いかけて消しちまうような極悪非道な奴らだつたんだ。そんな奴らからオメエやおっちゃんを守るためには、正体を隠して秘密裏に事を進める必要があつたんだ」

正体を隠してきた理由を、次々に述べていく新一の姿は、本当に私に申し訳なく思っているようで、濁り混じりの声で瞳を少し揺らし、
今にも頭を深く下げるんじゃないか　　と言つような雰囲気を漂わせながら謝罪する姿は、

私が今まで見てきた工藤新一の、“どの姿”よりも掛け離れていて、今、目に映る新一は別人のようだった。

話しを進めていくと同時に、新一の声質も徐ろおもむに曇っていく。

「ありがとう……新一」

「蘭?!」

私は彼の様相を見るに見かねて、新一の行動…判断……そして、温泉の如く心温まる優しさ全てに、感謝の言葉を心底から言い放った。

ただ、私自身を危機から逃がすためとはいえ、何も話してくれなかったことに寂しい気持ちを覚えなかったのか、と聞かれてYESと答えれば嘘になるが、新一の見たことも無い激しく謝る様子を見て、その気持ちは感謝というもう一つの気持ちに、簡単に押し潰された。

「まあ、何も話してくれなかったのは“ちょっとだけ”頂けないけど、」

私とお父さんを守り続けて、
新一自身も傷つきながら必死に戦ってこうして帰ってきてくれたん
だから、
そのことは水に流すわ」

「…蘭」

「だから、続き聞かせてよ…もっと知りたいことがあるんだから」

そう…新一は無事に帰ってきてくれた。今の私には“それだけ”
で十分だと思う。

新一は私の返答が意外だったのか、啞然とした表情から、フウ
と息を緩慢に吐くと、

先程の微笑みを作り口を開き始めた。

「判った。俺が幼児化してからはオメエも知って通りだ。

博士の提案で江戸川コナンとして事務所に居候し、FBIやCIA

…服部や白馬と言った、

多くの人達の協力で組織を倒して現在いまに至る。

…そして、もう一つ話しておかなくちゃならねえことがある」

ここからが本題だ

と続けて言った新一に、私は無言で頷く。

「博士ん家に居候している灰原をオメエは知ってるよな？」

私は内心で、なぜこんな当たり前のことを聞くのか？
と疑問を抱いたが、

新一が無駄なことを聞く人間ではないことを知っていたため、
その疑問を胸中という隠し部屋に閉じ込めて、
知ってるよ　と、当たり前前の返事を返した。

ただ、折角の微笑みが再度、真剣な表情に豹変したため、
私はこれからの話しの内容を、新一の表情と雰囲気から悟った。

「実はな…アイツは……“元”組織の一員なんだ」

「う、嘘?!」

信じられない事実を耳にしてしまった私は我知らずに、
嘘であってほしい　という本音を思わず口にしてしまう。
然し、新一の顔つきは嘘や冗談を言うような表情ではなく、
それが現実　と思いつつも、私は狭い心の部屋に到底仕舞い

きれない、
現実という重荷を無理に押し込むしかなかった。

そんな私を見ていた新一は、信じられねえのは判る
と、口
にした後、

私の反応を見る前に話しを続けた。

「でも、ホントなんだ。

そして、さっき俺が言った毒薬を作ったのも灰原だ」

「!!!」

私はそのことをハッキリ且つ、サラサラと流れるように話した新
一にも驚き入ったが、

それ以上に今まで身近に居た少女が、元組織のメンバーで、
新一の人生を狂わせた毒薬を作った張本人という現実に愕然、もと
い驚愕した。

「蘭：誤解はしないでくれよ。アイツも好きで毒薬を作ったんじゃないんだ」

「え？」

新一の『好きで毒薬を作ったんじゃない』という言動に、意識を再度現実に戻した私は、理由がある　　ということ予想しながら、

新一の口に意識を集中する。

「組織の命令でな…言わば“止むを得ず”ってヤツだ。逆らえば自分が殺されるっていう恐怖の中だな」

「そ、そんな」

だからアイツを責めないでやってくれ　　と続けた新一の表情と声は、
あまりにも悲しそうだった。

まるで、哀ちゃんの心境の痛みをそのまま表現するように……。

でも、“一つの疑問”が残る。

…私が知っている哀ちゃんは、どう見たって小学一年生だ。
…まあ、雰囲気や感じは小学一年生とは思えないが。

そんな彼女が、犯罪組織の一員で毒薬の開発者だったなんて、
にわかには信じられないことだ。

然し、自分で思った言葉に私はハツとした。

『毒薬の開発者』…この言葉に、まさか　　という嫌な予感が、
脳裏に雷鳴の如く駆け廻り、私の口に聞け…聞けと命令を下す。

「ねえ新一」

「ん？」

「もしかして…哀ちゃんも飲んだの？…新一が飲まされたっていう
毒薬を」

その質問に新一は動揺一つ見せないどころか、よく気付いたな蘭
と、

褒め言葉を投げ掛けてきた。

ただ、真剣な表情は保っていたため、

その言葉が別の感情から来たものでは無い、ということを中心に私は悟る。

「ただ、アイツの場合は…自殺目的だったんだ」

「自殺?!…どういふこと新一?」

今回何度目になるか判らないほどの驚愕の声を上げた私に対して、新一は冷静な声質で返答する。

「原因はアイツの姉。

彼女も組織の一員だったんだけど、組織に潜入するために近づいてきた、

“とあるFBI捜査官”と恋人の関係になるんだが、ひよんなことからその捜査官がFBIだということが組織にバレてしまい、

そのことで組織から危険分子と見られた彼女は、妹の灰原を組織から抜け出すことを条件に、“ある事件”を起こすことを命じられたんだ」

新一はここで目を瞑りながら、フウ　と一息して、話し疲れ

たのか口を休めると、
目を悠長に開いて改めて目線を合わせると口を開く。

その間に私は、できるだけ短時間で話しの整理を頭の中で行っていた。

…然し、とても整理が追い付かず、再度新一の口が開くのを目視した私は、
耳を傾ける。

「組織はその“ある事件”を失敗した理由で彼女を消すつもりだったようだが、

彼女はその事件を成功させてしまったんだ。

そのことを知った組織は、

『事件で盗んだ金の在り処を言わなかったから』…という理由で彼女を殺害したんだ」

1451

私は新一の話しを聞きながら脳裏で、

さつきから話しに出てくる“ある事件”のことが気になっていたが、今は哀ちゃんのことを一刻も早く知りたいため、口を挟まずに聞き続けた。

「……そして、そのことを知った灰原は、

姉が殺害された理由を組織に聞こうとするが、聞く耳持たずの組織の連中に対抗するため、

自らが開発していた毒薬…つまり、

『俺が飲まされた毒薬の開発を中止する』という対抗手段を取ったんだが、
それが逆行行為と見られた組織に監禁されたんだ。
そして、『このままじゃ殺される』と思った灰原は、
隠し持っていた毒薬を飲み……俺と同じく幼児化したんだ」

ってワケだ　　と続けた新一は、疲れたとでも言うように、
顎を右手で掴むと、マッサージするように小刻みに手を動かした。

然し、私にはその新一の仕草が、“目に入っているようで入っていないかった”。

到底信じられなかった、あの哀ちゃんが過去にそんな目に合っていたこと、
そして一度自らの命を絶とうとしたこと。

とてもじゃないが、
私を受け入れるにはあまりにも重すぎるのが彼女の身に起こっていたなんて、
信じるには時間を必要とすることばかりだった。

「大丈夫か？ 蘭」

言葉を発しない私を心配するように、身を乗り出して見てきた新一に、

大丈夫　　と言ったが、自分でも判るほどに沈んだ声質に説得力は無く、

新一の表情は少し緩んだものの、心配という言葉は顔から消えていなかった……。

「話し、続けるか？」

「うん。続けて」

本当は次回にまわして欲しかった。

でも、私の胸中に命令するように溢れる、聞きたいという欲望を抑えることはできず、

整理が追い付かないこの話しに、私は耳を貸す。

「灰原の話しはもう一つあるんだ。

さつきから俺が言っている灰原の姉さんなんだけど、その人はオメエも知ってるはずだぜ」

その話しに私は、驚愕の声を上げずにはいられなかった。

え?! という驚愕の声を聞いてもまるで、誰だと思っ?

と言わんばかりに、

顔をにや付かせている新一を余所に、私は顎に右手を当てて記憶を辿り始めるが、

どんなに辿ってもそれらしい人物は浮かんでこない。

「雅美さんだよ。覚えてるだろ? 『父を捜してください』っていう依頼をしにきた、丸眼鏡を掛けた女の人…あの人だよ」

「え?! あの人って確か、十億強奪事件の犯人だった人よね?」

驚きのあまり勢いで言い放ったその言動を耳にした新一は、突然表情を嘆きへと豹変させた。

私は見過ごすことができず、我知らずに言葉を発した。

「どづしたの? 新一…私、何かいけないことでも?」

「いや…そうじゃねえんだ。さっき言ったよな？
『灰原の姉は事件で盗んだ金の在り処を言わなかったために殺害された』って」

私はハツとして目を見開いた。

同時に、あの人が哀ちゃんのお姉さん　と、小さな声で呟く。
その呟きは新一の耳にも届いたようで、ああ…そうだ　と、
曇った声質で返事が返ってくる、私は脳裏で思ったことを、
言いつらいと思いつながらも口に出した。

「じゃあ、哀ちゃんのお姉さんは組織に利用されて殺されたってこと？」

「まあ…そうなるな」

新一は言いつらそうなのを無理やり開いたように、
視線を逸らして悲しい表情を浮かべながら言った。

私は、そんな　と、哀ちゃんに対する悲しみ…痛みを、
心の部屋に収まりきれないほどに増大させながら、
哀ちゃんがその時どんな思いだったのかを想像した。

人の気持ちなんて判るはずもない。

然し、身内を殺害され、その理由も教えてくれなかった時の彼女の心の痛みは、

尋常じゃなかったはず。

私だって、お父さんとお母さんが殺されてしまったら、

途方もない悲しみにくれてしまうだろう。

その悲しみは想像という領域を遙かに超越したものに違いない。

正直言つて、想像ではその気持ちを感じることはできなかった……。

実際に体験するのと、想像という架空の世界で体験するのはワケが違う。

「これが、俺が今まで体験してきたことだ。どうだった？」

緊張感が抜けたためか、新一は真剣な表情を御塵も見せずに、微笑みながら感想を問い掛けてきた。

然し、整理の付かない話しに『感想を言え』と言われても困るわけだが、
私は今自分が思うことをハッキリと言い放つことにした。

「正直に言っと、飲み込めないかな…話しがあまりにも大きすぎて…でも、一っただけハッキリ言えることがあるわ」

「それは？」

「話してくれて…ありがとう新一」

そう…この言葉が今の私に言える精一杯の言葉。

そして、今まで私を支えてくれた彼への感謝の言葉であり、
新たな未来へ旅立つ別れの言葉でもある。

新一はその言葉の“真の意味”を感じてくれたかどうかは判らないが、
フツ　と笑つを零すと、「どういたしまして…蘭」と、
私の好きなキラキラした顔と、明々とした高い声で言葉を返してくれた…。

今、外の世界を照らしている夕日のように。

苦悩・別れの時（後編）（後書き）

いや〜長かった。

こんなに書くとは自分でも思いませんでした。

最初はこんなつもりは無かったです、
今作で新一と蘭を別れさせようとして書いていたら、
何時の間にかこんな文字数になっていました。

では、評価、感想、意見お待ちしてます！（^ ^）

苦悩：変った関係と伝えあつた思い（前書き）

一日ぶりの更新ですね。

実は昨日、家族に小説を読んでもらつたところ、「行間の大小がうつつとうしく感じる」と言われて、書き方を変えてみました。

では、本編をどうぞ！

苦惱：変った関係と伝えあつた思い

(まさか、こんなに話しが上手く進むなんてな)

我が家に蘭が訪問した時の俺には、今の状況など予想できなかったらう。

よもや、蘭に途轍とつもない変化が、園子によって齎もたらされているとは予想外だった。

…持つべきものは友　　というヤツか？

の、
今、眼前で俺と目線を合わせている蘭は、彼女しかできない独特

心安らぐ笑顔を俺に向けている。

その笑顔は、真上から光の雨の如く降り注ぐ蛍光灯の光により、活き活きと眩しく輝き、その表情は絵になっている。

「ねえ…新一」

「ん？何だ？」

「もしかしてなんだけど…眠りの小五郎っていうのは」

「ああ、あれはおっちゃんにこの腕時計から射出される麻酔針で眠らせて、

ここにはねえけど、蝶ネクタイ型の変声機でおっちゃんの声に変え

て推理してたんだ」

俺は身振り手振りで左腕に付けている腕時計を示しながら、
できるだけ判り易く伝える。

興味津津とでも言うべき表情で、へえ〜 と頷くように聞いていた蘭の瞳は、

俺の話しに引かれるように、キラキラと瞳孔を揺さぶっていた。

その目はまるで、事件を解決に導こうとワクワクしている、俺を見ているようだ。

それにしても意外だった。

蘭がこのことを聞けば、おっちゃんの今までの推理力は俺あつてのこと、

おっちゃん自身は何もしていないことに、
失望に近いショックを受けると思っていたが、蘭にそんな様子は見られない。

寧ろ、真実を知ることには期待を抱いているように見える。
ただ、それは俺の推測であって確証は無かったため、
そのことを問うことにした。

「なあ蘭。ショックじゃねえのか？」

「え？なにが？」

「『おっちゃんの今の名誉と地位が、
他人の力によつて齎もたらされた』ってことに…だよ」

刹那…だったが目を丸く見開いた蘭は、悠長に目を暫し瞑って緩

慢に開きながら、キラキラと輝いている瞳を徐徐に見せながら開ききると、確かにそうだね　　と話し始める。

「それをシヨックじゃないと言えば嘘になるけど、でも、そのおかげでお父さんが名探偵って呼ばれてて、お父さんとお母さんの距離が縮みつつあることも事実だから、それほどシヨックじゃないよ……寧ろ、そういう意味だと新一に感謝してる」

お父さんがどう思うかは判らないけどね　　と、顔を少し右に傾けながら、

「フフ」という可愛らしい笑い声混じりに続ける。
その顔と声につられるように、俺も我知らずにハハ　　と、
笑い声と共に顔を綻はらばせる。

然し、その笑みが長く続くことは無く、突然蘭の顔から笑顔が、スローモーションの如くゆっくりと消え始めると、
打って変わったような強張った表情をした蘭が緩慢に表れる。

「どうした？蘭」

その豹変ぶりに、たまらず俺はその理由を尋ねると、
蘭は俺の身体を貫くような鋭い目付きで目線を合わせる。
その目と合った瞬間、内心で俺は恐怖という身震いを覚えるも、

それは内心だけに留める。

「新一…そろそろ教えてくれる？」

「なにを？」

蛍光灯の光に照らされた蘭の顔はハッキリと明るく見えるが、それが逆に恐ろしく見える。

「新一の胸中むねにいる女性の名前を」

正直に言っつて、俺はそのことを忘れていた。

自分で始めた話しが別の方向に向かっていたのもそうだが、それ以上に久々に見ることができた、宝石の如く眩い笑顔を見ているうちに、

そのことは何時の間にか吹っ飛んでしまっていた。

俺は蘭にも聞こえるように目を瞑って、暗闇の光景を目にしながら深呼吸をする。

(ようやくこの時か…)

今思えば、白馬の説得を受けてこの気持ち…俺の胸中むねにいる“アイツ”は、

蘭ではなく灰原であることに気付かされ、

灰原に気持ちを伝えたが結果が判らず終わった。

これが“たった数日”の出来事だったが、俺にとっては一日一日が長く感じられたせいだ、

“数日が数週間”に感じられてならなかった。

そして、この暗黒の世界から目を少しずつつ開いて、眩い光を取りこみ始めると、先程の表情と変わらない蘭の顔を、女性らしく姿勢を正している蘭の身体ごと捉えると、深く息を吐いて決意を込めた口を開いた。

「そうだな…その前に蘭。一つ約束してくれねえか？」
「約束？」

いきなりの約束だったせいか、蘭は首を傾げる。

「ああ、どうしても約束してほしいんだ…：…できるか？」
「その約束は？」
「ああ…『その人のことを決して責めないこと』…：だ」

そう…俺の心を奪った女性、灰原のことを知った時、アイツのことを責めることが一番恐ろしい。

今回の俺の話で、蘭は灰原が過去にどんなことをしてきたかは判っている。

俺の身体を小さくした毒薬、アポトキシンを開発して自分達の間係を引き裂いたあげく、自分の恋人だった人を取ったと知れば、いくら優しい心を持っている蘭と言えど、

怒りで我を忘れて暴走しかねない。

そして、最終的にアイツを責めて、灰原がどんな気持ちになるかと思うと、

不安が津波の如く押し寄せてくる。

然し、そんな心配が無用だった　　ということを知るのに、時間には必要なかった。

「大丈夫だよ、新一。誰であろうと責めないから…安心して言って」

『安心』という言葉通り、蘭の表情には表裏など無い、誰が見ても温かいと感じる笑顔しか無かった。

俺は、蘭がそんなことするわけねーか　　という気持ちを、

安堵の息と共に吐き出すと、

これで蘭との関係も完全に終わるんだな　　と、物悲しさを感じながら、

アイツの名前をお別れの意味も含めて言い放つ。

「その人の名前は……“灰原哀”…だ」

「……哀ちゃん……か」

「ああ」

蘭は肩を落とし緊張の糸が解けたように、アイツの名前を呟く。

「一つ聞いていい?…新一」

「ああ…なんだ?」

「さっき『哀ちゃんのお姉さんの名前は広田雅美さん』って言うってたけど、

哀ちゃんの名前は『灰原』…性が違うよね?」

忽然こっぜんと話しが変わったことに俺は不審を抱く。

もしかしたら、表向きは動揺していなように見せ掛けているだけで、本心では心を痛めつけられる悲しみという苦痛に、必死に耐えているんじゃないか　と。

そして、それを俺に悟られないように、話しを変えろという方法で、

誤魔化しているんじゃないか　と。

「なあ蘭。大丈夫か?」

「え?なにが?」

『大丈夫』の意味が判っていないのか、キョトンとした顔で蘭は聞き返してきた。

「あ…いや、間違ってたらワリイんだけどよ。」

オメエ……ホントは動揺してるんじゃないか？
……俺の大切なヤツが変わってたことに」

蘭は数回瞬きをすると、クスクス　と、右手を口に当てて笑いを零し始めた。

「ら、蘭？」

ここで笑う理由が思い浮かばなかった俺は、肩を小刻みに震わせながら笑いを止めない蘭に、可愛らしいという感情を隠しながら、理由を尋ねるように名を呼ぶ。

それを聞いた蘭は笑いを止めて、白々しい膝の上にゆっくりと置くと、

口元を緩ませたまま可笑しそうに言った。

「なんだ新一。表には出さなくても、心配してくれてたんだ」
「な、何言ってるんだ！べ、別に心配なんかじゃねーよ。
少しだけ気になっただけだよ」

嫌み混じりに言った蘭に対して、俺は恥ずかしさを覚えながら、本音を隠して反論する。

然し、それは蘭の口をさらに緩ませるだけだった。

「大丈夫よ新一。そんな気持ちは無いよ」

もう以前の私じゃないから　と、一呼吸置いてから安心させるように続けて言う。

「そっか。じゃあ、話を戻すな」

不安が御塵も感じられない目、安堵感のある柔らかく温かみのある声質、

それらから嘘は無いと判断した俺は、自分の予想だけの考えを否定して消し去ると、

話しを元に戻すように促した後、うん　というクッキリとした返事を聞くと、

“ほぼ”忘れ去られていた先程の質問に答える。

「まず、広田雅美さん。彼女の本名は“宮野明美”。

……そして灰原。灰原哀という名前は偽名で、本名は“宮野志保”だ」

「なるほど」

自分に言い聞かせるように小声で呟いた蘭は、
ねえ新一　と、続かせるように言った。

「今…哀ちゃんと会える？」

「え？」

「話しがしたいの…色々」と

少しこもった声で頼み事してくる蘭に、固い決意を感じたものの、俺は返答に多少の時間を要した。

今、蘭と灰原を接触させていいのだろうか？と。

昨日の出来事から俺はアイツに合っていない。つまり、今灰原がど
ういう状況で、

どんな心境なのかということ俺は知らない。

そもそも、帰宅した俺は“そのこと”を知るために、
博士ちん家に向かおうとした。

ところが、その矢先に蘭からの突然の電話が入り、現在に至って
いるワケだ。

「新一、どうかした？」

蘭の呼び掛けを聞いた俺は、下に向けていた目線を蘭に合わせて、
再度下に向ける。

仮に、蘭を連れて博士の家を訪問すれば、
アイツと顔を合わせるのは必然と言っていい。

おそらく、灰原の心が回復してる可能性は低い。

そんな心境の時に、アイツがお姉さんと重ねて見ている蘭、

そして今は、心の悩みの種になっている蘭を連れて行ったら灰原は
多分、

自分の心を惑わしている人物が目の前に現れたことに耐え切れず、その場から逃げ出してしまつかもしれない。

「蘭」

「え？なに新一」

眉を少し上げて返事をした蘭を気にせず、

咄嗟に思いついた策を“最善”と判断した俺は、目線を合わせて述べる。

「判った蘭。ただし、一つだけ条件がある」

「『条件』？」

「そつだ。まず、俺が博士ん家に行つて様子を見てくつから、蘭はここに居ろ。」

そして、俺は様子を聞いた後ここに戻つてくつから、大丈夫そうならオメエを連れて博士ん家に向かう…これでいいな？」

蘭は話しが進むごとに顔を歪ませていき、

話しの前とは正反対の心配そうな表情を見せている。

まあ、その原因はだいたい察しがつくけどな……。

「ねえ…『大丈夫そうなら』ってどういうこと？」

嫌な予感というのが脳裏を過つたのか、曇った声質で問いかけてくる蘭に、

何れ知ることになるであろう現実を話すことにした。

「実はな昨日、俺…灰原に言ったんだ……ホントの気持ちを」

「え？…そうだったの？！」

一驚の表情に豹変した蘭は、居間中に聞こえるほどの声で言った。

「ああ…でも、変なことになっちまってな」

「『変なこと』って？」

「簡単に言うと、『結果が判らず』ってヤツだ」

上手く伝わらなかったのか、蘭は曖昧な表情を見せながら首を傾げる。

「とにかく、どうする蘭？……条件を呑むか呑まないか？」

「呑むわ」

間を置かずに即答した蘭に俺は一驚する。

然し蘭は、俺の顔つきが変わったことなどお構いなしのように話を続けた。

「とうとうより、呑まなきや哀ちゃんと話しをさせてくれないんでしょ？」

言い直すように言った蘭に苦笑いを作った俺は、

サンキュ　と、一言礼を述べた後、席を立って薄暗い玄関に向かって走り出した。

苦悩・変った関係と伝えあった思い（後書き）

どうでしたか？新しい書き方は？

皆さんはこの書き方が良いか、前の方が良いのかどちらでしょう
か？

では、評価、ご感想、ご意見お待ちしております！）^ ^（

苦悩・自問自答する少女と答えを与える探偵（前書き）

皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは）＾）＾）
。

今回は再び三人称視点に戻して、物語を進めます。

では、さっぞー！

苦悩：自問自答する少女と答えを与える探偵

「邪魔すんぜ、博士」

阿笠邸の橙色に染まっている玄関の扉が、キィィィ　　という音と共に開けられると、

一人の青年、工藤新一の姿が右側から徐徐に現れた。

その声を耳にした三人はソファアに寛くわぎながら、顔を驚いたように威勢よく向けると、三つ子の如く目を丸くした表情で注視する。

「工藤君」

一番早く表情を戻した白馬が、訪問した青年の名を冷静に呟く。

その呟きを耳にしながら土足を脱いだ新一は、早くも無く遅くも無い歩調で三人に近づく。

唯一開いていた阿笠の左隣に腰掛けた新一は、正面の白馬と、彼の左隣で顔を左に向けて、自分と目線を合わせようとしなない灰原を捉える。

「新一君。夕食の時間はまだじゃぞ」

左で腕組みをしている新一を顔を向けて見ている阿笠は、

普段通りに彼が夕食を食べに来たと思いつき、当然の如く言い放つ。

「いや、今日はオメエら三人に言わなきゃならねえことがあるんだ」

それを聞いた途端、阿笠、白馬は一瞬目を見開き、視線を合わせまいとしていた灰原も、眉をピクツと反応させて、横目でチラツと横顔の新一の顔を捉えた。

新一は三人の鋭い視線を身体全体で感じながら、視線を灰原に移して視線を合わせる。

灰原は、あまりにも咄嗟に視線が自分に向けられたことに、一驚しながら瞬きをすると、視線を素早く逸らす。

その仕草を不愉快に感じた新一は、目を細めながらこれから始まる話しの主役に話し掛ける。

「灰原……そのままでもいいから聞いてくれねえか？」
無言のまま微動だにしない灰原に、新一は話しを続ける。

「さつき俺は……蘭と話しをしてきた」
その言葉には灰原だけでなく、

静観していた阿笠、白馬も驚きの表情を隠すことができなかった。

新一はその三人の豹変ぶりを気にせず話しを進める。

「もちろん内容は……“別れ”……だ」

白馬は表情を変えなかったが、阿笠と灰原は球体の如く目を見開いて、

『別れ』という言葉をごく自然に言い放った新一の顔を注視する。

「わ、『別れ』って……まさか貴方！」

「ああ。全て話したよ……一言残さずにな」

血相変えて言い放った灰原は、冷静さを保っている新一の意味した、

『全て』の単語を理解するに時間を必要とはしなかった。

『全て』……つまり、

アポトキシンのこと……組織のこと……正体のことを話したことを意味する。

そしてもう一つ、この三つよりも重大な胸中の変化のこともだ。

然し、そんなことを話して彼女は納得したのだろうか？

その疑問を抱いた灰原は、思った瞬間に口に出した。

「工藤君。彼女……蘭さんは納得したの？」

『納得してねえよ』…この答えを灰原は待っていた。それならば、彼を元の道に戻すことができる。

そして自分自身は、二人の仲を見届けながら本音を言わずに苦痛の毎日を過ごす。

……と、以前の自分なら考えるだろう。

でも、今の……白馬探の説得を受けた灰原は、
『納得したよ』という答えが返ってくる新一の声に、大きな期待を抱いていた。

本日午前、自分を変えようと説得を試みた、居候の探偵が地下室の扉前から去った後、
灰原は光の輝き一つ無い地下室のベットに腰掛けたまま、目を静かに瞑って頭に意識を集中させた。

『互いが互いに罪を知って、互いが互いに解決策を生み出す』

これは今し方白馬に言われたことだ。

アポトキシンなる偶発的にできた毒薬により、
工藤新一の時間、並びに毛利蘭との関係を引き裂くことになってしまった。

一方、新一は組織に居た時の自分にとって、何よりも大切に、唯一の支えとなってくれていた姉を守ってくれなかった。

当時はそのことで彼のことを憎んだ。

人一倍ずば抜けた推理力を持ち、

世界に名を馳^はせている推理小説家の血を引いているためか、探偵としての技量も、

見かけの若さでは計り知れないほど優れていた。

まさに、一千人に一人居るか居ないかというほどの能力と技量を、彼は成人にもなっていない身体に宿していた。

然し、そんな秀でた彼でも、世界の影として生きていく組織には、数歩及ばなかったのだろう。

人を騙すことを平然と行う組織からの提案を受けた姉は、

よく頭を働かせれば嘘だと判る提案を信じて了承し、

残忍且つ残酷な男の人差し指一本が引いた凶弾により、

その命を紅に染まりし臨終の太陽の下で、死に顔には相応しくない微笑みを、

数人の制服警官と、姉の死を見届けたと思われる黒縁眼鏡を掛けた小さな探偵、

その探偵を抱きしめ、両頬から滝の如く涙を流し続ける高校生ぐらゐの女性に見せながら、

この世に別れを告げた……。

運命とは皮肉なものだ。

組織に逆らったばかりに、出口の無い個室に敵に囚われた捕虜のように閉じ込められ、

未来に自らの生命の終わりを感じ取り、無心の境地に達した志保は、

今は感覚すら感じられない自身の手で開発した悪魔の薬を、怯むこと無く口に含んだ。

……その結果、運命の悪戯か果ては、定められた運命なのかは知らずとも、

自分は死ぬことを許されない　　とでも言うように、志保の命は終焉を免れた。

幼くなった手、足、顔で灰原哀という第二の人生を歩むことになった灰原は、

偶然とはいえ自身と同じ運命を辿った小さな探偵を、研究対象という形で興味を抱いていた。

同じ薬を飲み身体が幼児化するという、常識では考えられない体験をした彼の身体が、

これからどのような変異を遂げるのかを観察するために……江戸川コナンという、

世間では存在しないはずの元名探偵の未来を、一瞬たりとも見逃さず、

見届けることにした。

然し、コナンと同伴して事件を解決したり、無謀とも言える組織との戦いに、

恐怖というものを感じずに身を投じていく、

コナンの雄々（おお）しい雄姿ゆうしを視察していくうちに、

江戸川コナンいや、工藤新一という男の性分を身近で実感していくことで、

彼が決して手抜きをするような探偵ではないことを知得ちとくしていった。

そればかりか、灰原が自身の身体を幼児化させた、ある者にとつては怪奇な薬、
ある者にとつては神秘の毒物と、各般かくはんの環境によつて生きる者達にとつては、
一つの薬物でも多種多様の見方になる、アポトキシンを開発した組織の科学者と知つた後は、
咎めることをせず逆に、自らの人生を狂わせた張本人の灰原を、仲間：相棒と認知した上、
心痛むほどの優しさを、数か月前までは、
光射すこと許されない闇の世界で生きてきた灰原に、まるで先生と生徒の如く、
一から教えてくれた。

世の中にはこういう世界もあるんだ……というより、
今までの世界が異常なのだということ。

そして時は経ち、バスジャックの事件で、一歩間違えれば自身も、“向こう側の世界”に行くことになる危険に飛び込み、回りの温かく優しい人々を守るために、
自らの身体を犠牲にしようとした灰原を、コナンは危機一髪で救出した。

『自分の運命から……逃げんじゃねーぞ』
脱出時に負つた痛々しい傷を隠すこと無くコナンは、
逃げたつて何も変わりはいしねーよ　とでも言いたげに、
死を受け入れようとした灰原の弱い心に口述した。

その言葉は灰原の記憶に深く刻まれ、大げさに言えば、

今の自分があるのはその言葉の御陰　　といつても過言ではない。それほどまでに、コナンから言われたこの言葉は、灰原の弱き心を強き心に変えるまでに、影響を与えていた。

その後も、組織のメンバーの中でも、名を耳にしなければ戦慄を覚えるほどの恐怖を、自分の身体に記憶させているベルモットとの激闘。

杯戸シテイホテルで人知れずに行われたピスコとの戦い。

この二つの事件でも、灰原は死という終焉の扉を開きそうになった。

然し、その扉は灰原の背後に、存知せず立っていた人によって押さえ付けられ、永遠に開けられることは無かった。

ある時は毛利蘭、そしてある時は、江戸川コナンによって。

そして、裏切り者の科学者としてではなく、相棒と認めてくれていたコナンと、肩を並べながら事件現場というレーンを駆けていくうちに、何時しか“興味”が“恋心”に変わっていた。

灰原自身が気付かないうちに。

そして現在、直接そのことを連想させる言葉は聞いてはいないものの、

工藤新一は長年待たせていた彼女に別れを告げたらしい。

それはつまり、昨日自分に迷いという黒々しい汚れ一つ無く、決意と決断の煌びやかな輝きに満ちた目で言われたことが、現実であることを意味する。

然しながら、灰原の胸中には、まだ迷いが残っているのも事実だ。

本当にこれでいいのか？…人生を狂わせてしまった男性と結ばれてもいいのか？と、

何度目になるか判らないほど自問自答したことを、内心で繰り返す。

今までこの答えが出ずに終わっていたのは、毛利蘭を悲しませないため　というのが、理由の大半を占めていた。

この自問自答を胸に抱いたまま灰原は、目線を外さずに見てくる新一の顔に、
阿笠、白馬が注目する中、緩慢に開かれた口から出てくる言葉に耳を傾けた。

「ああ……納得したぜ」

苦悩・自問自答する少女と答えを与える探偵（後書き）

三人称視点なのですが、この小説の大半が灰原の内心で埋められていることに、

違和感を感じられた方がいるのでは？と、書き上がってから疑問に思いましたw。

最初はこんなに書くつもりは無かったのですが、
気付いたら“こんな”状態になってしまっ……。
やれやれ。

では、評価、ご感想、ご意見お待ちしてまーす！（＾）（＾）

苦悩・最後の苦悩からの解放と迫りくる待ち望んだ時（前書き）

皆さん、こんにちは。

今日は最悪な始まりを迎えました。

理由は、あるうことがノートパソコンのACアダプタが故障してしまい、

電気が補充されずにとつとつバッテリー切れになってしまいました……。

然し、そんなトラブルも無事に解決して、書き終わりました（＾へ＾）。

では、どうぞ！

苦悩・最後の苦悩からの解放と迫りくる待ち望んだ時

「『納得した』って、本当に？」

「冗談でも嘘でもねえよ灰原。蘭は心から判ってくれた」

啞然たる面持ちで見えてくる灰原に、本当だ　　と言いつけるように新一は言う。

「では、工藤君。今蘭さんはどうしているんですか？」

阿笠の姿を中心に、両脇の新一と灰原の顔を捉えていた白馬は、顔を新一に向ける。

左から白馬の視線を目にした新一は、彼と目線を合わせる。

「俺の家で待ってもらっている」

「何をじゃ？」

新一の『待つて』が何を意味しているのか判らなかつた阿笠は、顔を左に向けて横顔の新一を捉えと、白馬も感じていた疑問を口にする。

「『ここに蘭を連れてきていいか』ってことをさ」

阿笠、白馬は無反応だったが、灰原は一驚の表情のまま新一の横顔を捉えると

「どういうこと？」と、理由を知って恐れているように、震えた声質で尋ねた。

その問いを右耳で聞いた新一は、灰原に顔を向けると、彼女とは正反対の落ち着いた面持ちで話した。

「ああ…全てを話し終わった後、急に蘭が、『哀ちゃんと話したい』って言い出したんだ」

まあ、何を話すのかは判らねえけどな　と続けるも、『話したい』を聞き終えてから、
血相変えた表情で絶句している灰原の耳には届いておらず、無意識に下を向いてしまう。

「なあ…灰原」

呼び掛けに無反応だった灰原を気に掛けつつ、新一は言葉を続ける。

「俺は、蘭と話してみるべきだと思う」

新一の提案を耳にした灰原は、どうするべきかしら？　と、自身に問いかけるように内心で呟く。

「なあ哀君。ワシも新一の提案に賛成じゃ」

聞こえるはずのない灰原の問いに、助け船を出す如く、

阿笠は髪しか見えない灰原の顔を見ながら、珍しく真剣な面持ちで言い放つ。

「宮野さん…僕も賛成です。蘭さんが真実を知った今、君達二人は話し合うべきだ。」

そうしなければ、君はこのまま苦しむことになりますよ」

左隣で俯いている灰原の顔を見下ろしながら白馬は、滅多に出す

ことの無い低い声質で、
阿笠の意見に続くように言った。

「灰原……念のために言っておくけどよ……蘭はオメエを責めたりしねえよ」

笑い声混じりに新一は安心させるように言い放つ。

……暫しの沈黙の後、ゆっくりと顔を上げた灰原は新一の顔を捉える。

「判ったわ……工藤君。連れてきてくれる？」

先程と違い、震えが御塵も見られない声質で灰原は言う。

「え?! ……ああ、判った」

新一は、打って変わったような灰原の表情に驚きながらも席を立ち、

走りながら玄関に向かうと、扉を勢いよく開けて、

まだ日が落ちていない夕日の世界に飛び込んでいった。

「では阿笠さん。我々は工藤君が返ってくる前に席を外しましょうか」

席を悠長に立ち上がった白馬は、阿笠と灰原を視界に入れながら言う。

自分達二人が居ない方が、色々と話し易いと考えたのだろう。

その立ち上がる様を目で追っていた阿笠は、彼の顔を見ながら、
そうじゃな と、

悠長に腰を上げながら言う。

灰原は、阿笠と白馬を目で交互に見ながら口を開いた。

「私は構わないわよ……二人が居ても」

「いや哀君。ワシらが居ない方が話せることもあるじゃろうし、話しづらいこともあるはずじゃ……ワシらは自室に行ってるよ」

阿笠は腰の辺りに両手を組みながら歩き出すと、その後ろに白馬も続く。

「では、宮野さん。頑張ってください……健闘を祈ってますよ」

灰原は、背中姿の二人が階段を昇っていくのを見届けると、顔を正面に戻して、

今し方阿笠が腰掛けていた椅子を、バッグに見える何の変哲もない、橙色に染まった庭を窓越しに捉える。

博士には悪いが、普段は緑一杯の芝生のじゅうたんの上に木が数本生えただけの、

どこにでもあるような庭だが、こうして夕日の茜色の光明が照らされると、

“普通”が“美”に豹変する。

一時的だが、太陽の断末魔が作り出した“美”を眺めながら、灰原は再び心に意識を飛ばす。

さつき灰原は、白馬、新一の説得を受けながら決意を……現実を受け入れる決意を固めた。

表の性格はネガティブな思考の持ち主で、

口を開けば必ずと言っていいほど皮肉の言葉が飛び出す女性。

然し、それは彼女の見た目であり、本当の灰原哀という女性は、人一倍気遣いが強く、

その点では、彼の毛利蘭と一二を争うと言っても過言ではない。

断じて表には出さず、他者の悩み心配事を、自身の狭い心中に抱え込むように閉じ込め、それを無理に解決しようとする。

そこが灰原哀もとい、宮野志保の良いところでもあり、悪いところでもある。

現に、その抱え込む性格で灰原は、今まで孤独の一本道を進んできた。

唯一の心許せる話し相手だった姉も、組織の凶弾に倒れ、そのシヨックが元になり彼女は、孤独の一本道をさらに伸ばすことになった。

然し、組織から抜け、その影に脅え続けながらも、灰原は組織に居た頃は一部を除き、決して感じることもなかった、人の愛情という出来たてのホットココアの如く、甘くトロリとした温かみを自分に与えてくれた阿笠、少年探偵団、蘭やコナンといった、表には出さずとも、これ以上無い最良且つ、大切な人々を守るために、時には酷な選択をしなければならないこともあった。

ところが、その酷な選択をするたびに、小さな探偵が“酷”を“良”に変え、

“ある事”を教えてくれた。

もつと他人を頼って良いのだと。

自分の悩み、苦しみ、痛みを訴えて良いのだと。

最初は半信半疑だった。

『頼りたい』という気持ちが無いと言えば嘘になる。

確かに頼れば、今よりも楽になれる。それは判っていた……十分に。

然し、この時の灰原は、『頼る』ということ弱さだと考えていた。

他人に頼るのは、自分の心がちっぽけな証拠なのだ。

ところが、それは『間違いだ』ということに、色んな人々と出会い、

そこから間接的に発生した、様々な出来事を経験することで灰原は、『他人に頼るのは弱さでも強さでも無く、その人に対する“親しみ”という愛情表現”』、
ということを知った。

それからの灰原は、自分でも意識してないうちに、
自然と『頼る』という言葉動を言い始めた。

一番親しかつた阿笠を始めとし、友と呼べる存在の少年探偵団、
始めは嫉妬心によりぶっきら棒に接してきたが、

触れ合っっていくうちに、他界した姉と重ねていくようになった毛利
蘭、

そして、組織の気配を感じると脅えを隠し通せずに、半乱心状態に
なってしまう灰原を、

いつも隣で支えてくれていた、工藤新一こと江戸川コナン。

そして時間が進むに連れて、灰原の心の時間も一秒一秒確実に進
んでいき、

やがては『頼る』という言葉動…行動が、日常茶飯事になっていた。

その『頼る』という言動の中には、今まで小さな心という金庫に限界まで抱え込み、開かずの扉の如く決して開くことの無かった扉から、徐徐に徐徐に解放されたものも含まれている。

然し、色んな人達の影響を受けて変っていた灰原の中で、どうしても変わらないものが“一つだけ”あった。

それが俗言^{ぞくげん}で言う“恋心”というもの。

正確な時間は判らない。

ただ、あのバスジャック事件の頃だろうか……灰原がコナンを“興味”としてではなく、

“好意”として気に始めたのは。

然し、灰原は思うたびに否定をしてきた。

『この恋は決して実ることは無いのだと』

でもそれは過去のこと。

新一の話しを聞き、否定の原因だった毛利蘭が恋人から幼馴染に変わり、

しかも今まで影ながら思い続けてきた男性^{ひと}が、自分自身に恋を抱いている　という、夢にも思わなかった状態となった今では、

“叶わぬと思っていた恋”が、“確実に実る恋”になったと思っても過言ではない。

（叶わない妄想のものと思っていたのに、こんなことになるなんてね）

あれこれと考えながら、阿笠邸の居間で一人の時間を過ごしている灰原は、

意識を現実に戻して左に顔を向ける。

自分の背丈ほどの高さがある茶色の本棚の上に、ポツンと置いてある黄色の置時計を見て時間を視認すると、あまり時は経過していないことを把握する。

その証拠に、窓から見える庭の色は橙のままだ。

（早く来ないかしら？工藤君と蘭さん）

ついさっきまでは、彼らと会うことを期待もして否定もしていた自分が居たことに、

灰原は苦笑いを愛らしく浮かべる。

その時だ…待ち望んだ音が阿笠邸の居間中に鳴り響いたのは……

ガチャ という何度も聞き覚えがある音を、

灰原はこれほど“聞きたい”と思ったことは無い。

その音を耳にして、期待を抱きながら顔を右に向けると、

微笑みを見せながら灰原の顔を見ている二人の姿が、

玄関の窓越しに入ってくる茜色の太陽光と共に、灰原の視界に入った。

苦悩・最後の苦悩からの解放と迫りくる待ち望んだ時（後書き）

前作と“ほぼ同じ”と言っているほど、
灰原哀の心境で終わってしまいましたw。

ところで、まさかこの小説が百話以上続くとは予想していません
でした。

一体終わりは何話になるのか？……ある意味、興味があります。

では、評価、感想、意見お待ちします！（^ ^）

愛情・名探偵と天使と黒き科学者と（前書き）

弟が居ないので、今作は長く書いて投稿しました。
因みに、今回からサブタイトルを変更します。

では、新しい本編をどうぞ！

愛情：名探偵と天使と黒き科学者と

「久しぶりね：哀ちゃん」

「ええ：蘭さん」

新一、蘭が阿笠邸を訪問し、無言で土足を脱いで息が合っているように肩を並べながら、

全く同じ歩調で歩いてソファアの横に並ぶと、

蘭は灰原お気に入り笑顔を見せながら挨拶をすると、

灰原は蘭を見上げながら会釈混じりに答礼した。

「座っていい？哀ちゃん」

「ええ、どうぞ」

灰原は、微笑みを見せながら左手で、正面のソファアを、腰掛けて　と言わんばかりに促すように示す。

その仕草を目視した新一と蘭は、蘭が灰原の向かい合わせに腰掛け、女性らしく両脚を揃えて、その上に両手を重ねて置く。

蘭が座ったことを視認した新一は、一言も言葉を発すること無く、蘭の左隣に緩慢に腰を下ろして、顔を少し右に向け、二人の顔を視界の両端に捉える。

灰原は二人が腰掛けたのを視認すると、チラッと新一に視線を向ける。

ここに来て彼は、意思の無い人形のように一言も話さない。

こうやって視線を合わせている今でも、身震い一つせずに、ジッと灰原の目を見ているだけ……。

そんな新一に不気味さを感じた灰原だが、
蘭の呼び掛けにより、視線が彼女に向けられる。

「哀ちゃん……いえ……志保ちゃん」と呼んだ方がいいかな？」

「いえ、今まで通りでいいわ」

「判ったわ。じゃあ……哀ちゃん……新一から……全部……聞いたわ」

（随分と単刀直入ね）

名前を訂正して再度話し始めた蘭が、行き成り本題に入ろうとしたことに、

灰原は内心で苦笑いを浮かべる。

「組織との戦いのこと……哀ちゃんがその組織の科学者だったこと……そして……哀ちゃんの作った薬で、新一がコナン君になってしまったこと」

灰原は、次々と蘭の口から告げられていく事実には心痛めながらも、同情を引かないために表情と目線を変えないまま、口を挟まずに聞く。

「正直に言っ……最初は……憎んだな……哀ちゃんのこと。

毒薬を作っているっていう自覚が無かったとはいつても、

結果的に……哀ちゃんが開発した毒で、新一の人生が狂ったんだから」

予想はしていた　とはいえ、自分が好きだった人から、

『憎んだ』という言葉が自身に向けられたことに、灰原は堪え切れずに目線を下に向ける。

その仕草を目視した蘭は、灰原がそうなることを予想していたように、

眉一つ動かさずに話しを続ける。

「でもね、それは過去の私。……今の……ここに居る私は……」

「哀ちゃんのことを憎んでなんかいないよ」

「え?!」

今も…これからも憎まれ続けるのね　と、蘭の顔が見えず、声だけが聞こえる状態で、

これから得ることのできる“幸福”よりも辛い未来を予想していた灰原は、

一瞬、幻聴と思えた言葉を現実と理解しながら、恐る恐る視線を蘭の顔に向ける。

嘘…偽りが一切感じ取れないクツキリとした鮮やかな瞳、口端を目一杯緩めて、

見ているだけで安堵の気持ちを得られる笑顔、

“ある人物”は蘭のこの表情を“天使”に例えた。

そして灰原の目先に、茜色に染まっている庭をバツグに移る蘭の表情は、

普段以上に輝かしく見えた。

「何の理由も無く…それも、

『人殺しの薬を作っているんだ』っていう自覚があって作っているんだったら、

私は哀ちゃんのことを許さなかった」

最後の言葉が怒りを表現するように、蘭らしくない低い声質になる。

その声に灰原は、彼女から一瞬オーラのように発せられた怒りに、反射的に瞬きをする。

「でも…哀ちゃんは違うんだよね？」

……『その薬を作らなくちゃ自分が殺される』っていう、

逃れたくても逃れられない恐怖に縛られて、仕方なくやってたこと

なんだよね？」

啞然とした。

どうして彼女はここまで優しいのだろう。

正直、少しぐらいは冷たくしても良いぐらいだ。

でも、罪人であろうと凶悪犯であろうと、相手の気持ちを中途半端では無く、

上から下までキチンと理解した上で、最適な言葉を親切且つ情け深く語り掛けることで、

ドライアイスの如く冷たく冷え切った気体が充滿している心を、

春季の如く暖かく温暖な温気つんぎな心に変える。

そして、百人に一人居るか居ないかの思いやりを持った蘭の優しさは、

灰原の冷たく孤独感溢れる闇の心に光をもたらした。

……今この時も……

「そうなんですよ？」

灰原は自分の心の痛みを判ってくれて、且つそれを許してくれている蘭の、

自分にはとても温かすぎる優しさに耐え切れず、我知らずに目線を逸らす。

「……でも……いくら蘭さんが許してくれても……私のその罪は……消えない」

自分をもっと責めてくれ

とでも言いたげに、灰原は瞳をユ

ラユラ揺らしながら、

顫動せんどう混じりの小声で言った。

いつもならここで、いい加減そういつ考え止めるよな　　とい
う、

新一の呆れた声が聞こえるのだが、当の本人は口を開く気配すら見
せずに、

蘭と灰原を視界に捉えたまま沈黙している。

……まるで、俺のことは気にするな　　とでも言うように。

「だから、仲間が居るんじゃないの？」

「仲間？」

意外な言葉が聞こえたことに、灰原は蘭と目を合わす。

「そう……“仲間”……哀ちゃんが過去に犯した罪を償いきれないっ
ていうのなら、

その罪を信じられる仲間……いえ、大切に思える男性ひとに話して、
償い方を考えるべきじゃない？」

『大切に思える男性』と言っている最中に、蘭はチラッと目線を左
に移した。

ところで、蘭の話しと同一の話しを、灰原は最近耳にしたことが
ある。

……そう、唐突に発生した白馬の説得で。

(まさか、同じことを言われるなんてね)

フツ　　と苦笑いを浮かべながら、灰原は内心で呟く。

「ねえ……哀ちゃん」

「なにかしら？」

「哀ちゃんは……新一のこと……好き？」

あまりにも忽然と言われたことに、灰原は一驚を隠せず、
え？！　　と声を上げながら目を見開く。

反面蘭は、そんな灰原の表情を気にせず、答えが返ってくるのを慌てずに、悠然とした態度で待とうとする。

然し、待ち時間は必要無く、冷静な表情になった灰原の口が緩慢に開かれる。

「蘭さん。“仮に”だけど……もし……私が工藤君のことを好きって言ったら……私のことを……どう思う？」

蘭は自分の質問に直接答えず、緊張感あふれる途切れ途切れの口調から、

眼前でお得意の冷静な目付きで見詰めている灰原に、内心で苦笑いを浮かべると、

正直な気持ちをハッキリと言い放つ。

「幸せになってほしい……って思うな」

「え？…幸せ？」

定かとした答えを予想していたワケではないが、過剰な答えが返ってきたことに、

驚きを通り越して啞然とした面持ちで、

灰原を安心させるように微笑んでいる蘭を注視する。

「うん。だって…初恋の人が本当に好きになった女性とこだもの。

……そんな人には、幸せな未来を作ってもらいたいじゃない」

顔を林檎の如く赤く染めながら言い放った蘭は、左で自分と同じく、

頬が変色している新一を横目で見る。

本人はその目線を感じながらも、蘭と灰原から目線を外さない。

一方、灰原は顔を赤く染めて恥ずかしそうに笑みを作っている蘭を、素直に可愛いと思いながら、他界した姉はこんな顔を見せるのだからか？ と、色んな明美の表情を見てきた灰原が、唯一見ていない明美の顔を蘭に重ねて想像する。

それにしても、毛利蘭という女性は本当に心強い女だと灰原は思う。

新一に“何らかの影響”を与えられたとしても、振られてしまった男性が隣に居て、且つ目の前で話している女性が、今の彼の恋人だというのに、よくそんなことが言えるものだ。

普通なら憎まれ口をたたくか、皮肉交じりの言動をするはず。

然し蘭はそんな言動を一切言わないどころか、“自分達の未来を祈る”言動をした。

灰原はそんな蘭を見て、自分も彼女のように強くありたい と、うらやみの気持ちを内心で抱く。

「強いわね…蘭さん」

胸中に限度を知らないように湧き続ける気持ちを、無意識に口にしてみました。灰原は、ハッとするも時すでに遅く、蘭の返答を耳にする。

「そうかな？」

自信が無さそうに答えた蘭に、直接は返答しなかったものの、強いわよ と、内心で賛美の言葉を灰原は贈る。

因みに、その様子を静観していた新一は口元を微かに緩めたが、二人がそれに気付くことは無かった……。

「じゃあ哀ちゃん……改めて聞くね。……新一のこと……好き？」

灰原は、ドンドン　と、今まで経験したことの無い心臓の高まりを感じる。

そして、その鼓動に合わせるように荒くなる呼吸を必死に抑えながら、

深呼吸を深く行う。

その仕草を注視していた新一と蘭は、灰原の口が開かれるのを落ち着いて待つ。

そして……

「……そうね。…『好きじゃない』と言えば嘘になるわね」

「そっか」

「灰原」

安堵したような蘭の声に間を置かずに、今まで無言だった新一が口を開く。

突然のことで一驚の面持ちをしながら、勢い良く顔を向けた二人を気にすること無く、

新一は自分の胸中を認めてくれた灰原を嬉しく感じるように、笑顔を見せながら続きを話す。

「今……もう一度言っぜ」

何を言われるか　そんなことは判っていた。

然し、それを現実の出来事だと認識できていない自分が居る。

目に映る景色、人物…耳から入ってくる時計の秒針、自分の呼吸…全てが現実のもの。

でも、意識はこれを“夢”だと訴えている気がしてならなかった。

それでも意識に呼び掛けるように、これは現実だ　と、自分で自分に言い聞かせる。

そして、まだ夢と思っている自分が居ても気にせず、灰原は頬をアネモネの如く、桃色に染めてる新一の言うことに耳を傾けた。

「好きだぜ…灰原…オメエと同じくらいに」
灰原は目を見開いたが、すぐに笑顔を見せる。

「おめでとうお二人さん。…新一、哀ちゃんを悲しませたら許さないからね」

照れながらも、お互いに視線を外さない二人を視界に入れながら、蘭は祝福の言葉を述べる。

そして視線を新一に移すと、怒り声混じりに脅しをかける。

何度も経験したものの、慣れることの無い戦慄に反射的に身震いした新一は、

あ、ああ…もちろんさ　と、震えた声質で返答する。

そんな二人を灰原は面白おかしく、クスクス　と、可愛らしく右手を口に当てて笑いながら見ていた。

愛情・名探偵と天使と黒き科学者と（後書き）

フウ）……ようやく私なりに待ち望んだ瞬間が終わりました。

ただ、一つ問題が……。

それは、告白が私なりに単純に終わってしまったことですね。

……とはいっても、恋愛経験というものが無い私にはこれが限界でして、

他に思いつきませんでした。

では、評価、ご感想、ご意見お待ちしております！（＾　＾）

愛情・打ち明ける悩みと受け止める悩み（前書き）

読者の皆さん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。

ようやく更新できました。

今作も長いものになってますが、それだけ物語は進行していますw。

では、ごっしょー！

愛情：打ち明ける悩みと受け止める悩み

「さてと…俺は博士と白馬を呼んでくる」

重い腰を緩慢に上げた新一は、その動作を見ている二人の返事も待たずに、

博士と白馬が向かった自室へと脚を運んだ。

新一が階段を上がっていくのを視認した蘭と灰原は、顔を戻して視線を合わせると、

蘭が問い掛けをする。

「ところで哀ちゃん」

「ん？」

「哀ちゃんは元に戻らないの？」

注意深く見ていないと判らないほどだったが、灰原の目が一瞬、小さく見開いたのを蘭は見逃さない。

「もしかして、私…：：：：聞いてちゃいけないこと…：：：：聞いてちゃったかな？
聞き終わると灰原はハツとして、それは誤解であることを伝える。
「いえ。そうじゃないわ…：：：：ただ…：：：：どうしても戻れない理由がある
の」

「良かったら聞かせてくれない？」

相談に乗るわ　と、明るい声質で続けた蘭に、灰原は心置き無く理由を話す。

…：：：：ただ、蘭に話すのと同時に、彼女の容姿に幻の如く薄っすらと重
なっただけに見える、
明美にも話し掛けてもいた…

「小嶋君達よ」

「小嶋君達？」

「ええ。実は彼ら少年探偵団のメンバーは、くど…いえ、江戸川君が姿を消してしまっただけから、笑顔を見せなくなってしまったの」

蘭はあまりの言葉に絶句する他無かった。

コナンが居なくなり、彼ら探偵団が悲しみにくれていたのは知っていた。

然し、“そこまでのもの”だったとは思いつかなかった。

「あ、蘭さん。安心して…これは江戸川君が居なくなった即刻の彼らよ」

灰原の慌てた訂正に蘭は一安心するも、その表情には驚きという言葉が少し残っていた。

「じゃあ、今は大丈夫なの？」

心配と不安な気持ちを隠せずに、焦り気味の声質で聞いてくる蘭に、

現実を知ってもらおうと灰原は、言いづらさそうに口を開く。

「『大丈夫』ってワケじゃないけれど… “前に比べれば”… だいぶ回復してきたわ」

そっか　と、安堵の声を述べた蘭は言葉を続ける。

「もしかして、哀ちゃんが戻らないワケっていうのは… 小嶋君達のため？」

「え?! そ、そうだけど… どうして判ったの？」

一驚の面持ちを見せた灰原に、フフッと可笑しそうに笑いを零した蘭は、

微笑んだまま理由を話す。

「哀ちゃんって、他人のことには無関心に見えるけど、本当はとても心配性な性格なんだよね。… 違う？」

彼女は一体、どこまで灰原哀という少女を見ているのだろうか？
灰原は蘭と話するときには、ほとんど素を見せない。
亡き姉の影が、無意識に重なってしまっからだ。

そんな少ない手掛かりの中で、人の素を見破るのは容易なことでは無い。

それでも蘭は、灰原の素をまだ予想という段階にも関わらず、的中させている。

人を見る確かな目があるのか…それとも“女の勘”というヤツかは判らないが、

灰原は隠すことをせずに、フツ　と、笑いを零して返答する。

「お見通しなのね…貴方には…その通りよ。…今の彼らには心の支えが必要だわ。

江戸川君が居なくなっって心にポツカリと穴が開いてしまった彼らだもの。

その傷が癒えていない時に私まで居なくなったら……どうなるかなんて想像できないわ」

『どうなるか』という未来を予想しているかのように、灰原は恐る恐る言った。

「大丈夫よ！」

「え?!」

阿笠邸の居間中に響くような大声で、強く言い放った蘭の聲に驚いた灰原は、

我知らずに出てしまった自身の声を気にせず、『大丈夫』の根拠を知るべく話しを聞く。

「探偵団の皆が、途轍もない悲しみを感じていることはよく判ったわ。

……でもその悲しみは、“本当のことを話してくれないから”じゃない？」

「『本当のこと』？」

灰原は、蘭が言ったことを理解するのに暫しの時間を要した。

『本当のこと』……つまり、自分達の正体を話すべきだ　と、彼女が言っていることはすぐに理解できた。

然し、理解するのに時間が必要だったのは、“もう一つのこと”だ。

蘭は、元太達一行がコナン……灰原両名の正体を知っている　と、取れる言動をした。

確かに彼ら探偵団の子供達は、コナン……灰原が普通の小学生で無いことを、

感じている言動を見せたことが数度ある。

例えばあの時のキャンプ……そう、

ツインタワービルで組織絡みの事件に巻き込まれる行く末など、想像もしていなかった時に元太が言ったこと。

『お前ら年、誤魔化してるんじゃないのか？』

あの時彼は、もちろんその言葉が適正なことだとは、予想もしていなかったはず。

それを聞いていた光彦……歩美も、“自称”リーダーが冗談として言ったことが、

本当のこととは思ってもみなかったはずだ。

然しながら、それらは全て彼らの勝手な憶測であり想像であり、そのことが真実だとは、予想の『よ』の文字もしていないはず。

つまり、彼らは自分達の正体を知らない可能性が極めて高い。

知らないことを無理に話しても、返って彼らの心の穴を大きくするだけではないだろうか？

灰原は自問自答しても答えが出ないどころか、逆に疑問が増え続けることに苛立ちを覚え、

その原因を作った彼女に尋ねてみることにする。

「蘭さん。どうして小嶋君達が正体を知りたがっているって思うの？」

「そっね」

『正体を知りたがっている』…この言葉を聞き、納得したことを連想させる返事をした蘭に、

彼女の言った『本当のこと』とは、自分達の正体のことだと、灰原は内心で確信する。

「『付き合いが長いから』…かな？」

「ど、どういうこと？」

首を傾げた灰原を目視した蘭は、その仕草の意味を飲み込んで、ほとんど勘なんだけど　と、予想であることを伝えて話しを続ける。

「一緒に居る時間が長いとき、自分でも気付かないうちに、

その人の気持ちや本当の性格が判ってくるじゃない。

…それと同じよ」

「つまり、『口に出さないだけで気付いている』ってこと？」

まさか…そんなこと　　という信じられない気持ちを隠しながら、

蘭が自分に言いたいことを灰原は口にした。

彼女の言うとおり、人間は長く他人を見ていくうちに、知らず知らずその他人の気持ちや隠し事に気付いていく。

一番良い例が“家族”だ。

例えば父親が隠し事をしていて、本人は普段と同じように振る舞っていても、

身近で彼を良く見ている妻や子供は、次第に身に付けていった第六感で、

父が隠し事をしていることを見抜くだろう。

灰原は“そのこと”を否定はしない。

実際、自分の第六感が、博士が密事を持っている　と、訴えかけるような胸騒ぎを覚え、

その不安を身体から追い出すために阿笠に尋ねたところ、彼が発汗しながら白状した記憶は、

二三度覚えがある。

自身の目で見たこと…自身の身体で体験したことを否定するほど、灰原哀という女性は弱くはない。

だから、蘭の言っていることは素直に納得できた。

然し、探偵団の子供達が“それ”に当てはまるとは思えなかった。幾ら付き合いが長いと言っても、彼らと出会ってからはまだ、一年も経過していない。

二年三年なら納得できるかもしれないが、出会ってから一年も経っていないうちに、

“例の”第六感が働くだろうか？

「私はそうだと思うよ…実際、新一に対してそういうことがあったから」

「でも蘭さん。彼らはまだ子供…それも、

私と江戸川君と出会ってから一年も経っていないのよ？」

「そんな短い時間でそういう勘が働くかしら？」

そうね　と短く返答した蘭に、灰原は否定の言葉を言おうとするが、

それよりも前に蘭の口が開かれる。

「…でも、“子供だから”じゃない？」

「どういう意味かしら？」

「子供ってさ…私達大人より第六感…というより、勘が優れてるじゃない。」

好奇心というか求知心というか…それは哀ちゃんも判るでしょ？」

なるほどね　と内心で灰原は納得する。

然しながら、完全に納得したワケではないためか、そ、そうねと、

目を泳がせながら、不安混じりに返答する。

「『まだ納得してない』って感じね」

「え？」

「違う？」

自身の不安という障害を取り除くように、蘭は微笑んで語り掛ける。

「ええ。『もし違ったら』って思うと」

「挑戦してみなきゃ何も始まらない…失敗を恐れているは何も得られない」

灰原の言葉を遮って言った蘭の言葉には、説得という名の強力な力が込められていた。

その言葉に目を見開いた灰原は、毛利蘭という眼前の女性に秘められた、

“強い”という言葉では言い表せないほどの強さを、改めて痛感した。

「まあ、これは新一から教わった事なんだけどね」

付け足すように肩をすくめながら言った蘭に、

それでも貴方は強いわ……私と比べたら　と、内心で賛美の言葉と、

自身の心の弱さを咎める言葉を呟くと、不安が取り除けたような、キラキラと輝いた瞳で口を開く。

「判ったわ蘭さん。…やってみる!」

「頑張つてね!」

力強く言った灰原に対し、蘭も背中を押すように力強く返答する。

「お待ちせ!二人とも!」

二階から阿笠邸の隅から隅まで聞こえるような大声で、

二人の世界に入っていた蘭と灰原にとって、忘れ掛けていた人物の
声が耳に届く。

……まるで、話しが終わるのを待っていたようにタイミング良く。

階段を新一が先頭になって駆け降り、蘭と灰原が腰掛けているソ
ファーに早歩きで近づくと、

その左隣白馬が立つと、悠長に階段を下りてきた阿笠が彼らの後ろ
に立つ。

「新一。二人を呼ぶ“だけ”にしては、やたら時間が掛かったわね
?」

顔を左に向けて、見上げながら新一の顔をジト目で見ている蘭が、
彼の真意を見破ったように言った。

「そ、そうか？俺は“普通”に呼びに行ったんだけど」

目を泳がせながら返答した新一だったが、白馬と阿笠が肩を小刻
みに震わせながら、

必死に笑いを堪えていることを知ることは無かった。

「で？これからどうするの？」

蘭同様、呆れた表情で新一を横目で見ていた灰原は、腕組みをし
て話しを変えようとする。

「そうですね。もう日没も近いですから、夕食にしますか？」

『日没』……白馬のこの単語に敏感に反応した蘭と灰原は、咄嗟
に窓の外に目を向ける。

そこには、太陽の光が弱っていき、一日の終わりの印である夜を迎
えようとする、

薄暗い光景が広がっており、さつきまで美しく感じていた庭は、
真逆の不気味な姿へと変っていた。

それを見て、もうこんな時間　と、

自分達が時間を忘れて話していたことを知った蘭と灰原は、

白馬の意見に同意しようとして口を開き始める。

……が、突如聞こえた新一の声が、開かれていた口を閉じさせる。それと同時に、全員の視線が新一の顔に集中する。

「悪いけど、それは待ってくれねえか？……“やること”があるんだ」

「やること？」

灰原が聞き返す。

「ああ。このこと……というより、全てのことをおっちゃんに話そうと思う」

その言動に全員が驚きの面持ちを見せたが、声を発したのは蘭だけだった。

「お父さんに？」

新一は蘭と目線を合わせると理由を述べる。

「ああ。本当は明日でもいいんだけどよ……今日中に話せるのなら今日中のほうが良いし、

話しが終わったら皆でメシ食べるだろう？」

その場に居る誰もが、『メシが食べる』という理由は、

単なる“思い付き”であることを悟ったが、ジト目で見る以外は口を開かず、

そこまでして話したいのか　　と思いながら、蘭が代表するように口を開く。

「まあ確かに、食事は大勢の方が楽しいからね。

ちよつと遅いけど事務所に移動しましょうか？」

「まあ……あの狭い食卓に、これだけの人数が座れるかどうかは別としてね」

蘭の言葉に付け足すように皮肉っぽく言い放った灰原に、

じゃあ、夕食は別のところですかありませんね　　と、微笑みながら白馬は言う。

その言葉に、ハハハ　と可笑しそうに笑いだした一同は、暫し笑い続けると笑い声を止め、言いだすタイミングを待っていたように阿笠が、
全員を視界に入れて言う。

「じゃあ気を付けてな。ワシは留守番をしておるから」
「え？博士行かないの？」

灰原は意外な彼の言葉に驚き、我知らずに聞き返す。
新一達も声には出さなかったが、予想外だったような目で阿笠を見る。

「ああ。ワシが行っても話しには余り載れんし、
ワシが行かなくちゃ話せないことは無いじゃろう」

思いやるように言った阿笠に、誰もが一緒に行った方が良くと思うのと同時に、
その意見は正しく間違っていないと思い、反論はしなかった…一人を除いて。

「では、僕も残りましょう。…問題ありませんよね？」
「え？…でも」

新一は左に顔を向けて、白馬の顔を捉えながら言うが、その言葉を白馬の明々しい声質が遮る。

「ご心配無く…僕も博士と同じように居なくても問題無いはずですから……」

それにこんな遅い時間に大勢で押し掛けるのは失礼というものでしよう

「そ、そっか…悪いな」
白馬の意見は正論と思いながらも、納得できない新一は申し訳なさそうに返答する。

「いえ。無事に終わることを祈ってますよ」
新一の謝罪の言葉を少しも気に止めていない白馬は、お得意の微

笑みを見せながら言い放つ。

「じゃあ行きましょうか？」

新一と白馬の様子を、阿笠：灰原と共に見ていた蘭は席を立ちながら言う。

それに了承の言葉を言った新一と灰原は、新一を先頭に玄関に歩き出す。

それを阿笠：白馬が笑いながら背中を見詰め続ける。

「博士、行ってきます」

灰原は土足を履きながら言う。

「白馬、博士を宜しくな」

灰原に続くように言った新一は、土足を慣れた手つき素早く履き終わると、

振り向いて笑顔を向けている二人を捉える。

「こちらはご心配入りません。お気を付けて」

「気を付けてな」

元気良く言い放った二人の声に安堵感を覚えた新一は、その声に負けないように、

行ってくるぜ　　と言い放つと、後ろに蘭：灰原を連れて、夜の

米花町に脚を踏み出した。

愛情・打ち明ける悩みと受け止める悩み（後書き）

今作は名前だけですが、少年探偵団が大きく描写しました。

この小説、中々彼らの出番が無くて、

こつという形で少しでも登場させないと、可哀想な気がしてなりませんw。

では、評価、感想、意見お待ちしております！ (^ ^)

愛情：父母（前書き）

この小説は、今日の活動報告を読んでから、お読みになるようにして下さい。

では、本編をどうぞ！

愛情：父母

夜の街というのは美しく且つ賑やかで、同じ場所でも違う場所だと錯覚する。

無尽蔵に続くビル群が、自身の存在を他のビルよりも目立たせる為に、

ネオンの多彩な色がアピールの如く眩い光を発し続け、道路脇に設置された街灯の白々とした光が、

ネオンの光だけでも十分すぎるほどライトアップしている街を、さらに美しく輝かせる。

そして、光のトンネルと化している道路を、賑やかさを強調するように、

耳障りなエンジン音を立てながら疾走する数多の車。

その車が付けているヘッドライトは流れるように見え、それが何個も連なることで、

光の線ができている　と、歩道を上り方面下り方面に歩き続ける通行人に錯覚させる。

上空から見れば人の塊と見えるほどの通行人の群衆の中に、

行き違う人々を慣れているように、スラスラと通っていく三人の人物が見える。

一つ見間違えれば家族に見えてしまうほど、
仲良く話しながら毛利探偵事務所を目指す彼らは、もう少し年を取れば、

父親に見えるかもしれない工藤新一を左に、一人分の間を開けて右に毛利蘭。

彼女も新一同様、あと少し年齢が上がっていれば母親に見えてしまっただろう。

……周りから見れば。

そして、彼らの間に娘と錯覚させてしまつかもしれない少女、灰原が、

時々自分に話し掛けてくる新一と蘭に、適当に返事を返しながら自分の歩調で歩いている。

新一も蘭も灰原の歩調に合わせて、彼ら二人にしてみれば遅い速度で、

探偵事務所を目指している。

普段より大きな声で話さないと、相手に声が届かない程の騒音を耳にしながら、

二十分ほどで探偵事務所の看板の文字が見える位置に来た三人は、ようやく付いた　と、いつもより数段長く感じられた道を抜けたことに、

安堵の息を付きながら内心で思う。

「事務所の明かりが付いてるってことは居るみてえだな」

中からの蛍光灯の光で、窓ガラスに書かれている毛利探偵事務所の文字が、

昼間よりも強調されて見えることを視認した新一は、左に立っている二人に語るように呟く。

「うん。今日はどこにも行かないって言ってたから」

蘭は新一と灰原と同じく、事務所を見上げながら言つと視点を戻して、

電気が付いていないため薄暗く、且つ不気味に見える自宅への階段を捉える。

「行きましよう」

自分よりも遥かに背丈が高い蘭が、顔を階段に向けたことを視認すると、

それを追うように灰原も、顔を階段に向ける。

「ああ」

新一のその声が合図になったように、新一を先頭にして階段を昇り始める。

コツ…コツ　と、三人分の靴音が壁にリズム良く反響する。

自分が一歩進むたびに聞こえる音を新一達は気に止めず、コナンの時は毎回潜っていたのに、

なぜか違う扉のように感じながら、新一は回転式のドアノブに右手を伸ばす。

（背丈が元に戻ったせいかな？）

胸に押し掛かるような奇妙な違和感を、推測という形で処理した新一は、

ドアノブを回して緩慢に扉を奥に開ける。

見慣れた向かい合わせに設置されているソファが最初に視界に入り、

その奥に丁重に並べられた、灰色のスライド式の本棚が目に入る。

因みにこの本棚の中は、ネズミ一匹たりとも通れる隙間が無い。

事務所内に入った新一は、相変わらず奥の回転椅子の背もたれに寄りかかって、

右耳に黒のイヤホンをしている小五郎の顔を見る。

「お邪魔します」

小五郎は久しい人物の訪問に驚くと、新一の後ろから入ってきた娘と灰原の姿を捉えると、

会うことさえ珍しい人物の訪問に、重ねて驚きの面構えを見せる。

「探偵ボウズ！久しぶりだな……っていうより蘭！どこ行ってたんだ？！」

蘭は心苦しそうな表情を見せる。

「ごめんなさい…お父さん。どうしても新一と話したいことがあつ

たの

「話したいこと？」

怒りを鎮めた小五郎は蘭を注視する。

「そのことなんだけど、お母さんをお母さんと呼んでくれる？」

「ハア？何で英理を呼ばなきゃならねえんだ？」

娘の言っていることが全く理解できず、聞けば聞くほど疑問が増える話しに、

小五郎は怒り声混じりに聞き返す。

その小五郎の怒りを鎮めるように、新一が蘭に代わって理由を話す。

毛利探偵　と声を掛けられた小五郎は、視点を蘭の左隣に立っている新一に向ける。

「妃弁護士を呼んでもらいたのは、蘭のことで重要なお話しがあるからです。

……そして、俺のことも」

「そうか…『蘭の話し』っていうのは判らねえが、俺もオメエに話したいことがあるからな」

「え？『僕のことですか？』」

新一は、コナンのときに子供らしく話していた為か、慣れない敬語を使いながら、

自分の顔を右手で指差す。

「その話しは英理が来てからだ。アイツにも聞いてもらう必要があるからな」

そういうと小五郎は机上に置いてある受話器を左手で取ると、手早く番号を左手中指で押す。

「オメエら座れ」

左耳に受話器を当てた小五郎は、立ったままでいる三人に腰掛けするように促すと、

三人は無言で頷いて、扉側のソファに新一、灰原、蘭の順番で腰掛ける。

「俺だ、英理」

新一達は顔だけを向けて、小五郎の様子を伺う。

「ああ…こんな遅くにすまねえな。」

「…それで突然なんだが…今から事務所に来てくれねえか？」

新一達には受話器の向こう側に居る妃の様子を知ることができない。

然し、小五郎の顔がしかめていくのを見て、

妃が怒りを露わにしていることが容易に想像できた。

「まあ、そう怒るなって…蘭のことで大事な話があるんだ」

小五郎は妃の返答に答えるように、ああ　と、時々声を出しながら応答していると、

「じゃあ、待つてるからな　　と言って、受話器を静かに電話機に戻した。」

「お母さん、大丈夫だった？」

「いや…最初は仕事が入っていて大丈夫じゃなかったんだが、

蘭のことを聞くと態度を豹変させてな。『仕事をキャンセルして素っ飛んで来る』ってよ」

「そっか……なんか…悪い事しちゃったね」

「大丈夫だ。自分の判断で決めたことだからな」

「…そうだね」

親子の会話を聞いていた新一は、蘭が安心したことでも自分も安心すると、

小五郎が自分に話したいことの内容を考えていた。

小五郎が新一に話さなくちゃならないこと　　これは珍しいことだ。

“蘭のこと”でなら、不審を抱くことは無いが、新一となると不審を抱かすにはられない。

“コナンとして”なら小五郎との接点は幾らでもある。然し、“新一として”の接点はほとんど無い。

幼い頃から娘の蘭や、妻である妃とは何度も面識があった。

蘭は幼稚園：小・中・高と学校に行けば必ず会うし、

妻の妃とは授業参観：家への御裾分けおすそわで、毎日ではないが、顔を合わせる機会は何度もあった。

だが、夫の小五郎とは、当時刑事をやっていたこともあり、自宅へ訪問しても不在だったことが、お約束のようなものだった。

そのため、小五郎と新一は近所でありながらもほとんど付き合いが無く、

江戸川コナンという第二の生せいを受けて、ようやく接点ができ始めたものだった。

そんな中『新一に話したい』など、余程の話しであることを新一は察するが、

その『余程の話し』の正体が全く掴めず、事務所の扉がガチャッと開く。

「お待ちせ貴方」

紫色のストレッチスーツで身を包んで登場した妃は、

急いで来たにも関わらず、化粧が隅から隅まで行き届いていた。

「おう来たか。なら早速始めようじゃねえか：座れ英理」

全員の視線が妃に集中する中、待ちくたびれた　という態度一つ見せない小五郎は、

回転椅子から立ち上がると、新一の正面に腰掛ける。

偉そうに　と、腰掛けた小五郎を呆然の眼差しで睨んだ妃は、彼らに聞こえない程の溜息を小さく吐くと、蘭の向かい側に腰掛けて、

右隣の小五郎に顔を向ける。

「で？何なのかしら？…『蘭のことで話があるから』って言われて飛んで来て見れば、
当の本人はピンピンしてるじゃない…これはどういうことなのかしら？」

法曹界のクイーンの異名を取った威圧感を、剥き出しにして疑問を投げ掛けた妃の姿に、

向かい側の三人は顔を青ざめながら身を引くも、小五郎だけは態度を崩さず、

妻の怒り混じりの目に横目で目線を合わせる。

「まあ、そう怒るなよ。そもそも、俺が言った蘭の話は容体のことじゃねえよ」

小五郎は妃の怒りを鎮めるように落ち着いて返答した後、
目を丸くしている新一に視線を移す。

「新一」

「あ、はい」

突然呼び掛けられたことに、驚きながら新一は返事をする。

そして、小五郎が新一に向いたことで、三人の視線も彼ら二人を捉える。

「さつきオメエは『話したいことがある』って言ったな？」

「はい」

「その前に俺の話を聞いてくれねえか？」

「判りました」

新一は、妃が到着するまでに内心で思っていた疑問の答えが判ることに、

胸を躍らせながら返事をした。

「俺の話してっていうのは…オメエが世間から姿を眩している間、
“どこで何をしていたか”だ」

その言葉に四人は驚かざるを得なかった。

因みに妃は、蘭のことで呼び出されたのに、

理由も知らされないまま話しが変わったことによる怒りも含まれていたが……。

反面、新一…灰原…蘭は、まさか　　という、
そんなことあるはず無いと叫びたくなるような、嫌な予感を抱えた
まま、

小五郎の話しを聞くことになる。

「オメエは失踪している間、俺のごく身近に居たな？」
「……」

新一達三人は、驚きを通り越して言葉が出ない状態になっていた。
反面妃は、徐徐に真剣な眼差しで、新一を見始めている夫の言っ
ていることが判らず、
思わずその疑問をぶつける。

「どういふことかしら？…貴方」
妃の疑問を耳にした小五郎は、その疑問の答えも含めて、自分が
到着した結論を述べる。

「工藤新一…オメエのもう一つの姿は…：江戸川コナン…：だな？」
途切れ途切れに言った小五郎の言葉に新一は、我知らずに目を大
きく見開く。

その仕草を小五郎は見逃さず、自分の予想が正解であることを確信
する。

一方、灰原…蘭は、小五郎の顔を唾然とした表情で見ている。

「……凶星か」

予想が正解だったことが悲しく感じられたのか、ハア　　と
深く溜息を付いた小五郎に、
蘭が血相変えた顔つきで聞く。

「お父さん…そのこと知ってたの?!」

小五郎に言い放った言葉だが、その返答は妃が返した。

「…ということは、貴方も知っていたのね？…そのことを」
「え、ええ。…今日…新一から聞いたの」

しまった　　とでも言うように、反射的に口を押さえる蘭だったが、

その仕草が妃と小五郎に、確信を持たず結果となってしまった。

「毛利探偵。……どうして……そのことを？」

そのことを知られているとは思ひもしなかった新一は、苦笑い混じりに尋ねる。

「目暮警部殿に協力してもらって、俺なりに推理したんだ」

「警部に？……とうことはまさか　　」

意外な人物の登場に驚いた新一だったが、それ以上にさらなる不安が、

重りの如く新一の脳裏に押し掛かる。

……が、その重りは言葉を遮った小五郎によって、刹那に取り除かれた。

「安心しろ……警部殿にこの推理は話してねえよ」

「そうですか……良かった」

新一は安堵の息を微笑みながら吐く。

「ところで貴方。“どうやってこのことを突き止めたのか”を話してくれない？」

「そうだな」

妃の疑問に即答した小五郎の顔に、四人の視線が集中する。

「発端はオメエが事務所から出て行ったあの日だ。

あの後、俺は悲しんでいる蘭を見るに見かねて、

出て行っちまったオメエ……いやコナンと呼んだ方がいいか？」

「いえ……どちらでも構いません。……どちらも僕ですから」

新一が即答すると、そうか　　と言って、続きを話し始める。

「俺はコナンに連絡を取ろうと思ったんだ。『せめて声だけでも聞かせてやれば、

蘭が元気になるんじゃないか』と思ってな。

……だが、ここで俺は、江戸川コナンという少年のことを、何も知

らないことに気付いたんだ」

当時の自分の未熟さを表現するように、情けないように笑いながら小五郎は話した。

「然し、そこで諦めるワケにもいかず、止むを得ず俺は警部殿に協力を求めた。

江戸川コナンの親の電話番号を知るためにな。最初は警部も否定的だったんだが、

なんとか説得して、時間の空いている時に調べてもらったんだが……とんでもないことが判った」

『とんでもないこと』……この言葉を聞いた瞬間、小五郎以外の四人は息を飲む。

江戸川コナンを演じていた新一さえも……。

「無かったんだよ……江戸川という電話番号が」

存在しない人物なのだから当然だ　とでも言うように、向か

い側に腰掛けている三人は、

表情を変えない。

然し、妃だけは口には出さなかったものの、目を丸くくしていた。

「そのことを聞いた俺は、警部殿に江戸川という名字を調べてもらった。」

……というより、警部殿も腑に落ちなくて、

自分から『詳しく調べてみる』って言うてきたんだがな」

「それで……どうだったの？」

その先に言葉を恐れているように、深刻な面持ちをしている妃が尋ねる。

「ああ。俺はそれを知った途端、椅子から転げ落ちそうだったよ」

信じられなかった　と言うように苦笑いを浮かべる小五郎に、

妃の顔は益々（ますます）深刻さを増していく。

反面小五郎は、妻の様子に気付きながら口を開く。

「戸籍が……無かったんだ」

「え?!」

飛び上がるように驚いた妃に対して、信じられねえが本当だと小五郎は返答する。

そして、視線を妃から新一に移して続きを話す。

「俺はそこで警部殿に調査を打ち切ってもらった。警部殿もワケが判らず俺に、

これ以上の調査は成果が出ないと言葉を掛けてきた。

だが、俺は戸籍が無いという時点で、

江戸川コナンという少年は“タダのガキじゃない”と推測した。

……それに、思い出してみればそういう不審な点は幾つかあったわけだ」

「そうですね」

新一は小五郎の、まだまだ青いな　とも取れる言動に、苦笑いを見せる。

「そして、この疑問を確信へ大きく近づけたのが、

……江戸川コナンの登場時期と工藤新一の失踪時期だ。……もっと良く疑うべきだったぜ。

コナンが消えればオメエが表れて、オメエが消えればコナンが表れる。

それに、大阪の探偵ボウズがコナンのことを、『工藤』って何度も言ってたからな。

……だが一つだけ解せないことがある」

「何ですか?」

「帝丹高校の学園祭の日、オメエコナンと一緒にだったよな?…あれはどういうカラクリだ?」

新一は視線を灰原に移しながら答える。

「あれは彼女、灰原の変装です。声色は阿笠博士が作ってくれた、マスク型の変声機で変えていたんです」

「なるほどな」

納得したことを強調するように、小五郎は一旦目を閉じる。

それを目視した妃が、小五郎から新一に視線を移す。

「じゃあ、新一君。本当なのね？……『コナン君と同一人物』というのは」

「はい」

答える間を置いては不審を抱かれる　と、咄嗟に思った新一は即答する。

嘘をついていないことを強調するように、真剣な眼差しで妃と目を合わせながら……。

「ところで、『灰原』と言ったな？お嬢ちゃん」

（お、お嬢ちゃん）

子供扱いどころか侮辱とも取れるその言葉に、苛立ちを覚える灰原だったが、

ここで怒りを見せたら余計に子供扱いをされる　という考えが無意識に働き、

怒りを無理やり押し殺して返答する。

「なにかしら？」

「君がコナンに変装したってことは、君も正体を知ってるってことだよな？」

「そうね」

灰原はアツサリと即答する。

「なら聞くが、どういう形でコイツの正体を知ったんだ？」

顔には出さなかったものの、内心では答えたくない気分だった。

ここに来て新一の正体の話しになれば、確実に自分のことも聞かれると判つてはいたが、

実際に聞かれると矢張り、嫌なことは嫌だ。

「あ、お父さん……そこは……できれば聞かないでくれる？」

蘭は灰原の心境を察したのか、切願するように頼む。

然しながら灰原は、私なら大丈夫　と言うように、笑顔で蘭の

顔を見ると、

安堵感溢れる声で安心させる。

「ありがとう蘭さん。…でも、心配しないで…もう大丈夫だから」
「本当に？」

蘭は懸念な瞳をしながら、灰原と顔を合わせる。

「大丈夫よ」

もう一度、安心の言葉を言い放った灰原は、

二人の様子を静観していた小五郎の顔を捉える。

反面蘭は、灰原の言葉に安心感は覚えたものの、心に一二%ほど残る、

微量の不安感を見過ごせず、父母を呼び掛ける。

「判ったわ…哀ちゃん。ねえお父さん…お母さん」

「なんだ？蘭」

「なにかしら？」

小五郎…妃の順に返事を聞くと、二人を視界に捉えながら約束を持ち掛ける。

「約束してほしいの…これから哀ちゃんがどんなことを言っても、
“絶対”に咎めの言葉を掛けないって」

灰原の口から喜ばしいことは出ない　それを連想させる約束に、

小五郎と妃は笑って答える。

「大丈夫だ蘭。俺達がそんなことを言う人間に見えるか？」

「そうよ……どんなことを聞いても、彼女を責めたりなんかしないから」

「うん…判った」

親としての温かみある言葉が、皮膚から芯まで染み渡った蘭は、不安が消えた声質で頷く。

灰原も、彼ら二人の言葉に改めて安堵感を得ると、小五郎と妃を視界に捉えて話し始める。

一方新一は、四人の会話を邪魔しないように、四人を視界に入れながら静観している。

「私は元々、今世間で注目の的となっている、“犯罪組織の一員”だったわ」

驚愕　という表情をするものだと思っていた。

然し小五郎と妃は、先程の蘭との約束もあって、多少目を見開く程度だった。

その反応に灰原が逆に驚くも、咄嗟に平静な面持ちを作って、まるで返答する隙を与えないように、間を置かず話し始める。

「その組織には私の両親とお姉ちゃんも入っていたわ。両親の顔の記憶は全く無いけど、

私を産んで数年もしないうちに事故死したみたい。

お姉ちゃんの名前は宮野明美……偽名は……広田雅美」

「ちょ、ちょっと待って！……広田雅美っていうと」

小五郎は、過去に事務所の扉を叩いてきた女性の名前がでたことに、

血相変えた表情で一驚の声を上げる。

そしてその言葉を、妃の冷静な声が遮る。

「なによ？貴方知り合いなの？」

小五郎は妃と顔を合わせる。

「ああ、前に父の搜索を依頼してきた女性だ」

そうだよな？蘭　と、蘭に顔を向けた小五郎は、同意を求めるように話し掛ける。

「うん。その女性よ」

蘭は父と視線を合わせて頷きながら答える。

一方灰原は、彼らの視線を自分に向けてるように話しに割り込む。

「でも、それはお姉ちゃんの表向きの姿。

貴方達も知っているとは思うけれど、あの事件……十億円を強奪した

お姉ちゃんの事件は、
最終的にお姉ちゃんの自殺として処理されたわ。

「……でも真相は違うの」

「どういうこと？」

妃は灰原に顔を向けて、首を傾げて言った。

「お姉ちゃんは自殺したんじゃない……殺されたのよ……例の犯罪組織に」

声質は彼女らしい冷静さを保っていたが、顔つきが少しづつ強張っていくのを、

灰原に視線が集中してる四人は見逃さない。

因みに小五郎は、自分が担当した事件の真相が、
犯人の自殺では無く殺人という形で終わっていたことに、ショックに近い驚きを見せていた。

「『宮野明美の死亡を確認』……この知らせを組織から受けたときには、

私は目の前が真っ白になったわ。

でもそれ以上に、報告に来た二人の表情が不気味な笑みを見せてここに、

私は戦慄と不審を覚えたわ。……まるで私をせせら笑うような表情に」

当時の身を凍らせるような恐怖感を思い出したのか、

灰原は両膝に乗せていた握り拳を固く握る。

その仕草には新一だけが気付いていたが、敢えて言葉を掛けずに、
灰原の様子を見守るように凝視する。

「でもいくら問い質しても、組織は耳を貸さなかったわ。

そこで私は、

自分が研究を行っていた“ある薬”の開発を中止するという対抗手段を取ったの。

…納得できる回答を得られるまでね」

「待つて。今話しに出てきた『ある薬』っていうのは？」

妃の疑問を聞いた灰原は、何れ話さなければならぬことなので

丁度良い　　と思い、

一旦話しを変える。

「そうね。まず、そのことを話しておこうかしら。

……私が開発していた薬の名前は…アポトキシン4869。

元々は、組織が何らかの目的によって作っていた薬んだけど、研究途中で偶発的に毒薬として開発され始めたこの薬は、

“完全犯罪が可能な毒薬”として、組織に悪用され始めたの。

……でも極希に、死を免れて幼児化する現象があったの」

「要するに、その薬を飲んで探偵ボウズは江戸川コナンになったってワケか」

小五郎は自分の予想を落ち着いて話す。

その落ち着きぶりに灰原及び新一は一驚して、灰原が新一の言葉も代弁するように、

疑問を小五郎にぶつける。

「驚かないの？」

「そりゃ、驚かない…というより信じられないという気持ちはあるぜ。

だが、君が嘘を言うようなガキには見えねえし、

実際にその非常識な経験をした人物が目の前に二人も居るんだからな。

信じざるを得ないんじゃないのか？」

「ちよつと待つて。私が幼児化したことは話してないはずだけど」

疑問を投げ掛けられた小五郎は、フツと笑みを浮かべる。

「幼児化っていう現象があるのなら、コナンと同じ子供離れして、且つ大人びた君を、

誰も“子供”とは思わないだろうな」

「なるほど…じゃあ話しを戻すわね」

小五郎は笑みを消して再び真剣な顔つきになる。

「薬の開発を中断した私は、組織に逆らった者として扱われ、ガス室に閉じ込められることになったわ。

そして、このままじゃ何れ殺されると思った私は、

自殺目的で隠し持っていたアポトキシンを口にしたの。

…ところが、私の心臓は停止すること無く、逆に小さくなってしまったってワケ」

肩をすくめて微笑みながら言った灰原を左で見ていた新一は、正直に可愛いと思う。

「なるほど」

納得の言葉を言った小五郎に妃が続ける。

「じゃあ哀ちゃんも、新一君と同じで幼児化したのね？」

「ええ。因みに私の本名は宮野志保、父の名前は宮野厚司、母の名前は宮野エレーナ。

…改めて宜しく」

小五郎は、宜しくな　と笑って返事をする、新一へ視線を向ける。

「さて、次はオメエの話しを聞こうか？」

「判りました」

「その前に蘭…コーヒーを頼む」

判ったわ　と返事をした蘭は、事務所の奥にある給湯室の扉を開ける。

事務所内に残った四人は、無言のまま重苦しい空気が流れる室内で、

窓越しに聞こえる車のエンジン音と走行音を耳にしながら、給湯室の扉が開かれるのを待ち続ける。

愛情：父母（後書き）

皆さん、どうでしたか？

私は正直、長すぎて疲れました。

では、評価、ご感想、ご意見及び、

活動報告の実験のご感想お待ちします！

愛情：心広き探偵（前書き）

皆さんおはようございます、今日は、今晚は。

今回から描写を最低限に抑え、

人物達の心境をメインに書いていこうと思います。

ただ、これは初めてなので、バランスが悪かったり、

色々と問題があるかもしれませんが、そういうところは今まで通り、ドンドン指摘して下さい。

では、どうぞー！

愛情：心広き探偵

茶色の机上に人数分のコーヒーが置かれている中、蘭と新一から次々と事実が明かされていく。

新一が遠ざかって行くように感じて、自分の心を閉ざしていたこと。

新一の胸中に居る女性ひとが犯罪組織の事件を通して、灰原哀に変わったこと。

そのことを淡々と語っていく蘭を見て、小五郎は娘のことを考えていた。

自分の娘は何時の間にかこんなに強くなっていたのだろうか？と。

コナンが事務所を出て行ったあの日を発端に、蘭は悲しみと寂しさを感じさせる雰囲気しか出さなくなってしまった。

小五郎が声を掛けても、心配ない！大丈夫と、不安を無理に押し殺した表情で、返事をするだけだった。

その理由を聞くこととしても、その話しに触れるのを嫌がるように話しを逸らしたり、何でも無いよ　と、小五郎を心配させまいとする言葉が返ってくるだけで、

肝心の訳が聞けぬまま、言いたくないことを無理に言わせることも

無いという考えが、
小五郎の脳裏に浮かんでいき、蘭が話してくれる時まで、
自分出来ることをやるという考えに至った。

然し蘭はとうとう、一日の大半を部屋に閉じ籠って過すようになり、

蘭が話してくれるという希望が崩れ落ちていく中、一人の女性が事務所を訪れた。

鈴木園子：彼女が蘭に何を言ったのかは判らなかった。

…今、蘭の話しを聞くまでは……。

話しの詳細は言わなかったが、蘭の心を開放する　　という、
親の自分にできなかつたことを園子は遣って退けた。

ほぼ一瞬だったが、あの時の蘭は、

事務所の階段を吹っ切れたような表情で駆け降りていった。

思わず扉から飛び出して、後を追うとした小五郎を呼び止めた、

大丈夫よオジサマ、蘭はもう大丈夫だから　　という自信に満ち

たあの発言。

何を根拠にそんなことを　　と思つた小五郎だが、蘭の話しを

聞いていくうちに、

園子の“あの自信”は判らなかつたものの、これだけは判つた。

……娘は強い、と。

今まで恋人だと思つていた人物を、親のように見ている　　と

言われたら、

普通は否定し続けるか、そんなこと無い　　とパニックになって、

園子を追い出すかのどちらかだろう。

されど、蘭は一時的に否定はしたものの、

園子の説得を聞いていくうちにそのことを受け入れ、おまけに呼び出した新一から、

今の恋人のことを話されても動揺せず、そのことも受け入れた。
これを強い以外に何と言う？

そして、今は笑いながら話しているも、少し前までは親の自分さえ拒絶するほどの、
冷たい牢獄に閉じ込め続ける原因を作った、憎たらしくても憎めないこの男は、
阿笠邸に居候している、灰原哀というこの少女に好意を持っているらしい。

この少女と会ったこと況して、話したことすら数度しかない小五郎に、
彼女がどういう人間なのかを聞かれても困る話しなのだが、
人命を何とも思わない犯罪組織に身を置きながらも、決して黒に染まることは無く、
自らが開発した毒薬の被害者である、新一を戻してくれた彼女なら、この先どのようなことがあっても大丈夫だろうと、小五郎は感じた。
……まあ、“ほぼ”探偵の勳であったが。

「つていうワケです」

「蘭：お前はそれでいいんだな？」

嘘は言っていないと判っていないながらも、念には念を入れて小五郎が問う。

「大丈夫よ、お父さん。もう吹っ切れたから」

「そうか」

安堵の声で小五郎は納得すると、妃に顔を向ける。

「お前も文句はねえな？」

「まあ、新一君が蘭をあんな目に合わせたのは少し許せないけど

……蘭も許していることだし、結果的に蘭が成長したことも事実だから、

大目に見てあげるわ」

肩をすくめながら英理は新一を見て言った。

「じゃ、今日は久しぶりに私達家族と、

新一と哀ちゃんを入れて楽しい夕食にしましょうか」

蘭は勢い良く立ち上がって扉に歩き出す。

「蘭さん。私、手伝うわ」

灰原は立ち上がって、蘭の右側に歩く。

「ありがとう哀ちゃん」

灰原を見下ろしながら、ニコニコとした笑顔で感謝した蘭は、肩を並べながら階段を昇って行った。

「あの……ありがとうございます。毛利探偵……妃弁護士」

頭を深く下げて心底から感謝をした新一に、小五郎が首を傾げて答える。

「はあ？何がだ？」

「灰原を責めずに話を聞いてくれて」

顔を上げた新一は、感謝の気持ちを表現したように、満面の笑顔

を見せる。

「オメエな……俺が約束を破る男に見えるか？」

俺を馬鹿にしてんのか？ とでも言いたげに、小五郎は半目で新一に言い放つ。

酒飲み……ヘビースモーカー……女好き

毛利小五郎という男に対しての新一の印象は、今までそんなものだった。

コナンとしてこの事務所に同居するようになっても、自分がヒントを与えなければいい加減な推理しかせず、事件をさらにややこしくする存在。

その上、普段は酒を呷りながら、テレビに向こう側に居る沖野ヨロコ、届くはずも無い声援を送り続け、娘である蘭を困らせる。

まあ、自分の力で事件を解決する場合も数回はあったが。

だが、それは今思うと、毛利小五郎という男の“ほんの一部”だったのかもしれない。

さつきまで新一と灰原の正体、新一と蘭の関係を聞いていた小五郎の顔つき……目付き……そして、元組織の一員だと知りながら、咎めの言葉を一言も掛けなかった彼は、

“大人の雰囲気”を出していた。

ただその雰囲気は、隣で聞いていた妃も出していたが、彼女はその雰囲気を隠さないことが多かったため、大して驚くことは無かった。

然しながら、普段だらけている雰囲気を見せている小五郎が、威圧感ある気配を突然見せると、無意識に身体が反応してしまう。

それは、“日常の彼”だけを見ている新一には決して予想できない姿だった。

妃のように、日頃から威圧感あつ雰囲気を出して、且つ大人らしい口調で話す人なら、言葉を交わしていくうちに自然と慣れてしまうものだ。

だが、小五郎のように威圧感を見せない人物が、突然そのような雰囲気を出すと、恐怖心に身体が戦く。

けれども、不思議なことにその恐怖の中には、思いやりという温かみを感じられた。

……目付きからでも、表情からでも無い。言葉から……である。その温かみを灰原と蘭も感じていたかは判らないが。

「すみません…毛利探偵」
申し訳なさそうに苦笑いを見せながら、新一は浅く頭を下げる。

「まあ、あのお譲ちゃんも罪を自分なりに償ったんだろ？」

「え？どうして判るんですか？」

「オメエは罪を見逃さない男だ。それなのに、あのお譲ちゃんと普通に接していた。

これは自分なりの方法で罪を償ったからだろ？」

どこまで知っているのだろうか？

新一は啞然の面持ちで聞いていながら、そんな考えが脳裏に浮かんで来た。

自分は工藤新一と江戸川コナンという二つの視点から小五郎を見 てきたが、

彼のことは一部の顔しか知らなかった。

然し小五郎は、話したことも数えるしかない新一のことを、

上から下まで知っているようだった。

コナンとしては小五郎と毎日会話を弾ませたが、その新一は偽りの姿。

偽りから真実を見抜くのは、“ほぼ”不可能だろう。

となると、小五郎は数少ない手掛かりから、新一の性格や性分を見抜いたことになる。

(不思議なもんだな)

新一は、探偵としての技量なら自分の方が遙かに上なのに、技量が劣る小五郎が自分のことを見似ていたことに、軽いショックを受ける。

それとも、そこには探偵という技量は必要ないのか…。その答えを見つけることは、今の新一にはできなかった。

「貴方…見てるところはちゃんと見てるのね」
静観していた妃はジト目で小五郎を見る。

「何だよその言い方。俺を何だと思ってる？」
睨み返すように小五郎は妃を見る。

「そうね…名前だけのグータラ親父ってところかしら？」
「なんだと?!」

また始まった　と、ジト目で見ている新一は、止めよつと声を掛けようとするが、
事務所の扉から怒り声が響く。

「お父さん、お母さん！ご飯出来たわよ！」
明らかに御立腹な蘭の声を耳にした二人は、嵐が止んだように静かになってそっぽを向く。

毎度のこと新一は、この夫婦は何時になったら素直になるのだろう？ と、
希望も無い期待を胸に薄っすらと抱く。

それは蘭も同じで、お願いだから仲良くしてよ という内心の気持ちを、
溜息で外に出して口を開く。

「ホラ、喧嘩なんかしてないで、夕食を楽しみましょう。
今日は哀ちゃんも気合い入れて作ったんだから」

蘭は言い終わると、顔だけを後ろに向けている新一に、
新一の好きなハンバーグもあるよ と続ける。

新一に料理を振る舞うなんて何時以来だろう？ という気持ち
を、
記憶を思い出しながら内心に思う。

正確な時間は判らない。
以前は：そう、新一が失踪するまでは良く、彼の自宅へ訪問して、
朝食を作るのが日課となっていたくらいだ。

それが当たり前だった。

直接、ありがとう…とか、悪いなという感謝の言葉は聞けなかったものの、

自分の料理を食べると満面の笑顔を見せる新一の顔が、蘭に対する気持ちを述べていた。

然し、帰ってきた新一に料理を作ったことなどできず、それよりも大事な話しが、次々と頭に入ってきたことで、

蘭は自分の料理を食べた時にしか見られない、新一の笑顔をおぼれていた。

でも、蘭を先頭にして階段を昇って、居間の食卓に座った新一は、机上に並べられた料理に一驚の声を上げて、心のどこかで待ち望んだ笑顔を見せ始める。

その料理は灰原の手も加わっているため、

その笑顔がどちらの女性ひとに向けられているのか、

もしくは“どちらにもなのか”は判らないが、蘭にとってそんなことはどうでも良かった。

その笑顔を見れたことが、今の自分にとって最高の幸せなのだから。

そして、新しい恋人を隣に座った新一を、左側に捉えながら蘭は二人の幸せを祈ると、

いただきます と、五人の声が揃って居間に響いた。

愛情：心広き探偵（後書き）

初めてなのでこんなものでしょうか？

私自身でも判るミスと言えば、灰原の言動が皆無に等しかったことですね。

彼女のクールな性格を表現するために、言動を少なくするという方法を取ったのですが、限度を超えてしまいましたw。

では、評価、感想、意見お待ちしております！（^ ^）

愛情：吹っ切れた心（前書き）

皆さん今日は。

今日は遅い更新になりました。なにせ二話分書いていたものからです。

では、どつぞー！

愛情：吹っ切れた心

「じゃあ、今日の授業はここまでです。皆、気を付けて帰ってね」
帝丹小学校一年B組担任の小林が、教卓で教材を整えながら言い放つ。

それに、はい　と、子供そのものの元気良い返事が、
教室に響いて音量を下げずに廊下まで響く。

「小嶋君、円谷君、吉田さん…ちよつと来てくれる？」

帰り支度を整えながら、自分と同じくランドセルをいじっている三人に、
顔を向けながら呼び掛ける。

(いよいよ…つてところね)

これから彼ら三人に話すこと…それは、帰宅後に阿笠と新一も交えて話す、

自分達の正体のこと。

「何ですか？灰原さん」

教卓側から来た光彦が言うと、反対側から来た元太が続ける。

「何の話だよ？灰原」

「何？哀ちゃん」

灰原の隣の席で帰り支度をしていた吉田も、首を傾げながら言う。

正体を話したら彼らはどう思うか？

前よりは少し精神が回復してきたものの、コナンが居なくなる前に見せていた、

無邪気さ溢れる笑顔は今も全く見せない。

昨日蘭は言った。

『彼らは自分達の正体に気付いているかもしれない』…と。

やってみる　と、決意を力強く返事をする、頑張ってね

と、

灰原よりも力強い言葉で背中を押してくれた。

でも、彼ら三人の、感情を表に出したくないような無表情を見る
と、

言ってもいいのかしら？　という迷いが今更出てくる。

(せっかく消してもらったのに)

苛立ちを覚えるも時間は待ってくれず、小嶋達は今か今かと灰原
が口を開くのを待っている。

後戻りはできない…いや、仮にできたとしても、何れ話さなければ
ならないこと。

彼らが蘭の言ったとおりのことで、心を閉ざしているのかは灰原に
は判らない。

もしかしたら、違うことなのかもしれない。

でも、それしか思い浮かばないのなら、その方法を試すしかない。

これ以上彼らを苦しめたくは無い。

その苦しみから解放させるには、成功するか失敗するか判らない賭
けにのっってみるしかない。

(迷っている場合じゃない……蘭さんの言葉を信じてやってみるしかない)

目を閉じて決意を改めて心に刻んだ灰原は、緩慢に目を開ける。

「これから博士の家に来てほしいの」

「何ですか？」

光彦が二人を代表するように言うと、灰原は即答する。

「貴方達に、“とても大事なこと”を話さなくちゃならないからよ」

「『大事なこと』って何？哀ちゃん」

「それは博士の家で話すわ。貴方達来られるかしら？」

小嶋達は顔を見合わせて目で会話をすると、光彦が真剣な眼差しで答える。

「判りました。良いですよ？元太君も歩美ちゃんも」

「ああ」

「うん」

二人は頷いて言った。

「ありがとう。それじゃ行きましょう」

ランドセルを取って後ろの出口に歩き出した灰原に、二人分の空間を保ちながら、

三人が固い表情で続く。

これから阿笠邸で行われる灰原からの話し。

灰原の後ろを一定の距離を保ちながら歩いている小嶋達は、彼女が何を話すのかを考えていた。

彼らは以前、少年探偵団なるものを結成していた。最初は遊び半分で始めたものだったが、事件の解決数が上がっていくことで、

帝丹小学校では知らない者が居ないほどに有名になり、偶然か必然かは判らないが、事件現場で遭遇する、目暮を始めとした刑事達に腕を見せつけることで、

警察の中にまで名が渡ることになった。

そして、この生活が…この好奇心から来るワクワク感が何時までも続くんだ

彼らはその考えを否定しなかった。

それは必定ひつじょうなのだ。

だが事件は起きた。小嶋達三人にとって、大事件という言葉では表せないほどの、忘れられない事件が。

江戸川コナンとの別れ。

コナンが転校してから彼らの時間は止まっていた。自分達の別れを見届けるような夕日の中で、事務所を去って行ったコナンを見送った時から、彼らの時間は文字通り“停止”していた。

家に居ても学校に居ても、活力が抜けてしまったように悲しみの

表情を変えず、

誰が何と問いかけようと、曖昧な返事しか返さなくなった。

当たり前と言えば当たり前だが、そんな彼らに探偵団が務まるわけはなく、

日々を重ねて小嶋の下駄箱に入っていた依頼書は、封を開けられぬまま探偵団のリーダーである小嶋が、依頼者の元に謝罪と一緒に返却され、

とうとう彼の下駄箱には、少年探偵団を解散します　　という、

雑でぶつきら棒な文字で書かれた、白い紙が貼られることになった。

因みに、解散を進めたのは誰の意思でも無い。

小嶋が、これ以上は探偵団を続けられない　　という、

精神的なものからきたストレスが限界を突破し、それに耐えられなくなつた小嶋が、

誰の了承も得ずに、自らの下駄箱に張り紙をしたのだ。

然し、その張り紙を見た円谷も、吉田も、灰原も、驚きの表情以外のことはせず、

誰も小嶋の独断を否定しなかった……。

そして現在、帝丹小学校から少年探偵団という存在が、

懐かしさを覚えさせる名前になり始めている頃、コナンが居なくなつてから。

話すことも余り無くなつた灰原から、『大事な話し』があると言われ、

無言で彼らは彼女の後ろを付いて行っている。

別に小嶋達は、“話したくない”わけじゃない。

ただ、何となく“話しづらい”のだ。その理由はコナンが転校してことに関係している。

彼女：灰原哀は、コナンが事務所から出ていく際に、涙一つ見せなかった。
もちろん、彼ら小嶋達は、灰原が“人前で涙を見せない少女”ということは判っていた。

然し円谷が、灰原は泣いているのか？もしそうならば、自分が慰めてやらなければ　　という、
彼女に対する好意から来た思考により、遠ざかっていくコナンを乗せた車から、
左隣りに立っている灰原に視線を移したところ、彼女は涙目を見せないどころか、
コナンの別れなどどうでもいいように、平然とした表情を見せていた。

そのことを円谷は、自分達を慰め阿笠邸に帰宅して行った灰原を見送った後に、
涙が止まらずに泣き続けている、小嶋と吉田に話したのだ。

「本…当…なの？」
これを言ったのは、目に涙を浮かべた吉田だ。涙声になっているため、
途切れ途切れに言葉が出る。

「我慢…してた…だけじゃ…ねーのか？」
小嶋も涙を浮かべながら言うが、円谷が間を置かずに否定する。
涙声で途切れてしまう言葉を、できるだけ途切れさせないようにしながら。

「それは…無いと思います。……灰原さんは…笑ってましたから」

小嶋、吉田はその時は俯いて見ていなかったのだろうが、円谷はシツカリと見ていた。

満面の笑顔で自分達から離れていく灰原の姿を。

涙は少しは収まり、鼻水を時々すすりながら、そのことを聞いていた小嶋と吉田は、

涙目から興味津津の目付きに変わっていく。

そして、三人が別れる丁字路にまで、意見の投げ返しをやり続けた結果、一つの答えが出た。

灰原はコナンのことについて何か知っているのでは？ とい

う答えが……。

それに、思い当たるフシだってあったワケだ。

時々、学校の登下校の最中に、コナンと灰原は小嶋達の目を盗むように、

二人だけの会話していたことが幾度とある。

その事を思い出した小嶋達は、あの時に無理にでも聞いとけば良かった と、

今となつては遅すぎると判っていないながら、後悔を抱いた…が、その答えももう少しで判る。

「ただいま」

阿笠邸の玄関を開けた灰原は、小嶋達三人を通すと静かに閉める。

「お邪魔します」

風変わりな低い声質で挨拶をしたことに、驚きの面持ちを阿笠は見せる。

「じゃあ貴方達、座って」

灰原はソファーに歩きながら、付いてくる小嶋達に言うと、ソファーにランドセルを、丁寧に立て掛ける。

「なあ、哀君。一体どうして光彦君達が来たんじゃ？」

阿笠は久しい彼らとの再会を喜ぶと同時に、真剣な面持ちを崩さない彼らに不審を抱く。

一方白馬は、灰原がソファーに近づいてきたことに気付き、何も聞かずに席を開けた。

小嶋達三人は、見知らぬ男がくつろいでいたことに、違和感ある驚きを覚えたが、

咄嗟に阿笠の知り合いと判断して、気に留めずにソファーに腰掛ける。

「悪いけど、少しだけ待ってくれる？…呼ばなきゃいけない人が居るから」

姿勢を正して腰掛けている三人を捉えながら灰原は言う。

「え？誰ですか？」

「ちよつと待ってて……今呼んでくるから、飲み物でも飲んで言い終わると、灰原は玄関に歩き出す。

「あの……誰を呼んでくるんですか？」

「それは……帰ってきてからのお楽しみよ」

円谷の質問に灰原は振り向いて、如何わしい笑みを見せながら答えると、

四人の視線を背に浴びながら、玄関を出て行った。

灰原と一緒に入ってきた三人の子供達。

白馬は、彼らが発している張り詰めた緊張感に、只ならぬ雰囲気を感じる。

「ねえ、君達」

「なに？お兄さん」

ソファーに近づいてきた白馬を、一番近い吉田が応答する。
その応答に小嶋と円谷も顔を向ける。

「飲み物はいるかい？」

自分を見ている彼らの視線は、
そこら辺で元気一杯に遊んでいる子供がするような目付きでは無く、
大人がするような、
鋭く真剣な眼差しだった。

(まさか…彼らは)

以前、灰原から聞いたことがある。

帝丹小学校には、コナンと灰原をほぼ無理やりに入団させた、少年探偵団なるものがあると。

小学生にはやたら太っている少年…小嶋元太、

ソバカスで博識な頭脳を持っている少年…円谷光彦、

おかつぱ頭でカチューシャを常に身に付けている少女…吉田歩美。

そして、子供離れた目付き…というより、何度も修羅場を潜ってきたような目付きを見て、

白馬は確証に近い予想を脳裏に抱く。

「いえ、入りません」

円谷が答えた後に小嶋が続ける。

「ってというか、兄ちゃん誰だ？」

「おっと失礼…：僕は白馬探。高校生探偵をやっています。

ちよつとした事情がありまして、この家に居候させてもらっているんですよ」

問いかけた小嶋を見ながら、白馬は子供に見せるような笑みで答える。

「なんか、光彦君みたいな人ね」

「は？」

吉田が円谷を見ながら言うと、白馬が疑義の声を上げる。

反面、小嶋も円谷も、どういうこと？　と言いたげな顔で吉田を見る。

「だって、年下の私達に敬語使ってるもん」

「そう言えば…：そうだな」

彼女らしく可愛げがある声に小嶋が納得すると、円谷が白馬を見ながら了解する。

「なるほど…：確かに」

「フツ…：そうですね」

白馬は自分と同じ喋り方をする円谷を、面白そうに笑いながら答える。

(面白い子供達ですね)
もつと早く彼らと出会いたかった　　という、感興かんきょうの気持ち…
…まるで、
推理で犯人を追いつめた時に感じる、ワクワク感と大差無い、心地
好い気分を胸に抱く。

「お待ちせ貴方達」
「おお、哀君…って新一？」
食卓用の椅子で白馬達を見ていた阿笠は、玄関の声に反応して視線を移す。

「ああ、灰原から事情を聞いて来たんだ」
言い終わると、自分のことを啞然とした面持ちで見ている小嶋達三人を、視界に入れる。

「オメエら…久しぶりだな」
コナンとしてはなく、工藤新一として挨拶をすると、円谷が軽く会釈をしてから応答する。

「えっと、どうしてここに新一さんが居るんですか？…灰原さん」
「あら…『呼ばなきゃいけない人が居る』って言わなかったかしら？」
灰原は、円谷を目線を合わせながら台所に向かう。

「それが新一さんっていうことですか？」
「そうよ」

台所に消えた灰原の即答に、先程まで白馬が腰掛けていた場所：即ち、

円谷の正面に腰掛けた新一を、どうして？ と問うように、円谷は凝視する。

その視線に気付いた新一は、円谷と視線を合わせる。

「まあ、話しは灰原が戻ってからにしようぜ」
場に合わない笑顔を見せて言った新一を、小嶋ら三人は疑うように凝視する。

(さてと、どこから話すか)

工藤邸の玄関を潜る直後に、後ろから灰原に声を掛けられた新一は、

自分の返事も聞かないまま、話し始めた灰原に不審を抱くも、話しが進むに連れて、
抱えていたものが崩れ落ちて行つた。

簡潔に話しをまとめると、

今阿笠邸に小嶋達が来ているから、出来る限りのことを話そう
ということ。

その話しを聞いた新一は、灰原を外に待たせたまま素っ飛んで家に入って、
五分も経たずに私服姿で灰原の眼前に現れ、玄関に施錠して阿笠邸を訪問した。

隣同士に腰掛けた新一と灰原には、苦みあるブラックコーヒー、
小嶋達三人の前には甘いオレンジジュース。

飲み物が“あるだけ”の状況の中、どこから話せば判らない新
は、
彼らが何を知っていて、何を知らないのかを知るために、三人を視
界に入れて問う。

因みに阿笠と白馬は、食卓用の椅子に向かい合わせで腰掛けなが
ら、
五人を見守るように見詰めている。

「話したいことは色々あるんだが、まず…オメエらは何を聞きたい
？」

新一は、彼らが自分達のことを感じていることを、前提として
話しを進めた。

その問いに円谷が、他の二人の言葉を代弁するように答える。

「では、灰原さんがコナン君のことで、僕達に隠していることを教
えて下さい」

円谷のその質問が火蓋を切ったように、灰原は隠すことも無いた
めか、
順序良く事実を話していった。

最初に話題となったのは、コナンとの別れの際、灰原が見せてい
た不審な表情について。

円谷達が灰原ばかりに話し掛けるので、新一は話しの邪魔はすまい
と思い、
口を挟まず静観していた。

然し、ただ静観していたわけでは無い。

江戸川コナンとして初めて彼らと会ったこと、一緒に知恵を出し合
って暗号を解き、

犯人を追い詰めたこと、その他の一年未満という、長いようで短かった時間の中で作った、

数知れぬ沢山の思い出を、古いものから鮮明に思い出す。

帝丹小学校に転校して彼らと出会ったときには、このような未来を想像しただろうか？

していなかったはずだ。当時の新一…もといコナンには、

元の姿を取り戻すまでの付き合いであり、元に戻ったら彼らとはオサラバ。

彼らも自分のことを忘れるだろうし、新一も知り合いの小学生として見る。

そういう関係だと思っていた。

だが、失った身体を取り戻すのは容易いことではなく、時間が経つごとに、

それだけ彼らとの付き合いも増していき、とうとう転校生である灰原も含めて、

親友と呼べる存在になっていた。

小さな身体と少ない知識で、コナンと灰原に付いていき役に立つこともあれば、

その好奇心が仇となって、危険な目に合うことも多々あった。

然し逆を言えば、その危機を救うことでコナンと小嶋達の距離は、少しずつ…少しずつ縮まっていた。

そして、今では彼らに新一は感謝している。

まあ、左隣で聞いたり答えたりしている灰原が、彼らにどんな印象を持っているかは判らないが、

“大事な存在”として見ていることは確かだ。

少年探偵団に有無を言わずに入れられたものの、入団させられ

た御陰で、

工藤新一の視点では見れない、様々な体験をすることができ、結果的にそれが、探偵としての成長に繋がることになった。

言わば：彼ら探偵団の三人には“借り”がある。

その借りをどう返せばいいのかが判らない新一だったが、何れ必ず、大きな利子を付けて返そうと心に誓う。

「というと、君達二人は身体が幼児化したってことですか？」

円谷が、信じられない　　と言うように目を丸くしながら、灰原に聞き返す。

小嶋：吉田も、円谷と同じ表情で、灰原と新一を交互に見る。

「ええ。信じられないかもしれないけれど……これが現実。

貴方達にもそう思う部分があるはずよ」

よく思い出してみなさい　　とでも言うように、灰原は円谷を見て問い掛ける。

そうですね　　と言いたげに、円谷は顔を下に向けてしまう。：

：小嶋も同様に。

然し吉田だけは違った。

涙目を見せないというのは嘘になるが、新一と灰原を視界に入れながら尋ねる。

「ねえ、二人とも」

「なに？」

「なんだ？」

瞳を揺らしている吉田を見ながら、慰めるように微笑んで返事を

する。

「新一…さんと……宮野…さん」

「コナンでいいよ、歩美ちゃん」

「ええ、私も今まで通りでいいわよ」

それを聞くと安心したように、吉田は少し笑みを見せる。

「正直…信じられないっていう気持ちだけど……これだけは…聞きたい。」

……二人とも、コナン君としての時間や…哀ちゃんとして過した時間は……嘘じゃないよね？

本当の時間だよね？」

ホントの時間か。

吉田に涙目で問い掛けられた灰原は、もちろんよ　と、自分が作れる目一杯の笑顔で即答した。

それに続き新一も満面の笑顔で、当然だろ？姿は変わっても過した時間に嘘はねえよ　と、と、安心させるように明るく言った。

それを聞いて顔を上げた円谷と小嶋…そして吉田は、子供らしい無邪気な笑顔に変わり、

灰原と新一は彼らと話したが、灰原は内心では別のことを考えていた。

右隣で楽しそうに会話を交わしている新一は、どう思っているのかは判らないが、

灰原は当時彼らを、仲間や友達とってはいなかった。

強いて言うならば、“何とも思ってたなかった”。

当時の灰原は、仲間や友達というものが一切居ない、影の世界で生きてきたため、

どういった存在が仲間なのか、友達と言えるのかが判らなかつたし、そういった存在が必要とも思わなかつた。

そもそもあの小学校に転校したのは、自分と同じ体験をした工藤新一こと江戸川コナンが、
どんな人物かを見極めるためだつた。

間接的に出会つた彼らは、言わば“序で”だ。

……でもコナンから、組織に居た頃には知る機会すら無かつたことを、
体験を得ながら教えてもらった。

その中には、友という温かみある言葉が、存在する理由も含まれていた。

然し、灰原はそれを知るのを喜ばしいと感じると同時に、知ることを恐れてもいた。

自分の心に忌ま忌ましい程に居座り続け、それだけで自分の自由を奪う組織の存在。

仲間や友ができるのは、嬉しいこと此の上無しだつた。

でもそれは、組織に正体がバレてしまった時の、犠牲者を増やすことに繋がる。

それが何よりも恐ろしかつた。

彼らが温かく接して来る度にその恐怖が蘇ってきて、とうとう組織に正体がバレて、

阿笠と一緒に拉致されるといふ、最悪の結果を迎えてしまうことになつた。

組織に阿笠と一緒に拉致された灰原は、絶望という限度を越え、思考など停止同然の状態になっていた。

自分と阿笠が犠牲になれば、仲間や友は救われる。でも本心では、コナンや吉田達：蘭といった人達と一緒に過ごして、コナンと一緒に戦場を駆けたかった。

笑ったり…喜んだり…時には悲しみを共有したり…と。

それが現実のものになるとは、その時夢にも思わなかった。

FBIと共同して突入したコナン達は、仲間という力で自分と阿笠を救い出し、

結果はどうであれ、組織を倒すことができた。

そして灰原は、縛られることの無い自由を掌中にした。

もうこれからは、何にも脅えず、何にも遠慮することなく、雲の如く自由に生きることができる。

今、吉田達と、楽しく素を出して会話をし、彼らの口から何度か出た、

『友達』という言葉に心底から頷く。

その仕草を見る度に、安堵したように彼らは、子供らしい明るい笑顔を向けてくる。

それが体温よりも温かく感じられ、心をポカポカと熱くする。

そしてこれからは、叶わぬものと思っていた恋が成立して、右隣で楽しそうに笑っている新一との、第二の人生が約束されている。

「じゃあ、今日は有り難うございました」

円谷は立ち上がりながら頭を下げる。

(お礼を言わなきゃならないのはこっちの方よ)
そう思いながら、灰原は円谷を見て礼をする。
「ええ。こつちこそ有り難う」

「ねえ…哀ちゃん、コナン君」
立ち上がった吉田が言う。

「なに？」
「なんだ？」

「私達…これからも…友達…だよね？」
消えた涙目を蘇らせたように、吉田は二人を見て問う。
その問いには、立ち上がった小嶋も円谷も、神経を集中させる。

「もちろんよ。さつきも言ったでしょ？」
「そうだ。何年経とうが何十年経とうが…年が離れていようが、俺らは永遠に友達だぜ」
即答した新一と灰原に、彼らは何度目かの明るい笑顔を見せる。

「判りました。じゃあ灰原さん、また明日学校でお会いしましょう」
「新一…いや、コナンもどこかで会おうぜ」
「大丈夫よ元太君。すぐ傍に住んでるんだから、会いたい時に会えるよ」

言い終わると玄関に三人が歩き出し、追うように新一と灰原が続く。

「じゃあ、オメエら気を付けてな」
土足を履いている三人を視界に入れながら、新一が見送る。
それには円谷が答えた。

「はい。博士と白馬さん…お邪魔しました」

新一と灰原の間から見える二人を、捉えながら付け足す。

「ああ、気を付けて帰るんじゃないぞ」

「まあ、次に会えるのは何時になるか判りませんが、不審人物には注意して下さいね」

阿笠と白馬は席に付いたまま、笑顔で見送りの言葉を言う。

因みに、新一と灰原は白馬の言動に不審を抱き、振り向いて彼の顔を注視するが、

小嶋の声に視点を戻される。

「じゃあな」

「バイバイ」

「おやすみなさい」

言い終わった三人は、久しい笑顔を見せながら玄関から出て行く。

その背中を玄関の扉越しに見続けていた灰原は、

フツと笑うと、ホントに有り難う　と、内心で礼を言うのだった。

愛情：吹っ切れた心（後書き）

『原作もこうであったらいいな』という希望を胸に今作は書きました。

実際どういった最後になるのかが楽しみです。

では、評価、感想、意見お待ちします！（^ ^）

復活：辛き別れと戻る時

「本当なのか？…それ」

「はい。突然ですが…：…決まってしまったことですので」

円谷達が帰宅した後、白馬が言った不審な言動の正体を知るため、隣同士にソファ―に腰掛けた新一と灰原は、食卓用の椅子に座っていた、白馬と阿笠が向かい側に腰掛けたのを目視すると、早速本題に入った。

だが、話し合いが始まって一分も経たないうちに、白馬から告げられた驚愕の言葉。

「本日午前、ロンドンに居る母から『いい加減帰ってこい』と、連絡が来たんですよ」

母親からの連絡なら仕方ないか　と流すことは、新一にも灰原にも不可能だった。

ただ、阿笠はそのことを知っていたように、二人を哀れむような目で見ている。

頭が空白になった。

新一は、正面に腰掛けている白馬の言ったことを耳にした瞬間、啞然とした。

出会いが有れば別れが有る　それを言われてしまえば返す言葉は無い。

そして、白馬は日本の生まれだが、今の白馬はロンドンに住んでいる。

なら、彼がロンドンに帰るのはおかしくはない。

然し、新一には“おかしい”と無意識に考えてしまう。

偶然とは言え、同じ組織の事件を共に追って、彼らのアジトに乗り込み、

阿笠と灰原を救うことに成功した。

その上、薄々感じていたものの、素直になれなかった自分にアドバイスを与え、

本当の気持ちに気付かせてくれた。

彼がもしあの時事務所を訪れなければ、今の新一は居なかった

と言っても過言ではない。

そんな彼がもう少しで居なくなってしまう。

彼に出来た巨大な借りを御塵も返していないまま。

(行くな…なんて言えねえよな)

「そう…残念ね」

灰原が沈んだ声で呟く。

「そうじゃな…ワシも話しを聞いた時はショックだった。……今もな」

「本当にすみません。……でも、母には全く連絡も入れてませんで

しかし、

心配性の母のあんな声を聞くと、とても無視できなくて」

軽く頭を下げた白馬は、滅多に見せない曇った顔で三人の顔を捉える。

「…判ってるって。オメエのことだ…自分自身で決めればいいじゃねえか」

敢えて笑って言った新一に、白馬が注視して返答する。

「いいんですよ工藤君。素の気持ちを隠さなくても」

「『素の気持ち』ってなんだよ？」

「目が揺れてますよ」

その言葉に阿笠…灰原の視線が新一を捉える。

「工藤君。…まさか…泣いてるの？」

灰原は、からかうように微笑みながら新一を見る。

「バ、バー口…泣いてなんか…いねえよ」

顔に書いてあるにも関わらず否定する新一に、三人は相好を崩したように、クスクスと笑いだす。

それに新一は、恥ずかしそうにそっぱを向く。

…お別れか。

そっぱを向き心境丸出しの新一を見て、

涙したくてもそれを無理やり抑え込んでいる自分自身にも、

嘲笑いの面持ちを灰原は向ける。

まだハッキリとした礼は言っていないが、灰原は万謝の気持ちばんしゃを、胸に深く記憶していた。

組織に拉致され、仲間を救えるという喜き悦えつを覚えながら並びに、阿笠の未来に終末を迎えさせてしまった。

まあ、心の中にチヨコツとだけ、自分の未来も終わってしまったことに心残りは有ったが、

阿笠の未来が自分のせいで、こんなことになってしまったと思えば、そんな未練は最初から無かったように、消え失せてしまった。

でも、そんな自分達を、ファンタジーに出てくる悪を決して許さない勇者のような、

熱血な探偵達が救い出してくれた。

無論、その中には彼も含まれていた。

そして、決して逃れられないと思っていた黒の呪縛から解き放つてくれただけでなく、

毛利蘭を悲しませまいとする思い遣りで、素直な気持ちを出せなかった灰原を、

自分の内心を見透かしているように説得をして、強情な自分を粉々に粉碎して、

正直な灰原を表に出してくれた。

ある意味、白馬探という探偵は、灰原の心に一番近い存在と言えるかもしれない。

工藤新一以上であり、阿笠博士あかさひろしと釣り合っても、おかしくはないほどに。

一人だったら、胸中から湧いてくる悲しみの感情に耐え切れず、涙を流していた。

然し、もう少しでお別れの彼にそんな姿を見せて、

最後の最後まで心配を掛けたくない　　という思考が、
灰原の目から悲しみを出すことを許可しない。

目ではなく胸が熱くなる一方で、灰原は白馬の曇った顔を注視しながら、
悲しみを無理やり押し殺した笑みを浮かべると、何時言えば判らない感謝の気持ちを、
内心で代わりに述べる。

(この借りは必ず返すわよ……工藤君と一緒にね)

「じゃあ新一君、哀君。今日は白馬君へのお礼も込めて、豪華な夕食にするかのぉ」

暗く思い空気を消し去るように阿笠が、喜色満面の面持ちで言う。

「あ、いいですよ……阿笠さん、いつも通りで」

阿笠の顔を見ながら遠慮がちに答えた白馬に、打ち解け顔の面持ちをした新一が続く。

「いいじゃねえか白馬。俺もオメエに礼がしてえからな」

「そうね。こういう機会にでも借りを返しておかないと、貴方に借りを返しきれないわ」

灰原が新一に続けて言うと、二人の^{いたわ}労りの気持ちに白馬は押され、止むを得ないように返答する。

「そうですか……では、お言葉に甘えさせてもらいますか」

「じゃあ、早速材料を買ってくるか！」

新一が威勢良く立ち上がるを目で追った灰原は、ハアと溜息を付いて緩慢に口を開く。

「ちょっと待ちなさい……料理知識が皆無に等しい貴方が買い出しに行ったら、

どんなことになるかなんて、想像するに難くないことだわ」

その言動に軽い怒りを覚えた新一は、ムツとした顔で粗暴に座る。

「ハハ……まあ哀君、そう言わずに皆で行けばよからう」

阿笠が苦笑いを見せながら言っていると、暫しの後に灰原が目を瞑って呟く。

「……そうね」

「では、行きましょうか」

白馬は立ち上がって三人を見下ろしながら言っていると、灰原が腰を上げて、

新一の横顔を見ながら続く。

「ホラ……不貞腐れてないで行くわよ」

その言葉を待っていたとでも言うように、新一は顔を灰原に向けて返答する。

「ああ、早速行こうぜ」

まるで中身は子供のような新一を見て、可愛い人　と、灰原は内心で思う。

同時に、そんな新一も好きだ　と。

その後、打って変わった態度の新一に、阿笠と白馬が微笑みを浮かべる中、

一行は日が沈んだ夜の街に出かけた。

食材選びにはアレコレと選んでいるうちに時間は過ぎていき、帰宅したときには、

出発から一時間半余りが経過していたものの、誰一人気にすること無く、

今まで一番賑やかで豪華な食卓を囲んだのだった。

別れは辛いもの。

どんな時でもそれは変わらない　と、白馬は阿笠邸で過ごす

最後の夜を、

ベットに仰向けで寝転がりながら考えていた。

最初は様子がおかしかった父のことを探るために、行き掛かり上、乗りかかった船となってしまうた、組織の事件を解決して、そのまま帰国するつもりだった。

然し、組織の事件を通して様々な人物と出会い、

その人達の心境を嫌でも見ることで、放っておけなくなってしまう、自分出来ること…すなわち、話しを聞いてその人の心境を理解し、助言を与えて終点に導くこと。

その結果、彼らの心に居座っていた、嘘…偽りの無い本当の気持ち
を解放した。

そして、感謝された…当然と言えば当然のことだ。

然し、白馬はこれからも誰にも話すことはないが、

これで良かったのか？　という疑問を胸に抱えている。

自分のしたことは本来ならば、彼ら新一達が自分自身で気が付かなければならなかったこと。
それを白馬は、助言という形で終点に辿りつかせた。^{ゴール}
確かに結果的には、これで良かったのかもしれない。然し、自分が行ったことに対する後悔は、
良いとは言えない。

助言を受けずに自分だけの力で答えを見つけること、助言を受けて答えに辿りつくこと。

この二つは随分と違う。

助言を受けずに答えを知った者は、色々と悩み苦しむことで、その分大きな成長を自然に遂げる。

逆に助言を受けた者は、悩んだり苦しんだりする時間が短くなる分、

大きな成長をすることは無い。

それに最悪の場合、悩まなくても誰かに聞けば答えを与えてくれる

という思考が自然と働き、

“誰かに頼らなければ生きていけなくなってしまつ”。

まあ、こんなことは希だが。

だが、“希”だからこそ起こった時が怖い。

(まあ、彼らに限ってそんなことはありませんか)

白馬は自分でも驚くほどの心配性に苦笑いを浮かべると、
安堵の気持ちと共に深い眠りに付く。

そして翌日。白馬を含めた最後の朝食を済ませた新一と灰原は、

阿笠の車の後部座席で、
軽くも無く重くも無い手荷物と一緒に腰掛けている白馬を、扉越しに目を合わせている。

「じゃあ、ワシはこれから白馬君を送ってくるからな」
阿笠が運転席の扉から顔を覗かせて言う。

「ああ、間違っても事故起こすんじゃないぞ」
阿笠に顔を向けた新一が、皮肉っぽく答えると、ムツとした表情で阿笠が返答する。

「事故なんて起こしやせんよ。身体は老いても腕は衰えておらんよ」
「じゃあ、白馬君。また何時か会いましょう」
灰原が笑顔で言い放つと、白馬も笑顔で返す。

「そうですね。……それと、できれば君の本当の姿を見てみたかったものです」
それを申し訳ないように思った灰原は、心苦しい面持ちで返答する。

「御免なさい……まだ、小嶋君達にお別れを言ってないから」
「謝ることはありませんよ。…工藤君」
白馬は新一に顔を向ける。

「なんだ？」
「宮野さんの幸福な未来を祈ってますよ」
聞き終わった灰原は、頬をピンク色に染めるが、新一は普通に返答する。

「サンキユ……オメエも向こうで頑張れよ」
「有り難うございます」

「白馬君、そろそろいいかね？今から出んと飛行機に間に合わんぞ」
阿笠は、三人の会話を邪魔したくない　　と思いつつも、
バックミラーに映る白馬を見て言う。

「判りました。でも最後に一つだけ…宮野さん」

「なに？」

「君のこと…好きですよ…宮野さん」

言われた灰原はもちろんのこと、阿笠…新一両名も、
時間が止まってしまったようにピクリとも動かなかったが、白馬の
言葉が時間を進ませる。

「君を愛している男性ひとの一人として、君が幸せになることを祈っていますよ」

「……え…ええ…ありが…」

突如の告白に頭が付いていかない灰原は、一行に収まらない荒くなる呼吸で、
途切れ途切れに返答する。

「ハハハ…良かったじゃねえか灰原」

高笑いした新一が言い終わると、灰原がギリツと新一を睨み付ける。

(……こわ)

思わず新一は目を逸らすと、内心で恐怖感を覚える。

「では、阿笠さん。出してくれますか？」

「うむ。判った」

阿笠は頷いて返答すると、エンジンを掛け始める。

「じゃあな白馬」

「気を付けてね」

「はい。君達も学校、頑張って下さいね」

二人の言葉を心地好く受け取った白馬は、返答した後サイドミラーを閉める。

徐徐に閉まっていくサイドミラーは、自分達の別れを強調しているように見えてしまい、

新一…灰原…白馬は悲しい気持ちを覚えるも、敢えて笑顔を作る。

そして、互いの顔が流れるように動いて見える中、白馬を乗せた車が阿笠邸を出発する。

新一と灰原は車を追うように道に出ると、遠ざかっていく黄色のビートルの後ろを見続ける。

「行っちゃたわね」

「そうだな」

新一は、灰原がポツリと呟いたことに即答する。

「……ところでオメエさ」

ビートルの影も見えなくなると、新一は灰原に顔を向ける。

「なに？」

灰原も、新一に顔を向けて視線を合わせる。

「白馬のことどう思ってる？」

「あら…もしかして工藤君は、白馬君にやきもちかしら？」

皮肉っぽく笑う灰原に、新一は半目を向ける。

「んなワケねーだろ」

返答を聞くと灰原は、無表情で答える。

「そうね……工藤君が居なかつたら、彼に恋してたかもしれないわね」
「ライバル出現ってことか……じゃあ俺は、オメエに振られないように頑張んなきゃな」

「まあ、期待してるわ……じゃあ行きましようか？」
「ああ」

白馬を見送る際に持ってきた鞆とランドセルを背負いながら、二人は朝日の光を正面から浴びながら、登校するのだった。

まさか、あの場面で告白されるなんてね。

右隣で自分と歩調を合わせて歩いている新一と、柔らかい口調で話している灰原は、

脳裏で先程の言葉を思い出しながら、白馬のことを考えていた。

『君のこと……好きですよ…宮野さん』

次に会えるのが何時になるか判らないとは言え、

あんなことを言われるなど想像もできていなかった。

灰原も白馬に特別な感情を持っていたのは事実だ。

然しそれは恋愛感情では無い。

同居していくうちに知らず知らずに芽生えた、

阿笠に対する感情と同じ物：すなわち“家族愛”だ。

白馬は台所や掃除をしている時、時々だが灰原の顔を見てくることがあった。

それも、その視線に気付いた灰原が、顔を向けて目線を合わせても、

目を逸らさずに見続けていた。

「なに？」

当然の如く灰原は声を出すが、何でも無いですよ　と、
誤魔化すようなお得意の微笑みが返ってくるだけ。

灰原は理由を言わない白馬に不審を持つが、それを言い終わると
手元に視線を戻し、
灰原も何が何でも聞きたかったワケではなかったため、結局その理
由は判らないまま、
別れを迎えることになってしまった。

だが、その理由がようやく判ったような気がする。
あれは彼なりの、灰原に対する恋愛表現では無かったのだろうか？
まあ、彼が自分達の前から姿を消してしまった以上、それを知る術
はもう残されてはいないが。

(ま、今度彼と会ったら聞いてみましょうか)

新一が蘭と合流して、灰原もすっかり元に戻った探偵団の三人と
合流する。

恋人である新一と一緒に登校したい　という気持ちがあったが、
叶わぬ願いを灰原は口にはしない。
だが、それももう少して叶うと思うと胸が躍る。

そう、灰原は転校することを小林に本日伝える。
そして、そんなことを予想もしていないであろう彼らは、今もこう
して、

新一…蘭…灰原を交えて、楽しく会話を弾ませている。

灰原は思う。言っているのか？と。

(大丈夫よ…彼らはもう、前の彼らとは違うんだから)
大丈夫…大丈夫　　と、灰原は自分の心に何度も訴えて安心させる。

会話を弾ませながら歩を進めていた新一達は、
帝丹高校と帝丹小学校に別れる丁字路に差し掛かる。

「じゃあ灰原、気を付けてな」

新一が左隣の灰原を見て言う。

「ええ……工藤君もね」

顔は無表情だったが、彼女の思いやりある言葉に、新一は自然と笑顔になる。

「じゃあね、哀ちゃん」

新一の右隣に立っている蘭が、明々しく言う。

「蘭さんも気を付けて」

言い終わると、小嶋達三人を先頭にして灰原は帝丹小学校に向かった。

その後ろ姿を暫し見詰めていた新一は、行くわよ新一　　という蘭の声にハッと反応して、

恋人としてではなく、幼馴染として肩を並べながら、歩を進めて行った。

一方、新一と蘭と別れた灰原達は、ランドセルを背負った多数の

生徒達と一緒に、
通学路を歩いていた。

「ねえ貴方達」

灰原は話し易いように、早歩きで吉田の右隣に付いた後、
彼女の左隣を歩いている小嶋… 円谷を視界に入れながら、話し掛ける。

「なに？哀ちゃん」

吉田が無邪気な笑顔で返事をする。

「昨日のお話し……私の正体のことなんだけど」

「え？…なに？」

吉田は、なぜ灰原がここでその話をするのかを、疑問に思いながら返事をする。

口には出さなかったものの、小嶋と円谷も同様の疑問を抱えながら耳を傾ける。

「もし……私が… 『元に戻る』って言ったら……貴方達どうする？」

それを聞いた時、彼ら探偵団は『もし』ではなく、それが現実
起こることを悟った。

今まで無駄に灰原哀という少女を見てきたわけではない、
彼女が嘘や冗談でそんなことを言う性分ではないことを、小嶋等は
知っていた。

だから判ったのだ。灰原が元に戻ろうとしていることが。

「哀ちゃん。……元に戻るの？」

吉田は歩くことを止めずに聞き返す。

戻ってほしくない　　と言いたかった。

自分達の親友として……今は無き少年探偵団の一員だった者として、ずっと傍に居てほしかった。

然し、真実を知った今では、それも仕方ない　　と諦めの気持ちを抱いている。

灰原には灰原の戻るべき場所がある。彼女が戻りたいと望めば、それを止める権利は無い。

……そのことは三人全員が理解していた。

でも、やはり思ってしまう。戻ってほしくない　　と。

灰原は暫し黙り込んで、言いづらいように緩慢に口を開く。

「ええ」

「ホントなんですか？」

円谷が寂しげな面持ちで曇った声を出す。

「でも……貴方達が『戻ってほしくない』と言えば、私は戻らないわ」

希望を二人は覚えた。心を丸ごと飲み込むような大きな希望を。

自分達がNOと言えば、彼女は灰原哀として傍に居続けてくれる。

特に、彼女に特別な感情を持っている円谷は、NOと即答したい気分だった。

だが、意思に関係なく動こうとする口を、目一杯の力を込めることで阻止する。

それを言った瞬間、元の姿を取り戻せる　　という、灰原の希望を砕くことになるのだから。

「灰原さん」

「なに？」

灰原は円谷を注視する。一方円谷は、口元を緩めて笑顔を作る。

「元に戻って下さい…灰原さん」

灰原は緩慢に目を丸くする。いいの？ とでも言うように。

「確かに、僕は灰原さんが小学生のままが良いです。

…でも、灰原さんが戻ることに喜びを感じているのなら、僕はそれを邪魔はしません。

それに戻ったとしても、僕にとって“灰原さんは灰原さん”ですから」

「光彦君」

吉田は力強く言い放った円谷を、敬服するように見詰める。

円谷を見下ろしていた小嶋も、彼の言葉に押されたように灰原に見解を述べる。

「そうだな…それにオメエのホントの姿、見てみたいいな」

「円谷君…小嶋君」

灰原は言い放った二人を、柔らかい目でジッと見つめる。

「そうだよな。歩美達が悲しんでたら、哀ちゃんに心配掛けちゃうもんね」

持ち前のハツラツとした面持ちと声質で、灰原を見る。

「…いいの？」

灰原は左に並んでいる三人を捉えながら、飲み込みの早さに啞然たる面持ちで見る。

「うん。もう…心配しなくていいよ」

「そうだな。それで良いよな？光彦」

吉田の後に続いた小嶋は、円谷に同意を求めるように視線を動かす。

それを見た円谷は、灰原に視線を移す。

「はい。僕はコナン君が新一さんだと判っても、探偵団の一員で、親友の江戸川コナン君として見ています。灰原さんも同じですよ」

安堵感ある言葉を聞いた灰原は、フツ　と笑いを零す。

「ありがとう…皆」

成長したな　と、心底から痛感した灰原は、彼らに対する不安感を完全に吹っ切る。

そして、灰原哀として来る最後の帝丹小学校は、一時間目がクラス中に泣き声が響き渡ることから始まり、クラスメイトの無邪気な笑顔が、一度も見られない異例の状態で終わりを告げた。

「じゃあ貴方達。ここで暫く待つてて」

小嶋等三人と、帰宅した後に灰原が、工藤邸に訪問して呼んできた新一、

そして、その新一が携帯で呼んだ蘭と家主の阿笠が、ソファアに腰

掛けながら見守る中で、

灰原は全員に笑顔で言つと地下室へと向かう。

「頑張つてね哀ちゃん」

「できるだけ短く済ませるよな」

蘭に続いて言つた新一に、灰原は振り向いて答える。

「まあ、出来る限りね」

言い終わると阿笠：小嶋等に軽く笑みを向けて、

灰原は地下室の階段を、大人の服を両手に持ちながら、子供の歩調でゆっくりと歩いていく。

（飲まないと決めていたのに）

地下室に入り扉を閉めた灰原は、

パソコンが置いてある机の引き出しに閉まってある解毒剤を見ながら、

物思いにふける。

（この身体ともお別れね）

今思えば名残惜しく思える。

灰原哀として生きるのはこれが最後だというのに、お別れの言葉を言つてない人達は沢山いる。

警視庁の目暮や佐藤を始めた顔馴染みの刑事達：大阪に帰った服部と彼の恋人である和葉：

新一の両親である工藤夫婦と、蘭の両親の小五郎と妃と、数えてたら切りが無い。

然し、お別れの言葉を言ってる時間も無いため、ありがとうと、

灰原は責めて内心で礼を述べると、大人の服をベットに置き、

自身が纏っている服を脱ぎ終わった後、右手に強く握った薬を口内に放り込む。

「ウツ！…あ、ああ……」

経験したことがある痛みだが到底慣れるものではなく、声を出すまいとしても、

身体全体を電撃の如く走る痛みには耐えられず、右手で胸を抑えながら床にドサツと倒れ込み、
痛みには耐えきれず、ドタバタと身体を激しく動かしてもがきます。

「あうっ！…うう…あ！！」

徐々に湯気が立ち始める身体は、灰原の身体を急激に成長させていく。

「ミシミシ」と、骨にヒビが入っているような音を立てながら、手足は伸び続ける。

そして、激痛に耐え切れず居間にまで聞こえるほどの叫声叫聲を上げた。

復活・辛き別れと戻る時（後書き）

さてさて、いよいよ灰原が宮野に戻りました。

今後の小説は、灰原のことを『志保』と書きます。

新一と同じように。

では、評価、ご感想、ご意見お待ちしております！（＾　＾）

復活・終わりと未来への羽ばたき（前書き）

さて、突然ですが今作が最終話となります。

では、最後の本編をどうぞ！

復活：終わりと未来への羽ばたき

驚愕した。その場に居る全員が……。

三十分ほどの時間で地下室の階段を昇ってきた灰原：いや志保は、灰原哀とは見違えるほどの美貌を、全身から放っていた。

「わあ〜哀ちゃん…可愛い〜」

階段を上がってきた志保を、席を立った蘭が近づいて感声を上げる。

それを聞いた志保は、顔を赤らめながら恥ずかしそうに目を泳がす。

「確かにのお。蘭君といい勝負じゃわい」

阿笠も志保に近づきながら感声を上げる。

「は、博士まで…止めてよ」

志保は滅多に出さない、ソプラノに程近い声質で返答する。

「ホントだぜ…灰原。女優になれるんじゃないか?」

新一は志保に近づきながら賛嘆の言葉を送る。

「御世辞言ったって何にも出ないわよ」

声質を戻した志保はぶつきら棒に答える。

一方小嶋らも、ソファーに腰掛けながらポーッと志保のことを見詰めている。

特に円谷は、幼少期に唯でさえ可愛かった灰原が、さらに美しさを増したため、

頬を赤らめながら啞然とした面持ちで、志保の顔を見ている。

綺麗だ。

新一の志保に対する第一印象は、その言葉通りだった。子供の時でもあれほどの美しさを持った女性だ。

元の姿はもっと美しいんだろうな　と、ある程度の予想はしていたが、

これ程とは思わなかった。

俗に言う美人とは彼女のことだろう。

相変わらず汚れ一つ無い白い肌に、スラリと伸びる手足…すらりとしたスタイル。

(父さんや母さんが見たら何て言うかな?)

まだお前には早いな　と、優作はからかい混じりに笑うだろうか？

新ちゃんも志保ちゃん。中々似合ってるじゃない　と、有希子はイタズラっぽく笑いながら、自分を冷やかすだろうか？

(教えてないって言えば、あいつにも教えなきゃな…このことを)

暫く連絡を取り合っていないため、

今何をしているのかさえ判らない大阪の探偵、服部平次。

彼が米花町を発ってから、大して時間は経ってはいないが、

新一にとって、前に話したのは何時だろうか？　と、記憶を深く辿るほどだった。

(時間が空いたら電話してみるか)

志保は阿笠と蘭の間を通過して、小嶋等が腰掛けているソファの横に付くと、

彼らを見下ろしながら挨拶をする。

「改めて…宮野志保よ、宜しく」

志保は軽く会釈をして微笑みを見せる。

「よ…宜しく…お願い…します」

一番近い円谷が、照れながらに答礼する。

続いて、小嶋…吉田の順で答礼される。因みに小嶋は、円谷と同じく頬を赤らめている。

「宜…しく」

「宜しくね哀ちゃん」

姿が変わった志保にも、吉田は違和感無く挨拶を返す。

「あ…と…ところで博士」

円谷の呼び掛けに阿笠は彼を注視する。

「なんじゃ？」

「昨日ここに居た白馬という人の姿が見当たらないんですが、どこに居るんですか？」

「ああ…彼は自分の家に帰ったよ…今朝な」

「そうだったんですか」

「……なんじゃ光彦君。白馬君に何か用があったのか？」

「いえ。姿が見えないのが気になっただけですよ」

「そうか」

小学生ながら大した観察力じゃ　と、内心で阿笠は褒め称える。

「なあ志保」

新一が志保に近づきながら呼び掛ける。

志保は左に顔を向けて返答する。

「なにかしら？工藤君」

「これからレストランにでも行って食事しねえか？ここに居る皆でよ」

「はあ？夕食なら私が作るわよ」

「そうじゃねえよ。……オメエが元に戻った記念さ」

志保は刹那、目を見開いて返答する。

「別に……いいわよ。そんなことしないで」

言い終わると、蘭が笑顔で話しに入ってくる。

「良いじゃない、あ……じゃなくて宮野さん」

志保は、新一の顔を視界に入れながら蘭を見る。

「志保で良いわよ蘭さん」

「判ったわ。じゃあ改めて志保、行きましょう一緒に。」

それに、その姿での食事は私初めてだから、最初はパーっと外食にしたいな」

（全く……彼女にはホントに敵わないわね）

まるで、暗示をかけるような笑顔で他人の心を魅了する蘭に、

志保は微笑みを見せながら返答する。

「判ったわ」

「ありがとう志保。それと私のこと……できれば“蘭”って呼んでほしいな」

「え……ええっと……蘭」

志保は言いづらさそうに名前を呼ぶ。

そんな志保を阿笠は、ハハハ　と、可笑しそうに笑ってから、志保を注視しながら言った。

「じゃあ、どこにするかの？」

「俺、うな重があるところがいいな」

小嶋がワクワク感を丸出しで言い放つ。

「元太君。うな重が置いてあるレストランは、この辺りにはありませんよ」

円谷が顔を右に向けて、苦笑い混じりに答える。

「それじゃ……そうだな」

その後、新一に出した場所も否定的な意見が多く却下され、あそこでも無いここでも無いという意見の出し合いが暫く続いたが、程なくして阿笠が出した、杯戸町に新規オープンしたレストランと、いうことになった。

「ねえ新一。お父さんも呼んでいいよね？」

新一の左隣に移動した蘭が意見を提案する。

「え？ああ……いいけど、何でだ？」

蘭に顔を向けて返答する。

「お父さんの夕食まだだし、それに、博士のビートルにこの人数は無理でしょ」

「それもそうじゃな……すまんが毛利君に頼めるかのお？」

阿笠は蘭に近づくと、苦笑いを浮かべながら頼み込む。

阿笠に顔を向けた蘭は、笑顔で返答する。

「判りました。電話してみます」

そう言う蘭は、長ズボンの右ポケットから携帯を取り出して、地下室の階段を降りて行った。

その蘭を顔ごと目で追っていた志保は、同じく顔を、地下室の階段に向けている阿笠を呼びか掛ける。

「ところで博士」

その呼び掛けに阿笠は志保に、蘭と小嶋等は二人を視界に捉える。
「なんじゃ志保君？」

「いい加減車変えたら？」

そんなことを余りにも忽然と言ったためか、蘭と小嶋達はプツと笑いを漏らす。

阿笠は彼ら四人をジト目で見ると、ムスツとした顔で返答する。

「べ、別にいいじゃろう？ワシの自由なんじゃから」

「然しですね。いい加減換えられた方がよろしいかと」

円谷が呆れ果てた面持ちで言うと、吉田が苦笑い混じりで続く。

「そうだよ。今、性能の良い車がいくつぱいあるんだよ」

「そうね。お金にも十分余裕があるんだし、私も買い換えた方が良
いと思うわ」

そう…阿笠はお金の使い方が本当に下手だと、志保は思っている。
彼は生活費を始め、食費…電気代…水道代と、必要最低限のことに
しかお金を使わない。

儉約家　　と言えば、聞こえはいいかもしれないが、

実際にはタダお金を使うのが下手なだけだ。

まだ口には出していないが、志保はつくづく車を換えればいい
と阿笠に思う。

どこかに出掛ければ、ほぼ確実と言っていいほどトラブルを引き起
こす。

(ハア…ホントに換えてもらいたいわね)

内心では溜息を付きながらそう思うも、本人が気に入っている以
上、

居候という立場の自分には文句を言う権利は無いため、強引に勧め
るつもりはなかった。

「お待たせ博士。面倒臭がってたけど何とかお父さん判ってくれた

よ。

今からレンタカー借りてこっちに来るって」

階段を昇り切った蘭は、ソファアの周辺に集まっている阿笠達を視界に入れながら、

笑顔で言う。

全員の視線が蘭の顔に集中する中、阿笠が両手を後ろで組みながら返答する。

「ありがとう蘭君。……さて皆、軽く仕度を済ませようじゃないか」「あ、ちよっと待って博士。もう一つ言わなきゃならないことがあるの」

準備をしようとする行動を起こし始めた新一等を、蘭の言葉が中断させる。

「どうした？蘭」

新一が身体ごと向き合って聞き返す。

「実は、お父さんにお母さんのところに行ってもらうように頼んだの」

「妃先生のところにか？」

「うん。だから、ちよっと寄り道するけどいいかな？」

その問いには阿笠が、笑顔で返答した。

「ワシは構わんど。皆もそれで良いじゃろ？」

同意を求めるように、視線を志保と小嶋等に送ると、志保が阿笠の横顔を見ながら答える。

「良いわよ私は。…それに、食事は一人でも多い方が美味しく頂けるものね」

「そうですね…それに蘭さんのお母さんは、法曹界のクイーンの異名を持っている、

“あの”妃英理さんなんですよね？」

円谷が興味津津という笑顔で、蘭に尋ねる。

蘭はソファアに腰掛けている円谷を注視しながら、子供に話し掛けるような、

優しい口調で返答する。

「そうよ。もしかして光彦君、お母さんに会うのが楽しみなの？」

「『楽しみ』というか…毛利探偵と同じくらいの有名人ですから」

(まあ、おっちゃんを有名にしたのは俺だけだな)

新一は、小五郎を嘲笑うような笑みを浮かべる。

一方、小嶋と吉田は話に付いて行けないような、惚けた面持ちをしている。

「ねえ光彦君。その『何とかのクイーン』って誰？」

吉田が猫背をしながら、小嶋の左隣に腰掛けている円谷を見る。

それを聞いた円谷は、吉田と視線を合わせて得意気に話す。

「『法曹界のクイーン』ですよ歩美ちゃん。弁護士の世界で五本の指に入る凄腕弁護士です」

「へえ～そんなスゲエ人なのか！」

小嶋が感声を上げると、蘭も感嘆の声を円谷に送る。

「良く知ってるわね光彦君」

「はい。テレビや新聞で見ながら、ちょっと興味があって調べてみたんです」

「そりゃ感心じゃわい」

阿笠は円谷を見下ろしながら、歡喜の面持ちで褒める。

その後、時間を忘れているかのように話し続ける、阿笠等を見兼ねた志保の言葉により、

素早く準備が進められ、準備が終わるタイミングを計っていたように到着した、

小五郎のレンタカーと阿笠のビートルにより、一行はレストランへと向かった。

因みに、レンタカーの車種は銀色に塗装されたヴィッツ。

席順は運転席に小五郎、後部座席に蘭、助手席が空席なのは、これから乗車する妃のためである。

ビートルの運転席には当然阿笠、助手席には新一と、彼の膝の上に

腰掛けている吉田、

後部座席には運転席側から、小嶋…円谷…志保が乗車している。

本当は、新一と志保が隣同士に座る予定だったのだが、例によって例の如く、

小嶋が二人分のスペースを取ってしまうため、新一の判断によりこ
うなったのだ。

(工藤君との隣が良かったのに)

(宮野との隣が良かったぜ……元太のヤツ)

怒りが籠った半目で見られていることに、御塵も気付かない小嶋
は、

すっかり暗くなった夜の風景を窓から楽しみながら、
グイッツに付いて行くように走行するビートルで、腹の虫の鳴き声
を聞きながら、
レストランに向かった。

ピポパポ と、阿笠邸の居間から、電話機のプッシュ音が一
定のリズムで鳴り響く。

志保が戻ったことによる記念の夕食が、快樂の時間で終わってから
の最初の休日。

新一は、“ほほ”自宅と化している阿笠邸で、阿笠と志保と共に朝
食を済ませると、

二人が片づけを行っている中、服部邸へ電話を掛けていた。

(今頃どうしてっかな？服部のヤツ)

物思いにふけりながら新一は、相手の声が聞こえるのを待ち続け
る。

伝えるべきことは二つ。

一つは、自分と志保が結ばれたこと。

もう一つは、白馬がイギリスへ帰国したこと…である。

まあ、新一にとつて、メインは志保とのことであつて、

白馬のことは“序で”に等しいのだが…。

「もしもし…服部です」

暫しの後、受話器を取る音が聞こえた後、ソプラノに近い女性の声が聞こえる。

新一はその声を、服部の母親である静華と理解して、明るく挨拶を述べる。

「おはようございます。工藤新一と言います」

受話器越しでも、ハツとした面持ちが予想できるほどの声が聞こえると、

嬉しそうな声質で静華は返事をした。

「おはよう…」工藤』言いはると、平次の友達の工藤新一君か？」

「はいそうです。服部…あ、いや平次君は居ますか？」

静華は可笑しそくに笑いを零す。

「フフ…『服部』でええよ…ちょっと待ってな」

「はい」

保留のメロディを聞きながら、二分ほど新一は暇な時間を過ごす。

一方、阿笠と志保は、電話の邪魔をしないように、ソファーに向かい合わせに座りながら、

新一を静観している。

「久しぶりやな〜工藤!」

(つたく…朝っぱらから元気な声だぜ)

メロディが聞こえなくなった瞬間耳に届いた大声に、新一は咄嗟に受話器を耳から外す。

「オメエな…もう少し静かに話せねえのかよ」

「ああ…スマンスマン。久しぶりやったから“つい”な」

「ったく…ところでオメエ、今時間空いてるか？」

それを重要な話しと理解したのか、服部は真剣な低い声質で返答する。

「大丈夫やけど…どないした？」

「ああ…オメエさ、宮野のこと知ってるよな？」

（『宮野』…確か小っこい姉ちゃんの本名がそうやったな）

名前を聞いてじっくり来なかった服部は、暫し記憶を辿って思い出す。

「あの姉ちゃんがどないしたんか？…まさか、組織の連中か?! 工藤!」

そんな馬鹿な　　という予感を、外れてほしいという希望を胸に抱えながら、
血相を変えて服部は尋ねる。

「違う違う…組織のことじゃねえし、第一組織はもう潰れたって知ってるだろう？」

服部は安堵の息をゆっくりと吐いて、苦笑混じりに返答する。

「そうやったな…スマン工藤。ハハハ」

ンンツ　　と喉を鳴らした服部は、真剣な声質で改めて問う。

「ほんで？姉ちゃんがどないしたんや？」

「俺さ…宮野と付き合うことになったんだ」

二人の間に暫しの沈黙が流れる。

服部は、新一の言ったことが信じられずに、思わず受話器を握っている右手の力が抜けるが、

受話器が落ちる感触により、咄嗟に右手に力を入れる。

一方、聞いていた志保は、別の言い方は無いのかしら？　と、顔を赤らめながら内心で思う。

「それ…ホンマか？…工藤」

新一がこんなことで嘘を言わないと判っているながらも、我知らず

に服部は恐る恐る聞く。

「こんなことで嘘言う人間に見えるか？俺が」

「…そうか」

「驚かねえのか？服部」

驚くものと思っていたが、冷静な返答に逆に驚かされた。

「いや…驚いとるで。十分な」

（そんな風には聞こえねえけどな）

内心で呆れながらも、新一は理由を尋ねる。

「どうしてオメエそんな冷静なんだよ？声聞く限り、驚いてる風には見えねえけどな」

「そやな……予想しとったからな…こうなるんを」

その言動に新一は、冷静ではいられなくなり、激しい勢いで問う。
「ど、どういうことだよ？！詳しく説明しろよ！」

突然出した大声に阿笠…志保は、何事か　　と言うように新一を注視する。

「そう熱くなるなや。お前、俺が毛利の姉ちゃんと話しとったのは知っとるか？」

「ああ…白馬から聞いた」

冷静になった新一は、落ち着いて返答する。

「なら話しは早ええ。まあ、俺も最初は感じんかったんだけど、何度か姉ちゃんと話しとるうちに、薄々と感じ始めたんや。

姉ちゃんが工藤と、距離を取り始めとるってな。

……然しのお、不思議なことに俺自身でも、

何でそういう風に思ってしまったんかは判らへん。

俺ら流に言えば、探偵の勘うちゅうヤツかもしれないな」

最早、新一は啞然と聞き続けるしかなかった。感情など入る余地も無いほどに。

「お〜い工藤。聞いとるか？」

「え？…あ、ああ…すまねえ」

服部の呼び掛けに我を戻したものの、まだ思考が回復してない新一は、
うやむやな返事をする。

「まあ、俺もそれが現実には起こるとは想像できへんかったし、仮に現実になっても、

相手があの小っこい姉ちゃんとは思わんかったけどな」

「そ、そうか」

(そりゃそうだよな)

そう内心で納得した新一は、回復してきた思考を覚えながら話しを変える。

「ところで服部。もう一つ話があるんだ」

「なんや？」

「数日前、白馬がイギリスに帰国したんだ」

「ふくん…ほんで？」

服部の余りにも素っ気ない返事に、少しの驚きを覚えながら聞き返す。

「って、それだけかよ？」

「別にあいつが何処に行こうと知ったことやあらへんしな。

それに、俺はあいつが嫌いなんや」

(そう言えば嫌ってたっけな…服部のヤツ)

「そんな話しより工藤」

「ん？なんだ？」

自分にとっては『そんな話し』ではなかったことを、

アツサリと終わらせた服部に苛立ちを覚えながらも、表情と声には出さずに聞き返す。

「あの姉ちゃん…毛利の姉ちゃんは大丈夫なんか？」

「ああ…最初はちよつとマズかったけど、今はもう、俺とも宮野とも普通に話してるよ」

「そら良かったわ」

(あの姉ちゃんのことになると、和葉が心配しよるからのお)

安堵の声で答えた後、服部は内心で緩慢に呟く。

「ところで服部」

「ん？」

「オメエの方は大丈夫だったのか？」

「まあ、『大丈夫』とは言えへんな」

新一は嫌な予感が脳裏を過りながらも、慌てず冷静に聞く。

「何かあったのか？」

「オトンとオカンはすぐに納得してくれたんやけど、

和葉がな……暫く口聞いてくれへんようになってもうたんや」

「え？平気なのかよ遠山さん」

服部は安堵させるように、明るい声質で返答する。

「安心せえや。今はもう何ともあらへんから」

「そ、そうか」

(遠山さんのことになると、蘭が心配するからな)

新一は、心配そうな面持ちをしている蘭を脳裏に浮かべながら、安堵の声質で返答した。

まさか、服部も同じような事を考えていたとは知らずに。

「ほんなら工藤。あの姉ちゃんと仲良くやれや」

「サンキュ……服部。オメエも遠山さんと仲良くな」

「おおきに。ほんで最後に一つだけええか？工藤」

「なんだ？」

「あの姉ちゃんのこと……名前で呼ばないんか？」

イタズラっぽく笑いながら言う服部に、新一は頬を少し桃色に染める。

「そ、そうだな……考えておくよ」

「ハハハ、照れとるな自分」

「う、うるせえよ！切るぜ服部」

からかわれていることに益々興奮した新一は、さらに赤くなった顔で激しく返答する。

「ハハ……ほんな工藤」

電話が切れる瞬間まで服部の笑い声を聞いていた新一は、興奮を深呼吸で鎮めながら受話器を置くと、歩いてソファーまで向かって志保の隣に腰掛ける。

「服部君なんだって？工藤君」

志保は左に顔を向けて、新一の顔を捉える。

「そ、その前にさ宮野」

やや緊張気味の新一に、不審を覚えながら志保は返事を返す。

「なにかしら？」

「俺のことさ、『工藤君』じゃなくて、下の名前で呼んでくれねえか？」

俺もオメエのことを志保って呼ぶからさ」

「いいわよ新一」

(つて、そんなにあっさりと)

「これで二人も本当の恋人同士じゃな」

阿笠は二人を視界に入れながら、笑って述べる。

聞き終わると二人の顔が、少し桃色に染まる。

「じゃあ、改めて新一。服部君、何て言ってたの？」

「ああ、『オメエと仲良くやれ』つてさ」

「あら、じゃあ彼との約束を破らないようにしなきゃね」

「そうだな。俺も明美さんの分まで、オメエを幸せにするからよ」

「新一」

志保はボソリと呟く。

(そうね。お姉ちゃんが喜んでくれるように、私も頑張って生きなきゃね)

今は亡き姉の面影を、脳裏にユラユラと思いだしながら、志保は心に強い誓いを立てる。

姉だけではなく、顔さえ知らない父と母、自分に彼を譲ってくれた蘭の分まで、

精一杯生きることを、心に強く且つ、何度も打ち付ける。

決して外れないように何度も…何度も。

「ところで志保君」

阿笠が志保を注視して言う。

「なに？博士」

志保も阿笠に顔を向けると、それに流れるように新一も、阿笠に顔を向ける。

「君は学校に行く気はあるかの？」

「そう言えばそうね。この姿で学校に行っていないのは不自然なこともないけど、

将来的にも行つた方が良いわね」

志保は顎に右手を当てながら述べる。

「それなら帝丹高校しかねえよな？」

（やった！これで学校でも志保と会える！！）

内心の気持ちに気付かれないように、新一は冷静に言った。

「そうね。ここから近いし、蘭さんとも新一とも会えるしね」

志保はチラッと視線を新一に送ると、可愛らしくフフ　と笑みを零す。

その微笑みに思わず顔が赤くなる新一を置いて、阿笠が喜ばしく返答する。

「判つた。早速転校手続きをしとこう。それと制服も買わねばな」

「そうね。ところで博士」

「なんじゃ？志保君」

「私が居ないからって、カロリーの高い食事は厳禁よ」

脅迫に近い忠告に、明らかにギクツとした阿笠を志保は見逃さなかつた。

「もし、一度でも口にしたら……判つてるわね？」

『判つてるわね』阿笠も新一も、この言葉の具体的な意味が判らなかつたものの、

とんでもないことをされる

と、刹那判断した阿笠は、冷や汗

を少し流しながらも、
笑って返答する。

「も、もちろんじゃよ…志保君」

「ならいいわ」

(こわ)

二人の様子を見ていた新一は、身震いしながら志保の恐ろしさを、
身体全身で体験するのだった。

休日が終わった平日の月曜日。

志保の初登校日としては、最適の快晴そのものであり、
新一と同じく帝丹高校の制服を身に纏った志保は、
朝食と一緒に食べた新一と、肩を並べて高校に向かっていった。

制服を着た志保を初めて見た新一は、似合ってるぜ　と、素
直に気持ちを述べた。

然し意外だったのは、ありがとう新一　と、志保が素直に感謝
をしたことだった。

新一は思った。志保は随分と素直になった　と。
それは自分を、心許せる存在として見てくれている　というこ
とを意味する。

今も、たわい無い話したが、志保は笑顔を絶えず見せ続け、
新一が面白いことを言うと口元に手を当てて、クスクスと可愛らし
く笑う。

そして、その笑顔に釣られる様に新一も、ハハハと大口を開けて大
笑いする。

「新一！志保！」

後ろから聞こえた明々しい声に、二人同時に振り向くと、園子を隣に蘭が走ってきた。

「おはよう新一、志保」

「ああ、おはよう蘭」

「おはよう蘭」

挨拶をしている三人を横から見ていた園子は、見慣れない顔が居ることに疑問を抱く。

「ねえ新一君。彼女、誰？」

園子は、志保を横目でチラッと見ながら尋ねる。

「そっか、園子は初見だったな。…紹介するぜ、宮野志保だ」

「宜しく」

志保は軽く挨拶をする。

一方園子は、考え込むように右手を顎に当てる。

「『宮野志保』？……ああ、この人か。蘭が言ってた新一君の新しい彼女」

「っておい園子！こんなところでそんなこと言うな！」

回りに通行人がウヨウヨ居るこの状況に、新一と志保は思わず顔を赤める。

「それにしても志保。制服姿良く似合ってる」

蘭は志保の身体をジロジロ見ながら言う。

「貴方ほどじゃないわよ。蘭」

「そんなことねえと思うけどな」

新一は志保の全身を捉えながら褒め言葉を贈るが、それが蘭を不機嫌にさせてしまう。

「新一？それって、私は志保よりも制服が似合っていないってことかしら？」

それにギョツとした新一は、蘭を見ながら慌てて訂正する。

「い、いやそうじゃねえよ。俺はただ志保を褒めただけで、オメエを侮辱したつもりはねえよ」

「ホント？」

「ホントだよ」

その遣り取りに志保と園子が同時に笑いを漏らすと、新一と蘭も面白そうに笑いだす。

そんな一行の元に、三人の子供の声が届く。

「新一さん！」

「新一兄ちゃん」

「志保お姉さん」

その声に新一等は笑いを止めて振り向くと、通行人の間から三人の子供達が、

走って近づいてくるのが視界に入る。

「よおオメエら…おはよう」

「おはようございます！」

新一の足元まで近づいて来た小嶋達は、息が合っているように一斉に挨拶を元気良くする。

「あ、志保お姉さん制服似合ってる」

新一の左隣に立っている志保に気付いた吉田が、羨ましそうに見ながら褒め称える。

それに続いて、円谷も志保を見て感想を述べる。

「ホントです。良くお似合いですよ」

「新一兄ちゃんにはもったいねえかもな」

小嶋は新一を半目で見上げながら言い放つ。

「有り難う…貴方達」

志保は随分小さく見えるようになった三人に、不思議な感覚を覚えながらも礼を述べる。

「それじゃ、そろそろ行きましょうか」

園子の声を合図に、彼らは出来るだけ通行人の邪魔にならないように、

気を配りながら纏まって歩き出す。

そこには、誰一人として悲しみの顔を見せない、元に戻った登校風景があった。

登校するまで一緒に居られる時間を贅沢に使って、今話題になっているニユースや、

今日の帰宅後の予定など、様々な会話が飛び交う。

そんな中、志保は思う。

本当に幸せだと。

これが平和というものだ。

自分はこの中に居て良い人間なのだ。

「では、ここで失礼します」

「ああ、気を付けてな」

円谷は一言述べて新一の返事を聞くと、振り向いて小嶋と吉田を右隣にしながら、

通学路を辿って行く。

（私もこの間までは、彼らと一緒に歩いてたのよね）

その後ろ姿を見ながら志保は、

灰原哀として、あの中に居た時の記憶を懐かしく感じていると、新一に呼び掛けられる。

「おい志保、行くぞ」

それを耳にした志保は、何時の間にか数歩先で、

右手を大きく振っている新一の元に、小走りで向かった。

帝丹高校の制服を身に纏った生徒達を見ながら、新一等は帝丹高校の土を踏んだ。

因みに、登校中も校庭内を歩いている時も、男性生徒達の目は自然と、

新一等…というより志保に向かう。

「ねえ…さつきから何でジロジロ見てくるのかしら？」

志保は、回りの視線を心地好く思っていないような不機嫌な面持ちで、

左隣の新一に顔を向ける。

「さ、さあな」

新一は苦笑しながら曖昧な返事を返す。

(志保、美人だから)

蘭は志保を見ながら内心で思う。

そんな視線を浴び続けながら新一と蘭は、下駄箱に行くまでの、目に付く学校の施設を指さして、志保に説明をしていた。

その説明に志保は感謝しながら、肯定の返事を返す。

「じゃあ、まだ後でな志保」

職員室まで志保を送り届けた新一は、微笑んで言った後に、蘭と園子と肩を並べながら教室に歩いて行った。

志保はここに来るまでの間、帝丹高校の視界に入ってくる、出来る限りの景色を楽しんでいた。

(ここが私の新しい居場所になるのね)

これから自分を待っている希望を胸に、志保は眼前の職員室の扉をノックしたのだった。

一方、教室に付いた新一達は、誰がどこから手に入れたのか判らない、

転校生の話しに無理やり入れられていた。

「なあ…どう思う？転校生のこと」

新一の前の席に座っている男子生徒が、身体をごと後ろに向けて話し掛けている。

「さあな？あんまし興味ねえしな」

(つてか、知ってるしな)

新一は敢えて惚ける。ここで転校生のことを知っている　　な
ど答えたら、

クラス中の生徒達が集まってくるのは、目に見えているからだ。
それは蘭と園子も同じ考えのようで、困んでいる女子生徒に適当に
返答している。

「ハハ…さすがの名探偵さんも転校生のことは判らねえか」

（当たり前だつーの。俺は預言者じゃねえんだからな）

新一は前の生徒の質問に内心で返答すると、教室の前の扉が音を
立てて開く。

「おゝい！お前ら席に付け」

教師としての堂々たる威厳を、全身から放ちながら教卓に付くと、
クラス中を見渡す。

「さて、今日は転校生の紹介がある」

言い終わると、顔を閉めてある扉に向かって、入ってくれ
と言い放つ。

その視線に、生徒達の視線も自然と扉に向く。

ガラガラ　　という音が教室中に響くと、志保が扉を閉めて教

師の左に付く。

「おゝ」

一方、その姿を目にした男子生徒達は、感声を上げる。

（初っ端から人気者だな、志保は）

新一は羨ましそうに志保を、微笑みながら見る。

「さてと、今日からこのクラスに入ることになった宮野志保だ。

…宮野、軽く自己紹介をしてくれ」

志保はその言葉を聞くと、自分に集中している視線を気に留めず、

一旦クラス中を見渡し、

新一…蘭…園子及び、他の生徒達を捉える。

（見てるかしら？お父さん、お母さん、お姉ちゃん。

私は今、新しい場所で新しいことを学ぼうとしています。

それがプラスとなるかマイナスになるかは判らないけれど、

沢山の友達を作って、沢山の思い出を作って、沢山の経験をして、
今より強くなつて卒業してみせます。

……そんな私を、天国そらから見守っていて下さい

志保は、内心で他界してしまつた家族に決意を話すと、
それを言葉にするように、元気良く挨拶をした。

「宮野志保です！宜しくお願いします！」

これから、どんな未来があるか判らない。

然し、それをプラスと信じて彼らは進む。一步一步確実に……。

そして、そんな彼らを見守るように、今日も太陽がサンサンと照
り付けていた。

復活・終わりと未来への羽ばたき（後書き）

この小説の後書きは、次回の感想と一緒に書きます。

では、最後の評価、感想、意見をお願いします！（＾　＾）

感想：この小説を通して

読者の皆様、おはようございます、今日は、今晩は。
駆け出しの小説家です。

さて、ここまでこの小説を応援及び読破してくれたことに、感謝の言葉を述べさせて頂きます。本当に有り難うございます！嬉しい以外の言葉が思い当たらない程です。

特に、私に色々とアドバイスを指摘して下さい下さった方々には、“先生”としても感謝の言葉があります。

改めて自分の作品を一から読み直してみると、あの時はこんな書き方してたなあ　という未熟な部分が丸判りで、

先生がたのアドバイスが、どれほど役に立ったのかということが目で判りました。

まあ、そのアドバイスをフル活用し、読者の皆様がたの、想像通りの書き方になったのかは判りませんが、これからもこのアドバイスを忘れず、様々な小説を書いて行こうと思っています。

ところで、話しは変わり、謝罪すべきことがあります。

それは、本小説の第十話の後書きで、

“怪盗キッドが登場する”ということが書いてあったのを、皆様覚えてますでしょうか？

……忘れていた方のほうが多いかもしれませんね。

そして、結果は皆様の知っての通り、最後の最後まで未登場で完結してしまいました。

理由を述べさせて頂くと、読者の大方の皆様は御存じかもしれませんが、

当初私は、この小説をその場の思い付きで書く という、
かなりいい加減な方法で書いていました。

つまり、怪盗キッドが登場するという考えは、当時はあったので
すが、

次々に変化していく物語の中、とうとう登場する機会すら無いまま、
完結という形になってしまいました。

彼が登場することに期待を寄せていた方に、この場でお詫びの言
葉を申し上げます。

申し訳ありませんでした。

さて、再び話しを変え、今後の私の小説なのですが、

私はこれから、名探偵コナンの小説のみを書いていくつもりです。

中には、他の作品とのクロスオーバー作品も作るうと思っています。
まあ未来の私は、今の自分には判りませんが……。

今後もこの作品及び、これから私が投稿していく作品を宜しくお
願います。

因みに、一旦小説を書き終わったので、他の小説家さん達の作品に、
目を通そうと思っています。

その時には、感想という形でお会いすることになるかもしれませ
んね。

それでは、この辺りで失礼したいと思います。

皆さん本当に有り難うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9433/>

名探偵コナン『黒の組織壊滅! + 新志の恋愛物語』

2010年11月23日23時03分発行